THE CENTRAL REVIEW

中央公論

一年一回定期增刊

夏季特別號

社會奉仕の鼓吹

民衆文化の提唱

第三十五年　第八號　第三百八十五號


プラトン
インキ
新人のインキ
萬年筆用
筆記用
學生用
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣

社會奉仕の鼓吹と民衆文化の提唱

今度の戰爭に伴つて世界の思想界に起つた激動の中より、生れ出た者の中最も貴重なるものを擧ぐるならば、何が本當の人らしい生活しうるかといふ事及人の性能は限りなく發達するものであるといふ事の發見乃至確認であらう。

唯物哲學と自然科學的人生觀とが、過去一世紀に亙りて如何に人生を殺伐荒涼ならしめたかは、今更言ふの必要はない。今や戰爭に行き詰つて世界の人は漸く覺醒した。本當の人らしい生活は、專ら自己を主張することではない。他に仕ふる事の裡に己れを活かすのである。所謂殺身爲仁に非ずして爲仁而立身である。玆處から社會奉仕の觀念は勃然として起つた。這の觀念は固より舊時代にもあるが、そは唯卑近なる實踐道德的の一教訓としてに過ぎなかつた。而して今は更に人の人たる所以の本然の生活を完うする必至の要求として此事の鼓吹さるゝを見ることゝなつたのである。

新人生觀の興隆は自ら人類間の强弱の差別觀を覆さずには措かない。己れ獨りを高しと爲して他を生來の低能視するは、舊思想の特徵である。彼に自由を與へよ。然らば彼は其性能を無限に發展して止まる所を知らない。而して總ての人類に無限の發達を信賴する所から生ずる新しい考は、民衆文化といふ事である。民は依らしむべしとの思想は、デモクラシーが既に早く之を打ち破つた。今や民衆は文化創造の第一位に置かるゝ事となつたのである。

文化とは人類の生活に於ける理想的價値觀念である。初め斯かる價値の發見提示は、所謂偉人の獨占的任務とせられて居つた。甚しきは一般民衆は斯かる文化の受動的玩賞にすら堪へざるものとせられて居つた。一言にして謂はゞ、文化は全然貴族の問題であつた。故に此時代に於て若し民衆文化てふ辭ありとせば、そは卑俗な特殊の享樂を民衆に供せよといふことに過ぎぬ。帝國劇場の外に活動寫眞館を作れといふに外ならなかつた。溫情主義者の民衆愛撫は畢竟するに之れ以上のものではない。

最近に到り吾人が民衆文化なる辭を頻りに提唱するのは決してそんな意味ではない。第一に吾人は文化は民衆の爲めなることを要求する。民衆の生活と沒交渉なものは本當の文化ではない。第二に文化は民衆のものなることを要求する。他の恩惠に依つて辛じて之を樂むといふに今日の民衆は甘じ得なくなつた。最後に文化は民衆から發現するものたるべきを主張する。無限に發達して止まる所を知らざる民衆は、如何にして文化發動の直接の源泉たらずして了ることが出來やう。

社會奉仕と民衆文化とは、來らんとする新時代の必然の特徵である。時代の迎ふる新人の生活の不可動的規範である。吾人は賢明なる讀者と共に常に此事に目覺めて居たい。

中央公論



第卅五年第八號

社會奉仕の鼓吹
民衆文化の提唱

第三百八拾五號

民衆文化の社會心理的考察

大山郁夫

一

『文化』といふ言葉が、この頃の論壇に於ける流行語の一つであることは、いふまでもない。それは、或はそれ自身單獨に、或は『文化生活』とか『文化運動』とかいつたやうに、ある他の言葉に接續されて、盛に使用せられてゐる。それにも拘らず、この言葉には、不思議にも、まだ一般に承認せられてゐる定義が與へられてゐないのである。それ故、それを用ふる人達は、多くは皆、てんでに手前勝手な意味をそれに盛つて押し出してゐる。のみならず、中には、その

精確な意味のことなどには一向無頓着で、唯漫然とそれを用ひて居るに過ぎない人達さへあるのである。

この『文化』といふ言葉を、最も氣輕に、最も屈托なしに唱へて居るものは、それを以て、單に、我々の生活を便利にするもの、愉快にするもの、豐富にするもの、——すなはち、英語の good things of life といふ文句で言ひ現はされて居る概念と同等のものとしてか、若しくは、さうした種類のもの丶所有を指し示す表現としてかの意味に使用して居る人達である。此部類に屬する論者らは、それ故に、我々の生活の外形を構成して居る諸般の事物を以て、直ちに文化の内容として取扱つて居るのである。彼等の考へて居る『文化生活』といふものは、畢竟するに、『文明人に相應した生活樣式』——若しくは英語の respectable mode of living といふほどのものを指して居るのに過ぎない。從つて、彼等が文化生活の要件として擧げるものは、主として我々の衣食住、及びそれに附隨する生活上の必需品や便利品や享樂品やの生産及び消費の樣式に關する事柄である。また、彼等は屢ば、『文化生活の向上』といふやうなことを說くが、さういふ場合には、彼等は常に、我々の生活上の需要充足手段や享樂手段やの改良進步といふ樣なことを、念頭に置いて居るのである。彼等はよく、衣服や住居やは洋風にしなければならないとか、日常の生活には出來るだけ藝術味を加へさせなければならないとか、音樂趣味は各家庭に普及させなければならないとかいつたやうなことを文化生活に關聯して述べて居るが、かういふ主張は、彼等の文化に關する根本の考へ方から來たところの、當然の歸結である。

かうした考へ方も、たしかに『文化』に關する一つの見解には違ひない。疑ひもなく、それは極めて手輕な、極めて安易な、そして少しも肩の凝らない種類の見解であることは事實である。しかしながら、單にそれが手輕な、安易な、肩の凝らない種類のものであるといふことだけでは、この見解が無價値のものである、といふことの理由にはならないのである。判り切つてゐることを判りにくゝ說明することよりは、寧ろ判りにくいことをも判るやうに說明することの方

が、少くとも餘程人助けにならうといふ功德があるものである。それ故、さういふ點から『文化』に關する右の見解を批難するのは、非常に見當違ひだともいへる。

二

で『文化』に關する右の見解に不滿足を感じるものがそれを批難しようとするには、もつと有理な或る他の點からそれに近寄らなければならないことになる。ところで、『しからば、さうした或る他の點があるか、あらばそれを言つて見ろ』といふ段取になると、私は直ちにそれに應じて、少くとも二つの點を擧げることが出來ると思ふ。

その第一は、右の見解による『文化』の內容は、過去に於て古るくから使ひこなされて居る『文明』といふ言葉の中に、完全に包含せられてゐるものである、といふことである。尤もこの『文明』といふ言葉は、屢ば物質的文明及び精神的文明といふ風に別けて用ひられて居るほども、それほども、その內容の廣潤なるものであるだけに、それに關して樣々の異れる見解が行はれてゐることは事實である。が、これらの樣々の異れる見解のいづれに依つても、その中に、人間生活の需要充足手段及び享樂手段の改良進歩といふとが包含せられて居るものであるとは、何人にも異存のなかるべきことである。さうすると、この『文明』といふ、比較的諒解され易い言葉の中に極めて適當に包含せられて居る內容を、他に何等の然るべき理由もないのに、强いてそこから引離して、態々それをまだ一般に承認せられて居る定義を持たないところの『文化』といふ新しい言葉の中に盛る必要は一體どこにあるのか。これが私の腑に落ちない一つの點である。

しかし、この見解の主張者らが、『文明』といふ言葉は何となく黴臭い氣がするが、之に反して『文化』といふ言葉は如何にも淸新な響きを持つて居るから、そこで彼を捨てゝ是を取つたのだ、といふやうなことを率直に白狀するなら

ば、甚だ薄弱な理由とは思ふが、まづそれはそれとして承認しても構はない。けれども、それにしても、まだ〳〵『文化』に關するこの見解に文句をいふ餘地がある。といふのは、『文化』といふことを、單に人間の生活上の需要を充たしたり、享樂を增進したりする手段の改良進步の過程といふ風に考へる見解は、甚だ狹い目的の範圍內に於てしか適用が出來ないばかりではなく、それが適用し得られる目的の範圍內のことは、普通人が『文化』といふ言葉から期待して居る人間生活の諸相と全然合致することができないものである。普通人が『文化』といふ言葉から期待して居ることは、各人の個人としての、及び社會人としての精神生活に直接に交渉のある事象である。殊に、この言葉を、當面の社會改造問題に結び附けていふときには、尙ほ更らさうであつて、この場合に於ては、少くとも、それは、今後の社會進化の方向を決定する要素の一つとなつて働くべき思想的勢力の核心たるべきものとしてさへ、一般に考へられて居るのである。しかるに、『文化生活』といふことを、單に日常の諸般の需要が豐かに充足せられ、且つ各種の嗜好や趣味から來る欲求が自由に滿足せられるやうな生活狀態といふ風に解釋するときには、それは誰れにでも早や解りのする說明である代りに、人間の精神生活の核心ともいふべきものに肉薄してその本質を摑んだやうな種類のものではなく、唯、人間生活の外形を摸索して、それを兎や角論議して居るものたるに過ぎないのである。從つて、かうした意味に於ける文化生活を民衆の間に普及せよと叫んだところで、それが果して民衆の要求する文化生活と同じものであるかないかさへ、まづ第一に疑問とせられる。縱し假りに臆測を逞しうして、それが民衆の要求する文化生活と同じものであるとしても、それをどういふ風に民衆化すべきものであるかの問題が、まだ說明せられないで殘されることになるのである。衣食住の樣式を洋風にせよとか、日常生活を藝術的にせよとかいつたやうなことを、さうした要求をまだ少しも持つてない人達、若しくは、持つて居てもさうするための資力を持つて居ない人達に向つて、幾ら聲を嗄らして說法して見たところ

で、そこに何の效果があらう？　かういふ立場を取つて居る論者らにして、少しも社會改造といふことに口出しをしないで、唯一部の好事家やこましやくれた趣味の持主やに、成る程といはせる位のところで滿足して居る氣なら、この種類の説法を根氣よく繰返して居るのもよからうが、しかし、彼等にして苟くも、社會改造、若しくは新社會生活の創造に參加しようといふアンビションを持つて居るならば、こんな皮相的な見解にこだはつて居ないで、そこから更に一歩を進めて、今後新しき方向に無限に展開しようとする氣勢を見せてゐる民衆生活の基調をなして居る民衆精神の深かみに突き込んで、その核心を掴むことを試みなければならぬ。實際、新社會生活の創造といふことを離れては、態々文化問題を持出す必要は更にない。少くとも私は、さう考へて居る。

三

『文化』に對する見解として、上に掲げたものよりは遙かに傾聽すべき價値を持つて居るものは、私の知つて居る範圍内では、それを以て人格價値の實現の過程だと見て居るそれと、及びそれを以て文化價値實現の過程だと見て居るそれとである。

　しかし、これらの見解にしろ、甚だ曖昧模糊な、そして或る點に於てごまかしのあるものとしか、私には思はれないのである。文化は人格價値實現の過程だといふのならば、まづ『人格價値』といふものが何であるかを説明しなければならないし、また、文化は文化價値實現の過程だといふのならば、『文化價値』が何であるかを説明しなければならない筈である。けれども、一つは私の寡聞のために由るのかも知れないが、私はまだそれらのものに對して充分なる説明の與へられて居るのを知らないのである。といふのは、私といへども、それらのものに關して多少の説明を聞いたことがないではないが、しかし、充分納得の出來るほどの説明を聞いたことがまだない、といふことを意味するのである。

人格價値の實現といふことは、平たくいへば、各人の各機能の可能性を何等の障害なしに展開せしめることを以てその極致として居るものらしいが、若しさうだとすると、それは在り來りの自我實現說と同じ範疇に屬するものだ、といふことが出來る。この場合に於ては、人格價値とか自我とかいふものに對する說明が必要である。若し、この派の論者らが、人格價値なり、自我なりを、各人が置かれてあるところの、その周圍の社會的環境と有機的に結合して居るものと認めて、そしてこの立場から、文化はさうしたものゝ實現の過程だといふのなら、この說明は、その解釋次第で、私が主張して居る文化に對する見解と一致せしめることが出來ないではないが、それ以外の說明は、どういふ風に解釋しても、到底私達の理解を滿足せしめることができないのである。私は不幸にして、彼等が人格價値なり、自我なりを、どう說明して退けて居るかを聞く機會をまだ持たないから、この點に關しては、これ以上のことを言はないことにする。

文化價値の實現といふことを唱へる人達にしても、必ずしも『文化價値』そのものゝ說明を怠つてゐる譯ではない。が、彼等の各々が熱心に試みて居るその說明も、我々には甚だ空漠なものにしか見えないのである。彼等の或るものは、文化價値とは、人間の文化的努力の窮極の規範であるとか、當爲(ゾルレン)であるとか、アプリオリであるとか、いふやうなことを言つて居る。しかし、『文化價値』の說明をするに當つて、『文化的努力』といふ、同じやうな說明を要する他の言葉を用ふるのは、聽くものを惑はしめる外、何等の效果がないやうに思へる。それに對して彼等は、時として文化を自然に對立せしめて、人間の努力の發現、――その中にも、或る種の究極目的に向けられたる人間の努力の發現が文化だ、といふやうな說明を加へて居る。しかし、このやうな說明を聞かされると、我々の意中には、種々の疑問が生じて來ない譯にはゆかない。

四

さうした疑問の第一は、右の説明に於ける所謂『或る種の究極目的』に向けられて居る人間の努力の發現を文化だとするのならば、それ以外の人間の努力は文化の埒外に逐ひ遣られなければならないものであるか？といふことである。この問ひに對しては、我々はこの派の文化主義者達から『それは無論さうだ』といふ答へを豫期することが出來る。かういふ主張が極めて獨斷的なものであることは、いふまでもないが、しかし、今假りにその言ひ分を通すにしても、この究極目的を決めるのは誰れであるか？といふ疑問が、その次ぎに起つて來る。この派の論者達にしても、まさか『それは神だ』とか『それは自然法だ』とか、ともいふまいし、また『それは官僚だ』とか『それは知識階級だ』とか、ともいふまい。若し、彼等がさうした抽象的な、空漠なことか、乃至は、さうした偏頗なことかをいふものとすれば、我々が彼等を相手にして議論を闘はせることは、全然無用な努力である筈である。しかし、若しさういふことを言はないにすると、一體何といふつもりであらう。

若し彼等が『右の究極目的を決めるものは理性である』といふやうなことを述べるとなると、問題は一轉して、『それは誰の理性であるか？』といふ點に移つて行く。これに對して若し彼等が、『それは宇宙の理性だ』といふやうなことをいふと、それは再び茫漠として捕捉の出來ない言ひ分となるし、また若し、『それは官僚とか知識階級とかの理性だ』といふやうなことをいふと、それは再び偏頗な、或る特定の人間の集團以外の人に受け容れられさうにもない主張となることになる。そこで若し彼等が、『それは各個人の理性だ』といへば、若し各個人の理性がそれぞれ異つた究極目的を決めるときには、各個人に就いてそれぞれ異つた文化があることが想定し得られる場合が生じないには限らない。斯うなつては、その所謂文化的努力の究極目的といつたやうなものを求める必要がなくなる譯である。否必要がなくならなく

とも、各人各様となつては、それを求めることは、事實上不可能になる譯である。

けれども、この派の文化主義者らが文化的努力の究極目的として目ざして居るものは、さうした各人各様式のものではなく、萬人共通のものである。彼等のうちの或るものは、明かにその趣旨を述べてゐる。それによれば、この文化的努力の究極目的たる規範とか、當爲とか、アプリオリとかは、すべての集團の主義主張に超越して、しかもその各々に内在して居るといつた調子のものだ、といふのである。この規範、當爲、アプリオリ(何といつても、結局同じことだ)が、內在的でしかも超越的だと形容せられてゐることほど、それほど萬人共通のものとして工まれてある以上は、それが各人各様式のものと正反對の極端に置かれてあるものであることは、いふまでもない。彼等は出來るだけ『幽玄味』のある『哲學的』用語を驅使して、さうでもあり、また、さうでもなさゝうに見せ掛けようと努力して居るやうに見えるが、しかし、彼等の所論を通俗的の言葉で平たく書き直ほして見ると、つまりさういふことになるのである。かういふ風に、彼等が人間の文化的努力の究極目的として示して居る規範、當爲、アプリオリが、萬人共通のものとして企てられてあるものである以上は、それは現實の各個人の理性から出たものと考へられてゐるものでないことだけはたしかである。さうすると、それは、神の意思からか、自然法からか、宇宙の理性からか、官僚の指金からか、知識階級の思ひつきからか、若しくは、さういふ論者達自身の獨り合點からか、いづれその邊のどこからか迸ばしり出たものか、湧き出たものか、流れ出たものか、になつてしまはない譯には行かないものである。これらのうちのどの邊から出たものとせられて居るにしても、かうした馬鹿げ切つたものに對しては、私達は眞面目になつて掛かり合つて居る氣になれたものではない。

五

假りに右の文化的努力の究極目的としての規範なり、當爲なり、アプリオリの泉源がどこにあるかの問題を不問に附するにしたところで、もうさうしたものが、我々の各々が承認のできない種類のものであつたら、それは我々の各々に對して、何等の拘束力を持たないものであるに違ひない。素より、我々の上に權力を行使し得るものが、それを法律の形に鑄なほして、そしてそれを我々の上に強行するときには、場合に依つては、それは或る程度の拘束力を我々の上に持つことが出來るかも知れない。が、しかし、かうした拘束力は、畢竟、唯或る程度に於て我々の外的生活を律し得るのみであつて、我々の內的生活のうちには、依然として一歩をも踏み入れることが出來ないものである。斯ういふ風にもし、それが我々の上に絕對的の拘束力を持たないものとすれば、單に我々が我々の努力をその方へ向けない場合があることが考へ得られるばかりでなく、我々が我々の努力をその方へ向けないのが當然だといへる場合が寧ろ多いといふことさへ、何の無理もなしに考へ得られるのである。斯ういふ場合に於て、彼等の所謂文化的努力の究極目的だと思惟してゐる規範なり、當爲なり、アプリオリなりに毫も交渉を持たない我々の努力は、それが如何なる種類のものであるにしても、彼等の眼から見れば、皆ひとしなみに文化現象の埒外へ逐ひ遣られなければならない筈のものであらう。しかし、こんなことを主張することが甚だしい獨斷に陷つたものであることは、改めて言ふまでもあるまい。

けれども、彼等に言はせると、彼等が文化的努力の究極目的だと思惟して居る規範、當爲、アプリオリといふものは、すべての集團や、黨派や、階級やの因つて以て立つところの主義主張に超越して、しかもそれらの各々に內在して居るものであることほど、それほど包括的のものであるから、從つてそれは萬人共通のものである筈である、といふのである。しかしながら、彼等の『筈』であると思つてゐるものが悉く、現實生活に於てもまたその通りに『筈』であるものと限つてゐるものではない。それどころではなく、少くとも當面の問題の場合に於ては、彼等の『筈』の本尊たる、

例の超越的にしてしかも内在的なる規範、當爲、アプリオリなるものが我々の現實生活に於て實在してゐるといふことからが既に、私達には眉唾物のやうに思へるのである。假りにそんなものが實在してゐるものにしたところで、それは我々の現實生活に對しては、いくら贔負目に見ても、間接的意義しか持つてゐるものでないと、私達には考へられるのである。

今假りに一例を擧げて右の一點をもう少し具體的に説明すれば、こんなことにならう。――現代のブルジョア社會に於ては、他人のものを盜んではならないといふことは、人間の行爲の規範の一つとして重く視られてゐるものである。これは私有財産尊重の精神から出て居るものであつて、そしてまた、この私有財産尊重の精神といふものが、ブルジョアジーの成立の根本基礎たる資本主義と密接なる關係を持つてゐるものであることは、いふまでもないことである。同樣に、『愛國心を振起せよ』といつたやうなことも、この社會の人々自身が實行してゐるか否かは別問題として、それは彼等が人間行爲の貴重なる規範の一つとして標榜して居るものである。このことも、現代國家と資本主義との關係から考へてみれば、如何にもとうなづかれる。それからまた『産めよ殖やせよ』などゝいつたやうなこと、――これも彼等自身が任意的に進んで實行して居るか否かは別問題として、唯彼等が一般公衆に向つて、ひとつの大切なる規範としてそれを押出して居るものであることは事實である。このこともまた、人口増殖の結果として生ずる勞働市場に於ける彼等に有利なる形勢から見ても、但しは、彼等の因つて立つところの資本主義と領土的帝國主義との關係から見ても、尤も千萬なことたるを失はないのである。ところが、現代世界の各國に於ては、かうして諸々の規範を錢一文ほどにも見積つて居ない多數の人々の群れが一方に存在してゐることは、我々が忘れてはならないことである。さき頃ある西洋雜誌（多分アメリカの『アウルック』であつたやうに思ふが、その何月何日號のであつたかは、今一寸失念した）を讀ん

でゐると、アメリカのコンミユニスト等は、『盜みをしても、詐欺をしても、餓死をしても、決して仲間の尊敬を失ふことはないが、愛國心を鼓吹するとか、子供を産むとか、ストライキ破りの中に交じり込むとかのことをすれば、直ちに仲間外づれ (outlaws) と見做して仕舞ふぞ』といつたやうな宣言をした、といふ記事が載つて居た。これは多分、眞實を傳へたものであらう。いづれにしても、その資本階級、及び、資本主義的國家に對する現實上の反感から、かうしたことを痛切に考へてゐる無産者の群れが、非常に多數の集團をなして各國に存在して居ることは、掩ふべからざる事實である。かういふ連中が受け容れることが出來るところの——そして實際に於て受け容れて居るところの行爲の規範が、前に擧げたブルジョア社會のそれと全然異つた種類のものであることは、いふまでもないことである。それ故、これらの二つ異つた集團がそれ〴〵各別に持つて居る主義主張に超越して、しかもその各々に内在して居る規範にしろ、當爲にしろ、アプリオリにしろ、——そんなものを眞面目になつて探求しようと努力することの馬鹿々々しさは、諄々しき説明を須つまでもなく、誰れにでも判り切つて居ることである筈である。

六

けれども、右の實例に於ける二つの集團の主張の間に非常に大なる隔たりがあるに拘はらず、各集團に屬して居る人達が、各々その主張を勇敢に實行して、時としては、各々その主張に殉する行動にさへ出でることがあるものであるが、かうしたところに兩者に共通する或る立場があつて、そして彼等が各々この立場を忠實に守るべきものと思惟して居るところに、つまり兩者の主張に超越してしかもそれに内在する『規範』なり『當爲』なり、アプリオリなりを發見することができる。——と、かういふことがいはれないではない。そして、それは必ずしも、論理的に間違つて居るといつた譯のものでもない。

しかし、それは唯論理的に間違つて居る譯のものでないといふだけの話であつて、實際問題として考へてみれば、さういつた議論は、恐らくそれを説くものゝ豫期して居ない結果に導くであらう。すなはち、そんなことをいふのは、その終極に於ては、右の實例に於けるブルジョア社會の人々が私有財産制度の維持を信條としてゐることも、コンミュニストらの連中がその破壞を信條としてゐるとも、文化の上から見れば、共に同等の意義のあることである、といふところに落着かなければならないものである。ところが實際問題として考へるときには、文化の上から見たつて、但しは他の何の上から見たつて、私有財産制度の維持の信條に或る意義を認めるなら、私有財産制度破壞の信條には、何よりもまづ、それと全然反對の意義を認めねばならないのが當然である。この當然なことを當然でないやうに言ひくるめるのは、單なる一片の論理上の遊戯に過ぎないものである。

唯この間に在つて、强ひて言はゞ言ひ得られることは、右の二つの集團に屬する人々が、各々その主張に向つて突進すること、そのことのうちに同等の價値が認められる、といふことだけである。しかしながら、こんなことを言ふのは、我々の實生活に對しては、縱し全然無意義でないにしろ、いくら尊く見ても間接的の意義しかないものである。實生活の上から見れば、右の實例に就いていふときには、一つの集團が私有財産制度の維持に熱中し、他の集團がその破壞に腐心するといふところに、問題の重心があるのである。『人々は各々その守るところに忠實なれ』といふやうな兩者に共通のやうに見える規範は、まづその守るところが決まつてから、始めて意義が生じて來るに過ぎないものである。——といつた次第であるから、つまり、この種類の規範——若しくは當爲、乃至、アプリオリ——は、いくら贔屓目に見積もつても、實生活に對して唯間接的意義しか持たないものである。そして、それと同じ意味を、『自由』とか、『人道』とか、『デモクラシー』とかといつたやうな、一部の人々の盲目的崇拜の對象たる偶像となつて居る種々の蠱惑的な言葉で

言ひ現はしてみても、但しは、更に一層の苦心を費して捏つち上げた別の如何なる言葉で言ひ現はしてみても、結局同じ譯合になるのである。從つて、かうした規範を基礎として打建てられた文化觀は、たとへ論理的には間違つてゐないにせよ、それは極めて概念的な、內容の空疎な、そして肯定否定のどちらに轉んでも實際上の效果に於て大した差異のないといつたやうな種類のものになつてしまはない譯には行かないのである

七

上に揭げた文化價値實現說の立場に居る論者らは、現實の社會生活に於て各人の考へや行動やを決定する上に於ける最大要素の一つであるところの、各人の屬して居る集團とか、社會的地位とか、階級とかに固有して居る團體意識から來る見地を無視若しくは超越してその議論を組み立てゝ居るのであるが、玆に彼等の誤謬の因子があるのである。すなはち、斯くして組立てられたる彼等の議論は、別に論理上の矛盾を包含してゐないにしても、我々の現實生活に對して何等直接の意義及び效果を持たないものになつてしまふのである。私達の見方からいへば、すべての規範なり、當爲なり、アプリオリなりは、各個の集團なり、社會的地位なり、階級なりの立場（それは大體からいへば、結極に於てそれに屬して居る各個人の物の見方を決定するところの）から見て、始めていゝとか、わるいとか、正しいとか、間違つてゐるとか、と言ふことが出來るのである。

更に一歩を進めて言へば、各個の集團なり、社會的地位なり階級なりから唱へられる主義主張といふものは、ある抽象概念たるアプリオリから抽出せられたものではなく、その現實生活上の要求から不可抗的に流れ出でたものである。素より、かうした主義主張が抽象的概念の外形を取つて表はれることは、常に有り勝ちのことであるが、しかし、かうした抽象的概念の外形は、その內實の要求を包む上蔽ひにすぎないものである。それ故、異つた多くの集團が、その各

々の主義綱領に於て同じ表現を用ひてゐながら、事實上に於ては、その同じ表現をそれぞれ別樣に解釋して居る、といつたやうな實例は、一々數へ立てられない程も多くあるのである。假りにその一例を擧げようならば、資本階級も勞働階級も共に自由とか人道とかいふことを主張してゐるが、しかし、この表現に對するこの二つの階級の各別の解釋の間には、如何なる手段を以てしても到底橋渡しのできないほどの大きな隔たりがあるのである。

かういふ風に、各個の集團なり、社會的地位なり、階級なりから唱へられてゐる主義主張は、その現實生活上の要求から不可抗的に流れ出て居るものであるから、それを超越した或る立場から、それがいゝのわるいの批判したところで、それがこの批判に應じて引込む譯のものでない。であるから、もし或る特定の場合に於て、ある特定の主義主張を徹底的に絶滅しようと思ふならば、それを唱へてゐる集團を絶滅して掛るより外に途がない筈である。縱しそれが一時ある非常手段に依つて壓服せられることがあつても、苟しくもそれを唱へた集團が存續して居る間は、それは潛伏的狀態に於てゞも存續して、少しの隙でもあれば附かり次第、再び表面に浮び出ようと努力するのである。今一二の例を借りていへば、軍國主義の如き主張は、軍閥そのものを絶滅するのでなければ、永久にその息の根を止めることが出來ない通りに、社會主義の如き主張は、プロレタリアートそのものを絶滅しない限りは、いつまでも存續して行くことであらう。

八

各個の集團なり、社會的地位なり、階級なりの主義主張に對して、ある超越的立場から批判を下すといふことは、現實生活に於ては、全然無效果のことであるばかりではなく、多くの場合に於ては、それは不可能のことでもある。自分が超越的立場から或る集團の主義主張に對して批判を下して居ると正直に思惟して居る人達が、どの集團の中にも多く

存在して居るものであるが、しかし、實際に於ては、彼等のその批判は、大抵の場合、彼等の各自が屬して居る集團の規範に依つて支配せられてゐるか、若しくは少くとも制限せられてゐるかである。この意味に於て、彼等の各自の個人的意見は、或る程度に於て、その屬してゐる集團の規範の反映である。彼等の各自は、自己が屬して居る集團の規範に超越することは出來ない。彼等がある集團の規範に超越したときは、ある他の集團のそれに制約せられたときである。この點からいへば、如何なる人も、ある集團なり、社會的地位なり、階級なりの規範を超越した立場から、ある主義主張に對して批判を下すことが出來るものでない。若し或る場合に於てそれをすることが出來るとすれば、その批判は、前に例示したやうな、『各人はその守るところに忠實であれ』といつたやうな、毒にも藥にもなりさうにもないやうな、一種の抽象的概念を基準とするものに過ぎないのである。

私は斯ういふ見地に立つてゐるから、『文化』に對する私自身の見解を建てるに當つても、現實の社會生活に於て各個人の思想をつくる上に於て活きた力となつて働いて居る各集團なり、各社會的地位なり、各階級なりの立場を勘定に入れなければならないものだと考へて居る。しかしながら、私は、少くとも現在及び近き將來に於ける社會生活に於ては、これらの各集團なり、各社會的地位なりが、漸次に各社會階級（後に述べようとしてゐる理由に依つて、經濟的意味に於けるそれを指す）に統括せられて行く傾向を示して居るものと見て居るから、この點から私は、各社會階級の立場を基點として『文化』に關する私の見解を建てるのが、當然でもあり、便利でもあり、且つまた、かういふ問題を考へる場合に顧慮しない譯にはゆかない社會心理的考察の要求にも適合するものと考へる。

いふまでもなく、現代社會生活に於ける各集團なり、各社會的地位なりが各社會階級に統括せられて行くといふのは、一つの傾向を指して言つて居るものであつて、それが完成せられたる――若しくは完成せられんとしてゐる狀態に

あるといふのではない。であるから、各社會階級の中間には、まださま〳〵の無所屬の集團や、臨機應變的に隨時に甲なり乙なりの社會階級と提携する多くの集團やが介在して居るのは事實である。しかしながら、これらのさま〳〵の集團は、社會生活の現狀の下に於ては、殊に複雜なる經濟上の理由に依つて、だん〳〵と確定的に甲なり乙なりの社會階級の中へ沒入する傾向を示して居る點に於て、その間に多少の程度の差異のあることを別にすれば、いづれも皆一律に取扱ふことが出來るのである。このことは、既に幾多の社會問題研究者に依つて指摘せられてゐることであつて、そして、私自身もまた、一般の社會的事象の進行に對する觀察に基いて、この說明を承認することを躊躇するものでない、かういふ譯であつてみれば、私が私の文化觀を建設するに當つて、この顯著なる社會的傾向を考慮のうちに取り入れることをするには、何の不思議もない筈でなければならない。

九

本文の初めの方で述べた通り、文化現象といふものを、單純に衣食住及びそれに附隨する一切の需要充足手段及び享樂手段の改良せられたる姿と見るのは、餘りに我々の日常生活の外形に囚はれすぎた見方であつて、それは、人間の社會生活上の種々相の最終の動力といふべき精神生活の深みに觸れて居ない點に於て、救ふべからざる缺陷を暴露して居るものである。

文化現象を考察する場合には、どこまでも、それに干與する人間の內的生活——若しくはその精神生活の深みへ突き込んでゆかねばならないのである。ある意味からいへば、文化現象は人間の精神生活上の現象である、といつても差支がないのである。だが、玆に態々『ある意味から』と斷つたのは、『精神生活』といふ言葉の解釋に關聯してゞある。私が用ひて居る意味に於ける『精神生活』は、古來の各時代に於ける一種の道學先生輩の使ひ慣はして來た意味に於ける

それでないことだけは、たしかである。彼等は常に、精神生活を物質生活から峻別して取扱ひ、そして物質生活の卑しむべく、精神生活の貴ぶべきことを主張し來つた。彼等がこんなことをし來つたその目的は、一般の貧弱なる物質生活の享有者たる民衆に向つて、諦め的態度を慫慂したり、儉素質撲の生活に滿足させたり、服從の『美德』を養はせたり、反抗の『惡德』を抛擲させたりしようといふことであり來つた。素より彼等のうちには、かうした目的を意識しないで何の氣なしに彼等の仲間の傳統的説法を繰返して居たのに過ぎないものもあつたらうが、その結果は矢張り同じところへ落ち着いたのであつた。けれども、私の用ふる意味に於ける『精神生活』は決してそんなものではない。私は必ずしも人間の精神生活はその物質生活の反映だといふほどの極端に趨るものではないが、しかし、この兩者の間に密接なる相互的作用の關係のあることを認めないで居ることが出來ないものである。この事を、私は上來の叙述のうちに、幾分ほのめかして置いた筈である。が、玆に更に布衍していへば、この意味に於て私は、近代人の精神生活を近代の物質的環境から引離して考へることも出來ないし、また、近代の物質的環境を近代人の精神生活から引離して考へることも出來ない、と思うて居る。この兩者のうちに於て、どちらが先きに働きかけたかといふやうなことを究明することには、今のところ私は何の興味も持つて居ない。私は、それは我々の今の知識を以ては解決が出來ない問題だと思つて居るから、從つてそんなことを試みるのは無用の努力だとさへ考へて居る。唯私は、私が精神生活を物質生活から引離して考へることが出來ないといふことだけを、特に玆で言つただけのことである。それさへ言つてしまへば、私の當面の用事は足りるのである。

既に精神生活を物質生活から引離して考へることが出來ないといつた以上は、それを物質生活の社會的表現に關する最後の決定者たる經濟組織からも引離して考へることが出來ないのは、當然のことである。しかも經濟組織はまた、現代の

社會狀態の下に於て必然的にそれに附隨する經濟的意味の社會階級から引離して考へることも出來るものではない。それ故、私は一方に於ては、『文化』を人間社會の精神生活現象と見ると同時に、他方に於てはまた、それを經濟的意味に於ける社會階級と交錯させて考へることを必要だと思うて居るのである。

一〇

私は前に、文化を以て人格價値實現の過程だとする說や、それを以て文化價値實現の過程だとする說やに對して、それらが餘りに曖昧模糊の概念に過ぎないといふ理由から、一應不滿足の意を表白した。更に私は、右の後者が、各種の團體意識に超越してしかもその各々に內在して居る規範とか、當爲とか、アプリオリとかといつたやうなものに文化價値を求めようとするから、その文化觀が論理的に間違つて居ないにしても、現實生活に對しては無意義無効果なものになる、といふ意見を述べた。

實際、萬人共通の規範を基礎として文化を說明するのは、前に述べた通り、萬人共通の規範なるものが現實生活に對しては唯間接的な意味しか持たないものであるといふ理由に依つて、空疎な概念の表出に終るべき必然性を持つものである。これに反して、自他それぞれに異つて居る各人の個人的意識に即して文化觀を打建てるとは、不可能の試みである、と同時に、文化を社會現象の一つと見るとき、それは不當の試みであるともいへる。もし、萬人共通の規範の基礎の上に立つ文化の統一相を求めようとすることが、一方の極端に於ける徒勞だとすれば、千差萬別の個人意識の一つ一つに相應する文化の種々相を求めようとすることは、他方の極端に於ける徒勞だと見なければならぬ。

文化現象を單なる論理的考察から離れて、實際問題の立場から取扱はうとするには、一方に於て文化の社會現象としての性質を認めると同時に、他方に於て各人の個人的意識をも勘定に入れなければならない。而も、各人の個人的意識

も。その周圍の社會的環境の影響といふものを離れて考へられないといふ點に於ては、正さしく社會現象としての性質を帶びて居るものである。そして各人の個人的意識がその周圍の社會的影響に依つてつくられるといふのは、それが自然界とか人間以外の動物界とかに對照していふ人間界の影響に依つてつくられるといふやうな空漠たることを意味するものでなくて、それが主として各人の屬して居る集團なり、社會的地位なり、階級なりの團體意識の影響に依つてつくられるものであるといふことを意味するのである。といふのは、無論、各人の個人的意識の獨立性を無視しようとするところから來るのではなく、さうした個人的意識の獨立性がその所屬の集團なり、社會的地位なり、階級なりの團體意識に依つて浸潤されて居る狀態を強調しようとするところから來るのである。この意味に於て、文化をその社會現象としての性質に於て眺めるときには、どうしても社會生活上に於ける各個の集團なり、社會的地位なり、階級なりに附存して居る團體意識を顧慮しなければならないのである。ところで、各個の集團なり、社會的地位なりは、だん／＼と各別の社會階級に統括せられて行く強き傾向を持つて居るものであるから、結局、私の文化觀に於ては、この各個の社會階級の團體意識に重心を置くことになるのである。

二

また私は、各社會階級の立場を超越して文化觀を築き上げることを試みることが空虛な努力だと思つて居る通りに、各時代を超越してそれを試みることをも、同樣に無益な仕事だと考へて居る。文化の内容を單なる一片の抽象的概念に終らしめないやうにしようと思へば、それが各時代に於て、各社會階級の生活を通ほして現はれて居る――若しくは現はれようとして居る姿のまゝを客觀的に掴まなければならないのである。

斯うした見地から出發して、私はまづ第一に、文化といふ現象を、各時代の時代精神（この時代精神といふものも、

また、各社會階級の立場と關聯して考へなければならないものと思ふ。その理由はすぐ後に述べる。)が人間の社會生活の外形の上に表現せられて居るもの、及び表現せられようとして居るものと解釋する。これを靜的に見れば、文化は時代精神が人間の社會生活の上に表現せられて居る形式である。これを動的に見れば、それは、時代精神を人間の社會生活の上に具體的に表現しようとする人間の努力の過程である。

私がかつて本誌で發表した『民衆文化の世界へ』の中で述べた論旨といくらか重複することになるが、時代精神の表現と見るべき人間の社會生活のあらゆる形式は、文化現象として取扱ふべきものである。この見地からいへば、ある時代に於て行はれる哲學、藝術、宗教、道德の如き、直接に精神生活に交渉して居る人間の活動の諸方面はいふに及ばず、法律、制度、風俗、習慣から、一般の政治生活上並びに產業生活上のあるゆる組織及びあらゆる事象の如き、より多く間接な關係で精神生活に交渉して居る人間の活動の諸方面に至るまで、それらはいづれかの點でその時代の時代精神の表現でないものはないから、それらは皆文化現象として取扱ふべきものである。私の文化に對する見解は、まづこの點から發程する。

しかし、各時代の文化の諸相は、その時代の文化だといふ意味に於ての外は、唯ひとつの範疇に歸一せしめてしまふことが出來ない場合が多い。それは、各時代に於て、時代精神が唯ひとつの主流に統一せられて居ることが稀れであるといふところから來てゐるのである。

各時代に於ける時代精神の流れは、多くの場合に於て複雜に分れて居る。殊に現代の時代精神の流れは、最も複雜な關係に分岐したり交錯したりして居る。がこの複雜な關係に離合して居る現代の時代精神も、現代の經濟組織の側から眺めて(精神生活現象といへども、經濟組織から引離して考へられない譯は、前に述べた。)これを大別して、ブルジョ

アジーの階級意識から派生した各種の思想感情及び信念の系統と、プロレタリアートの階級意識から派生した各種の思想感情及び信念の系統との二つの主流に統括することができる。此見方は、無論、經濟的意味に於ける現代の社會階級を、資本階級と勞働階級との二つの首要型に大別する見方と相呼應してゐるものである。そして、私は便宜上、その前者に相應する思想感情及び信念の系統を『ブルジョア精神』と呼び、その後者に相應する思想感情及び信念の系統を『民衆精神』と呼んで居る。もつとも、現代の社會階級を資本階級と勞働階級との二つの首要型に大別する見方は、唯社會組織の上に於けるひとつの最も著るしき傾向を指ざして居るものであつて、それは決して、その中間に介在する樣々の集團を無視するものでないといふことは、前でも既に論じたことである。それと同じく、現代の時代精神をブルジョア精神の系統と民衆精神の系統との二つの主流に大別する見方もまた、唯社會生活の上に於けるひとつの最も著るしき傾向を見つめていつたものであつて、それは決して、その中間を貫いて走つて居るさま〴〵の傍系的の流れを認めないものではない。しかし、どちらの場合にしても、傍系的のものは、だん〴〵甲か乙かの主流に沒入して行く傾向を示して居るものであるといふ點に於ては、ひとつである。

そこで私自身は、右の意味に於けるブルジョア精神の社會生活上に於ける表現を『ブルジョア文化』と名づけ、民衆精神の社會生活上に於ける表現を『民衆文化』と名づけて居る。そして、如何なる見方からいつても、ブルジョア文化はブルジョア精神が完全に表現せられた形式に在るものであるが、之に反して、民衆文化は今漸く民衆精神を表現する過程の上に發足しかけて居るものであることは、いふまでもないことである。

尚ほ時代精神と文化現象、殊に民衆精神と民衆文化との間の關係については與へられねばならないこれ以上の說明は、私はひとたび本誌の新年號所載の拙稿『民衆文化の世界へ』に於て試み、ふたたび『解放』六月號所載の拙稿『現代社

會生活と知識階級』に於て試みた。尤も、これらの論文に於ける私の說明は、今から見れば甚だ不完全なもので、私はそのところ〳〵を補修したく思うて居るが、しかし、そこで述べた大體の趣旨は、今の私が考へて居ることゝ同じであるから、私は玆ではそれをこれ以上再說しないことにする。

三

ブルジョア文化は、既に完成せられたる文化である。それは、現代の文化は全然ブルジョア文化であると言つていゝ程、それ程完成せられたる文化である。之に反して、民衆文化はこれから段々に形成されようとして居る文化である。民衆精神が今日に於て見るやうに發達したのはまだ比較的新しい現象であるから、それが社會生活の上にまだ〳〵充分に表現せられるやうになつてゐないのは、もとより當然のことである。それにも拘らず、今日に於て民衆精神が既に確立して、ブルジョア精神に對抗して敢然その存在を主張してゐるといふ事實がある以上は、民衆文化の基礎が既に成立つてゐるものとみるべきである。

ブルジョア精神が發達してゐるところでは、それがそれ自身を社會生活の上に表現せざるを得なかつたと同じ筋道で、民衆精神が發達して來るやうになれば、それはそれ自身を社會生活の上に表現せざる得ないやうになるものでなければならない。斯ういふ風にブルジョア精神がブルジョア文化へと展開し、民衆精神が民衆文化へと展開するやうになる傾向のあるのは、その各々の內部からの自然の衝動に出でるものである。この意味からいへば、民衆文化は、それを實現させなければたらないとか、それを實現させてはならないとか、の問題を伴ふべきものではない。苟しくも民衆精神さへ發達すれば、その內部からの自然の衝動に依つて、民衆文化が實現せられざるを得ないのである。民衆文化の實現は（ブルジョア文化の實現もさうだつたが）ある究極目的、——『超越的內在的』の規範にしろ、若しくはそれ以

外の種類の規範にしろ、兎も角何等かの究極目的に向つて行はれるのではない。否、民衆文化の實現は、民衆精神の内的生命の外へ向つての――社會生活の表面へ向つての展開の過程である。

現代社會に於ける階級的差別及び階級特權の最終の掩護物たる資本主義の撤廢を主張する民衆精神は、この資本主義の維持を主張するブルジョア精神に向つて、大びらに挑戰して居るものである。この點からいへば、階級鬪爭の一面は文化鬪爭であるといへる。既成の文化と新興文化との間に『彼れ我れを滅ぼさゞれば、我れ彼れを滅ぼさん』といつた風の接戰が行はれてゐるのである。それは、今日の社會生活の上に於て現實に行はれてゐるのである。

この文化鬪爭に於て、今日漸く興りつゝある民衆文化が、將來に於て既成のブルジョア文化に取つて代り得るまでに發達するであらうか否かの問題は、この鬪爭に於てそのいづれが最後の優勝者となつて現はれるであらうかの問題に繋つて居るものである。この勝負の結果に關しては、科學的精確を以て豫言することは出來ない。唯信仰的心理を以て豫言することが出來るだけである。私自身としては、無論、民衆文化の最後の勝利を信じてゐる。それを信じてゐればこそ、民衆精神のために戰つて居ることを悔いないものである。

一四

民衆精神の主張を代表してゐるものは、必ずしも社會主義に限つたものでないことは無論であるが、しかし社會主義がそれを代表してゐるものゝ一つであることは事實である。そしてこの社會主義の信條に在つては、ブルジョアジー對プレロタリアートの階級鬪爭の果てに於て、プロレタリアートの時代、若しくは更に正確にいへば民衆の時代（社會主義の豫想してゐる『無階級の時代』は、正確にいへば、『プロレタリアートの時代』といふべきでなく、『民衆の時代』といふべきである。）の到來することが豫想されてあるから、さうとしては明言せられてゐなくとも、民衆文化の勝利が豫想せら

れてゐる譯のものと見ることが出來る。なぜなら、民衆の時代の社會生活は、必然的に民衆精神の表現でなければならないからである。たゞ舊來の社會主義者らは、かうした點を特に強調しなかつたまでゞある。

しかしながら、社會主義の新しき諸派の主張は、私達の眼には、だん／＼に精神運動としての色彩を加味して來たやうに見える。私は民衆文化の立場から、この點を殊に注意すべきものと思つて居る。殊に私達が、サンディカリストらや、ギルド・ソーシアリストらの書物を讀む時は、一層この感じを強めない譯にはゆかない。あのジェネラル・ストライキに social myth の意味を持たせようとするソレルや、勞働運動のために『新しきエルサレム』を打建てることの必要を叫ぶコールや、一種の『中世紀主義』を鼓吹するペンティーなどの主張を聞けば、誰れが、このことを否定することが出來よう？　かくして勞働運動は、賃銀や勞働時間やの散文的主題から更に深入りして、次第に私の所謂『民衆文化』の領域に向つてその歩みを進めつゝあるのではあるまいか。少くとも私自身には、さう考へられる。

民衆の支配を行つて居る唯一の現實の政府であるところの、新ロシアのソヴィエット政府の教育政策や藝術政策を見ても、私は矢張り同樣の感じを起さない譯にはゆかない。このソヴィエット政府の組織や政綱やの全體に亙つて研究したり考察したりすることは、極めて必要でもあり、有益でもあることゝ思ふが、これは私には今といつて急に出來ることでないから、茲ではそれを試みないことにする。が、少くともその教育政策や藝術政策やは、民衆文化の立場からどうしても無視することのできないものである。で、私はその教育政策だけに關して、『我等』五月號所載の拙稿『民衆文化の歸趨と教育』の中に於て、私の用ふることを得た僅かばかりの材料に依つて、甚だ不完全にではあるが、兎も角、一應略述して置いた。今その中から次の一節だけを、茲で轉載することを許されたい。それは、一九一七年十一月に於けるボルシェヴィキの革命後間もなく、新ソヴィエット政府内の人民教育委員會が發布した教育に關する布告の一部である。

（本文は、マクス・イーストマンの書いたものゝ中から引用。）

『教授と教育との差異を强調することは、大切である。教授とは、教師から生徒へ、既成の知識を傳達することである。教育とは創造的過程である。各個人の人格は、生涯を通じて『教育』せられてゆき、形づくられてゆき、その内容に於てますます豐富になり、ますます强くなり、ますます完全になる。

『働いて居る人々の群れ、――勞働者たち、農夫たち、兵士たち、――かういふ人達は、初步及び高等の教授を得ようと渇望して居る。しかし、彼等はまた、教育を得ようと渇望して居るものでもある。政府も、知識階級も、また彼等自身の以外にある如何なる力も、それを彼等に與へることは出來ない。學校、書籍、劇場、博物館などは、この點に關しては、彼等を助けることが出來る位が頂上である。彼等は從來に於て文化を創造し來つた支配階級や知識階級の地位とは全然異つた彼等の社會的地位に依つて形づくられた彼等自身の思想を持つて居る。彼等は彼等自身の思想を持ち、彼等自身の感情を持ち、人格及び社會に關する問題を取扱ふ彼等自身の方法を持つ。都市勞働者は彼自身の氣風に從つて、また田園勞働者も彼自身の氣風に從つて、おのおの銘々に、勞働者仲間の階級思想の貫流して居る彼自身の明晰なる世界觀を作るであらう。共同勞働に依つて、それ自身の普遍的な、豐富な、そして自由なたましひを作ること。――我々に近い子孫が實見もし、參加するであらうところのあらゆる現象中に於て、これほど崇高で美しいものが、外にまたとあらうか。』

右の一節は、民衆精神と民衆文化との關係に就いて、驚くべく意味の深い暗示を與へてゐるものであることは、それを一讀したゞけで、直ちに感知することが出來る。

更に、ソヴィエット政府の藝術政策を研究しても、この點に關して大に啓發を受けることが出來るが、しかしこのことは、私の今用ひ得る時間の關係上、後日に讓ることゝする。唯、私は玆で、矢張り右の人民教育委員會の發布した布告から、次の一節を引用したい。

「ソヴィエッツに附屬する當面の任務は、美と藝術とを「一般の欣び」に化すると、すなはち、全市の欣びに化すること、である。この點に關する第一の問題は、「藝術の社會化」といふことであるが、この目的を最も善く、且つ最も輕便に達成するには、二つの方法がある。所要の第一の手段は、諸都市（無論、主として諸大都市）を外形的に美化することである。それは、これらの諸都市を、單に都市的村落、都市的公園、都市的庭園にするばかりでなく、同時に、都市的博物館にすること、すなはち、壯麗なる建築物や、美しき紀念像やの博物館にすること、手短かにいへば、ウィリアム・モーリスのユトピアたる News from Nowhere に描かれてゐる美しき未來のロンドンに外形を似せることである。この方面に關しては、若干のことが既に成就せられた。その實例としては、世界革命の指導者であり、その英雄であつた人々のために、五十の紀念像を（モスクワ市に？）建てたことや、マース・フィールドに於て、革命の犠牲者らのために、一基の紀念像を建てたことや、ペンザ・ソヴィエットがマルクスの紀念像を建てる件を決議したことやを玆で擧げるだけで充分であらう。……」（この布告は、その次に、第二の方法として、革命紀念日に於ける奏樂や行列やの擧行に關する件を述べてゐる。）

ソヴィエット政府が、過去の藝術の保存、新藝術の振興、藝術家の養成、民衆的劇場の經營などのことに關して取つて居る政策の中には、もつと重要なる啓示を含んで居るものが澤山あるにも拘らず、私が玆で特に右の都市美化政策に關する一節だけを引いたのは、私がそれを、近頃東京市で起つた辨慶橋や上野公園の處分問題に對照せしめようとしたため

である。ブルジョア精神で固まつてゐる東京府知事や東京市の市政當局や者の都市政策觀の一端と、民衆精神で一貫せられて居るモスクワの新政府のそれとを、かういふ風にならべてみることは、民衆文化を考察してゐる人達に取つては、興味の非常に深いことではあるまいか。

ソヴィエット政府のかうした教育政策や藝術政策やが、果して相當の程度に實行せられてゐるか、若しくは、實行せられ得る見込を持つて居るかは、私の知つてゐないことである。それからまた、この政府の組織や政綱がそれらを實行するに適當して居るか否かは、全然別問題である。けれども私は、日本文字で書いた材料のうちにさへ、これらの點に關して實見から得られた多少の報道を傳へて居るものゝあることを、私の研究心の立場から滿足に思つてゐるものである。私はかういつて居るうちに、先き頃『東京日々』に折々掲載せられた同紙の布施通信員のモスクワ市から打電して來た數々の長文の通信を思ひ浮べてゐるのである。これらの通信は、同紙に掲載せられる前に、當局の氣ごゝろを兼ねて、ところ〴〵荒削り式に抹消せられて居たが、しかしそれに依つても、その讀者は、現代に存在する唯一の民衆文化の世界に於ける生活の動きを髣髴することを得るのである。

以上は、私の『民衆文化の社會心理的考察』の腹案の一部分――しかもそのほんの序論ともいふべき部分を書き綴つたものである。あとは、時間の都合上書き上げることが出來なかつた。しかし、私はそれを、この次私が『中央公論』に寄稿するときに、全部述べてしまふつもりである。（一九二〇—七—九）

社會奉仕と資本家階級及勞働者階級

文學博士　三宅雪嶺

（一）

社會は個人を以て形造られると共に、社會を形造る個人は單純なる個人でなく、社會と關係ある個人であつて、無意識的又は有意識的に多少社會に奉仕するに極つて居る。社會奉仕に就いて何の解釋あるにせよ、之れを事實と認める。世界に絕對孤立の人なく、必ず他人と何等かの關係があり、個人は長い連鎖及び廣い連鎖の一部に屬する。社會を形造る個人は皆何程か社會の爲めにし、或は專ら其爲にする。蟻の社會、蜂の社會など、簡單に之を示す。社會の爲めに生き、社會の爲めに死ぬ事になつて居り、社會に用ない者は撲殺され、又自ら甘んじて撲殺される。斯く社會を形造らぬ者は、斯く社會を念とせず、蠅や蝶や、勝手に飛廻つて居る。それでも種族繼續に力を用ゆる所がある。

人類の社會は蟻に比べて遙かに複雜、それほど固定せず、種々様々の形に於て奉仕の行爲が顯はれる。個人の性質により、其境遇により、其時代により、奉仕の顯はれ方が違ふ。生れながらにして奉仕的の人物が居る。乃木大將とか、ゴルドン將軍とか、石壁ジヤクソンとか、生れながら奉仕の念が甚だ强い。幾許か之に似たのは見出すに難くない。封建時代の如く、或る制裁力を以て主從の關係を定めては、奉仕の意があると否とを問はず、奉仕の所爲があり、主君の爲めに一命を抛つものと定まり、死すべきに死なねば、社會に容れられぬ。主君に於ても、家來が他藩の者の爲めに辱かしめらるれば、一家の運命を賭して、之を救はねばならぬ事がある。其儘にして置いては武門の耻、武士の風上みに置けぬと罵しられる。それ程の事なくても、主從互助の關係が自づと成立つて居り、相ひ互に劬はるべきものとされた。奉公人に鏡山の芝居を觀せる事になつて

居つたのも、之を奬勵するが爲めである。今でも奉公人中隨分主人の爲めに盡くすのがある。別段敎へられたでなく、性分により、境遇によるのである。時々何十年勤續として表賞したりするのは、其一部分に屬す。

(二)

けれども之れ社會が階級的に固定の形を呈する間の事であつて、進歩發達とか何とか、動搖の烈しくては、封建時代のやうな譯に行かぬ。進歩發達する社會は、例外を除いて適者生存の實を具へ、他の階級を以て固定するものに勝つ事になる。歐米は階級の固定を破つて今日の力を得て居る。尙ほ十分に階級を破らず、舊階級を破り、新階級を作るの跡あれど、東洋に比して階級的奉仕を減じて居る。印度の如き、今も階級を以て固つて居る。

階級が破れて、個々人々離れ離れになるかと云へば、さうでなく、矢張社會を形造り、社會の一員として存在する。曾て個人又は階級に對して奉仕したのは、變じて社會に奉仕しようとする事になる。前には階級に奉仕するのが社會に奉仕するのであり、後には階級を待たず直ちに社會に奉仕しようとする。日本で各藩に主從の關係を維持したのが、明治維新後悉く朝廷に仕へるやうになつたのに類する。或る形に於て奉仕するのは、つまり社會奉仕の手段であつて、詰まる所、各人の屬する社會に奉仕する事になる。

而して社會に奉仕するのは、強ち各人の幸福を求めての事でなけれど、多數の上で最も幸福を得るに近い。社會的關係で損する事あるとし、全く之を離れては更に損する事が多い。社會に奉仕するのは、世界人類に奉仕するの道行きであつて、世界の廣きに過ぎる間、或る社會に閉ぢ籠もり、主として之に奉仕する、若し社會を形造る者が悉く奉仕の任を果すならば、眞に太平の世となるのである。常に不平不滿があり、動搖の絶えぬのは、奉仕の任を果さず、寧ろ之を知らぬ者の多いのに依る。人々必ずしも奉仕を意識せねばあらぬと限らず、無意識でも其任を果たしさへすれば可いのであるが、比較的力ありと知れる者が、其任を果さぬ嫌があり、之れに對して何とかせねばならぬと云ふ事になる。既に封建制度の壞れ、之れに關聯した權力爭奪が一應安定した後、經濟的に爭奪が起り、動もすれば猛烈なる變動が起るかに氣遣はれる。若し資本家及び勞働者ともに社會奉仕の任を盡くさば、何等事變のあるべきでない。意識的に其任を盡くすに及ばず、無意識的に盡くしさへすれば、それでかなり變動を防ぐ事が出來る。今日頻りに動搖するのは、

奉仕を念としつゝ、之を誤解するに出でゝ居る。温情主義は双方に望むに、相互に奉仕すべきを以てするであらう。資本家が勞働者の爲めに圖り、勞働者が資本家の爲めに圖かれば、餘計な爭ひをするに及ばず、少くともそれで何れだけか爭ひを和らげ得ると考へる。

（三）

然し之れ畢竟するに、階級に對する奉仕に外ならぬ。社會より見て奉仕にならぬ事がある。社會は個々人々の各能力を伸ばし、物質的及び精神的に發達し向上するのを望む。而して能率に應じて相當の報酬を與へる。遠き將來には之れ亦變じ、或は報酬の事が全く消滅するに至らうが、それまでは能率に應ずる報酬を與へようとする。十分に比例を保つのは困難であるとし、成るべく之を十分にするに努める。

所で種々の階級が之を妨げ、無能が多く得、有能が少しく得るのが珍らしくない。資本家といふ者が特別に存在すべきであるか何うか。存在すべきであれば、今日の狀態を改むべきでないか。今は一度び得た財産が永遠に傳はり、子孫が寢て居つて資本家の地位に立つべき譯である。今は實際株主が力あつて、千株は百株に十倍し、百株は十株に十倍するの權力がある。大株主は總會で大いなる勢力を伸ばす。而して其大株主か事業上に爲す所は、大株主といふだけの事、他に殆ど何も爲ず、或は何も知らず、昔の大名が何も爲ずに領土を我物顔して居つたに異ならず、資本は事業に必要であるが、才幹及び努力よりも資本の方で多く報酬を得るは考ふべき所とする。無能で何も爲ず、單に資本家といふを以て、勞働者の十倍百倍千倍の報酬を得る事、果して當然であるか。勞働の意義曖昧、暫く經營者を勞働者の外に置けば、經營の能率を以つて勞働者より多く報酬を得るは可い。實に有能の經營者は普通勞働者の十百倍する能率を顯はす事があり、それだけの報酬を得て然るべきを見る。然し單に資本家として寢ながら多く得る所あるは、社會に何の奉仕する所あるか。資本を以て奉仕するといふであらうが、父祖傳來の資本ならば、父祖が奉仕するのであり、現在の當主の與り知るべき所でない。且つ資本は永遠に個人の所有に歸するといふの合理なるを證明し得るか。資本を以て奉仕するのは、寢ながら奉仕すると變りは無い。社會奉仕は斯く容易なものと云へまい。

（四）

之れに比ぺれば勞働者の日々働く所、直接に事業と關係がある。勞働者が漸次勢力を得來つたのは、或る一部で考へる如く、社會が墮落したのでなく、社會に奉仕するだけの待遇を得るに至るのである。若し勞働者が今一層能率を高めたならば、それだけ社會に奉仕する事になり、社會に於ても之れに相當する位置を與へずに措かぬ。社會に於ける幾多の事業は、要するに社會の事業であり、社會は之に依つて益を得る。大工でも左官でも、社會に必要なる業務であり、之に從事するのは奉仕である。奉仕であるからそれで可いと云へず、能率の低いのよりも、其高いのは奉仕する事が多い。時間を制限するとか、休日を定むるとかいふのは、勞働者が怠ける爲めでなく、休息を以て力を養ひ、時間を得て向上に從しようといふのである。勤勞のみが人の爲すべき事でなく、遊樂も同じく爲すべき事であり、爲すべきを爲すので能率が高まる。勤勞時間を減じ、不亂(ふしだら)次に暮しては、社會奉仕を怠る譯になる。斯くては社會よりそれ相當の惡待遇を蒙るを免かれぬ。勞働者が力を得べくして力を得ないのは、社會奉仕の足らぬのに由る所少いとせぬ。

（五）

資本家は今日までの所、尙ほ今後當分の內、自ら働く能率よりも遙かに多くの收入を得る事になつて居る。資本に對するの報酬であるとし、其報酬の當を得ぬ事は、法律で制裁されず、自然に制裁されたりする。無能で多く收入を得る者は、收入程の幸福を得る事が難かしい。大會社の重役でボーナスが勞働者の萬倍になり、或は其以上になるのは、金の使ひ途に苦しみ、異樣な事を爲す。成金根性と云はれるのは、消化し得るよりも多く食ひ、腹內で腐敗するのを指す。十八世紀の末より十九世紀の初めに懸け、英國にジョン・アペルネシイといふ著名の醫者が居つた。隨分變り者で、人を怒らす事を憚らぬ。然し知つた者は皆其の親切心に富んで居るのを諒とした。或る富豪の病氣で惱むのを診察して曰ふやう、「それを治すのは譯も無い。一日六片(ペンス)で生活し、それだけ儲けるに努めれば可い」と。當時社會問題が未だ起らず、單に治療上から云ふたのであるが、實際此類の事は稀でない。富豪は富豪たる所以を以て身體を害ね、又精神を害ね、病氣でないのに病氣になる。日本でも舊幕時代高祿の徒は皆常藥といふを服み、醫者の得分になつて居つた。病氣も無いのに藥を服むのである。廢藩置縣と共に常藥が無くなり、醫者の得分が減じた。服まねば服まぬで何の差支へが無く、實は服まぬ方が可いのである。祿が多くて何か偉らさうに使かはうとし、病氣の無いのに藥をまで服んだのである。他の事

も之に進する。維新の際多くの武士が役に立たなかつたのは、多年祿を食み、無能の徒に化したのである。財産を作り、自ら安全にし、子孫を安全にしようとするのは分つて居るが、懶ながら收入を得、世間で働いて居る者よりも裕福に暮らすのは、何處ぞに缺陷がある。病氣になるのがあり、夭死にするのがある。貧乏人は榮養不良で衰弱するが、富者は榮養過剩又は無用の食料で身を損ふ。貧すれば鈍するが、富んで愚になるのもある。能率相當に收入を得れば事の間違ふ筈なく、不相當に收入あるので間違が起る。社會に奉仕するの多寡で自然に定まつた所がある。奉仕する事少く、收入を得る事多くては、直ぐに制裁を蒙らなくても、何處かで蒙る。奢る者久らずといふのは、其事實が知れ、居るのである。奉仕する事少く、收入を得る事多ければ自づと奢り、奢らなくても奢ると同樣の事を爲す。富豪が從來如何いふ狀態であるかを見れば、往々傲さを減ずる。安全なのがあれど、不安全なのも少くない。能率相當に暮して居る方が、何れ程安全か知れぬ。土地資本の知有に制限を加へようとするのは、奉仕を怠つて奢る者を警めるのである。さういふ者の多い社會は、永く榮える事が出來ぬ。

資本家は勞働者に多くの便宜を與へるが故、勞働者は畏まつて其の云ふ所に從ふが可いと云ふのは、當面の緩和策としては宜い。然し社會奉仕の點より見、未だ盡くさゞるものがある。斯くて社會の平穩を求めても、多くの効能が無い。人は持つて生れた能力を働かすだけの位置を社會に得べきもの、之れに外れたのは間違つて居ると見ねばならぬ。單に資本を擁し、それで社會に奉仕して居るぞと思ふのは、考へを改めねばならぬ。奉仕するのは筋肉的又は精神的の努力である。先祖傳來の寶があつたとて、それで何の奉仕になるか。其寶を働かすの努力が奉仕になる。持つて居るだけで社會に好い地位を占めるならば、其社會は何處ぞで禍を受ける。社會奉仕といふ事は意識しなくても可いが、社會に於ける事實の爭ふべからざるものを認める事を忘れてはならぬ。

(六)

社會奉仕の觀念の缺如せる我國資產家階級

法學博士　堀江歸一

富豪の生ずる所以

日本も流石に明治維新以來商工業の發達を促す所の政策が實行された爲めに、最近數十年間殊に日清戰後、日露戰後若しくは今度の歐洲戰後に於て、富の增殖したことは驚く可きものである。而して從來我國に於ては、生產政策の實行された割合に分配政策は甚だしく閑却されて居つた結果として、斯く增殖した富は廣く社會の諸階級に公正に分配されず、多く少數の支配者階級に專有され、斯くて此階級の內に、暴富者を生ずることゝ爲つた。或る新聞が先年日本に於て、財產五十萬圓以上を所有する財產家を調査し、其數が何萬人に上ると云ふやうな事實を發表したことがあるが、近年の狀態で進んで行つたならば、此程度の財產家は多々益々增加するに相違なく、此次に調査するならば、百萬圓位を最低としなければなるまい。

富豪資產家の一國に存在することは、社會的に見て、必要であるかと云へば、私は其必要を認める點に於て、必ずしも人後に落つる者ではない。富豪あつて、自己の手元に數千萬數億圓の財產を集中し、蓄積して居ることは、要するに一國に於て、資本の運用を組織的ならしめるを得る所以であつて、斯る富豪資產家の階級あればこそ、現代の國家は彼等に依賴して、大なる資力を集めることも出來るし、又彼等自身の營利的觀念は株式會社の下に、彼等の資力を集め、斯く官民双方の側に於て、大規模の事業を成立させ得るのである。富豪なるものが一の階級として、社會に於て重んぜられる所以若しくは重んぜられなければならぬ所以は自ら一般に諒解されて居る次第であるが、同時に吾々は今日の富豪なるものが富を得たる手段や、之を維持增殖しつゝある方法の如何を考へなければならぬ。單に富豪が共有する資力を以て、大規模の事業を起した、其有する資力を

以て、政府の計畫を助けたと云へば、如何にも其所業は立派であつて、又一般社會を利すると共に、富豪自身の利益をも擧げたもの丶如くに思はれるが、大規模の事業と云ふことの一面には必ず獨占業者の横暴が伴ひ、無數の小規模事業家を壓倒し來つた歴史が想像され、又大規模事業に於ける權勢を擁して、無力なる勞働者階級を壓迫しつ丶ある事實が聯想されるのである。之を日本現在の事實に徴して、攻究したならば、如何であるか。最近兩三年間經濟社會は非常の好景氣であつた。物價の騰貴は隨分中産以下の階級に對して、生活上の苦痛を加へて居るが、同時に諸種の營利會社に大なる利益を與へ、是等會社の內には五割六割は愚か十割二十割の配當を株主に與へたものもあり、又此數年間に得た利益金を以て、會社內部の資産狀態を整理し、改善した結果、今後多年間に亘つて、確實に高率の配當金を株主に與へる保證の付いたと揚言して居るものも亦少なくない。而して是等會社の株主殊に大株主として、斯る利益金の配分に與つた者は何人であるかと云へば、申すまでもなく富豪資産家の階級であつて、彼等は要するに物資價格の騰貴に依て、消費者階級を苦しめて、依て以て自家の利益を搾り出して居るに外ならぬ。固より彼等も消費者階級の一員として、或は木綿織物を購ひ、又砂糖を買ふ場合に、是等物資の價格の騰貴して居る以上は、相當の負擔に當るに相違ないが、彼等は此負擔に數百倍し、數千倍する利益に與つて居り、一方に紡績會社とか、砂糖會社とか、其他同一種類の會社の株式を所有しない者は自ら物價騰貴に伴ふ負擔に苦しめられながら、之に酬ゆる何ものをも得ることが出來ず、寧ろ資産家階級に利益を與へる爲めに、生活難と鬪ひ來つた趣があるのである。即ち今日の社會に於て、富に接近して居る者、富を運用して居る者は然らざる者を壓倒しつ丶、自家の利益を謀る姿であつて、前者は後者の膏血を搾り、骨肉を削つて、自家の富を大ならしめざれば已まない。此事實は最近數年間我國に於て、富豪資産家の階級が會社事業を通じて、莫大な利益を收め、他の一方に中産以下の階級が毫も此利益に浴するを得ず、却て物價騰貴、生活費膨脹の爲めに苦んだことを顧みて、之を知ることが出來るのであつて、畢竟今日の富豪資産家が唯一の誇りとする富なるものは彼等と同一の社會に棲息しつ丶ある多數同胞の血であり肉であるのである。

六　富豪は國家に有用なるか

富豪資産家の階級が其富力を以て、國家の用を爲したと云へば、事は甚だ立派に聞へるが、事實を檢すれば要するに彼等が

政府の爲めに、物資なり、勤勞なりを納入して、其間に手數料を貪ることに外ならぬ。今日何れの國に於ても、財政の規模の膨脹した結果として、政府が物資や勤勞を需要する場合には、其數量は甚だしく多きに上り、殊に物資の內には、外國から輸入しなければならぬものもあるので、資力の乏しい者では、之を買入れて、政府に納入する職務を果すことが出來ぬ。斯くて御用商人と云ふ甚だ聞への宜しくない職務でありながら日本では國內有數の富豪が之に當ることゝ爲つて居る、現に先年日本の代表的富豪三井家の經營する三井物産會社が軍艦註文の件に關して、海軍の要路に贈賄したと云ふ件で、同會社の重役に刑事上の犯罪者を出したことは、吾人の記憶に存して居る所である。此他刑事上の犯罪として、公に檢擧されないだけであつて、事實は檢擧に値する事件が幾多の御用商人に依て、釀成されて居ると云ふ風說は常に吾々の耳にする所である。而して我國一流の大富豪が一方に御用商人の仕事を爲しつゝあることを考へると、富豪資産家の擁して居る富の內には、隨分卑む可く、憎む可き所業の結晶したものゝあることを否定し得ないのである。或る富豪で男爵を授けられた光榮ある人を世間では石塊の罐詰男爵など〻呼んで居るやうであるが、斯る惡名に値する富豪は必ずしも一人の罐詰男爵のみには止まるまい。

國家が戰時の急に迫つた場合又は平時でも財政上に必要の起つたときに、何千萬、何億圓の公債を募集すると爲れば、近頃の慣例では政府は必ず國內有力なる銀行の代表者を召集して、一のシンヂケートを組織させ、公債を引受けさせ、一方に銀行は必ず政府から若干の手數料殊に餘り安からぬ手數料を貰うことゝ爲るが、然らば銀行は何に依て引受けた公債に應募するかと云へば、結局平生取引する預金者の財力に依賴するのであつて、詰り銀行は多數の預金者を擁すると云ふ點で、强味を發揮するものに外ならない。而して今度の歐洲戰爭に於ける實際に徵すると、軍事公債に對して應募した者の間には、平生國家が輕く見て居つた無資産者階級に屬する人々が澤山あり、國家亦斯る人々に軍事費として撒布された資金を公債の形で吸收することの必要から、公債の額面を小さくしたり、又は郵便局を通じて、應募を求めたりする手段を取つて、着々成功を收めたのである。此事實の如きは、從來富豪の力に待たなければ、公債の募集が出來ないと云ふ信念を裏切つたものであつて、富豪萬能の迷信を打破する一の材料である

勞資兩者の鬪爭關係

勞働問題は近頃我國に於て、隨分切迫し來つた模樣である。

政府は今日に至つても、尚ほ未練氣を出して、色々と勞働者の團體的運動を抑制したり、又之を未然に防止したりしやうとして居るが、結局勞資兩者の爭は我國に於ても、階級的鬪爭の色彩を帶びなければ已まないものと想像される。斯る形勢は早晩我國に現出す可きものであつたらうが、其現出を促したのは、資本家階級の勞働者階級に對する苛虐なる態度の著しかつたことに外ならぬ。工場法の十數年前に制定せられんとした時に、之に反對したのは誰れであつたか、現行工場法の制定せらるゝ時にも、色々の難癖を付けて、骨拔き同樣のものにしたのは誰れであつたか、其工場法の實施期限をも後日に延長させる方針を取つたのは、誰れであつたか、八時間勞働制の實行や、夜業の廢止に對して、極力反對を試み、我國をして第一回勞働大會に於て、彼の如き醜劣なる態度を取らしめたのは、誰れであつたか、勞働組合法の制定にも、色々の妨害を加へて、勞働者の團結權を蹂躙しやうとして憚らないのは、誰れであるか。斯の如く數へ立てゝ來たならば、我國に於て、富豪と稱し、資産家と稱する者が致富の目的を達する爲めには、何事をも犧牲に供して、憚らない、何者の利害をも蹂躙し去つて、顧みないと云ふ資本主義的精神に充ちて居ることの一斑を知るに難しとしない。玆に資本家中、温情主義を標榜する者もある。詰り温情主義と云ふのは、資本家が自己の使役する勞働者に對して、家長的注意を以て、憐愍を加へやうとするものであつて、勞働者を無慈悲に酷遇しやうとするものに比較すれば、勝れる所はあるが、我々は之に對して何等の社會的價値をも許すを得ないのである。我國の資産家階級が右の如き精神を逞うして、資産の運用、事業の經營に努力して居ることは、一面から見れば、無産者階級に對して戰を挑むものと認められる。然も我國の無産者階級は必ずしも之に應じて、資産家階級に對抗するだけの階級的精神を發揮するものとも思はれず、寧ろ資産家に盲從して、其餘惠に浴せんとする者が從來多かつたし、今日でも其風が殘つて居る。是れは封建時代を通じて、服從、規律、犧牲を主とする道德律の下に、國民を訓練し陶冶した餘燼の未だ滅しなかつた結果であらうが、斯る狀態は決して何時までも存續す可きものではない。今や我國に於ても、種々の階級に屬する人々は其階級に共通する利害の下に團結しやうとして居る。勞働者の間に勞働組合が組織され、俸給衣食者の間に、一種の同盟が組織され、或は勞働組合は其範圍を擴張して、俸給衣食者をも自己の組合中に網羅することゝ爲るかも知れず、更に消費者の利益を發揚する爲めに、完全なる消費組合の組織される機運も最近兩三年間に於ける經濟的變動殊に生活難の加重に依て、餘程の刺戟を受け

來つたものと考へられる。斯る階級的鬪爭少なくとも階級的對抗の勢の顯著なるに至つたことは、今日の我國に於て、注目す可き現象であつて、而して此事たる、資産家階級が一ツの階級として、營利に汲々とし、爲めに他の階級の利益を顧みないことの結果として、醸成されたものと認めなければならぬ。

社會的奉仕の觀念

斯る社會階級間に於ける鬪爭に對して、之を緩和するものは、資産家階級の社會奉仕を主とする精神並に此精神に基づいて、行はるゝ種々の事業である。此點に就て、我國と外國殊に英米兩國とを比較するに、資産家階級の社會奉仕を重んずる觀念は外國に盛んであるに反し、我國に於て殆ど擧ぐるに足らぬことを遺憾とせざるを得ない、何を以て社會奉仕の觀念とするかと云へば、人が自己の利益に屬する所のもの、自己の所有に歸したものを割いて、社會公共の用に供すること、是れが資産家階級の社會奉仕である。米國で富豪資産家が私財を投じて、學校病院教會等の非營利事業を起したり、又は既設の是等事業を助成する爲めに、寄附金をしたり、勞働者住宅の改善、貧民兒童の教育、貧民全體の保健等に就て、資産家が莫大の資金を支出したり、宗教上の團體を助けて、海外未開の地に教化事業や、救濟事業を企てて、自國文明の恩澤を遠く異境の民に及ばしたりするのは、著明の事實であつて、其規模の雄大なるに對しては、何人も感服せざるを得ないであらう。一方に我國の有樣は如何であるか、成る程先年三井家で海軍收賄事件に對する詫心か何かで、免囚保護事業に若干の寄附金をしたことはあり、慈善病院も設立したやうであり、大倉氏は多年蒐集した美術館を東京市に寄附したし、岩崎家でも何か公共事業を遣つて居るやうであり、此他赤十字社とか、濟生會とか、其他の團體で、資産家階級の援助の下に、成立して居るものもある。随て我國の資産家階級に社會奉仕の觀念が全然缺如して居るものとは斷定する譯には行かないが、私は左の數點に於て、彼等階級に此觀念の乏しいことの證據にしたいと思ふ。

内外の比較

（一）社會奉仕の觀念で存在す可き公共事業が我國に於ては、資産家階級の資力に急劇な膨脹を來した割合に、發達して居らないこと。

資産家階級の資力がドノ位増進して、一方に公共事業がドノ位發展したか、兩者の割合を比較することは甚だ困難であるが、兎に角我國の資産家階級は一の階級として、人目を惹くだ

けのものであり、又人の目に餘る所業をもするに拘はらず、彼等の創設した、又設立を援助した公共事業の利益の及ぶ所は甚だ狹い。即ち彼等の設立し、援助した公共事業は一の標本に類する規模に限られて居るのであつて、資産家階級の力を致す可き部面は多々あるとしなければならぬ。

(二)我國資産家階級の寄附行爲は世間に對する義理合に過ぎぬこと。

外國で資産家階級が或る公共事業を設立するとか、又は既設の事業を援助するとか云ふやうな場合には、必ず寄附者自身に一個の計畫があり、又確乎たる目的がある。即ち資産家自身の趣味性から云つて、斯う云ふ研究を盛にしたいと考へた場合には、其研究資金を大學に寄附するとか、或は自ら一個の研究所を起すと云ふやうなことは、屢々實際に見る所であり、又自分の多年經驗した所で、斯う云ふ方面の施設が缺けて居つて、社會組織に故障を及ぼして已まないと考へた場合に、之を補充するだけの設備をすると云ふこともあり、又自分の主張し、捐資して設立した仕事であれば、終生其事業を盛り立てることに骨を折ると云ふやうな風に、公共事業と資産家階級との間に、パーソナルの關係が存在して居る。然るに日本で資産家階級が公共事業に寄附金をするのは、果して斯う云ふ趣味若しくは信念に基いて行はれるのであるかと云へば、多くの場合を通じて、さうではなく、寧ろ資産家の間に於ける地位權力の釣合に依るものであることは、掩ふ可からざる事實である。相當の目星しい事業の寄附金であると、三井岩崎の兩家が必ず同額の寄附金をすると云ふことや、實業界の顔役とも云ふ可き澁澤男が募集委員長格に納まつて、自分の權力の及ぶ所に向つて、勸誘し、勸誘を受けた方でも、何年前かに澁澤男の世話に爲つた恩報じに同男の勸誘だから、寄附金をしやうと云ふやうな事實は我々の常に耳にする所であつて、斯る種類の寄附金に至つては、果して社會奉仕であるか、個人奉仕であるか、其意の存する所を知るに苦むのである。

(三)我國では世間に對する申譯けや、世人の惡感を和げる爲めに行はれる寄附行爲が甚だ盛んであつて、人の本心から出たものゝ甚だ少ないこと。

資産家階級は其存在する上に於て、又資産を增殖する上に於て、不知不識の間に、社會に害惡を及ぼし、又他の個人に苦痛を加へた場合が少なくない。即ち彼等は經濟社會の變動に乘じて、物資の買占め、賣惜みをし益々此變動を大ならしめる間に、自己の利益を謀つて居ることは明白の事實であり、又資産家が事業を經營する場合に、資本の大なる點に於て、經營者に

人才を網羅した點に於て、設備の優秀なる點に於て、他を凌駕する見込が付けば、着々競爭を試みて、幾多の小事業家を壓倒し、破産の悲運に陷らせたり、又蹈倒し同様の值段で、買潰す手段に出づることも、敢て稀らしいとしない。更に資産家が自分の利益を增加するに急なる餘り、其事業で雇傭する勞働者を虐遇するが如きは、毎度の沙汰である。工場法以下各種の勞働者保護立法は此資本家の暴虐なる態度に對抗する爲めに、生れ出でたものとも解される。斯く觀察したならば、資本家階級の所有する大なる資産の如きは、消費者、小規模事業家、勞働者の骨を枯らし、血を絞り、肉を割いて、造り上げたものであつて、彼等に對し、又彼等の資産に對して、民衆の怨恨の深く刻み付けられるのも已むを得ない。此頃の入梅季節に富豪が大道狭しと自動車を走らせ、泥水を行人に被らせて顧みない傍若無人の態度に對して、行人は切齒して居るが、斯の如きは一時の發作に過ぎない。省察に缺けたる人々は時の經過すると共に、斯る些細な出來事を忘れるであらう。然しながら日本國民が今少し資産家の財を蓄へ、富を積んだ所以に考へを及ぼし、彼等が富を吸收した爲めに、自分達は之に遠ざからざるを得なくなつたことに注意するやうに爲つたならば、有産者對無産者階級間の感情は如何に變ずるであらうか。米國の富豪が公共事業に資産を投ずるのは、之に依て無産者階級の感情を緩和すると云ふ機密が伏在して居るのであつて、富豪の寄附金は彼等の贖罪金であると云ふ說の行はれて居る所以である。

社會奉仕は資産家の贖罪

斯く觀察すると、資産家の公共事業に對する捐資寄附は毫も社會奉仕を以て見る可きの價はなく、寧ろ自家防衛の一手段であつて、恰も門前に請願巡査を置くのと異ならない。往年我國で米騷動の起つた時に、富豪の內で慌てゝ公共事業や、貧民救助資金に寄附金をした者があつたが、斯の如きは全く人心緩和なり、贖罪なりの目的に出でたものであつて、斯る目的で寄附金をしなければならぬものとしたならば、當初から暴利を貪つて消費者を苦しめたり、小事業家を潰したり、勞働者を泣かせたり、反社會的非社會的行爲を敢てすることを愼しむ可き譯である。從來社會生活を蹂躪することばかり心掛けて居つた者が一口か二口かの寄附金をして、一廉の社會奉仕をしたやうに振舞うのは、吾々の片腹痛き感に堪へぬ所である。

今日我國の富豪資産家階級に屬する人々の內で、自分の蓄財致富の道を赤裸々に天下に告白して、恥づる所なき人は幾何を數へ得るであらうか。實業雜誌などには、何某富豪は斯の如き努

力の下に、今日の産を成したとか、何某財産家は斯の如き勤勉を以て、富豪の列に入るを得たとか云ふやうな成功談が吹聽されて居り、是等を讀むと、某々氏等は誠に模範的人物を以て、許さなければならぬやうであるが、果して日本の富豪は自分の勤勉努力ばかりで、今日の産を收め得たであらうか。富豪の來歴に就て、一々仔細に調査したならば、如何なる人にも陰影なきを得ない。株式商品等の投機取引で、一方が儲けて、他方に損をさせた位は、罪の無い方であるが、或は政府の大官權臣と結託して、保護金を貪つたとか、不當の代價で、官用品の拂下を受けたとか、怪し氣な會社を創立して、着實なる資産家の金を捲き上げたとか、必要品の買占を行つて、市場に波瀾を捲き起したとか云ふやうな非難す可き事實を經驗し來つたことは、如何なる富豪資産家の傳記にも付き纏ふことを避け難い。さうすれば今日の如き成功を博した際に、彼等が贖罪の意味で、社會奉仕に勉めなければならぬとは當然であつて、米國に於けるよりも、此事は我國に於て特に必要であるが如くに思はれる。

國家の强制する社會奉仕

資産家階級が社會奉仕の觀念を持ち、又之に依て社會階級間の利害を調和するを得たならば社會組織を堅實にし、又之を安全にするの點に於て、申分ない次第であるが、斯の如きは遂に望まれない所であつて、時に社會奉仕を爲す者があつたとしても利己的觀念に出で、自家防衛的必要に基くものであるとすれば、決して其大なることを望み得られない。現に資産家階級の社會奉仕的觀念が比較的强いと稱される米國に於て、公共事業の經營なり、慈善救濟事業の計畫なり、資産家の社會奉仕に依賴されて居る譯のものでない。現に米國ハーヴアード大學で、教授の待遇を改良する爲めに、何百萬弗かの資金を要するに就て、之を募集して居るが、國内だけの應募で足りないかして、頻に外國在住の關係者にも勸誘狀を發して居る。私の如き十八九年前に一年間同大學に籍を置いた緣故があるので、切に勸誘狀を貰つて居るが、貧しい日本から富んだ米國に寄附金をするなどは、隨分滑稽の次第であつて、若し米國に社會奉仕の念の强いものがあつたならば、ハーヴアード大學と雖も、外國にまで寄附金募集をしないでも、國内だけで、濟んだと思はれる。隨て近年社會の進步するに隨ひ、同國でも從來のやうに富豪の社會奉仕ばかりを當てにせず、必要な事業である以上は、國家自身の經營に待つ所のもの少なしとしないのである。然らば日本のやうな國で、社會奉仕の觀念の乏しいことは、敢て異とするに足らない。國家が資産家階級に爵位を與へ、勳章を授け

て、彼等の奉仕的觀念を刺戟するとも一策のやうに思はれる。十年二十年後に爵位を授けられることを夢に見て、機會ある毎に、公共事業の發達に力を致す者があれば、斯る者のなき場合に比較して、公共事業の發達するだけの利益は生ずるであらうが、一方から考へれば、斯の如くして爵位や勳章が一般の國民に依て、貨幣の數量で評價され、貨幣あれば、國家の榮典を購ひ得られるゝと云ふやうな卑賤なる考の生ずる弊害のあることを認めなければならぬ。故に私は將來の社會生活を完成するの點から見て、特に資産家階級の社會的奉仕の觀念に依賴することを必要としない、隨て從來の日本に行はれたやうに、爵位や勳章で彼等に此觀念を盛ならしめることを必要ともしない、又日本の資産家階級に此觀念が薄弱であるからと云つて、特に之を嘆じもしない。我々の理想とする如くに、國家の政治が改良されたならば、今日一部の人々が資産家階級に期待して居る社會奉仕と云ふことの如き、之を資産家に望むまでもなく、國家に依て充分に、又立派に實現されるのである。國家が國民の爲めに最大限の生産を行ひ、國民の爲めに公正なる分配を行つたならば、社會奉仕の如き、殆ど其必要を存しない。言葉を換へて之を言へば、社會一部の階級をして他の一部の階級に屬する者の爲めに、社會奉仕の觀念を以て臨ませるが如きは、事の上乘を得たものではない。資産家が社會奉仕を必要とし、此必要に應ずる處置をするならば、寧ろ之に先だつて、社會奉仕としなければならぬやうな社會的狀態を出現させないことに意を致すのが急務である。

或る營利事業を經營する者が其蓄積した財産、其獲得する所得の一部分を割いて、公共事業を起したとしたならば、世人は其人を以て、社會奉仕の觀念に富んだとして、推奬することを辭さないであらう。然し其人は如何なる手段で財産を蓄積し、又所得を獲得したのであるか。其手段の內に、苟も非社會的反社會的のものがあるとしたならば、如何であるか。日本の實際に就て、屢々見る所であるが如く、事業家が暴利を貪つて、多數の國民を苦しめたとか、勞働者を虐遇して、彼等の生存を危うして居るとか、兎に角斯る手段で致富の目的を達したものであるとすれば、彼の如きは實に社會奉仕の求むる所に違背する行動を敢てしたものである。後日社會公共を利する事業を起して、社會奉仕の實を示すのは殊勝のやうであるが、我々をして言はしむれば、後日に斯る所業をするよりも、往時に反社會的非社會的所業を爲すことを愼しんだ方が却て社會全體の利益に適合する所以であつたらうと思はれる。「目的は手段を正當とする」と云ふ西洋の格言は屢々我國に於て誤まり用ひられる恐れ

がある。資産家が蓄財をする目的の爲めには、如何なる手段をも擇ばない、苟も其目的を達する爲ならば、如何なる事も自分に許されて居るやうな考で進んで行き、其手段の餘りに酷く、社會にも非難のあるのに氣が付くと、遽に思ひ立つたやうに、社會奉仕を云々して、申譯けばかりの事をする。石川五右衛門の神信心に類する嫌はなからうか、此位の社會奉仕でも我國に於ては奇特の事として稱讃されて居るのである。

今日の經濟組織で、私有財産制度を認め、又私人をして自己の資本を運用するに、殆ど絶對の自由を有せしめ、又資本の合同に就ても自由を與へて置く以上は、彼等が經濟上に大なる勢力を占めて、横暴の處置に出るのが當然であり、斯くて社會に他の救助を必要とする階級を作り出して、其後に之を救濟し、而して其れを救濟することを社會奉仕と稱して、其處に何の價値があるであらうか。私は國家が今日以上に經濟社會を統制して、富の分配を正しくし、生産を適當の狀態に行はせるのを必要とする。是れが眞正の意味に於ける社會奉仕の要を得たものと稱さなければならぬ。政治の當局者は我國の現狀に對して、何と考へて居るか知らないが、我國の如く資産者階級に社會奉仕の觀念が乏しく、國家亦之を勵行しないとしたならば、資産家階級と無産者階級との鬪爭は早晩發生せざるを得ない。私が國家の爲めに深憂とする所は實に此一點に存するのである。

ギルヅマンと社會奉仕

室伏高信

一

ギルド社會主義は社會主義である。それは社會主義の反對者でもないし、社會主義運動に對する挑戰として生れたのでもないし、たゞ社會主義に對する新解釋である――コオルはこういふ意味のことを近頃フェービアン協會での講演の冒頭で述べて

ゐる。(Cole, Guild Socialism, 1920) このことは馬鹿々々しほゐ分りきつたことのようであるが、この分りきつたことがその實ギルド社會主義の本質を理解するうへに重要な點でもあり、またこの分りきつたことが屢々誤解または曲解されてゐるのである。例へばバアナアド・ショウのような相當な地位にある人までがギルド社會主義は社會主義ではなくしてたゞギルドであるに過ぎないといつてゐることもあるし、またある人達はギルド社會主義をサンヂカリズムの一種であるかのごとくにも考へてゐるのであるから、ギルド社會主義は先づ社會主義であるといふことを說明することが必要なことになつてくる次第である。そしてギルド社會主義と社會奉仕との關係を知るうへにこの點が特に必要なことであると思はれる。

二

ギルド社會主義と社會奉仕との關係を知るためにはギルド社會主義とサンヂカリズムとを比較することが便利である。サンヂカリズムはある點において集產主義の缺點を補つてゐることは事實である。彼れはアリストートル以來の道德觀をもつて消費者道德であると非難する。そしてこの所謂消費者道德に對して生產者の倫理を創造しようとするものである。彼れにおいての新社會とはこの生產者的倫理によつて規律される社會であるといふとができるであらう。サンヂカリズムに潑剌たる元氣を與へるものはこの生產者の倫理である。またサンヂカリズムをして現代社會改造期において重要な意義とそして威力とを保有せしめるものはこの生產者的倫理の創造である。總同盟罷工のごとき、或は一切の暴力が是認せられてゐるのはこの生產者倫理觀においてゞある。それは頹廢しきつてゐる消費者的道德の世界を改造するためには、最も力ある感激の泉である。しかし生產者的倫理の創造者としてのサンヂカリズムはこの點に特質をもつてゐるとともにまたこの點に缺點をもつてゐることも否むとはできない。生產者の倫理は、やはり生產者の倫理である。消費者の倫理がたゞ消費者の倫理であるごとくに生產者の倫理もまたたゞ生產者の倫理である。若し人間の生活の一切が生產者としてのものであるとすれば生產者の倫理であることは人間そのものゝ倫理であるといふことができるであらうが、人間生活を單なる生產者として觀察することは、それが現代においてのように消費者萬能の社會組織においては重要な反對毒でありうるにしてもわれ〳〵が現代社會に不滿足であることはたゞ消費者萬能の世界であるからといふことではなくして全體としての社會のうへに倫理の基礎の在存しないことである。從つて消費者

的倫理に代ゆるに生産者的倫理をもつてすることであつては、それは依然として人間そのものの倫理であることはできない。かくのごとき偏狭な倫理は決して新社會の基礎となることのできるものではない。新社會の倫理となることができるものは人間を單なる生産者として觀察するような局部的偏見から成立すべきものではない。それは人間として、併に全體としての社會のうへに立脚すべきものでなくてはならない。ギルヅマンはサンヂカリズムに對してこうした立場をとつてゐるものである。

三

サンヂカリズムは生産者的倫理の萬能を信じてゐるために、その社會組織または經濟組織もまた生産者萬能のそれである。その結果はサンヂカリズムに對してそれは依然として利潤のための生産の持續を防止すべき保障の存在しないものであると批評することができるであらう (Cole, Workers' Control in Industry, 1919) 既にサンヂカリズムが生産者萬能の組織であり、そして利潤のための生産を防止することのできる保障の存在してゐないものであるとすれば、サンヂカリズムにおいては生産者は被絞取者の地位から救濟されることができるにしても社會は被絞取者の地位から救濟されることにできない。それは勞働者によつての社會の絞取の制度である――サンヂカリズムに對してギルヅマンはかくのごとき批評の態度をとつてゐる(Cole, World of Labour, 1913)ギルヅマンはサンヂカリズムのかくのごとき態度に對して、全體としての社會に着目するの用意をもつてゐる。彼れにおいては生産の目的は利潤のためではなく、生産者自身のためではなくまた凡ての價値は勞働の結果ではない。從つて勞働の生産物は決して勞働者によつて獨占さるべきものではない (ibid.) 如何なる産業においても、サープラスが存在する場合にはそれはその産業勞働者のポケツトに入るべきものではなくして大藏大臣のポケツトに入るべきものである。即ち全體としての社會の收入に歸すべきものであるからである (Cole, Guild Socialism) かくしてギルヅマンは生産の社會化に反對するにかゝわらず生産物の社會化を主張するものである(Orage, Towards National Guilds)

四

ギルヅマンは集産主義者と同じく生産機關の公有を主張する。この生産機關の公有は、集産主義においてのように一切の社會的統制を意味するものではないにしても、また同時に一切の社會的統制を排斥する意味をもつてゐるものではない。若し

社會が生産機關について何等の統制權をも分與されてゐないとすれば、縱令生産機關が公有の名義を許されるにしてもそはたゞ名義だけの公有であつて實質において何等公有の意味は存在してゐない。ギルヅマンはこうした立場から生産手段は當然公有されべきものであるとなしてゐるとともにまた全體としての社會の産業統制をも承認してゐるものである。勿論ギルヅマンの原理の一つは勞働者によつての産業統制の思想であるがギルヅマンにおいてはその謂ふところの勞働者の産業統制とは決して絕對的のものではない。社會はその充分なる分前をもつてゐる。一例を擧げると、商品または價格のごとき全社會に利害關係るものは全體としての社會によつて決定さるべきものであるとするのである。卽ちギルヅマンが勞働者によつての産業統制權を要求するのは全經濟的過程に對してゞはなくしてたゞ生産過程及び生産と關連した分配の過程に對してだけである。それゆえにギルヅマンにおいての産業統制は社會的統制と生産者統制の二要素を包含してゐるものであり、またこの二要素は全く平等の地位に置かれてゐるものである(Cole, Guild Socialism)

五

ギルド社會主義は一方に社會的であり、他方に生産者的である。ギルヅマンは人間の生活が單なる生産者としての職分をもつてゐるものでなくしてまた社會的職分をもつてゐるとを承認するからである。この點は凡てのギルヅマンの一致するところである。卽ち如何なる事業が社會的統制のものとに置かるべきかの具體的の問題としてはギルヅマンの間に意見の不一致の存在することは勿論である。例へば最近にドグラスによつて起されたクレデイツト統制の問題 (Douglas, Economic Democracy, 1920) については、ドグラス、オレーヂの一派とホブソン・コオルの一派との間に意見の相違があり、盛んに論議の中心となつてゐるのであるが、人間の社會生活を社會的職分――市民的または消費者的、使用者的職分――と生産的職分とに分拆するの點においては、凡てのギルヅマンのみな一致することのできる點である。この職分の相違のうへに統制者の相違が存在する。ギルヅマンはこうした立場から一方に生産者の自由――産業的民主主義を主張するがそは生産者的職分の範圍においてゞある、また他方に社會的自由を主張するがそは社會的職分の範圍においてゞある。この範圍を超ゆることはギルヅマンの原理においては許さるることではない。またこの範圍を超ゆることはギルヅマンの原理の破産である。ギルヅマンの原理は職分的民主主義であるからである。そして職分的民主主義においての

み人によつて人を支配することーー奴隷制度を除きうるものであると信じてゐるのである。ギルヅマンはこうした立場から社會ーー『全體としての社會』(コムミユニテイ、ス、エンテイテイ)を考へてゐるものである。従つてギルヅマンはサンヂカリストに對して社會奉仕を主張するにしても、その社會奉仕とは決して集産主義においてのやうに絶對的のものではない。

六

集産主義においては社會は萬能である。社會は一切の個人に超越したそれ自身の生命をもつてゐるものであつて完全なる有機體である。この『社會的有機體の持續と完き健全』とがなくては何人も生活しまたは榮えることはできないものであつて、『社會的有機體の永續は個人の最高の目的である』こととなるのである(Webb, Socialism in England)また従つて人によつて人の支配されることは當然であつて人によつて人が支配されることを拒絶するものはロビンソン、クルウソウ島へでも移殖するのほかはないと論結されるのである(Webb, Socialism: True and False)ギルヅマンの考へてゐる社會はかくのごとき萬能の社會ではない。彼の哲學はモニズムでなくしてプリユーラリズムであるからである。従つてもし社會奉仕が社會萬能を意味するものであるとすればギルヅマンは社會奉仕とともにあることのできないのは勿論である。しかしギルヅマンはかくのごとき意味において社會奉仕を考へてゐるものではない。またかくのごとき意味においては眞實の社會奉仕は存在しないと考へてゐるといふこともできるであらう。集産主義が社會奉仕を高調してゐることは事實であり、またこの點に特色をもつてゐることは事實である。特に個人主義經濟の社會組織に對する批評としての集産主義はこの點に重要な特質と價値とをもつてゐる。何となれば個人主義經濟の社會組織においては『全體としての社會』の觀念が存在してゐないから、この種の社會においては一切が斷片的部分的または個人的であつて社會は個人の壓制下に立つてゐるものである。従つて社會奉仕といふことはありえないのである。集産主義はこの個人主義の面前において全體としての社會に着目したのであるから社會的進化の過程においては社會奉仕の觀念は集産主義とともに始まるといつても差支へないのである。しかし集産主義においての社會奉仕とは右に述べたとほり社會を絶對的の尊嚴とするものであり、そして個人を隷屬者とするものであるから、個人主義經濟の社會思想において全體としての社會が存在しないといひえられるごとく集産主義の社會思想においては個人ーー人間としての個人は存在しな

いといふことができるであらう。從つてまた個人の社會奉仕といふことも存在しないわけである。たゞ存在するものは奴隷とそして奴隷制度とがあるのみである、ギルヅマンはかくのごとき奴隷制度の支持者ではない。その正反對の立場である。トムソンの指摘してゐるとほり、ギルヅマンのメタフヰジツクは物質的に對する精神的の條件においての人生の再評價であるとともに、その再評價においての範疇は個性のそれであるからである(Thomson, The Metaphysical Presuppositions of Guildism) 從つてギルヅマンにおいての社會奉仕とは自由とともにあるのである。自由と社會奉仕との偕調においてギルディズムが存在するといふことができるであらう。また自由と社會奉仕との偕調において、社會奉仕は奴隷制度から救濟されることができるであらう。

七

眞實の社會奉仕は競爭の精神を排斥することである。そして協同の精神をもつてこれに代えることである。協同の精神は自由の社會においてのみ存在することのできる精神である。かくのごとき意味においての協同は來るべき新社會の倫理的基礎でなくてはならない。そしてかくのごとき協同の精神こそギルド主義の倫理的基礎である。サンヂカリズムの生産萬能主義に對し、併にコレクチヴヰズムの社會萬能主義に對するギルズマンの倫理的優越性はこの點に存在するといふことができるであらう。

自由畫教育の要點

山本鼎

普通學に位置する從來の圖畫教育に對して、吾々の行つた是正的提唱は、意外の快速度で諸縣に反響した。

吾々が圖畫教育の合理的な見解を掲げて最初の兒童自由畫展覽會を試みたのは昨年四月の事であるが、今日までに、南北信

東京、丹波、九州、大阪の各地で大小七つの展覽會が催された。それらはすべて吾々兒童自由畫協會員の携はつたものであるが、吾々の知らずに居る同じ趣意の展覽會が各地に試みられた事と思ふ。

東京日々新聞社協贊の日本兒童自由畫展覽會と、最近大阪朝日新聞社が主催した世界兒童自由畫展覽會は共に大いなる宣傳力を示した。日々社は勢ひに乘つて是れを定期的に主催する事を決議した、年々春には小學生を中心とする兒童自由畫展覽會、秋には中學生高女生を中心とする青年？自由畫展覽會を營むで主張の完結するまで續けやうといふのである。又朝日社は、今夏各地の教育會の希望に應じて、近畿をはじめに、山陽、東海、北陸、山陰、四國、九州に亘つて約三十五ケ所で展覽講演する企を發表した。

此運動は少年雜誌にも現れた。卽ち『赤い鳥』『金の船』『少年雜誌』などの自由畫募集がそれである。

私はこれらの威勢のいゝ現象を摘記して、はやくも自由畫運動の戰功を標さうとするのんき者ではない。唯、其處に如何に多くの人が從來の教育に疑ひを有ち、新しい合理的な方針を待ち求めて居るか、といふ事を實證するのであり、更に其實證き提げて、政府及教育界の權威者に、圖畫教育の鮮明なる改革を促すのである。

而して、今此處に私は、國民としての又美術家としての責任感を以て自由畫教育の要點を列記し、其改革の參考に供へやうとして居る。

自由畫といふ標號は、誤解されたり曲解されたりしていけない。或教育家は、自由畫を寫生にも記憶にもよらない樂がきのやうなものと考へて居た。或教育家は『自由畫とは變手古だ、子供は自然物の寫生だらうが臨本の模寫だらうが同樣に自由な氣持ちで描いて居るものだ——それだのに模寫だけがなぜ自由畫でないのか？』と反問した。又或先生は、自由畫教育は絕對に生徒を放任するのかと訊いた。『わしははじめ危險思想と關係のあるものではないかと思つて心配しましたよ、展覽會を見てすつかり安心しました、いや有難う、實に子供の無邪氣が現れて居て面白うごわした』と告白した校長さんもあつた。まつたく都合の惡い言葉である、併し未だにより適當な形容詞を考へつかない。

自由畫といふ言葉を撰むだのは、不自由畫の存在に對照しての事である。云ふまでもなく不自由畫とは、模寫を成績とする

畫の事であつて臨本――扮本――師傳等によつて個性的表現が塞がれてしまう其不自由さを救はうとして案ぜられたものである。

創造（Création）といふ字が一般に解り易いものならば勿論それが良い、露西亞では自由と云はずに、兒童創造畫展覧會と云つて居るさうだ。――併し、吾が從來の圖畫教育に對する時、自由畫といふ字はむしろ適切ではないか。自由が不自由に代つた時、創造が模寫に代つた時、はじめて自由といふ言葉は勇退すべきであらう。

吾々の提唱する自由畫教育は鮮明に美術教育としての一教課である。だから其教習のもとには生徒の創造力が生長し、彼れ等の樣々な自然觀が表現され、模擬と虚飾とが必然的に撥無される。

それ故自由畫教育下の成績展覧會は毎に一個の美術展覧會である。其處には模擬の訓練によつて一樣に均された所謂整頓が無い代りに、生徒等自身の眼と手によつて撰ばれ研かれた個性があり、其智、感、情の自由な流露がある。

從來の教育では、數百人の子供を、いや數千人、數萬人、數十萬人の子供を『國定臨畫帖』と銘打つた安つぽい印刷物に導いて居る。

子供らを愛して居る筈の其親や其教師が何故子供らの「創造力」に無關心なのだらう?。大人が習慣的な傲慢から、平氣で作り上げたあのひからびたお手本を尺度にする事をなぜ怖れないのか?。

子供にはお手本を備へて教へてやらなければ畫は描けまい、と思ふのならば、大間違ひだ、吾々を圍むで居るこの豐富な「自然」はいつでも色と形と濃淡で彼れ等の眼の前に示されて居るではないか、それが子供らにとつても大人にとつても唯一のお手本なのだ、それ等のものが直覺的に、綜覺的に、或は幻想的に自由に描かるべきである。教師の任務はたゞ生徒らを此自由な創造的活機にまで引き出す事だ。

子供等の創造的種子は從來の教習では芽の吹きやうもない。美術は種子のうちにはやくも壓しつぶされて居るのである。

左樣な教育を美術教育と云へやうか、――美術教育の爲めで

なかつたら何のための圖畫教育なのだ。

從來の教育機關は、單に圖畫ばかりでなく、どうやら一切が被教育者の爲に設けられてあるといふよりは、教育者の爲に設けられてあるかのやうだ。

とんと從來の政治が國民のためよりは政治家のために營まれて居るやうに。

從來の圖畫教育の成績には、生き物としての「生徒」が現れずに、いやにごたごたした「教授法」が示されてあるだけだ。

普通學に位置する圖畫教育といふものは、一體何のためにあるのか？

實に何のためにあるのか？

私は教育家に出會す度に此問を發した、けれども鮮明に答へた人は一人もない。

私は勿論躊躇なく答へやうとする。『それは美術教育のためだ。――それでなかつたら普通學に於ける圖畫の教習は無意味だ』と。

處がたいていの人は誤解する。私が畫家であつて美術の事を云ふから。『自由畫教育も結構だが普通學に天才教育は不向きだ』なんてひやかし去らうとする。

美術教育と美術家教育と混同してはいけない。

美術教育が美術學校からはじめて始めらるゝものと考へて居ては困る。

圖畫教育が美術教育のうちの一課目として考へられて居なかつたら間違ひだ。

音樂の教習が音樂家を、理科の教授が理學士を作らうとするのではないやうに、圖畫の教習が美術家を作るのを目的として居ない事も當然だ。だが、其使命が美術教育で無いとしたら、一體何だ――假りに圖畫の教習に何か他の使命があるとして、然らば、子供らの美的感銘を何とする。創造的能力を何とする。人類最高の裝飾とせらるゝ、藝術の味解を何とする。人間の享有する性能の最も著しいものであり、其社會生活に生涯を通じて重要な意義をなすそれ等のもの、開發涵養の役目を、普通學の何處で受持たうといふのだ。美術教育の組織は普通學におとしてはならぬものだ。

科學者は豐富な知識を注文するがいゝ。軍人は逞しい體力と正しい勇氣とを望むがいゝ。私は其上に、彼れ等自身の自然觀も趣味も有つた、創造的情熱ある人間らしい中學生を送り出してもらい度いのである。

驚いたのは、地位ある一教育家が、

『何故美術教育が必要なんです!!』

『美術教育が人生にどういふ價値があるとお仰るのです!!』

と質問した事である。私はまごついちまつて『貴君の質問を眞似すると、何故德育が必要なんです!! 道德が人世にどういふ價値があるのです!! なんとも云へる事になつちまいますよ』とでも答へるのを、氣がつかずにしまつた。

衣裳に化粧に宴會に、家具文房具、室内店前の裝飾に、建築、市街、公園、演劇お祭展覽會に數へきれない程の美術的效果が、吾々の社會に普く表現されてあるを見ながら、それ等のものを鑑賞享樂し、批評奬勵し創造顯耀する素因たる美術教育の必要を今更疑ふやうな教育家では千萬卷の書によつて理由を講釋しても追つつゝきゝ。

繰かへしいふが、美術教育でなかつたら何のための圖畫教習だ、それは物體を正確に寫し能ふやうにする教習で、大人になつてから必要に應じて物の形の描けるやうに準備するのだ、——といふか。卿等の信ずる正確とは、人間の眼に映じた對象の姿ではなくして、生徒の實感を無視した、冷たい教授法で抽象された模形だ。

卿等は常に生徒をして物體の模形を作らしめ、又物件を標本的精致に描寫せしめて圖畫教育の要點を盡したやうに思つて居る。

處が僕を以て見れば、それ等の模形と精致とは圖畫教育の應用的一小部目であつて、むしろそれは理科や植物學の補助畫學と思ひ度いのだ。一體さうした抽象的正確の造形力や、標本的精致の描寫力が大人になつてから何時必要なのだ。植物學者や器械工になつた者でそれを必要としたら、其時期に少し習へば直ぐ出來る事だ。それこそ却つて、普通學に課するに不適當な專門的な畫學である。

圖畫教育の使命は要するに鑑賞教育である、——といふか。卿等の云ふ鑑賞とは、例へば土佐派と狩野派の別を知り、帝展風と二科風の相異を會得する類であり、以て生徒が大人になつた

時期に、觀畫上に分別を備へた人物たらしむるを目的とするもの〻やうに聞いて居るが、此教育は小學の過程には勿論有害である。中學の過程でも單にそれは美術史的に說明するだけで澤山だ。其技工的若しくは審美的の解釋の如きは既に美術家教育の領分に屬せらる〻べきものである。

鑑賞教育の主張者は美術教育を是認する人であらうから定めし、生徒等の創造的生長を主義として、彼れ等各自が人爲的拘束なき印象、感覺、認識空想に從つて自づから畫因をつかみ、技工を自得する自由畫を奬勵して居るであらうが、萬一さうでなかつたら災ひである。何となれば、創造力の無い處——個性的感銘と其表現的習性の無い處に、順當な鑑賞は有り得ないではないか。此斷定に反對する人があるならば、其人は物知りと鑑賞とを同じ事と思つて居る人だ。

圖畫教育は、つまり美的情操の教育である、感情を豐かにし、趣味を高尙にせしむるための教育機關である、——といふか、勿論私は不賛成しない。併し左樣な見解を有つた人々が何故、生徒らの自然觀を閑却し、創造的能力を無視して居るか?。常に範を以て臨み、概念を以て制し、權威を以て規定する從來の畫學に、不合理を感じなかつたといふのは變である。

眞似する事を知つて産む事を知らない者、概念蔓つて實感の萎縮した者、美術を知つて美を知らない者どもに、なんで美しい情操も高い趣味もあり得やう。

而も從來の圖畫の教育からは、さやうな昧者が民衆のなかへ送られ、さやうな墮落者が美術家のなかへ送られねばならぬのであつた。

又繰返していふ、圖畫教育は何のためにあるか、と。

卿等はよく實用々々といふ。併し美術的效果を生命とするあらゆる裝飾、あらゆる手藝、あらゆる創作を外にして、圖畫教育の實用に就ていくばくの物例を擧げ得るか?

實は不幸にして從來の圖畫教育は頗る不實用的に計劃されて居るのである。

美術教育は要するに感情教育だといふのはまあい〻。併し其處に智育はないと思ふのは亂暴だ。ありていに言詮すれば、人間の有つて居るあらゆる性能に、滋雨を灌漑するのが美術教育だ。なぜならば、子供が一枚の寫生畫を作るに當つて、彼れの智慧も知識も經驗も、印象も感覺も認識も、齊しく働かざるを得ないではないか——で其渾一な表現が即ち創造なんだ。

美術教育とは、愛を以て創造を處理する教育である。

私は、透視畫法なども、普通學から除けとは云はない、併し美術教育としての教目へは入れまいとする。若し透視法が美術上に冒すべからざる法則であつたならば、さしづめ、一畫面に二つも三つも地平線のある東洋の名畫などは悉く失格せねばならなくなる。

透視法は美術的價値なぞとは大した關係の無い單純な法則だ。畫學よりも數學の親類なんだ。

又々云ふ、圖畫教育は何のためにあるか、と。

それを明確にする事が何よりも急務だ。もしそれが美術教育を意味するものでないときまつたら、私は知らない。

美術教育である、となつたら、私は熱誠をこめて自由畫教育を主張する。

文部省と、教育界の權威ある人々の手に、統一ある美術教育が組織されて、自由畫教育が普通な事となる日の一日も速かに來らん事を熱望する。

普通學務局長の言に由ると、文部省では目下圖畫教育の一大改革を企てゝ居るさうだ。處が、その改革たるや殘念にも模寫教習絶廢の企てではなくして、臨本改良の計劃なのである。

全國數百萬の兒童の、チャーミングな創造力が、其改良されたお手本で此後更に幾年の間蓋をされる事か。

良い機會が今實に無駄にならうとして居るのだ。

私は焦慮した、熱意をこめて局長に、臨本絶癈と、自由畫教育斷行を望むだ、………むろんの事局長は豫定の計劃を遂行するに違ひない――今の世の中はあんまり用が多すぎるから。

恃む處は教場のパトロンだ。吾々は威勢よく氣長に、彼れ等の間に此信念を植えつけてゆくであらう。吾が自由畫の提唱は普通學中で最も巾の利かない、畫學にむけられて居るが、自由畫の精神は純粹なる道徳を意味するものだ。だから吾々の意氣は知らず知らず攝伏的になる。

『あなたの自由畫の主張は要するに、臨本を廢せ――たつたそれだけの事なんですか』と肩で嗤つて見せた教育家があつたが、まつたくそれつきりの事なんだ。

子供等にあれ程なチャーミングな自然觀があるのに、あれ程

な自由活達な表現力があるのに、身の程を知らない大人共が貧相なお手本を作つて子供の能力に堅い蓋をして平氣で居るのを眺めて公憤を起したのだ。而もさやうな不道德が國定の方針となつて普遍的に行はれ、それを怪しむ聲も聽えないのは何といふ事かと憤慨したにすぎないのである。

私は學課の組織に就ても、教育界の情質に就ても、全く無知だ。でもそれをむろん心細いとは思はない。

私は行はれさうな事を唱へて居るのではなくて、行はねばならぬ事を叫けんで居るのだ。

吾々洋畫家の歷史では、臨本や師傳の束縛を排して、個性を以て自然の眞を洞察描寫する藝術的革命が十八世紀の末に既に遂げられて居る。

曾て、聖者の奇蹟や、國王の治蹟などを顯揚讚美するために磨かれた表現上の技能が、今度は、各人――即ち畫家其人の自然觀なり詩觀なり又空想なりを表現するために練られるやうになつたのであつて、從つて彼れ等の身邊觸目の現實が原因となり、合理的な構圖、眼に親むだ形、物質の種々相、空氣、光線等の實感が驚く可き自由さに於て開拓された。

而も初期印象派（プルミチール、アンプレッションニスト）は、色や調子に於てこそ個性的になつたが、形の認識については舊弊であつたと云へる。

全體昔から、色は主觀的なものとせられたのに反して、形には客觀性が信じられて居た。有名な繪畫史にも「形の描寫はレンブランドで絕頂に達してしまつた。」といふやうな事が言はれて居る。

處が、それが後期印象派（ポスト、アンプレッショニスト）の人々達によつて卒直に破られたといふものだ。

其處では、合理的に純粹に、形も色もすべて個性によつて表現された。

奇異とすべきは、さやうに表現の純が重んぜらるゝ時代に、所謂日本畫の盛んなる存在である。美の感銘を常に先璧の作物の上に受けて、それを種として更に巳れの美術を匠むといふ、創造の變態が連綿として榮へゆく事である。

子供は臨本に、大人は扮本や師傳に、表現の純を濁されて居るを怪しみもしない世間に、良い美術も美術工藝も現れやうわけがない。

トルストイは『兒童について人の道を學べ、兒童は未だけがされず、――彼れ等にとりては人々皆同じ』と云つたが、私は兒童等の鮮やかな創造力に驚く者だ。日々社の展覽會の

石井鶴三君は感嘆してこう云つた『……子供はみんな天才なんだ』と。

前にも云つたやうに、自由畫教育は、愛を以て創造を處理する教育だ。從來のやうな押し込む教育でなくて引き出す教育だ。

だから自由畫教育に教師たる資格は、美術界の知識に富むで居る事でも、水彩畫が描ける事でもない。唯生徒等の創造を愛する心――それがあればよいのである。

自由畫教育の要點はすてきに簡潔だ。たゞ一句で盡せる、曰く「模寫を成績としないで創造を成績とする」

大人によつて技工化された抽象的な實相(リアール)を手本として眞似を習練させるやうな事を、まづすつぱり止めにして、子供らの性能を自然の沃野に放牧し、其處で自由に產ませやうといふのだ。

權威を以て範を垂れずに、愛を以て導き、子供らの能力を順路に生長せしめやうといふのだ。

美術よりは美、摸造するよりは創造、夢想よりは感銘、追よりは現在に立脚する此思想は、むろん子供にも大人にも奨めねばならぬ。

されば自由畫教育の適用は、中學生にも、高女生にも、大學生にも美術學校生徒にも、美術家にも齊しく要求せざるを得ない。

彼れ等はすべて、表現の純を知らねばならぬ。誰れ人にも植えつけられてある「創造」の苗が、愛し愛されつゝ生長する事を正しい道德とせねばならぬ。

子供らから創造の契機を奪つて、摸造の習練を强要する不正な畫學から救はれねばならぬ。

教師が教室で生徒らに「孝」を說く――それが効果を擧げる所以は、それより先に生徒らの心に父母に對する愛が植えつけられてあるからだ。

同じ事に、自然美の感銘が蓄へられてなかつたら、美術は正當に了解せられない。

兒童らが體が鳥で頭が人の畫を描いたり、首からぢかに手脚

のついた肖像を描いたり、太陽を畫面の一番手前から現したり、紙一つぱいの大きな富士山の下へ豆のやうな人を散らしたり、魚と間違へさうな馬や、倒れさうな家屋などを描いたりするのをつかまへて、『兒童が斯やうな不完全な間違つたものを描いて居ても、放つておいていゝのか』と質問する先生がかなりあるが、さうした非科學的な不完全を追窮した日には、大人の畫も多分全部落第だ。さしづめ國定臨畫帳が槍玉にあげられねばなるまい。

子供達は、お父さんと先生を一番偉い人と思つて居る、それを、困つた兒だ、と思ふ者はないだらう。間違つた考である――ほんとうの價値を説明してやらねばならぬ、と氣をもむ人はあるまい。

それは實に子供らしい愛すべき信念なんだ、それと同じやうに子供には子供らしい愛すべき直覺があり、綜覺があり、自然觀があるのだ。

昨年の秋頃の事であるが、米國の高官が、可愛い男の兒を伴つて日本へ來た。二人が米國を出る時から續いた、晴天が横濱へ着く二三日前から陰鬱な雨天に變つて太陽の顔が一寸も現れなかつた。そこで其男の兒が、お父さんの顔を見上げて訊くには、『お父さん!! 太陽はどうして米國へかへつちまつたの?』と、お父さんはやにはに兒を抱きあげて接吻(キッス)した。それを眺めた時事新聞の記者が嬉しさうにそれを夕刊に報告した。それを讀むだ私が又顔をくずしてよろこんだ事だ。

處で、此兒のさやうな正直な、チヤーミングな自然觀を、難しく訂正しやうとする馬鹿者はあるまいではないか。

こういふと、『訂正する事が何も無いとすると、教師は無用になりますな』と不快な顔をする先生がある。

まるで、叱る事件が無いと心細がる巡査のやうだ。

ほんとの事を云ふなら、子供を訂正する必要はなくても、先生と其教授法とは充分訂正しなければならないのである。

自由畫教育の要領は簡單でも、學校での其處理法の完成は容易でない。緻密に徹底した教師用書を作成する事が當面の問題になる。吾が協會でも、普く、教場のパトロンから材料を蒐めてそれを研究整理して其書を遍述する事を企てゝは居るが、むしろ斯やうな事業は了解ある大いなる教育機關によつて遂行せらるゝ事を望まざるを得ないのだ。

何となれば、吾々は微力であるし、製作生活のためのエネルギーが、他に掠奪される事にかなり恐慌を感じて居るからである。

私は熱誠な教育家諸君から、自由畫教育の教場での處理法に就て質問を受ける毎に、未だ充分精密に答へる事の出來ないのを遺憾とするが、實は夫れ等の、場合々々に應ずる處理は其衝に當る教育家自身に研究してもらい度いのである。私は正しい原則を指示したつもりだ。これを有機的に施行する任務は教場のパトロンたる人々の上にあるのだと考へて居たい。

生き物が生き物を處理する處に理論の刻明な表現は期し難い。教師の人格なり趣味なりが知らず〳〵の間に生徒らの創造力に紛れ入る事は防ぐ必要のない事だし、防ぐ事も出來ない事だ。

例へば、南信濃の龍丘小學校は、私の知る範圍では最も熱心に自由畫教育を行つて居る學校であるが、其處の教師は色彩を愛する人と見えて生徒等に、一樣に良い蠟鉛筆が供給された、――そこで、生徒等は悉く色彩家（コロリスト）になつてしまつた。

彼等は初めは、與へられた色鉛筆の線で綠葉を描いて居た。處が間もなく、持つて居るだけの鉛筆の彩で描き混ぜて、彼等の眼に認識した綠葉の色を現す事に進むで來た。―― これをけない事とは云へないではないか。

私は私の方針で、一人のお孃さんに畫を教へて居るが、其お孃さんはいきなり油畫をやり度がるので、私は油畫の具を買ひ世話をしてあげた。そして『好きなものを描いて御覽なさいと云つたきりで知らん顏をして居た。

お孃さんは困つたあげく、食卓の上にある湯のみを描きはじめた。處が忽ち筆をおいて、

『お湯呑が圓く浮き出して見えて居るのを、どうしたら描けるのでせう』

と、ぢれ出した。私は笑ひながら、

『圓く浮き出して見えますか、そいつは結構、では何故圓く見えるのかを考へてお覽んなさい、ほら、明るい面と暗い面がぼけるやうに連續して居るでせう。あれですよあなたに圓く浮き出て見えるのは、――あの濃淡を描いて御覽んなさい』

と教へた。お孃さんは、赤を紅らめて又描き出したが、間もなく、

『あの濃淡を、明るい處や暗い處を、一體どんな色で描いたらいゝのでせう』

と、すねくりはじめた。

『困つたお孃さん!!あなたは三越で反物を買ふ時に、なか〱色合がやかましいさうじやありませんか、其時の眼を働かして御覽んなさい。そら、蔭の部分は大體薄い紫紺色でせう。そして其端の方は、食卓の赭い板の反射でほんのり紅がさして居ますね。日向の方は、障子の外の青空が映つて青味を含むで居ますよ。だから、青が見えたら青、黄味を感じたら黄味、紅が見えたら紅を、見えるやうな濃さにつけておいでなさい。もし又其の濃淡を黑と白とに感じたら黑と白とで描くんです、しつかりおやりなさい』と、敎へた。

此『ナチールモルト』は三時間ばかりして、とう〱出來上つた。ちやーんと丸味を備へた存在せる湯呑が立派に表現された。

お孃さんはこれに味を得て、お母さんとの溫泉ゆきにも畫の具箱を携へて出かけたが、

『先生、美しい〱青空を、どんな彩で描いたらいゝんでせう。前の山には胡桃の稚木が繁つて、朝日をうけてむく〱と見えて居ます。又も池の水は澄むで底の小砂利までも見えるんです、其上を又澤山な鯉が泳いで居ます――先生ほんとに、どう描たらよいのでせう。』

と手紙で訴えて來た。私は．

『まだそんな事を云つて居るんですか。見えた通りに御描きなさい。もし私が、空はコバルトでお描きなさいと申してあなたが其通りになすつたら、あなたはコバルトを塗つた役目をしたゞけで、美しい〱空を、感じた人でも描いた人でもなくなるじやありませんか』

と返事したのであつた。

兒童には氣まゝに描かせるがいゝ、彼れが表現に關して質問をはじめたら、技工化した範を示さずに、技工を發見する事を敎へてやる。

彼れが中學の過程に進むで、認識の複雜と知識慾の爲に、描寫がおつくうになり出したのを見たら、勿論強いて畫學をやらせなくともよい、其時期には描寫は從にして、知識的な美術敎育を、主として施すべきだ。何故ならば、普通學には美術家敎育を要さないからである。

兒童の自由畫教育は、要するに美術教育の一科であつて、つまり手輕に云へば、小學時代から自然科學に關する知識が準備されて科學上の簡單な常識が具備されるやうに、小學時代から美術敎育が施されて美術上の常識が具備されるのを至當とするの

である。

要するに、私の自由畫教育の主張は、鮮明であると共に簡單だ。

五本の指が五本ながらに釣合の取れた形態で育つて居ねばおかしいやうに。人類の生活に其一本の指を意義する美術上の教育が普通學のうちに培はれなければらそだといふ事と、現に普通學に編み込まれてある圖畫科なるものが、もしも美術教育のためでなかつたら不必要であり、美術教育の爲であつたら臨畫なく自由畫教育を行ふべしといふのである。

そして、摸寫を排し創造を奬める、といふ事が其處理法の心棒となる。完。

（九年七月六日）

奉仕觀念の變遷と文化運動

法學博士 ドクトル（經濟學） 森本厚吉

一

社會奉仕には必ず一種の犧牲的觀念が含まれて居る。犧牲とは自己の利害を度外視して自己以外又は現世以外の何者かの利益を自發的に計る行爲を云ふのであるから、極端な利己主義に基因する損得觀念によつて生きて居る人類社會には餘りに喜ばれないものである。從つて社會奉仕又は社會的犧牲には必ず苦痛とか不快の念が伴ふて居るものと考へられて居るが、其れは大なる誤りである。個性が十分に發達して精神修養が或る程度迄行はれた場合には犧牲は高貴な德であつて、人の喜ぶ可き樂しき行爲となるのである。勿論幸福は人生最終目的の一である事は疑ふ可からざる眞理であるが、眞の幸福とは決して自己の逸樂を云ふのではなく、社會全體のより大なる幸福の爲めに犧牲を拂ふと云ふ精神が其の背景を造つて、以て始めて誠に幸

福なる人生を完理し得るのである。犠牲觀念のない我利々々社會は決して幸福なものではない。現今の社會を今一層幸福なものにする爲に社會に奉仕の觀念を普及し廣く其の實を擧ぐる事である。

人は幸福(ハッピイネス)を愛する念よりも一層高貴なる或るものを有して居るのであるから、幸福の代りに天惠(ブレッセッドネス)を感受して生を眞に樂しみ得るものとしなければならない事を説いて居る次の様な教訓は、現代文化の内容を充實するに最も尊いものである。

"There is in man a Higher than Love of Happiness: he can do without Happiness, and instead thereof find Blessedness! Was it not to preach-forth this same Higher that sages and martyrs, the Poet and the Priest, in all times, have spoken and suffered; bearing testimony, through life and through death, of the Godlike that is in man, and how in the Godlike only has he Strength and Freedom?... ...." Carlyle: Sartor Resartus, p. 132

二

従つて吾等が自己の幸福を犠牲に供しても社會のより大なる幸福の爲めに盡さんとする社會奉仕事業は最も大切なものであるが、若し社會奉仕の觀念を誤解して誤りたる方向に行動をとる時には却つて文化運動の妨害となり、何等益する處はなく所謂骨折り損の草臥(くたびれ)儲けの愚を演ずる事となる。云ふまでもなく人生の行爲は精神的にも物質的にも常に最少の勤勞で最大の效果を得んとする經濟主義によつて支配さる可きものであるから、勞多くして效少き社會奉仕は現代に於て避く可き事である。故に時代の進歩と共に人文の變遷を明かにし時代に適應する社會奉仕を尊重しなければならないのである。

三

社會奉仕に關する道德觀念の變遷は近來著しいものであるから、吾等は先づ其の變遷の行路を明かにしなければならない。今日では國の爲め又は親の爲めに奉仕する事にのみ重きを置く様な道德は時代に適しないもので、何等の役にも立たない。自分を生んで呉れた親や、自分達が作つた國の爲めに奉仕すると云ふが如きは、人として當然の事である、若し是れをやかましく論説しなければならない様な社會であるならば、其の文化の程度は甚だ幼稚なるものである。幸に個人が自己の努力と文化の恩惠によつて其の個性を十分に啓發する事が出來、進んで社會全體の利益の爲めに奉仕する事が出來るならば、國家

や親、兄弟、夫婦、朋友、等を中心とする道德論は何等必要なきのみならず却て文化の發達を害するのである。人類全體の文化の爲めに奉仕する事是れが現代の社會奉仕の生命である。然るに今猶我國に於て國家や家名の爲めだと稱して徒らに生命を捨つるが如き行爲を賞讃したり、或は親の爲めだと稱して藝者や女郎に身を賣つたり、或は不貞な夫の不品行に對して只默認するのが貞婦の美德と考へたり、或は義理や人情の爲めには正義を蹈み倒しても愧ぢないと云ふ樣な行爲が重く視らるゝのであるから、我國民は未だ現代文化に生きて居ない事を證明して居るのである。時代は休みなく進步變遷して居るのであるから我等の思想も行爲も共に夫れに適應せしめなければならない。

四

抑も活動は生物の生命で、生きるが爲めには必ず活動しなければならぬ。我等の棲息して居る地球自身が旺んなる活動を休みなくして居るもので、是れを包容して居る大陽系も亦活動して止まないものであるから、我等も其の宇宙間の大則に則つて活動しなければ進步又は進化し得るものではなく、却て退化しなければならないのである。是れひとり物質生活に止まらず精神生活に於ても亦同樣で、例へば社會道德の觀念の如きも時代の變遷に伴ふて絕えず變化して居るのである。此の變化に伴ふて人の行爲を適應せしめ以て社會の文化をすゝめる事が出來るのである。

世界のすべてが民主主義を謳歌する時に當つてひとり君主主義に固執した獨逸は世界的思想と一致する事が出來ないから歐洲戰爭に於て失敗をしたのである。是れに反して英國民が元來保守的國民として認められて居つたにも拘らず近來著しく國運の發達した理由は、上下擧つて民衆の幸福に重きを置いた爲めである。即ち世界の思潮に一致する事が出來たからである。

五

嘗て大隈侯より聞いた事であるが、英國の現皇帝が皇太子であつた時に其の傅育に從事して居る者が、如何にせば時代に適する教育を授くる事が出來るであらうと協議した時に、故ブース大將の發案によつて東ロンドンにある有名なる貧民窟の見學を御すゝめする事にした。之には隨分反對したものがあつたが皇太子御自身は夫れに非常に興味を持たれ爾來貧民の社會問題に深き注意を拂はるゝ樣になり、常に少數の上流社會よりも所謂民衆に重きを置かれて國政を處理されたである。今回の戰爭に大勝利を得る事の出來たのも是れが爲めであると大隈侯の

言はれたことは誠に意義深き教訓であると思ふ。

或る論者は善惡の差別は永久に決定されて居るもので道德觀念は固定して變化のないものであると云ふが、夫れは誤りである。以下少しく是れを論述して見やう。

六

ヘロトダスの書いたものを見るとフィニシャは早くから商業が發達して居つたが其の賣買取引は多く無言で行はれたから俗に啞の商賣と名づけて居つた、卽ち商人が地中海の沿岸で買ひ集めた商品をフィニシャに持ち歸ると夫れを海岸に陳列して其處に市が開かれる。合圖の爲めに烽火を揚げて商人は自分の船に又るのである。市場に集つた市民は賣手は居ないから各自の欲する商品を自分で評價して相當と推定する貨幣と交換をするのである。夕方になつて商人は市場に歸り、若し品物の代りに置かれた代價が適當であると思ふた時には其の代價を持ち去るのであるが、若し其の評價が高過ぎたり安過ぎたりした時には其の貨幣を其の儘にして翌日買手の反省を促すのである。斯くする事數回にして買手と賣手の間には言葉を交ゆる必要なくして商行爲が成立して居つたのである。

斯くの如き時代の商業と今日の如き懸引の大切な商業とは著しき懸隔があり、從つて商業道德の觀念も甚だしく異なつて居るのは當然である、例へば其の當時に於ては今日尊重して居る「正直は最良の政策である」と云ふ樣な道德的觀念は何等の意味を有して居なかつたのである。

七

今一つ例を擧げんに男女間の道德觀念に於ても時代と共に著しく變化して居るのである。例へばプラトーの如き賢人でさへ其の時代には妻は社會の共有物たるべきもので、若し是れを特殊の夫の專有物とする場合には色々道德上の弊害が起るものであると信じた。故に其の當時には現今の一夫一婦制度の如きは一種の罪惡と認められたのである。又掠奪結婚の行はれた當時には現今の如き結婚法を以て最も意氣地なき卑怯なる行爲として排斥したのである。

斯くの如く時代の變化に伴ふて道德觀念は絕えず變化するものである事を考へるならば、我等は深く思潮の變遷に留意して正しき行動をとらなければならぬ。從つて舊時代に於て正當と認められた社會奉仕の觀念は必ずしも現代に於て同じく正當なるものと認める事が出來ない場合が多いのである。

八

餘りに古い事は別としても、十六世紀頃より今日に至る迄如何に道德觀念が變化して來たかと云ふ事を考へて見るのに、先づ最初に重商主義が理想であつた時代には國家萬能の主義が行はれて、國家を富ます事が道德の最終の目的であつた。故に國家や國王の幸福の爲めには國民の幸福を犧牲に供して奉仕する事が最高の德行であると認められた。此の時代の反動として重農主義が起つたのであるが、此の時代には國家は個人の集合したもので、個人は國家の土臺である故に國家の隆盛を計るには先づ個人の利益を十分に計らねばならぬものとして、個人の自由を尊重して自由放任主義に重きを置く樣になつた。此の思想が發達してアダムスミス其の他の英國派經濟學說の主張した個人主義となつて現はれたのである。進んで十九世紀の後半になると個人よりも個人の合同した社會結合に重きを置く樣になり、社會主義が勢力を占むる樣になつた。廿世紀に於ける最近の思潮としては益々個性の自由を重んじ、社會の一員として健全なる發達を來すが爲めに第一に各個人の天與の個性が何等の束縛を受けずして自由に開發さるべき事が必要である。先づ個人の物質的及精神的の生活を擴充するにあらざれば到底健全で幸福なる社會を成立する事が出來ない。故に國家の法律も社會制度も皆個性の啓發に役立つものでなければならぬと主張するのである。

九

斯くの如きは時代に於て若し舊時代に屬する國家萬能主義を中心とする觀念が權勢を有するものとせば、是れ世界の思潮に相反するものであつて實に憂慮すべき事である。故に今日我國に於ける急務は社會の各員が國家よりも自己の完成を一層尊重して時代の思潮に適應する生活を營み以て國家社會の正當なる發展を期すべき事である。此等の目的を成就する爲の運動として玆に吾人は文化運動の進捗を計らざるを得ないのである。

遲ればせながら幸に近來我國に於ても種々の方面から文化運動が提唱をされる樣になつたのである。が、未だ其の根本義に觸るゝ事が少いからして運動の效果を舉げ得ない事は甚だ殘念である。元來文化運動の一般的目的は國民の精神的及び物質的幸福を增進する事であるが、其の根本義として考へなければならん事は國民即ち民衆を中心としたる社會全體の幸福增進と云ふ事である。而して民衆と云ふのは法律上の解釋によつても特定の集合體ではなくすべての階級のものを總合したものである。

故に嚴格に云へば文化の本質は民衆的意義を有するものであるから、所謂民衆的文化と云ふ樣な字句は不合理なものであると思ふ。斯の如き見地から今日の文化運動として大いに進捗を計らねばならぬ事は多々あるが其の內でも

第一　階級打破である

蓋し文化の恩惠は國民全體が受く可き權利を有して居るものであるから、若し是れを富豪とか貴族とか云ふ特殊の階級者に享樂せしめて今日の如く國民の大多數を占むる中產階級以下のものに及ぼす事が少いとすれば、それは眞の文化と云はれない。恰も空氣や水が人類全體の共有物であると同樣に、文化も萬民が造り上げたものであるから、是を少數者の有とせずして社會全體が享樂すべき者であると說かねばならぬ。然るに之を我國現代文化の事實に徵するに社會の制度と云ひ組織と云ひすべて著しき缺陷があるが故に、今日正直なる者が終日苦役に從事しても家族の最少生活費を得る事さへも出來ず「稼ぐに追ひ付く貧乏なし」と云ふ眞理も今日に於ては一種の虛言と爲つて居るのである。是れに反して所謂富豪者は其の蓄財の手段が不正であつても彼等は勞せずして容易に巨萬の富を積み得るのである。要するに我國文化の恩惠は國民の一部分のみが享樂して居るに過ぎず、大多數の者は彼等の爲めに犧牲者となつて苦しい生活を營んで居るのである。從つて生を此の世に享けたものは正直に働く場合には生活する特權を生れながらにして有して居ると云ふ眞理は未だ我國に於ては實現されて居ないのである。斯くの如くにして階級打破は刻下の急務であると同時に、是れを即成するに必要なる手段として普通選擧の必要をも認めざるを得ないのである。

一〇

第二　普通選擧の即成

國家の法律に於ても亦著しき缺陷の存在して居る事に注意を拂はねばならぬ。政治學者の論ずるが如く我等は國家の法律に全然服從しなければならぬが、法律の內容には必要に應じて大に反抗すべきである。現行法律にして其の目的が民衆の利益を計るのではなくして資產階級者の利益を保護し或は其の利益を大にする事に便多きものが少なくない。例へば我國の地租法、所得稅法消費稅法に於て見ても給付能力の大なる地主、其他の資產家等の當然負擔すべき納稅義務は比較的著しく輕きに失し、却つて給付能力の少い無產階級者が不當の重稅を負ふが如き事、或は奢侈稅土地增加稅其の他當然必要と認む可き稅法がまだ樹立されず、其の結果として富の分配に益々不公平を來す

事多いのである。而して斯かる法律を制定した直接の責任者は國會議員であるが、彼等の多くは地主其の他の資産階級者によつて選出されたものである事を記憶するならば、文化の普及を國民全體に及ぼす事に重きを置く立法手段として現今の議員選擧法は正當なものでない。我等は人類の生存權を認め個性の開發に重きを置く以上は、法律的にも當然文明國民の權利である選擧權を普ねく享有しなければならないのである。然るに現今の如く之を特殊の國民を限りてのみ與ふるが如きは文化の進步に莫大なる妨害となるものであるから我等は斯かる法律の改正につとめ、廣く階級制度を打破して文化の恩惠を民衆に及す事に努力しなければならぬ。

二

第三　人と物の區別を明白にする事

文化運動の起るに至つた由來は人と物との區別が認められる樣になつた事であるからして、此の運動の進捗を計るが爲めには今一層其の區別を明かにする事が必要である。元來勞働と商品とは決して同一のものでないから、單に生産の手段として吾人が存在するのではなく生産の主體として新時代に適應した人間らしい生活を營まねばならぬ事を時代が要求して止まぬ。夫れにも拘らず我國に於ては未だに人は富の生産に必要な道具として取扱はれ、其の結果生活の標準は甚だ低く、實際の生活狀態に於て歐米先進國に比して著しく劣れるものがあるのである。又一方學理に於ても今猶生産が消費よりも重ぜられて消費に關する事は常識に任して怪まないと云ふ狀態である。此等の缺陷を改むるが爲めに根本的に必要缺く可からざるは極力個人生活の擴充を計る事である。

三

第四　個人生活の擴充

個人生活を擴充して新時代に適する文化生活を國民全體に營ましめると云ふ事を常に文化運動の最後の目標とするのでなければ、決して運動の效を奏する事が出來ない。精神的にも物質的にも確かに過去半世紀間に驚く可き進步をしたのであるが、個人の生活は未だ其の恩惠を蒙る事が甚だ少ない。從つて時代後れの囚れた思想に天與の自由は束縛され如何にデモクラシーの思想が社會に謳歌されて居つても個人の家庭生活に於て未だ其の實が擧らず今猶家長制度の惡習に囚はれ、家族の各員が夫とし妻とし子供として各自の自由に個性の發達を十分にする事が出來ない狀態である。或は大學其の他の公共機關に於ては

新進科學の發達は盛であるにも拘らず個人の生活の必要物に對しては其の應用の行はるゝ事は甚だ少く今猶其の生活狀態が封建時代のものと大差ないと云ふが如き有樣である。最近旺んに論議されて居る米國に於ける排日問題に就いて是れを見ても、此の問題の起因は一部論者の主張するが如く人種の相違から起つたのではなく、我國の生活の標準が米人に比して非常に低い事が基となつて、彼我同化する事が出來ず、兩國民の間に誤解を重ねて今日の排日問題が起つたのである。若し我が國民が何時までも新時代の要求に適する生活を營まないで、能率の少い國民としてあるならば遂には米國のみならず世界の文明國から同化の出來ない國民として排日問題が起らないとも限らない。

三

斯くの如く觀じ來ると文化運動の實績を擧げる爲めに先づ文化生活の運動を盛にしなければならぬのである。是れが爲めに最も必要な事は一方に於て生活を學術的に研究すると云ふ事と他方に於て其の教育の普及を計る事である。兩者共に今日非常に幼稚であるが、最近是れ等の運動が次第に社會の注意を引き起す樣になつた事は實に喜ばしい事である。斯かる問題に關する教育事業に關しては今日に至る迄殆ど省るものがなく、所謂「自分が何物をも知らないと云ふ事を知らないものは馬鹿であるから彼を覺醒しなければならぬ」"He who knows not that he knows nothing, is fool; Wake him up." と云ふ時代に屬して居たのであるが、現今は漸く「自分が何物をも知らないと云ふ事を知るものは無智者であるから彼れを教へなければならぬ」"He who knows that he knows nothing is ignorant; Teach him." の時代に達したのであるから、公共團體に於ても亦個人に於ても適當なる教育機關を設けて、文化生活に關する教育を普及すると同時に國民擧つて生活の擴充に自ら努めるならば、其の結果は見るべきもの多く、諸種の文化運動の奏功を大にする事が出來るであらう。此の方面に社會奉仕の觀念を向けたいものである。

勿論斯かる事は決して容易の業ではない。けれども眞に國家を憂ひ人類を愛する者は、自己の與へられたる境遇に於て最善を盡し、一致協力して文化運動に從事すべきである。是れ實に時代の要求する社會奉仕の業である。

（七月五日）

新社會主義へ進め

杉森孝次郎

個性と社會を兩極として生活の價値の星は動き進む。これを日月に譬ふれば、日は個性であつて月は社會だ。社會は、それの全內容を評價しても、畢竟するに個性の次位に立つ。第一位を占むるものは間斷なく個性だ。個性は自照する。社會は返照する。社會は個性のための原料であり、機會である。二十世紀初頭の人類の悲哀は、この正しい社會觀を所有しない事にある。

社會主義は富を中心として、それの消費を個性の必要を標準として決定し、またそれの生產を個性の能力を標準として決定せんと志す。これは現存の社會主義を純化した時に生ずる社會主義の發展的價値だ。吾人はこの發展的價値の行く先を一歩遙かに見屆けて、ある狀態からあるべき狀態へ推し移らねばならん。勞働運動が、戰前、戰中、及び戰後の活歷史を證據として判斷される限りに於て、國內運動であつたことは否定されない。開戰に反抗した勞働運動もなかつたし、止戰に熱中した勞働運動もなかつた。國際的社會を唯一の眞の社會と見て、その社會に於ける經濟生活上の正義を直接に實現せんと鋭意する勞働運動もまだ現はれない。英、米、佛、伊、獨、露、日、悉くその例に洩れない。露だけが異彩であるが、これとても、社會一體觀を背景とした國際的經濟生活改善運動ではなく、國內の經濟的不正義を矯正する目的に出でたる國際的經濟制度革新運動だ。列國に勞農政府を樹立せんと意氣込む奧底には、自衞的必要もかなりに混つてゐよう。國內的に多數黨であつても、國際的に少數黨であつては、その國內的多數黨の地盤も危い。國內的に多數であると同時に、國際的にも多數でなくては、防衞に疲れる。吾人は莫斯科の施政を明知しない。ほのかに察するところに依れば、露西亞の民情と歷史を假定しないでは、あれほどに成功もせず、またたとひあれほどなりとも成功に値ひしない質の實行であり、運動である。しかし、人類社會の公善であり、公義であると信ずる原則を先づ自國に適用し、且つ

他國にもその適用を希望する事は、何人の場合に於ても、また何國の場合に於ても正しい事だ。問題は、その人、その國の信ずる人類社會の公善公義が、果たして過信謬信ではないかといふにある。一善を國内に成すために、友援を世界に求め、列國の理想と制度とによつて自國の理想と制度とを庇保するの策を完全にするはよい。今日の吾人の急務としては、そのやうな歸納的方法と併行して、演繹的方法を發明せねばならん。個性の對極實在として社會を認め、その社會は國際的社會以下のものであつてはならぬ事を理解し、直接にはその社會のために、間接には個性のために、すべての普遍的價値に與ふるに、相當普遍的機會を以てする事が、人類の憲法として確信勵行される要あるを意味したのだ。歸納的國際奉仕を個々に着手するに先きんじて、演繹的國際奉仕の熱と光とが準備されなくてはいけない。信からでた行でなくてはいけないのだ。今の社會にはその行が缺乏してをるけれども、信は行以上に不足してをる。

貿易は國際間に發達しつゝある。投資も國際間に發達しつゝある。けれどもその行爲の動機を見れば、國富を增すために非ずんば私富を增すためだ。社會の富を目的としてはゐない。偏へに輸出超過を誇り、輸入超過を憂ふるわけは、貿易の倫理が侵略に存して相助に存しないからだ。國内的社會の範圍に於ては、不完全ながら犧牲、奉公の倫理的要素が多少すでに存在する。去つて國際的社會を觀れば、行爲の外形は協力であり、扶助であつても、動機の內實は盗奪だ。勿論國內的社會に於ても、商賣人や實業家の意思は概ね私利だ。外國との取引の場合に於ても、私利を主とする事を忘れない。國利のために私利を棄てる事は稀れだ。非常時即ち戰時を除いて、これは各國の通態だ。しかしながら、直接にまた間接に、一國の生產家や商人が國外に手を伸ばすためには、國家の後援を有用とし必要とする場合が多い。商賣が國旗の跡を追う話は最近までの活事實であつた。否な實にまだ過去の慣例とはなり切らない。東阿、西阿、近東、極東に、東西の或强國は現に多少の嫌疑を受けてをるでないか。必ずしも露骨に國旗の跡を追う商賣には限らない。國庫の補助を受くる民間の國外企業もある。戰前の獨逸は過去に於けるその一例だ。關稅政策によつて私益を保護される事實も、私利と國利との提携だ。自然資源の開發も、人力の動員も、國內的社會に於ては組織、統一の緒に就いてをる。公益と私益との間に調和を作らんと願ふ心も萠してをる。公益を私利の服裝とし、時としては公益遂行に强烈なる誇りをさへも感ずる。然るに、國際間には、個々の場合に於ける利害關係に基づく向背あつて、原則的に國際的社會の內容を豐富にし、その

形態を美體にせんと念ふ故の進退去就はない。愛國心と利己心を實質とする無政府狀態だ。自國と自己が社會から隔離しまたは超絕して成り立つならこれも看過する事が出來よう。自國が自己の機會である如くに社會は自國及び自己の機會なのだから、現狀は原始的だ。

莫斯科政府といへども、列國を原子的（アトミック）に觀てをる。莫斯科の政治家に、各國に勞民の支配を實現せんとは欲すれども、國際間に經濟的正義を實現しようとは力めない。そもそも國際間に經濟的不正義が現存すると[に]着眼してゐない樣子だ。莫斯科の新政治家の眼中には打破すべき階級別あつて、保守すべき國境はない如くに一時世人は觀察した。けれどもこれは事實でないやうだ。莫斯科の政治家は、他國の領土を侵略する興味はないかも知れない。しかし、自國の領土を他から侵略させない興味は十分にあるらしい。一兩年來この傾向はますます著しくなつて來た。全露の國民主義が卽ちそれだ。滿州も、內に社會主義の理想を殆ど遍信しつゝあれども、外に對しては國防に過敏なほどだ。國民主義と社會主義との關係を標示する例として、殊に二十世紀の最初の四分の一期末に現存する事實として觀て、意義深長だ。勞民の支配は、これに原則的價値を置く人の立ち場から言うならば、一國內に實現するばかりでなく、また各國內に實現するばかりでなしに、各國間に實現しなくては不徹底だ。國際的社會に於ける或國々は、他の或國々に對して、あだかも國內的社會に於ける或階級が他の或階級に對するに似た位置を占めてをる。英國の如きは國際的社會に於ける傳統的大株主かも知れない。露西亞なども國際的社會に於ける大地主の一だ。國內に於ける貴族や地主は、其由來を調べて見れば、歐洲諸國の場合に於ては、實にしばしば封建時代に於ける征服者の子孫だ。國際的社會に於ける富國、大國、强國も、また實にしばしば過去に於ける武的侵略の結果だ。國內的社會に於ける貴族富豪の或者が、生產の義務の公正分配と、消費の權利の公正分配を標準として批評されるならば、國際的社會に於ける或國々が、同一批評の的とされずに濟んでよい道理がない。固着利益（エステッドインタレスツ）の持ち主は國內的社會に於ける個人であり、家であり得る如くに國際的社會に於ける國であり得る。莫斯科の新人等が、國境をばエッキス光線の前に橫たはる脂肉の如くに透視して、階級別のみを注意すると稱へても、それはほめた話でない。何となれば、國境別は現在の實勢力であるから、これを視ない事は盲目を意味する。これを視てその改良の必要を認めない事は判斷力、批評力、及び創造力の缺乏を意味する。國境を總崩しに崩す事は無意味の破壞であるが、總直ほしに直ほす事は現代にあて最も有

意味の一事業だ。

そも／＼吾人は個性のために生活する。個性が目的で文化は結果だ。個性を目的として行動する結果が文化だ。文化を目的として行動する結果は皆無だ。國家を目的とし、教會を目的として行動する結果が皆無であると等しい。個性を目的として把持し、把持して實現する限りに於て文化は生育する。個性を目的として把持し、把持して實現する限りに於て國家も隆昌し、教會も興榮すると同じ原則の發現だ。仰ぎねがはくば吾人々類のすべてをして、常に個性の信者たり行者たらしめよ。常時に於ても、非常時に於ても、離るべからざる最高價値は個性だ。民族的に個々人や個々家族が相結び、そして國家を形成し、創造する理由も、個性の保護成達にある。國は、たとひ地上の最大帝國または最大共和國を例に引いてさへも、國際的社會の一部的組織となり下がれるきのふけふ、實はなり上がれるきのふけふ、個性を目的とするといふ單純にして明白なるその存在理由によつて、爾餘の國際的社會に對して新機能を産出しなくては却つて無用有害のものとなる。新機能とはほかでもない。爾餘の國際的社會と協力して、各國はその國内の個性に對する義務を果たすやうに努力しなくてはいけないといふ事だ。國家のための國家といふ考へは、道具のための道具といふ考へよりも一層酷烈に聰明を缺いてをる。國家に意識なし、これを造營し、行使する人に意識も、意思も專有されてをる。人は國民だ。民族だ。多くの個性だ。多くの個性としての國民の一責任は、今の時に當たつては、自國をして、個性と國際的社會との完全通路たらしめるにある。自國と他國との間に有機的組織發達すれば、その國際的社會の一部に對する奉仕は、間接にはその全體に對する奉仕となる。現在の制度と習慣と常識道德とに從へば、個性と社會との充全關係は、その社會を國内的社會に限つた場合に於てのみやゝ成り立つてをる。しかし、社會を國内的社會に限るといふ事は、不可能でもあり、無理でもあるが故に、個性と社會との充全關係は國內的社會に於てさへも成り立つてゐない。古へ重盛は、忠孝二途の選擇に當惑したといふ。今日の知識ある個性、自覺した個性は、國家的社會に對する奉仕と、國際的社會に對する奉仕との間に去就を決するに苦しむ場合があらう。原則的には、個性の一元を擁して萬境に處して誤まりなきを得る筈であるから、問題もないわけだが、實際に對國家的社會奉仕と、對國際的社會奉仕との綜合的活路を發明するには、時として非常の智慧を要するのだ。吾人は早く新らしい制度と習慣と常識道德とを確立して、精力の浪費を防がねばならん。

吾人は歷史を無視しない。人は草木の如し。草木が有する本質を草木以上に有する人は、草木が帶ぶる制約を草木以上に帶ぶ。草木は培養すべく、開發すべし。他から生命を附け加へたり、置き換えたりする事は出來ない。人に於てこの理は遙かに多く顯著だ。社會の本體は人だ。社會は成長と出生とを能くすれども、作製と機械的變改をば、成長の補助としての限りに於て許す。『社會心理學』の著者ウイリヤムマクヅーガル氏は、新日本の發展の主原因を、封建時代の武士大名に歸してをる。人間主義の唱導者シラー氏なども同じ見解を採つてをる。封建時代の武家道德に保有されたる一種の誇りに新日本創造の眞氣力を認めるのだ。この見解にどれほどの科學的價値があるかは別問題として、ニーチェや、或心理學者が、傳統的蓄積に多大の意義を發見するのに妄見ばかりはない。大家の三代目が馬鹿である事もしばしば以上であるが、名門の子々孫々が上品である事も通例だ。國としての英國の信用性なども一例だ。成長した倫敦と、製作された伯林とを比べて見ても兩者の各に長短は看取される。牛津の草庭には、三百年の丹精を經過して始めて今日の光澤と姿態とを結果したと稱せられるのがある。亞米利加の成金をして、金で買へぬ價値は精神的財寶のみに限らぬ事を愕然として反省せしめたといふ。制度は生命の衣服だ。衣服は新裁する事が出來るけれども、生命は保育し、產出するほかない。ローマの都市を三日で作る事は出來るかも知れない。其住民を三日で作る事は出來ない。竹が松にならず、梅が櫻にならぬ單純な事實の中に、生物進化の大法が窺はれる。社會に於て此大法は複雜に支配してをる。すべての論理的價値もしくは理想は、歷史卽ち進化の法則のそとではなく、上に立つほかない。進化の法則を最も經濟的に使用する方法が理想であらねばならん。して見ると、理想の目的は歷史だ。歷史を活かすにある。現實の生活として到達した歷史を、一層其生活の本質的要求に忠實な狀態に到達させる努力が理想主義だ。近代も最近代に近づくに隨つて、民族主義が不思議なほどの自信と公認とを得て來た現象なども、經驗と智識の進んだ結果として、人類の到達しさうな境地だ。しかしながら、歷史も、其核心は個性だ。多少分明に實現された個性だ。個性の生產が文化であり、個性の組織が社會であらねばならん。歷史は文化を目的とし、また社會を目的とすると考へる人があるならば、それは、歷史は個性を目的とするといふ事を具體的に言ひ表はしたにほかならぬものでなくてはならん。歷史が原子的に分有されてゐて、有機的に共有されてゐない事が過去及び現在が將來の世界、卽ち理想の世界に劣る一點だ。日本人は古事記以前からの歷史を特有し、支那人も露西亞人も亞米

利加人も皆な多少その各自特有の歴史を背景として現存する。個性の特異質は、宇宙に於ける空間的位置の特異によつて最も露骨に象徴されてをる如くに、永久にその存在を失はない。しかしながら、各個性の間に、なるたけ多大の作用、被作用が行はれるやうになる事が各個性の進化だ。即ち各個性の間に有機的關係が發達する事が各個性の成長だ。個性の差別はパースペクティヴの差別として發展しなくてはならん。部分の深化として、充實として保存されねばならん。社會が國際的になり行く事は、歴史が國際的に共有される事だ。個性の組織も、個性の生産も、國際的になり行く事だ。國内的生活の純化と組織とは、國際的生活の純化と組織とに到達する一準備として價値を十分に帶着するのだ。純化とは合理化といふ事だ。本質的價値と偶然的價値との識別、その識別に基づく整理をいふのだ。社會主義はその一企圖だ。若しそれ個性は、他の個性と組織されるほど實現の機會を增し、力の餘裕を生ずるの理を推し窮むれば、協力をば國内に限つて採用し、國際には競爭のみを追求する現在の各國の實行と心志とは、偏へに不聰明の譏りを免かれない。個性の比較的に高度に賦與されたのが天才だ。天才に至つては、殊にその天才が大なれば大なるほど、機會の貧しきを感ずる程度が高い。されば、ナザレスの工匠の一兒は、「すべての權威は余に與へられたり、天に於ても、地に於ても。されば汝等行け、そして諸國民を弟子となせよ」と號令した。ナポレオンやロイド・ジョージ氏は、コルシカやウェールスの愛國者から出發して佛蘭西や英帝國の愛國者となつた。有爲の青年男女は、概ね大舞臺に出たがる。凡才と天才との差は五十歩百歩の差に過ぎない。凡才といへども、否な實に不具、廢疾、低能その他の最弱者といへども、機會には常に不足を告げてをる。生活の本質上さうなのだ。吾人はいかなる個性に對しても、十分に機會を供給する事は出來ない。なるべく完全に近い機會を供給し得るだけだ。個性は成長する多態だからだ。何事ぞ當今の政治は、個性のために求めて飽くところなかるべき機會を好んで制限せんとはする。愛國の名に於て各國は亡國しつゝある。

私は單純に自由貿易の即時遍現を理想として主張しない。保護主義にも個性愛護の智慧が多少含まつてをる。しかしながら、國境を乘り越えて個性間の生活交通が發達するに隨つて、自由貿易を最大限に進め、保護主義を最小限に退かせ行く事が正當手段だと考へる。經濟生活上に於ける自由貿易の原則は、文化生活上にも、政治生活上にも、異曲同工に適用される價値を有する。優良なる製作品は、及び原料は、その本質的價値（イントリンシック ヴァリュー）を唯一の力として、國際的社會に機會を見出だすが如くに、優

良なる人物も、その訓練せられたる形に於て、及び教育され得る形に於て、同じくその本質的價値を唯一の力として、國際的社會に機會を見出だすやうに制度、習慣、及び道德が進まなくてはいけない。國內を見れば、近頃の大官は薩長土肥から出るとのみは限らず。英國などでも、ロイド・ジョージ氏を首めとして、ボーナー・ロー氏でも、スマッツ將軍でも、ヒューズ氏でも、その帝國の綱となり柱となつた最近の人物は、隨分超閥的出身だ。横に各地方各民族から人材を擢用し、縦にまた各階級から品性能力を拔採する方針は、增進的傾向だ。國際的に特許權の保護はあつても、一國の學者の發明は、空氣よりも容易に他國の學界に途を穿ち、一民族の藝術家の作品は、無線電信よりも簡單に他民族の藝術界に傳達する。信仰といふ最貴重の生活價値をば、基教、回教、佛教、それぐ〜に百方策を講じて押し賣りまでする。主義、理想、人生觀、これらほど切實な所有件はなからうに、これらをば何國民も壟斷しようとはしない。プロパガンダが常例だ。地上の各個性を目的として諸民族諸國民を組織し、すべての場合に、個性の本質的價値が比較的に偶然的な他の價値に對して優先權を與へられるやうにしなくてはならん。性能の特殊化を方法として、各地方と各民族とを組織する事が急要だ。各地方とは土地を本位として觀たる生產力をいふ。甲州の水晶に於ける、豆州の山葵に於ける如し。各民族とは、人を本位として觀たる創造力をいふ。佛伊人の藝術的なる、獨人の工業的なる、英人の商業的なるが如し。けれども、民族的分類に與ふるに個人性的分類に與ふる以上の機會と特權とを以てするならば、それは本末顚倒だ。個人性に奉仕する事を目的として、その目的を達するための一手段として、吾人は民族性に奉仕すべきであるのだ。民族性に對する吾人の奉仕は、それ故に伸縮緩急の調節を要する。終始一貫して死守すべき根本原則は個人性に對する奉仕だ。民族性に對する忠義は、個人性に對する忠義の一適用たる位置を占むべきであるのだ。個人的性能を善待し正遇する基礎を確設して、その基礎の上に諸般の具體的實行目錄を立案する事になれば、今日の國際的競爭關係は、過半まで國際的協力關係に改正されよう。軍備費と軍備力は次第に教育、科學研究等の方面に轉換される。無能無勞有產有權の國と民とは不安を感じ、世界の勞民國は希望を生ぜん。住み心地よき地上とならう。勿論現在の富強國民が、現在の貧弱國民に比して、其個人性的價値に於て低劣であるとは思はない。大體はその逆が眞實だらう。しかしながら、個人的性能に對する社會の奉仕には、例外を許さぬやうにしたい。その見地標準から判斷すれば、現在の國際關係は純化、合理化の

餘地を殆ど限りもなく所有してをる。社會主義が國內の階級別に向ける批評が、單純に國際の「力の權衡」（バランスオブパウアー）に向けられてよい部面さへある。

けれども、普遍的改良を希望する者は、自己が率先してその責任を負ふ誠意がなくてはならない。各國が聰明なる政治的單位となる事が必要だ。各民族が、同胞にも時あつてか公敵を發見し、異族にも時あつてか公友を發見し、敵を內外に征服し、友を內外に糾合する道義的決意を確把する事が必要だ。

國內的社會に於ては、參政權は佛蘭西革命以來列國の採用するところとなつて今日に及んでます／＼普及發達せんとしてをる。明日は、生產經營權乃至廣く參產權參富權が人類の興味の渦心に持ち來たされるであらう。ホイットリ案や、ギルド社會主義がその不完全なる一徵象だ。明後日は、社會主義と國際主義と抱擁して、參政權と參產權參富權が國際間に問題とされる順序だ。好んで平地に波瀾を起こす事はわるい。しかしながら、傾向に曳きずられるが能なら、意思と智力は不用だ。正義と善の論理が明らかに指示する歸結をば、不明と薄信によつてのほかに閑却する事は出來ない筈だ。國民主義、國際主義、資本主義、社會主義を時代の最高良心、最高聰明の篩ひにかけて、殘る進化的要素を化合させて、個性主義を骨とした社會組織を實現せねばならん。兎に角、私有財產制と共產制とが研究され、批判される範圍區域を、國內的社會だけに限つてをる事は不覺悟だ。參政權問題を國內的社會に限つてをる事はそれにも增した不覺悟だ。自信ある民族は、日すでに三竿の高きに昇れるにも拘らず、戶を閉ぢて燭光の周圍に油を持ち寄るやうな眞似をしてゐるべきでない。鍬を肩にして荒蕪地開墾に出掛くべし。未踏の山野を測量する計畫あれ。

建國剏業の意思が、興國の民の持つべき唯一の意思だ。これ以上に完全な尙古崇祖の生活はないのだ。建國剏業せよ、建國剏業せよ。歷史と時代に對して耻かしからぬ質と形を具してだ。われこれを呼ぶに新社會主義の名を以てせん。個性主義の制度に對する略符としてだ。

繰り返して言ふが參產權の國際的改變が必要だ。國際的參政權と國際的參產權、この兩事は結合して吾人の解決を待つ活問題だ。地上を純一なる政治的單位と觀る事を學ぶと同時に、吾人は同じ地上を純一なる經濟的單位と觀る事を學ばねばならん。人類はすでに文化的及び道德的に純一なる單位である事を何人か否定し得んや。その人類が經濟的に純一無二の單位でないとは何人の短見が言はす妄語ぞや。航空機の發達は、再び吾人の無想像なる倫理見を遙かの後方に取り殘さん。新社會主義

の演繹的原則を樹てよ。確信的背景なき歸納は夭折する。現存の國際聯盟がその一例だ。進め。個性主義の聖旗を擁して新社會主義へ雄進せよ。

社會問題と其思想的背景

法學博士　吉野作造

(一)　社會問題發生の史的因緣

——社會問題の本質——貧乏問題の勃興——貧乏問題に對する舊式の解決策——

社會問題と云ふ言葉は今日非常に濫用されて居る。從つて俗用の語としては其意味頗る廣い。其影響が社會的なるものをすべて社會問題と云ふなら、大抵の問題は此中に入つて了ふ。けれども我々が一つの專用的術語として使ふ時には、其中特に原因が社會的なるもの乃至其解決が社會的なるものに限定しなければならない。例へば禁酒問題の如きは、單に其影響の點より觀れば社會的問題であるけれども、亞米利加などでやつたやうに法律で禁じなければ之れを撲滅し得ないといふ性質のものではない。酒を飲むと飲まざるとは純然たる個人的事項であつて、隣りの人が罷めないから自分も酒を罷める譯に行かないと云ふ抗辯を許さない。之に反して同一種類の商工業者が無用の競爭を避くる爲め、値段の協定をしたと云ふやうな場合に、一人でも其約束に背くものがあれば、他のものは如何に良心の苦痛に堪へないからとてどこまでも先の協定を守ると云ふ譯には行かない。之を守れば自分の生業は自滅の運命を免れないからである。從つて此問題の解決は自分一個の問題としてゞなく全體の問題とする見地から發足しなければならない。禁酒問題が社會的に影響ある重大な事柄であるけれども、問題の本質上之は個人々々の獨自の決心に係る問題に過ぎないと云ふ意味に於て我々は所謂社會問題と云ふ言葉に一種の形式的限界を置かん

とする。

社會問題の本質を明かにするには右のやうな形式的限界を附する外、更に實質的內容を特定しなければならない。單に形式的限界のみに着眼するならば、政治問題などの多くは皆社會問題になる。而して所謂政治問題の分野以外に於て社會問題が獨立の存在を主張し得る所以は其實質的特徵にある。然らば何が此方面の特徵かと云ふに、そは云ふ迄もなく我々の物質的生活に關する問題だと云ふ點である。更に委しく云ふならば、世の中には容易に自分の其日其日の生存をすら營みかねて居るものがあるが、之が其本人にとつても又社會全體にとつても重大な關係があるから、之を何とか始末しようと云ふのが卽ち社會問題の實質的方面である。一言にして云へば貧乏根絕の要求が社會問題の對象である。今日の所謂社會問題は更に一步を進めて貧乏の原因を探究し、斯くして經濟上の分配の不正を正さざるべからずとか、又は今日の社會は、社會を構成するすべての個人に對して、少くとも最少限度の生活を保障せざるべからずとか說くやうであるけれども、要するに其根本となる主張が貧乏を根絕しようと云ふ點に存することは疑を容れない。

要するに社會問題の何たるやは右述べた如く、形式的並びに實質的の兩方面から其意味を定めねばならぬことを繰り返して述べて置く。

社會問題を其實質的方面から觀れば貧乏根絕の要求である。少くとも社會問題發生の初期に於て其發生の動因がこゝにあつたことは疑ひを容れない。併しながらこゝに我々の深く注意せねばならぬことは、貧乏根絕の要求は、實は決して最近に初めて起つたのではないと云ふ事である。觀よ、昔から何時の時代でも貧乏の根絕と云ふことは時の政治家の頭を惱ました重大問題ではなかつたか。貧乏人の存在は所謂測隱の心を刺戟して已まなかつたと云ふばかりでなく、社會の公安にも重大の關係ありと云ふ事は昔から政治家の見誤らなかつた所である。民をして恒心あらしむる爲めには先づ恒產あらしめねばならぬと云ふのは、獨り支那の聖人の思想に止らなかつた。斯くの如く貧乏の根絕と云ふ事は昔から政治家の取つて以て重大問題とせる所なるに之が何故に十九世紀になつて社會問題と云ふ特別の形を取つてあらはるゝやうになつたか、こゝに我々は大いに考ふべき或物を認めなければならないのである。

一つの理由は、十九世紀になつてから、所謂貧乏人が激增したと云ふ事情を擧げなければならない。英吉利に於ては十八世紀の終末、歐羅巴大陸にあつては十九世紀の初頭、所謂產業革

命の激動によつて社會組織殊に經濟組織が著大な震撼を蒙むつたことは今更ら說くの必要はない。斯くして中產階級の壞倒、賃銀勞働者の激增、即ち引括めて云へば多數貧乏人の簇出と云ふ現象を呈し、而かも之が國民の大多數を包含する一階級として認識せらるゝやうになつた。之が社會の各方面に從來思ひ及ばなかつたやうないろ〳〵の重大な影響を與へた事は當然の勢で、從つて其處から貧乏問題考究の必要が一層强く感ぜられたのである。

併し單にそれ丈けなら、貧乏問題の攻究が從來より强く感ぜられたと云ふに止り、之が社會問題と云ふ特殊の裝ひをしてあらはれる必要はない。貧乏問題が更に社會問題となつてあらはるゝについては貧民の激增と云ふ事の外に、何等か他の重大なる要素が加らなければならない。それは何かと云ふに、今度の貧乏問題は從來のやうな遣り方では兎ても解決が出來ぬと云ふ經驗的信念である。當時の人は未だ何の故なるをよく呑み込めなかつたが、兎に角從來の解決方法に滿足せず、何等か新らしい解決方法を求めなければならないと感じた。從來の解決案に對する不信の念が彼等を一層新方策の發見に焦慮せしめたが、其上問題の實際的急迫は益々彼等を驅つて心を碎かしむる。貧乏問題が十九世紀の初頭頃に勃興した所以は畢竟此處にある。

貧乏問題に對する從來の解決策は、如何なるものであつたかと云ふに、それは畢竟勤儉貯蓄を說いて貧乏に苦んで居る本人の道德的覺醒を促すと云ふ事に外ならなかつた。此方策は貧乏の原因に關する舊時代の思想に基くものである。今日でも我々が貧乏の原因を常識的にアツサリと考へると、不運と懶惰との外に之を見出すことが出來ない。運不運は何人にも免れないが、併し之は勤勉によつて恢復の出來ない事もないから、結局貧乏の絕對的原因は懶惰の一事に歸せざるを得ない。然らば、貧乏の原因を除くには個人の覺醒を促して勤勉ならしむるにある。所謂勤儉貯蓄の道德的教訓が問題解決の殆んど唯一の方策であつたのである。

加之、當時の人の經濟學的確信によれば凡そ人は相當に努力さへすれば、其得る所必ずや必要とする所を償うて餘りあることを疑はなかつた。所謂稼ぐに追附く貧乏なしと云ふ諺は此確信あつて初めていひ得ることである。尤もマルサスのやうに食物の增加率は到底人口の增加率に伴はずとなし、永遠の貧窮を以て人生必然の運命と說いたものもないではないが、斯くの如きは稀れな例外に屬し、多數の人は勤勉を以て貧乏を征服し得べしと考へた。從つて貧乏の原因は全然個人々々の精神的缺陷

にあり、道德的覺醒は即ち同時に物質的生活を改善する所以なりと考へた。かの二宮尊德の如きは斯う云ふ思想を最も明かに唱道した舊時代の好個の代表者であらう。

扨、此解決法を新たに起つた貧民問題に適用して見る。人々は直ちに其行ふべからざるを發見した。何故なれば彼等は、如何に勤勉に働いても貯蓄すべき何物をも殘し得ないと云ふ境遇にあつたからである。必要とするものを償うて殘りあればこそ勤勉に働く、勤勉に働いて先づ殘る所を貯へ得ればこそ將來の計劃も立つる氣になる。如何に働いても殘る所なしとすれば、今日の生活に追はるゝ勞働者に何の遑あつて勤儉貯蓄の勸說に耳を籍すことが出來ようか。斯くして結局彼等は遂に相當に努力しさへすれば必要とする所を償うて餘りありと云ふ舊時代の經濟原則が新時代に於ては全く行はれなくなつたと云ふ事を發見した。所謂稼ぐに追ひつく貧乏なしと云ふ說は、昔はイザ知らず現代には適用がないと云ふ事に氣附いた。

何故に然るやを後に至つて經濟學者の說明する所によると、賃銀勞働制度の發生の爲であると云ふ。所謂產業革命は資本主義的大量生產の隆興を效し、產業經營の實權は所謂資本家の獨占に歸し、直接富の生產に從ふ勞働者は彼等の貢獻の如何に係らず豫め一定の賃銀を受けて、僅かに其生存を維持するに過ぎないものとなつた。其も可なり高い賃銀を貰ひ得るならいゝ。所謂契約自由の空名の下に虐げられて居る勞働者は事實契約締結の自由もなく、又契約の內容を決定するの自由もなく、一に雇主の云ふが儘に服從するの外はない。雇主には勞働者を使するに多大の利益を有するも、使役せずとて非常の苦痛あるでなく、少くともそれを他日に留保するの餘裕あるが、勞働者は今日の生活に差閊へる所からそんな暢氣な餘裕は毛頭ない。斯くの如きものゝ間に如何なる約束が取換はさるゝかは初めから明白だ。即ち勞働者の賃銀が踏み倒し得るどん底の最下限で極まらなければならない。と斷言すれば今日の實際と合はないかも知れないが、少くとも勞働資本兩者の懸引の進行が大體斯う云ふ傾向にある事丈けは疑ひを容れない。今でこそ段々勞働者の境遇もよくなつたが、產業革命の起つた當時の勞働者の境遇は實に非慘なものであつた。即ち彼等はヤツと食ふか食へぬかの賃銀を得るに止つたから、喰つて了へば何の殘る所がない。勤勉すると否とには係らないのである。斯くして彼等は自ら其地位を向上するの餘裕もなく、不時の災厄に備ふる事や、老後の計をなすことに絕望しなければならないのみならず、一旦貧民勞働者の地位に落ちれば此呪ふべき運命を子々孫々に傳へなければならない事になつた。斯う云ふ現象を目して人はよく、

貧民と云ふ固定的社會階級が十九世紀の初めから發生したと云ふのである。

貧富と云ふ二つの階級の對立は昔からある。けれども昔は其間の懸隔が著しくなかつたのみならず、甲が乙に墮し、乙が甲に昇ると云ふ融通も利いた。士農工商と云ふ階級は固定的であつたけれども、貧富と云ふ階級は固定的でなかつた、而して從來の固定的階級別を打破した事に特色を有する現代文明の世の中に至つて、意外にも、男が女になり得ないと同じ意味の固定的階級別を貧者と富者——勞働者と資本家との間に確立するを見るに至つたのは誠に不思議な現象と云はなければならない。一國の貧民勞働者がさう云ふ意味の固定的社會階級であると云ふ意味をあらはす爲めにプロリタリアートなる言葉の發生した事は正に讀者の知らるゝ所であらう。

斯く考へて見ると今日の貧乏は最早や其原因を個人的に有つてゐない。運がわるかつたり、怠けたりした結果、貧乏人になつたものもある。此等は昔ながらのプーアーとして固より輕蔑に値するが、所謂プロリタリアートは自己の哀れなる運命は決して自己の精神的缺陷に基いてゐないと云ふ所に一種の誇りを有つて居る。否、誇りを有つて居る許りではない、自分に何等の道德的責任なくして獨り貧困に苦まねばならぬ運命に滿腔の不平を有つやうになつた。此不平の念は近來一般人文の進歩、殊に個人的覺醒の大勢と共に益々高まることは云ふを俟たない。斯くして此不平並びに自覺に基く向上の熱情と自己の地位に關する聰明なる理解とは、從來の方法とは全く違つた方面に於て解決の新方策を攻究せねば止まざらんとするの風潮を馴致したのである。而して、今や貧乏の原因は社會組織其物にあることが明かになつた。所謂個人的にあらずして社會的であると云ふ事に貧乏問題の新らしい取扱方が初められたのである。

終りに一言注意して置きたい事は斯う云ふ新らしい風潮の陳勝呉廣たるものは常に勞働者以外の所謂志士仁人であると云ふ事である。勞働者自らの問題を勞働者以外のものが先鞭を着けると云ふ事は、何も怪むべき事ではない。小兒の要求を先づ以て親が滿たしてやると云ふ事は餘計なお世話でもなければ、又其事が小兒自身の仕事であるとを妨げないと同じく、運動の初期に於て勞働者以外のものが、戰線に立つたからとて、或は之を無用の煽動と見做し、或は之を勞働者彼自身の眞の要求にあらずとするのは大いなる誤りである。

（二）貧乏問題の取扱方の變遷

——貧乏問題に對する舊い取扱方——時代の變遷と新取扱方の必要——サン・シモンの考——社會問題の論究と唯物的無神論との提携——

前段に述べた如く舊時代に於ける貧乏の原因は、主として當該個人の精神的缺陷に存するのだから、之が根絶策としては所謂勤儉貯蓄を說けばいゝ、個人の道德的改造が卽ち直ちに其物質的改善になる。だから道德的覺醒を計りさへすれば物質的生活の問題は改めて云ふの必要なく、ひとりでに解決が出來たのである。斯う云ふ時勢に於て物質的生活の方面の事は意に介するに足らず、否之に觸れないのが寧ろ主力を精神問題に集中する所以なりと考ふるものあるのも怪むに足らない。斯う云ふ考の最も明白なる代表者は耶蘇敎であらう。「人はパンのみにて生くるものにあらず、」と云ふ句は誰しも知る所であるが、其外馬太傳第六章には「生命の爲に何を食ひ何を飮み又身體の爲めに何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ……天空の鳥を見よ、播くことなく刈ることをせず、倉に蓄ふることなし、然るに天の父はこれを養ひ給へり、爾曹は之よりも大いに勝るゝものならずや……されば何を食ひ、何を飮み、何を衣んとて思ひ煩ふ勿れ、之れ皆異邦人の求むるものなり……爾曹先づ神の國と其正しきとを求めよ、さらば此等のものは皆爾曹に加へらるべし、此故に明日の事を思ひ煩ふ勿れ、明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり」と云つて居る。獨り耶蘇敎ばかりでなく、パンの問題の事なぞを思ひ煩ふのは卑しきことかのやうに一般に考へられて居つたが、こは道德問題をさへ解けば、生活問題は自然解決が出來ると云ふ時勢を念頭に置いて初めて意味をなす敎訓である。それでも生活問題は又生活問題として獨立に說かないでは本當に貧乏を根絶することが出來ないと云ふ見地から、世上の道學先生輩から侮蔑批難の鋒尖を向けらるゝに拘らず敢然道德と經濟とを併せ說いたものもないではない。我二宮尊德のエライ點はこゝにあらう。今日から觀れば分り切つた平凡な事を說いたに過ぎないけれども、時代を背景として觀れば、彼の達見は確かに一頭地を抽いて居る。併しそれでも彼の說は略ぼ勤儉貯蓄の訓を出でない。之が當時の時代に於ける貧乏問題の唯一の取扱方であつた。而して貧乏の原因が個人的であつた當時に於ては、此取扱方で間違ひはなかつたのである。

併しながら貧乏の原因は前にも述べた通り十九世紀に入つて全く變つた。從つて其解決法も亦變らざるを得ない。時勢の變

轉と共に新解決策の必要とせらるゝ所以である。けれども當時の人々は極めて稀な少數の例外を除いては、此時代の變遷に氣附かない。否、時代の變遷に伴ふ貧乏人の激增並に其解決の急務に迫られて焦りながら、其原因の何處にあるやについては依然として舊時代の夢を辿つて居る。相變らず勤儉貯蓄の旗を振り翳して時艱を救はうと云ふのだからどうしても大勢にそぐはない。そこで段々彼等は社會問題の攻究から遠ざかり又遠ざけらるるやうになるのである。

十九世紀の初め、貧乏問題の存在を社會問題として認識した多くの志士仁人は何よりも先に從來の解決策の全然賴むべからざることに氣附いた。にも拘らず多くの人は依然勤儉貯蓄の敎訓を振り廻はすので、初めは顰蹙し、やがて之を非難し排斥するやうになつた。こゝに基督敎會並びに精神問題を重要視する一派の人々と社會問題研究家との間に深い溝が出來る端緒を開いた。而して彼者の非難攻擊が高まると共に前者は益々躍鬼となつて防衛に努める、而かも其蒙を悟ずして益々其迷妄を固守すると云ふ所から兩者の間の渠は益々深さを增すのみである。さうなれば又社會問題攻究家も又遂に極端に進み宗敎家道德家の迷妄に反對すると云ふ勢が一轉して、宗敎道德其物にまで反對すると云ふ風に進んで行つた。

時代の變遷に應じて從來執り來つた政策を根本的に改めると云ふ事は、特に政治家などには最も六つかしい仕事のやうに思はるゝ。現に我國でも朝鮮や支那や將た西伯利に對する從來の政策が根本的に間違つた事が明白になつても、行掛り上之を改むるとをなさずして、强いて横車を押し通さうとして居るではないか。時勢の變に氣附いても改め難いのは政界の常、況んや世上には此時勢の變にすら氣附かざるもの多きに於てをや。今日我國に流行する所謂勞資協調運動の如きも勞働問題のよつて生ずる所以の根本原因を省みずして、只勞働資本兩階級の道義心に訴へんとするもので、明白に舊思想に根柢するものである。若し夫れ一部の政治家、實業家の間に尊德翁の報德主義を振り廻はすものあるに至つては、之れ白晝に行燈を持ち廻るの愚に均しい。尊德はエライ。けれども尊德を今日に生かさんとするものは此上もない愚物である。

何れにしても十九世紀初頭の時勢の變遷に際して歐洲の宗敎道德家は貧乏問題の取扱方を誤つた。此過ちが社會問題の攻究から宗敎道德を離しむるに至た。而して其結果遂に社會問題の攻究には先づ宗敎道德の問題を絕緣するを要すと誤り考へしむるやうになつた。之が社會問題攻究の前途の上に非常に重大な影響を與へたのである。

精神問題を大事だと觀た舊時代の通有の思想の代表者として、當時の耶蘇教を例に取らう。初期の社會問題攻究家は、當時の耶蘇教を如何に觀たか、と云へば云ふ迄もなく多數は之を輕蔑した。甚しきは之に徹頭徹尾反感を表したのもあるが、最も好意を表するものと雖も社會問題の解決として耶蘇教の無力を信ぜざるものはなかつた。此點に於てサン・シモン（一七六〇——一八二五）の說は最も我々の注目に値する。

彼は當時の普通の社會問題攻究家の如く耶蘇教を敵とは見なかつた。けれども彼は人類の完全なる救濟者として耶蘇教を許すことは出來なかつた。彼以爲らく、人類の救濟は靈魂のそれと肉體のそれと兩々相俟つて全うせらる。基督教は前者を說いたけれども後者には及ばなかつた。卽ち人類の救濟の一半をなし遂げたに止り、他の一半を後世の事業に殘した。我は此殘されたる半分を之れから成し遂げて基督と共に人類の救濟を完成しようと。斯くして彼は自分の說に新基督教と云ふ名稱を附し、第二の基督を以て任じたのである。故に彼は他の社會問題攻究家のやうに宗教を否認はしない。けれども之と相並んで人類の物質的幸福の源たるべき自然科學を强調した。何れにしても當時の耶蘇教は吾人の生活問題を解決し得るものでないと觀た點丈けは疑ひを容れない。

彼は靈魂の救濟以外に物質的生活の幸福を提唱し、靈魂の救濟も亦實は之れと牽聯すべきものであることを說いた。而て吾人の物質的生活の幸福は、全人類の力を協調して自然を征服するに在り、其爲に一方には自然科學の研究を强調し、他方には社會的不和（アンタゴニズム）を除去して同胞相倚の全人社會を力說する。此點から觀て現社會制度は各人相侵し相戰ひ、實に不完全極まるものなりとして改善の必要を絕叫する。茲に彼は一種の社會主義者なりといはるゝ點がある。而して彼が自然科學の研究と其應用に如何に努力したかは、彼の門下より數多き學者技術家を出したとによつて見ても分る。オーギュスト・コントの實證哲學體系はサン・シモンに負ふ所極めて多く、世人の往々レセップの創意とするスヰズ、パナマ等の運河開鑿は實に彼の慫慂に出でたものであることは隱れもない事實である。

彼は生前に於て已に基督教と相並んで人類の救濟を完成すると云ふ意氣込であつたから、其行動の形式に可なり鮮かな宗教的色彩を帶びて居つたが、一八二五年神々しき死を遂げた後の門弟は、神聖使徒團なるものを組織し、天主教會の制に倣つて傳道教會を設け、一定の服制を定め、男女の教師を派遣して布教宣傳に從事した。佛蘭西の國民が十九世紀の初め已に社會主

義的思想によく通じて居つたのは彼等の運動に負ふ所が多い。而して彼等は宗教、科學、産業、全人社會の四字を標語と掲げて居つた所を觀ても、宗教に對する相當の敬意を認むることが出來るが、それでも物質的生活問題の解決には全然關係がないものと觀た點に於て、宗教道德に對する當時の一般傾向を想像することが出來るのである。

サン・シモンの一派ですら從來の宗教道德の社會問題の解決になすなきを認めた。耶蘇教に對して彼れほどの好意と諒解とを有せざる一派が社會問題の解決に熱心になればなる程、却つて反感を有するやうになるのは怪むに足らない。何故なれば、當時の耶蘇教は、肉體の問題を論ずることを以て先にも引用したバイブルの文句にあるやうに異邦人の事と蔑み、時としては又教會の威嚴に關する冒瀆として逆襲し來るからである。耶蘇教は兎に角西洋に於て一般民心を支配する力の偉大なる丈け之より來る反抗逆襲には何よりも先づ戰はねばならぬ必要を認める。對手が强い丈け反抗心も强く、其極遂に耶蘇教に反對し、一から十まで耶蘇教を非難することが社會問題攻究家の大事な仕事と考へらるゝやうになつた。

單に之ばかりではない。彼等が耶蘇教を邪魔にするやうになつたについては外にも原因がある。それは當時の耶蘇教は尙未だ近世高等批評の試煉を蒙らず、中世以來の煩瑣な傳習的形式に捉へられて居つたからである。神の國と正しきとを求めよといふはいゝ、どうして之を求むるか、教會に來て永遠の祈りを捧げよと云ふ。我等は基督の足跡を辿り、一から十まで彼に倣へと云ふはいゝ、けれども基督が河中に全身を沒して浸禮を受けたから、我々も亦所謂洗禮によらず浸禮によるべしとか、又基督がヨルダン河で浸禮を受けたから、我々も亦ヨルダン河の水に浸るを要すとてわざ〳〵小亞細亞から之を輸入して一瓶何圓の値段で賣買するものあるに至つては、形式に拘泥するの極、我々の實生活と何の係はりもなきに至つたことを認めざるを得ない。さう云ふ流儀で新らしい考、並びに之に基く新しき形式の絕對的排斥によつて、辛じて舊來の傳習を守らうとするのが教會の現狀であつたから、新たに實際の生活問題に眼を開いた連中の之を侮蔑し、之に反抗したのは怪むに足らない。況んや教會は又パンの問題を說く事を以て異端邪說と罵倒したに於てをや。

十九世紀前半に於ける唯物思想の發達も亦之と相表裏して互に因となり果となつた事も大いに注意して置く必要がある。此等の點は普通文明史又は哲學史の說き古るした事であるから玆

に繰返して云はない。只本問題を進めるについて必要な範圍に一言するに止て置かう。即ち凡そ人はパンのみにて活くる者にあらざるも、叉パンなくしても活くる者でないが、舊き時代に於ては後の命題は前の命題にかくれて獨立の注意を惹かなかつたのが、十九世紀になつて新たに起つた特別の生活關係が、之を獨立の命題として取扱はねばならぬやうにした。人はパンなくしても活くるものにあらずと云ふ命題の發見、並にパンの問題が如何に人類の精神生活の上にも影響するものであるかと云ふ學説の發見は、斯の如き考の確立を促すやうな新生活關係の發見と共に十九世紀前半の文明の一大特徴と云つていゝ。而して此特徴の産んだものが、前代の幼稚な唯心哲學の崩壊であり、新たなる唯物思想乃至自然科學的人生觀の勃興である事は云ふ迄もない。斯くして社會問題の考察は軈て此等の新らしい思想と密接に提携することゝなつた。否、此等の新らしき思想を背景として社會問題は初めて其獨立の存在を主張し得るのである。

十九世紀初頭新たに起つた唯物思想の本分は、人はパンなくしても活くるものにあらずと云ふ方面を以て舊い思想を補充するにあつたのかも知れない。けれども舊い思想が餘りに頑强にパンのみにて生くるものにあらずとの偏見を固守する所から、遂にパンのみにて生くるものなりと云ふ風の極端論を唱るやうになつた。そこから唯物哲學が生るゝ。人は單純な物質的存在物に過ぎない。此點に於て他の生物と本質的に異なるものにあらずと云ふ所から、自ら萬物の靈長を以て任ずる所の自惚を排斥して、所謂自然科學的人生觀を樹てた。更に一步を進めては理想を否定し信仰を否認し、遂に無神論を主張するやうになる。斯くして從來の宗教道德に對する反動的新思想は唯物論であり、自然科學主義であり、無神的であり、而して社會問題攻究家は此等のものと共通の敵を有すると云ふ所から遂に兩者密接に提携して、自分等の結論をすべて皆取り入れると云ふ事になつた。社會問題の攻究と唯物論無神論の提携は本質上必然のものなりと考へ、無神論唯物論のあらゆる結論を取つて社會問題攻究の基礎とするやうになつた。こゝから所謂科學的社會主義が起る。而して最近新理想主義の勃興に伴つて、從來の所謂科學的社會主義が大いに動揺しつゝあるのも此邊から來る。

(三)　所謂科學的社會主義の發生

――社會問題解決策大綱――マルクス及び其學徒と唯物的諸主張――マルクス主義に對する反對――

玆に我々は姑く停まつて十九世紀初期以來の社會問題攻究家の解決策について一瞥するの必要と認める。前にも述べた如く、

彼等が此問題の攻究に指を染めた抑もの動機は、貧乏を根絶したいと云ふ熱心な要求にある。如何にして貧乏を根絶すべきかは本來所謂分配の問題であるのに、新らしき貧乏の簇出を以て社會的事情に基くとなし、之を生産問題として先づ解決に着手すべきものと見定めた所に共通の特色がある。即彼等は期せずして皆一種の共産主義を唱へた。少くとも共産主義的立場から私有財産の撤廢を叫び、所謂資本主義的生産の廢止を主張せざるものはなかつた。此點まではすべての論者皆一致して居る。只此目標を如何にして今日に實現すべきかについてはいろ〳〵議論がある。其中所謂社會政策論者は姑く別として、所謂社會主義者はプロレタリアートの支配權掌握を主張する。只プロレタリアートの全權を確立する爲めの第二の手段として立憲主義を取るや革命主義を取るやは、思想上に於ても又實行上に於ても今日大いに爭はれて居る事は讀者の知らるゝ所であらう。此等の點については先年本誌上に多少詳説した事もある。

富は畢竟消費するが爲めに作らるゝものである。分配の不公平並びに之より起る社會的悲慘を無からしむる爲めに生産の制度に加へたとしても、終局の目的たる我々人類の幸福は其の富を如何にして消費するかの問題の極め方に係る。社會問題攻究家は、此消費の問題についてどう云ふ態度を取つたかと云ふに、實は此方面は昨今段々論究さるゝやうになつたが、從來は比較的等閑に附せられて居つた。之れ一つには生産問題の解決が先決の緊急である他、此方が解ければあとはどうにか行くだらうと考へて居つたのかも知れない。マルクス以後の所謂科學的社會主義者が比較的此方面を等閑に附したのに、マルクス以前の佛蘭西の社會主義者は割合に此點に思ひを潜めて居る。大體に於て深い理論上の根據から説いたのではないやうだが、大別すれば三つの説に分けることが出來るやうだ。第一はバブーフの平等説で、生産機關はすべて公有とし、衣食住等の需要は性別と年齢別とを顧慮するの外は絶對に平等たらしむべしと主張して居る。第二はサン・シモンの説で報酬(レコンパンス)は須らく其勤勞(メリート)に正比例せざるべからずとて平等分配に反對して居る。第三はルイ・ブランの説で能力多きものは其れ丈け餘分に社會に對して盡すの天分を有すとて、サン・シモンの説に反對し、事情の許す限り各人は、其實際に有要なる丈けを獲得しなければならないと云ふ需要標準説を唱へて居る。之れ皆分配消費の問題に關する最近の學説の發達相照應する所あるが、然し何れも「思ひ附き」に過ぎないので、學理的論結と云ふ事は出來ないやうだ。而して十九世紀後半の科學的社會主義は生産問題に沒頭し過ぎて此の點の攻究を多少等閑に附した嫌ひあることは前にも述べた通

りである。

　マルクスが社會主義の鼻祖といはるゝ所以は、彼に到つて初めて私有財産の廢止、資本主義的經濟組織と云ふやうな要求が學理的に確立されたからである。同じやうな思想は彼以前にもあつた。併し昔のは貧乏を根絶したいと云ふ慈善的動機からいろ／＼思附きを整理併列したまでゞ確實な科學的認識の必然の要求としてあらはれたものではない。從て之に對する解決策も彼に在つては相對的價値を有するに止り、マルクスの如く學理に根據する絶對的權威を要請するとは出來なかつた。斯くして從來の主張にはユートピアン・ソーシアリズムなる名稱を與へ、マルクス及び其學徒の主張をば之に對して科學的社會主義と呼んでおつた。而してマルクスの所謂科學的社會主義の基調をなすものは云ふ迄もなく餘剩價値説と唯物史觀論とである。經濟學上、生産の要素に關する彼の特殊の見識と又彼の一家獨特の唯物的人生觀とが其背景をなして居ることも改めて說くまでもない。

　思潮の大勢を說く本論文の目的よりすれば、所謂科學的社會主義をマルクス及び其學徒の主張と云ふ風に解して置きたい。マルクスが「資本論」の上で說く所は結局何であるかについてはいろ／＼議論があらう。甚しきはマルクスを一種の理想主義者と云ふものすらある。併しながらマルクスを中心として十九世紀後半の思想界の一半を占領したマルクス主義は、已にマルクス自身の一家言より獨立して一個の學派を作つて居る。而して此學派が自己の主張に科學的なる形容詞を冠せしむる爲めに背景として取つた所のものが唯物思想であることを諒解すればそれでいゝ。

　そこでマルクス派の社會主義は餘剩價値説と唯物史觀との二大項目の外に、更に唯物思想に根柢する諸ろ／＼の學説を取り入れた。是に於て社會主義の社會學、社會主義の倫理學、社會主義の教育學と云つたやうな、一團の特別の學說が發達した。一つの例を引かんか。唯物的社會主義は人間を以て全然其物質的境遇の奴隷と觀るから責任は境遇にあつて、人にない。故に罪を犯すものがあるとする、其人がわるいのではなく、境遇がわるいのだ、境遇を變へさへすれば、惡を除き罪を亡ぼしめることが譯もない。こゝから特別の倫理説も出れば特別の刑法論も出て來る。而して境遇さへ改むれば一切萬事の解決が着くのだから、人心に及ぼす外形的制度の影響を萬能視し、制度の改革に絶對の價値を認める。從つて改革の爲めに手段を選ぶと云ふが如きは無意義になる。革命的直接行動の歡迎せらるゝ所以

である。直接行動によつて滅ぼさんとする當の敵は云ふまでもなく資本家階級であるが、之に對するプロレタリアートの所謂階級鬪爭は、鬪爭其物が目的である。他の目的を達する爲めの手段ではない。從つて如何なる場合に於ても敵たる階級との妥協を絶對に否認する。其外にも數へ立てればいくらもあるが要するに社會主義の思想の適用に關し、並びに之に附屬する諸ろ諸ろの主張の中には、資本主義的經濟組織の改造と云ふ根本義の外に、唯物的人生觀に發源すると觀ねば諒解の出來ないやうな綱目が頗る多い事を認めざるを得ない。

そこで我々はマルクス派の社會主義の議論に接する時に、純粹な社會主義の主張と、之に附帶する諸ろ〳〵の唯物的主張とを少くとも理論の上に於て區別して考ふる必要がある。所謂マルクス主義には此等のものが密接に結び附いてあらはれて居る。純粹の社會主義の思想が、從來等閑に附せられた物質的生活の問題も亦大いに省られざるべからずと云ふ新要求から起り、此考の流れが更に極端に進んで、すべての物事を全然唯物的に觀ると云ふ考を發生し、さう云ふ歴史的因緣から兩者が一つとなつてあらはれるのは止むを得ないけれども、理屈の上からはどうしても此等を區別して考へなければならない。何となれば野菜の外に肉を喰へと云ふ事は肉ばかり喰つていゝと云ふ事と同一でない如く、右の兩者は本質上必然に相伴はねばならぬものではないからである。況んや唯物思想は前代の幼稚な而かも執拗な唯心論に對する反抗として起つたものに過ぎずそれ自身單獨に眞理として受け取らるべきものでないからである。

そこでよく考へて見ると、マルクス主義は初めから相當に強く主張され又廣く受取られて居つたやうだが、第二の唯物思想に根柢すると觀るべき附帶的主張は決して其儘には受取られてゐなかつた。姑く之を社會主義の實際運動に觀よ、獨逸に於けるラツサールの政黨運動は決して唯物思想と兩立するものではない。一種の理想主義者たる彼の社會主義的運動の根本は、初めからマルクス主義と兩立し得ざるものであつた。此兩立し得ざる二つの潮流が器械的に結合されたものであつたから獨逸の社會民主黨は十分に本當の進歩發達を遂げ得なかつたのだ。ベルンスタインを旗頭とする修正派の思想及び傾向は或意味に於て唯物思想と結んだ社會主義の煩悶であり、或意味に於ては、唯物思想から理想主義に乘り換へんとする社會主義の苦しい試みと云つてもいゝ。之を要するに、私有財産に對する非難、資本主義の排斥を說く限りに於て社會主義は正しい。それ以上に一

歩踏み出すと、何となく人はオイソレと承認し難いやうに感じる。之れ科學的社會主義が一面大いに、其勢力を擴張して而かも何處かに發展の障礙を感じて居つた所以である。

此秋に方り從來社會問題の研究に冷淡であつた、否殆んど沒交渉であつた宗教教育家の方面が、新たに迷夢より醒めて進んで此問題に手を延ばすやうになつたのは注意すべき現象である。彼等は初め生活問題の考察は恥として蔑んだ。けれども時勢は何時までも斯くの如き固陋の見を持するを許さない。軈て又段々時勢を聰明に透觀するものも出て來る。斯くして理想主義者の方から進んで社會問題に手を出すものが殖えて來た。耶蘇教なども近年頻りに社會事業を說くやうになる。宗教家以外でも教育家思想家等の此問題に憂身を窶すものも少くない。英吉利のフエービアン・ソサイテーの如きは此方面に貢献した最も著しいものである。而して斯う云ふ所から新たに明かになつた事は、社會問題の攻究には必ずしも唯物論に依らなくてもいゝと云ふ事である。理想主義的立場を取つても社會問題は立派に取扱へると云ふ事が明かになつた。さうすると社會主義は何時までも唯物論に未練を殘して居る必要はない。そこから段々社會問題の攻究殊に社會主義の主張は其思想的背景を異にするやうになる。

斯う云ふ新らしい傾向が出て來ると、從來の社會主義者自身も亦大いに考へさせらるゝやうになる。彼等が一面唯物的に從來の傳習的說明に不知不識累せられて居りながら、他の一面に於て少くとも部分的に、理想主義的に變らざるを得ない。之れ我々が社會主義者の最近の主張の中に最も鮮明に觀る所のものである。只玆に一言すべきは彼等の實際運動になると多くは依然として唯物的範圍を脫却しないと云ふ事である。昨今西洋諸國を襲うて居る勞働不安の如きも萬事が著しく唯物的になつて居る。ボルシエヴイズムの流行、サンヂカリズムの隆盛皆然りであるが、併し之は今日まで資本家階級が餘りに專恣橫暴であつた事の反動であつて早晩此傾向はもつと緩和せらるゝものと信ずる。故に今日の實際運動が唯物的なるは過去に於ける唯物論流行の餘勢であつて、今日の思想的背景が理想主義的なりとすれば、其影響が遠からざる將來にあらはれて、實際の運動ももつと穩和な色彩に染むるであらうと信ずる。

(四) 社會問題の取扱に於ける理想主義の影響

——社會問題の解決に於ける理想主義の適用——社會問題攻究の動機の變遷——社會主義の最近の態度——社會問題の將來——

西洋の勞働運動などが、近來著しく過激化したことは疑ひを容れないが、併し之のみが西洋勞働運動の基調ではない。過激主義の特徴は制度の改革に手段を擇ばざる所にある。手段を擇ばざるは人類の生活に及ぼす制度の影響を萬能視する所から來る。畢竟唯物思想の產物に他ならない。之と反對に制度の偉大なる影響を認めつゝ、尙人類の生活にはもつと根本的な精神的方面あるを認め、制度の改革が如何に必要なればとて、之を遂行するに手段を擇はず、爲めに肝腎な根本の精神生活の前途を傷けるやうな事があつてはならないと頗る愼重の態度を取る一派が早くからあつた。斯う云ふ基調から離れず社會問題を解決せんとするのは取りも直さず理想主義の指導に甘んずる態度ではないか。而して寧ろ此方は最近まで歐米の社會改造運動の主たる基調であつて、今日と雖も一時過激主義が大いに頭を擡げて居るとはいへ、全然之に壓倒されたと認むべきではなからう。

社會主義の運動の發達の沿革に見ても、マルクス派の說は初めから文字通りに行はれなかつた事は前段にも述べた通りである。只昨今過激主義の流行を來すに至つた所以は、直接には露西亞に於けるレーニン一派の成功の結果であり、間接には社會主義者などの最近數十年來の絕叫に拘らず資本家階級の頑迷が之に面を背けて更に其要求を聽かなかつたからである。そこでプロレタリアートの勘忍袋の緒が切れた。斯くして一時唯物主義的過激主義の流行を觀るものであつて、之が今後の社會問題解決の動かすべからざる根本方針を豫定するものと觀るのは恐らく大いなる誤りであらう。

戰爭以前に於ける社會主義的運動の大勢を觀るに、文字通りのマルクス主義は殆んど行はれず、所謂立憲主義が全盛を恣まゝにして居つた。立憲主義が資本的議會制度に對する不滿の聲と共に昨今頻りに非難せらるゝけれども、之には自ら他の理由がある。別の機會に於て說く事があらう。少くとも勞働運動などの範圍に於ては議論は兎に角、實際運動としては直接行動よりは成る丈け合法的手段に藉らんとし、資本家に對する階級鬪爭に於ても、或る階級の撲滅よりは自他階級の融合を主眼とした。プロレタリアートの支配權の確立を要求する場合に於ても其所謂プロレタリアートとはブールジョアヂーを撲滅すべき對立關係にある庶民を云ふのではなくして、凡ての國民が皆あらゆる特權を捨てゝ庶民階級に沒入すべしと云ふ意味に於て稱へらるゝのである。過激主義から云へば今日の人爲的法律に基いて手段の合法不法を論ずるは無意義であり、掠奪階級を撲滅するとが一擧に黃金時代を打建てる所以の唯一の捷徑である。戰前の勞働運動が事實に於て此主義を認めず、吾人の心奧より發する理

性の聲に絶えず耳傾けつゝ運動の歩を進むるに愼重の用意を缺かなかつたのは、最も注意に値するものといはなければならない。

戰前に於ける主たる考が右の如くであり、而して戰爭を機として新たに起つた社會並びに人生に關する新らしい思想と決心との何であるかを思ふ時に、我々はどうしても昨今の勞働界の過激化を以て一時の變調と認めざるを得ない。今日の人心がすべての點に於て理想主義的に覺醒しつゝある場合、勞働運動のみ獨り唯物的基調を取つて動かないで濟むとはどうしても考へられない。

實際運動が過激化しつゝある他の一面に於て、理想主義的思想が大いに社會問題の攻究に喰ひ入つて居ろとの他の證據は、社會問題攻究の動機の昨今の變遷について明かに之を觀ることが出來る。十九世紀初頭に於ける社會問題攻究の動機が貧乏の根絶の要求にあると云ふ事は先きにも述べた。之が前世紀の中葉以後に至つて經濟的正義殊に分配的正義の確立と云ふ事に變つたが、最近では生存權の保障と云ふ事に移つて來た。否、少くとも移らんとしつゝあると云へる。此最近の變遷がよく突詰めて觀ると、唯物主義の根柢から理想主義の根柢への移り變りを前提しなくては諒解が出來ない。

貧乏根絶の動機から分配的正義の確立に變つたと云ふ歷史上の説明は、固より今日の貧乏根絶と云ふ動機から社會問題の攻究に從事しつゝあるものゝ存在を妨げない。河上博士の名著「貧乏物語」、北澤教授の譯に成れるホランダーの「貧乏根絶論」は此方面に於て大いに看るべきものであらう。此等の學者の外に所謂ブールジョア階級の社會問題に對する態度は大抵此邊の動機に基いて居ると觀ていゝ。又所謂社會政策主義が問題攻究の動機を單に此點に置くと云ふのに理論上の弱點を有つて居るものと思ふ。貧乏を根絶するとは極めて必要だ。併し根絶しようたつて根絶し得ないものなら致方がない。貧乏のよつて來る所如何。其よつて來る所に何の根據ありやを明かにして、學理上の結論が自ら貧乏を根絶せしむると云ふ所まで議論が進まないでは十分でない。而して議論をこゝまで進めて、直接には理論の當然の要求にして同時に間接に貧乏根絶の效を收めんとしたのが即ちマルクスの科學的社會主義である。

マルクスは富の生產に關する經濟學上の法則を研究し、從來の學説に重大なる誤あるを認め、而して此誤謬に基いた誤つた生產組織の當然の結果として富の分配に正義の行はれざることを發見し、之を矯正することが即ち社會問題攻究の必要な所以だとした。斯くして彼は即ち正義確立の要求を以て問題攻究の

根本動機としたのである。マルクスが斯う云ふ新らしい見地に立つに至つたについては、當時の時勢は已に貧乏の根絶と云ふ事をそれ程熱烈に要求しなくなつたと云ふ事情にも基くものであらう。何故なれば十九世紀初頭に於てこそ一時貧乏人の激增を見たれ、其後所謂社會政策等の行はるゝにつれて、勞働者の境遇も大いに改善せられ、今日の生計にも差閊へると云ふ程の貧乏人は大いに減じたからである。併しさう云ふ意味の貧乏人は減じても、自分が貧乏だと云ふ勞働者の考はなくならない。何故なれば同じやうな仕事をしながら莫大の富を蓄ふる隣りのブルジョアと比較すれば、どうしても自分の憐れなる境遇に平かなるを得ないからである。斯う云ふ不平の念は生活が樂になれが却て強まる。故に勞働者が本當の貧乏人であつた時代には、勞働者以外の所謂志士仁人が代つて問題を起して呉れるのだが、今度は勞働者自身が自分の問題として自ら騷ぎ出す。それ丈け勞働問題たるの面目は一層鮮かになる。而して自分は喰ふに困らない、只隣と比較して貧乏人たるを感ぜずにはゐられないと云ふ事は、之れ取りも直さず分配の不公平の認識ではないか。之を見て取つてマルクスが經濟的正義を確立すべく研究を初めたのは大いに故ありと謂ふべきである。

經濟的正義の確立の要求は從來の分配制度が極めて不公平なるを批評する限りに於て正しい。富の生產並びに其分配を問題とする限りに於て、造られたる富は其生產に與つたものゝ勤勞に應じて公平に分配せらるべきは云ふを俟たない。併しながら我々の生活は富の生產と消費とのみを以て終始するものではない。其以外に尙幾多の爲すべき事がある。又銘々の天分から云つても物質的財貨の生產に堪能なるものあり、文學美術の如き精神的文化の創造に堪能なるものもあらう。將た又肉體上及び精神上の缺陷によつて差當り何等の貢獻を社會に爲し得ざるものもないとは限らない。此等のものに對する生活を社會は如何に所置すべきであらうか。富の生產分配と云ふ限られたる範圍から、廣く社會人類の生活と云ふ大きい問題に入つて來ると、所謂經濟的正義の確立と云ふ丈けでは解決が着かない。何故なれば之を立て通す時は、直接富の生產に貢獻したものゝ外は、飯を喰ふ權利を主張し得ない譯になるからである。經濟的正義の確立は從來の制度の批評としては強い。新社會建設の原理としては不十分だ。蓋し之のみでは新社會のすべての人間の生活問題は解決されないからである。十九世紀の前半に於てサン・シモンの分配論が容れられなかつたと同じ意味に於て、經濟的正義の說も軈て他に途を讓らなければならない。而して新たに之に代つて出て來たものは所謂生存權の保障と云ふ事である。ア

ントン・メンガーの語を借りて云へば社會問題の根本目標は勞働全收權から生存權に移つたと云ふ譯になる。

只茲に注意すべきは、此移り代りは今日まだ十分に完成しないと云ふ事である。從つて今日尚經濟的正義を說き、殊に此考の基調たる、人生を生產分配の一隅よりのみ觀る思想が可なり廣く行はれて居るやうだ。一切の問題を生產者消費者と云ふ立場から解決し得べしと觀るギルド・ソシアリズムの如き、又すべての人間を掠奪者被掠奪者の二階級に分ち、文學藝術等の精神的文化の創造に當るものを無用の長物視するが如き思想は卽ち之れである。茲に又我々は又著しく濃厚なる唯物思想の色彩を認めざるを得ない。

若し經濟的正義の動機が生存權の保障と云ふ事に代るのが社會問題攻究の當然の運命であり、必至の傾向であるとすれば、我々はこゝに此等の說を產み出す根本思想に已に重大なる變化あつた事を認めざるを得ない。すべての人に先づ最小限度の生存を保障せよ。富の生產に多大の貢獻をなしたるの故を以て多分の分け前に與らんとするものはすべての人に最低度の生存需要品を提供した上の事にすべしと云ふ思想は、富の生產以外に於て尙人類に生存の目的あることを豫定するものである。更に進んで此思想はすべての人に先づ最小限度の生存を保障し、最早や生活の爲めに思ひ煩はさるゝ所なく各自の天分を思ふ存分に發達せしめようと云ふ考が伴はねば活きた力となつて働いて來ない。更にも一つ注意すべき點は、此思想は凡そ人は生活にさへ苦しまねば銘々の與へられた天分を十分に發揮して社會文化の進運に貢獻するものだと云ふ信賴を前提としなくては、我々の活動を惹き起す原因とはなり得ない。其人の勤勞に拘らず需要の丈けの者は皆遣れと云ふやうな同じやうな考を曾てルイ・ブランも唱へたが、働かないでも飯丈けは喰へると云ふ事にしては遂に誰も働くものは無くなろうと云ふ當時の非難に堪へ得なかつた。而かも今日は同じやうな非難を受けずして生存權の保障と云ふ事が頻りに說かるゝ。之れ恐らく飯さへ喰へれば人間は働くものか或は怠けるものかの根本の人生觀を何れかに研究確定した上の事ではなからうけれども、兎に角自然に斯う云ふ說の何等疑はるゝ所なく唱へらるゝに觀ても、こゝに根本思想の無意識的に大いに變りつゝあることを認めざるを得ない。而して此重大な變遷は唯物思想に對する理想主義的人生觀の擡頭の結果であることは疑を容れまい。

此趨勢を更に我々は前世紀の末葉から新たに理想主義哲學の勃興せる事實に對照すれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。十九世紀に於ける哲學思想の變遷は問題外だから今は述ぶ

ぬ。只此等を背景として起る社會問題などが、思想的に其影響を明かに受くるには更に二三十年の年月を要することを一言するに止めて置く。委しく云へば社會問題に關する思想が最も著しく唯物思想の痕跡を止めた時は、即ち唯物思想の之より漸く下火にならんとする時であり、理想主義の勃興して數十年を經た今日が恰度之から其痕跡を社會問題の攻究の上に印し初めようとするのである。故に社會問題に關する今日の言説の中には唯物思想の痕跡を留むるもの尚甚だ多い。けれども理想主義の影響が漸次其中に喰ひ入つて自家の分野を擴張しつゝある形勢を觀る時、我々はこゝに社會問題の思想的背景が、今や根本的に一變せんとしつゝあることを斷定せざるを得ないのである。

社會主義は社會問題の一つの解決案である。社會主義のみが其唯一の解決案ではない。けれども從來社會主義者は社會問題の攻究及解決の殆ど唯一の專門家を以て任じて居つた。而して彼等が從來甚しく唯物思想に累されて居る所から、今や其根本基調が一變せんとするの時機に際會しては、彼等はひよつとすると時勢に落伍して、專門家の看板を他に取り去られないとも限らない。今や社會問題の攻究は再び宗教道德と提携せねばならぬ時勢となつた。けれども時勢を觀るの明なき輩は十九世紀初頭以來の傳習に拘泥して、宗教道德に背かなければ社會問題の攻究を看板に書き得ないやうな氣分になつて居る。ロバート・オーウェンですら社會改良家たるの地位を明かにすべく、無神論を唱へた。西洋の社會主義が殆んど反教會を標榜して居ることは云ふ迄もない。之が一種の流行となると、髪を長く伸ばさなければ繪書きにはなれないと云つた風に、其本質的關係の如何を問はずして、先づ無宗教を標榜してからそろ／＼社會問題の研究に取りかゝる。斯う云ふ連中は西洋にも多いが、殊に我日本に頗る多い。尤も宗教道德に還れと云ふ事は或意味に於ては從來の立場を捨てよと云ふ事を意味する。從來の立場を捨てよと云ふ事は必ずしも更にもう一段舊い立場に降伏すると云ふ事でもなければ、又此舊い立場を今尚固守するブールジョアの偏見に乘ぜらるゝとも限らないのであるけれども、兎に角現狀を突破して更に一歩踏み進めると云ふ事はなか／＼困難なものと見えて、矢張りどこまでも宗教道德を罵倒し、理想主義を難じ、舊式の唯物論を頂額に振り翳して快哉を叫ぶものあるは、社會問題の發達の爲めに吾人の甚だ遺憾とする所である。併し日本の社會主義者中極めて少數の部分には最近の傾向が理想主義と提携せねばならぬ大勢にあるを看破し、新たに理想主義の根本思想の上に社會主義的改造論を打ち建てんとするものがあ

る。但し理想主義を旗印とするに熱心なるの餘り、社會主義の鼻祖マルクスも亦理想主義者であると論ずるに至つては、之れ斷じて烏鷺を混同するの詭辯であると云はなければならない。

何れにしても社會主義の主張の傾向は我國に於ても理想主義的の色彩を日に〱濃厚ならしめて居る事丈けは疑を容れない。

社會問題は吾人の物質的生活の問題を精神問題から分離して獨立の研究題目たらしめた點に於て、近代文明の特徴の一たるに値する。けれども十九世紀の後半は之を全然精神問題と沒交渉ならしめた點に於て大いに岐路に迷ひ入つたと云はなければならない。ブールジョアヂーが自家に不利なる新らしい解決を避けんとして之を純然たる精神問題なりとする議論には固より反對せざるを得ない。今日の社會問題攻究の態度は全く別の意味に於て精神問題との聯絡を計らねばならない。此點が恰度宗教と教育との關係に似て居る。教育が全然宗教に併呑されてあつた時代から初まつた兩者分離の運動は、一旦教育をして宗教の敵たらしめたが、間もなく又兩者は獨立の資格に於て相共に提携すべきものであるの理義が明かになつた。と同じく、本當の聯結を觀る爲めに一旦別るゝことも必要であつたらうが、何時までも分れ切りに居ることは徒らに進化の大法に背くものである。何れにしても我々は社會問題攻究の變轉期に際會して居る。之より新らしい方針を以て新らしい議論を構成することが我等の任務でなければならない。我々は研究の參考として東西の著書を讀む時にも、從來の研究が概して唯物思想の影響の下にあつた事を常に念頭に留めて、其何處までが今日の時勢に適用するを得るかを識別するの努力を怠つてはならない。

☆徹底個人主義者の社會生活觀

田中王堂

一　空虚なる社會改造説を排す

最近一年に亙つて、わが國に於ても、幾多の人士に依つて、生活改造の急務なることが叫ばれ、そして、或る程度には方法までも説かれたのであつた。然し、わたくしとしては、人間の性情に照らし、文明の趨歸に鑑みて、是等の改造の計畫は到底實行され得るものではない。萬一、實行され得るものとしたならば、其等はわたくし共の生活を建設するよりも、寧ろ、戕害するものであるといふ意見を懷抱するものである。然し、わたくしは、何故にかゝる意見を懷抱するか、懷抱するに至つたか。

云ふまでもなく、これ等改造の計畫の多くは、歐洲の大戰以來、歐米に於て著想され、流布された其等の移植であり、若しくは、摸倣である。あの大戰の齎らした未曾有の慘禍は、歐米國民の多數をして、現存の政治の組織、若しくは、生活の理想と、あの大戰との間に、密接の關係の伏在することを認取せしめ、彼等をして、從來、彼等が其等に關して捧持して來た素朴な信仰に對してデスイルウジョンを惹起せしめた。この新たに惹起せしめられたデスイルウジョンに滲まれた情操を啓明することに依つて、其れを概念、若しくは、方針と化し、其等に憑據して、現存の文明の志向を改釋し、其れの機構を改造しようとして企てられた種々の工夫が謂ふところの社會改造説であるのである。其等が現にある如く構造されるに至つた行掛りにも相應な理由はあるし、さう構造されなければならぬと考へられた動機にも相應に同情すべき理由はあるが、其等に共通する根本の缺陷として、わたくしがこゝに指摘し、反對しなければならぬことは、其等が近世文明の動力たり、發現たる、ヒユウマニズムの精神を全然、理會することが出來ず、隨つて、近世文明のはたらきと進行との中に、妥當にあの大戰を當て嵌めることが出來ないために、概して、其等が安價なセンチメンタリズムの弊に墮し、著しく反科學的たるの方向に馳せて居ることである。

『安價なセンチメンタリズムの弊に墮し、反科學的方向に馳せて居る』! 苟くも現存の政治の組織と、生活の理想とに關して會得するところのある者は、この一句が如何に辛辣に、森嚴に、是等の社會改造說の無定見と、無價値とを告發して居るかを容易に覺るであらう。

西洋に在つて、(少數の賢者は別として) 多數の凡人に取つて、今次の歐洲大戰が現代文明の眞相に關して一つの天啓としてはたらいたことは疑はれない。其れは、彼等の平常の信仰、若しくは、想像に反して、彼等の政治の運用と、産業の組織と、國際間の道德關係との驚くべき風に、程度に、不公正であり、不完全であることを啓示したのであつた。これまで、是等のものに關して、一部の論者が妄りに其等が善美の狀態に在り、賞讃すべき傾向に在ると說きつゝあつた時に、其の種の言說に對して、本能的に疑惑を挾んだ者は、あの大戰に依つて彼れの疑惑の合理性に裏書きされ、又、其れに對して實行的に同意を表した者は、あの大戰に依つて彼れの同意の理論を全然顚された感を抱いたのである。近世文明は、人間が彼れの理智と、情操との發展の道程に於てある段階に達すれば、彼れの生活の方針として、必然彼れの心の中に成形し、當然彼れに依つて採用されなければならぬヒユウマニズムの全發動である。隨つて、近世文明は道德的理想を其れの精神とし、科學的方便を其れの機構として居らねばならぬ。道德理想と云ひ、科學的方便と云つても、もともと、全然、一つものであり、一つものの二つの側面に過ぎない。其れを其れの總合の側面より觀れば、道德的理想であつて、其れの運用の側面より觀れば科學的方便である。何故に、事實さうなつて居るかと云へば、近世文明なるものは、いろいろの制度や、職業や、活動や、覺悟に其れの特徴を印して居るが、畢竟するに、人間が一方に於て彼れの欲望の尊嚴に目醒め、他の一方に於て其等を滿たす才能の増進に氣付いて來た結果に過ぎないからである。然るに、これ等の人々は、哲學的に、若しくは、文明史的に、近世文明を觀察し、解釋することが出來ないために、纔かにヒユウマニズムの發動の一半たる科學的方便のみを取り、而も、其れを動的に志向に於て取らずして、徒らに靜的に結果に於て取り、勝手に、そして、無雜作に、其れを近世文明と同一視し、この誤れる視點よりして、科學の結晶として近世文明を非難し、近世文明の母體として科學を非難して居るのである。斯くして、恰も、現在、人間が所有し、運用することの出來る力量を以て、近世文明に優れた生活の理想が著想され得、科學に優れた生活の方針が案出され得るかのやうに、安價なセンチメンタリズムに墮し、反科學的の

方向に馳せて居るのである。

わたくしが事實を正視し、事由を正解する時、わたくしとても現存の文明に幾多の醜惡の顯在し、潛在して居ることを承認する。然しながら、わたくしは其れを科學の爛熟より生じた病弊とは觀ないで、科學の未熟より發した缺陷と觀るものである。されば、どれ程、俗人に依つて現存の文明に見出だされる醜惡が科學の所爲と所産とに歸せらるゝにしても、其等を除去する唯一の道は、近世文明の精神と機構とを一層尠なく科學的にすることでなくして、其等を一層も、二層も多く科學的にすることに限らるると、わたくしは考へるのである、考へざるを得ないのである。

こゝには、古來、人間が彼れの生活を改善するに工夫した方法を（姑らく其れの本質から見て）宗教と、藝術と、科學との三つであつたとする。さうすると、宗教的努力、若しくは、藝術的努力より識別されて、科學的努力の特徴は何であるか。其れを一口に云つて見れば、其れは前の兩者に比して、一層經濟的に彼れの支配し得るあらゆる努力を利用することに依つて一層恒久的に、且つ、一層全體的に、彼れの生活の改善を圖るところにあるのである。して見れば、あの歐洲大戰を通して、醜惡なる現實は、どれ程無慘に暴露されたにしても、わたくし共の爲すべき事は、之がために失望せず、又、焦燥せず、孳々として科學的努力の一筋道を追究することでなければならぬ。何故に、わたくしはこゝに個人主義――徹底個人主義の見地に據りて社會奉任の問題と、民衆文化の問題とを考察しようとするか。他の種の社會問題と等しく、この種の問題は、獨り、徹底個人主義の見地を採ることに依つて、最も經濟的、卽ち、最も科學的に考察することが出來ると考へるからである。

二　徹底個人主義の原理

『若しわたくし共にして、自然を利用しようと欲するならば、先づ、其れに事へねばならぬ』とはフランシス・ベエコンの意見であつた。そして、近世科學の精神と事業とは、全くこの新らしい見地に依つて、始めて拓かれたものと云て宜い。實に、この見地こそ人間をして感情の欲求に任せて、空想的に統一を捏造する宗教や、形而上學を以て、眞に人間の生活に幸福を齎らすのに何等の貢獻なきものとして排斥し、この目的を達するには、理智の工夫に依つて事實的に法則を發見する、若しくは、創設する實驗學をして、永久に其等に取つて代はしめねばならぬことを覺らしめたものであつた。

徹底個人主義の主張の根柢する原理は極めて簡單である。社

會生活は其れを組織する多くの個人の協同に依つて經營されるものであり、そして、個人の性情は一時の感情や、便宜に依つて左右することの出來ない事實、若しくは、傾向より成立つて居るものであるから、生活改造に關するあらゆる計畫は、先づ、個人の性情を尊重し、觀察することから始められねばならぬといふことに過ぎない。是れより以上でも、以下でもない、只是れだけである。それならば、人間の性情の根本的事實、若しくは、傾向として、どれだけのものが假定されなければならぬか。わたくしは尠なくとも二つのものだけは假定されねばならぬと信ずる。是等は、

一、人間は協同生活に依つて始めて彼れの幸福を完成することが出來る。

一、人間は獨自の才能を所有するがために、協同生活をして可能ならしめ、又、其れを必要とする。

等が即ち、其れである。

人間は社會的動物であるといふことは、夙にアリストオトルに依つて說破されたところのものであつて、人間の生活の特徵を說明する格言として、爾來、幾十、幾百の倫理學者並に政治學者に依つて用ゐ古されたところのものである。如何にも、人間は（群居的動物ではなく）社會的動物であると洞察したところに驚くべき知見は見出される。然しながら、何が彼れをして社會的動物たることを可能ならしめ、又、其れを必要となさしめるかの事實に關しては、アリストオトルを始めとして、多數の倫理學者も、政治學者も、等しく考察を怠つて來たのである。勿論、各個人の性情にして、全然相違して居るならば、そこに協同生活の成り立つ可能性はないが、其れと同時に、全然同一であつたならば、協同生活の必要は殆ど無くなるし、又、それの可能性と雖も大分に減少されて來る。たゞ、各個人の性情は、互に理會し、同情し得る樣式に於て類似して居るがために、こゝに始めて彼等に取つて協同生活は必要とされるのである。

宇宙を通じて、同種に屬するものの個體化は、最も普遍的の傾向である。例を松の木に取つても、世界中に松の木が幾本あるか知れぬが、決して、全然同じものの二つと無いことは明らかである。又、一本の松の木に就いて云へば、二つと同じ枝は無いし、一つ枝に就いて云へば二つと同じ葉は無いことは明らかである。是れが個體化の傾向といふものである。そして、有機體が高等になり、複雜になれば、なるほど、この個體化の傾向はます／＼發展して行く。されば、人類に到つて、其れに屬する各個人が彼れの遺傳と、文化と修養との增進するに隨つて、彼れがます／＼彼れの個性を分化し來たるのは極めて自然

のことである。

生物學者は、生物が境遇に適應するといふが、是れは事實を語つて、正確であるとは云へぬ。一層正確に事實を云へば、其れは、生物は自己の機能を中心として、其れの環境を統一し、利用して居るのである。隨つて、こゝに二つの異なる機能を有する生物があるとするならば、其等の生物の各の、異なる機能に依つて統一され、利用される環境だけがあるのであるから、そこには、是等の生物の機能を中心として、二つの異なる環境が存在するわけである。

異なる遺傳と、才能と、義務と、理想とを有する異なる個人は、各、自己の發展と幸福とのために、異なる方法で彼れの環境を統一し、利用して居る。このはたらきが其等の各の生活そのものである。各個人に取つて第一義の仕事は、彼れに固有するの機能を以て、出來るだけ多くの幸福を獲得するやうに、彼れの生活を築き上げる外に何物もあらう筈はない。

然しながら、各個人の環境と云へば、其れが物質的なると、生物的なると、社會的なるとに論なく、總べて、彼れの欲求に對抗しながら、其れの材料となるあらゆる刺激、及び、其等の刺激の由つて來たる根柢を包含したものでなければならぬ。斯くして、太陽や、空氣や、水や、火が彼れの環境の一部を形造ると同樣に、又、草や、木や、魚や、鳥や、蛇が、彼れの環境の一部を形造ると同樣に、彼れを取り卷く同胞や、彼等、若くは、彼等の祖先に依つて作られた制度や、習慣や、言語も、彼れの環境の一部を形造るのである。そして、是等のものの總べてには彼れの欲求に依つて、直ちに、勝手に左右出來ない實質の存する以上は、彼れは其等より成りたけ多く、彼れの幸福を增すやうな反動を受けるやうに其等を取り扱はねばならぬ。彼れは經驗に依つて、火の中に手を投ずれば、彼れの指を燒くと同樣に故なく同胞の一人に無禮を加ふれば、忽ち彼れより怒を招くことを知つて來る。斯くして、自己の幸福を保障しようとする彼れの意志は、彼れをして等しく火の實質と、同胞の實質とを尊重させることになる。彼れの境遇が惡ければ、其れを統一し、利用することが彼れに取つてむづかしくなるから、其の限りに於て、彼れの幸福は傷けられるわけである。之れに反して、彼れの環境が善くあれば、あるほど、彼れが其れを統一し、利用することが彼れに取つて容易になるから、彼れの幸福は增されるわけである。かういふ理由で、彼れの生活の物質的改造と、社會的改造とは彼れに取つて嚴肅な仕事となるのである。

こゝには主題の意義に即して、特に社會的改造の方に觀察を

限ることにする。

何故に、わたくし共は、わたくし共を取り卷く同胞の人格の向上を冀ひ、彼等の幸福の增進を圖らねばならぬか。これは、畢竟するに、さうしなければ、わたくし共自身の人格の向上と幸福の增進とは保障されないからである。ソクラティスが青年を墮落させると云ふ嫌疑の下に、アテンスの法廷に呼び出された時に、彼れは、判官の訊問に答へて『自分は善い隣人を持つて居るだけ、自分の幸福が增されるものと考へて居る。然らば、何を苦んで、自分は自分の隣人たる青年を墮落させるやうなことをしようぞ』と云つたのである。彼れは、彼れのこの答に依つて、端的に、わたくし共は、何故に、わたくし共と利害を共にし、幸福を一にする社會の改善を圖らなければならぬかの理由を說明して居るとわたくしは思ふ。

三　代償と代表

（其れの經過より觀て）代償と、（それの意義より觀て）代表とは、人間の生活を統一するに最も廣汎なる、そして、最も重大なる彼れの心のはたらきである。智識も之れに依つて構成され、欲望も之れに依つて整頓される。衝動の中より理想の沈澱するのも、このはたらきの在るがためであつて、知覺が洗練されて實在となるのもこのはたらきの在るためである。實に、代償と代表とは個人の生活を組織する上に於てと同樣に、社會の生活を組織する上に於て、瞬時も缺くべからざる一大原理である。それでは、代償と代表とは如何なるものであり、又、其れは如何なる役目を滿たすものであるか。

わたくしは、先づ其れが個人の生活に於てはたらく場合を取り、次に、其れが社會の生活に於てはたらく場合を取つて、其れの機能と成果とを觀察して見よう。

個人が生活して行く間に折にふれて彼の心の中に生じ來たる欲望は、彼の生活の支持と發展とに或る役目を持たない者は一つとしてない。それであるから、其等の總べては、單獨には、皆、絕對の價値を持つて居る。然しながら、有限の力量を以て無限を追求するのが人間の特徵であるから、常に、同時に、若くは、相續して起る一つ以上の欲望の總べては、到底實現出來ないやうに互に矛盾し反撥し合ふ場合が多い。例へば、わたくしが、或る日曜の午前に於て、郊外を散步しようとする欲望と、友人を訪問しようとする欲望と、家の中に止つて讀書しようとする欲望とを起したとする。是等の欲望の孰れもは、（わたくしが其れを思ひ付いた事實だけに依つても）、わたくしに取つて、相應な價値のあるものであることは疑はれない。然しながらわたくしが、

同時に是等の三つの欲望を滿たすことの出來ないことも亦、爭はれない事實である。若しわたくしにして、其等の欲望が單獨にはそれぞれ絕對の價値を持つがために、同時に其等の總べてを實現することに執着するならば、わたくしは其等の間の爭鬪をして無期限に續けさせて行く外に道は無いのである。そして、さうしたならば、其等の孰れの一つも實現される期は永久に來ないであらう。そこで、わたくしは、わたくしの生活の有機的關係より作り出された現在の境遇を標準とし、この標準に對照して是等の三つの欲望の價値を吟味し始める。先に是等の三つの欲望が單獨に持つて居た絕對の價値は相對のものに整頓される。是等のものの間に價値の評定がつく。斯くして、新たに作られた價値の統階に依つて、是等の三つの欲望が適當に調和されるか、乃至、其等の一つが取り上げられて、他の二つが打ち棄てられる。たとひ其等の一つが取り上げられて、他の二つが打ち棄てらるゝにしても、このやうな反省と手數とを經てさうされた曉には、二つが打ち棄てられたと見えるのは、たゞ、物質的に於てだけであつて、精神的には三つの總べてが殘らず取り上げられたのである。何故ならば、其等の孰れの一つが取り上げられるにしても、取り上げられたものと等しく、打ち棄てられたものも悉とく、彼れの現在の境遇に對照され、相互に對照されて、全然新たなる意義と機能とを得て居るからである。其の經過より云へば、取り上げられた一つは三つの總べてを代償したのである。其れの意味より云へば、取り上げられた一つは三つの總べてを代表して居るのである。あの爭鬪の起る前には、是等三つの欲望の孰れの一つも單なる嗜欲に過ぎなかつた。商量の終つた後には、取り上げられた一つは、打ち棄てられた二つを抱擁する理想となつて居る。

この卑近な引例に出つて見ても、個人の生活は獨り代償と、代表とに依つて組織されて居るのであつて、又、代償と、代表とは絕えず彼れの日常生活に於てはたらいて居ることが會得されるであらう。

異なる個人は、かゝる特徵ある性情を以て、協同生活に入つて居るのである。異なる個人は、各、異なる遺傳と、教養と、義務と理想とを有つて居るものであるから、或る一つの場合に當つて、各自に發作し來たる欲望をそのまゝ勝手に實現しようとすれば、如何なる種の事件に關しても、未來永劫そこに共通の方針の出で來たるべき道はあるまい。然しながら、各個人は共有の歷史と、共同の運命と、共通の利害とに依つて互に有無を交換し、長短を輔佐して、てんでに、自分の才能を開發し、幸福を增進するために社會生活を營んで居る人々であるから、

彼等が各自の欲望を提言し、彼等の社會生活の有機的關係より作り出された現在の境遇を標準とし、其の標準を對照として其等の價値を商較する時には、そこに、取捨に依つて、若しくは妥協に依つて、[redacted]れる素地は既に存在して居るわけである。固より異なる個人の間の場合に於ては、個人の場合に於けるよりも、最後の方針に決定するに至るまでには、一層烈しき確執が行はれ、一層複雜なる手段を要することは事實ではあるが、最後には、各個人の自由意思の發動に依つて、必らず、一つの協贊點に到著しなければならぬことは明白である。國民性の相違と、文化の相違とからして、各個人より承認を引き出すに至るまでの手順には種々の相違がある。それの外形よりすれば、習慣に據ることもあるし、權力に據ることもあるし、乃至、合議に據ることもあるが、是等の相違は、ほんの手順の相違であつて、其れの實質に至つては、何時でも、全然同一である。各個人は、其の始め、協同生活に入つた動機を背景として、大局に於ける自己の利益を目安として、彼等の個々の欲望を醇化し、出來るだけ優れた方針と思はれるものを創造し、採用して居るのである。

公共生活の幸福のために、擇ばれた方針が、たまたま、各個人が當初私に懷抱して居た欲望と矛盾することのある場合には、普通、公共生活の善のために、私生活の善は全然放棄されたやうに考へられるのであるが、この考へ方は事實に反して居る。私生活の善は尠しも放棄されたのではない。公共生活の一[redacted]ある。放棄されたのは、たゞ、彼れが一時、公共生活の一員たることを忘れたために、偶然、彼れの欲望に入りこんだ不合理性だけである。その不合理性が放棄することに依つて、彼れは一層善く彼れの本來の欲求を滿たして居るのである。

一體、人間は何んの必要あつて共同生活にはいつたのであるか。何んの期待するところがあつて、其れを續けて居るのであるか。彼れは、時々、輕卒にも、其れがために不便を感じ、不平を洩すものの、つまりは、協同生活を營む方が、孤獨生活を送るよりも、彼れの才能の啓發と、彼れの幸福の增進とに都合のよいことを認識し得るからではないか。彼れにして聰明と、勇氣と、首唱力とさへあれば、協同生活を營むことが、彼れの才能を開發し、彼れの幸福を增進する唯一の道であることを彼れの經驗に依つて自證し得るからではないか。

私生活に於ても、公共生活に於ても、二つ以上の欲望が矛盾する場合には、其等の間に妥協、若しくは、取捨が行はれて始めて生活の支持たる一つの方針が立せられるのであるとすれ

ば、行爲の連續は、犧牲の連續であるやうにも思はれるが、これはたゞ部分的に、卽ち、抽象的に觀るからのことであつて、全體的に、卽ち、具體的に觀れば、滿足の連續であり、生長の連續である。つまり、あきらめに非ずして、征服である。

世の中には、自分の子供に啞が生れたために、彼れに對する憐愍の情に感激されて、汎く世間の啞の子供を敎育しようと發心した者がある。此の事實は、確かに、眞の社會奉仕の根柢には、自己の利害の念が入りこまなければならないといふ眞理を說明して居るが、わたくしから見れば、社會奉仕も、未だ、この程度では眞劍のものとはなつて居ない。自分の子供に對する憐愍の情を慈善的に引きのばして、其れを自分の生活とは直接に關係のない他人の啞の子供に及ぼすといふのでは、そこには、まだ社會奉仕に關する眞の動機は見出だされない。世の中に啞の子供の存在することが、直ちに自分の生活の危害となると云ふ覺悟から、彼等を敎育することに發心するのでなければ、眞の意味に於ける社會奉仕とはならないと思はれる。

斯くして、個人が協同生活に入つて、法律を設け、國防を整へ、土木を築き、敎化を擴めるのも、悉とく、各人が永遠に、自己の幸福と發展とを保障する最固の、そして、最便の方便として、さうして居るのである。さうして、彼れがさうするには、私生活の場合に於けると等しく、獨り、代償と、代表とのはたらきを藉りてさうするのである。

四　功利の變遷

功利といふものを出來るだけ單簡な言葉で說明すれば、其れは節約の法則に依つて生活すると云ふことに他ならない。して見ると、人間の思索の樣式で判斷し得る限り、功利は無生物、生物の兩界を通じて、最も廣く、深く、宇宙を支配して居る法則である、若しくは、傾向である。自然は非常に勞費を嫌ふ。或る目的を達するのにそこに二つの方法があるとすると、他の點が全然同じである限り、自然は必らず一層經濟的の方を取つて、其れを實現しようとする。されば人間が彼れの生活を支持して行く以上に於て、功利が彼れの行爲の大部分を支配して居ると云ふことに大した不思議はない。人間の行爲一部分が時としては、功利以外の衝動若しくは、興味に依つて支配されて居ることも事實ではあるが、人間を今日彼れが在るまゝに取つて、卓越して、何が彼れの生活の原理であるかと問へば、どうしても、其れは功利であると答へねばならぬ。

この頃、人間に取つて、總べて善きもの、美しきものは目的を以てなさるゝ、行爲からよりも、反つて、目的を有たぬ行爲

より生じて來る、そして、欲望は前種に屬するもの、衝動は後種に屬するものと考へた結果、生活の方針として、出來るだけ欲望を抑へて衝動を揚げることが生活改造の第一歩であると唱道した人にバアトランド・ラッセル氏がある。わたくしと雖も、最初に於ては、人間の行爲の一切は、全然、非合理的であること、即ち、何んの理由をも有たぬことを知つて居る。彼れはたゞ或る事を爲さねばならぬやうに生れ付いて居るから、其れを爲すのである、そして、其れに快感と滿足とを得るのである。彼れは、或る物が善であるから其れを欲するのでなくして、其れを欲するから、其の物が彼れに取つて善となるのである。わたくし共は、何故に或る物に價値を置き、他の或る物に價値を置かぬか。其れは何んの理由もなく、わたくし共は、前者を欲し、後者を嫌ふから來たつて居るのである。

わたくしは、この明白な事實からして、ラッセル氏の所見に一歩を進めて、最初に於てはわたくし共の持つて居るものは、たゞ非合理的なる衝動だけであると信ずるものである。然しながら、ラッセル氏が非合理的といふことを解釋して、其れは目的を有たぬといふことであるとして居るのは、全然間違つて居る。衝動其れ自身の發動が、直ちに目的であるのである。この場合に缺けて居るのは目的でなくして手段である。

然しながら、（こゝには十分に詳しく說明出來ない理由からして）事實として、人間は手段を俟たずして實現され得る目的と云ふものは、その數に於て、甚だ尠ないことになつて居る。彼れにして有機的に、若しくは、相續的に、彼れの目的を實現して行かうとするならば、そこには、必らず、それの準備として相應な手段の要せられることを經驗に由つて覺つて來る。隨つて、一つの衝動が起つた時に、如何にせば、其れが生活の一般方針に關係して適當に實現され得るかを考慮して來る。例へば支那へ行きたいと云ふ衝動の起つた時に、彼れの從來の經驗に照らして、この衝動を實現するには、其れは相當な時間と旅費とを必須の手段とすることを知つて居る。是等の手段に依つて、適當に變更された衝動が、即ち、欲望といふものである。かういふ理由からして、わたくしは、人間の行爲の源泉には衝動と欲望との二種があると云ふラッセル氏の意見に反對して、そこには、たゞ一種しかない。其れは衝動を以て始まるが、其れの大部分は必要に應じて、欲望と化するところのものしかないといふ見解を取つて居るものである。斷わつて置くが、何故に人間は彼れの衝動の多數を欲望と化することを餘儀なくされるのであるかと云へば、其れは、彼れの生活を持續し行く行爲の大部分は其れが實現される前に或る手段を必要とするからのこ

とである。人間の行爲が、功利の原理に依つて支配されて居るのは、主として衝動がこの發達の段階にある間に於てである。

衝動の變形の進行は、こゝに止まらない。一度、或る目的を實現するには、或る手段が必要とされるといふことが發見されて來ると、目的が生活に取つて善きもの、望ましきものであるとの決定が變更されざる限り、其れを實現する手段を豐富にすれば、するほど、生活の內容は充實するわけであるとして、終には、最初の目的を離れて、手段其のものを當面の目的とすることになる。是れも、人間の生活に於て、極めて廣汎なる、そして、極めて根强き傾向である。この傾向の最も顯著な例は蓄財の欲望に於て見出されるのであるが、決して、この一つには限られない。學問に於ても、藝術に於ても、この傾向のはたらいて居ることは全然同樣である。『學問のための學問』『藝術のための藝術』といふ熟語が既に其の事實の存在を立證して居る。

手段の性質に依つて、目的は整齊されなければならぬ通り、手段は、亦、目的の性質に依つて常に制限を受けなければならない。其れであるから、手段が最初の目的を離れて、おのれ自身を目的とすることになると、其れが正當な方向にあるか、どうかを批判する標準がなくなるから、そこには種々の弊害が生じて來るわけである。そして、生活の要求を離れて、一向に蓄財や、學問の追究や藝術の培養に屈托することからは、事實確かに種々の弊害が生じて居る。然しながら、最初の目的から離れると云つても、矢張り、其等は實際に生活を營んで居る人々に依つて其れの意義として追究されて居るのであるから、間接には、私生活の、及び、公共生活の經濟(エコノミイ)よりさまざまの制限を受けて居る。其れ故に、其等が生活の根本要求と背馳して、其れの根柢に危害を與へる程度に達するまでには、必らず、生活より來たる刺激に依つて、復、もとの起點に引き戻されるのである。されば、生活そのものに、其等に對する矯正力の存續し、其れが其等に反省の機會を與へ得るものとなつて居る限りは、其等は各獨立の目的とされて行くことに利益がある。若し、さうでないとすれば、常に短見な功利の感念に束縛されて了つて、人間は永久に『手より口へ』の貧乏生活に跼蹐して居らなければならない虞があるであらう。事實、目前に用途のない富や、學問や、藝術の發達し、蓄積されて居る國ほど有力な國である。何故なれば、一旦危機の來たる時に、この種の國は尠しも狼狽せず、是等の富や、學問や、藝術を以ておのれを救ふことが出來るからである。

さうすると、人間の行爲は、其れの發展の進行に於て、三つの段階を經過するのである。わたくし共は、其れが第一の階段

にある間を衝動と名付け、第二の階段にある間を欲望と名付け、第三の階段にある間を美感と名付ける。衝動の特徴は非功利的たるにある。欲望の特徴は功利的たるにある。美感の特徴は超功利的たるにある。

前にわたくしが説明した通り、そして、日常の事實が證明して居る通り、功利的たる欲望がわたくし共の生活の大部分を支配して居ることは事實である。然しながら、其れと並んで、非功利的の衝動と、超功利的の美感とが存在して、其等が、てんでに、生活の本體たる欲望のはたらきに特種の色彩を與へ、特殊の緣暈を附加して居ることも事實である。其れ故に、どこまでも、生活の實際のはたらきぶりに忠實ならんとするわたくし共は、是等功利の三つの階段が、動的に、有機的に、作用的に、互に交渉し、錯綜して居る體系を公平に觀察せねばならぬ。この見地よりして、あれほど法外に非功利的なる衝動が生活に及ぼす感化を誇張したラッセル氏が、其れにも優れて生活を左右して居る超功利的の美感に就いては、全然、何等の言明するところのないのは不思議の至りである。

徹底個人主義は、功利に關する多元主義である。衝動と、美感とに公正なる取り扱ひと尊敬とを與へながら、其等をして、其の自發性と、複雜性とを失はせないで、其等を或る局限の中に統卒して行く欲望の寛大なる、そして、賢きはたらきぶりを見ようとするのである。

嘗ては、形而上學を劃義して、『思想に於ける冒險』であるといつた學者があつた。徹底個人主義は觀念上の試驗に依つて、功利的の欲望を中心として、其れは其れの材料たる非功利的の衝動及び其れの爛熟たる超功利的の美感との間の系統を證明し、さうすることに依つて、個人の生活の內容を富化し、深化しようとする試みである。

五　自己完成の全意義

ウオルタア・ペエタアの『ヴィンケルマン』に於て、彼れは、完全なる修養として、一つのものに深い理會を得た方がよいか、或は多くのものに廣い鑑賞を持つ方がよいか、といふやうな問を發した後、どちらを擇ぶにしても、結局、修養である。要は、各個人の傾向に從つて決定さるべき事柄であるといふやうな風に答へて居る。然し、眞劒に、云ひ換へれば、人間として、實際に存在するあらゆる關係を考慮に入れて居る人に取つては、この問題は、さう簡單に片付けられ得る種のものであらうか。わたくしはさうは考へない。

畢竟するに、彼れはどこまでも鑑賞家であつて、創作家でな

かつた。彼れの鼓吹した修養は、鑑賞の其れであつて、創造の其れではなかつた。其れが、事實さうであつたことは、彼れの『文藝復興』の全卷を通じて現れて居るが、特に其れの最後の章なる『結論』に於て最も明白に現れて居る。何故ならば、あの章に於て、彼れは卓越した藝術に親炙することより得る修養の目的を説明して、『其れは、其等を强烈に味ふことによつて、時々刻々を緊張させ、何時かは迫り來たる死を忘れるためである』と説明して居るからである。

彼れが『文藝復興』の續編であると宣言した『Marius the Epicurian』になると、彼れの修養なるものは、鑑賞の態度より、創造の態度にまで進化して來たやうに見える。然しながら、其の主人公たるメリヤスは、夙に、自己完成に沒頭して、文藝、哲學、交友、宮廷、風景等より絶えず新らしき印象と、經驗とを攝取することによつて、自己の品性の建設を圖つて居つたが、憐むべし！彼れの修養は、キリスト教徒の同胞相愛より來たる歡喜の意味を理會することが出來なかつた程度に止まつて了つた。畢竟するに、其れも、外形に於ては、創造の修養であつたが、其精神に於ては、矢張り、鑑賞の其れに過ぎなかつたのである。

正面より一向に快樂をのみ追究すれば、快樂は反つて彼れより逃れ去るといふことは、多くの人の實驗するところである。之れは快樂主義の矛盾と呼ばれるものである。其れと同樣に、一切、社會の關係や、義務から離れて、全然自己の完全にのみ沒頭すると、自己の完成は反つて得られないことになると思ふ。是れは自己完成主義の矛盾とも呼ばるべきものであらう。人間の生活を全體として取れば、其れの道德的關係は、其れの色彩的關係と等しく、內具のものである。されば完全なる藝術は、其れの色彩的關係を整頓すると同じやうに、其れの道德的關係を完成せねばならぬ。そして、道德的關係といへば、無論、彼れの同胞と交渉することに依つて始めて成り立つところのものである。彼れの同胞と交渉することをしないで、どうして自己完成の藝術を創造することが出來ようか。

眞の修養、卽ち、自己完成を目的とする修養は、何人にしても、彼れの置かれた境遇に於て、出來るだけよく社會の一員として、彼れの才能をはたらかせることに限られねばならぬ。そして、是れは、獨り、最も自由なる意味に於て、彼れが間接に、直接に接觸する同胞の要求を滿たし得るやうな職業、若しくは、活動に從事することに依つて、始めて得らるゝのである。

然し、何故に或る人に取つて、彼れが置かれた境遇に於て、

出來るだけよく社會の一員として、彼れの才能をはたらかせることが、即ち、彼れの義務を盡すことが、彼れに取つて最高の修養であらねばならぬか。わたしは、其の理由を研究して見ねばならぬ。之れに關連して、わたくしは尠しく、ギリシヤ人の理想とキリスト教徒の理想との相對的價値に關する、トオマス・グリインの意見に言及し、そして、其れを批評する必要がある。

　ギリシア人は、彼等の社會の中に奴隷の存在を容れ、其等をして、手足の勞役に服せしむることに依つて、自由市民たる彼等は、各、自分の才能の赴くところに從つて、政治、哲學、乃至、藝術に卓越することを生活の理想としたのであつた。キリスト教徒は之れに反して、たとひ、彼等は生來政治、哲學、乃至、藝術に卓越する素質を持つて居たにしても、彼等より遙かに不幸な境遇に呻吟する同胞の此の世に存在する限りは、彼等は、各、自分の天分に從つて、政治や、哲學や、藝術に卓越することよりも、先づ、其等の同胞をその不幸なる境遇より救ひ出すことを以て、生活の理想としたのであつた。グリインは、このやうに、ギリシヤ人と、キリスト教徒との理想の相違を對照し來たり、最後に、ギリシヤ人の其れに比して、キリスト教徒の其れの方が一層優れたものであると斷定したのであつた。

わたくしは、無論、彼れの斷定に同意する。然しながら、わたくしには、グリインがさうすることに就いて彼れ自身の與へて居る說明は、わたくしまでには不十分である。

　ギリシヤの社會に於て、如何に人爲的に、奴隷は自由市民との交際を離隔しようとしても、彼等が同一社會に棲息して、一方は產業に從事し、他の一方は、政治、若しくは、文化に從事して居つた以上は、どうしても、いろいろの接觸點に由つて、前者の生活狀態の、後者の生活狀態に影響することを全然防止出來るものではなかつた。されば、如何に彼等が手足の勞役を一切奴隷に負擔さして、彼等自身は專ら政治や、哲學や、藝術の涵養に熱中しても、事實、彼等の道德の實質は、絕えず、奴隷の其れより侵蝕されて居たのである。他人の人格を卑下するものの蒙むる第一の損害は、其れと同じ程度に於て、その反動として、自分の人格を卑下して居ることであり、又、他人の自由を蹂躪する人の蒙むる第一の損害は、その反動として、同じ程度に、自分の自由を蹂躪して居ることである。

　この眞理は、近世のデモクラチツクの社會に於て、一層顯著であらねばならぬ。今日、わたくし共は、習慣や法律に依つて離隔されて居る階級を持たぬ。わたくし共は、わたくし共の屬する社會を組織する總べての人々と共に、そこに行はれる一切

の思想と道德とに對して共同責任を負擔して居る。如何に大なるものと雖もそこにある總べてのものを創造することが出來ないやうに、最も小なる者と雖も、そこにあるものに何かを貢献して居る。この理由からして、わたくし共は、眞に自分の自己完成を圖らうとするならば、そこに在る總べての同胞の自己完成を顧みなければならないことになつて居るのである。

六　自由社會の條件

昔、支那の天子は、彼れの領域に罪人の出た場合には、共れを、おのれの罪に歸して、自づから、共れを天に謝したといふことである。現時の社會に於ては、わたくし共の總べてはこの天子の位置に在るのである。何人に依つて、如何なる行動がなされるにしても、わたくし共の總べては共れの結果を分かたねばならぬ。わたくし共の屬する社會に於て、或る一つの善事が企こらるれば、共れの恩澤を受けるのは、わたくし共全體である。又、一つの凶事が犯さるれば、共れの害惡を蒙むるのも、わたくし共全體である。されば、わたくし共は、自分の幸福を保障するために、わたくし共の同胞全體の聰明を啓發し、彼等の境遇を改善せねばならぬ。そして、彼等の聰明を啓發し、彼等の境遇を改善するに最も有效なる方便は、彼等の才能を開發するために教育と政治とに於て、彼等に機會の均等を與へねばならぬと云ふことである。今日に於ける如く、協同生活を經營して居る異なる個人が、教育と政治とに於て機會の均等を一樣に享受することが出來ないのには、何等の理由もないのである。さういふ不公正をして存在せしむることに依つて最も大なる損害を蒙むるのは誰れでもない。社會自身である。

斯くして與へられる機會の均等に依つて各個人の才能は（多分、今日のわたくし共からは、想像出來ない程度にまで）都合よく開發されることになるであらう。

一體從來の社會は、或る事情の下に、或る目的を達しようとして居た結果、個人の才能を開發するよりも、寧ろ、共れを阻害することになつて居た。是れは、共れが何より先に秩序を維持することを最も大なる職分として居たからである。然し、今日に於ける如く、個人が社會生活に入り來たる目的の明らかになつた上は、是れまで社會の理想として來たものは、全然、共れの根底より改められねばならぬ。

カアライルが、嘗て舊教の功罪を論じて、『共れは嘗て眞理であつた、然し、今は虛僞となつた』と喝破した意味に從へば、從來の社會が過重の權力を以て秩序を維序せんがために、兎角、共れを攪亂する恐れある個人の才能の自由の開發を阻害

したのにも、文明史的に見れば相應な理由のあることである。然し社會の目的と個人の理想とが全然變はつた今日以後に於ては、到底一日も、其れの存在を許すことの出來ない政策であると云はねばならぬ。

然し、如何に教育と政治とに於て、個人の才能の開發に對して、機會の均等が與へられるにしても、世人にして如何なる實在を根柢として、如何なる結果を其れより擧げようとするかを、豫め明白に理會するところがなければ、或はとんだ間違ひに陷らないとも限らない。其れで、わたくしは、彼等に對つて、どんなに機會の均等が行はれるにしても、人間の性情にして、わたくし共が、今日豫想出來ない風に激變せざる限り、永遠に、尠なくとも、無期限に存續するであらうとわたくしの考へる二つの條件を擧げたい。そして、是等の條件に從つて、如何なる覺悟を以て、機會の均等は利用さるべきであるかを考へて見たい。其れの一つは各個人の間に於ける適應性の相違であり、他の一つは能力の相違である。

適應性の相違は、各個人に特有なる遺傳や、家庭や、興味や、義務より來たるのである。彼れの生活の方針は、是等のものを最も合理的に統一した標準に依つて定められなければならぬが、又、社會の經濟は彼れに特有なる適應性に依つて豐富にされるのである。されば、個人が青年、壯年になつての後は無論のこと、兒童である間も、彼れに特有な適應性は尊重され、其れが最も自由に、自然に開發されることを圖らねばならぬ。

各個人は、同じ量の注意を以て、同じ度の教育を受けるやうにされねばならぬが、是れと彼れを同じ型に入れて教育するといふことは、全然、別のことである。わたくしの理想からすれば、眞の教育は必然に、個人教育でなければならぬが、費用や其の他の點で是れが實行出來ないとして、幾人かの兒童を一室に集め、同じ教科書を用ゐるにしても、若し教師にして賢明であるならば、各兒童に特有の要求を滿たすために、彼等の各に向つて、獨自の地理獨自の歷史として教へられねばならぬ。斯くして教育された兒童が、他日最も善く協同生活を營み、最も忠實に、市民の義務を盡すものとなるのである。

斯くして教育された兒童は、他日完全なる市民たらんが爲に、自分の適應性に從つて、社會生活が必然に要求する醫師となり、官吏となり、技師となり、藝術家となるのである。

わたくし共が、望むにせよ、望まざるにせよ、異なる個人の間の能力の相違といふことも現存の事實であり、又、今後に於ても無期限に繼續する事實である。既に其れの存在は否むことの出來ない事實であるならば、わたくし共の義務は、其れを善用

することの一事に限られると信ずる。わたくし共は教育や、政治や、其他の方法に依つて、異なる個人の間の能力の相違を減少することを努めねばならぬ。さうすることが、個人に取つても、社會に取つても、幸福を增進する道であるとわたくしは信ずるのである。然しながら、是れと同時に、わたくしはこの相違は無期限に、暫近的の關係にあるものであるとも信ずるものである。

異なる個人の間の能力の相違を善用するとは如何なることをするのであるか。其れは他でもない、能力の優れたものをして、能力の劣つたものの欲望を尊重しながら、彼等を率ゐしめ、能力の劣つたものをして、能力の優れたものの聰明を利用することに依つて、自己の生活の改善を圖らしめることである。優れた能力を持つた者も彼れ自身の功績に依つて其れを持つのでないと等しく、劣つた能力を持つ者も、彼れの過失によつて、其れを持つに至つたのではない。されば、一方が、自分の能力を誇るのの不當なことは、他方が自分の能力を恥づるのの不當であると同様である。たゞ、相方共に、自分の持てるものを自己の、及び、自己の屬する社會の向上のために協同的に善用するだけである。

七　結論

わたくしは、この場合に極めて適切であると考へるから、常てわたくしが個人主義に就いて述べたものの一節をこゝに引用して結論として置かうと思ふ。

『出來るだけ多く、出來るだけ速に、自由と、聰明と、善良とを獲得し、體得して行くことを人間の目的であるとして居るわたくし共に取つては、個人主義は總べての善きもの、美しきものの Alpha であつて、同時に Omega です。狹義に於ける政治の一事に限りても、個人主義は精神です、民主主義は其れの運出です。又、個人主義は終極です、民主主義は其れを實現する方法に過ぎません。……個人主義は、その性質内的であつて、修養であります。民主主義は、その性質外的であつて、方策に止まつて居ります。民衆をして個人主義の志向を體得せしめることは困難ではあるが、一度其れが成就された曉には、その感化は悠久であります。之れに反し、彼等をして民主主義の原則を理會せしめることは、左程困難ではないが、其れが可なりに成就されても、その効果は膚淺に止まるものであります。』

私の民衆文化觀

覺え書き

本間久雄

私は民衆文化の提唱には大賛成です。最も時機を得た提唱であることを信じます。しかし民衆文化とは可たり曖昧な言葉ですから、その解釋の如何によつては可なり又誤りを招ぎ易いと思ひます。

數年前、民衆藝術といふことが、文壇で論議されたことがありました。その時にも大ぶ問題となつたことですが、「民衆」と云ふ言葉の意義が甚だ曖昧なのです。或る人はこれを以て單に第四階級を意味するものであると云ひ、或る人は、もつとひろい意味に取つてこれを「人類」全體を包んでゐるやうに說きました。それから又、民衆藝術とは民衆のための藝術といふことか、又は民衆の藝術といふことかといふことについても可なりの議論があつたやうに記憶します。實際、かういふことの解釋の如何によつて民衆藝術といふことにも大ぶ異つた意義が生じて來ます。それと同じやうに民衆文化といふことも、その「民衆」といふことの意義の如何、民衆のための文化か、民衆の文化かといふやうなとの解釋の如何によつて、それ〲異つた意味のものとなるであらうと考へられます。民衆文化といふことを以て、單にブルジョア文化に對するプロレタリアートの文化であるといふことは異議はないが、しかし仔細に考へると、解釋の仕様によつて上のやうなさま〲の問題が生じて來ます。

わが國で、民衆文化といふことを最近最も高調して居る大山郁夫氏は、これを以て新舊時代精神の鬪爭における新しき時代精神の發露といふやうに說き、その舊き時代精神を以て、近世から現代までを支配して來た資本階級の勢力で代表される精神となし、新しき時代精神を以て、今まさに新興の氣運にある勞働階級及びそれと共通の利害を感じてゐる人々——所謂知識階級の大部分——から成り立つてゐる「民衆」によつて代表される精神であるといふやうに說いてゐますが、これは至極當を得

た解釋であると考へます。「民衆」といふことを、さういふ意味に解しなければ、民衆文化といふことは極めて狹いものとなるであらうと思ひます。しかし、「民衆」といふことは、それでよいとして、さて、民衆文化は、民衆のための文化か、民衆の文化かといふことになるとまだ〳〵問題が殘つてゐさうに思はれます。

しかし、これも煎じ詰めると、極めて簡單な解釋になり得るやうです。ウイリアム、モリスは、民衆藝術を定義して、「民衆によつて民衆のために造られ、その制作者にもその需用者にも共に幸福である藝術」と云つてゐますが、この定義を直ちに民衆文化に當て嵌めることが出來ると思ひます。卽ち民衆文化は、民衆によつて民衆のために造られた文化です。そして民衆全體の幸福を象徵した文化であらねばなりません。民衆文化といふことは、大凡そ、こんな風に解釋してよいかと思ひます。

將來の文化は、いふまでもなく民衆文化でなければなりません。そしてその民衆文化、卽ち民衆によつて、民衆のために贏ち得られた文化の如何によつて、その民衆の文化價値が定まるわけでなければなりません。何となれば民衆文化は、民衆感情の憬憧と滿足と幸福とを象徵したものであるからであります。

民衆文化が完全に實現せられる世界に於ては、上に述べたやうに民衆全體の憧憬と幸福とが象徵され、實現されなければなりません。しかし民衆全體の憧憬とか幸福とかいふことは、功利派の倫理學の最大多數の最大幸福といふやうな見方とは全然違つたものでなければなりません。それは最大多數の最大幸福といふやうな方便的な功利的なものでなく、飽くまでも個人本位なものでなければなりません。民衆の個々人の幸福を通して民衆全體が幸福であるといふ意味でなければなりません。個々人の個的幸福が、直ちに社會的な全的幸福を構成するといふやうな意味のものでなければなりません。個人の幸福と自由と憧憬とを束縛する社會は、決して民衆の社會でないと共に、さういふ社會の文化は決して眞の意味の民衆文化ではありません。民衆文化の價値は飽くまでも民衆の個々人の幸福が實現され、それを通して民衆全體の幸福が實現されるといふ種類のものでなければならないと、私は信じます。

民衆文化と所謂知識階級の關係といふことも考ふべき問題でありませう。民衆文化が完全に實現された社會においては、知識階級といふ一種の階級も自ら失くなるでせう。しかし少くも、民衆文化の實現されるまでは、知識階級は重大な役目を持

つて居ります。それは外でもありません。民衆の敎化といふことです。

今日の所謂勞働階級に缺けてゐるものゝ一つは所謂「敎化(カルチュア)」です。勞働階級には餘りに敎化がなさ過ぎます。敎化のない社會は藝術のない社會です。カアペンタアは「生活の藝術」といふことを力說しましたが、實際カアペンタアの云ふ通り、個々人の生活そのものが一種の藝術とならなければ、個々人はその生活に幸福を感ずることは出來ますまい。生活を藝術とすることのない生活は、單に存在してゐるに過ぎません、生きてゐるのではありません。そして、「生活の藝術」といふことを個々人が實現するためには、そこに、「敎化」が必要になつて來ること云ふまでもありません。尤も、これには敎化が必要だといふ以上に、個々人が、生活の幸福を享樂し得るやうな基礎の上に社會を改造することが更に〳〵必要であるのは、改めて云ふまでもありません。この努力は、何物を犧牲にしても、爲し遂げられなければなりません。しかしそれと並んで、敎化の普及といふことの努力も當然試みられなければなりません。といふのは、切角、社會が、その中の個々人が生活を享樂し得るやうな基礎の上に造られたとしても、さういふ組織を、個々人が生かし得なければ何にもならないからであります。そしてこの敎化問題といふことを考へる場合、そこに所謂知識階級の仕事の一つがあると私は思ふのであります。

尤も誤解のないやうに一言しなければならないのは、私が上のやうに云ふのは、知識階級と勞働階級と全く別なものと見たり、又は一段高いところにあるものと見たりして、云つてゐるのではないといふことであります。前にも述べた通り、知識階級も所謂民衆の中に含まれて居るのであるから、知識階級が民衆敎化のために力を致すと云ふのは飽くまでも民衆の一員としてそれをするといふ意味でなければなりません。センチメンタルな資本家が溫情主義を以て勞働者に對したり、物識りが、その知識を誇るやうな態度で無知な無學な人間に對したりするのではなく、飽くまでも、自分自らに對する態度を以て勞働階級のための敎化に力を盡すといふことでなければなりません。自分を勞働階級の一員として、勞働階級の敎化問題は、とりも直さず自分自身の敎化問題であるといふ意識を持つての努力でなければなりません。さもなければ知識階級の敎化的努力は、徒らに勞働階級の反感を買ふこと以外、何等の效果をも齎らないであらうと考へます。

西洋における民衆藝術の主張なども、要するに、民衆文化創

設の要望から生れたのであると見られませう。民衆劇場の主張者であるロマン・ロオラン氏の意見の如き、この點から特に重要視さるべきであると思はれます。

「現代の民衆の必要とするところのものは、偉大なる目的を喚起し、意志を强固にし、生活に對する見解をひろめ、民衆の情緒を純化し、又深化するやうな戯曲的藝術である。民衆は中流階級を描いた戯曲の巾のさま〴〵の愚かしいことや、不道德なことをいつまでも見せつけられるには餘りに善良である。民衆劇場は、現代の頽廢しつゝある社會を防ぐ一個の武器でなければならぬ。否更に一歩を進めて云へば、來るべき時代の叫び聲でなければならぬ。新しい時代は新しい藝術を要する。たゞたゞ時代と共にそれ自分を新しくするやうな藝術のみが民衆に取つて價値ある藝術である」

かう云ふ見解からロマン・ロオラン氏は、時代と共にそれ自らを新しくする民衆藝術を力説して居ります。そしてその藝術の内容を更に次のやうに委しく説明して居ります。

「民衆の必要とし、又は藝術に見ようとするところのものは、決して生活の外觀ではない。それは寧ろ生活の内的音樂を描いた藝術である。家庭生活の中の永久性を持つてゐる諸要求を描いた藝術である。日常生活中の悲劇の中に潜んでゐる神秘性を描いた藝術である」と、そして更に言葉をつゞけて云ふ。

「民衆は更により高き目的を狙つてゐる偉大な精神の潑溂たる不可抗的なさま〴〵の例證や、かゞやかしい献身的精神や、不屈不撓の意志の力などを提供する戯曲、又は個人にしても團體にしても、或ひは全體としての社會としても、そこに醸されてゐる卑しいもの、醜くいもの、取るに足らぬもの、矛盾してゐるものなどすべて哄笑せずには居られないやうな喜劇的な力を與へる戯曲を持たなければならない」と。

かくして、「一切の壓制、一切の卑俗、一切の惡意を憎惡する一念を民衆に喚起せしめよ。そしてそれと同時に、各個人をして、更によりよき理解に於て融和せしめ、各個人相互をして、更により深厚な同胞感を抱かしめるものたらしめよ」と云つてゐます。

この僅かな拔萃によつても、ロマン・ロオランの民衆劇場の主張の如何なるものであるかを吾々は容易に知り得ると同時に、かゝる民衆劇場の主張が、民衆文化といふことに、どういふ關係があるかといふとも容易に推知し得るであらうと考へます。事實北歐あたりの社會民主黨などには夙くもこの點に着眼して新しい民衆文化の實現を早めるために、如上の民衆劇場の運動に着手してゐるものもあるといふことです。」

このことについては、吾々は十分に考へて見なければならないと私は信じます。

民衆文化と余の文化主義

土田杏村

1

「文化」と言ふ言葉を我々が使用して居る場合には、獨逸語にKultur と言つて居るものを指して居る。なほ獨逸語のクルツウルは通俗には種々の用語例があるけれども、少くも我々が學問的に、なほ特に哲學的に此語を使用する時には、其れには或る特定の意味が含まれ、さう〳〵勝手次第な使用が許されないのである。我々が文化主義を主張する時の所謂「文化」は、此の哲學的に特定の意義を有する「文化」であつて、其の他通俗的に使用した時の「文化」では無いのである。新カント學派の或る哲學者達に隨ひ、我々が自然と文化とを明瞭に區別し、その自然の上に立脚した世界觀を自然主義と呼んだとするならば、此處に新らたに文化の上に立脚し、文化價値の實現を目的とする世界觀を樹立して、此れを文化主義と呼ぶに何等の不當もない。文化主義——少くも私の考へて居る文化主義は、斯くして嚴密哲學の上に立つて何等の誤謬も無い、純粹形而上學上の一主張となつて居るのである。

然らば世の所謂「民衆文化」とは一體如何なる意義を持つたものであるか。私は先づ此れに相當する適當の獨逸語を考へて見た。Volkskultur, demokratische Kultur, ……其の他幾つかの言葉を自分は想ひ浮べて見たけれども、通俗的の用語としては兎に角、學問的の用語として妥當だと思はれるのは、一つも數へることが出來なかつた。と言つて私は何も外國心醉の心から、態々斯様な外國語を拾ひ出さうと努めたのでは毛頭無い。—たゞ「文化」を言ふには、其の「文化」と最も關係するところの多い所謂「價値の哲學」が、餘りによく完成せられ、體系づけられ、我々は其の價値哲學の體系を無視しては、文化主義なる成語を使用すること其の事さへも殆ど無意義となるからに外ならなかつたのである。其れ故私は、從來「民衆文化」など言ふ言葉を使用する必要を感じたことも無いし、(通俗的に何等かの機會に使用したことがあるかも知れないが、其んな記憶も今は持つて居ない。)又其れに就て思索を重ねたと言ふことも無い。我が國

に於て民衆文化主義なる新らしい名稱を掲げ、此れを主張して居られるものには大山郁夫氏があるから、私は先づ大山氏の所說を拜見して、其れの感想だけでも述べようと思ひ、氏の從來の幾つかの論文を讀んで見たけれども、どうも私には其の主張の要點がわからなかつた。此れは氏の論述の仕方が惡いといふのでは無く、私が氏の論文の全篇を讀み通ほす努力が足りなかつたのであるから、罪は勿論私にある。其不完全な知識を以て氏の御意見を批評するのは甚だ無躾けなことであると思ひ、此處には其れも斷念することにした。今はたゞ「民衆文化」或は「民衆文化主義」と言ふ言葉だけに注意を向け、此の言葉は成語として餘り結構なもので無いと言ふことを一言しようと思ふ。本誌が「民衆文化の提唱」號であるとするならば、私は其の樣の思想を提唱する必要を少しも感じて居ず、否寧ろ其の提唱の必要無しとさへ考へて居るものであるから、編輯者に對してはお氣の毒の感が無いでも無い。

2

民衆文化とは何であるか。大山氏は先づ「民衆精神」なるものの意義を限定し、其れとプロレタリアニズムとの關係を制限し次に『そして私は、この意味に於ける民衆精神の社會生活の上に於ける現はれを民衆文化と呼んだ』と言つて居られる。其の他の人達の定義は如何なるものであるか、私は其れを詳しく知らない。併し大體に於て「民衆文化」は「文化」と言ふ意味的成立を「民衆」と言ふ存在によつて限定したものに相違無いのである。斯樣に言へば、讀者は又しても私が七面倒臭い哲學上の概念の詮議立てなどをやるのに愛憎をつかして了ふかも知れない。併し私にして見れば、斯樣な詮議立てが無い爲めに、我が國の諸主張は學問的になつて來ないのである。なほ本誌に書かれて居る他の人達は、各々其の見るところによつて民衆文化を議論するであらう。私は私の專門として居る思索の方面から特色ある議論をする方がより有益であらうと思ふから、殊更らに此の種の詮議立てをすることにする。「文化」とは價値が存在に內在したる意味的成立であることは、私從來至るところで論じて居るから、此處に再論することを省略す。(「雄辯」四月號所載「排斥す可き外來思想を論ず」參照) 次に「民衆」とは、何としても社會學的に見た存在的集團を指して居る。

民衆文化の意義が此の如くに定つたとするならば、次に「民衆文化主義」とは、此の如き意味の民衆文化を吾人の生活理想として其れが實現を計る我々の形而上的努力であると言ふことになるであらう。

3

斯様に言ふならば、其處に私が常に主張して居る「價値に就ての一般の謬想」がやはり同じ形を以て表現せられて居るのを見るに相違無い。

先づ其所謂民衆文化といふものを見て行く。何等か「民衆」と稱せられる存在的の集團があるとすれば、此の集團の生活樣式に一の個別的特色を附與して居る何程かの民衆精神と言ふものあり、随つて民衆文化なるものも成立して居るには相違無い。私は其れを全然否定し去らうとするものでは無い。否寧ろディルタイの思想の樣にして考へるならば、此の思想も大いに眞理を持つたものだと考へて居る。併し此れには同時に大いなる危險が伴隨することを忘れてはならない、其の危險の第一は、意味的成立である「文化」を存在的に制約するといふことである。或る人達は、「文化」を存在的に制約するのは何も不思議なことでは無いとさへ考へられて居るであらう。なほ換言すれば、一般に社會學者、社會學的の思索法を取つて居る法學者、經濟學者は此の樣に考へて居るかも知れない。けれども此れは哲學的に最も大いなる誤謬である。我々はラスクが Sozialtheorie des Rechts (法の社會學的議論) と文化學としての Rechtswissenschaft(法學)とは區別しなければならないと言つて、(私の雜誌『文化』所載「ラスクの法理哲學」參照) 熱心に其の區別を言つたのに傾聽す可きである。然るに我が國の社會學者や法學者や經濟學者や其の他評論家やは如何に屢々此の誤謬を侵して居るであらうか。法と言ひ經濟と言ひ、此等文化は何處までも意味であつて存在では無い。社會學は Kulturrealität (文化實在) を研究するけれども、Kultur an sich (文化自體) を研究するといふことが無い。然るに此の區別を嚴密に爲して居らぬ時には文化を論ずるに社會學的の議論を以てして居り、(例へば此の文化が中產階級とどんな關係があるの、知識階級にどう結びついて居るのと) 其れで以て文化自體を論じて居るのだと、一も二も無く早合點をして了ふ。文化自體としての法や經濟や、寧ろ此れは哲學の立場から本質的に論じなければならないものであるのに、此れを社會學的に論じたからと言いつて何の意味があらうか。此れが危險の第一である。第二には、やはり同じことに歸着するかも知れないが、此の如くに民衆文化を說く時には、マルクス流の唯物史觀に陷り易いと言ふことである。(大山氏の所說にはマルクス式の思索法が可成りに含まれて居る樣に感ぜられたけれども、此れはなほ詳密に讀んだ後でなければ速斷出來ない。)即ち存在としての一の集團あれば、其の存在の利害に

立脚して一の共通思想共通文化を生ずと言ふ考へは、由來思想は存在によつて制約せられると言ふ僻見に陷り易いのである。マルクスの唯物史觀は存在より價値を生まんとする存在一元論に陷つて居ると言ふのは、世の哲學者側の定評である。民衆文化の概念も亦、此の種の存在一元論に陷り易い危險を多分に持つて居ると私は考へるものである。

4

更に民衆文化の概念を擴充して、民衆文化主義とする時には私は益々其れに不服である。前にも言つた樣に、「民衆文化」は存在を制約者として考へた意味的成立であるが故に、此の種の文化を生活理想と考へる時には、其れは存在本位の理想論となるのである。換言すれば、其れは無制約的に、或は本質的に理想なるが故に理想であると言ふので無くて、或る存在的集團の利害、其の生存に關係を有し、存在的に意義あるが故に理想であると言ふことになるのである。たとへば文化の種類を數へて、アリストクラシイの文化、ブルジョアの文化、プロレタリアの文化の三が成立するとすれば、我々はプロレタリア(と言ふ存在的集團)に所屬し、プロレタリアの利害を考へて居るが故に、前二者の文化を排擠して、後者の文化を高潮すと言ふが如きである。例へば大山氏にしても、『私は、私自身の生活といふものを離れて、私の社會觀を作ることが出來ないといふ風に、甚だ不器用に生れ附いて居るものである。そして私の民衆文化主義はこの私自身の生活といふものから、必然的に生れ出でた私の社會觀である』と言はれてゐるのは、如何にもマルクスの唯物史觀を一言以て道破し去つた有名なる言葉『人間は、常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである』を想起せしめるが、此れは一應は頗る興味ある言葉であるとしても、此の如きは理想を存在的に制約しようとするところより起つた存在一元論の誤謬に陷り、隨つて理想論上の相對主義となつて了ふのである。理想は飽くまでも存在の利害とは別問題である。存在の利害を批判するものが理想である。理想は其れが民衆によつて、或はブルジョアによつて、或はプロレタリアによつて懷抱せられるが故の理想では無く、何人が此れを懷抱するとは全く無關係に理想なるが故に理想である。存在は何等價値を動かすところ無し。私は民衆文化主義なるものは、多によつて理想を限定しようとする誤れる理想論に陷る無きやを惧れるものである。

5

此處に私は私の文化主義に就て、一應辯解して置く必要が生

じ來つた樣に思ふ。其れは私が一體何故に「文化主義」などいふ言葉を使用して居るかと言ふことである。私は前にも言つた樣に自然に對しての文化を考へるが故に、十九世紀末の自然主義に對しての二十世紀初頭の新理想主義を文化主義と呼ぶのである。

然らざる限り文化主義とは凡そ何物を意味し得るであらうか。其れは殆ど言葉としての成語にもなつて居ないものでは無いか。世間には、文化と言へば一概によいものの樣に考へて居るものがある。例へば文化生活とか文化運動とか言つて居る時には其の意味の文化を考へて居る樣である。或人によれば、我々が生活上の種々の享樂を、高尚に、上品に充たし行く場合には其れが文化生活である樣に考へ、或る博士は、文化生活など言ふものは、西洋ではずつと以前からあつたが、日本では近頃になつて今更らしく主張して居るなどゝ言つて居られるのを私は見た。併し其等の人達は皆な文化といふ言葉を至極通俗的に理解せられて居るのであり、哲學上の眞正の意義を少しも構ひつけて居られないのである。文化は價値關係によつての所産であつて、價値判斷の所産では無い。此れは極めて重要のことである。隨つて文化には惡の文化も無論含まれ得る。例へば此處に甚たしい惡法があつたとしても、其れが法律である以上は、此れも一個の文化なのである。然らば文化を生活理想とするといふは、嚴密には何等の意味も無いことである。私は此の點で世の多くの文化主義者とは大いに見方を異にして居るかも知れない。然らば眞に生活理想となるものは何であるか。其れは意味としての文化では無くて、其れの本原に立つて居る文化價値である。文化價値の實現を努める主張を文化主義と言ふ。其れは價値を顧慮しての主張であるが故に、沒價値的の生活理想論を指して自然主義と言ふに對し、此れを文化主義と呼ぶは如何にもふさはしい。文化主義には民衆的とか、其の他何々とか、冠字を全く要しない。其の此れを附するは、文化なるものを正當に解釋しないことから起つたことで無いかと私は考へる。

私は今、世の多くの文化主義者に對し、諸兄は何が故に生活理想論に『文化』などいふ言葉を附し、文化主義などいふものを主張して居られるのであるかと反問して見たい。(七月三日稿)

ブルジョア文化の崩壞と民衆文化の勃興

加藤一夫

一

何れの社會にでも、何れの時代にでも、その社會、その時代に特有な、風俗、習慣、道德、制度、產業、宗教、科學、藝術、哲學、と云つた樣なものを持つて居る。そして吾々はこれを文化と呼んで居る。そして此の文化は、人間の生命が常に進化し變化する樣に、これもやはり進化し變化する。何となれば、文化とは人間の生命のもつ內的衝動の外的表現であつて、生命はそれが住む社會的環境や事情によつて常にその表現を異にするものであるからである。

文化は生命の表現である。それ故に、文化とは廣義な意味に於ける藝術である。

生命は常に創造的衝動によつて動く。この衝動がなくなつた時は生命のなくなつた時である。だが、生命の活動は常に律動的である。不斷に同じ精力をもつて動くものでない。同じ一個の生命に於ても、ある時季には怒濤の樣な勢ひでもつて進むかと思へば、次の時季には眠つて居るかの如くに靜である。一本の樹でも、春になれば若芽を出し、夏になると燃ゆる樣な綠りを全山に漲らし、秋になれば紅葉し、冬はその朽葉をふるひ落して靜かに沈潛する。そしてかうした律動的活動の後に、一つの生命の時代は過ぎて、彼が後に殘した種子が更に新しい生命をはぐゝむ。

それと同じ樣に、人間の社會に於ても、或る時代には或る時代の生命が活躍する。その時代に適應する創造を働く。しかし生命が創造する時には常に何等かの形式をもつて自己を表現する。そして形式とは要するに殼である。死物である。生命の殘して行く足跡である。ところが生命は往々にして此の死物であり足跡である殼に捕へられる。そしてそこに固定があり行き詰りがある。そしてその時生命はその殼を破壞する。破壞して新しいコースを始める。新しい生命がそこに生れ、新しい生の藝術がそこに始められ、そして新しい文化がそこに出立する。

さて、人間の文化史を考へて見て、我等は大體、原始時代の文化、貴族文化、ブルジョア文化、と云つた樣な區劃の存する事を知る。

二

自分は今これ等の文化史的研究をしようとするのではない。たゞ現代の我等の文化はブルジョア文化であると云ふ事、それが今や既に爛熟し行き詰り崩壊せんとしつゝあると云ふ事、そしてそれに代つて、新に、民衆の文化が鬱勃たる新勢力をもつて勃興しかけて居ると云ふ事を云ひ度い。

何をもつてこれを云ふか。一葉落ちて天下の秋を知る、と云ふが、ブルジョア文化の朽葉は既に落ち初めたからである。蓋し木の葉の落ちる時は既に新なる芽の萠芽が既に包まれて居るのである。我々は未だ民衆文化の完全なる葉を見ないとは云へ幼芽は既に無産勞働階級の自覺のうちにはぐゝまれて居る事を知るのである。見よ、歐洲大戰この方、世界の勞働階級が如何に自覺して來たかを、如何にその猛烈なる勞働運動を開始したかを、そして無産知識階級が如何にこれに呼應し聲援し協力し始めたかを。今や既に新しい芽は用意されて居る。今はたゞ、大なる嵐が吹いて來て、此のブルジョア文化の朽葉を振ひ落すのを待つて居るに過ぎない――風が起ればいゝのだ。たゞ風が吹けばいゝのだ。

三

然らば、此の振ひ落さるべきブルジョア文化とは何であるかそれは何によつて成立つて居るか。何の土臺の上に立つて居るか。またその特質は何であるか、內容は何であるか。

A、自分は先づ、ブルジョア文化は何によつて成り立つて居るか、何の土臺の上に立つて居るかを語らう。

今日の社會に於て一番割のわるい役割を勤めて居るのは第四階級の無產勞働者である樣に、ブルジョア階級も壓迫され苦しめられて居た時代があつた。その時、彼等のうちの自覺せるものは敢然立つてその社會の不合理を絕叫し、不合理を破壞した。彼等は自由と平等との名に於て、彼等を束縛し壓迫するものに戰を挑んだ。そして彼等に生活上の平等を獲得せん事を要求した。彼等はその戰に勝つた。彼等の革命は成就した。しかし彼等は彼等の戰ひに勝つや、彼等はたゞ自己の階級のために社會を構成した。彼等は新しい哲學を發明した。彼等は新しい科學を創設した。新しい藝術を創造した。即ち新しい文化を樹立した。――ブルジョアの文化は此處から發生した。

これ等の事はもう事新しく說くまでもなく、こゝ一兩年の間に云ひふるされるまで云はれて來た。だが、そのブルジョア文化とは何であるか。彼等ブルジョアはかゝる燦爛たるブルジョ

ア文化を何うして創設する事が出來たか。何うして斯くも彼等の文化を榮えしめる事が出來たか。

ブルジョア階級が貴族階級に壓迫されて居る時には、彼等には文化はあり得なかつた。何となれば彼等には生活がなかつたから。彼等の文化をはぐゝむべき時と精力との餘裕がなかつたから。ところが、一度彼等が彼等の社會を建設する事が出來るや否や、彼等は彼等の生活を獲得した、そしてその生活を成育せしめて行くべき凡ゆる手段方法を彼等自身のために講じた。そこに彼等の文化が榮え初めた。

ブルジョアの文化が榮えたのは、彼等がそれ迄に負はされて居た不合理を破壞して、彼等が革命の標語であつたところの自由と平等と博愛とを享有する事が出來たためであるか。成る程それもある。彼等は自由を得た。彼等は彼等の階級の間に平等を宣した。そして博愛を高調した。けれど彼等の文化を隆盛ならしめたものは決してこれのみによるのではない、彼等は更に彼等の文化を榮えしむべき別の特權を獲得した。恰度貴族階級が彼等を利用して自己の利益を計つた樣に、彼等は更に彼等の下に在る階級、卽ち第四階級を利用し、第四階級を踏臺とし、第四階級の勞力を借取する事によつて彼等の私腹を肥し彼等の文化を隆盛ならしめた。

彼等には特權があつた。彼等には富があつた。彼はこれを利用して治者となつた、資本家となつた。そして知識階級となつた。

彼等は最早自ら額に汗して働くを要しなかつた。その代りに一日の生活の料のために犬の眞似でもしなければならぬ境遇に置かれて居る無產勞働者を使用して彼等の生活の料を儲けしめた。否、啻に必要なる生活の料を儲けさしたばかりでなく、それに幾倍、幾十倍、幾百千倍する剩餘價値を生產せしめた。彼等はその剩餘價値をもつて啻に生活の義務を免れたばかりでなく。その餘つた時間と精力とをもつて彼等の謂ゆる文化の建設に濫し贅澤を行ひ惡德を助長した。

一方に於ては稼いでも稼いでも追付かない窮乏がある。否たとひ何麼窮乏があるにせよ、稼ぐ事が出來るのはまだ惠まれた方で、稼ぐべき、卽ち、勞働をしたいと云ふ是れより謙遜(ハンブル)な要求がないところの最後の要求すらも充されない不幸な人間が居る。そして他の一方には、腕を拱いて蚊を吸ひ込む蟇の口のやうに金をその懷に吸ひ込む事の出來る特權者が居る。そして彼等はその有り餘る精力と金と時とを吐き出して彼等自身の燦爛たる文化を創造する。

彼等自ら、貴族階級に壓迫されて居た時には、彼等は大にそ

の不法をならして、自由を叫び平等を叫んだ。しかし、自らそれに取つて代つた時には、彼等は最早昔日の絶叫を忘れてしまつて居る。そして云ふ。一切を平等にしようとするのは誤りである。何となれば人の能力には生れながらにして差別がある。そして我々が資本家となるのも、支配階級となるのも、要するにそれは我々の優れたる才能の賜である。我々には我々の權利があるのだと。彼等がそれを云ふのならばまだしもだが、必ずしも彼等の仲間であるとは云はれないところの中間階級者たる知識階級者の或るものまでもが、彼等の口實をそつくりそのまゝに是認せんがために云ふ。人の頭腦には先天的の差別がある。我等が知識を得て、知的勞働に從事するためには、能力が足りない無智なる勞働階級の生産的筋肉勞働を我等に獻上するのは當然であると。

しかし、彼等は何をもつてこれを云ふ權利があるのであるか。今日の無産勞働階級者は凡て先天的に劣等なる能力の所有者であつて、彼等特權階級者は凡て優れたる能力の所有者であるか。否、斷じて否、彼等が能力を發達さす事を得、深奥なる知識を獲得したのはたゞ、彼等の有する特權の賜物に過ぎない。能力の差ではない。而も彼等は斯くの如き口實のもとに彼等の文化を育成する。

卽ち、今日のブルジョア文化はたゞ、無特權、無資力の勞働階級を踏臺にし、その勢力を掠奪する事によつてのみ成立するのである。たゞにそれによつて成立するのみならず、軍隊や警官や法律やの力をもつて保護するのである。

然らば今日のブルジョア文化はその根柢に於て既に誤つて居る。根柢に於て既に不合理である。それは罪惡の上に築かれたる空中樓閣である。

とは云へ、かゝる不合理は何時までも續けらるゝ道理はない。無産階級者は既に自覺した。彼等は既に彼等の奴隷生活をもつて滿足する事が出來ない。彼等は人間たらん事を要求する。否自分自身に生きん事を要求する。今日の知識階級の大多數も亦、その無産者たる事に於て、その特權階級者の道具たる事に於て、その奴隷たる事に於て、無産勞働階級者達とその運命を同じふする事から、また、彼等自身の獨立せる研究の結果から、勞働者の心理に同意し、彼等とその自覺を同じうし出して來た。

かくて今や、ブルジョア文化崩壞の兆は見え始めた。その不合理は最早匿しおほすべくもない。朽葉は既に落ち出した。今はたゞ嵐の吹き起るのみが待たれて居る。

四

B、次にブルジョア文化の特質は何であるか。その內容は何であるか。

一、それは既に説明した樣に、決して一般民衆の胎より生れた文化でもなく、また、一般民衆のために存する文化でもない。それはたゞブルジョア階級によつて創設され、そのためにのみ存するものである。そしてこれを是認するところの唯一の根據は、分業の是認である。

彼等は云ふ。

近世文明の進歩は偏に分業の賜である。文化の幼稚な時代に於ては、社會組織が單純であつたために、凡ての人は自分の事は自分でする事が出來たが、今日の如く既に社會の組織が複雜になつた時に於てはその樣な呑氣な事は行はれない。さう云ふ事をして居る間に分業の盛んに行はれて居る他の社會の者のために競爭に打破られてしまひ遂に破滅するより外に仕方がない。そこで、今日に於ては何うしても分業が必要である。即ち資本をもてるものは資本家、資本を持たないで勞働を持てるものは勞働者、知識をもてるものは學者、と云つた風にである。そして、更に同じ勞働者でも、ピンの頭を造るもの、同じ長さにきるもの、尖端をつけるものと云つた樣に更に小さな分業が必要であると。

かくて今日の文化の特質の一つは極端なる分業制が行はれ、そのために人はたゞ器械同樣に取扱はれ、そこに何等の創意もなく何等の工夫もなく、一體自分が何をして居るのかさへもわからなくなつて居る事である。そして玆にブルジョア文化の行き詰りがある。人間を獨立の人格者たらしめずして、單なる器械の手先きたらしめる墮落がある。

のみならず、此の極端なる分業制はその根抵に於て既に非常なる誤謬をもつて居る。たとへば、人間を、資本家、智識勞働者、筋肉勞働者、と云つた風に分ける事である。

勞働が何等の創意なく、趣味なく、たゞ苦痛ばかりである今日に於ては、資本家や知識勞働者と云つた樣な分業の役割を與へられたものはいゝかも知れない。しかし或る大多數のもののみが何故に生れながらにして、かゝる無趣味なる、かゝる苦痛多き勞働に縛りつけられねばならぬのであらうか。

ブルジョアの哲學から云へば、それは才能の相異のためで、仕方がない。しかしそれの間違ひであるのは前に説明した通りである、それは只だ、特權階級者等の自己辯護の口實に過ぎない。我等は才能の相違のある前に、生れながらの境遇の相違、即ち、不平等のあつた事を記憶せねばならぬ。

ある平等な社會に於て、或る者は大工が上手で、ある者は靴

製造に特別の手腕があり、或る者は學問、或る者は繪畫に堪能であると云つた場合、その社會のものが自然と、大工の上手なものに建築の事を任し、靴製造の手腕のあるものに靴製造を賴むやうになつたとするならば、その分業は是認される。しかし今日の如く、如何に藝術的素質が豐であつても藝術に從事する事が出來ずして、ピンの頭をばかり造らねばならぬと云ふ樣な事は決して正しき意味の分業と云ふ事は出來ない。そして今日の文化は實に此の誤れる分業を是認し、ブルジョア階級のために資本主義の擁護を行つて居るものである。

二、次に、今日の文化の一つの表はれとして、政治や法律について考へて見ても、それがたゞブルジョア階級のための政治や法律だと云ふ事がわかる。

まさか今日の謂ゆる文明國では專制政治の行はれて居る國はない。それはみな立憲君主國か共和國である。そして、ある國では普通選擧が行はれ、ある國では行はれて居ない。しかしこれが何であつても少しも相違がない。今日の政府者達及び議員は何をして居るのであるか。彼等は、國家のためだとか人民のためだとかと云ふ。が、人民は彼等のする何を知つて居るのであるか。何の恩惠を蒙つて居るのであるか。今日の政府がなして居るのはたゞ、資本家のための仕事である。領土を獲得する、戰爭をする。そのために無產勞働者や小作人達の伜どもが兵隊にとられる。そして戰爭にやられ、生命をまゝ、獻げさせられる。しかし戰爭によつて利益を得るものは誰であるか。資本家と軍人とそして要路にある政治家達ばかりである、民衆は何のために戰爭をして居るのかさへも知らない。而も彼等は曰ふ。國家を安泰に盤石の上に置かんがためには軍隊が必要であり政府が必要であると。彼等はまた云ふ、我等は國民の安寧と幸福とのために秩序を保持すると。しかし國民とは一體何であるか。國民のうちには、利害を異にする二つの階級がある。そして彼等はその何れのために計らうとするのであるか。彼等は官吏警官兵卒を民衆のうちより取つて彼等自身の安寧と幸福とを保持するのである。勞働者が自己の權利を主張するためにストライキをなすの權利を獲得せんとしても、法律はこれを許さないばかりでなく、人民の代表であると云ふ議員ですら、まだこれを是認しないのである。普通選擧と云ふ毒にも藥にもならぬ權利を要求してさへ、尙これを阻むのである。

三、ブルジョア文化に於て科學は長足の進步をなした。科學は進化の法則を發見した。分子、原子、電子、と云つた樣な單位を假設した。光の速力を知り、天界との距離を算出した。謂ゆる學者と云ふものはそれによつて利益を得た。さうした研究

を續ける事によつて、不自由なく生活し、宇宙の秘密を探索する歡喜を持ち、そして世人の尊敬をうけた。しかし彼等のために檢微鏡を製造してやり、飢えしめない様に食物を供給してやり、凍えない様に衣類をつくつてやり、雨露の難に逢はない様に家を建てゝやつた勞働者は果して何を得たか。鐵道は敷設され、蒸氣機關は發明され、電信、電話、飛行機が利用され出した。しかし之等に依つて利益を得て居るものは誰であるか。富者、權力者、軍人を措いて誰がその恩惠を蒙つて居るか。恩惠を蒙るどころか、勞働者はこれ等のものゝ發明と利用とのために益々多く搾取せられ、益々多く生活の不安を感ぜしめられて居る。醫學は進歩し、治療術は日に新を加へるけれど、その恩惠を蒙るものはたゞ富者ばかりである。學者たちは決して安價に誰でもその病を醫され得る方法を考案しない。たゞ富者を喜ばせ、その報酬を多く自分に得ん事をばかり考へて居る。

四、更に今日の藝術を見よ。大理石に美しい像は刻まれ、カンヴスに立派な繪は描かれるけれど、それを樂しみ得るものはたゞ富めるものばかりだ。而も大理石を山から掘り出すために汗をしぼり、カンヴスを織り、麻糸をつくり、麻を畑に栽培するものはそれによつて何を得たか。印刷職工は朝の六時から夜は九時十時まで、ろくに日光もさゝない工場の中で、單調な、自分には何の事だかわかりもしない文章を組むために文字をひろい、版をつくり、版を解くが、また、製本工は紙を折り、綴ぢ、表紙をつけるが、しかし彼等のつくつた小說や雜誌や單行本は、彼等の生活とも思想とも何等の關係のない、いやに氣取つた、神經のねぢ曲げられた、無意味な言葉の行列に過ぎないでないか。

これ等は凡て、今日のブルジョア文化の特質である。その內容である。少數のブルジョアが樂しまんがために、利益を貪らんがために、多くの民衆は無意味で無趣味で苦痛多き勞働をつゞけねばならないのである。

自分は素より、これ等の文化の一切が破壞さるべきものだとは云はないが、それ等も社會の制度が變り、使用法を改めさへすれば、全然民衆のためにならないと云ふ必要はないとは信ずるが、兎に角、今のまゝでは、今日の文化のまゝでは、それはたゞブルジョアのものに過ぎない。而ももう爛熟し行き詰つた殼に閉ぢ込められた生命に乏しい文化であるに過ぎない。

これは不合理である。かゝる不合理は許さるべきでない。文化の重要を說くのはよい。しかしかゝる不合理な文化を一般民衆に强ゐる事は出來ない。此の文化の用をなした時代はもう過ぎて居る。それはもう、新しい酒を盛る事の出來ない舊い革袋

たるにすぎない。

新しい民衆は目ざめた。彼等は最早かゝる文化を信じない。

彼等は今や、彼等自身の新しい文化を創造しようとして居る。そしてそれをするために彼等は今、生みの苦しみをなして居る。

五

目ざめたる民衆は、新しき、自己の文化を創造しようとして居る。しかし彼等には敎育的特權はない。彼等は自己の才能をのばすために用ふる時間と金との餘裕を持たない。そこで彼等は何うしても先づ勞働運動をなさねばならぬ。

凡ゆる困難と苦痛とを忍んで、彼等は彼等の自由を得なければならない。彼等は眞の人間とならなければならない。奪はれたる自分自身を取り歸さねばならない。

彼等は賃銀の增加を要求した。彼等は時間の短縮を要求した。彼等はそのためにストライキをした。けれど彼等は一日工場を休むでも直ぐ樣生活に關係する身分である。それに反して資本家には餘裕があるのみならず、資本家を擁護して吳れる大なる力、官憲がある。勞働者は弱い。

よし彼等の要求が通つても、資本家は直ちに物價をあげる。そしてその結果、勞働者は割合から云つて却つて一層慘めな目にあはねばならぬ。

彼等は今や單な賃銀運動や時間問題や議會政策では到底彼等の不幸を救ひ得ない事を知つた。

彼等が眞に要求するものは自由である。自分自身になり、自分を生き、自分を表現する事である。卽ち彼等自身の文化を創造する事である。彼等はそのために彼等に能ふ一切の努力をして見る。凡ゆる策戰を計劃する。

彼等は、今日の制度を根本より改めないでは到底彼等に利でない事を知つた。そしてそれをなすには今までの生ぬるい方法では駄目と云ふ事を知つた。彼等は今や彼等自身の方法を採り始めた。

而もブルジョア文化の擁護者達は色々な理屈をつけて、彼等の運動や精神をにぶらさうとする。

六

ブルジョア文化は既に崩壞して居る。朽ちた葉がやつとクツついて居るばかりである。嵐が來れば一たまりもなく散らされるだらう。

民衆文化は既に芽ばえて居る。ブルジョア文化の朽葉が落ち

て、春陽一度來るならば燦然として輝き出るであらう。

民衆文化は勞働運動なしには育たないであらう。民衆文化は既に〳〵在るのだ。しかし今日の社會のまゝでは榮えない。たとへ誰かゞそれを導き出し誘び出しても、要するにそれは溫室内の芽ばえである。溫室から外に出して見よ、直ぐにしぼんでしまふ。民衆文化は造る事が出來ない。

民衆文化は自然と生るべきものである。そしてたゞ嵐と春の光とを待つて居るのである。——（六月三十日）

特に民衆文化なるものありや

石坂養平

文化と云ふ言葉を當然それと對立すべき自然と云ふ言葉と關聯せしめて見ると、後天的に添加的に生成されたものとか、これまで存在しなかつたものに存在を與へるとか、個人がその努力に依つて獲得したものとか云ふやうな意味が出て來るやうだ。或る時代に於て現にあるが如き人間の生活狀態並に社會狀態を持ち來たした精神乃至欲求がある。それを文化、それのあらはれを文化現象と名づけてよからう。今、この種の人間精神に於ける特異なる性質を個人の個性と稱するなら、あらゆる文化現象の背後にはそれの支持者として個性が潜んでゐるわけだ。だから文化現象は個性（詳しくば個性的要求）の綜合的表現であると云ふのが最も正しい發想であると私は思ふ。民衆文化主義の提唱者たる大山郁夫氏は『文化といふ現象を、私は時代精神の人間の社會生活の外形に表現せられて居るもの、及び表現せられつゝあるものと見る。』と云ふ解釋をしてゐるが、「人間の社會生活」と云ふ文字が明確な意義をかいてゐる。私達の社會生活には嚴密な意味に於て全く文化現象に屬しない自然現象が多量に含まれてゐるではないか。私が個性なる文字を使用し、それに時代精神に於ける特異性を從屬せしめたのは文化現象から自然現象をエリミネートしようとの用意に出たのであつた。

如何なる時代にも文化となつて表はるべき時代精神はあるが、個性の特異性とそれの綜合可能の範圍とが時代に依つて違ふから、文化の本質と樣式もまた時代に依つて違ふのは當然である。先づ本質の方面から云ふと、或る時代には政治、財政、經濟等を基調とした文化が大多數の個性の意識内容となつてゐるであらう。また或る時代には學問、藝術、科學等の所謂心的

文化が主潮を形成してゐるであらう。次にこれを樣式の方面から見ると、甲の時代には明白に或る一つのプレドミナントな時代精神を認めることが出來るし、乙の時代には二つ若しくは二つ以上の、それのどれが最もプレドミナントであるか洞察し難いくらゐに對立若しくは分立してゐることもあらう。過去に於ては時代精神乃至要求が一國若しくは一民族を中心として個別的に動いて來た形跡が多いが、最近殊に大戰後に於ては世界を一つの社會團體として同心的に動くの傾向が著しくなつて來た。これが直接の原因としては人類意識の昂揚、國際關係の緊密、勞働階級の勃興等を數へてよからう。

現今の我社會に於ける人間の階級的分布狀態には一定の系統秩序がある。少數の資本主に對して多數の勞働者のゐる工業地や、僅少の地主に對して澤山な小作人のゐる農村に於ては、分布狀態が極めて單純である。資本家、會社重役、官吏、地主、會社員、學者、文學者、無產有識者、藝人、商人、勞働者等あらゆる部類の人間を網羅してゐる東京、大阪のやうな大都會にあつては一見極度に紛糾してゐるやうであるが、彼等の中心要求を吟味して凡そ三つの階級に分類することが出來る。第一は資本家、會社重役、地主、大商人、會社員の一部を一團と見た所有慾本位の階級、第二は學者、文學者、藝人及び官吏會社員の一部を一團とした創造欲本位の階級、第三は勞働者、小賣商人を一團とした無產無識（詳しくは無所有慾無創造慾）の階級である。今日の社會評論家の多くは人間の要求を洞察せずに、單に社會の外形から、資本家階級と勞働者階級とに分けたりブルジョア（資本家に同情すると云ふ意味から）とプロレタリアーとに分けたりするが、これは社會を、經濟關係に依つてのみ規定し得ると云ふ偏見に囚はれてゐるのだ。特に可笑しいのは文化現象を論ずるのに、人間意識に於て相當の役目を演ずる美的、宗教的、科學的方面を少しも顧みない人のあることだ。

私の謂ふところの創造慾本位の階級には、或は國家の給與に依つて、或は資本家の使用人として生活してゐる者があるから、或る意味に於て資本家階級に屬するものと見られないでもない。然しそれは物財の受授を通して個性の受授まで行はれ得るとする囚はれた見方だ。さう云ふ見方をすればこそ個性の中心要求を洞察し得ないのだ。文化現象の背後に於ける個性は經濟關係に於てばかりでなく、學術關係、藝術關係に於て文化に貢獻してゐるし、また貢獻し得るのである。物財を受くる者はそれを授くる者の奴隷にならなければならないか、受くる者の個性は授くる者の個性に比してその強さ大さに於て常に劣つて

ゐるか。理論的にもまた實際の事實としても決してさう云ふことはないのだ。私は今日の宗教、科學、哲學、藝術が所有慾本位階級の利益の擁護の爲めに使用され應用されてゐることを否定しないが、それの本來の使命がさうあるべきでないことは誰れでも認めるであらう。純粋なる學問研究者、自由思想家、藝術家は資本家の利益を圖る必要もなければ勞働者の利益を圖る必要もない、唯、人間の利益を圖ればいいのだ。人間の最深最奥の要求を充足せしむるやうにすればいいのだ。若し日本に一人の純眞なる學問研究者、自由思想家、藝術家がないと極まつては誠に淋しい氣になるが、それでも彼等が創造慾に驅られ、彼等の個性が學術關係、藝術關係に於て文化に奉仕するのは疑ひもないことだ。この意味に於て創造慾本位階級を認めるのは充分なる意義のあることだと私は思ふ。

民衆文化に關する大山氏の主張は『民衆文化の世界へ』(中央公論新年號)『民衆文化主義と自分』(我等七月號)等の論文によつてその大體を窺ふことが出來る。氏によれば、現代の時代精神の複雜なる流れは大別してブルジョア精神と民衆精神とになるが、人間に對する差別感を基調とするのがブルジョア精神の特質であり、人間に對する平等感を基調とするのが民衆精神の特質である。民衆文化とはこの民衆精神を表現したものであると云ふのだ。特に斷るまでもなく氏のブルジョアと云ふのは主として資本家を指し、民衆と云ふのは勞働者を指したのであるから、砕けて云へばブルジョア精神は資本家氣質、民衆精神は勞働者氣質と云ふものであらう。

私はブルジョア精神を認めるが、それの特質が差別感を基調としてゐるにあると云ふのは殆ど無意味であると思ふ。差別感と云ふのは何を指すのか。若しブルジョアが自己の地位、特權をブルジョア以外のものに對して誇示する感情であるならば、それは階級感情に外ならない。階級感情はひとりブルジョアに限るものではない、民衆もまた多量にもつてゐる。貴族、資本家に對する民衆の反抗、反感は極めて熾烈なものである。また若し己れは澤山金を持つてゐるから何でも思ふやうに出來る。己れは學問をしてゐるからえらいのだ、お前達とは人間の種類が違ふのだと民衆に誇示する感情を差別感と云ふのであるならば、それは人間そのものに對する根本的差別感である。今日のブルジョアには少數の貴族を除けばさうした馬鹿々々しい差別感を抱いてゐる者は恐らくあるまい。況して資本家の中には一代に巨萬の富を積んだ、その元をたゞせば勞働者であつた者が少くないのだから、彼等の肉體に人間に對する根本的差別

感などの浸潤してゐよう筈がない。更にまた若しブルジョアが自己の階級に於ける各自の間に於てその個性的卓越を誇示する感情を差別感と呼ぶならば、それは人間に內在する貴い感情である。どう云ふものを以て個性的卓越とすべきかは問題であるが、兎に角さうした差別感は民衆精神にもあり、あるべき筈だ。ブルジョア精神を行詰つたものとして卑下する大山氏とてもこの種の差別感まで拒否するわけではなからう。

　ブルジョア精神に特有なるものは人間に對する差別感ではなくて他の個性に對する特異感である。玆に特異感と云ふのは新熟語の嫌ひがあるが、共同感に對して用ゐるのである。私の所謂所有慾本位の階級に屬する者は强烈なる所有衝動に驅られ、自己の所有物に頼つて生活を營む。さうして所有の增大を圖り、その滅却を防ぐ爲めに自己の周圍に自然に見えざる一つの城壁を築くことになる。そこに他人の個性に對して彼の個性が特異なるものであると云ふ感情が湧起するのだ。彼の特異感はひとり勞働者に對して動くばかりでなく、自己の階級に屬する資本家に對しても動く。資本家同志の間に於ける企業合同の如きは一見彼等のその特異感の滅却、從つて共同感の激成を思はしむるものがあるが、その實際に於ては資本運用上の利害に基く合同であつて個性の融合から生れる共同感ではないのである。

　民衆精神の基調をなすものは共同感である。大山氏が平等感であるとするのは差別平等の對語に引きずられたのであらう。平等感なるものは私達の個性が神性を獲得した曉に於て本當に實現せらるべき理想上の標語としてのみ意義がある。不淨に滿ち缺陷に煩はされ勝ちの私達の現實生活の基調として平等感を云爲するのはよくその意味を考へて見ないからだ。昔から自由平等の叫びは革命好きの思想家達に依つて幾回も叫ばれたが、叫ぶ者の個性に神性に近づき得ない人間性の缺陷があつたから、一度としてその叫びは實現されなかつた、今後も恐らく同樣であらう。

　民衆にも所有衝動がないわけではない。彼等の或る者は隨分强い衝動をもつてゐるのであるが、彼等はいかに所有慾に執しても、獲得すべき對象にすぐ限定が見出される。所有の對象に依傍して生活を期することが出來ない。彼等は自己の弱小を痛感する。不安と不滿の感情が彼等の意識に濃厚となる。さうして所有以外の何物かに――何物かにと云つたところで周圍の仲間の外はない。――賴らずにゐられなくなる。民衆と民衆との個的接觸はかうして廣く傳播されて行くのだ。即ち彼等の最初の弱小感は共同感の基調となり、一度共同感情の世界に浸れば自己强大感に變はるのだ。

私は今日の資本家階級に對しては何等の愛着をもたない。彼等の個性は所有慾の爲めに貴い生命の流動を全く阻害されてゐる。私は社會の安定の爲めには彼等が所有慾から脫却して、も少し自己本然の生命に愛着を感ずるやうになることを希望するが、然し彼等の資本家精神からは現代文化に貢献すべき新精神が生れようとは思はない。

私達の眼前にある民衆、特に勞働者の精神に於ける共同感は民衆精神の一要素を構成すべきものであらう。然し彼等の共同感には自己と利害を同じうする「多數」を恃み、現にあるがままの「多數の要求」を一から十まで是認しようとする傾向が强過ぎはせぬか。彼等は自己の個性に對して安價な滿足を表してはゐないか。私は工業勞働者を知らないが、多數の農業勞働者をよく知つてゐる。私の觀察に誤りがないものとすれば、彼等の個性には極めて限定された共同感の外に、新らしき時代精神の芽生となるべきものがない。だから彼等の個性が綜合的に表現されて、或る一つの動力を形成したにしろ、そこに刮目すべき新文化現象が生れようとはどうしても豫想されないのである。

今日の民衆精神を表現したものが民衆文化であるとすれば、それは僅かに在存してゐる。然し特に存在せしむべき價値のあるものではない。私達の要求する民衆文化は將來の新らしき民衆精神の表現に待たねばならぬのである。

何處に新らしき民衆精神を求めたらいいか？　勿論新らしき民衆に求めなければならぬ。新らしき民衆はもつと個性を高めもつと個性を深めたものでなければならぬ。それには彼等は先づ私の所謂創造慾本位の階級に屬する者に見るが如き個性的精神を體得すべきだ。所謂心的文化の基調をなす宗敎意識、藝術意識を愛護する者の陷り易い特異感を捨て去るべきであるが、彼等の燃ゆるが如き創造慾は常に個性を高め、深め行くものである。（完）

古脊廣のレーニンと囚人服のデブス

堺利彦

クレムリン宮殿の一室、其の昔し歷代のツアールが威儀堂々として構へてゐた其の莊麗な一室に、今はレーニンが古ぼけた脊廣か何かを着て、『玉座』の椅子に坐り、無雜作な態度で誰と

でも握手し、誰とでも談笑し、誰とでも議論してゐる。彼は十分、五分、三分、一分と時間を定めて、無數の來訪者と面會してゐる。立つたまゝで話を片づける場合も多いといふ。彼れの顔には皺が多いが、其の皺は苦勞の皺でなく、微笑の皺だと云ふ。

アメリカでは、共和黨と民主黨とがそれぞれの大統領候補として、謂ゆる一代の大人物をズラリと並べ立てゝゐるが、社會黨はそれに對して、獄中のユージン・デブスを候補に指名してゐる。雜誌『リベレータア』の口繪に『アワ、キャンジデート(我黨の候補者)』と題してデブスの囚人姿が出してある。監房の鐵柵の中に、坊主頭をした、髭のない、溫厚な、然しながら口元の引締つたデブズが、囚人服のジヤケツを着て、低い寢臺(だらう)の上に其の長い兩脚を素直に揃へて腰かけてゐる。兩手も素直に膝の上に置かれて、左右の手のひらの指と指とは組み合はされてゐる。横には毛布の樣な物が折りたゝんであつて、其上に一冊の本が置いてある。足の前には瓶の樣な物が一つある。飲水の入れ物だらうか、それとも便器だらうか。そうして之がアメリカ合衆國大統領の候補者である。

『民衆文化』といふ出題の意味はよく分らないが、私は何となく右の樣な事が書いて見たくなつた。

一體、文化といふ言葉は獨逸の帝國主義者、軍國主義者、侵略主義者、及び其の附屬物たる學者等がやかましく云ひはやしたクルツールの譯語だらうと思ふが、それなら『國粹』といふ日本語が最も好くはまつてゐる。『文化』などゝ云ふからツイだまされる人もあるが。『國粹』と云つてしまへば正體が明白だ。此の文化主義、即ち國粹主義といふ保守的資本家的理想主義に對立させて、民衆文化といふ言葉を使つたものとすれば、それは云ふまでもなく、無産階級の革命思想及び革命運動の一切を包括した名辭でなければならぬ。

然し世間の人の多くがそういふ意味で此の言葉を使つてゐるかどうか。只だ言葉の上の感じからすれば、何となく『平民的の殿樣』若しくば『殿樣の平民主義』と云つた樣な氣がする。餘ほど高く買つた所で、中等智識階級の改革主義、若しくば學者連のお上品な革命主義としか受取れない。

そこでそういふ民衆文化主義者に取つては、レーニンとデブスとの粗野な風采言動は迚もお氣に入らないだらう。それとも我慢して下さるものか。それを伺つて見たい樣な氣がする。

婦人公論

八月號の主なる要目

定價五拾錢　送料一錢半

□我國の現狀に照して見たる**避姙可否論**
- □事實が私に語つてゐる……常磐松女學校長　三角錫子
- □何がそれほど不道德か……早稻田教授　安部磯雄
- □しなければならぬ避姙としてはならぬ避姙……醫、文學博士　富士川游
- □他に積極的方法を講じては如何……文學博士　吉田熊次
- □「バース・コントロル」をコントロルせよ……醫學博士　永井潜
- □産め！而して保護せよ……內務省囑託　生江孝之
- □反對論者に答へる……第一高等女學校長　市川源三
- □禍多くして益少し……成女高等女學校長　宮田脩

□**貞操解放か死か**……高島平三郎

□大戰後に於ける**婦人の位置**……文學博士　谷本富

□**慘虐性の話**……寺田精一

□**コレラの話**……醫學博士　石原喜久太郎

（小說）
- ■短篇　**不幸な結婚**……舟木重信
- ■短篇　**わかれ道**……近松秋江
- ■童話　**佛陀と戰爭**……秋田雨雀
- ■長編　**空華**……久米正雄
- ■長編　**小坂部姫**……岡本綺堂

□寺野博士令息と**白山藝妓の情死**
- □嗚呼寺野良一君の死……一友人
- □小學校時代の面影……久保田純一
- □中學時代のハイカラ……小川音吉
- □詩から死へ……一帝文學生
- □過渡期の犧牲者……中島誠一
- □（總評）藝術的の死か……文學博士　三宅雪嶺

□**尼港慘虐事件の顚末**……菱沼右一

□**美麗になつた米國の女**……野口米次郎

□**女學生を殺した五人の不良少年**……水島尺草

□**離緣になつた白秋夫人へ**……中田信子

□女學校女教師の**毒殺未遂事件**……牛尾純二



八澤浦物語

沖野岩三郎

一　左納榮三郎

日露戰爭が終つて間も無い時の事であつた。二宮尊德翁の事蹟と、俗謠相馬節とで有名な福島縣相馬郡鹿島驛に下車した一人の紳士があつた。

彼は鹿島町の旅館中村屋に投宿して、毎日毎朝夙く宿を出て、今日は西、明日は東と、頻りに近所近在を步き廻つて、何物かを物色する有樣であつた。

『一體あのお客樣は、何を商賣になさるお方だらう？』

これは　屋の家內中が心に抱いてゐた一つの疑問であつた。

『あなた、あの七番のお客樣は、どなたと仰しやるの？』

主婦は少しく心配らしく首を傾げ乍ら主人に訊いた。

『泉州岸和田のお方で、左納榮三郎つて宿帳には付いてゐるが。』

『何の御商賣？』

『唯だ商業と書いてあるだけだ。』

『毎日〳〵朝夙く出て行らつしやるが、別に御商賣をなさるやうでもなし、近頃大變お顏色が惡いやうですよ。何でも大變な御心配でも有りなさるんぢやアないでせうか。』

『ねえ、然う言へば然うかも知れん、しかし今日は早く歸つて來たネ。』

『えエ、今日は三時頃でした。だけど、明日は茨城縣の方へお

つとお出でになるのだつて、下女に然う仰しやつたやうですよ。』

『株にでも手を出して失敗したのだらうよ。』

夫婦が斯んな事を言つて居る時、表二階から段梯子をミシリミシリと物憂げな顔をして降りて來たのは左納であつた。

『お出ましですか。』と云つて女中が揃へた下駄を突つかけて外へ出て行つた左納は、町をずん〳〵と右に曲り左に曲つて田圃路へ出て行つた。そして、あちらこちらを、ぶらぶらと歩いてゐる時、偶と後の方から、

『御散歩ですか。』と聲をかけた者があつた。

左納は驚いて振返つて見ると、夫れは二三日前に停車場で汽車を待つ間に、逢隈山脈の事に就いて五六分間種んな事を敎へて貰つた四十恰好の商人體の男であつた。

『あ、あなたは此の町のお方ですか。此程はどうも失禮致しました。お蔭で稍や見當はつきましたが、矢張り解りませんでした。』

『さうですか、あの山には確かに銅山の試堀をした所が二ケ所程ある筈ですが……』

『餘程調べて見ましたが、解りませんでした。夫れで、先ア常陸にも磐城にも、もう此上試掘に取掛つて見るやうな鑛山は無いと諦めました。で、私も最う明日は此所を去つて茨城の方へ行つて見ようと思ひます。』

『さうですか、しかし折角此所までお出でになつて、手を空しうして御歸りになるのは如何でせう？』

『だつて致方がありません、主人には氣の毒だが此儘歸ります。』

『ねえ、世の中には仕事が無くつて困つてゐる人もあり、金があつても、夫れを投資する事業が無くつて困る人もあり、世は樣々ですなア。』

男はハヽヽと笑つた。しかし左納は笑はなかつた。そして謹嚴な口調で、

『しかし夫れは少し話が違ひます。私の主人は唯だ何の事業にでも投資しようといふのでは無いのです。世間の人の手をつけない事業とか、或は鑛山にしても、今まで誰も知らなかつた所から、日本を富ますやうな鑛脈を發見して、夫れを理想的に經營して見たいといふのです。金が有餘つて困るといふなら、今の時節に、どんな會社にでも事業にでも投資出來ますが、主人はそんな金持ではありません。少々毛色の變つた人なんです。だから私も毎日頭を悩ましてゐるんです。』

左納の言葉を聞いた男は、礑と膝を拍いて、

『然うですか、では乾拓をやつたら如何ですか。』と言つた。

『乾拓？　夫れは何ういふ事です？』

『乾拓とは沼を乾かして水田を作るのですよ、假令ば八澤浦のやうな所を……』

『あ、さうですか、解りました、しかし其の八澤浦つてのは、何ういふ所です？』

左納は田圃の畦に蹲つて男の顔を見上げた。男も左納の左つ側に蹲み乍ら次のやうな話をした。

『八澤浦つてのは、此の鹿島驛から眞直ぐに東の方へ一里ばかり行つた所で、大平洋を見晴して夫れは〳〵景色の佳い所です。昔は相馬藩の鹽田の有つた所で、(テツカリ千俵)と申して、日和が續けば鹽千俵は出來たのですが、もう何十年も荒れるまゝに放つちらかしてあるので、今は唯矢の目川の水が流れ込む一方です。所が其水の捌け口が無いので困るのです。言はゞ大きな胃袋のやうなもので、谷川の水がドン〳〵と流れ込むのを吸込む一方で、夫れを吐き出しもしないので、此邊では大食漢鎌足公の事を八澤浦と綽名するのです。先ア一度お出でになつて御覧なさい。夫れは〳〵實に立派なものです。あの川口から水を海へ流し出す事が出來れば、確かに五百町歩の田圃は出來ますがネ。一段三百圓と見ても百五十萬圓ぢやアありませんか。私に若し五六萬の金があれば鑛山よりも何よりもあの乾拓をやりますがネ。』

男は然う言つて、眼の前にあつた青草の莖をプチリと引きつて立上つた。

『然うですか、夫れは面白いお話を聞きました。では甚だ濟みませんが、あなたは明日私を其の八澤浦へ御案内下さいませんでせうか。』

『あゝ宜しうございますとも。兎に角風景を御覧なさるだけでもお出でになる價値は充分ございます。』

二人は翌朝八時に停車場で落合ふ約束をして其夜は別れた。

そして翌朝八澤浦へ行つて見たが、其日は晴々とした天氣で、の景色は殊に美しかつた。

左納は右に大平洋、左に八澤浦を眺め乍ら、此川の水が彼の海に落ちない筈はないと思つて、これまで此所の乾拓に着手した人は無かつたかと聞いた。

男は非常な物知りで、明治三十五年の頃、山形縣人の鳥居態彌、鈴木壽三郎の二人が、此所を視察した結果、明治三十七年に鳥居の出資で乾拓事業に從事してみたが、旨く行かなかつたと云ふ事から、話はずつと溯つて南北朝の頃まで飛んで、此の

東北岸に鷹の巣といふ實に風光絶佳の場所がある。南北朝の頃此の八澤浦屋形の莊に岩松某といふ土豪があつて、近隣に其の威を張つてゐたが、或時、相馬の城主が、屋形の莊司に鷹狩を勸め、其の鷹の巣へ誘き出して、其所から海の中へ莊司を突落して、岩松の領地を奪つたといふ事から、其の岩松の四天王であつた、中里、西里、蒔田、島の一統が今に此の沿岸に住つてゐる事まで詳しく話したのであつた。

二　出崎榮太郎

左納榮三郎と郷里を同じうする快男兒に出崎榮太郎といふのがあつた。泉州岸和田に産れて幼い時大工の弟子となつた。しかし彼は決して普通の叩き大工で終らうとはしなかつた。

明治十二年、夫れは出崎榮太郎が二十一の時であつた。其年、泉州の堺に紡績機械を据付けて紡績事業を始めた者があつた。夫れは日本の糸取車よりも大變便利なものだと聞いた彼は、早速、岸和田から、堺まで徒歩で行つて、熟々と其の機械を視て歸つたが、早速自分で工夫して、紡績機械を作つてみた。これは日本に於ける紡績機械の嚆矢といふべきである。

しかし(悧巧貧乏、村寶)といふ譬の如く、彼は人々に重寶がられ乍ら、種んな事に手を出しては失敗し、遂には自分の模造した機械の成功が禍をなして、紡績事業で一敗地に塗れて了つた。で、彼は總ての家産を賣拂つた上、多大の負債を荷つて漂浪の旅程に上つたが、彼の發明癖とでも言ふべき種んな機械の考案は、如何に貧乏の間にも禁める事は出來なかつたのであつた。

彼は或時、櫛挽機械を考案した。そして夫れを實地に使用して見ると、確かに從來の五百倍の製産力があつた。しかし彼は考へた。

『主として婦人が用ふる櫛、しかも夫れは平均一ヶ年に一個か二個位しか用ひない、こんな櫛を、そんなに澤山作つた所で、製産過多の結果、從來の職工が失業するだけの話で、しかも作つた櫛、賣口が無いのである。』

で、彼は其の機械を打ち毀して了つて、更に他の考案に取掛つた。そして今度は魚釣機械を發明して、自分と釣りに行つて見ると、其の釣れる事、實に夥しい、殆んど百發百中であつた。しかし彼は考へた。『總ての事には趣味が伴はねばならない。魚釣る人の心は、釣れたり釣れなかつたりする所に、言ひ知れない趣味が存在する。けれども斯んなに百發百中では唯々利益にのみ眼が眩んで人心を殺伐にする。』そこで彼は其の機械をも川に投げ棄てた。

彼が斯うして眼前の利益を、どん〳〵と放棄して行く事に就いては、随分幾多の悲しい犠牲があつた。彼の一家は常に貧に泣いた。妻は大道に夜見世を出して零砕の利を集めて辛うじて口を糊する料を得たのであつた。

明治二十四年は濃尾兩州に亙つて、恐ろしい大地震があつた。夫れを聞いた彼は、三人の弟子を率ゐて西濃の地に旅稼ぎに入つて、建築の請負業をやつてゐた。さうしてゐる中に、岐阜縣養老郡の山田貞策といふ男と知合になつた。

山田は彼を凡庸な請負大工では無いと知つて、或る日岐阜縣下の田畑に浸水被害の最も多い事を彼に語つた。

發明狂、考案狂の彼は完全なる排水機を作る事は、此の岐阜縣民を救ふ最大の急務だといふ事を山田から聞いて、遂に又た排水機の製作に専心し初めたのであつた。

彼は明治廿五年から卅八年まで、十三年間の苦心を重ね、惨憺を積んだ結果、とう〳〵(出崎式排水機)を完成した。そして彼は此の機械を岐阜縣養老郡池邊村の高柳といふ所に据付けたが、夫れは實に意外の好成績を収めて、五十町歩の田地から、平年に比して五百五十石といふ増收を見る事が出來た。

彼の此の事業を完成せしめようとして、十三年間精神上物質上の困憊を來さしめないやう、陰に陽に彼れを補助し奬勵した山田貞策は、彼の此の成功を見て、衷心彼の爲に祝意を表したのであつた。

左納榮三郎は、山田の意を享けて東北へ鑛脈發見の爲めに行つたが、安質母尼鑛一つを發見し得ずして歸つた。しかし彼は八澤浦といふ大きな疑問の地を發見して歸つた。

詳細を聽いた山田は、早速左納と共に八澤浦に行つて實地を踏査した。そして其の乾拓の不可能でない事を思つて、鹿島町の只野正藏に其事を相談した。只野は早速、麓の經營者である山形縣の鳥居、鈴木の二人に相談して其の事業を受け繼ぐ契約をした。相馬郡長金指清も非常に贊成して種々の便宜を與へた。

元來山田が今まで幾人も幾人もの失敗の跡を殘した此の八澤浦を買入れて巨額の投資をしようと欲したのは、其片腕として賴むに足る出崎榮太郎があつたからであつた。岐阜の池邊であれだけ成功した出崎式排水機をもつてゐるなら、乾度成功するだらうと思惟したからであつた。

出崎が山田から相談を受けて八澤浦へ來たのは明治四十年であつた。彼は直ちに矢ノ目川を測量してみた。排水口を調査

してみた。そして必ず成功するといふ見込を立てたので幾名の事務員と共に人夫を督勵して、暑さにも寒さにもメゲずに奮働いた結果、四十一年の夏、とう〳〵百五十馬力の出崎式排水機は矢ノ目河口に据付けられたのである。斯くして機械を運轉した結果、翌四十二年には水田三拾町歩を得た。しかし收穫は僅かに拾俵であつた。

三拾町歩で僅かに十俵は農業上から言へば大きな失敗ではあるが、兎に角日本開闢以來一度も乾いた事の無い此の八澤浦が、其の渺茫たる湖水の中に乾いた土地を見、其所に青い稻の葉の風に戰ぐのを見た時、山田や出崎は勿論、今まで『馬鹿な奴、又た彼の淵の中へお金を投げに來たぞ。』と云つて嘲笑つてゐた土地の人達まで、驚愕の瞳を輝かしたのであつた。

事業は成功の曙光を見る事が出來た。そこで八澤浦三百七十九町歩に對して、道路、溝渠、貯水池を除いて、三百拾貳町歩の水田を得ようとする大計畫を立てた。其の豫算金は拾參萬貳千貳百圓であつた。

出崎は山田が拾參萬の巨額を此所に投資すると決心したのを見た時、彼はどうしても此の三百八十町の水を乾拓して見せようと決心して浦の東北に排水口のトンネルを造つた。そして山と寄せ來る怒濤を防ぐ爲に閘門を設けたが、夫れは幾度も波に碎かれて了つた。けれども工夫に工夫を凝らして、閘門を完成し、[illegible]れば排水口開け、波來れば閘門自ら閉鎖するといふやうになつた。

『さア、今年は乾度此の浦全體に稻穗を實らせて見せる！』と喜び勇んだ彼は、夏の始めに總ての準備を了へて、或日の夕方岸邊の松の根に腰を据えて、海を眺めては川を見、川を眺めては海を見た。そして、

『機械の力だ、機械の力で此の浦の水を乾かして見せる。どうしても乾かして見せる。』と心の中で叫んだ彼は、其の炯々たる眼に希望の光を輝かせ乍ら、事務所の方へ歸つた。

歸る途すがら、『今夜は雨かも知れないぞ。』と呟いて、不圖空を振仰いだ時、彼は急に胸の痛みを感じた。

『どうしたのだらう？ 今までに斯んな事は無かつたが……』

彼は小首を傾げて胸のあたりを撫で擦つてゐるうち、ぽつりぽつりと大粒の雨が落ちて來たので、周章て、事務所へ驅け戻つた。

『猪之助、雨が降つて來たが、機械の方はあのまゝで宜いだらうなア。手落は無いだらうか。』

と不安顏で言つた。悴の猪之助は、偶つと顏を上げて彼を見た。そして非常に顏色の蒼白になつてゐるのを見た時、驚い

て、

『機械も排水口も、充分だが……夫れよりも、おとツつあんの顔色は何うです？』と問うた。

『うん、少うし胸が痛い。』

『さうですか、では御飯をお食りになつて早くお寢みなさいよ。』

『うん、然うしよう。』

彼は夕飯をも食べないで其まゝ寢床に入つたが、四十度近い高熱になつたので、家内中は俄かに大騒ぎをした。しかし新開地の淋しい濱邊の假屋には、附近から醫師を迎へようにも、そんな便宜を得られよう筈がない。家内は枕邊を圍んで、一生懸命に介抱してゐたが外では疾風交りの猛雨が頻りに屋根を打ち壁を搖ぶつた。近くの濱では風伯が水神と勇を爭ふやうに吼え合つた。

翌日になつても雨は已まなかつた。三日四日と降り續く雨に、彼は病の頭を擡げ乍ら、

『猪之助！ 排水口は宜いか、機械は大丈夫か。』と呼び續けた。

大丈夫です、大丈夫ですと言ひ乍らも、猪之助は愁眉は開けなかつた。

『猪之助、此の雨天では閘門が碎けたのだらう。夫れから彼の排水機も用を爲さなくなつたのだらう？ 隱さずに言つて呉れ。此の事業は我々人間と自然との戰爭ぢやないか、自然に負けたからツて別に愧でもないから。』

父の此の言葉を聞いた猪之助は、とう〳〵思ひ切つて言つた。

『實は……最う排水機も、閘門もすつかり水に浸つて了つて駄目です。』

『うん、さうか、仕方がない、お天道樣は俺より偉いんだから。こんな大雨を僅かに百五十馬力の排水機で、どうも斯うも出來るものぢやないさ。』と言つて、げツそり凹んだ眼に涙を浮べ乍ら、ぢつと猪之助を見上げたが、『しかしなあ、人間の智慧といふものは電樣をも伴れて來て火を燈させるんだから、お前は俺の後を繼いで、どうしてでも此所の浦から水を追ひ除けて呉れ、夫れは俺の賴みだぞ、山田さんにも最う十萬圓から金を使はせた……夫れは皆な此の俺と俺の機械を賴りにして出したやうなもんだからな……猪之助、賴むぞよ、あとを……』

どんな失敗にも困窮にも、ついぞ泣いた事の無かつた彼は、ホロ〳〵と熱い涙を枕に注ぎ乍ら言つた。

『先ア、お父つあん、そんな氣の弱い事を……』とは言つたが、猪之助も、最う頑丈だつた父の上に死の手が襲つて來た事を感

らずには居られなかつた。

間も無く雨は歇んだ、水も漸々と地中に吸込まれた。浸水の憂目を見た排水機も其の半身を水中から見せた。しかし彼は最う再び其の機械を見る事が出來なかつた。八澤浦に吼え狂ふ怒濤も、冷たい彼の鼓膜には何の響きをも與へなかつた。彼は其時五十一歲であつた。

三 山田貞策

急報を得て駈けつけた山田は、出崎の死と共に此の大事業を抛たねばならないかと思つた。十萬圓の資金は空しく八澤浦の水中に葬つて了つたと思つた。

『猪之助さん、あんたに此の後を賴みますよ。』

山田は斯う言つて總ての事を出崎の息子に依賴するより外に途は無かつた。

父の遺言が膽に銘してゐる猪之助は、更に此の信賴の言葉を山田から浴せられて、一層の責任を感じた。

『宜しうございます。私も多少の經驗がありますから、屹度來年までには成功してお目にかけます。』

山田は壯年血氣の猪之助に事業の總てを一任して每日海と川との堺に立盡して、『どうか出來ないものかなア。』と呟き乍ら嘆息を吐いてゐた。

山田には名古屋の實業界で相當の幅を利かせてゐる服部正夫といふ弟があつた。服部は熱心なクリスチャンであつたから、兄が十萬圓の巨資を八澤浦に投じ乍ら、何物をも得ないで失望落膽して居るといふ事を聞いて、頻りに書を飛ばして、『百折不撓、事業を成功せられたい。どうしても人間は弱いもんだから、斯う云ふ時に信念を有つてゐなければ駄目だ。』と言ひ送つた。

山田は未だ嘗て基督教會の門を潜つた事が無かつた。どつちかと言へば、基督教は毛嫌ひする方であつた。しかし主任技師に推薦した出崎猪之助が、基督教を信じて、確い〳〵底光りのする信念に活きてゐるのを見て、基督教が所謂邪教では無いといふ事位は感じてゐた。

だから弟の忠告に隨つて、中村町の基督教會を訪問してみる事にした。

彼は教會の門を潜る時、何だか嫌な感じがした。失望落膽して神に縋るなんて、何といふ卑怯な事だらう？ といふやうな事をも心の中では思つた。しかし勇を鼓して教會に入つて見た。無論牧師の言ふ言葉に何等の共鳴があらう筈は無かつた。

牧師は熊井といつて、其の當時熾んに日本人の思想を、引ッ掻

廻してゐた自然主義の影響をたッぷり受けた血氣熾んな青年牧師であつた。

山田は說敎後、熊井牧師に面會を求めて、事業蹉跌の經路を一通り語つて、どうかして更に勇氣を盛り返したいと言つた。彼は牧師から諄々とした奬勵を與へて欲しかつた。でなければ大いに激勵の辭を望んだ。しかし牧師は何と言つた。

『あゝ然うですか、あなた方のやうな富豪が、事業に失敗して懊惱するのは夫りや贅澤ですよ。十萬や二十萬の金を無くした所で、夫れであなたは今日から飢えるといふではあるまいが、此の日本には何百萬といふ多くの人が、今晩の食物が無くつて苦しんでゐるんですからなア。私は日本の富豪といふ階級のものが、皆な事業に失敗して、乞食のやうになつて見れば、彼等も始めて人間らしい人間になると思ひますよ。』

彼は此の言葉を聞いた時愕然とした。

『基督敎ッて、これは坐禪の時の痛棒よりもつとヒドい！』と心の中で思ひ乍ら歸つた。しかし彼は更に次の月曜日には、鹿島驛から一つ西に當る小高町の基督敎會へ訪問してみたのであつた。

四　杉山元治郎

杉山元治郎は泉州佐野の產れである。彼が大阪府立天王寺農學校を卒業して、直ちに和歌山縣廳內縣農會の記技手を拜命して月俸二十二圓を食むやうになつたのは、明治三十六年の事であつた。

彼は基督敎を信ずるの故を以て、當時和歌山敎會で傳道をしてゐた沖野岩三郎と知己になつた。當時の和歌山敎會には、加藤一夫、山野虎市、兒玉充次郎といふ血氣熾んな青年達が居て、頻りに社會主義的の言論を吐いて牧師瀧本幸吉郎を苦しめてゐた。杉山、沖野、加藤、兒玉、山野といふ五人は可成り敎會內に亂雜な空氣を吹込んだ。

彼等はとう／＼敎會發起の名の下に和歌山市の紀國座で演劇をやつた。そして一夜に三百五十圓の純益を收めて夫れを赤十字社へ寄附する事にした。しかし牧師瀧本は彼等の輕擧妄動を苦々しく思つて、其の金を敎會の名の下に赤十字社へ寄附する事を拒んだ。

ズルイ沖野は、脚もとの明るい中に東京へ逃げて來て、明治學院の神學部へ無理に入つた。所が殘つた四人は和歌山で、加藤一夫を中心にして『眞紅』といふ雜誌を發行したり、非戰論の演說をして、時の和歌山新報記者三木甲子郎に睨まれ、和歌山新報で、散々に書きまくられた。其の結果、山野と兒玉は

海軍々醫總監三田村忠國を長老とする和歌山教會の宗教裁判から放逐の嚴命を受けた。杉山は和歌山縣廳から逐はれた。

そこで四人は間も無く前後して上京したが、山野も兒玉も加藤も皆な明治學院へ入つたが、杉山だけは、東北學院の笹尾博士を慕つて仙臺へ行つた。

杉山は東北學院を卒業すると同時に牧師試驗を受けた。其時の受驗者數人の中で、無事に試驗を通過したのは、誰あらう、東北學院の神學部長神學博士笹尾粂太郎と、白面の書生である彼と二人だけであつた。所が彼は試驗には及第したが、牧師の資格を與ふべき按手禮をる受ける事が出來なかつた。夫れは笹尾博士と同時に同資格を受けるのは、博士に對して禮を失するといふやうな、薄弱な理由であつたらしい。

で、杉山は斷然ミツシヨンと關係を絕つて、自給獨立して傳道して見ようと思つた。彼は仙臺の東六番町日本基督教會の牧師となつて同窓の堀内直澄と共にクロツス社といふのを組織して、無料宿泊、出獄人救濟、無料質屋などを計畫した。しかし彼の俸給は教會から僅かに七圓を支給せられるだけであつた。で、彼はとう／＼營養不良の結果、肺を患つて死生の境を走つた。彼は病を紀州田邊の溫泉に養つてゐる時、つく／＼と考へた末、殘る生涯を全く農民の爲に捧げようと決心した。そして病の稍や癒るに及んで、彼は農民生活の實際、農村經營の要に就いて忠實な調査をなす爲に、東北六縣下の津々浦々、山間僻地に到るまで四たび巡廻した。そして彼が實驗した結果は、日本の農政問題には、殆ど今まで忠實に手を付けたもの丶無い事を知つたのであつた。

彼は病の癒えた後、相馬郡小高町の日本基督教會に赴任して、月給金壹圓五拾錢也を食むやうになつた。壹圓五拾錢の月給で彼が扶養せなければならないのは、彼の兩親と、妹と弟と自分達夫妻との六人であつた。即ち月給生活をするなら一家一人前の月額金貳拾五錢宛であつた。そこで彼は背水の陣を張つて、自給の方法を講じた。彼は呉服商であつた大きな空屋に引移つて、其所の表には『小高日本基督教會』と云ふ看板と共に、農作物種物取次販賣の看板だとか、農具、肥料販賣の看板が、ずらりと並んだ。瓦竈を築いて瓦をも燒いた。燒藷釜を据えて燒藷をも賣つた。彼が貳階で讃美歌を唄ひ說教をしてゐる時、下では妻君が、瀬戸物を賣つてゐるといふ有樣であつた。殊に彼れの工夫になつた『杉山式ガ鋤犂』といふのは非常な好評を農民間に博し得た。彼の作つた燻炭は隨分能く賣れた。と同時に彼は近村近在の青年會員と連絡して、巡回講義を開始した。そして印刷物に就いて忠實に土壤學

や肥料學の講義をしたので、農民は實に彼れを智慧袋のやうに重寶がつた。

彼はスカンヂナビヤの寒國に始められた農民高等學校を模倣して、自分の敎會內に小高農民高等學校といふのを創設した。夫れは冬の十二月から春の四月まで、四ケ月間每夜農業上の智識を授くる爲に、火鉢を圍んで談笑しながら、種々の講義をするのであつた。月謝は五十錢で、しかも夫れは麥でも諸でも何でも宜いといふ方針で、十人ばかりの生徒を集めて敎授して居た所へ、偶々彼を訪問したのは、中村町の敎會で靑年牧師に嚇かされて戶惑つて來た八澤浦開拓事業の失敗者山田貞策であつた。

五 奇蹟

山田貞策は不思議にも斯んな農民傳道者を發見し得たので、其の喜びは實に譬ふるに物無き有樣であつた。杉山も亦た直ちに彼れの事業を應援すべく甘諾した。そして山田と一緒に八澤浦に行つて見ると、其の若い主任牧師出崎猪之助は、杉山と同縣人ではないか。同宗敎ではないか。彼等は互ひに心からの握手をした。そして更に同心協力して此の乾拓事業に着手したが、どうしても事業は依然として困難であつた。

出崎は自分一人で苦んで居た時よりも、此の有力な應援者を得た上、成功の曙光を認め得なかつた時の失望落膽は更に大きなものであつた。

或日出崎は從業者一同と共に濱の松林へ行つて、種々と熟議したが、今更俄かに名案も出よう筈はなかつた。で、皆なは松原に、ど坐つて失望の色を面に泛べ乍ら海面を見てゐた。

時恰も海は大干潮であつた。出崎は丘の上から觀測して見ると、海面と矢ノ目川の川底とは確かに三尺の落差があらねばならぬと思つた。で、直ちに測量して見ると果して水面(レベル)三尺の落差があつた。

其時工夫の一人が斯う言つた。

『あの北磯には何十年か十何年か前に、誰かの開鑿した水道と古トンネルがある。一つ彼の古トンネルの中を調べて見ようでは無いか。』

一同は期せずして其の說に贊成した。そして勇を鼓して其の崩れかけたトンネルの中へ潛り入つて見ると、其所に一大事實を發見した。夫れは即ち、工事請負者の不正で、トンネルの兩方の口は普通に開鑿してあるが、其の中央に進むに從つて、段々中高になつてゐる事であつた。

『あ、これだ！ こんな事をしやがつてあるからだ！』

一人が叫ぶと、暗いトンネルの中で一同は非常な寶玉でも拾ひあつたやうに、ワァ／＼と喜びの聲を擧げた。

そして彼等は一方、水路の修復をすると同時に一方に於て其のトンネルの中央を掘り取つた。

工事は日ならずして出來上つた。トンネルの中から海面に淡水を吐き出し初めたのを見た一同は岸の上から海を眺め川を見ながら、

『うまい／＼！』と叫んだ。そして彼等の心には本當に跪いて祈りたいやうな感謝の念が溢れた。

出崎は其夜幾度も／＼家を出て浦の水面を星明りに透し眺めた。そして何千年の間を水に浸されて居た兩岸の土が、墨で彩どつたやうに黑い輪廓を殘し乍ら段々と水を海面に吐き出して行く樣を見た時、彼は土の上にぺたりと座つて、

『お父さん、お父さん、浦の水は海へ出ます！　八澤浦は今夜中に田圃になります！　お父さん！　お父さん！』と叫びたいやうな氣がした。土に喰ひついて泣きたい程嬉しかつた。

翌る朝、出崎は夜の引明けを待ち兼ねて濱へ走つて行つて見た。そして丘に立つて眺めると、開闢以來、嘗て其の底を見せた事の無かつた失の目川口は、悉く乾いて、三百五十一町歩の田圃が、見渡す限り眼前に展開してゐるではないか。

出崎は本當に喉の裂ける程叫びたかつた。聲のあらん限り喊つて見たかつた。

山田も來た、杉山も來た。そして從業員一同は八方へ手分けして、植殘りの稻苗を買ひ集めた。

もう少し苗を植えるには時期を失してゐたが、夫れでも兎に角壹百町歩の水田を整理して夫れに苗を植付ける事が出來た。そして其の秋になつて一千俵に近い米の收穫を見たのであつた。

皆な事務所に集つて、此の奇蹟的な出來事を喜び合つた。しかし其の歡聲の中に唯一つ不足なものがあつた。夫れは實に出崎式排水機の爲に一身を犧牲にした出崎榮太郎の聲であつた。

六　記念の堤

此の事を傳へ聞いた小作人は日本の諸國から集つて來た。夫れは大抵無一物、裸一貫の人達であつた。翌年は非常な豐作で、四千俵一萬六千石の收穫があつた。此の田圃を耕す爲に從事してゐる小作人は全體で二百二十戸の多きに上つた。

出崎は三百五十町歩の水田の眞中に一つの溜水池を設けて、

其所で鰻を飼ふ計畫を立てた。其の相馬養魚株式會社の株主は此の八澤浦乾拓地の移住民と地主に制限された。鰻を養殖する湖水面は四十町歩の廣さをもつて居て、清い澄切つた水が、優しい小波を立て乍ら彼等の成功を讃美してゐる。湖水面には一艘の舟が浮んで居る。小い旗が風に吹かれてヒラ〳〵してゐるのを見ると、夫れには杉山の筆になる『福音丸』の三字が鮮かに讀まれる。

山田は事務所の直ぐ隣りに教會を建てた。下の室は農具の置場で貳階が説教所である。

杉山は其所の牧師となつて、毎月二回づゝ説教の爲に出張した。そして小作人に對して農業上の智識を與へつゝ基督教を教へた結果、大正三年の春、彼は自分の恩師東北學院長、シュネーダア博士を招いて、卅三人の農民に洗禮を施して貰つた。

『杉山さん、あなたは本當に理想的の傳道者です。日本の傳道界に珍しい記錄を造つた事を喜びます。』と云つて、其の大きな手を差伸べて杉山の手を握つた博士の眼には、禁ずる事の出來ない涙の輝きがあつた。

秋の末になると、此の教會堂で一種異樣な集會が開かれる。二百餘りの小作人は午前から會堂に集つて地主から贈られた折詰に舌鼓を打つ。

食事の濟んだあとで、赭黒く日にやけた農民の逞ましい口から調子の揃はない讃美歌が歌はれる。杉山が收穫の感謝をすると、山田は地主としての訓示をする。次いで杉山が説教をして、其の後で小作米審査の結果を發表する。そして一等から六等までに、食器だとか洗面器だとかいふ日用品を賞品として贈る。

斯うした不思議な品評會があつたあとで、郡吏や縣吏の祝辭があり、農民の感話があつて、一同が讃美歌を歌つて和氣藹々の中に散會するのである。

クリスマスには一戸毎に糯米一升づゝを持ち寄つて、朝から夜の十二時過まで移住民の各家族が皆な打集つて、相撲を取つたり踊つたり歌つたりして、歡樂を盡すのである。

斯んな宗教氣分に噛まれた移住民八十戸の人々は、舊約聖書のイスラエル人がカナンに入つた時の話を杉山から聞いて非常に感じたと見え、或日彼等の代表者が杉山を訪問して、

『私共は、お蔭でどうやら、一人前の魂をもつて行く事が出來るやうになつた。で、私共も此の開墾に從事した記念の爲めに、あの潴水池の東側に堤防を築きたいと思ひますが、何うでございませう？』と言つた。

杉山は元來、記念碑といふやうな月並なものを好まない、しかし此の時ばかりは非常に喜んで其の擧を贊成した。

移住民は皆な手々に石を運んで、長さ百五十間の長い堤防を築いた。夫れはコンクリートで疊んだ立派な堤防である。其の端には一基の記念碑が立てられて簡單な文句で、彼等の喜悅を現はしてゐる。

山田が此の三百五十町歩の田地を如何に處分するかは刮目に値する大きな問題であるが、彼は此の忠功に勵まされて、其後朝鮮全羅南道松汀里驛附近で、四百町の水田を經營し、常磐線中、海水浴場の好適地として名高い、原釜の側、新沼浦六百町歩の乾拓に從事してゐる。

日の本の瑞穂の國に生れ來て、米が食へぬといふ不思議を痛感して夫れを歌つた詩人がある。

豆粕を食つて米を食ひ伸ばせよと云つた博士がある。米價調節問題を叫んだ政治家がある。百姓に勤儉貯蓄を強制的に說く官僚的社會改良家がある。しかし私は、山田のやうに米を造り出す工夫をする人に對して、總ての論客よりも政治家よりも、より多くの敬意を拂ひたいのである。

八澤浦へ行つた人は、そこで小い子守の口から、

水にこまつた八澤の浦も、
今は黃金の波が打つ。

といふ俚謠を聞くであらう。(をはり)

―千九百二十年七月三日―

社會奉仕の主張者と反對者

井　箆　節　三

(一)

吾等は何を爲すべきか。第一、自己を欺くな。(眞理を怖れず良心に遵へ)。第二、自己の罪を負へ。(自他を區別する特權や自慢を放棄せよ)。第三、人間永久の義務を遂行せよ。(自己及び他人の生命を維持するために勞働せよ)。トルストイに從へば、人

間の爲すべきことは極めて簡短明白である。良心に遵ふこと、自他を區別しないこと、自他の爲に働くこと。「私は精神的にも肉體的にも從來無益な有害な科學の研究の爲に貴重な時間を費してしまつて、今では無用な人間になつてしまつたが、しかし今後は如何したら此の過ちを正し、他人に奉仕することが出來るか。」

「人の子の來るも、人を使ふ爲にはあらず、反つて人に使はれ、また多くの人に代りて生命を與へ、その贖ひとならんが爲なり。」人間の爲すべきことは他人に奉仕することである。

しかるに同じ「吾等何を爲すべきか」で、トルストイは人間が社會に奉仕することを非難して居る。「紳士が一人十ルウブルの會費で晩餐會も開くにしても、自分の意思に反して一ソパリンを拂はされるとなれば、此の晩餐會が其人に利益を與へたとはいはれない。百姓が共同の利益の爲に一つの池を掘るとしても同じことで、その池を掘る方が利益だと思ふ者には利益でも、それよりは他の勞働に從事した方が利益だと考へる者には不利益である。之と同じことは道路や敎會や博物館や、其他有らゆる種類の社會的事業に當嵌めても考へることが出來る。」

「つまりトルストイに從へば、他人に奉仕し他人の爲に自己を犧牲にするのは善いが、社會に奉仕し、社會の爲に自己を犧牲にするのは惡い。それは「共同の目的」とか「共同の利益」とかいふものは、いつでも野心家や横着者や壓制者の晴著となり口實となつて、結局少數者の利益と多數者の犧牲とに終るからである。

トルストイほど思ひ切つて愛を說き奉仕を說いた者が、社會に奉仕することを拒否したのは意外にも見えるが、賀川君も指摘した如く、トルストイの愛は無我の愛ではなくて有我の愛である。同じく無政府主義者でも、クロポトキンは共產主義者であつたが、トルストイは個人主義者であつた。トルストイは「光ある中に歩め」を書いて、初代使徒の共產生活を讃美したが、その「社會主義論」や「現代の奴隷制度」では極力社會主義を非難した。「革命的社會主義と改良派社會主義と基督敎社會主義と、此の三つの中で何れが最も馬鹿げて居るかといふことは言はれない。何れも劣らず馬鹿げて居る。」

(二)

モリス及びバキスも言つた如く、元來キリスト敎は全然個人的な宗敎であつて、來世の冥福を求める爲に、個人は各自の最善（ベスト）を盡すべしとは說くけれども、現世の政治に對しては何等の要求をも持たない。神（イエホバ）のものは神に、さうして王（カイザル）のものは王（カイザル）に。しかるに中世の社會では、キリスト敎的信仰が政治上

及び社會上にも普及浸潤して、宗教が著しく政治的乃至社會的になつた。「つまり、一方では教會が宗教的であるのみならず政治的且つ社會的になり、他方では國家が政治的且つ社會的であるのみならず宗教的になつた。たとへば、中世の一大現象として武士の團結とか職人の組合（ギルド）とかいふのが著しく發達したが、之等のものは一面から言へば明かに政治上の目的を帶びたものであるが、しかしまた一面から見れば宗教上の制度であつた。また醫者とか法律家とかいふものも宗教的な性質を帶びたものになつて居たから、その面影が今日でも其の正服や儀式などに殘つて居る。」

近世になつてルテルが宗教改革運動を起た當時同じドイツに再浸禮派（アナバプテイスト）の共産主義運動が起つて、モラヴイアだけにでも八十有餘の共産社會が成立し、アナバプテイストは其の信條に遵ひ、無抵抗主義及び非納税主義を主張したが、それでも當時の王侯は寧ろ彼等に好意を示し、彼等が或る諸侯の領地から他の領地に移住した時、或る諸侯は車馬を用意して彼等を歡迎したほどであつた。さうしてルテルの新教は、中世主義の諸侯や人民には悦ばれず、寧ろ近代の資本主義——自由主義及び商人主義と相結ぶことになつた。

新教の舊教に對する勝利は、即ちヘルレニズムのヘブライズムに對する勝利であり、個人主義の社會主義に對する勝利であつたが、しかし中世教會の教權主義が倒れると、忽ち之に代つて近世國家の政權主義が新に起つて、人間は「教會」といふ專制者に反いて「國家」といふ壓制家を迎へることゝなつたから、近世になつても依然としてヘルレニズムとヘブライズムとの反目闘爭は絶えない。一方には自由放任主義に立脚する無政府的な資本主義があり、一方には他力共同主義に依頼する壓制的な國家主義がある。ところが資本主義は次第に國家主義を懐柔して、國家を自家藥籠中のものとなし、國家に服從するよりも寧ろ國家を利用するやうになつた。これは主として貨幣經濟及び器械工業の發達して、商業及び工業が規模と販路とを擴張し、大企業主義及び大商業主義を發達せしめた結果で、國家は資本主義の爲に好箇の有力な機關となつたのである。

（三）

かくして近世には大體に於てヘルレニズムがヘブライズムを壓倒した、さうして資本主義も國家主義も共に偕に無政府的になつたが、玆に教會及び國家に次いで第三の專制者として「科學」が現はれた。科學といふ暴君も最初は人道主義者を裝つて居たが、何時しか國家と同じく資本主義の手先に使はれ、その

無政府主義を辯護するものになつてしまつた。朝永博士の「近世に於ける我の自覺史」に叙べてある如く、「近世初期の主知主義の結果として、道德上及び宗教上の傳承及び證權に對する活潑な自由批評の風潮を誘起したのは善いが、之が爲に從來多數の「我」を連結する楔子となつて居た宗教及び道德の基礎が動搖した。人生は事實に於て多數の箇我の共同生活であつて、此の共同生活には其の成員を互に連結する共通の連帶を必要とする。しかるに傳承及び證權の威嚇から「我」を救護した理知は、此の共通の連帶を破壞することによつて、更に「我」をば調和と統一とを缺く無政府的狀態に投棄した。」

此の風潮は最初イギリスに起つたが、イギリス人は比較的に穩健であり妥協的であつた。しかるに此の風潮がフランスに渡つて、極端な無神論となり機械的となり唯物論となつた。そこで十八世紀の後半から十九世紀の前半に亘つてフランスに勃興した哲學上の諸派は、傳承派でも社會でも實證派でも、「みな社會生活の必然制約としての共同連帶を發見するといふとを其の中心動機として居る。殊に傳承派はフランスに於ける神權連とも稱すべきものでその代表者ドウ・メエトルの所說に、「十八世紀は有史以來最も羞づべき時代であつて、その政治は最も紛亂を極めた政治であり、その哲學は最も墮落した哲學である。十八世紀の哲學は惡魔の制作である。メフィストフェレスの如く徒だ否定する所の精神である。而も此の精神は十六世紀に始まつて居る。十八世紀の哲學と政治とは十六世紀の叛逆者（宗教改革者達）の原理を哲學と政治とに適用したものである。十八世紀の哲學は靈知の翼を奪つて、人間をして汚虫の如く地上を匍匐徘徊せしめ、詩と雄辯との神聖の淵源を渴らせて、一切の精神科學を滅亡させた。政治上及び道德上の信念を破壞して、精神上の無政府的狀態を誘起した。何が故に斯くの如き恐るべき結果を生じたか。十八世紀の哲學は悉く個人理性に最高權威を置く無神論的體系だからである。而も之を誘發したのは宗教改革である。科學は最も危險な放縱、慢心、冒瀆の淵源である。科學共者は無害でも、之に人間の心靈生活を支配する權能を賦與するに至つて凡百の弊害が起る。心靈世界に於て國民に正邪眞僞の規範を標示する者は僧侶と貴族と有司とであつて、其他の民衆は獨立判斷の能力を有せず、只管彼等の指導に默從すべきである」云々。

（四）

朝永博士は傳承派の所說を批判して、「之等の所說の語氣と內容とによつて、吾々は此の一派が如何に革命前後の無信仰、無

秩序、無統一の状態と、引いて此の風潮の淵源と認めた宗教改革とを呪ひ、而して全然中世に復古するとによつて社會を統一すべき共同連帶を發見し得ると信じたかを察することが出來る。換言すれば此の一派は、ルネサンス以來教權及び政權に對して我が贏ち得た自律の權能を破棄して、中世の一切他律の世界に復歸せんと欲したのである」と言はれるが、しかし中世だからとて必ずしも一切他律の世界ではない。近頃中世派のギルドメンが力說する如く、中世人は近代人よりも古代人――ギリシア人やロオマ人に近い所がある。殊に「如何なる理由が有つても、他人に干渉しやうとせず、他人に支配せられることを嫌ふ代りに、他人を支配することをも欲しない。」(テエロア氏「ギルド國」第一四二頁)。此點では近代人こそ寧ろ他律的で、代議制度といふが如きは、少くとも其の實質に於て、自律的であるよりも寧ろ他律的である。近代人は教權や教會に對してこそ自律的になつたが、さる代り國家や科學に對して迷信的になつた。ルソオは猛烈に主知主義に反抗して自然主義を唱道したが、彼ですら「社會的契約」を說き「自由の自制」を說いた。勿論ルソオに從へば、人は生れながらにして自由であつて、社會は箇人が自發的に組織する約束に過ぎないのであるが、ルソオの後繼者と目すべき社會派の人々――「空想的社會主義者」及び其の感化に出でた經濟派の學者は、知らず識らずの間に箇人的自由よりも社會的統制に重きを置くの傾向に落ちた。たとへばフユリエ及びコムトがさうである。

フユリエは青年時代に自己の雇はれた穀物商人が、穀價を釣り上げる爲に、穀物を船中から海中へ放棄するといふやうな事實を目擊して、箇人主義や自由競爭に一任したのでは、社會の秩序が自ら不完全且つ不道德にならざるを得ないと觀じ、自由放任に代ふるに共同組織を以てしなくては、人間の天性を十分に發達せしめることは出來ないと考へた。それで其の處女著作 Théorie des Quatre movments で主張した。心理的に言へば人間は成るべく自由に放任して、人爲的な拘束を加へず、その天性を發揮せしめさへすれば、自ら幸福にもなり道德的にもなり、社會的諧調を成すものであつて、貧乏とか不德とかいふことは社會が箇人に不自然な拘束を加へる所から發生する。(フユリエは此の箇人の衝動を自由に放任すれば自ら社會的諧調が成立するといふことを、ニウトン以上の大發見と考へ、物體の間に引力が働いて、箇々の物體が各自の方向に突進せんとするにも拘はらず、自ら其の間に調和が保たれる如く、箇人の間にも己が向き〳〵發展すればこそ、社會的諧調は期せずして自ら保たれるものだと說いた)。これは今日から考へても、確にニウトン以

上の一大發見だといふことも出來るが、しかしフュリエは此の心理上の原則だけには滿足しないで、別に經濟上の原則を立て、經濟上では箇人主義を棄てゝ社會主義を取らなくてはならないと主張した。

（五）

サンシモンの弟子ともいふべきコムトの考へが之に似て居る。彼に從へば、社會的統制といふものは、一に道德的發達によつてのみ改善せられるもので、單に政治的機制を改革したとて、その目的を達することの出來るものではないから、例へ暴力に訴へて富の分配に人爲的制限を加へても、それは畢竟無益である。眞に社會を進歩せしめるには、道德的進歩が第一である。社會的生活にせよ、箇人的生活にせよ、之を改善進歩せしめるには、成るべく箇人的感情よりも社會的觀念を發達せしめ、利己主義（エゴイズム）よりも利他主義（オルトルイズム）を發達せしめなくてはならない。

コムトの此の說は如何にも尤もらしいが、しかし善く考へて見ると、實は資本主義的弊害及び社會主義的缺陷に媚びたものである。コムトの社會有機體說はヘエゲルの國家哲學と同じく、壓制者と被壓制者、資本家と勞働者、橫奪者と[illegible]者との分業を辯護するものである。トルストイはコムトを批評して曰く、「近代の科學は事實を公平に研究するといふが、それはうそであつて、科學は必ずや何等かの不正な成心を藏して居る。だから事實を公平に研究するといひながら、實は其の成心に都合の善い事實のみを採決する。たとへば社會は有機體であつて、箇人は全體の爲に奉仕すべき各自特殊の使命を帶びて居ると說く。個々の細胞が各々の機能を分擔する如く、箇人も社會全體に對して各自の職分を負擔するといふ。これは一見した處では、何も有害な教理とは思はれないが、しかし何故此の樣な教理が學者によつて立てられるかといふ動機を探つて見ると、それは今日の社會に行はれて居る極めて不正な分業を、知るや知らずや辯護するものである。一體人類の社會は一種の有機體であるとは、曾てアグリッパの唱道したもので、それを近世になつてピカアが生理學上の事實に比較して唱道すると、コムトは忽ち之に眩惑せられ、こんなお獨斷を基礎にして實證哲學を組織し、之を社會學と呼んだのであるが、しかし社會は決して有機體ではない。吾々が象をもバクテリアをも有機體と名づけるのは、之等の生物には感覺及び意識の中樞統一があるけれども、社會にはそんなものはない。社會有機體說を基礎とするコムトの[illegible]哲學は、頗る[illegible]なもので、[illegible]

なぞと謂はるべき代物ではない。それが謂はゆる知識階級によつて歡迎せられるのは、分業の合理性——暴力の合理性、現存の惡制度を辯護するに好都合だからであつて、現にコムトの哲學には實證哲學と實證政治學との二部門が有るのに、人類社會の現存惡制度を辯明した第一部門のみが歡迎せられて、道德問題を取扱つた第二部門は非科學的だとして輕視せられる」云々。

（六）

ミルでもスペンサアでも、本來箇人主義者であるに拘はらず、コムトの社會有機體說には少からず致された。スペンサアは軍隊的統制を退けて產業的統制を採り、產業的統制は產業的自治に至るが故に、之が爲に箇人的自由が社會的統制によつて拘束せらるゝ虞れはなく、却つて之によつて箇人的自由が確立せらるると考へたが、しかし社會有機體說を全然捨てることは出來なかつた。もう一度トルストイの批評を引用すると、「スペンサアに從へば、社會が有機體である證據には、社會と生物との間には種々の類似がある。第一に最初は小さく粗らな聯合に過ぎないものが、次第に大きな團結に生長する。第二に最初は單純無組織的なものが、後には複雜な組織的なものになる。第三に最初は分散孤立的なものが、後には共同相助的になる、第四に分子全體が生死を共にするやうになる。けれども此樣に三つや四つの類似點だけを取つて考へたら、凡そ宇宙に有らゆるものは一として有機體でないはない。何でもよい、最初に頭に浮ぶものを取つて考へて見よ。たとへば杜だ。最初は小さな木が散立する。やがて枝葉を交へる。共同で風力を防ぐやうになる。遂には生死を共にする。故に杜は有機體だ。何のことはない、社會有機體說なぞといふのは、三位一體說と同じやうなものだ。」

實際社會有機體說は今日では最早通用しなくなつたが、さる代り其の一種の變態として、之と同じやうな範疇に屬する社會連帶說といふものが、近頃フランスから流行して來た。日本では曾て谷本博士が之を祖述し、近頃でも中澤氏や北澤氏や佐野學者によつて紹介せられた。レオン・ブウルジアの社會連帶說は、ルソオの社會契約說とコムトの社會有機體說とクロポオトキンの相互扶助論とを結合したやうなもので、人類社會にも有機的な連帶關係が存在するが、自然又は現在のまゝでは、貧者と富者との間に不正な分業が行はれて居るから、此の儘では善くない、箇人と箇人との間に於ける利益の交換は契約であつて、各人は此の契約によつて社會的債務を負ふのであるから、人間は社會に對しても過去に對しても連帶的相互的に社會的債務を

負ふものであつて、その關係は宛も相互保險の如くであるといふ。そこでブウルジョアは箇人の義務としての社會的連帶を說くのであるが、佐野君が指摘した如く、これは一種の溫情主義で、急進派社會黨の領袖にも似合はぬ主張である。

（七）

要するに從來提唱せられた社會論者又は社會學者の社會奉仕說又は社會連帶說は論據が薄弱で不徹底である。また道德學者又は倫理學者の社會道德說も然り。たとへばマシウ・アアノルドの如きは、「自由競爭の說を排して、箇人は天性に於て既に平等でないから、之を自由に競爭させても、それは眞に公平な競爭とはならない、ましてや歷史的後天的の事情によつて、此の不平等は一層著しく助長せられるに於ておや、社會といふ文字からして本來社交を意味するのであるから、社會は單なる競爭場であつてはならない、社會は全體の爲めの共通の利福を供給することを目的とし、强者の力を制して弱者の無援を保護すべきものである」と主張したが、これではベンタムの「最大多數の最大幸福」說と同じく、甚だ素朴な見解であつて、箇性的箇人的意識の著しく發達しつゝある近代人を說得するに足らない。

マアルクスやクロポオトキンも箇人我に捉はれて、やはり社會を箇人の集團と見たやうであるが、さういふ社會觀に立脚した社會奉仕說は到底不徹底であることを免れない。眞に徹底した社會奉仕の觀念はカントの超箇人我から出發しなくてはならない。ホイトマンが其の詩 "There was a child went forth" で歌つた如く、「自我」と「世界」とは一つであつて、自己は即ち世界であり、世界は全人のものではなくて各人のものである。箇人は社會の分子ではなくて全體である。各人は各自の世界の王である。社會は箇人の集團ではなくて自己の延長である。眞に徹底した社會奉仕の觀念は、社會を超箇人我と見て社會を自己の人格に攝取するに至つて始めて誕生する。眞の人格は無限大なものであつて、即ち社會が自己であり、宇宙が自己である。ゲエテも「タツソオ」で歌つて居る。

Der Mensch erkennt sich nur im Mensch, nur
Das Leben lehret jedem was er sei.

吾々は社會を見て——社會を通じてのみ自己を知ることが出來る。何故なれば社會こそ自己の全豹であるから。

（八）

カントの超個人我は動もすれば無形の「大我」と誤解せられたが、眞の自我は決して大我と小我とを分離したり對立させたり

すべきものではない。これは殊にベルグソンやウオドやマッハの力說する如くである。形而上學的な永久不變な無形の自我といふが如きものは舊式な妄想に過ぎない。(ベルグソン「創造的進化」英譯第三—四頁)。自我は本來具體的であり、社會的乃至宇宙的に無限大である。さういふ意味に於てこそ、社會は能く人格であり、また有機體であり得る。自我の發揮——箇性の發展が期せずして社會的諧調を成すのは、社會が即ち自我だからである。また箇人が社會的產物であるといふのも、さういふ意味に於て然りである。「近代社會學說の最も顯著な結論として、箇人が自由に其の箇性を發揮すれば、その結果期せずして相互の間に本質的な連帶(ソリダリテ)が成立し、また之と同時に箇人が其の社會的義務を遂行すると、期せずして自己の至高至純な箇性を發揮することが出來るといふ事實を承認することになつた。」(ボルドキン「箇人と社會」第一六頁)。

然り、社會こそは全體的具體的客觀的自我であつて、社會を離れて箇人は有り得ないといふのは、即ち其の意味に於てである。箇人を社會の分子としてではなくて、自我を社會の全體としてである。「一體箇人といふのは、丁度物理學者のいふ原子(アトム)のやうなもので、畢竟一種の抽象に過ぎない。箇々の箇人(メンシ)がそれそれ一箇の人間(メンシエン)であり得るのは、人間が先づ箇人として生れ次に社會に於ける他人と交渉するに至るからではなくて、旣に人間は最初から社會を離れて人間ではないからである。」(ナアトルプ「社會教育學」第八四頁)

社會を離れて箇人が存立し得ないといふのは、「仲間外れ」になるといふやうな意味ではない、社會は即ち具體的大我即ち自己の全體だからである。大我とか超箇我とか先驗我とか普遍我とかいへば、概念的抽象我と誤解せられるが、小我といひ大我といふは畢竟自我を主觀すると客觀するとの區別に過ぎない。極めて素朴な觀念では、小我は即ち主觀我、社會は即ち客觀我であるが、しかし少しく哲學的に考へると、箇我も亦た實は客觀我であり、社會こそ寧ろ主觀我である。故に社會と箇人とを本質的に對立せしめるが如きは無意味であつて、本質的には社會と箇人とは唯一である。(トルシ「箇人と社會」第一卷第一三—一四頁)。社會と箇人とは自我の兩面又は兩極としての主觀と客觀との區別に過ぎない。ベルグソンによれば、自然は絕えず箇人と社會との兩極の間に彷徨して、時には社會に成らうか箇人に成らうかと躊躇することさへある。(ベルグソン「創造的進化」英譯第二五九—六一頁)

吾々の自然に對する認識の態度はカントによつてコペルニクス的轉化を來したが、吾々の社會に對す觀念にも之と同じ形に於てのコペルニクス的轉向を要する。カントに從へば、自然は自我の所産であつて、現象は吾々の主觀が構成する所のものである。吾々は各自が「目的王國」の王である。吾々は各自に一箇の世界を自己の王國として領有するのである。しからば之と同じことは社會に就いても亦た言はれるであらう。箇性の尊嚴——人格の絕對性は、吾々の自我が普遍的社會的であつて、吾々が各自に普遍的社會的王國の王者である所から成立する。しかるに社會主義者の社會觀は一般に未だコペルニクス的轉回を經て居ない。此の意味に於てもマアルクスは、大西教授のいふ如く、カント乃至プラトオン以前の思想家である。今日最も進歩的な社會主義者でも、まだルソオの社會契約說的觀念に囚はれて、社會を客觀的な箇人の集團と觀るの態度を脫しないで居る。たとへばコオルの如きがそれである。(コオル「社會に於ける勞働」第一九三頁以下)。しかし眞の社會は、箇人の集團ではなくて、自我の延長である。社會を客觀して、その客觀的な社會に主觀的な箇人を奉仕せしめるといふのでは、それは奴隷主義である。吾々は神を大我とし人を小我として、さういふ對立的觀念の下に、人を神に奉仕せしめることをすら拒否しなければならない。神ですら然りである。ましてや箇人の集團としての社會は、何時でも其の道德に於て良心に於て、箇人よりも低級劣等なものであるに於ておや。田山花袋先生のいはれる如く、箇人には魂があるけれども、社會には魂が無い。箇人としては恥づべきことにも、社會は比較的に鈍感であり横着である。箇人としての國民は非戰論者でも、國家としての國民は主戰論者になる。箇人としての新聞記者は勞働者に同情しても、新聞社員としては勞働者の不利を敢てする。石原博士の言はれる如く、倫理的規準——善惡の標準は社會的規約といふが如きものによつて決定せらるべきものではない。神性としての普遍我こそ善惡の究極的規準である。(「雄辯」二月號我の個性及び普遍性」)。箇人をして社會に奉仕——全身全靈的に奉仕せしめる爲には、社會をして普遍的自我であらしめなくてはならない。社會を普遍的自我であらしめん爲には、箇人をして社會を主觀せしめなくてはならない。箇人をして社會を主觀せしめる爲には、社會主義よりも箇人主義に依らしめなくてはならない。社會的統制よりも箇人的自由を尊重し、箇人的自由の發揮によつて自らなる社會的統制を求めなくてはならない。箇人的自由の發揮は自ら社會的階調を生むといふ、フユリエの發見は正にニウトン以上の發見である。しかるに資本主義も社會主義も、

箇人的自由を目的とするに拘はらず、等しく大產業主義——產業の集中を生命とするものなるが故に、勢ひ逆に社會統制を以て箇人的自由に先だつものとするに至る。これ即ち私が資本主義にも社會主義にも反對する所以であるが、今は私產主義を云々する場合ではないから、此の論文の補足として、何故箇人主義者のスチルネルやワイルドが社會主義的社會奉仕を拒絕したかを說明して置かう。——眞に徹底した社會奉仕の觀念は主として箇人主義の哲學から生れるものである。

（一〇）

「箇人主義の聖書」といはれるスチルネルの名著 "Der Einzige und sein Eigentum" は、私も久しく其の全譯を企てゝ居たが、近頃其の一部が辻潤によつて全譯せられた。今スチルネルが社會主義を批評し社會奉仕を罵倒した部分の梗概を語ればかうである。

社會主義の連中はいふ、「人間は生來自由であるのに、今日の社會では吾々は何處へ行つても利己主義者の奴僕にならざるを得ない。それでは吾々も利己主義者にならうか。否に、利己主義者をして存在の餘地無からしめる爲に、一切の人間を素寒貧（ラガマフィン）にしやう。財產は社會全體のものにしやう。」

けれども「社會」といふのは概念であつて、箇人の如き實體の有るものではない。さういふ概念の幽靈に大切な自由と財產とを奉納して善いのであるか。成程、政治上の平等だけでは、まだ本當の平等でないから、更に經濟上の平等が必要だ。そこで社會主義の連中はいふ、「政治上何人も命令の權利を私有する能はざるが如く、經濟上でも何人も所有の權利を私有することが出來ないことにして、即ち國家が一切の命令權を獨占する如く、社會が一切の所有權を獨占することにしやう。」

けれども代議政治も社會主義も、「人道」といふ迷信を其礎にして、箇人の自由を奪ふものである。代議政治は個人の命令權を奪ひ、社會主義は個人の所有權を奪ふ。國家は支配權を奪ひ、社會は財產權を奪ふ。

凡そ何時の時代にも、强者に壓迫せられる弱者が、社會の缺陷を指摘して、不平を唱へるといふことは、今に始まつたことではない、寧ろ普通の現象であるが、しかし、とかく人間といふものは自己の缺陷をば忘れて、罪を他に嫁する者だ。國家とか社會とかに責任を轉嫁するが、實は國家の弊害も社會の缺陷も自己に在るのだ。

どうも共產主義といふものは、主張に於ても結論に於ても、甚だ一本調子なものだ。即ち今日の社會では、多數の人間が不

利の境遇に居るから、少數者の利益獨占をやめて、一般人の幸福を計らうといふのである。フランス革命の結果、商工階級(ブルジョア)が勃興して、「第三階級」が唯一の階級となり、これで從來の階級制度は打破せられたが、共産主義は尙ほ之に滿足せず、人間が社會を組織する以上、各人は全體の爲に勞働し相互の爲に奉仕すべきだといふ。

即ち共産主義には「日曜日側」と「勞働日側」とがあつて、日曜日側では人間を人間と認め、自由主義を是認するが、勞働日側になると人間を器械と認め、自由主義を押隱して、勞働を强制する。だから假に君が「なまけ者」であつて見給へ。共産主義は君に勸告して「なまけ者」をやめさせ、勞働は人間の「運命且つ天賦」だなぞと說法する。

共産主義は共の顏(かほ)を二枚に使ひ分ける。一枚の顏では精神主義の人間が嬉しがるやうな色を見せ、一枚の顏では物質主義の道具として人間を待遇する。立憲政治では精神的欲望でも物質的欲望でも各自で勝手に取れるといふが、共産主義では一切の人間に無理にも之を推し付けやうとする。即ち前者は取捨を自由にしたが、後者は取捨を强制しやうとするのである。

（一一）

「そこで」、スチルネルはいふ、「共産主義の迷妄を打破するには、共産主義が人間に强制するやうな精神及び物質が、毫も人間をして人間たらしめる所以でない、といふことを立證すれば足る。——如何にも勞働本位の社會を組織したら、自由放任の社會とは違つて、僥倖とか競爭とかの弊害は無くなるかも知れない。しかし共樣な社會になつても、人間が自己を勞働する動物と迷信をして居る間は、やはり個人主義の自覺から外れて、勞働本位の社會といふものを、無上に貴重なものと迷信し、自己を驅つて社會の奴隷たらしめる。それは立憲制度の社會でも、人間が自由競爭の國家を、無上に尊重なものと迷信して、自己放棄の沒我的態度を以て、國家の犧牲となることに甘んじ、國家の奴隷になつたと同じことで、人間は依然として「社會奉仕」の美しい夢を見て居る。かくて人間は自己に對して何物かを供給してくれるものに仕へる積りで居る。けれども社會といふものは、よし何物を吾々に供給するにしても、社會は畢竟吾々に利用せられる一種の手段たるに過ぎないので、社會は何等その自身獨自の自我(エゴ)であるべきものではない。吾々人間は社會奉仕の責任なぞを持つて居るのではない、寧ろ社會こそ吾々に奉仕すべき機關である。故に吾々は社會に對して何等の犧牲をも供すべきではない。若し捧ぐべき犧牲なぞが有つたら、宜しく

自己自身に捧ぐべきである。しかるに社會主義の連中は此の事を考へない。これ彼等が一種の宗教思想に囚はれて、社會を神佛の如く神聖なるものとして迷信するからである。若し社會が吾々に萬事を給與するものとなり、萬端の世話をするものとなれば、竟に社會といふものが吾々人間の主人となり、神佛に代つて吾々の偶像となり、あらたかなものとなり、神聖なものとなつて、吾々人間を社會といふものゝ奴隷となし、忠臣となさなければ已まないであらう。」云々。

然り、吾々は社會を偶像として之に奉仕するのであつてはならない。社會を自我として之に奉仕するのでなくては。

（二）

ワイルドの「社會主義の下に於ける人の靈」は、私が嚢に全譯して「中外新論」に掲載したが、近く本間久雄君の翻譯も出るといふ。ワイルドに從へば、社會主義は箇人主義の奴僕たるに過ぎない。彼はいふ、「社會主義が採用せられるとして、さて其の主な利益は如何といふに、その結果今日の如く人間が貧乏の爲に已むを得ず他人の爲に營々として働くといふが如きことの必要が無くなる。けれども社會主義の價値といふものは、社會主義そのものに在るのではない、唯だ社會主義は究極に於て箇人主義となる所に價値がある。社會主義は如何に環境を改善しても、人間が完全になる爲には、まだ其外に或物が必要である。或物とは箇人主義である。故に箇人主義を無視して權力を以て自由を拘束するのでは、社會主義も終に無價値である。今日でも私有財産制度のお蔭で一部の人間は其の箇性を發揮する。しかるに産業上の專制主義なぞが行はれるのでは、全部の人間が箇性を箇束せられることになるから、明日の社會は寧ろ今日の社會に劣る。人間は團體の分子として如何に有力でも、箇人として優秀でなくては駄目だ。しかるに今日の人間は、貧苦の爲に墮落して、多數は社會の分子として生死することに甘んじて居る。凡そ人生に何が貴重だといつても、箇人の人格ほど貴重なものはない。若し吾々が本眞の人格といふものを目撃したら、それは實にすばらしいものであらう。故に一切の制度は悉く箇人の自由を尊重し、人格の尊嚴を維持する爲の方便でなくてはならない。專制政治や少數政治の不可は無論であるが、民主主義にしたところが、要するに人民が人民の爲に造る人民の重荷であるから、如何に民主的であつても、社會的統制を以て箇人的自由を制裁するのは惡い。或る秀でた思想家は「自由を翼はば一致するな」といつたが、權力は得て人間に一致を強ふるものである。國家は唯だ單に箇人に對して必要（ユウスフル）なものを供給

するだけでよい。箇人は必要なもの丶生産には勞働しないで、唯だ美的なものだけを生産すべきである。勞働は決して好ましいものではない。肉體勞働を尊重するのは近時の惡風である。肉體勞働は全部器械に任せなくてはならない。ギリシヤでは箇人主義が發達したが、器械が發達しないで、人間奴隷を使役した爲に、ヘルレニズムは崩壞した。若し社會主義が一切の勞働を器械といふ奴隷に一任することに成功すれば、新しいヘルレニズムは之を基礎にして確立せられるであらう。」

最後に一言を附加して置く。私は器械に勞働を一任することによつて新ヘルレニズムの確立せられるやを疑ふが、しかし社會を主觀することによつて新ヘブライズムが確立せられることは信ずる。眞に徹底した「社會奉仕」は、素朴な社會主義的社會觀から生まれるのではなくて、近代の箇人主義的社會觀から生まれるのである。

文藝が町人の手に移つた頃

笹川臨風

一、堺の繁昌

青丹よし寧樂の都に生れた藝術は、聖德太子以來の奉佛心と、聖武孝謙二帝の熱烈なる信仰とに依りて、結晶せられた敬虔なる宗教的作品であつた。其文學は神代以來の傳說を基とした、開闢神國史と、後來萬葉詩人と謳はれた人々の歌謠と、祭神祈禱の祝詞と、天皇の宣命とであつた。王朝時代の藤原氏は我邦に於けるメヂチー家とも見られやう。伊太利文藝復興の芽が先づフイレンツエに萌し、メヂチー家の照護を受けて、千紫萬紅の花を開いたのは、我が攝關家が王朝文藝に多少の力を添へたのと、やゝ似通つた點のないでもない。寺院別觀の建築、之を裝飾する藝術技巧、閨秀作家の輩出、其手に成れる不朽の名篇はいづれも攝關家の直接若くは間接の保護獎勵に依らぬものはなかつた。

平家の時代は前時代の延長である。其文藝も亦前時代の跡を踏襲したに過ぎない。又餘りに其時期が短かゝつた爲に、之と云ふほどの產物を我が文化史若くは文藝史の上に留めて居らぬ。僅に嚴島を中心として一門の文藻雅懷を窺ひ得るに過ぎぬ。し

かし此時代を今もつと延長したならば、文藝に志多き一門士女のことゝて、過渡期の文藝に必ず觀るべきものがあつたらう。唯一部の哀史平語を殘して、後世の文藝に幾多の材料を提供したのは、せめてもの心遣りであらう。鎌倉時代は文藝が新しい要素を加へて、新氣運の先驅をしてゐる。獨り政治と宗教にのみ革命が到來したのではない、文藝も亦革命の波に漂うてゐた。其新氣運は室町時代殊に東山時代に於て大成せられたと云つてよろしい。東山時代の文化は固より前時代の引續きではあるが、事實前時代と特殊の文化を作つてゐる。從つて其文藝殊に藝術に於ては既に前時代と其選を異にして、一新面目を開いてゐるのである。江戸時代は此文化の發展したもので、其文藝も濫觴を東山に發してゐると云つて差支がない。しかし室町の季世戰國時代に於ける門閥打破階級打破と云ふ根本の破壞があつて、江戸は江戸特殊の文化を形づくつたのである。

攝關家と云ふ門閥は平家の世鎌倉時代に打破せられたのであるが、武家と云ふ階級は之に代つた。しかし戰國時代には物皆壞されずんば已まざる概があつた。此風は既に室町の初世に見える下剋上に依りて馴致されたものである。下剋上の極は智と力との競爭となつて、門閥と階級と因襲とを一切空にした。獨り伊勢長氏ばかりではない、斯波氏の一被官織田氏が海道一の弓取今川氏を破つたばかりではない、人は皆赤手にして起つた。其最大なるものが豐臣秀吉であつた。安土桃山は門閥階級を離れた文化を作りかけて頓挫した。しかし江戸時代は之を繼承して集大成したのである。

貴族の藤原式文化、武家の鎌倉式文化、緇流の室町式文化に對して、平民の江戸式文化が起つたのは當然である。濃厚な貴族的色彩から、やゝ淡泊な武家的色彩に移り、澁味のある禪味茶味に轉じ、それから一般的な民衆文藝に變じた其徑路はまことに自然である。門閥階級が排斥せられたあとには、自づと平民的文化文藝が起らねばならぬ。もう文藝は貴族の專有ではない、緇流の獨占ではない。平民も文藝を味はなければならぬ時代に到着したのである。

此趨勢は水の卑きに就くが如くあつた。門閥と階級とは戰國時代に打破されたからの爲めではあつたが、又東山以來最も盛であつた茶の湯趣味の普及と云ふことも、少からず此勢を助けてゐる。東山時代に於ける茶の湯流行は、文化の上に將た文藝の上に革命を齎らした。しかし當時の茶の湯は上流社會と緇徒の間にのみ行はれて、一般民衆とは沒交涉であつた。然るに門閥階級が打破せられた戰國の末からかけて、茶の湯は餘程民衆化して來たのである。太閤の北野大茶會の如きは、力に於く

之を證明する。必ずしも茶の湯の民衆流行と云はなくても、茶の湯趣味の民衆流行と云ふ方が或は適當であるかも知れぬ。斯くして江戸の民衆文藝は元和以降の太平に依りて化育せられたのである。

太宰府の商權は漸次に西へ移つた。室町の中葉以後に泉州堺は一かどの繁昌な商業地となつたのである。堺はもと住吉の祠官津守氏の領邑であつたが、室町時代の中頃には山名陸奥守氏清が此に城を築き、應永の頃、大内義弘の領地となり、此處を商港として、支那朝鮮、南洋と貿易を開いた。此地の商業上に活躍したのは、實に此時から創まる。慶長八年の頃、支那商船の多く生糸を積荷して、長崎に入港するものがあつたが、買手がない爲めに如何ともする能はず、此事を長崎奉行に哀願した。そこで長崎から之を伏見にある徳川家康に訴へると、家康は堺の商人高石屋宗岸・奈良屋道汐・伊豫屋良干・具足屋宗據・成尾屋宗實・材木屋道二・阿知子宗諄・伊丹屋濟幾・芝辻宗意、小山良觀の十人を召して、「忝くも御直に御言葉下させられ、長崎の奉行一庵（小笠原）より申來るは、黒船一艘彼地に着岸して、既に兩年迄逗留しぬると雖も、白糸及び諸物買手なく持歸ることを難儀致すの由、若し彼が持戻りなば、重ねて此國に來るまじきと思ふなり、堺は其上より豐饒の所と云ひ、其方共より富めるとかや、急ぎ長崎に立越え、彼黒船の荷物ども買取り、早速出船致さすべし」（糸亂記）との命あり、宗岸は一行の上坐なれば、謹で命のまに／＼致すべしと即答に及ぶ。折から伺候の大名ども、流石の堺商人も早速御受は致しかねるであらうと思つてゐたに、快く承諾したのには少からず驚かされた。家康氣色麗しく、必ず日本にひけをとらすなとの沙汰があつた。此堺の十人に京都の商人も加はり、支那船の荷物を盡く買ひ取つたから、家康は殊の外に賞し、何事にてもあれ願ひ申せとの命がある。そこで堺京都長崎の商人は白糸割符と云ふ、即ち生糸專賣權を願ひ出で、慶長九年五月三日、本多上野介、板倉伊賀守の判にて、「黒船着岸之後定め置年寄ども糸のねいたさゞる以前に諸商人長崎へ入べからず候、糸のね相定候上者萬望次第商賣いたす可きものなり」との特許狀を得たのである。

家康が特に堺商人を召して、日本にひけをとらすなと懇請したのを見ても、堺商人が富裕であつたことが分る。之を中世紀の伊太利自治都市に比較すれば、さしづめジエネヴあたりでもあらうか。さうすると、大阪をヴエネチア、京都をフイレンツエと見立てねばならぬ。ジエネヴはコンスタンチノープル黒海の商權を獨占し、地中海に於て優越なる地位を確保し、其の船舶は各地の商品を彼此輸送し、其地の商人は亞非利加の北海岸

及地中海の諸島に活動した。新大陸發見の殊勳者コロンブスが此地に生れたのも決して偶然ではない。堺にも南洋交通の商人は少くなかつた。呂宋助左衛門の如きは正に其一人である。海外貿易商が多く此地に出で、堺商人は富裕を以て聞えてゐたから、此地には趣味に富んだ、茶博士の輩出が少からずあつた。ヴェネチアがジェネヴに打勝つた如く、大阪が盛になるとともに此地は次第に凋落した。一つには對外貿易の途が禁止せられたからでもあるが、大阪商人の活動が目覺しくなつたからである。けれども堺商人の心がけの善いのは、猶後年まで打續きて、西鶴の胸算用には、「されば泉州の堺は朝夕身の上大事に懸け、胸算用に油斷なく、萬事の商賣内端に構え、表向は格子作りにしまふた屋と見せて、内證は奥深う、年中入帳の銀高積りて世帶賄ふ事なり、假令ば娘の子持つては、疱瘡して後形を見極め、十人並に人がましう當世女房に生れ附と思へば、早や三歳五歳より毎年に嫁入衣裳を拵えける、又形思はしからぬ娘は男只は請取らぬ事を分別して、敷銀を心當に利貸商事外にいたし置き、縁附の時分さのみ大義になきやうに、覺悟よろしき仕方なり、是によつて棟に棟次第に維續きて、苔羅(こけら)葺の屋根も損ねぬ中に差朽したり、柱も朽ぬ時より石で根繼ぎをして、軒の銅樋數年心懸けて、徳を見倣していたせし手紬の不斷着、起居忙しからねば此切にし器なく、風俗しとやかに見えて身の勝手よし、諸道具代々持傳へければ、手馴れの茶の湯の振舞ひ、世間へは花奢に聞えて、さのみ物入りにもあらず、年々世渡りを賢うしつけたる所なり」とありて、其心懸けの並々ならぬを說いてゐる。

夙に外國と交涉があつた土地柄とて、外國文化を接受してゐたのは當然である。橘屋又三郎は鐵砲又として知られた鐵砲作りの名人であつた。芝辻氏は大筒を張るに妙を得てゐた。堺鑑に「又大筒の張初は當津芝辻氏也、此氏の先祖より鍛冶の家にして北莊櫻町に住す、中比清右衛門入道妙西は鐵砲張事其妙を得たり、其子孫理右衛門入道道逸に至て彌精微の處を極めたり、其比異國より銅の鑄筒玉目一貫目許の大筒渡しに東照宮鐵砲の大筒得玉はん事を思召諸國の鍛冶を召集鐵張の大筒を調進上仕との上意成下と云共誰か御受を申上者なかりしに、道逸捨て領掌し奉る、卽本口一尺三寸末口一尺一寸長一丈玉目一貫五百目の大筒を不日に張上奉是謂鐵張の大筒の始成べし、其大筒今紀州の御城に之有由申傳今に至て其子孫門葉相續して忝も公方の御用を承列に加る家と成り」とあるは是れである。堺は又古來絹の製造地であつた。元中年間此處に機場の設けがあり、絹、綾等を織出し、京師の絹と相並で精巧の譽が高く、之を稱して羽二重と云つた。天正年間には支那の織工が堺に來り、明様の紗、

紋紗・金紋紗を傳へ、之を諸國に傳へた。錢屋某及松屋某は金紗の製法を傳習して之を織り出したから、之を錢屋織・松屋織と稱へた。錦も亦支那の織工が堺に傳へたので、傳へ〳〵て、西陣の錦となつた。緞子・縮緬等も亦同樣である。蓋し大内氏が工藝奬勵の結果に外ならない。牡丹花肖柏の連歌、武野紹鷗、千利休、少庵の茶道、宮尾道三及東屋道説の謠曲、喜多七太夫の能樂、恵藤源左衞門の笛、曾呂利新左衞門の刀鞘、舜慶の茶入、道清の鼓胴、甫竹の茶杓、雜賀屋甫の唐木細工は隆達の隆達節、利玄の碁、濕故の碁などとともに堺の文藝史を飾るべきもので、堺繁榮の餘澤である。才慧辯口を以て太閤に取入つた藥屋小西彌十郎及其子攝津守行長も此地の豪商で、又之れ堺文化の産物と云はねばならぬ。陶朱猗頓の多い處柄とて、又茶道流行の地として、堺には累々たる名物があつた。元龜元年四月朔織田信長が此市にある名物を京都へ取寄せて一見し、其うちより最も優れたる名品天王寺屋宗及の菓子繪、藥師院の小松島、油屋常祐の柑子口を留めて之に過分の代金を與へた。天正十三年十一月朔の北野大茶會に飾りたる當地の茶器は、太閤の道具を一番として、二番千利休、三番天王寺屋宗及、四番納屋宗久所持の名物品であつた。笠原宗念、萬代屋道安、茜屋吉松、小西道純、塩屋宗悦、油屋常祐、小島屋道察、輕粉屋宗陽、茜屋宗佐、淡路屋宗和、今井宗久、今井宗春、網干屋道琳、伊勢屋道滴、太子屋宗宇、小島屋、藥師院、石橋良叱、松江隆仙、天王寺屋宗及、了無、石津屋宗訔、錢屋宗納、宗本、重宗甫、武野宗瓦、正通、利休等の家に傳はつた名物品はいづれも千金に代へ難い優秀なもので繪畫としては牧溪の鷄、同ゝ根、同船子和師、同腹布袋、梁楷の鷺、李安忠の瘦馬、月山の稻、玉澗の夕照、舜擧の芙蓉、趙昌の花、虚堂の墨などの名が見え、肩衝、茶入、壺、天目、花瓶、香爐、香合、釜、水指、茶碗、釣瓶、率等には其名を聞いたゞけでも食指の動くを禁ぜざるものがあつた。蓋し堺は室町末葉から江戸の初世までへかけて經濟界の中心で、江戸幕府の初には幕府財政の融通をもはかつたほどに富の力があつた處である。東山趣味に養はれて、茶道の流行を來し富のあるに任せて、名物品を蒐集したのであつた。町人が富の力を把持するとともに東山時代には齋閣諸公若くは五山緇徒の間に珍玩せられた名器が多く、轉じて町人の手に歸したと見てよいのである。東山趣味を其儘に繼承したことゝて、又堺繁榮の時期が長からぬが爲に、未だ之を一般民衆化するには至らなかつた。恰も安土桃山時代が一の過度期であつたが如く、堺の文化も東山から江戸へ移る其の短い過程であつた。若し堺の繁榮をより長くさせたならば、或は東山趣味を十分に民衆化するを得たでもあらう。しかし桃山

は桃山なるが如く堺は堺であつた。桃山の文化が江戸と違ふが如くに堺の文化は大阪江戸とは違つてゐた。けれども堺は江戸以前に否日本に於て町人が其頭を擡げて來た其曙光である。固より王朝時代や鎌倉室町時代には決して見ることの出來ない現象であつた。

二、大阪の食倒れ

大阪は政權に於ける失敗者であつた。流石の金城湯地も、孤兒寡婦が無謀の輕擧を敢てしたゝめに、容易く老猾駿府の老爺の爲に倒されて、桃山時代の幕が閉ぢた。しかし大阪の狀態は僅かの間で、時代の轉ずるに從ひ、政權以外財界にめき／＼と地歩を占めて來たのである。

大阪戰役後に於ける此地の狀態はどうであつたらうか。天滿、船場上町の離散した町人を引戻し、荒地損じ家を引渡して建築させたが表通りは漸く藁葺の住家で、伏見から二百餘町が引移つて、之を補足したほどに荒れ果ててゐた。島の內も亦荒野で見る影もなかつた、戰後荒凉の狀は悲慘を極めたのである。堂島舊記に、「御陣鎭り、立戻り候町人共、誠に手と身とに相成候事故、建家藁葺竹垣、裏は畑にて作り物致し、水道石垣も無之、井路同前、今の天下茶屋村邊の姿なり、家賣人無之、銘々持あぐみ、町人に金銀甚拂底なるべし」と見えるのでも其一班が推知される。幕府でも地子銀を除して町の繁榮を計つたから北組南組天滿組三郷も次第に榮え、寛永二年には三郷の人數二十七萬九千六百十人、寛文九年には同じく四十萬七千三百四人と漸次增殖して行つた。

大阪は水の鄕である。江戸が隅田川を經とし、僅にところどころ運河を緯とするのとは違つて、大阪の水路は縱橫廊の如くである。古くから流れてゐる土佐堀、天正十二年に堀つた東橫堀、慶長五年の那波座堀、同十九年の道頓堀、元和三年の江戸堀、元和六年の京町堀、寛永元年の海部堀、寛永二年の長堀、寛永三年再掘の立賣堀、寛永六年の薩摩堀、元祿十一年の堀江川、時代不詳の西橫堀富島川、雜喉場川、木津川、猫間川、堂島裏川、傳法川、古川、淀川の本河を初めとして、其後に於て開鑿せられたものも少からぬ。近來に至りては新淀川などの開鑿があつて、ゴンドラの影はなくとも、先づは日東のヴエネチアであらう。古い書で見ると、橋の數百五十三とあるが、今日では遙に之に超過してゐることと思はれる。水路の利は交通の便となつて、船舶業出來の進歩したのは怪むに足らぬ。堂島舊記に記した船數はいつの頃の調査か一寸判定に苦むが、漁船總數五千四百六十三艘、伏見船二百艘、傳法渡し船四十艘、廻船（十石より

五百石迄）三百四十二艘、傳法川（五百石より千三百九十石迄）三十四艘とある。元和五年堺の商人が二百五十五石積の商船に積荷して江戸に輸送してから、關西と關東との通運は開かれ、大阪は之に倣つて江戸積の問屋を設け、廻船を取計つた。菱垣船は即ち其船で、垣楯の筋を菱形に組んだから此名がある。富裕なる西國筋を控へた大阪に商權が移つたのは、地の利と人の活動とに基くのである。諸大名の回漕米を糶賣した市場は淀屋橋附近に設けられ淀屋與右衛門が主として之に當つた。一代の分限者と謳はれた淀屋辰五郎は實に其孫である。其後米市場は堂島に移り、延米賣買をも始むるに至つた。寶永二年五月、辰五郎が闕所仰せ付かつた時の財産調書を見ると、其所有邸宅は大阪にて十二ケ所、十六ケ所、五十六ケ所、八幡知行高二百石、同所田地百八十町、伏見屋敷三十二ケ所、淀田地十二ケ所、京屋敷五十五ケ所、大和田地八町、丹波田地百八十ケ所、阿波田地四十八ケ所、和泉田地八町、淡路田地五町、猶此他にも數々あり、諸大名貸附金一億貫目、用意材木（銀に直し）二千貫目、將軍家への貸附凡八十萬兩とある。猶其藏品中には、千兩と評價された、徽宗皇帝墨蹟の鷄一軸、玄宗皇帝の珊瑚珠雛一枚同掛物二幅、同杓を鳴らせば水が湧き出ると稱せられた手水鉢、定家卿小倉色紙三葉、太閤が造らせた黄金の千枚分銅目方四十八貫目、金銀雀十六羽、黄金佛三十體、黄金茶入類十八、同銚子、金の鷄五十一羽、金の茶入二十七、白銀の椀五人前、伽羅の膳七枚、金の竹流し三十七本、珊瑚珠の盆十人前、十萬兩と計算せられた金襴類無數、正金十二萬兩餘、正銀十二萬五千貫目其他寶物名品類は驚く程に夥多であつた。正德四年六月二十八日、銀座の年寄中村内藏助が闕所せられた時、其所藏品を入札したが茶器類は總數八百六十九點、此銀高千二百八十九貫目餘、闕所屋敷十六ケ所、此銀高六百六十一貫目許とある。其中落札價格の最も高きものは、貫龍齋墨跡四十一貫三百三十匁を筆頭として、之に次ぐは坂部井戸三十五貫百匁、千歳硯箱三十貫五十匁八分、片輪車手箱二十八貫七百九十九匁七分石匣、大燈墨跡二十一貫百三十八匁、茂古林二十貫百目、がんひ繪十八貫八百五十匁、井戸茶碗十八貫五百七十匁、牧溪十七貫三百匁、伯庵茶碗十五貫三百七十七匁、兼好文十三貫七十匁、定家文十二貫七百九十七匁九分、玉柏茶入十二貫匁、雪舟山水屛風十貫五百三十匁等で、印月江一行物は五貫二百匁、光悦松椿硯箱は四貫六百九十七匁六分、同乘合硯箱は二貫二百五十匁で、此中では寧ろ遙か下位の價格であつた。

政權も金權の前には叩頭せねばならぬ。名は平民内閣でも、金權を背後の力として立つは、今日の狀況ではないか。幕府も時々

大阪商人に御用金なるものを仰せつけてゐる。命令的の强制借金であるが、此等の豪商に對して幕府は當然頭は上らない。寶暦十年十二月十六日同二十三日兩度に仰せ付けた御用金は總額百七十一十萬八千兩に上つてゐる。其大頭は鴻池善右衛門、同杵之助加島屋喜助、和泉屋次郎右衛門、三井八郎右衛門、布屋重三郎、鐵屋庄右衛門、辰巳屋久左衛門、平野屋五兵衛、油屋彦三郎、米屋平右衛門の五萬圓づゝであつた。寛政十二年夏大阪町人十二軒、十萬圓の御用金仰付けがあつた。此くの如く幕府は其の財政を遣繰りせんが爲には、町人の後援を待たねばならなかつた。

正徳年間の大阪に於ける問屋の數は五千六百五十五軒、仲買店は八千七百六十五軒の多きに上つた。大阪商業の隆然として振ひたると推して知るべしである。安政三年の作にかゝる浪花の風に云つてゐる所は其以前の大阪にも當てはまるし、又今日の大阪にも適應される。「浪花の地は、日本國中船路の樞要にして、財物輻湊の地なり、故に世俗の諺にも大阪は日本國中の賄所とも云、又は臺所なりともいへり、實に其地巨商富估軒を並べ、諸國の商船常に碇泊し、兩川口よりして市中縱横に通船の川路ありて、米穀を始め日用の品は云ふに及ばず、異國舶來の品に至る迄、直ちに寄場と通商なる故、何一つ缺るものなし、古來よりかくの如き土地がら故、商估專らにして人氣もおのづから其風に移り、利を謀ること他國に超て甚敏なり、故に淳朴質素の風は更に失ふて、只だ利益に走るの風俗のみ、士といへども土着のものは、自然此風に浸潤して、廉恥の心薄く、質朴の風なし。」今でも「どうや儲かりまつか」をお早うの代りに挨拶とする大阪が、商業專門利益專門になつた由來は抑ゝ又久しいものである。

町人萬能の大阪の風が自然驕奢に流るゝのは之れ亦當然である。堺は建倒れと云つて、屋並の善いので知られてゐたが、京の着倒れに對して大阪は食倒れと稱せられる。しかし關東では大阪を上方贅六とけなして、食倒れは江戸の專門のやうに取沙汰する。此點に於て、浪花の風に東西食物を比較してゐるところは頗る公平である。其中に、「當地にて、初もの杯賞翫せざるにはあらざれども、右樣の食味に金銭を費すものは多くは相應の身元のものにして、江戸人の如く漸くに其日を送る卑賤のもの杯、着居る衣服を賣し忽に夕の新味に替ること抔いふことは絕てあらざるなり」と云ひ、「當地も御膳料理の店は多くして、江戸と替ることとなし、されども其調理風味の大旨をいはゞ、江戸は淡味を主として甘美なる方にて、當地は滋味を主として鹹辛き方なり」と云ひ「當地は奢富のもの多く、奢侈を極めし樣に見は

るれども、飲食抔は江戸もの丶如きにもあらず、諺にいふ江戸の食倒れといふもの思ひ合すべし」と云つたのは、江戸中葉以後に於ける、江戸と大阪との對照であらう。江戸の食倒れとなつたのは、寧ろ中葉以後で、文化文政に入つて、洗錬したる趣味が横溢したのである。「近き頃金龍山の茶屋に、一人五分づ丶奈良茶を仕出しけるに、器物の奇麗さ色々調へ、さりとは末々のもの丶勝手の好き事となり」と謂土産にあるが如く、元祿頃にやつと奈良茶の出來たのを見ても、江戸は其頃まだ食倒れと云ふほどではなかつた。一般ではないが、大阪の富が増進すると僭分限者が多くなり、從つて衣食住に贅澤となつたのは爭はれないことである「我等もふだんは花色染のもめんきる物に紬の帶一筋にて姿を作り、娌取振舞の時も淺黄にちらし菊の絹の物、しゆちんの帶に紫革足袋にて花をやりしに、今是のおかたの常住の風俗を見るに、肌着の白小袖をはなさず、中には鹿の子、上には黒羽二重のひつかへしに、藤車の紋所を砧程にして付て役者のきそふなる袖口、百品染の白繻子の帶を腰の見へぬほどまとひ、すき通りの瑇瑁のさし櫛を銀二枚であつらへ、銀の笄に金紋を居させ、珊瑚珠の前髮押へ、針がね入の刎髷を掛けて素貌でさへ白きに御所白粉を寒の水にてときて、二百へんも摺付け、手足に柚の水を付けてたしなみ、爐燵にむらさき蒲團をかけ、茶繻子の引敷、延の鼻紙に壺打のやうじ取添へ、煙草の火に伽羅を焼かけ、せんじ茶を臺天目にて運ばせ、手もとに源氏物語いたづらに氣を移す事を年中の仕事にして、花見紅葉見の乘物之居の替り〳〵に棧敷をとらせ、仲居腰元お物師つれて針を藏につみたればとて、たまる事にはあらず、諸事に付けて内證の者より身體をつぶしぬ」（織留）とあるが如く奢侈の風は先づ僭分限者から吹き初めた。寓の文反古に放蕩息子を手代どもが意見して、「面々相談の目錄所はお見立て遊ばされ、實座敷を作事仕り、米油味噌鹽薪折々のお小袖は此方より進上申、年中のおつかひ金として二百四十兩相渡し、京より百兩きりまへのお手掛女二人かゝへ、此大ふり袖の腰元つかひ三人、中居茶の間御物縫女下女二人、小性二人、小坊主一人、あんま取の座頭、御酒の相手に歌うたひの傳右衛門、御料理人一人、六尺二人、御草履取大小二人、手代の一人相つめ、以上二十二人にて御心のまゝにお暮らしなされ候ば、二年三年の立ち申候は夢の間の御事に候、三年過ぎ申候は以前の如く遊女ぐるいでも遊ばさるべく候」とあるは、固より一條の假構にして、誇大妄誕に近しとするも、同じ書に「來る十九日の榮耀献立」と題し、町人の馳走振舞を叙して「旦那も此程は病後故、美食好み申されず候、無用と存じ候分に點かけ申候、大汁の集め雜喉一段竹輪皮鯨おの

けあるべしやかましく候、是も鯛寿器一色にお煮付け、煮さまし眞竹一種しやれてよく候、割海老青まめのあへ物吸物鱠製わた引肴小あぢの鹽煮たいらげの田樂、又吸物燕巣にきんかん麩、いづれも味噌汁の吸物無用に候、酒三献で膳はお取なされ、後段に寒曝のひやし餅、又吸物きすこの細作り、酒一つ飲まれて後早鮨蓼ばたべられず候、山椒はじかみ買あはせてお出し、その跡に日野まくはうりに砂糖かけ出し御茶は菓子なしに一ぷくづゝたて切りになさるべし、とても御馳走にちいさき御座舟に湯殿をしかけ、暮方に行水いたされ候やうに御用意、これまでにて夜の仕立一色も御無用に候、はや太夫元へ十九日の事旦那申つかはされ候日くれがたよりあがり申候」とあるは、同じ假構ながらも食道樂の一端がお推し測られる。江戸は中葉以後江戸子の氣象として、宵越しの錢を持たぬやうになりて、食意地が張つて來たゝめに、大阪に比べて遥に食倒れとなつた。しかし近年大阪が成金國となると、江戸前の蒲燒天麩羅蕎麥類を外にして大阪の會席は、寧ろ遠く東京を凌いで、上方料理は東上して、東京を風靡するやうになつた。猶前に引いた御座舟に湯殿しつくらひは必ずしもいゝ加減な作話ではない。元和頃上野の花見に花下に湯殿をしつくらつたことは紫の一本に見えるし、貞享五年板の色里三所世帶には、川狩遊を叙して、「南の方は通ひ船、屋所船、乗替の御座、又は湯風呂船、紋帳つりたる船もあり」とありて、僭分限者の僭上沙汰は今も昔も異らぬ。大阪に商權が移つてから、町人の羽振のよいことは云ふ迄もなかつた。

しかし驕りが嵩じて一家の滅亡を招くに至つたについては、町人考見錄にも、「就中町人は商賣それ〳〵にわかるといへども、先は金銀の利足にかゝるより外なし、然るに田舍の町人はそれ〳〵の國主地頭に憚り、其上目にさのみ美麗を見ざる故に、心自から移る事なし、爰を以て多く代を累て、業を勤む、京江戸大阪の町人は、其先祖或は田舍、又は人手代より次第に經上り、一商賣をひろげ、富を子孫に傳へんと、其身一代身をつめ、家業職方の外に心を置かず、艱難辛苦の行を積で其子家を繼ぎ、其者は親のつましき事を見覺え、身は其家のさまで富まざる内に生れたち習ふ故に、漸其一代は守り勤といへども、又其子孫の代に至りては、はや家の富貴より育立、物ごとのかんなん、金銀を大切といふ事を知らず、故に自然と世風を見習ひ、心たかぶり家職を人任に仕置て、うか〳〵と月日を暮し、身體に物入多く成行まゝに、其身も漸く年老物心附といへども家業の道を知らず、物入の多く成るに任せ、手廻しに人の金銀を請込、次第に利まどひに成、果は家を潰す者、世の習はしと成、凡京師の名ある町人二代三代にて家を潰し、跡方なく成行事眼前に知る

處あり」と戒めてゐるが、到る處に僭分限者は蜉蝣の如きはかなき生活を營み、其富は須臾の榮耀榮華をしたと云ふに過ぎぬ例を示してゐる。

三、京の着倒れ

京に此節何が時花(はや)ると云へば、仕まして銀溜る事ぞかしと、西鶴は京都人の溜込主義を冷笑つてゐるが、京の仕末は其特色である。京の町人で豪富となつたものは多く兩替屋、長崎の生絲專賣、呉服所、銀座朱座等であつた。京の町人が富裕となるとともに、其贅澤は最も著く衣裳に現れて來た。もと〳〵茶術の本場であるから、食道樂のものは少い。元來が風雅の地であるから、江戸流のがさつた榮耀沙汰はない。見た京物語に「京は砂糖漬のやうなる所なり、一體艶有て味に比せば甘し、然れどもかみしめてむまみなし、からびたるやうに、潤澤なる事なし、きれゐなれど、どこやらひざし」とあるは、全くの所間違のない適評である。殊に京の女の美しさは、古くから聞えてゐる。「京は石地と砂利のみ多く、土氣少し、故に人奇麗なり、女などに古へより美人多きは國に油氣なく、きれいなる故なるべし」とある原因説は當にならずとするも、長い間の帝都古い時には采女の制もありて、諸國の美人を集めたし、都會に美人の集中するは、今も昔も異らねば、京都は自ら美人國となつて、永く此系統を傳へたのであらう。又一つには山水の美も與りて力があり、水蒸氣が多く、乾燥してゐないと云ふことも美人生産の原因ともなつてゐやう。とにかく女の美しい所であるから、從つて富の豐饒は之を飾るに衣裳美を奬勵したのである。殊に地は西陣と云ふ織物の生産地があつたから、盛に此地なら流行を作り出した。殊に此時代には染物業が頗る發達して、幾多の染物は盛に製造されたのである。

衣裳の美しくなつたのは寛文頃から始まつてゐる。我衣にも「寛文年中より男女の衣服ぞろ〳〵奢る、寛文年中に至ては、惣鹿の子の小袖を着す、地白綸子或は紺絳紫の結鹿の子惣地にせり、尤も結構なり」と見えてゐる。幕府は屢々禁令を發したが、町人の勢力が加はつて來た時代であるから、更に其功はない。江戸の石川六兵衛の妻と、京の難波屋十右衛門の内儀とが東山で衣裳競べをして、難波屋の内儀は、緋綸子に洛中の圖を縫はせ、石川の妻は、黒羽二重に珊瑚珠の實を縫ひつけた立木の南天の染小袖を着けたと云ふにても、時代の贅澤が知られる。小袖には摺箔が應用せられ、又刺繍も使用し、之に鹿の子其他の染を混合するに至つた。絞り辻花染、鹿の子は盛に小袖の装を飾つた。延寶年中、東山衣裳競べに勝利を得た石川六兵

衞の妻女が五代將軍綱吉の寛永寺御成の時美裝をして、名香を焚き、棧敷に簾をかけて拜したと云ふことは、町人僣上の物議を招き、幕府は此等奢侈の風を根絶せんとして、六兵衞夫妻を刑したるのみか、天和年間屢々法度を發布し、「金紗・縫物・總鹿の子、今より後婦女の衣服に用ゐる事を許さず、すべて新奇の染織を停止すべし、小袖の表一端價二百目限りたるべし」（常憲院殿御實記）と令し、猶引續いて、儉素の令を頻繁に發布したが爲に、一時贅澤の風は止んだやうであつたが、時勢は町人全盛の時で、華車な時勢粧を好む世とて、幕府の禁令も善く其權威を維持することが出來なかつた。本朝二十不孝に、「衣裝の御法度は表向き守り、內證は鹿子類さま〴〵調へ」とあり男色大鑑に「折ふしは衣裳の御法度かたく守り隨分目立たぬ仕出しなれど」とあるは、禁令の效果の著しくなかつた證據と見られ、遂に元祿二年に、「女の御禁制被ニ仰出一候得共元來の儀に候間、向後縫結構に無レ之樣に代銀二百五十限り縫の衣類賣買可レ仕候」と幕府の方からそろ〳〵弱い音を吹いて來て、其結果は元祿の豪奢となつたのである。貞享頃にあつた染類を擧げて見ても、御所染・江戸染・正平染・友禪染・菅原染・千種伊達染・吉牛染・沙室(しやむろ)染・唐人染・更紗染・吉岡染・遠山染・梅がから染・檳榔子染・加賀染・細染・茶屋染・しゆんさい染・一ちん染・燒火染・うこん染・ふすべ染、ゆかた染・玉子色染・太夫染・茜染の名を算し得る。此等の多くは京染にして、京女郎好みに作り出されたもので、畢竟京の町人のゆかたさの一面を映したと云つて差支がなからう。其流行は江戸大阪其他の諸國に傳はつたが、將軍家のお膝元で、新しい勃興した氣運を有する江戸は最も多く之を傳へ、江戸式趣味を加へ、燎原の火勢を以て流行したのであつた。

「殊に近年は何方も女房ぬし奢りて、衣類に事もかゝぬ身の、其時の浮世模樣の正月小袖をたゝみ、羽二重半疋四十五匁の地絹よりは、千種の細染と百色がはりの染賃は高く、金子一兩づゝ出して、是さのみ人の目立ぬ事に、あたら金銀を捨てける、帶とても古渡の本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、天窓にいたゞき、湯具も本紅(もみ)の二枚がさね、白ぬめの足袋はくなど、昔は大名の御前方にもあそばぬ事、思へば、町人の女房の分として冥加恐しき事ぞかし」、（胸算用）とあるは元祿初期の世相であつた。是より少し先貞享三年板の好色五人女にある姿の關守は、京女郎の美しさと伊達姿の風俗とを配合した縮圖であつて、艶麗云ふばかりもない。就中、西鶴が今朝から見盡せし美女ども是にけさをされて、其名ゆかしく尋ねけるに、室町のさる息女、今小町と稱賞した美少女は「女はいまだ

十三か四か、髪すき流し　先をすこし折もどし、紅の絹たゝみて結び、前髪若衆のするやうにわけさせ、金髻にて結せ、五分櫛のきよらかなるさし掛、まづは美しさ一つ〳〵云ふ迄もなし、白繻子に墨形の肌着上は玉子色の繻子に孔雀の切付見へすくやうに、其上に唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帶、素足に紙緒のはき物、浮世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためと云はぬ計の風情」であつた。

中村内藏助は尾形光琳の後援者であつたが、其内儀の衣裳競べには、光琳の智慧を假りて、見事、滿座をあつと云はせた。光琳は嘗て江戸深川冬木の妻女の爲に、其下着の白綸子に、萩の繪を畫いた。定めし内藏助などの爲にも衣裳に其豪華の筆を揮つたであらう。好色文傳授に、「白繻子、いよ〳〵墨繪の松光琳に書せ申候」とあるは、強ち種のない虚構でもあるまい。好色一代男には、島原の好女薫のことを記して、「萬の花かづらも秋こそ勝れと、白繻子の裾に狩野の雪信に秋の野を書せ、之によそへての本歌、公家衆八人の銘々書き」と見へ、五人女には、「上に樺ぬめの引つかへし、本繪にかゝせて、右の袖に吉田法師が面影ひとり燈の下に文など見てのもんだん、さりとは仔細らしき物好」とあり、椀久物語には友禪の墨繪の小袖のことがある。いづれも作者の作意ではあらうが、實際斯う云ふことも伊達者の間には流行した反證とも見られ得る。

京は繪のやうな都である。東に三十六峯の翠黛、西には嵐峽の奇、三尾の勝、鴨川桂川は其の間を縫つて、水は玉を轉ずるが如く、春に秋に、風景改まり、朝に夕に嵐光移り、其間の大路小路を行き交ふ女は實に美しくあつた。王朝時代の女は綺羅社會に其美を鍾めたが、江戸時代になると、町人の内儀娘狹斜の巷の遊女が艶麗を競うてゐたのである。しかし其の肉體美は衣裳美に依りて一段と立優つたのであるか、要するに町人の經濟力が俄然として此時代に振ひ興つた其結果に外ならぬ。

四、江戸の町人風

京都は其土地柄保守の氣風がいつまでも存在してゐた。延暦以後の帝都で、禁裡御所の所在地であると云ふ誇りと、歴史的背景を有したが爲めに自づと因襲的であつた。しかし江戸は新開地である。武藏野の一角が急に開墾されて、丘が切り崩され堀河が開鑿せられ、蘆荻の生ひ茂る卑濕の地が埋め立てられて千代田の城と八百八町とが成立したのである。歴史もなければ誇りもなく、又因襲もなかつた。今日でも東京は植民地の觀があり、統一がなく、秩序がなく、町は延び方だい、道路は亂れ

方だいにて、殺風景極るものであるが、之でも江戸當初の殺風景さは推して知られる。今日でこそ江戸趣味とか、江戸の名殘りとか大業に云ひ囃してゐるが、江戸は昔から殺風景で混沌たる處であつた。從つて江戸人の氣風には排他の觀念がなく、極めてコスモポリタンであつた。即ち保守の氣に乏しくして進取の風に富んでゐた。時代の精神を得會して、之に適應することを了解してゐた。江戸は幕府の所在地で、實權の存在する場所であつたが、其人民は官僚に屈從する人民でなくして、寧ろ稜々たる野人氣風があつた。之には江戸町人の勢力の發展と云ふ原因はあつたが、江戸の背景に何等の因襲的要素がないと云ふ遠因をも算せねばならぬ。旗本奴に對して町奴が起り、幕府御用の諸職に對して町の諸職が起つた。江戸人は幕府の令に向かつて狂歌川柳阿呆陀羅經等の皮肉な諷刺をすることを憚らなかつた。氣輕な江戸人士は輕妙なウイットに富んでゐたのである。

同じく野人氣質であるか、京都の野人氣質は幕府に對して禁裡のお膝元と云ふ反抗的なあきらめの誇があつた。故に伊藤仁齋は堀河に塾を開き圓山四條の諸派は此地に偃起した。即ち處士たる操を守りて、其自負心を滿足させやうとしたのである。實よりは寧ろ名を求めやうとしたのである。であるから其文藝は自ら此氣象に養はれて、上品な高雅なものであつた。大阪の野人氣質は純然たる商人根性で金錢本位であつた。其間に生れた文藝は多く町人の娛樂を目的とし、若くば其耽美的快樂を鼓吹するものであつた。江戸に入ると最も平民的に、最も一般的になつて、明に民衆的文化の面影を共有するに至つた。

淀屋辰五郎も俳名を[illegible]徳と云ひ、元祿十四年天滿天神に奉納の歌仙中に「春雨のもらさぬ四方の草木哉」とあり、脇は平野に住む大文字屋四郎右衞門（俳名宗雲）にて「紐とく花を待て見ん庭」とあり、第三句は松本岩之助（俳名則音）「初蝶のやどれる垣ね日はさして」とある。紀文が文山と號して俳句もやり、一寸畫も描いたことは擧ぐるまでもない。淀屋辰五郎が文藝の士に如何ほど厚かつたかは、不明であるが、中村内藏助が光琳の爲に盡し、紀文が其角一蝶を取卷きとしたことは、之れ亦知れ渡つた事實である、成金の徒が畫家の後援者たるを見れば昔の俄分限者も、文藝の爲には多少の力を假したに相違ない。

「江戸の手代より申越した關東筋へ風吹きて、米俄にあがりなれば、是より大阪に下りて、西國米大分買込あがり請たらば太夫を根引にして、我等が奥樣にすることぞ」（織留）とあるは、上方筋の商人の儲け方なれど、江戸にても紀文の俄分限となつたのは、木曾の材ヲ買占めにある。奈良茂は日光山の御用か

らとん〳〵拍子に材木商として富豪となつた。石川六兵衛は問屋稼業、銀座もの丶全盛以後には藏前の札差が羽振を利かした。大名武家どもは刀を帶びて、幅を利かしてゐたものゝ、有德人の前には低頭さぜるを得なかつた。銀座、金座、朱座、魚市場、寄物市場、札差などが豪奢を競ひて、江戸の風俗も一變三變した。明和安永天明の頃に出た十八大通の風俗が持てはやされて、本田あたま、銀煙管、南京がけ黑仕立、意氣な薄綿の小袖三枚重ねの風は靡然として、長安の遊俠少年に慕倣せられたものである。

金殿玉樓に人となつた源氏の君も、世話に碎けて世之助となると、到る處に、平民的の遊蕩を貪つた。初冠して奈良の都に行つた業平の卿もむかし男と名を代へては遊里入りに日も足らない。土佐派の倭繪も、其流の末を汲んだ岩佐又兵衛から一轉して浮世繪となつた。能樂では民衆的でないが歌舞伎芝居となると、一般に歡迎される。還城樂だの採桑老だの、幸若舞では、民衆に耳遠いが、舞踊となると、平民的のものである。謠曲舞曲は一部分のものであつたが、長唄清元常盤津となると、町人的のものである。道成寺にしても、葵上にしても、隅田川にしても、三井寺、櫻川にしても、同じ謠曲物よりは、それから俗化された河東節、一中節、長唄物の方が善く通ずる。同じ囃子地方にしても三絃樂に用ひられるもの丶方が通俗的である。四角張つたところから、急に圓くなつて來た。能も狂言も之を歌舞伎化せずんば已まざる勢があつた。

謠曲の安宅を取つて見る。一中節の安宅、勸進帳では先づ原曲と同じ行き方で類似の文句であるが、長唄の勸進帳になると、「あら耻かしの我が心、一度見えし女さへ、迷ひの道の關越えて」とひどく色つぽくなつて來た。山又山を山廻りせる山姥も、清元の月花玆友鳥となると、「おんらが在所はな奥山のてゝ打つでんくり〳〵栗の木の根を枕にござれ」と、思ひ切つて俗つぽくなつて、民衆化してしまつた。

王朝時代には材料を貴紳の間に求め、鎌倉室町時代には武張つてゐた文學も江戸に入ると、其題目は市井の出來事であつた。おさん茂兵衛の情事、心中天の網島、桂川連理柵、お七吉三、白井權八小紫の如きいづれも市井の出來事で、民衆の最も共鳴すべき題目であつた。それで之を脚色し、之を文章に編み出した文學者はいづれも市井の平民であつた。狩野の御用繪師が舊に依りて葫蘆を描く間に、雁金屋藤三郎は光琳となり、池秋平は大雅となつた。雪舟應擧は世界的に聞えてゐないのに春信歌麿北齋廣重等が世界的畫家であると云ふのは、必ずしも外人の鑑賞眼が到らぬ故ではない。文藝に國境なし、民衆的錦繪は最

も善く世界的に了解さるべき素因を有してゐるからである。

瀟湘八景を畫き、武陵桃源を畫き、支那風の山水を畫くのが東山以後に於ける畫家の技であつた。よしや日本風景を描くにしても、寧ろ支那風に近くあつた。圓山四條に至りては盛に近畿の風光を畫いた。女を畫けば所美人、人物を畫けば道釋人物と相場が極つてゐた。此點にかけると、土佐派の繪畫とは、頗る其畫題と畫材とを異にしてゐた。しかし浮世繪は世相畫であり時勢粧を畫くものである。其風景畫は日夕親炙する名門社寺である。日本橋の富士を畫き駿河町の越後屋を畫き、兩國の納涼を畫き、隅田の花見を畫く。江戸の名所、富士の眺望、京攝の名所、近江八景、金澤八景から、東海道東山道の長亭短驛、諸國の名所にまで及んで、現代の風景を現代式に描き出してゐる。しかし之に配するに雨雪霧夜等の自然現象を配合して、之を美化することを忘れてゐない。丁度俳諧が現代の語を取入れ現代物象を詠んでも、之を俳化し詩化するが如く、浮世繪は巧に自然現象を風景に配合して、之を畫化してゐるのである。其人物は現代の婦女あらゆる階級のものを捉へ、之を寫し出してゐるが、取別け世評の囂しき市井婦女を取つて其畫筆に上せてゐる。春信の笠森お仙、柳屋お藤の如き、歌麿の難波屋おきた、高島屋お久の如きは即ちそれである。又浮世繪の本色とも見るべきは釋迦も孔子も、其等に上れば現代化する所にある、道釋仙人も其筆にかゝると、盡く現代化してしまふ。琴高仙人も優しい女となりて、鯉の上に騎り、達磨も意氣な姐御となりて、蘆葉に海波を凌ぐ。七福神も市井の間に遊んで嬉々として兒女と戯れ、文珠普賢は若衆艶女となりて、獅子大象の上に跨る。斯うなると藝術は我等と緣の遠いものでなくて、我等と日常相接するものとなり、又我等と緣の遠ひものまでが、我等と緣の近いものとなつてしまつたのである。京大阪に於て文藝は平民化せられたが、更に江戸に入つて、全くの民衆文藝となつて了つた。江戸町人の氣輕な、いなせの風は、其文藝をも極めて輕妙な、ウイツトに富んだものとしたのである、獨り錦繪ばかりでない、俳諧に於ける江戸座藏前風の如き、川柳、狂歌の流行の如き、皆明に之を證してゐる。

王朝の文藝は多く其當時の世態を描いたものである。源氏にしても榮華にしても、當時の社會相を寫して、之を文藝化したのである。伴大納言繪卷にしても、北野天神緣起にしても、當時に起つた或事實を捉へて、之を文藝したもので、現世相の描寫であつた。但し其社會は貴族縉紳を中心としての社會であつて、平民級社會とは沒交渉であつた。鎌倉時代の文藝にしても、其時代の武家階級若くは緇流階級と云ふ社會の一方面を中心とし

ての文藝で、多くは平民級社會と風馬牛であつた。東山時代の文藝は理想の幻化であつて、精神を寫し出すを其特色とする。桃山文藝になると、僭分限の武家を象徴したもので、平民とはまだ緣が遠かつた。必ずしも文藝にのみ求めずとも、歴史に就いて試に一觀せよ。國史に於て平民なるものは久しく現はれなかつた。地方に云ひ、人民と云ふ記事が漸く頻繁に見えて來たのは王朝の末、地方政治の紊亂した頃から始まる。武家は背後に平民の力を頼まなければならなかつた。けれども鎌倉時代にも平民は現はれない。南北朝の亂離も、地方經濟と云ふ一の大なる隱れた力が與つてゐる。けれど歴史の表面には其記事が現はれない。東山時代は德政の頻出した世である。平民級が漸く活動し初めた。戰國の諸侯は其力に依りて歴史の舞臺に智と力とを爭つたのである。平民の勢力が現はるべき其土臺は十分に築き上げられた。斬くして其力は初めて江戸時代の太平に依りて現はれ、我が國史上に未だ曾て有らざる平民社會中心の記事となつたのである。文藝が町人の手に移つたのは、固より偶然でない。

老莊の敎は高遠な理想を說く。しかし江戸の文學者は之を通俗化することを忘れなかつた。王朝の文學は入り難くあつた。しかし江戸の文士は之を現代化するに巧みであつた。孔子も遊里で說法し、釋迦も和光同塵の德を示してゐる。もう文藝は或階級の獨占物ではなかつた。そこに江戸時代文藝の價値がある。菅江二氏が王朝の學權を握り、五山の緇徒が鎌倉室町の文權を占めたのとは違ふ。土佐派の外には殆ど畫家がなかつた。一轉して、世外の徒が畫壇の中心であつた。狩野派は和漢の長所を捉へて幕府の御用繪師となつた。けれどもう狩野派の獨占をゆるさない。南畫が起り、光悅光琳派が起り、圓山四條派が起つた。それではまだ足らずに浮世繪が起つた。王朝の和歌、室町の連歌では平民に由緣が薄い。俳句となると大分近くなる。川柳狂歌に至りて、全く平民のものとなつた。十二一重緋袴姿は雲の上人の裝ひである。直衣水干狩衣は平民の着物でない。小袖となり、打掛けとなり、振袖となりて、平民級は其美を盡にすることを得た。

堺は町人全盛の初であるが、まだ文藝は其手に移らなかつた。大阪町人の勢力旺盛なるに至りて、平民文藝は起つて來た。京阪に於ける文藝は元祿を中心として、盛に其波を揚げた。五代將軍が上方の文化を東に移植するにつとめた結果、西の文化は滔々として東漸した。江戸の町人氣質は町人にふさはしい民衆文藝を作り出させた。江戸文學江戸藝術は此に洗錬したものとなつて來たのである。巢林子や西鶴が平民の爲に氣を吐いたな

學は到る處に千波萬波を生じた。梅翁や芭蕉がつとめた平民文學は、大勢力となつた。光琳や一蝶で門閥以外に其實力を示した藝術は平民の爲に偉大なる力であつた。岩佐又兵衛菱川師宣は平民藝術の曙光であつた。斯くして其文藝は文化文政の前後に於て最も爛熟し、最も洗錬せられたのであつた。

助六劇の揚卷は「助六さんと意久さんとを比べて見たら雪と墨」と稱して、町人の爲に萬丈の氣焔を吐いてゐる。「お若けいのうお待ちなせえ」と駕籠からぬつと出た幡隨院長兵衛は江戸人の最も渴仰喝采する代表的人物であつた。洒落本では武家を野暮の象徴として、粹人は町人と相場を定めてゐる。江戸の町人は威武も屈する能はざるを以て其誇としてゐた。文藝は能く之を證據立てゝゐる。蓋し文藝が町人の手にあつたから、政權には携はさり得なかつた町人は文藝に於て其氣を吐いてゐたのである。官權の取締はあつたが、民衆文藝は自由で大膽で拘束はなかつた。幕府の官學であつた昌平黌は最高學府であつたが時勢とは沒交渉で、時代文化と關係は薄かつた。御用繪師の狩野派は探幽常信其他二三を除いては、如何なる四家の嫡流が威張つてゐても、如何に其門流が盛であつても、藝術界に何等の風波を起すべき力がなかつた。獨り平民の手に移つた文藝は時代精神の表現であり、民衆文化の發露であつたのである。

無何有郷に遊ぶの記

生方敏郎

第一夢

あゝあゝ、本當に嫌に成つちまふ。

私は元來暇さへあれば、毎日浮か／＼と遊んで歩き度い人間なんだ。併し何うも此頃のやうに電車が雜沓しては、人いきれで窮屈でその上足をふまれるやら隣の釣革から睨め付けられるやらで、電車に乘つて出る氣がしない。自働車に乘るのは好い心持だが、自分で持つてゐるわけではないから、さう／＼毎日は乘りたてられない。いや、それればかりではない。近所に貸自働車屋もあるけれども、そこの奴等が氣に喰はない、近所の

人々が電話を借りに行くと、貧乏人扱ひして貸さないのだ。そんな自働車には乘らなくもいゝ。と云つて歩けば暑ついし、ほこりが吹き付けるし、道は惡いし、水は全然まいて無いかと思へば、グチャ〳〵ぬかつて歩けないほど、ふんだんにまかれてゐたり、東京の道は實際歩くのも氣持が惡い。

旅行に出懸けやうとすれば、病氣にかゝる。自分がなほつたと思へば、今度は引つゞいて子供らが病む。そんなこんなで禁足を喰ふ。先づ夏の日の樂みは何といつても避暑が第一だらう。幸ひと南の窓から風が這入る。難有い。うと〳〵したと思ふと、むせつぽく成つて眼が覺める。眞向ふの大きな煙突から噴き立てる煤烟が猛襲して來たのだ。枕の上にも床にも黑い細かい玉が、ころ〳〵轉がつてゐる。皆な煤の玉だ。

そこへ珍らしく大阪から私と同じ會社の友人が訪ねて來た。

『あゝ、君かよく來たねえ』

と私は座つた。彼は

『あんまり好い事で來たんでもないんだ。實は今度大阪を首に成つたんだ』

『首に？』

と今までボンヤリしてゐた私も、首といふ聲で、少し意識が明瞭に成つた。

「うん、新聞社が解散に成つて皆な首に成つたよ。記者も事務員も職工もだ」

と彼は笑つた。その禿頭の光るのも氣の毒だ。トロール船で捉られた鰯のやうに數百の失業者が、あがきもがいてゐる有樣が私の眼に浮ぶ。

『全く、君、今の世に貧乏人に生れ落ちては、勞動階級たると知識階級たるとを問はず、一生に十度以上も首を切られるつもりでゐないと、間違ふよ。不景氣が來たと云つちやあ首をチョン切られ、病氣だと云つちやあ細首を叩き落され、最う少しで恩給が貰へさうなところ迄出世したと云つては雁首を折つぺしよられるのだからね。平親王將門ぢやあないが、ほんとうに貧乏人は首の九つも準備して生れて來ないと、追付かないよ』

と私も笑つた。失業君は私の呑氣相な態度を視て

『君のところへも斷つて來たらう』

『うん、二日に解散の通知が有つたよ。そして、その終ひの方にお氣の毒だと書いて有つたから、乾度僕に取つて多少不利益なことが含まれてゐるかと思つた。併し僕から見りやあ會社の方がよつぽどお氣の毒だよ』

禿頭失業君は

『君等は、そこへ行くと氣樂でいゝなあ』

と言つた。

『いや、ちつとも氣樂なことはない。僕だつて一人前の失業者だ。この通り好きな詰襟も落付いては出來ない。君の周圍の黑玉を見玉へ。皆なあのバカ大い烟突から噴き出す煤だぜ。あの工場主に言はせたらダイヤモンドと同質の炭素だと言ふかも知れないが、此通り何も彼も汚されるには閉口だ。あの烟突所有者の賜物だ。君、あの烟突が一本有るために、利益を得てゐるのは一人若しくは數人だ。そして膏血をしぼられてゐるのは何人だらう。それからこの周圍數丁の間の市民は朝夕あの煤烟を浴びてゐるんだ。あゝいふ烟突を市內に建てさせて、平氣でそれを許可してゐる奴は獅子身中のパルチザンだね。我々はサガレン州の占領よりも先きに、市內のパルチザンを退治しなけりやあなるまい。』

『相變らず、氣焰を擧げるね。だが、僕はパルチザン退治どころの話ぢやあない。早速パンの問題だ。近々中に東京へ越して來るよ。そうして至急に口を探さなけりやあ、ならない』

『パンの問題は、君ばかりぢやない。近頃は誰も皆なパンの問題を考へてゐる。だからこそ市內のパルチザンから先へ退治しろと絕叫するのさ。砂糖の本家本元たる臺灣を取つてから、砂糖の小賣値段が七倍も高くなり、樺太を取つてから魚がいよ／＼高くなる。こんなバカげた話が有るかい。米だつてその通りさ。人民の生活に日常缺く可からざるものを高くして奸商奸農を擁護する奴等は、皆な內地のパルチザンぢやないか。何うせ征伐する位なら、內地の方から先へやつて貰ひ度いものだ。』

禿頭『それで、サガレン州へ愈よ出兵といふことに成るかな』

鈍郎『成かも知れない。その方面へ幾つかの魚場を持つてゐる海産物問屋の番頭さんが、屹度出兵しますと、云つてゐたからね。その邊の事は新聞社よりも先に商人が承知してゐるよ。名を尼港犧牲者追吊合戰に藉りて、成金の漁場保護が目的だらうからなあ。なんだか、此九十三度といふ暑さの上に、議會と云ひ、民衆運動と云ひ、暑苦しいことばかりだ。東京へなんか來たつて君仕樣がないぜ』

禿頭『うん、當分は芦屋海岸の涼しい風に吹かれて暮すつもりだがな。いつ迄も遊んでゐる譯には行かない。嫌な東京へ來なければならないよ。そこへ行くと君なんかは金持の親類を澤山持つてゐるから好いさ。さあといふ時、困りつこはない』

鈍郎『ところが然でない。金持の親類位相互補助の觀念の薄い者は無い。彼等は如何なる場合にも我々の手助けを求めないよ。それは、反對に此地から合力を請はれるのが怕ろしいからさ。極めて結構な程度のものでも、日英同盟位の割にさへも行

かぬだらう。金持の親類を持つよりは、高利貸の友人を持つた方が、まだしも増しかも知れない。高利貸は貸す位は貸す。親類共に至つては貧乏してる間は交際さへもしないだらう。僕の淺い經驗に於いてアンクルは正に伯父さんより親切だよ』

禿頭『妙な洒落を言ふね。そのわけを聞かう』

鈍郎『だつて、君、アンクルは一圓二錢の利子で、此地の必要の半分位は貸してくれるけれど、伯父さんと來たら何時だつて、此地の請願の四分の一しか用達てくれない。時とすると、一文も彈いても見せないで、唯聽き度くもない意見だか愚見だかだけ拜聽させる。』

禿頭『たとひ請願の四分の一にしろ、唯貸して貰へりや、よからうがな』

鈍郎『唯なものか？　凡そ世の中に唯で得られるものなんか一つだつて有りやあしない。空氣でさへ少し上等の空氣を呼吸しやうと思つたら、仲々少なからざる金が要る。まして、伯父の家へ行くには電車代と手土産がゐる。その上叩頭も歸る時の分まで合計すれば、十や十二は屹度必要だ。質屋へ行つて見たまへ。向ふの方が却つて「毎度ありがたうございます」なんて云ふさ。だから僕は金持の親類よりは、質屋や高利貸の方が好きだよ』

禿頭『君のさういふ考へも、畢竟するに私有財産制度の弊害から生れたものに違ひない。さつきの烟突の一件だつてさうさ。私有財産制度の結果さ。二三の魚屋さんの利益の爲めに出兵、占領、流血と來るのも、之れ皆私有財産制度の結果さ』

鈍郎『時に、普選問題は何うなるだらう。院外でも民衆の中でもあんまり矢釜しいから、流石の金權擁護黨も、今度はへきえきして普選案を通過させはしまいかな』

禿頭『いや、何うしてそれどころか。君は晝寢ばかりしてゐるから浮世の事は餘り御存知有るまいが、近頃急進主義者改造論客といつた樣な方面の人々は、すこぶる危險なんだ。君等も餘り髮床の親爺なんかとフセンの對話を好い氣に成つて戰はすと「一寸來い」を喰ふぜ。安政の大獄跣足といふ時代だから、寐言にもデモクラシーだのソシアリズムだのフセンだのと言つちやあ、いけないよ』

鈍郎『ではまだ、我々の時代は容易に來ないかなあ。人間と生れて選擧權一つ持たないとは、牛馬も同じことだなあ。あゝ詰らない。〳〵。』

第二夢

昔から蛙の子は蛙だと云ふ。なる程、私の見た三十有餘年間

の短い經驗によれば、この位明白で誤のない眞理はないと思ふ。如何さま、私は引蛙に向つて、

『君のお父さんは誰だ』

と聞いて見た譯ではない。また私は蛙を養殖してゐる譯ではないから、ほんとうに蛙の卵が母の胎内から生れ、それが孵化してお玉杓子となり、蛙となるところまで丁寧に見屆けた譯ではない。然しその反對に、私は雀が蛙を生んだのを見たことがない。また馬が蛙を生んだのを見たことがない。ところで少なくとも、私は人間だと云ふことだけは、大膽に云ふことが出來る。と云ふのは、私自身が四人の子供を持つてゐるが、どれもどうやらかうやら、人間らしいからだ。それ故、資本家の子は資本家、勞働者の子は勞働者、洋服細民の子は洋服細民であるのに少しも不思議はない。

だが、私が寧ろ不思議に堪へないのは、蛙の子が蛙であるのに、女の生んだ子が男であることだ。どうもこれは番狂はせのやうに思ふ。ところが、世間では餘程この番狂はせと云ふものが結構なものと見えて、男の子が生れる度に、

『坊つちやんでお目度うございます』

と挨拶に來る人もあれば、

『君、また男だつてねえ、うまいことをしたねえ』

と我が事のやうに喜んでくれる友人もある。男が生れることを喜ぶのは、男尊女卑の惡習慣の結果であると云ふ人があるかも知れぬ。然し、お産婆さんまでが、

『奥さん、お坊つちやんですよ。お手柄ですね、え金鵄勳章ですねえ』

と云ひながら、何だか自分の手柄ででもあるやうな顔をする。細君も一つしよになつて如何にも嬉しさうに、

『坊やでしたか』

と云ふ。

土俵のまん中で小さい角力取が太關を投げれば、見物は番狂はせだと大悅びだ。白面の書生が代議士に當選して大政黨の幹部連がラク選すれば、新聞の讀者は番狂はせだと大喜びだ。では成金が株で損して成貧に成つたら、何うだ。貴族が零落して乞食に成つたら何うだ。坑夫の子供が大臣に成つたら何うだ。按摩が勉強して大學者に成つたら何うだ。

男子が兵隊にとられて漁業成金利益保護のために、わざ〳〵雪のシベリアまでパルチザンに殺されに行くものだとすれば何もそんなに喜ぶには當らないのだが、そうとは知らないものだから、ひたすら女が男を生んだと云ふ番狂はせを喜ぶのだ。

話はひどく横道へそれたが、天が私を喜ばせるためか、恐ろし

い番狂はせの事が起つて來た。

眞夜中の事だ。烈しい地震のために私は驚いて眼をさまして、夫婦で二人宛四人の子供を兩腋に抱へて逃げ出した。あまり烈しく地面がゆれるので、私達は起きたりころんだりした。随分長く搖れたあとで、一旦は止んだが、一時間位づゝ間を置いて何度となくゆれた。本當の大地震だ。そこにも大いなる番狂はせが起つた。日頃から我々市民を苦しめてゐた例の煙突が倒れた。崖の上の富豪の邸宅が粉微塵につぶれてしまつた。それだのに我々細民の住む安普請の掘立小屋が平氣の平左で取殘された。電信柱や大木が根から倒れたのに、庭の柔かい草は折れもせず、だが下町の方の被害は一層ひどかつた。大きなデパアトメントストーアをはじめとして、倉も家もみなひつくりかへつて、潰れてしまつた。水道がこはれたために、街は洪水のやうになり、電線は切れて蜘蛛の巣が大風で破られた時のやうになり、人は夥しく死んだ。新聞の發行も止まつてしまつて、四五日してから漸く新聞が出たが、死亡廣告などは一つもない。廣告を出す筈の人間までが死んでしまつたからだ。華族富豪の家悉く倒れ、華族富豪悉く押し潰されて死んだ。

いや、誤解してはいけない。私の溜飲が下つて心持のいゝと云ふのはこれからの事だ。それは華族富豪の死んだことではない。華族富豪が全滅したからとて、私にとつて何の痛快なことがあらう。それよりもあの因業でけちんぼうな私の伯父貴がやはり華族富豪と同じ運命の下に、柱に潰されて死んだことだ。いやそればかりではない。あの沒理解な物質主義の、その僞善な親類の奴等共が全滅したことだ。

日が經つにしたがつて、追ひ〳〵から云ふことが明かになつた。そして私は彼等を埋葬するの煩はしさを餘儀なくされた代りに、相續人のない彼等の財産を悉く引受けることになつた。彼等がけちんぼうにして、無趣味に狡猾に無慈悲に蓄積した巨萬の富を、私はたゞ一つの地震から有難うとも何とも云はずに頂戴することになつた。つまり私は遺産成金となつたのだ。

『はじめて貼つたのだが、相續税の印紙の高いのには驚いたぜ。ちよつと五萬圓ばかり取られちやつた。地券や不動産の書換登記するのに手數料を夥しく取られるものだ』

と私は妻に向つてこぼした。妻は笑つて、

『でもあなたはふだん口癖のやうに、相續税が安過ぎる、相續税などはうんと高くして、そして通行税を撤廢すべし、食料品の海關税を撤廢すべしなんて云つてゐらしたのに、今度はまた相續税が高過ぎるのですか？ 尤も五萬圓とられてはがつかりしますわね』

もうその頃、私は云ふまでもなく、前の小さな借家を引拂つて、眺望のいゝ丘の上に立派な邸宅を構へて移つてゐた。

その中に、泥棒の數が非常に殖えて來た。あすこの家にもこゝの家にも泥棒が這入る。どうしてそんなに泥棒が殖えたものだらう。それは巡査の收入よりも泥棒の收入の方が遙かに多いので、志願者が殖えたのだらうと云ふ事だつた。或はさうかも知れない。新聞や又は交番の側などに、巡査募集の廣告が屢々見えた。それにも拘はらず巡査の數は增さなかつた。そして泥棒募集の廣告はなかつたけれど、泥棒の數は一日毎に殖えて行つた。

昔安い借家を借りてゐた頃は、私は殆んど泥棒を恐れなかつた。未だ憎まなかつた。あの家の南に聳えてゐた煙突程には恐ろしくも憎くもなかつた。實を云へば、あの時分、私達が戸閉りを油斷してゐたために、窓から泥棒に這入られたことがある。朝になつて、簞笥の抽斗が開いてゐるのと、大きな泥の足跡があるのを發見して、妻や女中が騒ぎ立てた。私もその聲におどろいて起きて、鐵瓶かお釜の一つも取られてはゐないかと心配したが、何れも無事で、ちやうどその晩泊り合せた友人のシルクオイルと靴と女中の櫛函とを盗んで行つただけであつた。そこで私は、その事件をその頃流行の小說と云ふものに書きあげて、泥棒を種に百圓ばかり金儲けをしたことさへあつた。

ああ、曾ては私のお得意樣であつた泥棒君！　それが、近頃は非常に恐ろしくなつた。今は私も昔と違ひ、泥棒がいくら品物を山のやうに背中に積んで盗んで行つたとて、不自由して困るやうな身の上ではない。然し、さうなると却つて貧乏の時よりも品物を盗まれることが惜しくなつた。私は戸閉りを頻りに嚴重にした。

ある日、先達の禿頭が遊びに來た。彼も今では貧乏臭ひ新聞記者の足を洗つて、神戸の食料品買占會社に入り、出世して重役となつてゐる。そして私と同じやうに巨萬の富を擁してゐる。彼はポケツトから夕刊を出して、

禿頭『君、大變な事になつたぞ、煽動主義の奴等が先きだちになり、それに知識階級と云ふ貧乏人共がくつついて騒ぎ立て、先達から度々素晴らしい示威運動をやつてゐたらう。それでとう／＼普選實行と云ふ事になつてしまつた、この夕刊を見給へ。』

私達は安樂椅子に寄つて、快い夕風に浴してゐた。

鈍郎『なに、普通選擧だ？　馬鹿な時勢になつたものだな、愈々危險思想の具體化となつた譯だね、どうも今の內閣は腰が弱

くて人民の機嫌ばかりとつてゐて、言論の壓迫を少しもやらないからこんな事になつちまつたのだ。實に怪しからん。少しは昔の政友會內閣でも見習ふがいゝんだ。』

禿頭『全くさ。我々のやうに直接國稅百萬圓拂ふものと、一圓の稅金すらも拂へない貧乏人共と同樣の參政權を持つて堪まるものか？　それぢや鬮を引いて、一圓出すもの、五十錢出す者、十錢出すもの、一文も出さない者みんな同じ割合で菓子を食ふ阿彌陀と同じやうなものぢやないか？　國家の政事を阿彌陀でやられて堪まるものか！　普通選擧とは君、阿彌陀政治だよ。』

鈍郎『だが、この新聞にも出てゐるが、勞働問題はこの先どうなるだらう。この問題には、實際困つたものだね。今度の腰拔內閣では、とう〳〵勞働組合の結合を許し、我々資本家の金城鐵壁と賴む治安警察法第十七條を抹殺してしまつたんだ。』

禿頭『なに。治安警察法十七條の撤廢だ！　わあ！（と禿頭は氣が暫く遠くなり椅子から轉げ落ち相にする。鈍郎驚き禿頭の頭へ赤酒の霧を吹きかけ、やうやく本氣に返す）こんなに勞働問題の頻々と起つて、ストライキやらサボタージユやら、演說會やら示威運動やら、每日〳〵我々金權階級を苦しめることばかりなのに、この上治安法十七條を失つて何うするものだ。秩序を何うする？　國體を何うする？　あゝ、道德も地に落ちたか？　我が日本は外國とは國體が違ふんだ。我が日本は特殊國ぢやないか？　然るに一々西洋のマネばかりされて堪るものか？』

鈍郎『內閣の諸公もそれを認めてゐる。併し輿論に勝てなかつたものと見える。』

禿頭『何、輿論！　輿論位何だ。此方には警察もあれば軍隊も有る。』

鈍郎『全くだ。それを思ふと、昔の平民內閣なんか、實に見上げたものだつたね。名こそ平民內閣なれ、その實は我々金權階級の走狗傀儡だつたんだからね。あゝ、あの時の白頭宰相の樣な模範的總理大臣は、もう再び今日では現はれないかなあ。』

禿頭『それから、あの時代の樣な模範的軍閥は現はれないかなあ。今の軍人と來たら、少しも領土侵略的慾望が無いから、全く手が付けられない。僕の食料品買占會社では、オコツク海に澤山漁場を持つてゐるのだが、ベーリング海峽を渡つて襲來するエスキモー共に荒らされ相で困つてゐる。それにも係らず、一兵を動かさうともしない。昔なら、我々資本家の爲めに軍閥が默つて見てゐる樣なことは決してないんだ。彼等は少くとも、武士道を解してゐたからね。』

鈍郎『同感だ。僕も男の子を澤山持つてゐるものだから、その頃まだ長男が七つ次男三つ三男一歳といふわけだつたが、それですらこの好戰國の將來を思ふと、子供の運命が心配だつた。オコツク海で愛兒を資本家の利益保護の爲めに犬死をさせ度くなかつたからね。その時分僕等はお互ひに貧乏で、從つて社會奉仕の觀念に乏しかつたからね。だが、今の軍隊は、濫りに兵を動かさないから、君は漁場關係の上から不平だらうけれど僕等は子供の爲めに安心してゐられるよ。』

（鈍郎先刻の新聞紙を見乍ら）

鈍郎『オヤ、何だ華族制度改正案だ！　へん。珍らしくもない。何だ。華族は一代に止めよだ！　へん、平民らしい事を言つてやがら。兎角平民共は之れだからいゝやだよ。卑しいもの。ねえ、君我々金持華族だつて、唯華族に成るものか、軍國の爲めに、儲かりもしない公債に應じもし、軍事工業に勵みもし（それで儲けなかつたわけではないけれど）いろ〳〵政府の爲めに盡したればこそ、男爵に叙せられたんだ。昔の大名なんか、何の手柄も無しに殿樣になり華族に成つた。我々が無かつたら、國家は戰一つ出來やしなかつたぢやないか？　昔の賢明なる軍閥が、よく我々金權者流と結托して、我々の利益の爲めに平民の子の兵卒共を犧牲にして屢ば外國と戰つた理由は、卽ち其處に有るんだ。』

禿頭『實際面白くもない世の中に成つたねえ。普通選擧に成つたり、治安警察法十七條が撤廢されたり、資本家の走狗たる軍閥の勢力が衰へたり、言論壓迫が無く成り、言論の自由などいふバカゲ切つたことが實行される世の中に成つたり。あゝ、詰らない詰らない。』

鈍郎『犬は勝手に吠え、鳥は勝手に啼く。それが言論の自由だ。人若し言論の自由を實行するならば、之れ人にして禽獸の行爲を模倣するものだ。ねえ。禿頭君。君は何う思ふ。』

禿頭『詰らない世の中だ。世は益々陵夷して澆季に近づきつゝ有る！』

（此時、鈍郎の會社の支配人こけつまろびつ驅け込み來り）

支配人『社長、只今、工場の勞働者共が、賃銀三割增勞働時間一時間減を先達てから申立てゝ居りましたが、今日いよ〳〵示威運動に參りました。尤も物價は平均三〇五の昂騰を告げ、就中彼等の必需品たる食料品等は五〇〇の率で暴騰したのですから、彼等の要求にも一理あるとは思ひますが、如何計らひませう？』

鈍郎『駄目だ。駄目だ。そんなムチヤな要求は容れられんよ。物價が高くなつたからとて、僕が物價を高くしやすまいし、物

價騰貴の責任を僕に嫁されちや迷惑です。』

支配人『でも凄まじい勢で、彼等は御門前へ逼つてゐます。此際、そんな風にキツパリと跳ね付けましたら、彼等がまた何んな不穩な行動に出ないとも限りませんが……彼等の中にはずいぶん命知らずのあぶれ者も混つて居るやうですから……』

鈍郎『なにツ。命知らずだ。(鈍郎少しうろたへたが、弱味を見せては大變と思ひ、例のくそ度胸を据えて)ふん勞働者も僕も命は御同樣に一つしかない。命知らずが來る度にビク／＼してゐた日にや、限りも果ても無い。そつちで亂暴をするなら、此方にも警察もあり軍隊も有る。』

支配人『ところが、警察が例の惡法律、なに、あのチアン十七條を撤廢した位ですから、勞働者に大分同情して來てゐます。昔の平民内閣時代のやうな便利なわけには參りません。』

鈍郎『うん、何だ。貴樣まで、勞働者の口吻を洩らしやがつて』

(と叱り付ける。この時遲しかの時早し、廊下から勞働者の群がドヤ／＼と闖入して來た。鈍郎禿頭と共に青くなつてゐると、勞働者はニコ／＼して)

勞働者『社長さん。今日は、我々の爲めに悦んで下さい。我々の地獄の蓋が明いた日ですから。』

(と勞働者握手せんとて手を出す。鈍郎何が何やらサツパリ呑み込めず)

鈍郎『物價暴騰は我輩の責任ぢやあない。』

勞働者『いや、今晩はそんな野暮な用でくり込んだのぢやありません。治安十七條がいよ／＼撤廢されましたから、今夜はお祝ひの提灯行列なんです。お目出度うと言つて下さい。社長、お目出度うと祝つて下さい』

(と勞働者、大きな掌で鈍郎の手を力一杯握手した)

鈍郎『あいたたた。』

と自分の聲に眼を覺ませば、皆之れ南柯一場の夢にして、私は相變らず狹くるしい一室に在り、抱き寢した茶目吉が寢行儀惡く轉がつて來て、私の手の上へ載つてゐたのであつた。窓の隙間からはキレー紙の大煙突から相變らず遠慮なく噴き送る煤煙が咽せつぽく吹き込んでゐた。百萬長者も數分の間の夢とは、なあんだ、詰らない。

第三夢

怠け者晝寢を好み、又面白い夢を好む。莊周は夢に胡蝶と成つたといふが、私は夢に遺産成金に成つた。胡蝶に成るのと較べれば、私の方が横暴も極められたし、面白いこともした。

或日、郊外に住む友人が來たので、私は夢の話をして自慢した。すると彼は呵々と哄笑して

『なんだ。そんな下らない夢を見て悦んでゐるとは、君もまだ理想の高遠なるものある無しだね、もつと、高尚優美な夢を見るやうにしたまへ。何なら、僕が催眠術で、理想郷の夢を見せてやらう。』と言つた。

理想郷の夢！　そいつは確かに面白相だ。私はこれまでいろ〳〵の人のユートピアを讀んだが、何れも面白かつた。併し何となく物足らぬところも有つた。十五年程前、ベラミイの『ルツキング、バツクワード』を古本屋でたつた二錢で買つたが、まだその時分は經濟方面の記事に興味が無かつたので二頁ばかりで止めた。唯の二錢で理想郷をうかゞはうと云ふのが、ちと蟲が好すぎる話だつたかも知れぬ。

その後ヰリアムモリスの「理想郷」と共にベラミイも讀んだが、此友人は全くのロハで又何等私に勞力を課せずして、催眠術で理想郷を見せやうといふのだ。芝居の切符を貰ふ以上の幸福だ。昔支那に或酒好の男が有つたが陶氏(酒屋)へ行つて、千日酒といふ酒を舞振はれ、千日間醉つて寢てゐるので、家人はそんなことゝは知らないから、死んだものと思つて葬つてしまつた。然るに陶氏は千日の後、その男の事を思ひ出して、訪ねてみると既に三年前にお葬式が濟んでゐた。「さあ、大變」といふので發掘して見ると、恰度その男は今千に酒の覺めぎわだつたので、大きな欠伸をし乍ら棺の中にゐた、といふ話が有る。いくら千日間でも、たゞ寢てしまつたのでは能はない。それから見れば、催眠時間は短かくとも、こつちは他國の見物が出來るのだ。仙家の千日酒よりも、よほど氣が利いてゐる。

そこで兎も角も友人の命令通り床を敷いて仰向に寢た。

そして彼の暗示に從つてゐる中に、間も無く私は淡い睡氣を覺えた。

オヤ！　とう〳〵私は理想郷らしいところへ來てしまつた。

一面に緑の野で、翠の滴るやうなこんもり茂つた大木がそこにもこゝにもある。若い男女は入り亂れてその木の下で幼稚園の生徒のやうに遊び戯れてゐる。或は戀を囁くやうに二人きりで草の上に足を投げ出して靜かに話してゐるのもある。私はそれを見て自分の若かつた日の事を思ひ出して昔が懷しく今が悲しく成つた。

『オヤ、オヤ、あなたは悲し相にしてゐますね。何うかなすつたのですか』

と思ひがけなくも、後ろから女の話し懸ける聲がした。振り向いて見ると、丸々肥えた水々しい色白の三十前後の婦人が、

私の方を向いてニッコリして嬌態をした。私は自分のさもしい心を見られたのではないかと、うろたへて
『いえ、別に何とも有りません。たゞ一人で知らぬところへ來て淋しいものですから……』
と答へた。女は私の傍へ寄つて來て
『一人でお淋しければ、私がお供しませう。そして、もつと賑かな方へ參りませう』
私は、その親切を悦んで、共に語り乍ら歩いた。そして何時しか私は彼女の軟かい手と手を取り合つてゐた。
森では、美はしい小禽の囀聲が絶えまなくしてゐた。
『貴女はこれから何地らへいらつしやるのです？ 今日はお忙がしくはないのですか？』
『何地へですつて？ 今あなたと歩いてる方角へ行つてゐるのぢやありませんか？ 私、ちつとも忙しいことなんか有りませんよ。午後は毎日恁うして遊んでゐるのですもの』
『さうですか』
『私ずゐぶんお喋りでせう。でもユウトピアの女は皆なこんなにお喋りですの。日本の女のやうに氣取つたりお澄ししたり、ヒステリーに成つたりすることの代りに、ユウトピアではお喋りしますの。はしやぎますの。ホホホホ……そしてこんなに哄笑ひますの。女は笑ふことゝ噓を吐くことに依つてのみ、自分を魅力づけることが出來、他人を悦ばせることが出來ますからね』
『結構です。けれど、こんなに親し相に談笑して歩くところを、人に見られたら何とか言はれやしませんか』
『ホホホホ……誰が何といふものですか？ 誰と笑はうと談さうと、私達の自由ぢやありませんか？ ユウトピアの女子は立派に解放されてますから。あなたみたいなおぢいさんと手を組んで歩いたつて、誰も注意さへしやしませんわ』
私のやうなお爺さん臭い人間と歩いても、誰も注意さへしないといふ。全く然だらう。それでは如何に窈窕花のやうな美人と共に居ても、餘り多くの喜悦に價ひしないのだ。
私は又も悲觀に囚はれて深く考へ込んでしまつた。
『お爺さん。何うなすつたの？ 元氣がないのねえ。あなたお幾つ？』
と彼女の若々しい聲が沈默を破つた。
『私はもう三十九歲ですよ』
『あらまあ、さう』と彼女は吃驚して『私は八十位に思ひましたよ。失禮しました。それでは私より弟なのね』
『へえ』と私も驚いた。『では貴女はお幾つ……』

『私？　四十一ですよ。』
『嘘でせう。せいぜい二十歳位にしか見えませんよ、何うしても三十より上ではないでせう』
『オホホホ……いくらユウトピアの女が嘘吐きでも　お婆さんに成つてまで嘘を吐かうとはしませんよ。若く見られ度い女心に變りは有りませんからね。たゞ、ユウトピアの女は解放されてゐる爲めに、良妻賢母教育でいぢめつけられない爲めに、伸々として育つのですよ。そして暢氣に談笑する爲めに何時迄も老ひ込むことが無いのですよ。オホホホホホ、あんまりお喋りして私喉が乾きました。あなたは如何？　あすこにカフエーが有りますから、寄つて行きませう』
カフエーは氣持のいゝ建築で眺望のいゝところに有つた。私達が這入るのを見ると、そこにゐた十四五の少女が、私達の意を受けて私にホツトウヰスキー、女にアイスクリームを持つて來てくれた。ここにはピアノなども有つて客の彈くのに任せるものらしかつた。
元氣相な美少年が何やら彈いてゐた。
私は暫く休息したから、拂ひをして立たうとした。そして先刻の少女を求めたが、今の美少年と共に唄ひ乍ら外へ出て行つたきり歸つて來なかつた。
『こゝは何うしたらいゝでせう。誰もゐないのでせうか？』
と私は不審して訊いた。女は哄笑して
『えゝ、今の人達が外へ行つたから、私達より外、誰もゐないやうですわ。まだ何か欲しいものがおありでしたら、遠慮なく召し上れ』
『ええ、私もう澤山ですけれど、勘定をしやうと思つて』
『勘定つて何のこと？』
『飲食物に對する代價です』
『まあ、そんな物、別に要りはしませんわ。誰が飲んでもいゝのですもの』
『でも』
『だつて、さうぢや有りませんか？　そんならあなたは之まで歩いて來た野や山や道に對して、見て眼を慰めて來た並木や少女の群や川の流れに對して代價を拂ひますか？　拂やしないでせう』
『そりやあ、勿論です。道の代なんか拂ひませんとも、併し食べた物は拂はない譯には參りません。唯では出來ないものですから。人の勞力と資本がかゝつてゐますから』
女『道だつて、あなた唯ぢや出來やしませんよ。ずゐぶん多くの男が道普請の爲めに働くのですよ。その代り良い道路でせ

う。並木だつて、その手入れは容易ぢやないんです。却つてこんな飲食物位拵らへるのは造作もないのですよ』

鈍郎『でも、變ですね。唯で行くのは？　今の少女にチップもやらなかつたし』

女『そんなもの何もいりませんよ。ユウトピアでは日光に照らされても唯です。水を召し上つても唯です。御飯を召し上つても唯です。天下の物は共有なので、誰の物でも無いのです。又誰の物でも有るのです。あなたのお國のやうに一人の人が澤山持つてゐて、他の多くの人々が些しも持つてゐないといふやうなことはないのです。』

鈍郎『はあ、では共產主義なんですね。そこでカフエーの物は皆が唯喰べるとすると、誰がこゝへ品物を運んだり、器物を洗つたりするのです』

女『そりやあ、この邊の人が、こゝにカフエーの有る方が便利ですから、誰かしら代る〲品物を運んで來ます。そんな事を役目のやうにしてゐる人も有るやうです。器物なんか、銘々喰べた人が自分で洗つて行きますよ。そんなことは習慣ですから』

鈍郎『品物は何處で誰がこしらへるのです』

女『それは工場が有りましてね。ちつとも六ケしいことはないのです。唄を唄ひ乍ら、遊戯しながら出來てしまふのです。』

鈍郎『工場は矢張八時間勞働ですか？　職工は青い服を着てゐますか？』

女『いゝえ。そんなに働くものですか？　尤も長く働き度い人は勝手に働いても惡くはないのです。そして働いてる人は當り前の紳士です。立派な着物を着てゐますよ。あなたなんかより、餘つぽど美しい青年ばかりですよ』

鈍郎『では賃銀も多いのでせう。勞働が尊重されてゐるんですね。』

女『賃銀て一體何ですか？』

鈍郎『勞働に對する報酬です。一日五圓とか十圓とか報酬を拂ふのでせう』

女『貨幣ですか？　そんな物はユウトピアには有りやしませんよ。皆の手から手へ渡つて垢じみて、不潔でいけませんもの。勞働は尊重してゐますが、勞働は皆無報酬です。』

鈍郎『それでよく皆が勞働しますね。』

女『病人でなければ、誰もヂッとしてゐるのは厭でせう。勞働は運動法としても亦遊戯法としても、一等適當してゐますからね。そりやあ、仲には、あなたの仰言る通り、怠け者も有りますよ。けれども、それは病氣でせう』

鈍郎『ですが、仕事の種類に依つては皆ないやがりはしませんか？　例へば、おあい屋なんか、誰も志願しないでせう』
女『何故です。便所の始末なんか、皆な何處でも子供の仕事に成つてゐますよ。藥を掛けると臭氣は止つて、ネヂさへ捩れば綺麗に遠くへ洗ひ出されてしまふのですから。さあ、たんと何でも召し上つて、出懸けやうぢやありませんか』
私はまだ腹が減つてゐなかつた。すると女は私に吐き藥を與へた。
女『好きな物があつたら、之で吐いて置いて召し上つたらいゝでせう』
併し私は吐いてまで喰べる氣はしなかつた。その夜は彼女の導くまゝに、此近所の矢張立派な建築の家に泊つた。夕食の時に一人の老翁が食堂へ出て來た。それは女の父であつた。父と私との間にいろ〳〵の話が出た。
老翁『何うです、他國から、いらしつたら、ずゐぶんこゝは變つてゐるでせう』
鈍郎『えゝ、總てが自由のやうですね。私達の國で見る何よりも悲慘な貧乏といふものがないやうですね。人生に取つてこれほど幸福なことは無いでせう。總ての罪惡の根原は貧乏といふことですから』
老翁『あなたは、さうお考へですか？　私はまた貧乏の悲慘なんかは、老衰の悲慘に較べたら、物の數では無いと思ひますよ。老衰してしまふと、喰物も美味いと思ふものは無くなります。音樂もよく聽こえません。散歩に出ても疲れるだけです。若い人達が自由で愉快で有るだけ、それだけ、老人の傍へなぞ寄りつく者は有りません。奉仕してくれる者が無いのです。そして死が眼の前に逼つてゐるのです』
鈍郎『でも貧乏國の老人に較べたら、幸福です。日常の物に事缺く愁ひは無いのですから』
私はこれ以上慰める言葉を持たなかつた。老人は
『五十歩百歩です。老ひては、何んな幸福も皆な悲みに變つてしまふのです。人間に不老不死の仙藥が與へられざる限り、天界から火を盗んで來て人間に授けたプロメシウスのやうな親切な方が私達に永遠の命を與へて下さらざる限り、人間の運命は果敢ない悲しい憐む可きものです。ユウトピアに住んだとて、人の幸福は若い中だけのことです。あゝ、ただ少年の春を惜しむ可し。老いては美衣も美食も美人も音樂も、何にもなりません。それを享樂する力を失つた我々が、快樂事に富むユウトピアに置かれることは、貧乏國に在るよりも却つて一層悲慘なことかも知れません』

と語つて、まづ相に少しばかりの食事を終へた。

翌朝不圖眼覺めると、これは大變、私が昨夜枕元へ脫いで置いた着物が無い。帶から犢鼻褌までも無かつた。いやそればかりでなく彼女の着物も腰卷も誰かに盜まれてしまつたのだ。私は眼覺めたが床を離れるわけに行かなかつた。

鈍郎『大變々々。あなた泥棒が這入りましたよ。』

女『泥棒なんてものはユウトピアには居りませんよ。』

と平氣で又眠つてしまつた。

鈍郎『でも、私達の着物が有りませんもの。何處から這入りやがつたか？ あゝ、その筈だ。戶がすつかり明いてゐるんだもの。昨夜家では戶じまりをしないで寢たもんなんですね。ひどい奴も有つたものだなあ、あなたの腰卷まで持つてかれましたぜ』

女『腰卷までツ』と流石寢坊の彼女も腰卷と聞て眼を覺ました。

『そう。私誰か洗濯しやうと思つて持つて行つたのかと思つたら、それぢやあ、あの貯蓄屋さんの仕業かも知れない』

鈍郎『へえ確かに泥棒ぢやないですかね』

女『そんなもの、ゐませんてば。誰が何を持つて行つても差支へ無いのですもの。お代りの品は幾らでも有るのですから』

鈍郎『なあるほど。暢氣なものだなあ、それで戶ぢまりもしないのだな。だが、お宅の下女は言ひ付けもしないのに洗濯する時には、何もかも持つて行くのですか？』

女『えッ。下女ですつて？ そんなものはユウトピアには有りませんよ。ユウトピアでは皆なお互ひに主人でお互ひに召使ひですよ。特別に下女といふ職業は有りませんよ。ですが、私達の着物を持つて行つたのは、大方例の貯蓄家先生です』

鈍郎『何です。その人は？』

女『病人ですよ。精神病の患者です。自分に不用の物でも何でも手當り次第持つて行つて、穴見たいなところへ貯めて置くのです。又は自分に不必要な位廣い地所を獨占しやうとしたり、掃除も出來ないほど廣い家を獨占しやうとする精神病患者ですよ。そうでも無くつて、誰が人の着ふるしの着物なぞ持つて行くものですか？ 市場へ行きさへすれば新らしい物が幾らも有るのですもの。家だつて地面だつて然うですわ。何處の家でも勝手に這入つて泊つていゝのですからね』

鈍郎『ではユウトピアには巡査さんもゐないでせうね』

女『えゝ、さうですとも。警察だの、裁判所だの、監獄なんか、そんな無用な處はありませんよ。私は歷史の本で見ただけです』

女は素裸で起きて髮を卷き初めた。そして私に

『如何？　あなたもこれから市場へ着物を取りにいらつしやらない？　私御案内いたしませう』

鈍郎『お供してもいゝけれど、何か私の着代へが有りませうか？　何うか枕元まで持つて來て下さい』

女『着代なんか有る物ですか？　私達は貯蓄病患者ぢやありませんもの。使ひもしない物を前から用意して藏つて置くやうなことは有りやしません』

鈍郎『せめて犢鼻褌だけでも有るといゝのだがなあ。弱つたなあ。起きることも出來ない』

女『お寒いの。いくぢが無いわねえ。男のくせに』

鈍郎『いや寒くはない。けれど眞裸ぢや顔洗ひにも行かれないぢや有りませんか？』

女『何故？　裸ぢやいけないの？　蛇だつて蛙だつて、皆裸ぢやありませんか？　私が市場から持つて來て上げてもいゝけれども、あなただつて、お好みといふものが有るだらうと思つてさ』

　私は實際顔洗ひに行くだけでも起きられずにゐた。すると、女は

『では、お父さんの着物を借りて來て上げませうか？　一寸待つてゐらつしやい』

と元氣よく部屋を出て行つた。

そして暫くバタ／＼足音がしたと思ふと

『あなた、早く來て頂戴。大變々々。お父さんが自殺してゐます』

『何？　自殺？』

　私も之には驚いて、寢床を出て、老翁の部屋へ行つて見た。彼は寢臺に仰向けに寢て、藥を飲んで死んでゐた。

　遺言には、二十年前に失戀して以來、慰む物もなく、老ひて生きんより死する幸福を思ふ、と認めてあつた。

　女も流石に聲を振りしぼつて泣いた。『ユウトピアでも死と失戀と老と病とは免れないのかなあ』と思つて、私も泣いた。

　不圖眼が覺めると、私は寢床に横はり友人が傍に附いて笑つてゐた。

『何うだ。理想郷の夢は面白かつたかい？　お氣に入つたらまた見せてやらう』

（終り）

熱海哀話

夏の夜がたり

澤田撫松

一

輕便鐵道が熱海の街へ着いた時は、もうすつかり日が暮れて居た。小さな、まるで電車の樣な客車から降りると、大黑屋と書いた提灯が直ぐ目についた。それは朝出かけに電報を打つて置いたので、私等を迎ひに宿屋の番頭が來て居るのであつた。M君と私は出迎ひの番頭に鞄を渡すと、番頭は先に立つて歩いた。私等はそのあとについて行くと、坂を下つて、御用邸の前を左へ曲つた。其所は大黑屋の裏であつた。三階の三十九番、十二疊の氣持のいゝ座敷へ通されると、顔馴染の番頭が改めて挨拶した。M君も私も浴衣に着替へて浴室に降りた。その間に食事の仕度が出來て、二人が座敷へ歸へつて來ると、女中が膳部を運んで居た。M君は日本酒、私はビールで、猪口とコツプが活動を始めると、聲自慢のM君は三味線なしではおさまらなかつた。私は草臥れて居て早く眠りたかつたから、一時間だけと言ふ條件附で、M君の藝者招聘説に同意した。間もなく座敷へ來たのは、茄子紺に荒い白縞の御召の單衣に、水色に銀糸で浪を織込むだ靜浪織の帶を締めて、紫陽花色の襟が、色の白い顔にしつくりと似つく、溫泉場には珍らしい綺麗な藝者であつた。M君は未がよいので調子づいて、隱藝のありだけをさらけ出した。若い藝者は、餘り藝者づれのして居ないのに似合はない、M君の通に困つた顔もして居なかつた。約束の一時間が過ぎたので外の湯治客にも迷惑になるからと、女中の注意もあつたから、藝者を歸へしてしまつた。M君も大分疲れたと見えて、寢やうと言ひ出したので、私と床を並べて寢た。目が覺めた時は、もう電燈が消えて、枕頭が明るかつたから、障子を開けて廊下へ出ると、水平線の邊がほんのりと赤くなつて居た。見て居る間に赤い色が段々濃厚になつて、赤い雲が、天人の形の樣になつて、日の出前の空を飾つて居た。さうした雲の形も、段々變つて行つて、目映しい光線が流れ出した時には、赤い雲は五彩の霞となつて、東の空に棚引いた。明方の海の景色が、餘りに莊嚴であつたので、M君を起して廊下へ引ぱり出した。M君は

さうな眼で東の方を眺めながら。

『偉大な藝術だね』

と、心から感心して居た。二人は暫らく海面を眺めて居たが、目映い光線が一面に廣がつて、眼を向けて居られなくなつたから、籐の椅子に腰を下して、三階から直ぐ下に見える坪内博士の別莊や、糸川と初川との間に在る海水浴場やらをM君に敎へたりして居る中に、女中が蒲團をあげに來た。

『楠木細工はいかゞ、雁皮紙はいかゞ』

『熱海名産山葵羊羹はいかゞさま、靑取りのポンスはいかゞさま』

早くから宿屋廻りの商人が廊下から一室々々聲をかけて通つて居た。湯に入つて、朝飯をすましてから、間歇泉を見に行つた序に、温泉寺、海藏寺から梅園へ廻つて歸つて來ると、もう晝を過ぎて居た。それから湯へ入つたり、繪はがきを出したりして居る中に四時過ぎになつた。午後五時の輕便で東京へ歸へる豫定であつたから、M君は着物を着替へて、土産物を鞄へ入れたりして居た。私も一緒に歸へるつもりで居たのだが、餘り朝早く起き過ぎた勢でか、頭が痛むで仕方がなかつたから、この上三時間も輕便で揺られたら堪らぬと思つて、もう一晩泊ることにした。M君は、どうしても其の晩歸らねばならぬ用事があつたので、五時の輕便で歸へることにした。一人になると俄に淋しくなつたのと、頭が痛むのとで、床を取らして寢てしまつた。目が覺めると喉が渇いて居たから、枕頭の水差の水をコップに移して飲むと、頭の痛みの治つて居るのに氣がついた。時計を見るとまだ十一時だつたから、一風呂浴びに行つた。浴室の硝子障子が開いて居て、浴槽の中へ月光が差して居た。十五夜に近い月が澄むで居るのを見ると、このまゝ寢てしまうのが惜しかつたから、湯から出ると浴衣に兵兒帶を締めて、宿屋の表を出た。右へ廻ると糸川の土橋があつた。其所を左へ渡つて、濱邊について横磯の方へ歩いて行くと、舞子の濱で見る樣な、枝ぶりの面白い松が二本、海の方へ突き出て居た。その傍に、『宮に似た後姿や春の月』と石に彫つてある金色夜叉の碑があつた。其所に、月を浴びて美しい、若い女が立つて居た。時が時、場所が場所だけに、一寸面喰つたが、まさか戻橋の鬼女でもあるまいと思つたから、傍へ寄ると、先方も驚いた樣子であつた。

『あらツ』

女の顔を見ると、昨夜來た若い藝者であつた。昨夜來た時と同じ衣裝で、手に林檎を三個持つて居た。顔馴染の藝者であつて見ると、默つて居る譯にも行かなかつたから、

『甘さうな物を持つて居るね、一つ貰うよ』

と出し抜けに其の一つを取つた。見事な林檎ではあつたが何だか、字が書いてある樣であつたから、月の光で見ると、南無阿彌陀佛と六字の名號が書いてあつた。首筋に水を注がれた樣な氣がして、身うちの寒さを感じた。尙ほよく見ると、右の方に御二人樣と書いて、左の方に勝子と小さく書いてあつた。

『これはどうしたんだ』

餘り不思議だつたから聞いて見た。

二

英一が輕便鐵道から降りると、襟に初島館と書いた法被を着た宿屋の番頭に荷物を渡して、二人は並んで歩いた。

『十六番の座敷は明いて居るだらうね』

英一が下を向きながら、小さな聲で言ふと、

『御手紙で御坐いましたから、ちやんと明けて置きました』

番頭は元氣のよい聲を出した。英一は思はず四邊を見廻した。それは番頭の言葉を、往來を歩いて居る人が聽きはしないかと心配したのであつた。そして、傍に誰も居なかつたのを見定めて。

『十六番はやつぱりお照の係りだらうね』

番頭の耳のはたで囁いた。

『エ、お照の係りですが、今夜は團體がありますので……』

團體があると言つた番頭の言葉が、英一に取つては容易ならぬことの樣に耳に響いた。苦勞人の番頭は、英一の素振りで胸の中を讀むだ。

『團體の方で忙しからうと思ひますが、何とかしてお伺ひさしませう』

番頭にかう言はれると、顏が火照る樣な氣がして、もう番頭にものを言はれても返辭が出來なかつた。こんな話をして居る中に、初島館の玄關へ着いた。

『御客さま』

番頭が聲をかけると右手の帳場の横から女中が出て來た。

『十六番へ』

番頭が渡す荷物を受取つて、女中は先に立つて段梯子をあがつたが、それはお照ではなかつた、體量十六七貫もありさうな、偉大な體格の持主なるお兼であつた。居心地のよい馴染の十六番へ通されたのであるが、お照が顏を見せないので、英一は落ちついた心持になれなかつた。お兼が荷物を附書院の上へ載せて下へ降りて行つた限り暫らく誰もあがつて來なかつた。英一は外套もぬがないで、火のない火鉢の前で坐つて居ると、廊下

に輕い足音がして、襖が開いた。

『いらつしやい』

敷居の上に兩手を突いて、島田の髷を下げたのはお照であつた。英一は待ち焦れて居たお照の姿を見ると、肩の荷をおろした様な氣がした。

『照ちやん』

英一はお照の名を呼んで、頷いて見せた。お照は襖を後手で閉めると默つて英一の傍へ寄つた。英一はお照の膝の上へ右の手を載せて、淡化粧をした艶なお照の顏を覗くと、膝の上の英一の手を兩手で握りしめて、お照は横を向いた。その時、下でお照を呼んで居た。それを聞くと、お照は身を引いて、袂から赤い絹の布片を出して、紫檀の食卓の上を拭きながら。

『御食事は』

首を斜めに、男の顏を眺めた。

『まだなんだが』

英一は子供が乳母に嬌える様な調子で言ふと、

『では御料理場へ通して參りませう』

お照は立ちあがつて襖の引持に手をかけたが、直ぐには開けないで、英一の方を振りかへつて莞爾笑つた。美しいお照の笑顏を向けられて、英一も笑顏を見せた。下で又お照を呼ぶ聲がした。お照は襖を開けて下へ降りた。英一は掌中の玉を拔かれた様にぼんやりして居た。そこへお兼が火鉢の火を持つて來た。火鉢の中へ火をつぐと、派手な銘仙の丹前に浴衣を重ねたのを持つて來て、

『お召し替へになりませんか』

と英一に聲をかけたが、

『あとで着替へますから、其所へやつておいてください』

と言つたきり、英一はそれを着替へやうとしなかつたから、お兼はいやな顏をして下へ降りて行つた。お照が團體の方の座敷を持つて居るので忙しいと言ふことは、番頭の話で承知して居たが、一寸顏を見せた切りで、あとは厭なお兼が代りをして居るのが不愉快でならなかつた。英一はお照の顏が見たいばつかりに、假病をつかつては熱海へ湯治に來て居たが、お照と親しい口を利くだけで、二人の關係はそれ以上に進むことが出來なかつた。英一が東京に歸へつてからお照のところへ出す手紙には、自分の女房にでも言ふ様なことを書いてやつて居たし、又お照から來る返事にも隨分濃艶なことが書いてあつたのであるが、面と向ふと手紙に書く半分のことも互によう言はなかつた。二人の感情が高潮すると、堅いゝ握手をするのが落ちであつた。英一はかうした單調にはもう滿足することが出來なく

なつて居たから、今一歩進みたいと言ふ情念に悩まされて居た然しどう考へて見ても、自分の力のみでは其所に到達することは不可能だと悲観せずに居られなかつた。こんなことを胸の中に繰りかへして居ると、前の襖が開いた。お照が膳を持つて來たのであつた。

『ほつて置いて濟みません』

持つて來た膳を紫檀の食卓の上へ載せて、英一の傍へ寄ると、

『まあ、まだ外套を着たまゝで居らつしやるの』

お照は英一の肩から外套を取ると、

『サー、着物もお着替へなさいよ』

丹前を持つて後へ廻つた。英一はお照の言ふまゝに着物を着替へて、お照の渡す絞縮緬の兵兒帯を締めると、二十をやつと二つ越したばかりの若い英一に、派手な丹前がしつくりと似合ふのを、お照はうつとりと眺めて居た。

『忙しいのに、此所へ來てゝいゝのかい』

食卓の前へ胡床をかいた英一が聲をかけると、お照は我にかへつて、飯櫃の傍へ周章て坐つた。

『大廣間の方では、これからお酒が出るんですがら、此方の御飯を先にしたのです』

お照は給仕をしながら言つた。英一は默つて食事をした。それが濟むとお照は膳を持つて立たうとした。

『もうこれで今夜は來ないかい』

英一が殘り惜しさうに言ふと、

『イヽエ、お床を取りにまいります』

お照は元氣よく言つて、膳部をさげた。お照の降りて行つたあとで、英一は雜誌を出して讀み始めたが、一二頁讀むと其所へ投げ出して深い溜息をした。大廣間の方で騷いで居るのが聞えると、英一は厭な顏をした。部屋の中を暫らく歩いて居たが、衣桁に掛けてある手拭を取ると上草履をはいて下へ降りて行つた。浴槽につかつて居た英一は、風呂から出ると、自分の座敷へ行くのとは反對の段梯子をあがつて行つた。其所は大廣間の廊下で、その廊下からも自分の座敷へ行かれるのであつた。大廣間には二十人ばかりの男が酒を飲むで居た。藝者が客の間に挾まつて、隨分醜い巫山戯かたをして居た。若い女中等も男にからかはれるのを面白がつて居た。英一がその前を通つて、自分の部屋へ行かうとすると、後から駈けて來る女があつて、英一の軀に突き當ると袖の下を潜つて、十六番の方へ駈けて行つた。

『俺の差した盃をなぜ受けない』

でつぷりと肥つて、頭の禿げた男が、猪口と德利とを兩手に

持つて、酒臭い息を吐きながら女の後から駈けて來た。英一がわざと廊下の中央を歩いたので、女を追ひかけることが出來なかつた。その時、藝者や女中が出て來て、その男を無理やりに元の座敷へ伴れて行つた。英一が自分の座敷へ入ると、電燈が消してあつて眞暗であつた。

『醉拂ひが來ると大變ですから、闇にして置いてくださいね』

英一の體に縋りついたのはお照であつた。

三

英一が目を覺した時は、障子の外がもう明るくなつて居た。ガヤ〳〵人の喋べる聲が聞えた。枕頭の時計を見ると、五時過ぎであつた。一風呂浴びて來やうと思つたが、體がだるくて、起きあがれなかつたから、そのまゝ又眠てしまつた。暫らくうと〳〵としたと思ふと、襖が開いて、人の入つて來る氣配がするので眼を開くと、お照が火鉢に炭をついで居るのであつた。

『照ちやん』

英一が聲をかけると、お照は一寸英一の方を振り向いて直ぐ横を向いた。そして火箸を持つて立ちあがると、

『もつと寢ていらつしやい』

これまでとは違つた親しみのある言葉をかけて出て行つた。

英一はもう少し眠らうと思つて、寢がへりをしたが、お照のことが烈しく腦の中を往來して眠られなかつたから、起きあがつて浴室へ降りて行つた。浴室の入口の鏡の前でお照に逢つた。面と向つて顏を見られると、お照は頬のあたりを紅く染めて下を向いた。英一が言葉をかけやうと思つて居る中に、お照は逃げる樣にして二階へあがつて行つた。湯の中へ入ると誰も入つて居なかつた。湯から出て頭と顏を洗つて座敷へ戻ると、床があげて綺麗に掃除してあつた。英一は片附いた座敷を見廻した。これが宿屋でなかつたらと言ふ樣な氣が起つて、お照のことをそれからそれへ考へた。熱海へ來て、初めてお照に逢つた時は凉しい眼つきと優しい姿に魅せられて、只何と言ふ理由もなしにお照を傍に置いて置きたかつた。それが繼母の傍に居るのが辛さに、女中奉公をして居る薄命なお照の身の上を聞かされるとお照を救つてやらねばならぬ樣な、寧ろ救ふのが自分の義務である樣な氣がした。かうした煩悶を續けて居る中に、自分とお照との間に、何の交渉もないことが、堪えられない程淋しかつた。然しさう言ふ寂寞を破ることは、決して不可能な狀態にはなつて居なかつたのであるが、自分からそんなことをすることが、人格を傷ける樣な氣がして、お照の傍に居る時は毎も仙人か何ぞの樣に澄して居た。かうした虛僞も、今となつては過去

の事實となつて、自分とお照との間に新しい世界が開かれたので、くすぐつたい様な氣味の悪い様な、何とも形容の出來ない嬉しさを感じて居た。こんなことを腦の中に繰り返へして居るところへ、お照は膳を持つて來た。

『やつと、團體のお客を送り出したので、一息つけたわ』

お照の言葉使ひも變つて居た。

『團體のお客はどうしたんだい』

『六時の輕便で東京へ立つたの』

『するとこの並びにはお客は居ないのかい』

『エヽ、隣りも、その隣りも、この並びは皆な明いたの、どんなことを話したつていゝわ』

鏡の前で逢つた時にははにかむだお照とは、まるで別人の様な大膽な口をきくのであつた。

『梅園の梅が丁度見ごろですつてね』

お照は英一の食事がすんでからも下へ降りやうとはしなかつた。

『梅園へ行つて見やうかと思ふが、一人でばつまらんからなあ』

『私も行くわ』

『一緒に行く譯にも行くまい』

『一緒には行かれませんけれど、暫らく家へ行きませんからお客も今日は尠いし、久し振りでお父さん所へ行くと言つてお暇を貰ふわ』

『ぢや何時頃に』

『朝の中の方が私は都合がいゝわ』

英一はお照と約束をして梅園へ行つた。如何なる穢れもとめない様な、純白の梅の花が園内一面に咲いて、園内を横断する谿流の水の音が聞えて居た。朝の中だつたから、園内には人は居なかつた。英一は流に沿つて奥の方へ歩いて行くと、四阿があつた。金色夜叉の芝居をすると、序幕の舞臺に見るのと同じ形であつた。其所へ入つて腰をかけると、貫一とお宮のことが胸に浮んで來た。

『隨分待つたでしやう』

四阿の柱の陰からお照が聲をかけたので、英一は思はず立ちあがつた。そしてお照の手をとつて梅林を歩いた。二人の間にはこれまで言つたことのない會話が取り交はされた末、今度は一週間で歸らねばならぬと言ふ英一の話を聞くと、

『あなたが歸へつてしまつたら、後は淋しいでしやうね』

お照は涙ぐむだ。遠くに鶯が鳴いた。

四

東京へ歸へつた英一は、自分の部屋へ閉籠つて、家中の者にも餘り口をきかなつた。羅紗問屋の次男に生れた英一は、兩親の愛を受けることが薄かつた。兄は跡繼だと言ふので、英一なぞとはまるで格式の違つた人間の樣に大切にされて居たし、弟は末の子だと言ふので寵愛されて居たから、なかに挾つて英一は親の愛を受けるに不利益な地位に立つて居た。それに商人の家に生れて文學に志して居ることが、親に厚遇されない原因の一つを爲して居た。昨年の秋、神經衰弱に罹つて熱海へ湯治に行つたのが病附きになつて、それからは月に一度は口實を設けては熱海へ行つて居た。言ふまでもなくお照と言ふ戀の對象があつたからだ。それが今度行つてからは、離れることの出來ない仲となつたので、正月に行つてまだ間のないのに、二月になるともう熱海へ行く口實を考へて居た。これが兄か弟であつたなら、何でもない問題であつたけれど、家庭で幅のきかない次男の悲しさ、熱海へ湯治に行かねばならぬ口實がないと行かれなかつたのであつた。例に依つて腦が又惡くなつたから熱海へ行きたいと言ふと、

『腦が惡いとか、神經衰弱だとか言ふのは、つまらない文學などをやるからだ。朝から晩まで働いて居れば、神經衰弱なんかに罹つて居る暇がない筈だ。湯治なんかするよりも、ちつと店へ出て兄の手助けでもするがよい。今時の若い奴にも困つたもんだ』

父親は頭から撥附けた。親にかう言はれると何とも言ふことの出來ない英一は、默つて自分の部屋に閉籠つて居た。二月も過ぎ三月も過ぎて、櫻も散つて五月にたつても、英一は一室に閉籠つて書物ばかり讀むで居たので、めつきりと瘠せて、顏の色もよくなかつた。かうなると親身の親だから捨てゝは措かなかつた。英一の方から何にも言はないのに、暫らく湯治に行つてこいと言つて旅費を出してくれた。この時ほど英一は兩親を難有いと思つたことがなかつた。その金を持つと直ぐ熱海へ行つた。初島館へ着いた英一は馴染の番頭を呼んで、自分の座敷へはお照をよこす樣にと賴むだ。すると番頭は揉手をしながら、

『あのう、實はその、何でございます、お照は、もう此方には居りませんので、誠に何でございますが……』

とお照の居ないことを言ひにくく相に語るのであつた。

『ナニお照は居ない？　では何所へ行つたのです』

英一の顏色は變つて居た。番頭は英一とお照の關係をうすう

す知つて居たから、眞實のことを言つてよいのかどうかと、返答にまごついて居たが、どうで知れることだと思つたから秘しだてをしなかつた。

『詳しい譯は存じませんが、親の爲めだとかで藝者になりました。尤も當家でも、お照の樣な女を藝者にするのは可愛さうだと申して、いろ／＼止めて見たのですが、どうしても家の都合でさうならなければならないと申しますので、仕方なしに暇をやりました樣な次第で』

番頭は言譯でもする樣に、怖々しながら喋つて居た。それを聞いた英一は、暫らく默つて居たが、顳顬の邊の神經がぴり／＼と動くと、番頭の方へ膝を進めた。

『藝者になつたのは熱海でか、若しさうなら呼んで貰へないか。イヤ何とかして呼んで貰ひたいのだが、後世だから』

英一はもう恥も外聞も關つては居られなかつた。英一の劍幕に一寸氣を呑まれたが、かうした事柄を扱ふことに經驗のある番頭は驚かなかつた。

『熱海に居りますから、旦那がお呼びになりますなら、悦んで參りませうが、此所へ呼ぶのは可愛さうです。藝者姿でこの家へ出入りするのは當人にとつて辛いでせうから、どうでもお逢ひになりますなら、待合へ御案内いたします。御都合で今からでも宜しうございます』

苦勞人の番頭は、英一の腹の底まで呑込むで居ると言ふ樣な顏をして居た。英一は番頭に伴れられて、糸川邊の嬉野と言ふ待合の離座敷へ通つた。番頭は待合の女將に話をして先へ歸へつてしまつた。英一は八疊の座敷の障子を開けて、海面を眺めて居ると、廊下に絹づれの音がして、襖が靜に開くと、金紗縮緬の羽織を着た藝者姿のお照が、敷居の外で兩手を突いて居た。お照が顏をあげて英一を見ると逃げ出さうとした。番頭がお照の心持をはかり兼ねてお客は英一であることを秘して呼んだのであつた。

『照ちゃん』

英一が呼び止めると、お照は座敷へ駈け込むで、英一の膝の上へ泣き伏した。お照の父親の仙藏は東京でかなりの生活をして居たのだが、商賣に失敗したり女房に死なれたりして、熱海三界まで流れて來た末が、熱海線の鐵道工夫にまで零落た。その當座は女の子を抱へて男世帶を張つて居たのであるが、何にかにつけて不自由であつたから、仲間の者が世話してくれるまゝに後妻を貰ふた。初の中は家庭に浪風も立たなかつたが、娘のお照が妙齡になると、後妻はお照を邪魔者扱ひにして、父親の居ない時は繼子虐めばかりして居た。お照は繼母の虐待に辛

抱が出來ないで、女中奉公に出たのであつた。仙藏は朝起きると辨當を持つて隧道の中へ入るのが毎日の仕事であつた。熱海線の工事は隧道が多いので、工夫の殆ど全部が隧道鑿掘にかゝつて居た。鐵道工事の中で隧道を堀ることが一番難事業であるが、殊に熱海線の隧道工事は難事業中の難事業であつた。それは此邊の地面は湯脈に富むで居るので、餘程上手に堀つて行かぬと湯脈に打當るのだ。仙藏の持場の技師は傲慢なくせに未熟なので、湯脈に打當ることが度々あつた。その度毎に苦しむのは工夫であつた。隧道の中で湯脈を堀ると、其所から熱湯が湧いて出る。その熱湯に足を浸けて長時間働いて居やうものなら、足が腐つてくるのであつた。かうした場所に湧いて出る温泉は强すぎるので、さう言ふ結果を見るのであつた。慣れた工夫は隧道の中で湯が湧いて來ると、もう其所では働かなかつた。そんな話を聞いて居なかつた仙藏は、隧道の中へ湯が湧いて來てもかまはずに働いて居た。技師の千葉と言ふ男に親切氣があつたら注意をしてやればよいものを、見て居ながら知らん顔をして居たので、仙藏は足部に激烈な疼痛を覺えて、動けなくなつた。それを聞いた親しい友達が、かう言ふことになつたのは全く千葉技師の不親切から起つたことだから、足の治るまで給料をやつて貰ひたいと掛合つたが、それは徒勞に歸した。仙藏が寢込むだ翌日、作業場から解傭の通知が來た。仙藏は千葉技師の冷酷を憤つたけれど、どうすることも出來なかつた。冷酷なのは千葉技師ばかりでなかつた。後妻のお兼は、仙藏が病氣になつて職業に離れたのを見ると、自分の着物と仙藏の着物とを持ち出して、姿を匿してしまつた。お照はもう女中奉公をして居ることが出來なかつた。主人に譯を話して、父親の看病に歸つて居た。お照が夜の目も寢ないで介抱しても、仙藏の病氣は惡くなるばかりであつた。醫者の言ふには、今の中入院して、充分手を盡したならば治るかも知れぬが、このまゝにして置いては、兩足とも切斷せねばならぬことになると言ふのであつた。かうなると當人よりもお照の方があせり出した。親を不具者にすることは子として見て居られない。自分で出來ることならどんなことでもするから、父さんの病氣を治してあげたいと言つて、我から進むで藝者に身を賣つた。約束は三百圓と言ふのがあつたが、座敷へ出る着物代とか、披露の費用だとか、いろ／＼の名義で引かれてしまうと、手取り受取つた金は百七十圓ばかしかなかつた。その金で父親を入院さしたが、手術料やら看護婦の費用なぞを入れると、二ケ月しか入院が出來なかつた。それでも全快したのならよいが、何分患部が廣いのと、手術の時期が遲れたのとで、病院であらん限りの手段はとつてくれたが、

足の腐りは止まらなかつた。何事も金次第の病院では、病氣はまだ治らないけれど、金が切れたと言ふので、介抱人もない荒屋へ、釣臺に載せて仙藏を送り歸へした。

『あなたには合す顔がありません、だけど、私の身にもなつてください。私の立場としては、かうした道を歩くより外に思案がなかつたのです。今になつて見ますと、私の苦心もみんな水の泡になつたのですけれど、あの場合、私が身を投げ出すより外には、父さんを救ふ道がなかつたのですもの』

英一の膝に涙を注いだお照は、顔をあげると、苦界に身を沈めた理由を語るのであつた。

『かう言ふことを、あなたに相談しないで、自分獨で決るのは惡いと思ひましたが、御勉強中のあなたに御心配をかけては濟みませんし、どうで私の樣な者があなたのお傍へ行ける譯でもなし、私一人が諦めればそれでいゝんだと思つたんですけれど、私、やつぱり諦められないわ』

お照は袂を顔に當てゝ啜び泣いた。

五

英一は嬉野でお照に逢つてから、晝間は和田礒の仙藏の佗住ひを訪ふて、足の立たない仙藏の介抱をしてやつて居た。そして夜になると嬉野でお照を呼んで居た。仙藏の醫藥や嬉野の拂ひに金が要るので、一ケ月の滯在費として持つて來た金を、十日と經たぬうちに無くしてしまつた。英一は金を落したと言ふ手紙を出して、東京から金を取り寄せたが、それも一週間程のうちに使つてしまつた。もう金を落したとも言へず、病氣だと言つてやれば迎ひにでも來られたら藪蛇だし、何としても金を取り寄せる口實がないのに英一は弱つて居た。宿屋の方は借りても置かれるから心配は要らないが、嬉野へ行くのと、仙藏の醫藥とにはどうしても金が要るので英一は胸を痛めて居た。嬉野へ行く金がなくなつてからは、嬉野へ行くかはりに仙藏の傍にばかり居た。人間の住む住居とは思はれない、まるで豚小屋の樣な穢い六疊一室の家の中で、足の腐つた病人を介抱して居ることを、英一は苦痛とも不愉快とも思はなかつた。戀しいお照の傍に居ることが出來なければ、戀人の親の傍に居ることが切てもの氣休めであつた。

『父さん、藥は此所へ置くよ、夜中にお腹がすいたらお粥もあるし玉子もあるからね、獨で食べられたらお食べよ、又明日の朝くるから、お寢みなさい』

英一が破れた障子を開けて出ると、仙藏は後姿を拜むで居た。

英一は和田礒を出て初川橋を渡ると、そのまゝ宿へ歸へる氣に

なれなかつた。糸川橋へ出て、嬉野の裏を通つて見たが、離座敷の障子が閉めてあつたから、内には誰が居るのか、外からは分らなかつた。其所からお照の居る藝者屋の表を歩いて、入口から内を覗いて見たが、お照の姿は見えなかつた。力のない足どりて宿へ歸へつて來た英一は、風呂浴びて床の中へ入つたが、眼が冴えて眠られなかつた。お照は今頃どうして居るだらうと思ふと、何とも言はれぬ不安の念が胸に浮んで、じつと横になつて居ることが出來なかつたから、床の上に起きあがつた。

『ア、、お照は藝者だ』

金の爲めに自由にされて居る藝者にお照がなつて居るのだと思ふと、金が欲しくなつた。夜の明けるまでにお照の身にどんな變化が起るかも知れぬ。それも金の爲めだ。金が欲しい。金さへあれば、お照を救ふことも、仙藏の病氣を治してやることも出來る。今茲に二千圓の金があれば、お照も藝者をやめさして、仙藏も病院へ入れて、自分とお照とが家庭を作ることも出來ると言ふ樣なことを考へて居ると、英一は東京の家では、二千でも二萬圓でも、或は二十萬圓でも、いざと言へば何時でも出來る樣に思はれた。それを皆兄が相續するのかと思ふと、兄が羨しかつた。父は何時でも、口癖の樣に、俺の家の財産は三人の子に別けることはしない。俺が汗水たしてこしらへた金は兄弟三人して守つてくれねばならぬ。俺が死んでも決して別け取りしやうとは思ふなと言つて居た。さう言ふ事を言ふ時は、毛利元就が三人の子に、矢を一本宛に別ければ直ぐ折れるが三本合すと容易に折れないと言ふ教訓をしたことを引づり出して、お前がたは、此家を相續する兄さんを親とも主人とも思ふて、助けて行かねばならぬぞと次男の自分に言ふのであつた。然し兄には女房が出來て、子供が出來て居るのだから、弟なぞを眼中に置いて居ない。それを如何に弟に生れたからだと言つて、一生兄の犧牲になることは堪えられぬことだと思つた。かうしたことを考へて居る中に夜が明けた。英一は二階から降つて、洗面場へ行かうとすると、帳場の傍の電話室で鈴が鳴つて居た。其所には誰も居なかつたから、受話器を耳に當てると、

『急用があるのですから、河合英一さんを呼んでくださいませんか』

自分の名を呼ぶ者があつた。聲は正しくお照であつたから。

『河合は僕だが、照ちゃんじやないかい』

と相手の名を呼んで見ると、果してお照であつた。

『父が、死にましたから直ぐ來てくださいね……』

お照の聲は顫へて居た。仙藏の病氣は輕くはないが、昨夜は別に變つたこともなかつたのに、俄に死だと言ふ知らせを聞い

て英一は直覺的に或事柄を聯想せずには居られなかつた。座敷へ歸へつて着物を着替へると、和田磯へ駈けつけた。薄暗い六疊の室へあがると、若しやと思つて居たことが事實であつた。仙藏は工夫用の小刀で腹を突いて死で居た。英一とお照は顏を見合したが、二人とも泣くだけの氣力もなかつた。死骸を眺めてぼんやりして居た。そのうち隣家の者が集つて來て、警察へ知らしたり、僧侶を呼びに行つたりしてくれた。警察の檢視は濟むで、死者を棺桶に入れると、黃色の被衣を着た僧侶が來て三十分間程御經を讀むで歸へつた。その晩、英一とお照の二人で、しめやかな通夜をした。翌日形式ばかりの式を濟まして、溫泉寺の墓地へ葬つたのは日暮であつた。寺を出た英一とお照は、その晩、何所を歩いたのか分らなかつたが、夜が明けて、金色夜叉の碑の傍に二人の履物がぬいであつたのが發見された。

六

若い藝者の名は勝子と言ふのであつた。勝子はお照と同じ家の抱へで、大の仲よしであつた。お照が林檎が好きであつたから、二人に手向ける爲め、林檎を海へ流さうとするところであつた。

『お照さんの心中したのが先月の今夜、こんな月夜の晩だつたんです。二人の死骸は三日目の朝、緋縮緬の扱で結へたまゝ和田磯へ打ちあげられたので、漁夫の人達がよつて、比翼塚を建てやうと言つて居たんですが、男の親元から來た人が無理に死體を持つてかへつたものですから、比翼塚は建ちませんでした』

勝子は林檎を一ッ海へ投げた。白い浪が引いて行つた。月は愈々冴えて、勝子の顏が凄いほど白かつた。第二の林檎を投げると、松の樹の根本まで來た浪が、二つに別れて消えた。第三の林檎を投げた時、勝子は後へ倒れかけたが、私の體で支へた。

『どうかしたんか』

勝子の顏を覗くと、眼に淚をためて居た。聞けば、勝子も東京の者で、親の爲めに身を賣つたが、父は今、不治の病に惱むで居るのださうだ。（終り）

八月號小說豫告

■鮫人……谷崎潤一郎

■國際的の話……宮原晃一郎

■題未定……久米正雄

現在の民衆娯樂場としての 淺草公園と千日前

▽現在の民衆娯樂場としての淺艸公園と千日前

長田秀雄

私はこの頃久しく大阪の方へ行かないので千日前が、その後どう云ふ風に發展してきたか、よく知らないが、淺艸公園は、少しくとも月に一度位は必ず行つてみるから、まづ淺艸の方を主として、この一文を草してみる。

近頃の東京には、何の區に行つても必ず一ヶ處か二ヶ處は繁華な街が出來てゐる。そこにはいろんな食物屋があり、活動寫眞、寄席その他の觀物場が一つや二つはある。夜になると、燦爛たる燈火の巷となつて、露店も出れば、物悲しげなバイオリンに合せて唄ふ讀賣りの唱歌もきこえる。そして夕飯後の散歩を樂しむ男女の姿が、人道に充滿してゐる。

これを場所で云つてみたらば、神田で小川町、本郷で三丁目の通り、牛込の神樂坂、麻布の十番等である。これ等は元來市場の變形したものであり、そして現在に於ては區民の爲めに必要な娯樂場となつてゐるのである。見玉へ、大抵この繁華な巷の裏には、藝者屋が軒をならべてゐるから……

我淺艸に至つては、大東京の北方に坐をしめて、各區の市民娯樂場を統率してゐる大元締である。

まづ、仲店から人の波にもまれて、觀音堂の前の廣場に出てみ玉へ。そこには更に佛菩薩の御前と云ふやうな莊嚴な感はない。たゞ朱色の褪めた大堂が、極めて露骨に騷々しく立つてゐるだけである。階段の處には、蟻のやうに數知れぬ老若男女が這上つたり這下りたりしてゐる。仲店との境界を劃る古風な大門には、怪物の顏面のやうな無表情な大提灯が寂として半面を露はしてゐる。もし、人がある定まつた趣味の上から見たならば、きつと、その無統一な俗惡さに閉口して顏をそむけるであろう。

更に歩を轉じて、池の端に出てみ玉へ。活動寫眞館や、女義

太夫席や、玉乘りや劇場が狹い通りをはさんで、その高さを競つてゐる處を、眞に無數の人があふれんばかり流れて行く、私は何時も、此處に立つてみるとき、一體人間は働いて生きてゐるのか、遊んで生きてゐるのか疑はしくなるのである。

諸君、かりにこの人の流を一時せき止めて一々その身元を調べて見玉へ、人間のあらゆる典型を諸君はそこに見て、思はず瞠目駭心するであらう。その內には、不良少年もあり、良家の夫人も子女もある。殺人犯者も、また强盜强姦、その他あらゆる惡事を犯した奴もゐる。狂人もゐる。學者も、紳士も、警官もゐるのである。――淺艸は、これ等の人々の誰にも面白い處なのである。

曾て私は石井漠君に伴はれて、日本館の五層の屋上から、下の通りを眺めた事がある。私たちが人波にもまれて、毒々しい兩側の繪看板を眺めながら通るときとは違つて恐々見下ろすと、下の通りは、一條の汚たい溝のやうに見へた。その溝には、兩側から紅白の大旗が交錯してひるがへり、その底を尺にも滿たぬ人間の群が眞黑に還つてゆくのである。この時私は非常に深刻な印象を得た。そして思はず慄然として眼を閉じたのであつた。

淺艸には藝術も哲學も宗教もない。あるのは露骨な人生の尖端だけである。更に沈滯凝固する事なく常に動いて止まない人生の尖端が露骨に出てゐるだけである。此處にある總ての物は、普通世間に見るより數段烈しい變化の法則に支配されてゐる。叫喚か大笑か――此處には手取り早い極端だけがあつて、ゆるやかな過程がない。一日營々として生の營みにつかれた人間たちは、この淺艸に現はれる時、決して本物を味はふ努力をしやうとは思はない――たゞ刺激を求める。もし、それが神經に徹へる物であるならば、地獄の哀歌もまた喜んで迎へるのである。

私は前に述べ、たとほり千日前を久しく見ないから知らないが、もし推測をゆるされるならば、大阪人の性格から見て、千日前は、更に淺艸より如上の傾向を極端に露はしてゐるであらうと思ふ。東京人は大阪人より萬事に批判的である。從つてある場合にはどうしても保守的となる、さう云つた批判的な處がないだけ、それだけ大阪人は大膽である。私が大阪に住んでゐたのは、もう十年前ではあるが、その頃の千日前は淺艸あたりより遙かに極端な娛樂場であつたやうに記憶する。

私はまた淺艸に歸らう。

十二階の下には魔窟がある。これは天下周知の事實である。然るに、淺艸の警察はこれをどうする事も出來ない。そこでは

法律で禁じたさまざまな事が營まれてゐるにかかわらず巡査は、何も見ないやうな風をして、たゞ、群衆の中を巡回するだけである。

嚴正な法の力も、淺艸に於ては餘程異つた曲線になつて露はれてゐる處に、私は人間性の矛盾が切端(せつぱ)つまつた形で相爭つてゐるのを見る。

淺艸には藝術も哲學も宗敎もない。併かも一歩を轉ずれば、此處にあるすべての物は、直ちに藝術になり宗敎になり哲學になり得るところの物である。

大阪の千日前にはこれを唄ふ一人の詩人もまだ現はれないが、東京の淺艸には、大正の江戸子久保田萬太郎君がある。

私は將來人生の營みがますます繁雜になるに從つて、淺艸と云ふ娯樂場は更に極端な傾向を帶びてくるであろうと思ふ。然り而して、その到達する終極は樂土か地獄か。

語を寄す。淺草の詩人、久保田萬太郎君、徒らにオペラと活動を嫌ふ事なく、現在の淺草をあるがまゝに唄つてくれ玉へ。

私は大分脱線したが、もう投げられた枚數も尠なくなつたから、また、騷々しい巷をぬけて、觀音堂のほとりに戻ろう。

きくならく、大阪千日前は、その昔、千日寺と云ふ刑場であつて、獄門にかけられた囚人の首が、時を分たずころがつてゐたと云ふ話である。今樂隊のマーチの徒らに騷がしく、醉漢の往來織るが如き地にたゝずんで、昔を思ふと、不思儀な氣がするであろう。

わが淺艸を見玉へ。靜かに觀音堂の椽に立つて觀ずれば、梵鐘の響は綿々(めんく)として、六區の活動小屋のマーチの音にかき消されんとして、而かも諸人の耳には、昔ながらの諸行無常の響を傳えず、大慈大悲の觀世音は、默々として、罪と歡樂とを見守つてゐるのである。而かも、數知らぬ善男善女は佛前にぬかづいて、お賽錢(さいせん)を投げこみ、すぐその足で、六區へ走るのである。

何たる不統一ぞ、何たる矛盾ぞ。その不統一と矛盾の上にわが團十郎の銅像が天の一方をぐつと白眼んで立つてゐるのである。

▽地上の樂園

高安月郊

昔は月も草から出て草に入つた中に一つ家の花は美しくても石の枕おそろしかつた處、江戸の始でもまだ「雲淡く地浮く、蕭條たる三十二字が竹林蓬蒿の間に隱映する」中に野僧が茅で

祠堂の漏を補うた處、いつ頃からか櫻を植ゑて、向島より前に花見の名所となつた處、元祿頃でもやつと茶飯に豆腐汁食はせる店が出來て上方にも無いと喜ばれた處、享保頃には鰻金、後志道軒が舌一枚で人を寄せて世を罵つた處、明和頃には堂の後に楊枝店が並んだ中に、柳屋のお藤が笠森のお仙と江戸の最屓を二分した處、安永頃には市之丞の齒磨、源水の獨樂、猩梁之助の品玉、泥鰌太夫の豆藏、竹田の機關、早川の力技、歌之助の輕業、反魂丹の居合拔、珍藏の腹の曲、盲と女の角力などが名物であつた處、寛政頃には水茶屋のおひさが人を惹いて歌麿の筆に上つた處、天保頃には矢場が殖ゑて「妖粧盛飾媚を衒て客を招いた」處、安政頃には喜三郎の活人形が人を驚かした處、狩り野の繪馬を始として嵩谷が鵺退治、容齋が堀川夜討、國芳が一つ家、雪旦が景清、是眞が鬼婆などを掛けて無期の展覽會とした處、維新の際には神佛の上にも打つ大波に鶴が岡の八幡も佛像から宋版の一切經まで賣つたのを長唄うつて托鉢して溜めた金で一人の尼が買つて寄附した處、今は一つ家は何軒になつた。草も人、竹も人、櫻も人、深夜一時間丈足音が斷えるといふ。其外は物の音、人の聲、しかし世を罵る奇人はどこに？浮世繪になる女はどこに？ 楊枝店、矢場は何になつた。輕業は玉乘になり、機關は活動寫眞になり、歌祭文は女義太夫になり、子供狂言は大人の芝居になり、盲と女の角力は滑稽劇になり、琴三味線に合せた河東節は、模洋歌劇になり、活人形は客自身が乘つてまはるメリイ、ゴウ、ラウンドになり、繪馬は畫葉書にもならず、宋版は誰が覗く。

淺草の變遷は時代の推移ばかりで無く、其中に民衆の趣味の進化を表現する、其底に人間の本能の發展を暗示する。

さては今の狀態は昔とはどうであらう。廣重の畫にはならなくなつたが、ルノアの畫にはなるか。惺齋の筆には乘らなくなつたが、靜軒の筆にも足りなくなつたが、シモンスの筆にどうであらう。雷門の跡に立つて仲見世を見渡したら、雪に傘の群を描くより、兩側の灯に影も無い當世姿は複雜な心の色を出さう。本堂に繪馬を仰ぐより、芝居に殘る鳥居風より、活動寫眞の畫看板を見たら、其毒々しさは其中に籠もる氣分を蒸出してゐる感じはしまいか。更に歌劇の一幕を覗いたら、女義太夫より西洋的、といふよりは新鮮な聲調が幼稚な遊戲欲に投合するのではあるまいかとも思はれよう。

所詮昔から塵の樂園、現代の惡趣味に愈塵俗に落ちたと見るならば、それは民衆の傾向も人間の本能も注意せぬのである。ローマの廢墟でも議事堂よりコルシウムの方が月夜の美感ばかりか人間の眞相を想ふのに興が多い樣に、江戸を思はせるのは

聖堂と奥山とどちらが多い。論語の一字に三日かゝつて杜杼で講釋する儒者より、格天井の下で口一杯に屑る親父の方が時代にかゝはらぬ自由を持つてゐた。其口を筆で受けて、見世物や、夜鷹で世を嘲る風來は萬葉振の歌つらねる和學者より平等であつた。天狗の子が河馬になり、蠻の龍が現のアリゲータアになり、機關が活動寫眞になり、河東節が歌劇になつたのも進歩である。大芝居でし古した作が移つて來るのも下落か、向上か。さては未來はどうなるか。趣味は段々平等になる傾がある、享樂は愈々自由を求めつゝある。そこに危機もあるが、民衆に取つては一致の糸口もある。それでは最多くの民衆の寄る處はそれ丈輕視も出來ぬ處、しかしまた今の地は餘りに狹苦しい。寫眞屋、矢場、見世物が密接した明治の中頃から見ると廣くはなつたが、餘地の乏しい東京の人々が息をつくにはまだまだ小い、そしてまだ中流以下に限られてゐる樣である。それは時代と土地の爲であるが、其點は大阪の千日前の方が較平等である。

大阪は古來平民的の處、社會に階級の差が甚しくない丈に、趣味も較平等である。されば千日前も道頓堀と連續して、道頓堀へ行くものは千日前へも寄る、見世物を見るものは芝居も見る。戎橋を渡ると、東へかけて五坐の櫓下一列の茶屋の暖簾、旗、幟は役者の人氣をいつも春にすると、鳥居風より卑しいが、花やかな繪看板、客が入る毎に聲をかける木戸番、草履のまゝで餘所まであるきまはる良家の女、すれちがふ樓取る女、誰の眼にも陵らぬ陽氣な光景であつた。今は大芝居は二坐になつたが、其外の景は同樣、丁字を逆にした眞中を曲ると、法善寺は小いが、それから先は見世物、活人形、足藝、輕業、手品、眼鏡、曲馬、影繪、講釋、落語、俄、新店は西洋水、沸騰水と明治九年に出た大阪繁昌記に書いてある。私の子供の時には藪拔が盛にあつた。獨樂まはし、雀の芝居、活人形は殺伐なのが多かつた。氣味が惡い程人を惹いたものと見える。「其千日が迷惑」と忠兵衛も身ぶるひする。誠に彼所は元祿頃では刑場であつた。五人男の首の並んだ處、島田左近の造首が見世物になつた。八郎兵衛がお妻を殺した處、角の芝居の果太鼓が鳴つてゐるとは、自然の皮肉か、象徴か。

しかも背中合に墓がある。昔の燒場の煙は肴燒く煙になつたが、骨は矢張見世物小屋の後に埋められる。魂は囃子の音に眠られまい。墓參の人は見かはす樂屋の人、道心の歸りには遊戯欲？　宮寺の近くには遊場がある人間の神秘の一端？　を一笑するにも餘りに不調和！

千日前は淺草より濃厚な空氣を感じさせる、深酷な印象を與

へる。それも大阪の市民性の表現か。

近年更に延長して、特別に今宮に一廓が出來た。天王寺に近くなつたが、淺草のほど接近せず、公園と並んで、淺草より、千日前より賑からう。幾層の閣は相對す五重の塔、囃子は一心寺の鉦も消して、十萬堂では今こそ盤になるか。見聞させるのは何々？ 活動寫眞か、新劇か、滑稽劇か、電氣踊か、前は夕日が岡から大江神社、淸水、安居の天神、合邦が辻へかけて、彼岸にでもあるくと、京の東山を祇園淸水へかけてあるく樣な氣がしたが、今は電車一走り、彼岸より此岸、天王寺の七不思議より奇術の種を知りたがらう。

これも大阪の膨脹の一表現である、しかし大阪は今に神戸と續くであらう、それにしては彼所もまだ狹い。更に茶臼山も取入れて、天王寺も抱くがよからう。

千年の古寺に日新の遊！

夏の陣の戰場に民衆の享樂！

自然の技巧は、そこまで行くであらう。そこまで行つてこそ、佛の爲に戰ひながら、子孫まで斑鳩寺の夢にした人も微笑するか。そこまで行つてこそ、小阪から大阪にしながら、二代と續かず落城の煙になつた人も曾呂利の輕口により大笑するか。

しかしまたそこまで行つた所で、唯遊を新にする處では元祿の小袖幕ほどの雅致もあるまい。そこまで行つた所で、唯享樂の人數を多くする處ではギリシヤの民衆劇ほどの美興もあるまい。白石の棧敷にかけて、プロメトイスの獨白に興奮し、アンチゴーンの悲痛に同情した人々はダンヌンチヲの活動寫眞を興がる人々より高尙である。北野に將相町人の差別無く松風を共にした大茶の湯はグラディエタアの惡戰に熱狂する徒より文明である。茶臼山の松蔭に坐して見渡すと、廣い野山までところせきなく、寺々は幕、草庵も酒、淸水、天神の貸坐敷までふさげて唐にも無い繁昌、幕の中には太鼓、鼓、細工、淨瑠璃、流行唄、十種香、連俳、一節切、人形まはし、猩々飮みした貞享の春は既に今より賑な夢であつた。五重の塔より高く登り、空中を飛遊して、天人を現實にする事が出來る日が來ても地の子はどこまでも地の子であらう。天王寺も今宮も千日前も道頓堀も淺草も木挽町も大差の無い樣にならうとも、唯享樂の爲の享樂ではいつまでも塵の樂園であらう。

享樂の極致は藝術である。享樂藝術に入つて、享樂其物を解脫する魂は美に遊んで始めて融解する。

彼低級な享樂も實は魂が遊離しようとして自覺せぬ門前の兒戲である。獨樂まはし、曲乘に面白がるのも生の危機を渡る技巧を見る端である。怪物、片輪を珍らしがるのも空想の實現を見

る一片である。手品、曲馬、猿芝居、俄、影畫、活動寫眞、義太夫、浪花節、樸洋歌劇、一歩づゝ藝術に近づいて來る美與の道行である。されば彼所にも藝術を與へよ。藝術で向上させよ。藝術は鑑賞する方にも趣味の傳統と修養を要するが、それはいつまでも少數ではあるまい。少數から一般的になり、平等になり、そして向上するのが、人類の大勢と認められる、其道行は甚遲々たるものであらう、其間には過去の藝術は危機に瀕する事もあらう、古典的の趣味は塵にまみれる事もあらう。しかし其生命は斷えはしまい。美は形を變へて永久である。王儀の中に育つても、浮世の波風にもまれて美は崇高になる、天才は悲劇を經て無礙自在になる、藝術は自在になつてこそ一切衆生を解脱させる。もう夢に現の苦惱を忘れさせる丈では眞の救で無い。現の悲劇に同情の涙を絞つて、眞相の一致に親和させる所に魂の融解がある。

日本の民族心理には殊に悲劇的な所がある。日本を陽氣な國として遁れて來ようとしたニイチェは浮世繪位で速斷したのか。浮世繪は江戸の醉生時代の影畫に過ぎぬ。浮世繪に描く役者の舞臺を見よ。浮世草子が流行したと同じ時同じ處で淨瑠璃が一層廣く反響したのは何故。小袖幕に花の飛ぶを餘所に枯木をさがした人があつたのは何故。櫻かざして一時代を暮らしたはてに鴨にも哀覺えた人があつたのは何故。桃山の奢を極めた人も泡を飲んで難波の事は夢の夢としたのは何故。夢殿から天壽の國へ飛んだ人も未來記には何と書いた。悲哀の線は箜篌から、笙、篳篥、琴、笛、尺八、三味線と傳はつて、維新の士氣を鼓舞した薩摩琵琶にも、地方趣味の蠻强を誇張する浪花節にも、田舍の村はづれに歌ふ祭文にも矢張悲痛な所がある。そこが日本の民族性一般に合ふのであらう。愈悲痛で愈同情、お弓の子に泣かされ、石童丸に泣かされ、阪東武者も泣く、齋藤太郎左衞門も泣く。涙は昔の作者の狙所であつた。西洋劇にはそれほど泣かされる所は少い。リヤア王が孝女に再會する所、ジヤン、ワルヂヤンが孤兒を尋ねる所には涙を催したが、其外で泣かされた覺えは無い、また彼方の作者は葛藤の激しい所を狙つても、涙のこぼれる所を意とせぬ樣である。それも一は民族心理にも依るのであらう。日本の藝術ほど涙が多いのは殆比類が無からう。趣味に貧しいものでも泣かねば得心せぬ、今でも、未來でも、上下平等に悲痛なほど反響しよう、涙は無差別にする、また安價な涙から、涙になるには餘りに深沈な悲痛になるのが趣味として高上である、人生の味として徹底的である。其底に徹して始めて解脱するのである。涙に洗はれて眞に一致するのである。悲劇的なのは厭世的では無い。浅薄な享樂に滿足

せぬ魂のあこがれである。生の苦と戰ふ重傷のうめきである。死んで始めて生くる眞面目の覺醒の始である、

日本の藝術に一筋の哀調があるのは、美しい風景にも慰められぬ魂が徹底的に自覺しようとする努力の傳統である。そこに民族の特性が潜むと共に、人類普遍の渇望もあらう。されば此哀調は愈發展して、民族的から人類的にせねばならぬ。人類の一致、それが悲哀の底から起る崇高な最後の合唱である。此合唱こそ藝術の極致で、又宗教の歸一する所、或はゴシック風の會堂より、廻廊めぐる木堂より、圓い頭や、黑い長い衣着た人達が說敎より大なる效果があるほどのものになるかも知らぬ。寺と享樂の場と隣になつたのも無意味で無い、堂を中にして、民衆の遊園にするのも不當で無い。魂を遊ばせるのは救ふのである。理にうなづくより情に泣く方が眞を得る。樂園は失はれなかつた。創世期に得た事も無かつたから。若も得るならば未來であらう。しかしそれは遊んで暮らされるエデンでは無い。其の苦を償ふ美の花園である、大自在大平等の藝術の宮である、悲痛な程一致する魂の界である。天上も空になつた、地上の樂園はそこである。

一夕淺草の池畔を通ると、闇を穿つ灯も踊る囃子もよそに、尺八吹いて立つものがあつた。四條の橋の下で坐禪した僧より藝術的と思ふと、それは盲であつた、そして其側に子を負うて立つやつれはてた女がゐた。

樂園の戸はいつ開かれるのであらう。

▽淺草公園と千日前

中村吉藏

民衆娛樂場として、淺草公園には、時代の最も新らしいものが、最も粗つぽい形式で表現されてゐる、卽、善い意味での時代精神のハシリ物が、惡い意味での感覺化された形で、晒らし出されてゐる、そこから深い暗示を受ける事も出來るし、又强いショックをも感ぜしめるものがあるが、その中でも、さすがに時代の最も新らしいもの——將來の新らしい藝術として立派に成長して行くべき活動寫眞だけはさすが淺草が本場になつてゐる、淺草でなくては見られないものがある、少くとも淺草へ行つて、始めてハシリ物が見られる事になつてゐる、最も現在では、さうした藝術的價値のある活動寫眞は、主として外國からの輸入品であつて、限られた數しかない、日本製のものは、俗惡なのが多く、所謂惡い意味での公園式を丸出しにしてゐるのが相不變のやうであるが、假令少數にもせよ、最善の活動寫

眞が、そこで見られるといふ事は、やがて淺草公園の誇りであると云つて善い、所謂、民衆娯樂場が、直に低級な趣味と合一するもののやうに速斷してはならない事を反證する者である、今や活動寫眞界全體に一種の革新氣分が漲り亙ろうとする徴候の候の見えるのも、其由つて來る處は從來淺草公園の一角で封切されつゝあつた外國フヰルムの感化影響が、次第にその効果を現はして來たのだと想はれぬでもない、イヤ慥かに然う云つても大した誤りはないやうである。

要するに淺草公園のやうな、所謂民衆娯樂場では、善いものが悪いものに驅逐される方面もあるには相違ないが、その反對に、悪いものが善いものゝために征服されてゆく現象もある事を見逭がしてはならない、そしてそれはそこに行く民衆の判斷力の働き方如何に左右されるのである、民衆は時に「衆愚」でもあり、又時に「神」でもある。

尙、民衆娯樂場の民衆娯樂場たる特色の一つは、入場料の低廉といふ點にある、淺草などで、稍もすれば入場料を吊り上げようとする傾向が見えるのは、甚だ善くない事である、民衆娯樂の一面の本旨を沒却するものである事を考へなければならぬ。

大阪の淺草たる千日前には大分永く行つて見ないが、聞けば活動寫眞の一つの根城であつた芦邊クラブが、近頃劇場化されるとか云ふ事だ、映畫に對する民衆の興味が、實演の方へ動いて來かかつた一の兆候か何うか知らぬが、民衆娯樂の對象としては、映畫と實演とに必ずしも輕重は附せられまい、イヤ、時間の短い、そして動作の迅速な映畫の方が、一層民衆的であり得るとも云へる、民衆娯樂の提供者たる興行師は一時的の現象に許り氣を奪はれず、もつと長い目で、現象の底の方の流れをも見てゐなければならぬ。

民衆娯樂は映畫許りではない、イヤ、もつと外の方面の事に、いろ／＼云つて見たい事もあるのだが、それは又他日の機會に讓りたいと思ふ。

▽千日前の現狀

坪内士行

七月二日の酷暑の午後、一人ブラリと千日前の觀察に出かけた。

大阪と云ふ都には非常に矛盾したことが多い。いろ／＼の點に於て米國の紐育に似てゐるが、(交通機關其他の點も似てゐるか、などゝ皮肉を云つてはいけない) その中にも似てゐるのは矛盾撞着の多い點である。一二の例を擧げやうなら、日本中で最

も金持の集つてゐる都でありながら貧乏人が非常に多い。物質的には驚くべき先覺者でありながら、精神的には憐れな後輩が多い。最も平民的な都の筈であるが、そこには依然輕蔑をうけつゝある新平民階級が嚴存して、多くの衝突や騷動の源をなしてゐる。中座が純日本式の白木造りの大劇場に改築はされながら、唯一つの洋式劇場さへもない。新劇運動の誕生地でありながら、一つとして新劇らしい新劇の存在をも許さない。日本唯一の人形淨瑠璃劇場文樂座の繁盛と日本唯一の(と稱せられる)歌劇寶塚新温泉場の大景氣をも矛盾の一つに數へれば數へられる。

兎に角、東京よりも大阪の方が生存競爭が激しい事は事實である。大阪の者は「東京は遊民の住む都である。宮廷を圍繞する華族とか官吏とか學校敎師とかは一種の遊民だ」と云ふ。遊民が多いか多くないかは知らぬが、大阪人の方が血眼であり、現世的であり、物質的であるのは事實である。

民衆娯樂場を如何にすべきか、と云ふことは、血眼な現世的な、物質的な都に於てこそ一段と研究さるべき問題で、その意味では、東京の淺草を研究する以上の注意と努力が大阪千日前に向けられて然るべきである。淺草公園の方は澤山研究の發表があらうと思ひ、一切云はずに、千日前を紹介、批判したいと思つて、觀察に出かけたのである。

御承知の通り大阪の演藝興行地の中心は三つに別れてゐる。有名な道頓堀、これが大阪の最高等な遊興の衢で、大劇場が並び立つてゐる。その次が千日前、此ノ兩者は僅に二三丁しか離れてゐないが、もう一つ可成り遠く距つて天王寺公園の傍に新世界と云ふ遊樂地があつて、その何れも南區の中に在り、大阪市民行樂の三大中心をなしてゐる。新世界も民衆娯樂場として數へられるべき事無論であるが、それは他日の事として、今は千日前を主題として考へて見ると、

まづ、千日前は淺草の所謂六區と違つて公園の中にあるのではない。その點では新世界の方が淺草に似てゐるが、然し新世界は土地もやゝ市外れ近くでもあり、地方の人を見物の中堅としてゐるので、一般大阪人は道頓堀の大劇場の表を通つて、その美々しき高等藝術的(?)な繪看板を見るだけで、一部の快感をえてから、素通りをして千日前へ拔け、そこに安價な實際的な慰安を求めるのである。

千日前には見世物小屋の數はさう澤山はない。道頓堀のすぐ裏手にある一流の寄席二軒は別として、太左衛門橋を渡つて千日前へ行く通りに、左側にまづ二軒、一つは三友倶樂部と稱して落語の定席、木戸は特等が三十錢の並が二十五錢、この差僅に

五錢で、中錢はない。大分デモクラシー振りを發揮してゐる。その少し向ふの同じ側に女義太夫修行場と金看板をうつた物々しい建物がある。これは通りが三十七錢と妙にキザんだ値をつけてある。さう二つは本當の千日前の部に入らないのであらうが、それから左側の三階建の牛肉屋と右側の共同便所とを後にして、電車通りを向ふへ越すと、そこにズラリと見世物小屋が並んでゐる。然し、どう云ふものか右側（西側だつせ）には、とつつきの樂天地を筆頭に、敷島倶樂部と彌生座の三つしかない。左側には角が芦邊劇場、次に常盤座、諸藝大會場、天活倶樂部、浪花節競技會、南座、と、六つある。即、數にしたら九つ乃至十一しかない千日前。

そこで、民衆娯樂場として第一に研究さるべきは、それ等がどんな種類の演藝で、又、特に、それに要する費用はどれ程であるかにあると思ふので、以上九つの演藝の種類と、ほどの(七月二日所見の)定價とを掲げて見る。

一　南座、京都の南座は大劇場であるが、これは頗る悲しむべき陋屋で、出し物は浪花節である。木戸錢は十五錢であるが、ふるつて居るのはその傍に「女、十錢」としてある事である。大人と小兒と、又は軍人や學生の入場料を區別してゐる處はザラに見るし、坊主や敎師や乞食さんは半値で見せますよ、とでもするなら分つてゐるが、女を五錢安くした理由はどこにあらう。田淵豐吉君あたりから抗議が申込まれてもいゝ所である。もつとも平塚雷鳥氏もあの南座へ行かれる時はなからうから、まあ無事に濟ましておからうが、それで二階へ上れば五錢増し、上場とか云ふのへ通つても五錢増しである。民衆と云ふものは勝手な時には四海同胞、四民平等、階級無視を叫ぶ者であるが、必らず何時か、又、何處かで矢張り階級や等差をつけたがるものである事を知らねばならぬ。神や佛にも級差がある。まして人間に於てをや。理論上のデモクラシーは到底實行上のデモクラシーと同じものではありえない。

いや、とんだ空氣焔になつたが、その木戸の立札に「夜はじまつてあります」と書いてあつたのが大變嬉しかつた。廻らぬ筆の後や先、と云ふ心を云はずして語つてゐるヨタ〳〵した文言も民衆の叫びの一種であらうか。

二　浪花節競技會、何座とか名があるのであらうが、目につかなかつた。これは今は女流大會と銘うつて、安格子の寫眞のやうなのがズラリと廿枚程もかけられてあるが、その又値段を女らしく小さく區切つた事！　通りは廿七錢であるが、棧敷は三十錢、二階は二十錢、お茶は五錢、蒲團は一錢、下足代一錢。ちやんと表に書いておくだけ親切である。西洋を歩いてゐる間

にいろ／＼便利な事にも出會つたが、我々如き貧乏書生にとつては――上等の料理屋へ這入る時には大威張りで這入りえる時だけであるから別として――安い、例へばロンドンの中流以下の料理店の入口に、その日の献立と定價表が出てゐるのは非常に難有く、食ひながら財布を探つたり、勘定となつて耻をかゝないで濟む。親切でもあり、民衆的でもあつて嬉しかつたが、此女流大會もその明細書を掲げてある處は氣に入つた。あれで小格子式の寫眞が出てゐなければ僕も一寸覘く氣になつたかも知れない。

三　天活倶樂部、これは帝國キネマ會社直營と名乘りを上げてゐる。日本製活動寫眞映寫の小屋で、特等が五十錢、並が三十錢。

四　諸藝大會場、は、名は大會場であるが、恐らく千日前の小屋の中で最も小さな寄席であらう。木戸錢も十錢で一番安い。但し、こんな處にも階級制度はあつて、二階を二錢増しの席にしてゐる。中へ這入つて見ると、古ぼけた長方形の建物で、頗る非美術的ではあつたが、それが殆んどロンドンのレースター辻の横町にある活動の小屋や、ヴェニス市で見た活動の小屋や、又、本で見る米國中央部や西部の小劇場そつくりだつたのが嬉しかつた。舞臺は丁度普通の寄席位の幅なり奥ゆきであつて、見物席は幅三間、奥ゆき六七間の長方形、無論これは全部椅子である。木戸の處には暖簾が二つ振ら下つてゐるだけで、露骨な階子をトン／＼と上ると、狹苦しい六疊餘りの一室が特別室となつてゐる（らしい）。左側は二尺ばかりのタヽキを距てゝ高い煉瓦塀で、雨の時には空から降り下ろす雨の雫が見物の頭へ振りかゝりさうである。さうしたバガボンドの始めた小劇場とも思はれる此一室は、たつた十錢の金で數時間を愉快に過さうと云ふ無邪氣な可憐な男――女は殆ど見受けなかつた――達が一杯につまつてゐる。僕は其煉瓦塀の所に立ちながら、何となく親しい氣持になつて、例へば屋臺店で鮨の立食ひをしたり、縄暖簾で矢大臣をきめ込みながら浮世話を聞くやうな心持で客席や舞臺を見廻はした。舞臺には鬘を冠つた女形が一人座つて、ヨレ／＼になつた室内の背景幕の前で何か云つてゐる。下手にはお約束の格子戸が立つてゐる。距離が近くつても云ふ事は少しも聞えないが、その女がいかにも自然で、又、いかにも周圍とよく調和した束ね髪の裏店の神さん式なのに感心して、近づいてよく見たら、それは本當の女が演じてゐるのであつた。程なくその亭主に扮した男、金の催促に來た半纏姿の若者、それから其の裏店の娘などが舞臺に現れた。娘も勿論不斷着のまゝで、白粉も何もつけてゐない。技巧を超越した一

座である。筋は何でも百圓の借金を返すか娘を妾によこすかと手詰の談判になる所を、通りがゝつた坊主の智惠で助かると云ふのらしいが、僕が何よりも興味を感じたのは、見物と舞臺の氣分があまりよく調和して、新らしく英語でインチメート・セヤターなどゝ云ふ所をそつくり具體的に、完全に表現してゐる點と、俳優(?)が思ひきり人を食つて、殆ど悟りに近い洒々落々の態度で、何のミセ氣もアテ氣もなく、農夫が田を耕し、さて一服して世間話をする風の餘裕のあつた事である。彼等の樂屋らしい處には二尺四方位の窓一つあつて、其處には不斷着だか、舞臺衣裳だか分らぬ襦袢や帶が干してあるのが見える。多分樂屋は四疊敷位しかないのであらう。殊によつたら舞臺に出てゐる男や女は夫婦や親子でもあらう。さうした安樂(?)な一座、勿論そこにも他人の想像を許さぬ苦勞や競爭や暗鬪があるのではあらうが、少くとも見た所平安な、死なうと生きようと、褒められやうと叱られやうと、「俺は俺のする事をしてゐるのだ」と、旅に死んだ芭蕉の心持に似た俳味のあるのが羨しい。昔シェークスピヤがストラトホードで見た旅役者や、モリエールが幼時祖父に連れられて見た伊太利役者も畢竟はかうしたインチメートな、悟つた風の、肩のこらぬ物であつたのではあるまいか、などゝも考へた。

仁輪加めいた安藝を見て妙にセンチメンタルになつた僕も、つまりはお大名がおでんを珍重したと同じくたまにそんな所へ行つたから物珍らしさに嬉んだのかも知れないが、見る連中の無邪氣な喜び顔を見ると、あながち僕一人のドグマでもないらしい。少くとも此處の見物の顔には中座や浪花座に見る反感を呼起す風の表情や、歌劇や活動を見てゐる厭味たつぷりのハイカラ臭味がない。天眞爛漫である。之等を善導するこそ第一の仕事ではなからうかと思つた。一面から見ると精神的に活動してゐない大阪市民の代表の如き觀があつた。

五　常盤座、これは日活の寫眞館で、民衆(?)渇仰の的となつてゐる目玉の松の助の映畫が客を呼んでゐる。加へては中々いゝ西洋物をも寫す。値段は一等が七十錢、二等が四十錢である。

六　芦邊劇場、これが芦邊倶樂部と云つてゐた頃にも、よく新派の芝居がかゝつてゐたやうにも覺えるが、一度も這入つた事はなかつた。今は矢張り帝國キネマ會社の經營になつて、西洋物の活動と新派の實演をやつてゐる。特等が一圓、一等が七十錢、二等が四十錢。館も相應な大きさの西洋造りであるが、舊劇場そつくりの本花道が向ふ揚幕からズツトとかけてあるのが氣になる。どんな新派だか見たいと思つて這入つたが、生憎活

動の所であつたので、すぐ出てしまつた。

さて、西側の方は、

一　彌生座、これは一番端にあつて、あまりケバ／＼しい人氣のある座ではなささうであるが、新派の實演をやつてゐる。並が二十錢に、特座が四十錢。

二　敷島倶樂部、道頓堀にある朝日座と相對して大阪に於ける西洋物專門のたゞ二つの活動寫眞小屋で、僕もよく見物に行つたものであるが、矢張り場所柄に準じて朝日座よりずつと品が落ちる。寫眞も下品な顔の者の出るのが多いし、辯士も頗る下等、座そのものも猶太人町か支那町を連想させる下等さである。入場料は今は特等が八十錢、一等六十錢、二等が四十錢。

三　樂天地、樂天地こそ千日前の横綱であるばかりでなく、恐らく大阪に於ける娯樂場の日下開山であらう。千日前を論ずるのは取りも直さず樂天地を論ずるものであると云つても差支えない程幅をきかしてゐる。試みに樂天地の木戸を一度這入つて、その中に見、又は行はれてゐる物をざつと擧げると、

新派劇の實演、歌劇、西洋活動寫眞、落語等の諸演藝、仁輪加、食堂、カフエー、鮨、丼、ビヤホール、玉つき、メリーゴーラウンド、水族館、玉ころがし、射的、賣店、瞬間寫眞、スケート、眺望臺、便所も澤山ある。

僕の見た時の新派は都築一派、歌劇は石井漠と澤モリノの一行で、一行中の一人が「大阪では東京で四五年前にやつた物をやると受けるから、當分そのお古を繰返してゐれば差支へない」と云つてゐた通り、當分東京でのお古が大阪へ持ち込まれる事であらう。何にしても金曜日と云ふ間の日にも相應の人で、流石に落語や仁輪加の人だかりは少なかつたが、新派と歌劇は交代に殆ど滿員の人を呼んでゐた。それも其の筈が、樂天地は以上の諸藝や諸設備があるに拘らず、入場料（觀覽料もこめ）が一等一圓、二等五十錢である、場内に自然を取り入れた點の少いのは都會の眞中であるから止むをえないが、その缺點を除けば、まづ／＼最も安價な半日の遊樂地であるに相違ない。

以上は僕が一二時間の駈け足で見て廻つた千日前の見物記なり感想なりである。

ところで振返つて、民衆娯樂場としての千日前ははたしてどうであらうか、完全は期せられぬとしても、他の民衆娯樂場と比してどうであらうか、又將來どうなつて欲しいと望むか、を考へて見る。

民衆藝術の論はやかましく論ぜられるが、民衆を相手にする仕事に對して論を先にするのは愚である。それをなし得るの

はたゞ教育家のみであるが、その教育家とても宗教家とても、一般民衆を相手にする時には實賤躬行を第一としなければならぬ程であるから、まして娯樂についての法文や理想をいくら筆やロで云つたとておつつかぬ。丁度劇と云ふものはいくら名作を書いても實演した上でなければ生命がないと同じで、成否は別問題として、實行して見るに限る。紙上で論じたゞけでは死物なのである。

が、死物であつても實行の力のない現在の我々には、先づ論ずるより外に方法はないが、民衆の娯樂の要件は一に通俗的であるべき事、二に價の安い事、三に幾分づゝでも精神慰安、精神向上に資する藝術である事。この三つさへ備つてゐれば一と通り民衆娯樂の理想に叶つた物である。所が、民衆藝術論者の一部がひどく推賞する獨逸あたりでも、表面的には立派な劇を安く一般市人に見せる企てもあり、理想的らしい民衆娯樂場もあるやうに見えてゐるが、それも畢竟は一部の、或は一時の企てを仰々しく論じ上げ書き立てる場合が多いので、實際に於ては到底一般的ではありえない。英國でもロンドンのヴィクトリヤ・ホールなどで一代の名優や、古今の名作を安く見せる企てが、常に行はれてゐて、なるほど人聞きはいゝが、然し、大概は一時的、又は、二流三流の者の巧みならぬ藝を見せられる場合が多い。紐育のワシントン・スクェヤー・プレヤースなども今では大分最初の見當とは行く道が違つて來てゐるやうに思ふ。

やはり所謂民衆娯樂の地と云ふと巴里のモンマルトや、紐育近くのコーネー島や、ロンドンに折々行はれるハムステッド・ヒースの縁日などに墮ちるので、廣く、永く、力強く民衆教化の務めをなしつゝ慰める娯樂を續け行く事は不可能に近い難事業に相違ない。大阪の松竹會社が「さかえ日」とか名づけて、第一流の劇場へ特に限つた日に勞働者を招待して見物させたなどゝと云ふ事は、(松竹の廣告用なのか、或は政府が勞働者の勃發を防ぐ鎭撫的行動であつたのかは別問題として)あれが外國で行はれた事で日本に傳聞されたなら、「某國の劇場主はかくの如き美擧をなす、」と文士までも一緒になつて賞讃した快擧ではあるが、あれが長續きどころか、繰返されもしない所を見ても、本當に高尙な理想的民衆娯樂の呈供は將來中々望まれない事を感じる。

が、先づ、通俗で、安くて、少しいゝ、と云ふ當座の理想に叶ふものとしては、千日前はまあ〳〵上の部に位すると思ふ。樂天地内の諸演藝が代表する如く、新派と、活動と、歌劇と、仁輪加と、落語と、それに義太夫と浪花節と、それで代價はまづ一圓を最高として、十錢を最低としてゐて、今の大阪市人には

さう大した高價なものでもない。それに今のところさう俗惡な趣味の物と云ふでも無い。

　それでは大阪人は千日前の現狀で滿足すべきか、あれで天下泰平と云つてゐられるだらうかと云ふに、どうして〳〵、今の千日前は、謂はゞ赤ん坊を盥水の中で遊ばせてゐるやうなものである。大阪人があれで滿足してゐたら大阪人は腐つてしまう。興行師にしても當局者にしても、今の小康に油斷してゐたら押倒される時が來よう。今の千日前は少しの活氣もない。眠つてゐる、盥水は生ぬるくて、蟲がわきさうになつてゐる。將來の國家的大運動の第一烽火は大阪中の島の中央公會堂に擧げられるだらう、とさる先覺者が云つたほど民衆の氣が動き、當局者もその氣勢を少しでも弱めん爲めに無理算段をしてまで大大阪（グレート）の計畫を立てゝ、進み動いてやまない大阪附近の民衆を宥めんとしてゐる時に、千日前が今の千日前でゐられた義理ではない。近く新世界が土地賣渡しの問題でゴタ〳〵してゐるが、その話は娯樂問題に關係はないとしても、樂天地が近々改善されるのは、やがて千日前全體が動搖すべき表象たる桐の一葉ではあるまいか。千日前土地株式會社、帝國キネマ株式會社、其等の諸策士は今何を目錄見つゝあるか知らぬが、東京よりも四五年乃至十年も遲れてゐると云ふ大阪市人も何時が日までも舊阿蒙ではゐないかも知れない。米國文明の中心はボストンから紐育へ移つたのである。いや、紐育から又シカゴへ移つたのである。さうした物質的都市に起る精神的要求が激しくなつた時に、當局者なり興行師は、千日前があるからいゝ、大阪を大きくしてやつたからいゝ、と云つて濟ましてゐられやうか。

　千日前は通俗でもあり、惡くはなく、安價でもある。然しそこに望むものは動きである。改革である。新進の氣である。千日前を通る數千の人々の財布と頭腦は今は漣のやうな安靜狀態にあるが、それに見ても今の千日前の眠つてゐる事が分る。民衆に與へる娯樂は民衆より十年廿年と進んでゐてはならない、飽くまで通俗であるべきではあるが、同時に又、必らず常に一二歩は先んじてゐねばならない。眠つた民衆に引添ふ眠つた興行師、それは夏の最中だけはよからう。來らん秋の用意をすべきが民衆に對しても親切であり、自己に對しても賢明なやり方である。

　東京よりも遙に競爭の激しい大阪、東京よりも遙に民衆の勢力のあるらしい大阪、その大阪の民衆娯樂たる千日前が眠つてゐるのも大阪の矛盾の一つと云へば云へぬでもないが、悲しい滑稽である。築港あたりや、中の島や其他に新に民衆娯樂場の

増設も當然行はるべきであるが、千日前も活眼を開いて、紐育ヒポドロームの異大、巴里モンマルト邊の美術的裝飾、倫敦バライエチーの新工夫等の清新な氣を通はせる心得がないと腐つてしまふ。遊民の腐つたのは「腐つても鯛」と威張れやうが、血眼の鯡や鮭の腐つたのは鼻も目も當てられまい。

▽淺草公園の印象

室生犀星

淺草は行きつけると妙に行きたくなるところであるが、行かないでゐると、べつに行きたく思はない。ことに今の公園は活動寫眞以外には私にはあまり激しい娯樂に唆かされることがない。

ボール紙と白粉と埃と蓐の匂ひのする歌劇や、子供對手の花屋敷、玉乘、さういふものには飽きてしまつたし、すこしも進歩してもない。むかしながらな陳套さと黴臭さで、よどんでゐるやうな氣がする。しかしその古くさい玉乘りなども無くなつてしまつては猶淋しい氣がするから、無いよりある方がいい。

淺草の食べものは鯖のやうな色や、鮪(まぐろ)のやうな濃い紅さで充たされてゐる。それと同じく建築や看板や草花や女らも、あくどい鯖色と鮪色をもつてゐる。暑くるしい肉感でゴッタ返してゐるのだ。妙にあそこにある池の水にしろ柳にしろ欅にしろ、みな埃ばんで、ぼんやりと妙に水などがどろんとしてゐる。玉乘り娘の丸こい腰つきなど、ふしぎに映つてゐるやうな氣がする。をりをり浮ぶ肥えくさつた緋や藍の鯉までが、ぶくぶくと肥えた足のやうにみえる。

食べものの店と店とが食つ付いてゐて、夏は暑さうだ。それに晩になると電車通りの天ぷら、すしの屋臺はまるで堀立小屋のやうで、ときには太古のやうな氣がする。暗い靄でもかかつた晩、あそこの暖簾で黒ずんだ通りの惡どい變な臭氣は、野蠻な、ゴッタ返した氣もちをもつてゐる。そして屋臺をとりまく風來犬の數はどうであらう。一つづつの屋臺に一疋づつぶらついてゐるのだ。そこの暖簾を潜つて出たり入つたりする大きな口、いつ見たのであるか、今でもはつきりとそれが記憶に殘つてゐる。

「活動寫眞」は街のなかで見るよりも、それ自身がふくむあやしい空氣のせいもあらうが、やはり淺草で見た方がいい氣もちがする。最も封きりをする關係もあるが……ただ此の活動寫眞

だけが今の私を淺草と結びつけるのだ。

このごろのやうな暑い日でも、館の特等席の藍ばんだ變にうすくらがりのなかで、扇子をつかひながら、青白い陰影のゆききする外國の市街の一部や、妙にふしぎな想像を誘致する建築などを眺めてゐると、暑さもかんじない。その筋がくだらないものであつても、名もない女優や、片田舍の三角形の質素な家々や、白くよく整理された道路を見てゐてもいい氣もちがする。表情やシインなどに私の興味がさそはれるのだ。

活劇などによく女が誘拐されるシインがある。あんなときの身悶えが實に自然でいい。女優が自分でも氣のつかないところで、さすがに女らしくスカートに氣をとられたり、思はず知らず髮を撫でたりするところがある。

ことにあの肥大な腰部や、長い太い足、肩などにある獅子のやうな立派な肉塊、可愛らしい熟した棗のやうな少さい女靴、さういふところにはとても日本で見られないものがある。活動をいくら見てゐてもいい。しかし街などに外國人に會つても、さうじろじろ見られるものではない。

それゆゑ私は活動を見てかへつたあとには色々の澤山の西洋人にあつたやうな氣がする。それが群衆のなかに雜つて歩いてゐるやうな氣さへするのだ。

それから館前の群衆についてであるが、恐らく日本であの位ゐ短かい間であるが、人通りの込んだところはあるまいと思ふ。あの通りでまだ殺人犯などが起らないのが不思儀なくらゐである。實際、あの通りで最も巧みにそれが實行されるやうに群衆が混んでゐるのだ。みな一樣にぼんやりと繪看板に見恍れるところは、まるで魚釣りの水盤みたいな氣がする。

概して淺草が亂雜で娯樂機關が非常に低級であるに拘はらず、何となく犯罪的興趣と、戯曲的場面とを持つてゐることは否まれない。それにまた私自らが持つ烈しい空想が、どうやら公園の一部にその場面を選びたいやうな氣がするのである。それほど、淺草公園そのものが既に空想的であるともいへる。

夏は非常な大仕掛な水泳場がほしいやうな氣がする。白い石で疊みあげた途方もない大きな水泳場がほしいやうな氣がする。觀音樣と池との間の樹立のなかに。――木立に埋もれたやうな位置に。

女優の生活などすこしも知らない私は、どういふ生活をしてゐるものであるかわからないが、なかには、自働車のなかで夜明しをしたり、夜中に盛り上るやうに乘り合して、どこが街は

ずれの靜かな旅館にしけ込むなどといふことを聞いたこともある。さういふ、私どもの知ることのできないヒステリックな歡樂や、想像することのできない放縱な生活があるやうにも思へる。現に淺草へゆくと、妙にゴム草履をはいたべらべらした着物をきた色の白い不良少年を見かけることもある。さういふ少年らはきつと活動の女給などと、知り合ひらしく、よく冗談ぐちをきいてゐるのををりをり私は見かけた。

このごろでは餘りカツフエや酒場をあるかないが、いまから十年前本鄕の根津に下宿してゐた家におなつといふ娘がゐた。まだ十四五ではあつたが、小白い色で少しばかりのそばかすがあつたが、目がきらきらしてちよいと美しかつた。

そのときから三年ほどあとに、よか樓へゆくと偶然にそのおなつに會つた。あそこはエプロンを掛けさせないので、娘そのままのおなつで、既うこどもらしくない程よい發育を見せて私にあいさつをした。そのとき水菓子か何かをもつてきてくれた。何んでもよか樓で一番古參だといはれるほど永くゐたが、二三年さきから姿がきえた。――ところが去年の夏、廣小路の人込みのなかで微笑みながら私にあいさつをする細く瘠せた女のひとがゐた。はじめは見ちがへたが疑ひもなくおなつであつた。

あれから間もなく結婚したことや、子供ができたことを立話しをしてゐたが、よか樓の二階で見たときのやうな落ちついた頂い花みたいな艷々しさがいつの間にか擦り減らされて、瘠せた苦勞してゐるらしい女になつてみえた。こんなに瘠せるものかと、わかれたあとでも變にいたましいやうな氣がした。――寡聞な私にさへこんな小さな挿話があるほどだから、食物と酒と女との巷である公園の内部には、とても掻き渫へない浮き沈みする女があるかわからない。テエブルからテエブルの間を飛ぶ可憐なよく肥えた蝶々どもも、家で飼ふと見るかげもなく瘠せおとろへてしまふやうな氣がする。やはり、あそこで眺めるものらしい氣がするのだ。

十二階下の巢窟も一時はすつかり途絶えたやうであつたが、ふしぎにも繪葉書屋や造花屋、煙草屋とも小間物屋ともつかない怪しげな店ができて、そこから影のやうな女が出たり入つたりしてゐたが、もう此頃になつてから、とぐろを卷いたやうな小路と小路、あるとあらゆる裏町が變な、うすくらいやうな家に何者かが潛んでゐるとのことであつた。誰でも實際はさうひどくなくとも、あの界隈の溝や下水や、

ツチ箱のやうな長屋や支那料理やおでん屋などをみると、ふしぎに其處にこの都會の底の底を溜めたをりがあるやうな氣がする。夜も晝もない靑白い夢や、季節はずれの虫の音、またはどこからどう掘り出して來るかとも思はれる十六七の、やつと肉づきが堅まつてひと息ついたやうに思はれる娘が、ふらふらと小路や裏通りから白い犬のやうに出てくるのだ。それがみな半分田舍めいて半分都會めいた姿で、鍍金の紅い指輪や八十錢ほどの半襟やちかちか光る貝細工の束髮ピンなどでからだをかためてゐる。それが三月か四月のあひだに何處から何處へゆくのか、朝鮮か支那へでも行つたやうに姿を漸次に搔き消してしまふのだ。

どういふ都會にも底があるものである。人力以上にそれらが必然に固められるのだ。とうてい普通の取締をするよりも、もつと健康的に理想的なものにしたらいいと思ふ。人間のすること、お互ひ人間の貪りあふものを最つとよい方法でしたらいいと思ふ。東京にはひどい孤獨に惱まされてゐる實に非常な群衆がゐるのだから。

四五年前のある晩、私は觀音裏の木立のしげみで、友だちと醉つて歩いてゐたとき、うしろから呼びとめられて、繪葉書のやうなものを目の前につきつけられたことがあつた。あとで考へると、その男は私や友人の醉つてゐることを見すかして遣つてきたものらしかつた。

「まあ、ちよいと御らんなさい。」さう言つて差し出した彼は、一見すぐに浮浪人らしい、日燒した堅さうな皮膚と狡い光ある目付をしてゐた。何心なく手にとると、それは寫眞板にした春畫であつた。なんでも六枚で少粒な銀貨を三つぶ出したはづだ。さういふことは、その前後にもそれきりであつたが、いまはそんな者もすくなくなつたことだらうと思ふ。

も一つ不思議なことは、どういふ霽れた晩でも活動寫眞館のあの通りで仰向いて見ると、空が妙に天鵞絨のやうに毛立つた深い色をしてゐて、星がはつきり見えないことである。見えるときもあるが、時々、殆んど霞んだやうになつて見えないことがあるのだ。

ともあれ淺草はもつと別な新しい空氣がいるやうだ。夏は水泳場、冬はカツフエなどに公然と踊り子をやとつて、舞踏をやらせたりした方がいいと思ふ。このごろ、あちこちでピアノなぞを彈いてゐるやうだが、それもまだまだ耐らなく拙いものばかりである。一つには最つと俗なところもあつてもいいが、又

ゆつくりした家族的に遊ぶところがあつてもいいと思ふ。

▽千日前のかんとだきと芝居

石丸梧平

×

私が大阪から東京へ移り住んだ當座のことであつた。——それはもう二年ばかり前の冬のある夜のことであつたが、やはり大阪から來て居る一青年の訪問を受け、いろ〳〵大阪の話をしたあとで、私はふと思ひ出して、かんとだきが食べたいからどこかへ連れて行つてくれないかと云つた。

その青年は暫らく頭をかしげて居たが「そんなら行きまひよ、一高の前におますさかい——」

で、私たちは寒い夜をわざ〳〵そこまで出かけて行つたのであつた。

かんとだきとは、東京のおでんのことである。おでんの本場は東京だと見えて、大阪ではそれを「關東煮」と云つてるのである。私は大阪で、さう度々かんとだきを食べたと云ふわけでもないが、その頃私どもが毎月二回づゝ道頓堀のカフエーパウリスタで文藝の會合をやつて居たので、その會のあと、道頓堀や千日前の食べものをあさつてあるいた時に、あの法善寺小路のしやうべんたんごのかんとだきを幾度か食べたことがあつたのである。

パウリスタの會合は公開的のものであつたから、そこではほんのコーヒを飲むだけであつた。で、會の終つた冬の夜更けなどには、何かあつい、うまいもので、ぐつと一杯飲みたいことが屢々あつたのである。——しやうべんたんごのかんとだきは、そんなときに選ばれるものゝ一つで、その味がまた何とも云へずうまいのであつた。それにお酒は飛切上等灘の生一本ときてる。そしてお金は安い。——貧乏人の食道樂には上々のものであつた。

×

私はそれを思ひ出して居たので、青年のあとからついて一高前のおでん屋へ入るときには可なり勇んで居たのである。

けれどもおでんをお皿に盛つて貰つて一口食べるとすつかり失望して了つた。否、食べないさきから、その鍋の中におでんの種類を見ただけで失望して了つた。私の皿の上へあげられたものは芋とこんにやくと、ほんの二三種のものであつた。その上、酒は大阪のものとは比べものにならず、随つて折角の本場ものの味もまづいこと限りなしであつた。その時私はつく〴〵

思つた。食ふものは何と云つても大阪だ、と。

×

淺草にもいろ〳〵の食べものがある。殊にあゝした場所にふさはしい簡單な民衆的な食事はあるにはあるが、しかし、何と云つてもあの大阪の道頓堀から千日前へかけてのいろ〳〵のうまいものには到底及ばない。

だが、丁度この食べ物と反對に、芝居や活動寫眞に到つては大阪は遙かに淺草に劣つて居る。――斯ういへば直ぐにも抗議が申込まれるかも知れない。

「大阪には雁次郎と云ふええ芝居があるやないか」と。

雁次郎の芝居のよしあし論は他日に讓る。ここでは中央公論社の提出した問題「民衆の娯樂としての――」論である。雁次郎の芝居がよし立派であるとしても、現在の貧乏な民衆が娯樂とするには浪花座の木戸料は高過ぎる。浪花座は寧ろ東京の歌舞伎座、明治座に比すべきもので、新しい時代の眞の民衆の娯樂場とは云へない。お金が高いばかりでなく、時間なども隨分長くて、あれでは、晝間一定の仕事をして居るものが夕方から一寸遊びに行くと云ふ性質のものにはならない。いろ〳〵の點から新時代の民衆には緣遠いものである。尤もこゝで一寸浪花座その他のものゝ爲めに辯じておかねばならぬことは、大阪人の生活の形式そのものが、大部分まだ新時代のものになつて居ない。一般の風習として、月に二三回の休日があるのだが、その日には朝から晩まで飲みあるき遊びまはるが、その代り又平ぜいは、朝早くから夜遲くまで一生懸命に働くのである。かう云ふわけだから、芝居見だと云へば、朝からお辨當持ちで、おまけに瓢簞までさげて、全くのお祭りなのだから、斯うした芝居の時間も仕方がないかも知れぬ――。

さて、その自慢の雁次郎の芝居を除いては千日前には何があるか。それこそ低級至極全くあきれかへるより外はない。

無論淺草も可なり低級だ。斯うしたさかり場の常として、いろ〳〵雜多な人間を客とするのだから、低級なのは元より止むを得ないことだ。けれども民衆とは低級なものには限らない。貧乏ではあつても精神的には勝れて居るものも多いわけだ。また新時代の民衆としては、さうした敎養のあるものこそ望ましいのだ。その敎養のある新時代の民衆が娯樂として遊ぶに、もし適當なところがないとしたならば、それは由々しい大事ではないか。

淺草には、まだしもよいものがある。さすがに東京は智識の都だけあつて、それだけ精神的方面にも多くの要求があるのでもあらうが、活動や芝居にも藝術的にほひのあるものが常に

かゝつて居る。その點では、大阪の千日前は全然駄目だ。それはお話にもならないほど駄目だ。たゞ道頓堀に朝日座がある。そして時たま芦邊倶樂部あたりに西洋の文藝物などが出ることもあるが、それ等は多く東京からの輸入である。高木德子、伊庭孝などの人々がよく來ことがあつたと記憶して居る。

輸入ものでも好い。さうしたものが時に千日前の活動や芝居にかゝると云ふことは望ましいことだ。かけさへすれば、大阪にだつてもう經濟的にも立つて行くだらうと思はれる。どうも大阪の興業師は、あまりに經濟的に、大事を踏み過ぎて居る。大事を蹈むのはよいことだらうが、頭が低級だから、その大事を蹈んでの計算になると、どうしても新らしいものは心配になるのである。興業師自身の頭を標準にしては、なるほどまだ〳〵新しいものは危險だと思ふに無理はない。現に大阪の芝居王松竹でさへも、往年藝術座を迎へるのに可なり躊躇したものであつた。――そんなことではとても駄目だ。大阪の商賣人は眼さきが利いて居て、その道にかけては日本一だと云はれてるのだが、せめても少し精神的の方面にも頭があつてほしい。少しうまくやれば、そして暫らくの間さへ忍耐すればそんなに危險がらずとも立派にやつて行けるやうに、すぐになるのだ。よい例が寶塚の少女歌劇だ。あれは初めは箕面電車（阪急）の經營策の一つとして同社の專務小林一三氏が企たものだが、そして從來の大阪趣味とは一寸距離のあるものだが、いよ〳〵やつて見れば案外の人氣が出て、今では少女歌劇の人氣は大したものだ。尤もこの少女歌劇は温泉の入浴料を出す外は、歌劇の觀覽は無料となるわけだが――あれが榮えたのは無料だからとばかり見ることは出來ない。――今更寶塚少女歌劇團を紹介するでもないが、せめてあれほどの見識があつてほしい。あの千日前が――あすこの芝居や活動が、大阪に於ける民衆の娛樂を代表するものだとすれば、それはあまりにも大阪人の精神的要求が低級だと云ふことを示すではないか。」だが、千日前は必ずしも大阪民衆の娛樂場ではない。千日前はたゞ田舍ものゝ集るところである。」かう云ふ人があるなら、私も一應は贊成したい氣がする。

けれども全然さうも云ひ切つてしまはれない。大阪には、それでは他に、どんな恰好の娛樂場があるか。なるほどルナパークもある。それから市内のところどころには落語の席がある。けれどもそれ等が、あの千日前とどれだけの差があるか。大阪の落語には、舊いたねには寧ろ低級と云つてしまはれないやうなおもしろいものもあるが、普通の席でやる落語はこれは又更に低級である。たゞ藝としては、淨瑠璃はおもしろいものゝ一つだ

が、然しそれが新時代の大阪の貴重な所有物だとはあまりにも時代錯誤の感がある。

かう考へて見ると、大阪の新らしい民衆に取つては、今は殆んど何等の適當な娯樂をも持たないことになる。大阪人は貧乏だと云ふことが、何よりの恥辱だとでも考へてるのか、芝居にしろ、旅行にしろ、お金の多くかゝることを、寧ろ誇りのやうにして居る。だが、そんな無自覺な見榮坊は一日も早く脱しなくてはならない。もつと簡單に（經濟的にも時間的にも）よい娯樂を眞面目に求めるやうにならなくてはならない。

「何と云ふてもお金が安いのやさかい、つまらないのはあたりまへや、お金さへ出したら、雁次郎のええ芝居が見られる。」つまらない芝居や活動を見たときにも、そんなことを云つてあきらめて居るらしいのだ。何と云ふ不見識だらう。さう云ふことを考へてるだけでも大阪人には、まだ眞の民衆としての自覺がないことは明かだ。私は四月號の中央公論で「大阪人はデモクラシーの人間ではない」と云ふことを一寸論じておいたが、全く、平民ばかりの都でありながら、ほんとうの民衆としての自覺がなくて、凡てが事大思想である。お金さへ出せば、よいものが見られるとは――何たる皮相な信仰ぞや。隨つて雁次郎

ちることはあるまい。

然し、もう新らしい時代が近づきつゝある。若い人々の中には可なり物のよくわかつたはき〳〵した人間が居るやうだ。ほんとうの自己を見つめた上での彼等の要求が、そこにだん〳〵聲高になりつゝある。――さしあたり民衆の娯樂場としての千日前道頓堀などの内容が改革されねばなるまい。せめて芝居や活動がしやうべんたんごのかんとだきほどにやすくてうまいものでありたい。（七月三日）

▽淺草公園と千日前

上司小劍

淺草公園と千日前との比較は、直ちに東京と大阪との比較になります。私は奈良が郷里であるけれど、二十歳ぐらゐまで大阪と大阪附近の在所（村落）とで育つたので、大阪には可なりに強い憧憬をもつてゐます。今でも一年に少くとも一回は半月ぐらゐ大阪に滯在して、船場の眞ん中の宿に市塵を浴びながら、幼年時代、少年時代の回想に耽るのを樂んでゐます。

しかし、今の私に取つては、この過去の回想といふこと以外

頃は東京攻撃が一種の流行になつて、電車とか道路とか下水とか上水とか、いろ／＼の設備がまるで駄目だと、毎日の新聞には東京といふところがまるでポンペェィの廢墟のやうにでもなりさうに言ふが、これも改良を促す一つの刺激としてはいゝことでせうし、局に當つた仕事をする人に無能者が多いといふやうなこともありませうけれど、しかし東京といふ都會には一種の氣品がある。これは東京以外に日本全國何處へ行つても感ずることの出來ない一種の空氣で、東京特有のものであるやうに私は思ふ。この氣品は蓋し江戶時代から續いてゐるもので、伊勢屋稻荷に犬の糞といふ名物をもつてゐた汚ない市街にも、一種高雅な氣品の漂ふてゐたのを想像することが出來ます。道路は荒れても、街の家の屋根に草が生えてゐても、全體を覆ふ空氣に氣品がある。これは德川時代から續いて政治の中心、文化の中樞となつて、大阪や其の他の地方とは常に十年なり二十年なり、時代が先きに進んでゐるといふやうな關係から來るのか、何から來るのか、私は知らないが、兎に角東京は氣品の高い都會であつて、市民の生活にもまた貧富の區別なく、それ相應に氣品があります。ところが大阪へ行つて見ると、全然この氣品といふものに缺けてゐる。都市の設備としては最近東京を凌ぐほどのものが二三にして足らぬほどてあるに關はらず、氣品といふものを毫末も認めることが出來ません。三尺の空地も無駄にはして置かず、一寸したことにも巧みに利用の方法を講ずるといふ機敏さは、兎ても東京の及ばないところで、東京はそんなことに就いて、甚だ大まかな點があり、大阪は何處となくキチンと片付いてゐますが、片付いてゐて、どうも氣品がない。梅田の停車場へ下りると先づ驛前の低い家に『御支度所』などと書いた赤い提灯がブラ／＼してゐて、どうしても宿場式、或は田舍の都會式氣分を脫することが出來ない。東京の中央驛へ下りると、廣場には植え込みが見え、銅像が建ち、海上ビルデングの壯麗な白堊が聳え立ち、御濠の石垣に古松の枝を垂れてゐる風光を眺めることが出來るとゝもに、また貧民窟のやうな建築小屋や材木や板圍ひがごちや／＼してゐて、如何にもむさくるしい。しかし其のむさくるしい中に、一味の氣品の漂ふてゐるのを感じない譯には行きません。大阪驛前の赤提灯が低級を表象し、全市の何處にも氣品の破片をだに發見することの出來ないのに比べて、まことに好對照であります。

一軒の家で玄關を見れば、大抵其の家の好尙趣味を窺ふことが出來るやうに、東京、大阪兩驛の前の廣場の樣子で、兩都市の全體を代表させることが出來ようと思ひます。敢へて停車場建築の新舊廣狹などを言ふのでない。大阪驛をば今日の古く見

窄らしいものから新しく立派なものに改築しても、是非假りに東京の宏大な中央驛(停車場としては時代おくれの)が燒失でもして、見苦しいバラックになつたとしても、其の驛前に漂ふ都市の代表的氣品の高低は、遠い將來は知らず、今日では矢張り同樣であらうと、私は思ひます。

淺草公園と千日前とを比較して見ても、この感じが附き纏ひます。淺草には俗惡ながらに、一種の氣品が漂ふてゐる。千日前にはそれがない。五分の隙もないといふ物質の利用法は、千日前の方が勝つてゐるかも知れないが、氣品に於ては到底淺草に及びません。

東京の人口が二百五六十萬、大阪の人口が百七八十萬、電車は東京が一日に千臺内外を運轉し、大阪は五六百臺を運轉し、幹線鐵道の停車場は東京が、東京(中央驛)新橋、品川、上野の四大驛を有し、貨物專用驛として、汐留、隅田川、秋葉原の三大驛あり、それに比べて大阪では、幹線鐵道の大驛としては、梅田の大阪驛唯一つで、其の他には東京の萬世橋驛、或は飯田町驛に比すべき湊町驛と、東京の兩國驛に比して少し物足りない難波驛があるばかりで、東行西行とも幹線の旅行は貨物の輸送までを併はせて、皆唯一つの大阪(梅田)驛でやつてゐる。即品川驛、上野驛、及び汐留、隅田川、秋葉原の三大貨物驛の仕事を合はせてやつてゐるほどのもので、不便と狹隘とを感じながらも、どうにか間に合つて行くところを見ると、大阪の活動といふことが、東京に比べて、人口の比較以下に低いのかも知れません。そんな風の交通上などの設備が東京に比して甚だしく劣つてゐるに關らず、低級な遊び場として、東京が淺草公園唯一つなるに比べて、大阪には千日前、樂天地の外にもう一つ南の天王寺公園に新世界(千日前の方が新世界で南のが樂天地かも知らぬ、ハツキリ覺えない)の二つがあつて、通天閣などといふやうなものまで設けてゐます。劇場がこの三四ケ月前までは浪花座一ケ所で大歌舞伎を演じ(今は中座が比較的立派に改築されて大歌舞伎をそれに移した)正月など東京では歌舞伎座、帝國劇場、市村座、明治座で一時に大歌舞伎の蓋をあけ、其の他新富座では伊井、河合、喜多村といふ新派の巨頭劇があるに比べて、大阪は少し價の高い娛樂になると、矢張り幹線鐵道の停車場のやうに、浪花座或は中座の一ケ所で間に合はせておく。即ち淺草公園式の安價な民衆娛樂場に於ては、大阪の方が東京よりも數が多くて、それ以上のものになると、東京に比べてズツト數が尠いといふ點から見て、前に言つた都市の氣品といふこ

▽過去の千日前とこれからの淺草

松崎天民

◇

二十年前、大阪で初めて新聞記者に爲つた時、私は「千日前」の觀察記を書いた。女の水藝や河内音頭を題材として、甲斐一郎氏が「千日前通信」を書いた後を受けて、私は「千日前の淫賣婦」を書いた。その次に山下雨之助氏は、大阪每日紙上に「千日前繁昌記」を書いた。千日前が新聞の活字に表現されたのは、これが殆んど最初であつた。

その頃の千日前は、鶴家團十郎の大阪二輪加や、寶樂、田螺の二輪加芝居や、八幡の藪拔けや、熱海孤舟の新派劇や、中村福圓の舊劇や、女の水藝、河内音頭などで、低級淺劣なりにも、見世物氣分を漲らせて居た。五厘一錢と水の中に投げると、赤い腰卷一つした女が、水中に飛込むで其の錢を拾ふと云ふやうな、キワどい淺間しい藝當を見ても、人々は惻隱の心を喚られもせず、「えいで、えいで」などと喝采して居た。私は横井時雄さんを案内して、その水藝を見に行つたが、横井さんは面を背けて、默つて直ぐ外へ出たことがあつた。

さうした千日前も、今では法善寺の便所臭い前に、立派な女義太夫席が一軒と、露路の中に落語の席が一軒と殘つて居るだけで、その他は痕跡もなく消えて居た。道頓堀の魚すき京與の角から、南へ新金刀比羅神社の裏門まで、南北五六丁の狹い紛雜した通りを、千日前と云つて居たが、今ではそれが東西に一二丁づゝ擴張すると共に、道路も昔の三四倍ほど廣くなり、昔の中心地點を東西に貫いて、電車が通つたり　て居る。千日前で一番大きいと云はれた劇場横井座も無くなれば、小屋と小屋との間に介在して居た安宿、一ぜん飯屋、うどん屋、氷屋、すし屋、天ぷら屋、莨屋、ぶん廻し屋も無くなつて、今では大きな樂天地とかパラダイスとか云つた建物が、博覧會の餘興館のやうな氣持を、四邊に漂よはせて居た。

「千日前は、もう亡びて無くなつたのだ」

私は何となく、そんな氣持がした。表に、外に、路上に、光と匂と響とで、一種の情調を漲らせて、年久しく榮え賑はつて居た千日前は、裏に、内に、屋内に、繁昌記を展べるやうに推移して居た。それを千日前の道頓堀化と云はうか、或はお粗末千萬な歐米化とでも云はうか。何れにせよ、今の千日前が、その外形に於て、聊かでも上品化して來たことは、何人の眼にも映

る著しい事實なのであつた。

人々は此の外形の著い變化を、先年の大火に原因して居ると云ふが、その他に最ゝ重大な事實は、「活動寫眞」の普及、興隆といふ大きな渦巻であつた。興行師の着眼が一足先であつたか、或は時代の好尚に引摺られたのか、それは何れであるにせよ、芝居、見世物、奇術、音曲、手踊り類が、活動寫眞興隆の十年間に、深甚な影響を受けて來た事實は、見のがす譯にいかなかつた。

「活動寫眞が、昔の千日前を壊して、新しい千日前を建てたやうなものである」

私はさう思ひながら、道頓堀を歩いて見た。新築した中座の景氣や、朝日座の活動や、辨天座の安芝居や、浪花座、南座の喜劇や新派劇や、私はそこに、反つて昔の千日前を見るやうな氣持がした。角行燈の芝居茶屋は、次第に少くなつて、カフエーが此所にも彼所にも出來て居たし、食べ物屋は兩側に軒を並べて居るし、一歩南すれば芝居裏のお茶屋から、陽氣な淫蕩な聲が聞えるし、道頓堀の周圍には、南大阪の氣分が、色濃く醱酵して居た。昔の千日前は、一歩東した暗い界限に、路傍で袖を引く私娼の出沒を見たものであつたが、今は明るい道頓堀の四邊に、色里の艶めかしい情趣が流れて居た。

昔の千日前の名殘を探ねて、私は天王寺公園に隣接した「新世界」へ行つて見た。こゝも博覽會の餘興部のやうな、何となく半永久的に落着きのない所ではあつたが、然し昔の千日前を彷彿させるやうな、往來の顔色を見た。同じ民衆娯樂場としても、道頓堀にはまだ「富める者の世界」と云つたやうな匂が濃厚に漂つて居たが、新世界には第二の千日前、又は新千日前と云つた風の心易さ、手輕な、簡便な、手取早さが、私の前に露骨に現れて居た。ホンとの千日前は、活動寫眞本位の娯樂場に化したが、新世界は新しい千日前として、より簡易に、聽覺、視覺、味覺、嗅覺の他に、觸覺をも提供してくれさうな所に見えた。

然し、民衆娯樂場としての南大阪の經營に就いて、當事者達に何程の自覺と理解と觀察とがあるか、それは覺束ない事に見えた。安價な代償に依つて、多數を收容しやうと云ふ考へは、興行方策上に見て、打算的の効果がある事としても、その内容の世間的影響と云ふことを無視して、そこに何の興行的良心があらうぞ。その底に興行的良心のない民衆娯樂は、たとへそれが大入であつても、民衆娯樂として毫末も價値せぬことを、私は當事者達に進言して置きたい。——

舊い千日前は破壊されて、新しい千日前が、今や建設されや

ゝと歩る途上の一面を瞥見しながら、私は實に淺草公園六區の消長を考へてみた、

◇

「苟くも新聞の社會記者ともあらうものが、淺草公園を知らないやうでは駄目だ……」

私は常にさう思つて居た。公園六區一つを對象として、その研究と觀察とに、一生涯を終るやうな社會記者が、一人や二人はあつても宜いと思つて居た。然し公園六區を活字に表現したのは、新聞よりも雜誌の方が先であつたが、近頃になつて「都」や「國民」に、「淺草」の續き物が出た、私も「東京朝日」に居た十年前から、いろ〳〵な形式で「淺草公園六區」を材料の豐庫にして居た。

最近では谷崎潤一郎氏が、小說「鮫人」の中で、淺草公園を論じたのが、私の知つて居る限りでは、最大級の「淺草文字」であつた。京都の新京極は、餘りに淺薄であり、大阪の千日前は、餘りに平面的であるが、淺草公園は平面的であると共に、立體的であるとも云へやう。歩いて行けば、直ぐ行き詰るやうな千日前と違つて、淺草公園は奥行が長く底が深かつた。音響や色彩の强烈な魅惑の他に、そこには一種何とも形容の出來ない力があつて、私を引ずり込むやうな氣持がした。

私は此の淺草公園から受ける魅惑を、樣々に考へて見た。それは多分興行物から發散するところの光、響、匂が、その最も强烈なものであると共に、多くの飲食店から流れて出る香氣もあるが、更に力强いものは、淺草公園に出入する大勢の人間から發散するところの「人間臭」に依つて、變態性慾的の刺戟を受けることであつた。そこに樣々の誘惑があり、墮落があり、罪惡があり、歡喜があり、快樂がある事を、私は見のがす譯にいかなかつた。花を見に行く人々が、晴やかな花見衣を、人々に見せ付けやうとする心持と、また花見る人々の顏を見やうとする心理狀態とが、淺草公園では年中相交錯して居て、公園そのものの有する常習性醱酵素の他に、別に有力な特殊性刺戟素となつて、私を魅惑するのであつた。

それに淺草公園で見のがすことが出來ないのは、明暗二つの大きな背景を有つて居ることであつた。京都の新京極が、鴨川と東山を有つて居るのも、大阪の千日前が、道頓堀と南地の花街を有つて居るのも、有力な背景とは云へるが、然しそれは淺草公園が、明るい六區に「淺草觀世音」を有つて居り、暗い方面に「十二階下」を有つて居るほどに、有機的なものではなかつた。出現、發達の歷史から言へば、觀音あつての六區であり、六區あつての十二階下であるかも知れぬが、然し主體を公園六區と

して、考査する時には、觀音も十二階下も、公園に附隨し從屬したところの一現象であつた。全く今日の淺草公園は、その繁昌の度合に見ても、六區の娯樂機關が力強い中心點になつて居て、觀音は其の餘慶を蒙つて居るやうな調子に見えた。況んや「十二階下」の如きは、淺草公園の繁昌記が生むだところの副産物に過ぎないのであつた。

斯うした背景を有つて居る淺草公園が、日本唯一の民衆娯樂場として、今日までに進展して來た月日は、興行上の「安價」と「多數」とが、矢張り當事者の標語であるらしかつた。そこに粗雜があり、低級があり、急行があり、非藝術があつても、人々は「安い」と云ふことに寛恕して、その安い中に滿足して居た。そこに未熟があり、不鍛練があり、間に合せがあり、非喜劇があり、非芝居があり、非活動があり、非奇術があり、非義太夫があり、非講談があり、非浪花節があり、非歌劇があつても、人々は「公園だから」と云ふことゝ「安いから」と云ふことゝに依つて、別に何の苦情も言はなかつた。たゞそれを宜い事にして、興行者の方でも「安いから」と云ふ事に、安心して居ることが、今後、何時まで恕さるべきであらうか。公園興行の消長は、お互に此の「安いから」の慣習的觀念から脱することの遲速に依つて、その革新にも、遲速があるやうに考へられるのであつた。「安價にして多數を招く」ことは、民衆娯樂物興行上の極意の一つであるにしても、それが「最後の事」であるとは、斷言が出來ないであらう。

このやうに「安い」と云ふハンデキヤツプを置いても、尚ほ且つ私達が「淺草藝術」に引入れられるのは、様々の背景や、變態心理の他に、「淺草藝術」そのものが、強く私達の實感を衝くからであつた。即ち又五郎や彦三郎やの芝居を見て居ても、五九郎の喜劇を見て居ても、水野、佐藤の新派劇を見て居ても、金龍館のオペラを見て居ても、藝術としては未成品である刹那でさへ、私達は輕い又は強い一種の感情の變動を感じるのであつた。そして他の大きな芝居などでは、とても經驗し得られぬ舞臺と見物席との親しみ、役者と見物人との心的交渉を、私達は感じるのであつた。これ即ち登場の俳優達が、落着いて藝術境を完成する暇がなくて、又は努力が足らなくて、或は其の職能が稀薄であつて、いろ／＼の事情の下に、生の儘の實感の力で觀衆を動かさうとするからであつた。藝術の上からは、恕され難い破綻だらけの舞臺面であつても、そこから醗酵するところの實感味に引きつけられて、私達はこゝに一種の「淺草藝術」と云ふ、特殊の對象に動かされるのであつた。

活動寫眞と、舊劇と、新派劇と、歌劇と、喜劇と、江川の玉

乘と、八木節と、講談と、女義太夫と、それが今日の淺草公園に、娯樂としての興行物である。そして路面の改良と共に、これ等の內容が、此の後、何んな風に更新するにしても、安價と粗雜とが招來して居た「低級」の二字は、やがて淺草公園から取除かれるであらう。

淺草公園は舊いけれども、常に新しい空氣が漲つて居る。地方から來た人達ばかりでなく、私達東京に住で居る者にも、淺草公園はいろんな意味に於て、眺めるに宜い「世相の縮圖」なのである。たゞこれを、ホンとに私達の淺草公園とするには、最少し年月を待たねばならない

取止めのない事ばかり、失敬、失敬。

——大正九年七月六日の朝——

▽予の淺草觀

菊池寛

自分が、淺草が好きなのは活動寫眞があるからである。

ある劇場當事者が、その高い入場料を辯解して曰く「此頃ぢや活動寫眞でも、特等一圓五十錢も取るのですからね」と。自分は聞いて居て可笑しかつた。「活動寫眞でも一圓五十錢では入れるのだ。現在のやうな下らない芝居を、五圓も十圓も拂つて入る奴があるものか」と、思つた。

が此人の言葉は、活動と芝居とに對する普通人の考を、よく云ひ現はして居る。芝居に對する因襲的な尊敬に囚はれて居るために、活動の眞價が、分らない人の考をよく云ひ現はして居る。

が、虛心平氣に活動と芝居とを比べると、思ひ半に過ぎるものがあらう。スクリインに出て來る潑溂たる名女優達の美しさと、日本の女形の不自然な變生男子的な醜さとを比べた丈でも、澤山だと思ふ。

而も、スクリインの上の世界は、我々には可なり親しみがある。同じ日本人の世界でも、歌舞伎の世界と我々との生活には、百年二百年も時代の隔りがある。主君のために、妻を賣つたり、子を殺したりする道德は、我々には堪らない。映畫の世界は、外國ではあるけれども、我々の生活感情とピッタリと一致する。映畫の內容にも、近代味もあれば藝術味もある。

つい最近に見たジエイ　エム　バリイのアドミラブルクライトン(改題「男性と女性」)などを考へて、日本の芝居などでは、容易に見られない新味もあれば、藝術味もあつたと思ふ。

今でも、活動寫眞に對して、毛嫌ひをして居る人、活動と云

へばピストルを打つたり、追ひかけたりすることだと思ふ人は、ぜひ一度活動を見直す必要があると思ふ。

活動を見るには、是非とも淺草へ行く必要があると思ふ。同じ映畫でも、淺草で見るのとでは、氣持が違ふ、吉原と岡場所位に違ふと思ふ。

又帝劇や國技館でやる大觸込みの大物は、大抵は下らないものである。「イントレランス」にしろ「世界の心」にしろ「ロミオとジュリエット」にしろ、自分は少しも感心しなかつた。

やつぱり五卷物位の人情物に、題材も秀れて立派なものがある。戲曲としても立派なものがある。役者も、あまり美貌を持つて居ない女優に、秀れた演技を持つて居るのが居る。

現在の淺草では、西洋物專門の館は電氣館帝國館キネマ倶樂部千代田館の四つである。中でも、キネマ倶樂部は、館の構造が一番よく、座席も快い。近來何うしたのか餘りいゝ映畫が出ないやうである。千代田館は、つひ此間開業したばかりである。ゴールドウヰンなどの傑作品を紹介して居るのに拘はらず、館に馴染のないためか、客足が可なり薄いやうである。

芝居の見物が、待合の女將や藝者や相場師や會社の重役などゝ云つた所謂無識有産階級であるのに反し、淺草の見物は、最も進歩した民衆である。小生意氣で、不良少年味を帶びて居るが、常に新しがつて居る。英語のマークが出ると一齊に拍手を送る。キザと云へばキザだが、可愛いゝと云へば可愛いゝ。然し、之は衒つて居るのではなく、淺草の見物は、殊に電氣館あたりの見物は十中八九英語の題名や役割位は讀める連中である。寫眞と寫眞との間の奏樂の曲譜などは、大抵聞きかじつて居る連中である。かうした意味で、歌舞伎座や帝劇の見物に比して、遙かに進歩して居る、連中である。大正活動寫眞會社が、映畫の題名を、英語で廣告して居るなどは、正に淺草の見物を理解して居るものである。

が、見物に比して、やゝ見劣りするのは、辯士である。まだ美文句調などを弄して、得々として居る人だとか、映畫中の人物の心理を下らなく忖度したり、また非常に意味の深い事件を、安價に淺薄に解釋したりするものが可なり多い。マークに出て居ることさへ、間違つたり、充分に説明出來ない辯士が居る。多くの辯士の中では、自分は帝國館の大辻司郎のイヤ味のないとぼけた説明振りが好きである。盗人がは入る光景を説明して「勝手知つたる他人の家」と云つたやうな名文句を吐いて、見物を嬉しがらせる。

寫眞の題名の譯し方には、まだ活動固有の惡趣味が付き纏つて居る。中には、とんでもない誤譯がある。「名金」だとか「獸

魂」など〻、不熟なその癖センセイショナルな飜譯で當てた味が忘れられないと見え、生硬な不熟な題名が付けられて居るのは嫌である。この點に、や〻注意して居るのは、大正活動寫眞會社で、「懐しのケンタッキイ」など文學的譯語を付けてあるのは、愉快である。映畫の題から考へられる通、淺草の文化（變な使ひ方だが）は新しいが何處となく未熟で、生硬で、下品である。もつと、その趣味が上品になり、洗練されて來たならば、新らしい興業、新しい舞臺藝術は淺草から起るかも知れない。

世の中には、まだ活動寫眞丈が少年に惡感化を及すと云つたやうな、妄說に囚はれて居る人がある。その人達のために、バーナード　ショオの言葉を引いて置かう。曰く「活動寫眞にだつて、一利一害はあるよ。字を書くことだつて、小供に書くことを敎へると、それが彼等が詩を作るために役立つと同時に、小切手の僞造をする時にも役に立つよ」」と。

活動寫眞の見物の事ばかり云つたが、その他の見物も、淺草は可なり進歩して居る。去年から今年にかけて、公園劇場で、セント　ジョン　アーヴヰンの「オレンヂマン」、金龍館でロード　ダンセニイの「失はれたるシルクハット」「イエイツの「カスリイン　ニ　フーリハン」をやつて居る。演出が、どんなにイカザマであるにしろ、愛蘭土劇が頻々として淺草に上演せらる〻のは、日本の現在の劇壇に對する大なる皮肉であると共に、自分達愛蘭土劇愛好者に取つては、快心の到りである。

金龍館と云へば、彼處で演ぜらる〻木村時子などの「カフエイの一夜」と云つたやうなイカサマ喜歌劇も、退屈な歌舞伎芝居などに比べると勝ること萬々である。

▽貧乏人の淺草・金持ちの千日前

田中純

淺草には、淺草らしい或るまとまつた感じがあるが、千日前には、さうしたまとまつた感じがない氣がする。これは、私がまだよく千日前を知らないためかも知れないが、私が今日まで、十數回足を踏み入れただけの感じから言へば、何うも、千日前と云ふ感じは稀薄で散漫である。

淺草はすつかりスペシファライズされた遊樂境であるが、千日前はむしろ寄せ集めの遊樂境だと云ふ感じがする。

先づ、この二つの場所の內容から言へば、淺草に櫛比してゐるもの〻大部分は活動寫眞館であつて、その間に、コミツクオ

ペラだの、玉乘りだの、二三の見世物、三四の小さい劇場だのが散在してゐる。ところが千日前になると、別に活動寫眞館が櫛比してゐると云ふのでもないし、寄席や講釋場が並んでゐると云ふのでもない。三四の大きい劇場、活動寫眞館、寄席と云つたやうなものが點々と散在してゐるだけであるが、それで可なり繁華である。

私たちにしても、大阪に行つて、何處か明るい處へ出やうと思へば、何うしても千日前に出るより外に仕方がないのであるが、さて行つて見ても、何も見るものはない。たま〳〵雁次郎の芝居でもかかつてゐれば、それに入るのだが、さて實際に入らうと思ふと、大抵、大入滿員で切符が買へないと云ふ仕末だ。仕方がないからカフエーにでも入ると、これはまたウエイトレスがきたなくて不作法で、お客もいやに氣障なのが多い。家によると、石油罐を叩くやうなピアノが、カチユウシヤか何かを單調に唸つてゐる。到抵吾等が享樂の巷ではない。そこで私たちは大抵、あの狹い路次の中にある末廣亭(?)とか云ふ寄席に入ることになるのである。この寄席にも、餘り好い藝人はゐないやうだ。それに、寄席としては隨分木戸錢が高價である。が、それでも、此處が一番居心地が好いので、昨年大阪に行つた時などは一週間ばかり滯在した間に五六回もこの席に通つたことがある。

が、かう云ふと、大阪の人は屹度、それはお前が千日前を樂しむ法を知らないからだと言ふに違ひない。なるほど、千日前には千日前の樂しみ方があるに違ひない。私もさうだらうと思ふ。が、それは私に言はせれば、金さへあればと云ふのと同義語である。實際、金を使ふ氣になれば、千日前は隨分面白いところのやうな氣がする。

あの千日前の雜沓の明るみから離れて、あのほの暗く澱んでゐる宗右衞門町の方へ一歩でも入れば、其處にはもう金が息づいてゐる。私のやうなものでも、あのあたりに行くと、一寸金が欲しいなど云ふ氣にもなる。裏通りの一現茶屋の前を通つて見ても、神樂坂あたりの待合遊びなどよりはよつぽど面白さうに見える。が、どれもこれも、結局は金の問題に歸着する。思ふに、千日前と云ふところは貴族的な劇場と花街(いろまち)とを中心にして發達した歡樂境であらう。それが多少でも民衆の娯樂境らしい卑雜な影を持つてゐるのは、大阪人に特有な食味に對する嗜好から、あの土地の樣々な食べ物屋を發達させたからだらう。事實、あの土地で、大きい劇場と並んでゐる家屋の大部分は食べ物屋であつて、カフエーなども無數にある。

もし淺草を民衆の娯樂境であると云ふならば、千日前　むし

連れて行かなければ肩身が狹いもの〻やうに見える。そこで、千日前で慰樂を求めることが出來ない人々の慰樂境が、他に發達しなければならなくなる。而してその要求に應じて發達したものが、恐らくあの寶塚や、天王寺の新世界なぞだらう。

そこへ行くと、淺草は、民衆の娛樂境としては、殆んど理想的に進んでゐる。多數の民衆の娛樂機關として必要な特質は安價に手輕に明るく快活に享樂することが出來ると云ふことであるが、淺草はその何れの特質をも備へてゐる。淺草では金錢を超越して遊ぶことが出來る。彼處では金錢の威光は必要がない。金を使はうと思つたつて使ふことが出來ないのである。それは淺草にも料理屋があり、藝妓が居り、淫賣が居るが、しかしさうした方面のことは、すつかり吉原に吸收されてしまつてゐるから、特にそのために淺草に行くものでない限りは、殆んどさうしたものの存在をさへ知らないで濟んでしまうのである。

しかし、淺草に於ける最も賴もしい點は、彼處に、新らしい知識に對する渇望が見える點である。帝國劇場が企て〻失敗し、ロシイ氏が企て〻失敗した日本の歌劇を、低級ながら兎にも角にも受け入れたのは淺草の見物であつたし、頓挫し四散し彼等が役者として生きる道を與へた最初のものは、矢張り淺草の見物であつた。それを疑ふならば、一度キネマ俱樂部にでも行つて見るが好い。どれほど多數の見物が、世界の新らしい名優に隨喜してゐるかを知ることが出來るだらう。

民衆が社會に勢力を得ることが、藝術を墮落させはしないかと憂へてゐる人があるならば、先づ淺草に行つて見て、安心するが好い。富豪や貴族は藝術を玩弄視するかも知れないが、民衆は藝に智識を求める。それが當然なのである。淺草はその好い例證である。

だから、もし大阪に本統に好い藝術が生れるとすれば、それは貴族の娛樂境たる千日前よりも、むしろ、より民衆的である他の所、例へば寶塚あたりから生れるのではないかと思ふ。

▽淺草の見物

久米正雄

淺草の見物が、日本で最高級の見物である事は、既に二三年前から私の持論として來たところだ。併しこんな說を吐くと、それを一片の皮肉だと思つて了ふやうな人が、まだ世間には多

いんだから困る。而して淺草に興行物を持つてゐる、ある興行部と深い緣のある人にすら背つて、「貴方は本氣でさう信じてゐるんですか。」と反問された事さへある。其問には、私はわざと穩和に、「えゝ。少くともキネマ倶樂部、電氣館、帝國館の見物だけはね。」と答へて置いたが、其後日本館もユ社の封切館となり、千代田館も大正活映の經營に移つて、以上五館の見物だけは、どう謙遜して考へても、歌舞伎、帝劇、市村あたりの見物より、文化の程度が高いと思はざるを得ない。實際、(僕の芝居を神妙に見て下さる方々は別だが、) 劇場側から、平均尋常六年程度の敎養と見縊びられてる、衣物ばかり立派な上流の御客や、連中屋の驅り出しで出て來る花柳界の低能藝者なんぞが、その主な顧客である劇場觀客より、帷幕(スクリーン)へ英語の傍標題(サブタイトル)が映れば、それを了解して手を叩くといふやうな、若い頭腦のある活動狂(スクリーンファン)の方がどれだけ偉いか知れやしない。若しそれ劇場の觀客にしても、公園劇場の見物が必ずしも歌舞伎座のそれより惡いか、といふと、「陰影」などをやつてゐた又五郎の見物なぞは、決して今の左團次の見物に劣らうとは思はれない。更に又、此間「生命の冠」を上演した時の感じから云へば、それも明に明治座の見物より辛棒強き事を思はせた。

要するに淺草の小屋に於ては、決して見物が惡いのではない。それならば何が惡いか。云ふ迄もなく、それは向うの設備が惡いのである。土足で入れたり、晝夜二回演出をしたりする點である。言を換へて云へば、興行師側、役者側が、ずつと惡いのである。決して見物が惡いのではない。それが證據に、そんな怖れのない西洋物封切館は、ほんとにいゝ見物ばかり集めてゐるではないか。

私の考ふる所に依れば、如何なる藝術的觀覽物でも、淺草だからと云つて、低級に墮すべきものではない。妥協する必要は絕對にない。それを强ゐて妥協さしてゐるのは、今の淺草の興行者、俳優の仕業に過ぎない。それも、又五郎位の役者が一人ゐるだけで、可なり改革される。だから、どうせ俳優といふやうな、民衆と直接接觸し行くべき藝術家は、自分の職分に自覺があればあるだけ、下らない潔癖はやめて、進んで淺草の小屋へ出たらいゝと思ふ。その點では、井上正夫、又五郎なんぞは先覺者だ。勘彌だつて、帝劇へなんぞ入らないで、淺草へでも行つた方が、もつと自由に藝術的な働らきが出來たかも知れない。賢明なる左團次の如きも、早晚此處へ出る事を拒まなくなるであらう。

▽淺草の喰べもの

久保田万太郎

料理屋に、草津、一直、松島、大增、岡田、新玉、宇治の里がある。

鳥屋に、大金、竹松、壽賀野、みまき、金田がある。

鰻屋に やっこ、前川、伊豆榮がある。

天麩羅屋に、中清、天勇、大黒屋、天忠がある。

牛屋に、米久、松喜、ちんや、常盤、今半、平野がある。

鮨屋に、みさの、みやこ、清ずし、金ずし、吉野ずしがある。

蕎麥屋に、奥の萬盛庵、池の端の萬盛庵、萬屋、山吹、藪がある。

汁粉屋に、松村、秋元、梅園がある。

西洋料理屋に、よか樓、カフエ パウリスタ、雑居屋、共遊軒、太平洋がある。

支那料理屋に來々軒がある。

この外、一般貝のたぐひを喰はせるうちに、蠣めし、野田屋があり、てがるに一杯のませ、且、いふところのうまいものを喰はせるうちに、三角、まるき、魚松がある。

これらのうち、草津、一直、松島、大增、新玉、及び、竹松、壽賀野、みまき等は、藝妓の顔をみるため、乃至、藝妓とゝもに莫迦騒ぎをするために存在してゐるうちである。宴會でもないかぎり、われ〳〵カタギの人間には一向用のないところである。

往年、五軒茶屋の名によつて呼ばれたうち、草津、一直、松島の三軒は右の通り、萬梅は四五年まへに商賣をやめ、今では、わづかに、大金だけが、古い淺草のみやびと落ちつきをみせて

ゐる。

座敷のきどり、客あつかひ。——女中が結城より着ないゆかしさがすべてに行渡つてゐる。つくね、ごまず、やきつけ、やまとあげ、夏ならば、ひやしどり、いつも定つてゐる喰ひものも、どこか、大まかな、徒らに巧緻を弄してゐないところがいゝ。——われ〳〵淺草に住む人間の、外土地の人の前に持出すことの出來るものは、このうちと金田とがあるばかりである。

金田は、同じ鳥屋ながら、料理は拵へず、鍋で喰はせるばかりのうちである。先代の主人は默阿彌と親交のあつた人、さういふ人の經營したところだけ、間どりもよし、掃除もつねに行屆き、女中も十四五から十七八どまりの、始終襷をかけた、愛想のいゝ、小氣のきいたものばかりを揃へてある。諸事、器用で、手綺麗なのが、われ〳〵には心もちがいゝ。——使ふしなものも、われ〳〵のみたところでは、人形町の玉秀、大根河岸の初音とゝもに、きび〳〵したいゝものを使つてゐる。

たゞ、殘念なことは、こゝのうち、功成り、名とげて、近いうちに商賣をやめるといふうはさがあることである。もしそのうはさが眞實ならば、われ〳〵は、あつたら淺草の名物を一つ失ふわけである。われ〳〵はそのうはさの眞實にならないことを祈つてゐる。

前川といふと、われ〳〵は子供の時分の印象で、今でも、落ちついた、おつとりした、古風な鰻屋だといふことが感じられる。だが、このごろでは　以前ほどの氣魄をすでに持合はさないやうである。時代は、淺草のうなぎやとして、こゝよりもやつこのはうを多くみとめさせるやうになつた。——無駄をいふことを許してくれるならば、わたしは、名代な、あの、おひさといふ女中。——六十は、もう、何年かまへに越したであらうと思はれる、このごろでは馴染の客の顔さへとき〴〵み忘れることがあるといふ、いつも正しく小さな髷に結ひ、襷がけで、太儀さうに、また、張合のなさゝうに働いてゐるあの女中が、前川といふうちの運命を寂しく象徴してゐるといひたい。

やつこは前川にくらべると、今でも、やゝ品下つたところがある。それだけ景氣がいゝ。活氣がある。表の見世は入れごみだけれど、裏にまはれば、玄關、座敷、その他、藝妓を入れることの出來るやうな設備がしてある。

伊豆榮は、吾妻橋の際のもとの伊豆熊のあとである。これは、格別、いさくさのない、ごくあたりまへな鰻屋である。

わたくしの子供の時分、田原町の、いま川崎銀行のある角に、鰻をさきながら燒いてゐる小さな床見世があつた。四十がらみの、相撲でもとりさうに肥つた主人が、二人の、年ごろの

娘たちと、十三四になる惡戯な男の子とを相手に商賣をしてゐた。外に、みるから氣の強さうな、坊主頭のその子供たちにおぢいさんと呼ばれてゐる老人がゐたが、そのうち、鰻屋をよして、廣小路に、夜、天麩羅の屋臺を出すやうになつた。種のいゝものを使ふのと、阿漕に高い錢をとるのとで、わづかなうちに仕出し、間もなく、今度は、傳法院横町の、待合のあとに入つて店を出した。——それがいまの中淸である。

うまいからいゝといへば、それまで、こゝのうち、あまりにすべてが無作法すぎる。——座敷の汚さ、器具の惡さ、女中の無精つたらしさ。——いかな最屓眼を以てしてもわれ〳〵には折合へない。

天勇は仲見世の裏にある古いうちである。天麩羅の外に小料理もする、氣の張らない、臆劫なところのない、あくまで淺草むきに出來上つてゐるうちである。廣小路ゐまはり、公園ゐまはりにある、さういふうちの、代表的のものである。

大黒屋は二三年まへまで蕎麥屋だつたうちである。蕎麥屋の時分から天麩羅を以て鳴てゐたが、いつの間にか、店の構へをそのまゝ、蕎麥屋をよして、天麩羅屋にかはつた。屢、わたしは、その前を通つて、只今滿員とした客どめの札の掲げられてあるのをみる。——蓋し、蕎麥屋へ入る氣易さを以てその暖簾をくゞることが出來るからであらう。

だが、おそらくはその眞似であらう、このごろ、さうしたイキのうちが、活動寫眞のある近所に二三軒出來た。

天忠は、公園から離れた、象潟町に存在する毛いろのかはつたうちである。其角堂——このごろ老鼠堂になつた機一宗匠の好みを帶した喜加久揚といふものをうりものにしてゐる。落語家、吉原の幇間、その落語家や幇間と友達附合をすることを喜ぶ客たち。——さうした手合の間に評判されるうちである。——淺草のある面を物語るものとみることが出來る。

牛屋については、わたしは殘念ながら何事も說く資格がない。——たゞ、平野といふうちの、朝がへりの客を相手にするうへからいつて、朝、この土地の、どこの、何の食ひものやよりも、早く、店をあける重寶さをだけいへばいゝ。

みさのは、鮨を大事にする小料理屋である。藝妓さへ入るうちである。鮨屋の範疇へ入れるのは皮肉かも知れない。

ほんたうの鮨屋としては、三四年まへ商賣をやめたみさごずしの贅澤さをしばらくいはないとしたら、淸ずし、金ずし、吉野ずしの三軒が、蓋し、公園ゐまはりに數へ切れないほどある屋臺くづしの鮨屋の、握りを大きくすることを信條にしてゐる鮨屋のなかの代表的のものであらう。——このうち、淸ずし

は、以前廣小路にあつて時めいた初音の、職人の經營するところである。

みやこずしは、それらのものゝとにすると、いさゝかそこに横題ものゝかたちを持つてゐる、嘗ては鯖の押鮨を以て聞えた店である。

奥の萬盛庵は藪系統の蕎麥をくはせるうちである。だが、池の端の萬盛庵は、蕎麥屋といふよりも、むしろ、蕎麥を看板にした小料理である。山吹も、また蕎麥屋といふよりも、こゝは饂飩を看板にした小料理である。

松村といつても今のものは三四年まへまであつたものゝ謂ではない。以前の松村は、公園裏の改正になるとゝもに商賣をやめ、今のは、山谷の葉茶屋の主人が、松村の名を惜むのあまり、半ば道樂にやつてゐるのである。

梅園よりも秋元のはうが土地のものを多く客に持つてゐる。といふことは、秋元よりも梅園のはうが素の堅氣の客が多いことになる。

よか樓は女の綺麗なのがゐるので賣出したうちである。雜居屋は一品料理屋から仕上げたうち、しかも一品料理屋であつた時分の繁昌をいまはみるよしもない。

共遊軒は公園裏にあつて玉突を兼業してゐるうち。――草津一直の近所なだけ遊蕩的な色が濃い。

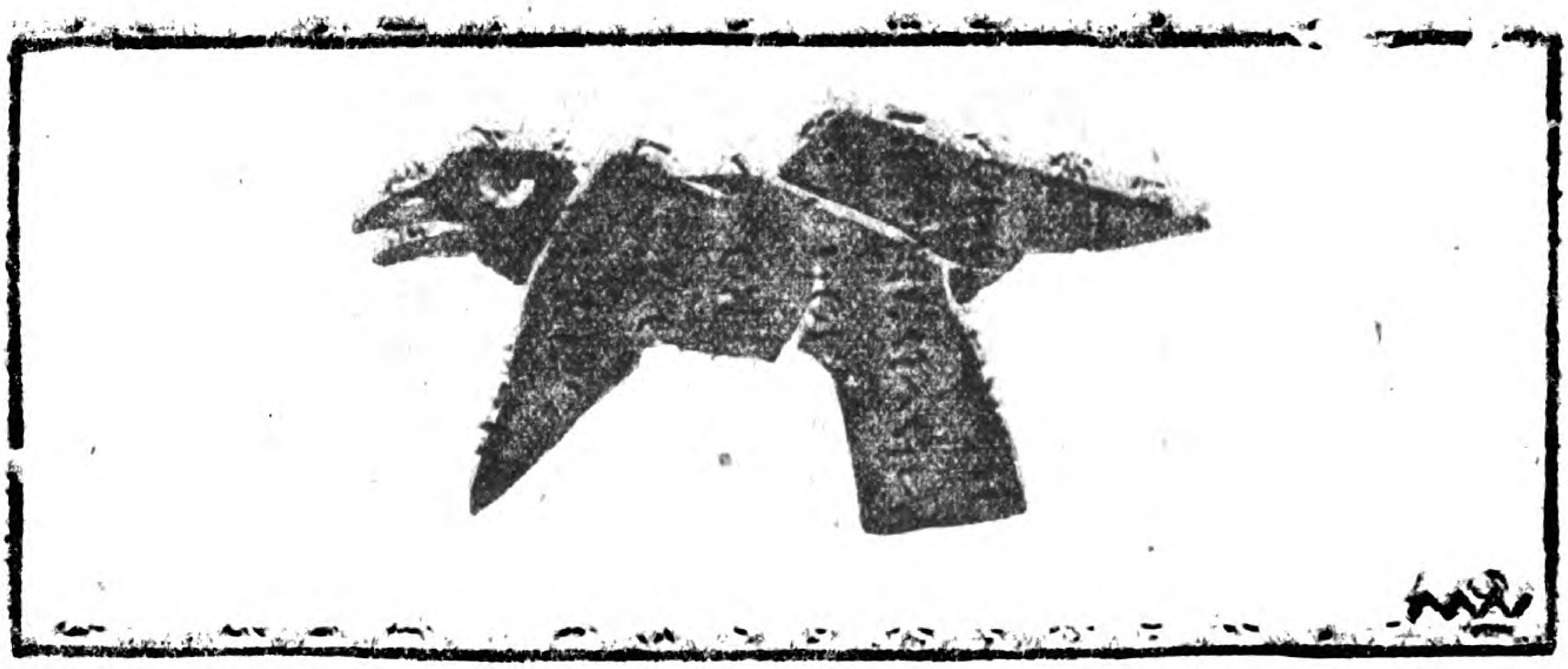
太平洋に至つてはやゝ、異色ある一品料理にすぎない。

これを要するに、この土地は、芳梅亭を失つて以來、西洋料理屋らしいものをどこにも持つてゐない。

由來淺草には、われ／＼の、しづかに、團欒して、食事をたのしむことの出來る場所がない。われ／＼は不仕合である。

（九年七月）

中央公論第卅五年夏季特別號創作



無產階級者

小川未明

私が新聞記者をしてゐた時分のことです。北方のこの小さな町へ、日露の戰役に行つた廢兵がよく商をしに、何處からともなく入つて來ました。彼等は決して一樣な姿ではなかつたが、中には短かい太い棒切のやうに兩足を切斷されてしまつて、其の先に襤褸を堆高く巻いて、膝頭で地面を歩いてゐる者もありました。背が低いだけに、其の人間は年の老けた子供のやうに見えるのでした。紫黑色の厚い唇の周圍には、頬邊にかけて、濃い髭が延びてゐて、大きな眼は落窪んで何となく疲勞の影が現はれ、白眼には黄色なうす曇りがかゝつて、他人の知らない苦痛までを經驗して來たらしいのが顏に何處ともなく現はれてゐました。

其の男の着てゐる焦茶色の洋服には、肩から流れ出る汗が染んで、處々に黒く點となつて附いて見えたばかりでなく、其の廢兵はやはり正しく軍帽をすら被つてゐた。而して、肩から革で吊つた藥箱を下げて、手には、一つの古びた手風琴を持ち、其れを鳴らしながら、何か唄をうたつて、人々の注意を身の上に集め、かうして千金丹を賣つて歩くのでした。

何ういふ唄であつて、其れに合はして手風琴を鳴らしてゐるのか分らなかつたけ

れど、眞夏の輝かしい空の下で、すべての物が日に照されて赤つぽく見えるのに、哀れな節でうたふのを聞き、また頼りなく、いつかあたりに吸ひ込まれて消えて行くやうな手風琴の音色を聞くと何といふことなしに誰でも悲しくなるのでした。

けれど、たび／＼其の姿を見て、其の音色を聞くに慣れるにつれて、しまひには、あまり立止つて、其の男に注意をする者もなかつた。たゞ其れを耳にして、行き過ぎながら傷ましい氣持になるといふ風でした。町角で鳴らすこの手風琴の音色が漂つて、たま／＼私の仕事をしてゐる室にまでとゞいた時に、其の男の姿が思ひ浮べられたばかりでなく、何處を何うして歩いてゐるといふことも眼に見るやうに分つたのです。

「妾は、氣味が惡くて、あんなのを見るのも厭だ」と、言ふ女があれば、

「だつて國家のために盡したんぢやないか」と、言つて、蔭では、いろ／＼なことを話して、日に燒けた路上を這ふやうに行く男の耳にはどうせ入らないと思つて、無智な男や、女が指して言つてゐる。こんなことも想像された。

しかし、この町の人々からも、かうした廢兵の印象は、次第に何とも思はなくなる程、薄れて行く時分がありました。從つて藥が賣れなくなり、廢兵にも、もうこの町には用がなくなつてしまつて、いつの間にか、其の姿が町から消えて手風琴の音色が聞かれなくなりました。

其の當座、熱い日に窓から頭を出して、いつまでも、あの廢兵のことを思ひ出す時は、柳の小枝を吹く、あるかなしかの微風に送られて何處からともなく、遙かに手風琴の音色が漂つて來るやうに感じられたのです。

きつと、あの棒切のやうな男は、何處か他の町へ行つて、今頃、あゝして歩いてゐるにちがひない。而して、不幸な、今は誰からも顧みられなくなつた餘生を送るのであらうと考へられた。其れから間のないことです。

私が、茫然として町を歩いてゐる時でした、

「廢兵でございます。旅順の戰爭に片腕を無くした者でございます。これから國へ歸りますのに旅費が盡きてしまひましたので、どうか哀れと思つておめぐみ下さいまし」

一本道に、通で偶然私はこんな事を聞きました。飾窓に擦近する雑貨店の店頭に痩せた若者が立つてゐた。汚れたおくら縞の単な物を着て、兵児帯をだらりと垂れて、八重歯を露はしてゐました。頭髪は蓬々と延びて、右手は白い布で繃帯をして肩から吊つるしてゐたが、其の手頸から上は全く無いことが分りました。

私は、直覚によつて、この若者は勞働者の廢兵でないと知られた。廢兵がこんなことを言つて、またこんな様子をして町を歩いてゐる筈がないから。而して、また等しく町の人々にあまり感じられたものと見えて、其の男に金をやつてゐる者を其時は見なかつたのです。

其の眼は鋭かつた。異光りをして、飛出してゐるやうにさへ見えた。店頭を空しく立去る時分にすげなく断つた相手の顔をぎよつと睨みました。其の眼は憎悪に燃えてゐるやうに思はれたのであります。

私は、何といふこともなく一種不快な気持を感ぜずにはゐられませんでしたが、やがて考へさせられる時が来たのです。

ある日、警察廻りの記者が社に帰つて次のやうなことを言つた。其れによると、あの男は、廢兵であると詐つて、何處かの家で金を強請してゐる處を見付けられて、拘引されたのです。警察では、厳重にこの者を調べると言つたばかりでなく今後かゝる者が徘徊しても、決して、欺かれてはならないやうに、もし廢兵などゝ言つて、金を強請するやうな者があつた時は、早速交番へ届け出るやうにと一般の町民に向つて警告を發したといふことを聞きました。

其の男が廢兵でないことは分つてゐたが何うして右手を無くしたかといふことも、この話のついでに知ることを得ました。なんでもこの男は都會のある工場に働いてゐた機械工であつたさうです。其れがある時、過つて歯車に觸れたゝめに右の手頸をもぎ取られてしまつたのである。かうしてこの男が、もはや役に立たなくなると、其の工場では、好い加減な口實を設けて情なく追ひ出してしまつた。男は、警察で「自分はたゞ病院へ入れられて、治療をしてもらつたゞけだ」と、言つたさうです。何を言つて訴へても彼等は、其れがためにこの男に同情するやうなことがなかつたのは言ふまでもないのです。もし男の言ふことが眞實であつたなら、勤められも働けず、其の日から乞食をするやうになつたのはあまりに明かな事實であつた。

私は、屢々この社會といふ不思議な怪物の眞相を摑まうとして焦立つことがあります。笑つたり、泣いたり、叫んだりして、また美しく着飾つた女や、男が途の上を歩いてゐるのを目のあたり見る、これが所謂人生であり、大きな建物が地上に聳立ち、いろ〳〵の名の付いてゐる官署や、また製造場や、會社や、劇場などが儼然として並んでゐる。而して、其の中に人が出たり、入つたりしてゐる。新聞紙は、其の日、其の日の出來事を報じてゐる、これが所謂社會であらうかと考へた。其の社會には、また無限の魅力があつて、其のためなら、誰でも命を惜まずに働く、而して其れを名譽としてゐる。そんなら、其の社會其者には、いつたいどんな愛があるのであらうかと思ひました。

町の者は、あの廢兵のはじめて入つて來た當座は、可哀さうだと言つて、藥を買つてやつたが、直に、其の棒切のやうな姿をば顧みなくなつてしまつた。また毎日、危險を犯して、いろ〳〵な工場で働いてゐる勞働者は、やはり社會のために働いてゐるのです。其れが不具者になつてしまつて、皆なの前に頭を下げて來た時は、振向く者もない。

誰が惡いと言ふのでない。この社會が全體にさうなのです。其れが寧ろあたり前のことゝなつてゐる。しかも巡査の劍は、日光に輝いて往來を歩く浮浪人を監視してゐる。

「お前は、廢兵でないのになぜ詐つたか。今度、廢兵などと嘘を言つて金をもらつて歩く處を見付ると警察へ引張つて行くぞ」と、眼を怒らして言ふ。

「廢兵と言はなければ、世間の者が同情をしてくれません。さうでないと私は、飢死をしなければなりません」と、哀れな浮浪人は答へたであらう。

「其れを誰が知つてゐるか。兎に角、嘘を言つて金をもらつて歩くことはよくないことだ。惡いことをすれば、罪せられるのを知つてゐるだらう」と、巡査は肩を聳かした。

さうだ。私も嘘をつくことは惡いと思ひます。けれど、嘘をつかなければ、ならないやうに誰がさせたかといふことを考へました。この世の中では、ある階級の人間は遊んでゐて食べてゐます。しかし、この世の中が、かうして何から何まで便利に、都合よくなるのも、また文明になつたのも、どれだけ多くの人々が危險な仕事をも厭はずにして來たか

知れないからです。而して、其の危險な仕事をする者は、常に金のない、また地位を持たない人々であつたのです。「これも社會のためだ。これも人類のためだ」と、いふ考へが、其等の人々の頭の中になかつたと何うして言ふことが出來ませう。

人間は機械でない。たとへある時は機械でも、働くのに限りがあります。すべての機械は、偶然にも、また必然にも破壞するものです。まして人間に、休養がなくていゝものでせうか。

休養はおろか、不具者になつても尚ほこの有樣なのです。働いて、働いて、根氣が盡きた時に、のめり死ねとでも言ふのですか？、恰かも仇敵か、もしくは生れながらの罪人でもあるやうに、鞭をもつて、眼を光らして監視とするといふのですか？

これが、皆なの頭の中に、たまたま描かれる人生其者であり、社會の實相であらうか。この目のあたり見る現實を離れて、果して他に人生もなく、また社會もないのでありませうか。

このやうに冷酷な、掬錮な、てんでに勝手なことを考へ、好きなことをしてゐる世の中が、即ち社會であつて、「貧乏人は働くのがあたりまへだ。金持は、したいと思ふことを自由になし得る權利がある」と、言ふのなら、社會といふものについて、私は、疑はずにはゐられないのです。

あの不具者となつた勞働者が、自己の權利を主張せずに、廢兵であると詐つたのに對して、私は不快を感じたが、また其れ程、惡いこととは思はれなかつたのです。第一餓えてゐる者が、そのやうな權利の主張が出來ませうか。いかなる嚴正な法律も、また貴い信條も、眞に餓え、眞に疲れてゐる者にとつては何の役にも立たない。たゞ、これを救ふには、食物と安眠を與へる外には策がないのであります。

もし其時、嘘を言はなければ、生きられなかつたら、其の嘘は、惡いことでなく、あらゆる正しいことの中で、最も正しい眞理を含んでゐたのです。廢兵は保護されて、負傷した勞働者は保護されないといふ理由は、勞働者に罪があるのでなく、社會が最も愛すべき筈のものを愛さずにゐるといふ不德に基くものでありました。

から考へた時に、私は、其儘直に新聞に書いていゝものか、何うかと思ひました。書いた以上は、當然ある階級に對して戰を挑むことになるが、今は果して私自身にとつて其の時であるかと惑ひました。寧ろ其事よりも私は永久に謎の如く思はれる、社會を信じていゝものか否かと疑つたのであります。

新聞記者の職にありながら、私は、新聞を思ふがまゝに編輯する自由を持たない。これまで雇はれたゐた者の慣習上から、もう一つには新聞社と利害を共通にする對個人的の關係上から、而して、其等はいづれも考へて見て、實に矛盾した、卑しむべきことであつたのです。

當時、五六里隔つた西南の國境では、汽車の線路を通ずるので、山中を爆破してトンネルを鑿ち、崖を切り拓いたりして、幾百人の工夫が働いてゐたのであります。其れで、ちやうど私が、眼を曝らしました新聞にも、三人の工夫が自から仕掛けて爆破したダイナマイトに打たれて死んだといふ記事が五號活字の小さなみだしで三四行ばかり載つてゐました。もとより、其等の人々の姓名もなく、たゞ死者の數だけが書いてあつたに過ぎなかつた。

斯の如きは、どの新聞を讀む人達も感ずるところであらう。たとへば、炭山で瓦斯が爆發して幾何の勞働者が死んだにしても、たゞ其の炭鑛の名前とちよつとした狀況と死んだ勞働者の數だけが記載してあるのに過ぎない。勞働者は金さへ出せば無限に何處からでも集つて來るもので、いはゞ造作なく手に入れられる器械の如く思つてゐるのだらう。而して、さながら將校が兵卒を指揮刀の先で自由に左右に動かすことが出來ると信じてゐる程度に、資本家は勞働者を決して自分と同等な人間とは考へてゐなかつたのです。

彼等が斯く考へないのは、まだ深くも怪しむに足りないとするが、社會の良心をもつて任じてゐる新聞の記事までがこの矛盾を恥かしげもなく曝らしてゐました。

「工夫の慘死」に隣りして、この町の素封家である近江屋の隱居が死んだ、其の記事が二號のみだしで約一段半も麗々しく載つてゐる。老人が生前の德を讃美して、あること、ないことを書き立て、其の死を傷んで、社會の損失だとまで言つてゐるのです。其れに加へて、葬式の日の有樣まで細叙し、式場に列した町長や、辯護士や、少し重立つた者の姓

名を洩らさずに載せてゐた。この新聞社と近江屋とは政黨的には特別の關係があつたのにもよるけれど、實に馬鹿々々しいことでした。

死んだ隱居といふのは、年既に七十を越してゐました。私が其の家の前を通つた時、よくこの白髮頭の隱居を見ました。昔からこの町の陶器商で、店頭の火鉢の前に座つて、煙草を喫つたり、茶を飲んだりしてゐた。噂に聞くと、もう三年ばかり中風の氣味で、半分耄碌をしてゐたさうです。だから、こんな老人が生きてゐても、また死んでしまつても其れがこの社會にとつて何等の損失になつたり、また利益になるとは考へられなかつたのです。

これに較べると、血氣な勞働者が三人も亡なるといふことは、獨り其の人にとつて不幸なばかりでなく、この社會に於ても生産の上から見て實に損失でなければならない筈でした。

私は、獨り自黨の利益をはかる爲ためには、書くべきことも默つてゐたり、また書かなくてもいゝことに筆を曲げる恥知らずの田舍新聞を批難するのでなかつた。實に都下に於ての有數な新聞が等しく斯樣な不見識であるのを憎んだのです。なんで權門に媚るのでせうか。なんで獨り享樂階級の男女の動靜のみを神經的に注意して、丁寧にも寫眞に撮つたり、其れを少しでも委しく書くことを、名譽の如くに考へてゐるのでせうか。其のために他の新聞と競爭をして、互に記事の抜かれざらんことを力めてゐるのでせうか。而して、其れが果して、この社會にいかなる意義があるのでせうか。

思つて見たらばいゝ。この一日に、どれ程廣い世界では、炭坑に、工場に、或は製造場に、また海上にて、死亡する犧牲者があるか知れない。其等の人々は彼等とは同じい人間ではないのか？其等の人々は、この華かな文明な社會の仲間入りを拒絶されてゐる人間であるのか？恐らく、死によつて永久に其等の人々が地上にあつたことも、またいかにして死んだといふことも、姓名すら記憶されずにしまふであらう。

新聞紙に麗々しく、寫眞を掲げられるやうな女や、男は、これに較べてどんなに苦しんで、社會のために、人類全體のために、德になるやうなことを盡して來たか。富豪が何んであるか？政治家が何んであるか？實業家が何んである

か？女優が何んであるか？

默々として、知られずに、虐げられつゝ、しかも死ぬまで働いて、この社會のために盡してゐる無産階級者を思ふ時私は眞に一種の偉大なる激勵を感ぜずにはゐられませんのでした。

其れを感ずるにつけ、私は、智識階級の中堅である現在の新聞記者生活をして、いつまでもかうしてゐられない氣が起つたのです。

其れから、二日ばかり經つた午後のことです。探訪記者が汗を拭き〳〵編輯室へ入つて來た。

「なか〳〵外は熱いですよ」と、言ひながら忙しげに白い扇子を使つて、テーブルに向つて腰を下した。

「こんな熱い日には、別に事件もなかつたでせう」と、私は、拭いても後から汗のにじんで來る、彼の額際のあたりを見ながら言つた。

「轢死者がありましたよ。其れ二三日前に、廢兵だと詐つて拘引された、右の手のない男がありましたでせう。あの男が轢れたんです」と、彼は答へて、直に原稿紙を前に引き寄せて、筆を取り上げて、其の記事を書きにかゝつてゐた。

私は、あまり意外な事實に驚きましたが、心の内では、さうもあるべき筈だとも考へられたのです。とはいへ、あの憎惡に燃えたやうな眼付をして、相手の顔を睨んだ印象は、まだ活々としてゐるのに、其の人はもうゐないのであるといふことは、頷けられないやうな疑すら起つたのであります。

「何處でですか？、自殺なんですか？」と、私は、急しげに聞いた。

「頭と足を轢かれて、無慘なものでした。ちやうど鐵橋から一、二丁行つた處です。自殺だか、過つて轢れたのかよく分りません。多分自殺だと思ひますが、昨夜警察から放免になつたのださうです。警察では、自殺でないと否認してゐます。今更自殺をするやうなことはない。するならもつと前に何處かで死んでしまつた。きつと、もうこの町にはゐられなくなつたから、他の村か、町へ行かうと鐵道線路について歩いて行つたものだ。而して何か考へ込んで、ぼんやりとしてゐて汽車の來るのを知らなかつたのだと判定してゐます」と、探訪記者は答へた。

いづれが眞に死因であるか私には分らなかつた。けれど、なんで其れが食ふに困つてした自殺でないとは飽迄も言はれ得やう。今日は考へずに生きてゐる者も、明日は、しみ〴〵と我が身の上を考へて、極りなく悲しまずにはゐられないことがあるのをなんで否定し得やう。もし、あの男が食はれずに、自殺をしたならば、其れは、誰にとつても少なからず考へらるべきことだ。かうして食し、着物を被て、また滿足してゐる者がある中に、其のことが出來ざるために、生命を自から斷つてしまはなければならぬといふことは、容易な事實でない。其れは奇怪な空想でもなければ、また氣まぐれな遊戯でもなく、其の人にとつては、永久に取り返しの付かない怖しい現實なんだ。而して、生活を共にしてゐる社會の默つて見てゐられる事柄であらうか。

「僕は、これで轢死した者を三度見ましたよ。一人は、若い女でした。其れは、海岸線で、僕等が海邊で遊んでゐて、土手に上ると、今しがた來た列車に轢れたばかりなのでした。色の白い、美しい女で腰を轢れたのでした。覺悟の自殺らしかつたが、いよ〳〵死ぬといふまでには、どんなに迷つたか知れません。きつと其の附近を徘徊したにちがひなかつたのです。其時、直こちらの海岸では僕等は波打際で遊んでゐたのです。だから、其の女の姿を見たのかも知れませんが、氣が付きませんでした。もう一度は、縣會議員の小田氏が、S村との堺にある踏切で轢れた時です。これは滅茶苦茶に體がなつてしまつて、社から行つた時は檢死が濟んだ時でした」と、探訪記者は、筆を指から離さずに、思ひ出したまゝ語つてゐました。

やがて彼は、其の記事を書き終つた。給仕を呼んで、其れは明日の新聞に載るべく工場に廻された。元來、どちらかといへば樂天家の其の記者は、もう其のことを心から忘れてしまつたやうに、而して、思ひ出さない限りは、二たび光景が眼に浮んで、其のために彼の心は惱まされるといふやうなことはない如く、面白さうな世間話をして他の記者をば笑はせてゐるのでした。

私は、窓際に椅子を引寄せて、獨り、外の景色を眺めました。遲々として、暮れるに間のある夏の日も、いつしか傾いて、さながら描きたてのつや〳〵した光のある油繪を見るやうに、遠くの方の景色までが浮き上つたやうに、見える

のでした。其の景色には昨日と今日の變りがない。蟬の聲が遠く流れて來る鐵橋のある方には、畦につゞく並木の頂きが、彼方に見ゆる森影の中に混つて、穩かに一樣に日の光りを浴びてゐるのである。やがて日が暮れゝば町には燈火が點いて、胡瓜や、茄子や、西瓜などの圃から取りたての野菜が濡れたまゝで露店に並べられて、湯から上つてさつぱりとした浴衣に着換へた人々の群が笑つたり、話したりしながら其の前を歩くのが見られるだらう。かうして男の死が、この平和に見える自然にもまたあるがまゝの人生にも、何の影響がないのを感じたのであります。

たとへ何うすることも出來ないことであるとはいへ、これで正しいのでありませうか、これで誰にも不安がないのでありませうか。而して、永久に、この男の死が、また他にもかゝる人間の死があらうが、其等がみんな仕方のないこと、何うすることも出來ないことであつて、たゞ運命であるといつてあきらめられて、葬られてしまふのでせうか。私はあまりに、運命の不平等に對して、また其のいはれないのに對して、ある焦燥と反抗を心の裡に感ぜずにはゐられなかつたのです。

社から出て、町裏を圃の細路について歩いてゐました。脊の高い玉蜀黍の葉が肩のあたりまで垂れ下つてゐます。足許には紫色の紫蘇が香つて、細い莖にはうす紅い花が咲いてゐました。この時、日はもう山の端に舂いて、空には琥珀のやうな、また炎のやうな雲の嶺が四方から湧き上つてゐるのでした。しばらく立止つて、其等を眺めてゐると、何處からともなく、地底に響く轟きを聞いたのです。而して、其の音のする方には、眞赤な火が雲の中で燃えるのです。あまりに其の雲は遠くて、また低く地平線に接してゐたので、今頃、勞働者がダイナマイトで山を崩しつゝあるのでないかと想像もしたが、其れは、自分にも信じてゐない空想であつて、この頃毎晩聞かれる遠方の雷鳴であつたのです。而して、涼しい風が絶えず其の方から吹いて來るのでも分つてゐたのであつた。

其夜、私は久しぶりに、醫者のM氏を訪ねて將棋を差さうと思つて、宿を出かけたのであります。M氏といへば、變つた人として知られてゐる。年は四十に近かつた。あまり口數をきかない、何となく氣むづかしい人であつたが、また親切なところのある人でありました。年の割合に早くから頭髮が白くなつて、ちよつと見たところでは、誰でも五十位

に思つたのであります。非常な讀書家であつて、考へも進んでゐました。金持に向つては、「私は高價藥を用ひますから他の醫者に較べて高いかも知れない」と、言つて藥價を澤山に請求しましたが、貧しい者に對しては、安くしてやつたばかりでなく、決して金の催促をしたことがありません。金持の家から迎ひを受けた時は、いつでも俥に乘つて行きました。其れでなければ俥をもつて迎ひに來なければ行かなかつたが、貧乏人の家であると歩いて行きました。恐らくこの町で、新平民の村から夜中に迎ひを受けて直に出かけて行くやうな醫者は他にはなかつたけれど、M氏だけは、決して厭な顏もせずに迎ひの者といつしよに連れだつて行きました。

「こんなに夜分お起し申しまして、先生に誠に申譯けありません。このご恩は決して忘れはいたしません」と、新平民の村から迎ひに來た男は、この町の他の醫者達が、常に自分等の種族に對する侮辱に近い横柄と傲慢な態度とを思ひ併せて、心から感謝の意を表せずにはゐられなかつたのです。

「決して、そんな心配はいらない。いつ頃から、其の病人は惡くなつたのだ。どんな風なんか？」と、提燈をつけて迎ひに來た者と並んで歩きながら、M氏は心からやさしくたづねるのでした。

M氏の家は町から少し隔つた靜かな處にありました。此處から新平民の部落へは、河があつて其れにかゝつてゐる橋を渡つて、全く人家のない淋しい路を半里も行くのでした。其の間、二人は、いろ／＼のことを話しながら歩きました。寂然とした闇を破つて、水のせゝらぐ音が聞えて來ます。またおし默つたこんもりとした森があつて、其の傍を通る時は夜の色に一段闇が濃くなるのを覺えたにちがひありません。

金持からは、そんな風なのでM氏は、あまりよく言はれてゐませんでしたが、貧しい者は、M氏でなければならぬやうに言つてゐました。

「やあしばらくでした。さあこちらへ」と、M氏は、私を導きました。やがて二人は將棋盤を前にして、對ひ合つて坐りました。

「先生は小田氏が汽車に斃れた時に、非常に踏切番に對して同情しておゐでのやうでしたが」と、私は駒を並べながら

言ふと、
「さうです、同情をしてゐました。いつかあの時のことを委しく、君に話したと思ふが、何か其れについて君は書きませんでしたか」と、氣むづかしさうな顔付をしてM氏は言つた。
「お聞きしたとほり、踏切番の當時の事情について書きましたのは、私の社ばかりでした。けれど、踏切番にも幾分かの責任はありましたので、全然是認することも出來ませんでしたが」と、私は答へた。
「平常は、踏切番の奉仕について、皆なは有がたいとも何とも思つてゐない癖に、少し間違があれば、用捨なく彼等を責めるのだ。日夜、汽車の來るたびに旗を持つて警戒するといふことはなか〳〵容易なことぢやない。何にもせんで遊んでゐる人間なんかに分ることぢやない」と、M氏は、益々不興氣な顔付をして言ひました。
私は、先日町で見た右手のない男が、今日轢死した話をすると、M氏は頭を傾げながら眉を顰めて聞いてゐましたがやがて、
「さあ、來たまへ」と、言つて、先手を私にさすべく促したのです。
夜は更け行くまゝに靜かになつて、たゞ蟲の鳴く音が、窓の外から聞えて來るばかりでした。三番さして、三番ともM氏の敗に歸しました。負けきらひの彼は、もう一番、一番と自分の勝つまで、私にさゝせやうとするのでした
「こんな時に、何處からか迎ひが來るものだ」と、彼は獨言をして、復讐を全うしないうちに、他から不意に妨げられはしないかといふやうな不安までを感じてゐるらしかつた。けれど、十二時近くなつたけれど、誰も玄關を訪れて、寂寞を破るやうな者もなかつたのです。二人の心は全く盤の面に注がれてゐた。
たゞたよりなげに鳴く蟲の聲が耳に入つたばかりです。私は、其の音を聞きながら、今自分は何處に坐つてゐるのかと時々思つた程、頭が疲れてぼんやりとしてゐました。
やうやく最後に私に勝つたM氏の顔は喜びに輝きました。また近いうちに戰ひを期して、其家を辭して外に出ました。
仄白い夜の空は、つゝましやかに輝いてゐる星の光りを宿して、音もなく眠つてゐる大地の上を圓やかに掩はんと覆

れかゝつてゐました。晝間は日光に濕れたやうに枝葉が閃いて、蟬の聲が風にふるへてゐる森も、また林も、銀のやうに流れてゐる河も、岡も、而して、すべての建物までが、今は一樣に黑く、暗くなつて、其の空の下に默つてゐます。

私は、冷かな夜氣を身に浴びて、しばらく誰も通らない路の上をさ迷つてゐるうちに、だん〳〵氣持がはつきりとして、頭の疲れも癒つて來ました。

見れば、見る程荒寥たる大空の光景です。何處からともなく吹いて過る夜風に、草木の葉は一時にさわめいて、其の聲の中にいろ〳〵な暗示を囁きます。私は、急に粛殺とした氣持になりました。

太古から、今に至るまで變らない夜の自然の景色です。ほんたうに、人間と自然との接觸した刹那の感じであります。こゝに宗教が產れました。こゝに生活と藝術とが創まりました。この森が住家で、この大空が裝飾であつた時代もあるのです。而して、今は金持は、奧深く廣壯な建物の中に隱れてしまつて、この私達の子守唄であつた風の音をも聞きません。また物思はせる、なつかしい希望であつた夜々の星の移り變りにも注意しません。獨り無產者は、昔と變らずに、この自然を友としてゐるのです。私は、この時、空を仰いで、

「無產階級者」と、幾たびも叫んだ。

言ひ知れぬ感激は體の中を走り、悲壯な氣持に覺えず身の毛が立つて、熱淚の湧くのを禁じ得なかつたのです。

無產者は家を持たない。私慾のために働かない。無產者は漂浪者である。自然は彼等の家であり、大地は皆なの母である。人類の幸福が卽ち彼等の哲學である。彼等は人生あるを感じて、自分あるを顧みなかつた。

現代がいかに昔より墮落してゐても、まだこの偉大なる觀念は無產階級者に存する。而して、金持も、一たび人間性について感激したならば、この群の中に入つて來るだらう。……から、私は、思つたのです。

醫者のM氏の言つたことにより、また親しく當時踏切番の母子について聞きたゞしたところによると、縣會議員の蝶死は、實に後に語る如き機會であつた。

踏切番の小舍は町を出端れてS村との堺にあつた。其處は街道であつて、其の道について行けば海岸の方へ出られた

のです。路の兩並には、昔からの年老つた松の並木がありました。其の間を常に旅人や、馬車や、また人力車などが縫ふやうに過ぎるのが見られたのです。時としては、全く、一人の影すら見えなかつた、寂然とした夏の午後もあつたのでした。

鐵道線路は、青田や、岡を横斷して、南と北に限りなくつゞいてゐました。遠くには國境の山々が平野の彼方に起伏するのが見えて線路に添うて、やはり何處までも飛び飛びに立ち並んでゐる電信柱は、線路と共に末の方になると重なり合つてゐるやうに見られたのでした。燕は電線に止つて、唄をうたつてゐます。小さな咽喉許の赤い頸を傾けながら、これまで旅をして來た他國の景色を思ひ出してゐるやうに、何となく其の姿の憂はしげに見えることもあります。而して、このあたりは終日平和であつた。

小舍の主人は土方で、この線路についてある時は南に行つたり、ある時は北の方に行つて働いてゐた。ついこの間は小舍から七八丁離れた處で、線路の兩側に四五人宛の男が立つて、最初は皆な一樣に南の方を向きながら、眼は足許の堀り返されつゝある土に落して、額際から汗を滴らしながら、手に手に高く鶴嘴を振り上げて、

「エンヤコラ、サンノウ……エンヤコラ、サンノウ……」と、聲を揃えて言つてゐた。

彼等は、かうしてしばらく働いてゐたが、今度は北の方に向き直つて、やはり同じことを繰返して、だん〳〵と場處を移つてゐた。其の時分は、よく小舍に是等の男共が集つて、狹い處に重なり合ふやうに横になつて晝休みをしてゐたものです。燒けた土の上に投げ捨てられた鶴嘴の先は、たへず小石や、土を破つて、研ぎ澄されてゐて、日の光りを一點に集めて星の輝くやうに鋭く反射してゐました。

彼等の群は、今日まで此處にゐて働いてゐたかと思ふと、いつしか何處へか行つてしまつたのです。其の群の中に、この小舍の主人も加はつてゐました。彼の子供は十歳になりました。

少年は、昨日まで、南の方の田の畦に立つてゐる榛の木の葉がさながら銀のやうに閃いて、赤い太陽が頭上で燃えてゐる眞下で、鶴嘴を光らしながら働いてゐたかと思つた群が、今日は、青い北方の空が垂れ懸つてゐる線路の上から流

れて來る唄の聲を聽きました。

斯のやうに平常父親は留守であつた。汽車の笛の音が遠くで聞えて、耳を傾けると幽かに車の響が聞えるやうな氣がしたが、まだ其れはほんたうに聞えるのでなかつた。思ふに、汽車は大分遠い處である。出て見ても、煙が見えない。いつも母親は、こんな時分に外に立つてゐた。やがて彼方の森の上に、あるかなしかの煙が見える。其の時刻をはかつて、母親は踏切に柱を倒して人馬の通行を止める。而して、彼女は白い旗を持つて立ちながら汽車の過ぎるのを待つた。

短かい棒の先についてゐる白い旗は、煤煙に染り、雨に濡れ、風に晒されて、白い色が灰色になるまで汚れてゐました。汽車は地鳴りを立て、疾風のやうに眼の前を過ぎ行くのです。たゞ人々の窓から覗いてゐる顔がぼんやりと白く、客車の色が黄色く横に線を曳いて、しばらく空間に幻となつて、其等の印象を描いてゐたが、やがて跡形もなく消えてしまふのでありました。

この時、彼女の手入をしない、油氣の乏しくなつた頭髮は、汽車の煽りを受けて波立ちます。而して彼女の姿も、白い旗もしばらくは黒煙の裡に見えなくなるのです。けれど、直に煙は四方に散つて、其處に立つてゐる貧しげな女を浮き出しました。彼女は、既に小さくだん／＼遠ざかつて行く汽車を見送りながら踏切に横へた柱を上げるのです。すると、待つてゐた人や、馬車が動きはぢめて、踏切を過ぎるのでした。

彼女は、かうして立つて、汽車の過ぎるのを待つてゐる時分にいろ／＼のことを思ひ出すことがある。まだ十三四の少女の頃、よく海岸の波打際に行つて、沖から流れて來る木を拾つたり、また貝殼を拾つたりしたことを思ひ出します。ある暴風雨の日のこと、沖に悩んでゐる仲間の漁船を援けるために、皆なが濱に集つて船を出さうとしてゐた。彼女は友達と三四人で砂山の上に立つて其れを眺めてゐた。風は尚ほ止まずに烈しく吹いてゐて、着物の裾を捲り上げる。みんなは慌て其れを兩手で押へると髮の毛が吹き飛ばされて何處かへ持つて行かれさうに壞れてなびくのであつた。浪は怒り狂つて船の出るのを拒むやうに、もし其れに逆つて出たなら、たゞ一息に覆して見せるといふ氣勢を示してゐた。

これから漕ぎ出さうとする船に集つた、大勢の男等が、勢いつぱいに聲を張り上げて何か言つてゐるのであるが、浪の音と風の叫びに掻き消されてよく分らなかつた。沖の方には、黒雲が低く舞ひ下つて、物凄いまでに空が暗くて、其の下では浪の色が眞黒になつて見えてゐた。――其の時のことを思ひ出すこともあります。

彼女は、主人と共にこの踏切小舍に移つて來たのは、三年ばかり前でありました。其れまでは、もつと北の方に生活をしてゐました。

たま／＼過ぎる貨車の上には、其の時分の知り合の工夫などが乘つてゐることがある。其男は、この汽車で幾里か隔つた波の音の聞える、常に魚の臭ひの構内の地面に染み付いてゐる小さな驛に歸つて行くのでした。

「姐(あね)さ、みんな達者でゐるかえ？」と、陰氣な貨車の上から、彼女に向つて聲をかけることがある。

彼女は、其の聲に驚いて、はつと思つて、貨車の上に立つてゐる男の顏を見上げました。其男は、屋根のない貨車の荷物の積んである傍に立つて、此方を見て笑つてゐた。彼女も、やつと其の男の顏を思ひ出して、につと笑ひ返した時は汽車は既に遠ざかつてしまつて二人の顏が互によく分らない程に、距離が遠ざかつてしまつた。彼女は、何も答へる暇がなかつたのです。

これと似たやうな經驗は、其の少年にもありました。彼は、よく物思ひに沈みながら小舍の前に出て立つてゐるとちやうど其の時カラツコロ、カラツコロと車の鳴音を立て、トロツコが南から走つて來て、小舍の傍を通り過ぎて北に向つて行くことがある。其れには、帽子を阿彌陀に被つた三四人の勞働者が乘つてゐた。彼等の中のある者は默つて腰をかけて腕組みをしてゐる。ある者は煙草を喫つてゐる。ある者は何か言つてゐる。

ふと少年は見上げると、其れには思ひがけなく、父親が乘つてゐた。煙草を喫つてゐるのが其れでありました

「父(ちやん)が乘つてゐる。父(ちやん)が乘つてゐる」と、少年は喜びと、驚きにつゞけさまに叫びました。水が出た後で、線路の敷いてある堤が崩れて其の修復工事のために忙しくて、父親は二三日作事場に泊つてゐて歸らないのであつた。少年は、父親が何うしてゐるだらうと思つた時に、たま／＼過ぎるトロツコに乘つてゐる父親の姿を見出したのです。其れにし

てはなぜ父親が默つて彼方を向いて煙草を喫つてゐたであらう。若し、自分が氣付かなかつたならば、恐らく知らぬ顔をして、父親が我が家の傍を通り過ぎてしまつたであらうと思ふと、少年は限りない孤獨と、言ひ知れぬ淋しさを感ぜずにはゐられなかつたのです。而して、彼は、ある反抗的な氣持になつて、眼に涙を溜めて、トロツコを見送つてゐました。

すると、二條の線路の上にコロツ、コロツと車の音を立てながら、彼方に遠ざかつて行くトロツコの中から、父親は、體を伸ばして此方を見向きながら、

「おとなしく待つてゐろよ。仕事が濟んだら直に歸るだから」と、父親は叫んだ。

其の聲は、遠ざかりながら少年の耳に聞えて來ました。

「父あ、何時歸るだかい」と、少年は、小さくなつて行くトロツコに向つて、叫びました。

其の聲は、たしかに先方へ聞えたらしかつた。父親は、其れに答へて何か言つてゐた。けれど、もう其の聲は、少年の耳にはつきりとは聞えなかつた。尙ほ、少年は燃えるやうな瞳で、其方を見詰てゐると、父親の顔が全く分らなくなつてしまつたのです。

たゞ、青い空の下に、風が吹いてゐました。少年は泣きたくなるのを我慢して、いつまでも其處に立つてゐた。

ある時、線路を視察して歩く、洋服を被て髭のはえてゐる、可なり年をとつた役人が、この小舍に休んで、茶をもらつて飲んだことがあります。其時、この男は、奥州の方で、最近線路を止めてある螺旋釘がゆるんでゐたのを氣付かなかつた爲に汽車の震動で、進行の際に線路が刎ね上つて、急行列車が顚覆して、客車は粉碎し、汽罐車は土中に埋沒したといふことを話しました。また、其のために多數の死傷者を出したことを告げた。

少年は聞くばかりでも怖しかつた光景を、其話を思ひ出すことによつて、ふたゝびこの時想像の眼に描いたのです。其の慘事の原因が、自分の足許にある枕木に喰ひ込んだ、線路を止めてゐる錆びた赤い釘にあるかと思ふと、少年は其の釘に眼を落しました。

「釘がゆるんでゐたら發見しよう。而して、汽車が知らずに進行して來たら、自分は、其の汽車を止めよう」と、少年は思つたのです。

つい四五日前、學校で修身の時間に教師から聞いた話に、少なからず彼は感激したのであつたが、併せて其の話が思ひ出されたのでした。

其れは、外國にあつた事件である。一人の兒童が、鐵橋に故障のあるのを發見した刹那ちやうど汽車が進行して來るのを認めた。其れには多數の人々が、身に危險が迫りつゝあることも知らずに乘つてゐた。兒童は、自分の一命を犧牲にしても、其等の人々を助けなければならぬと思つた。彼は、勇敢に線路の眞中に跳り込んだ。而して、兩手を擴げて聲を限りに汽車に向つて叫んだ。全速力で疾走しつゝあつた汽車は、今や兒童の身に迫つたけれど、彼は、ひるまなかつた。頭髪を逆立て汽車を止るべく叫んだ。

僅かに、皆なが救はれた時に、中には感慨極まつて泣いた者もあつた。女は兒童に接吻し、男は彼を高く抱き上げた。

「どんな人間でも、其の志さへあつたならば、この世の中のために盡されないといふことはありません」と、語り終つて教師は言つた。

少年は、其れを思ひ出したのです。

家に入つて、父親がトロツコに乘つて、過ぎたのを母親に告げやうと思ひました。母親は、窓の下で、針仕事をしてゐる。彼女は、針を持ちながらも、耳を常に遠くに澄してゐるのでした。汽車の往來する時刻は、時計の針が指すよりも、彼女の耳の方が確かであつたのです。

少年は、日の照らしてゐる熱い、輝かしい外から、小舍の戸口に入らうとすると、紫色の蜥蜴が、乾いた眼の前の地面を横切つた。而して、鐵道線路の光る土手の草の中に隱れてしまつた。彼は石を一つ、其の方に向つて投げ付けた。けれど蜥蜴は姿を見せなかつたので、彼は母親の傍へ行つた。其時、彼女は氣分が惡いといつて俯向いてゐたのです。

「父(ちや)は、いつ歸らしやるい」と、少年は、父親の行つたことを母親に告げて、かう言つて聞きました。

「まだ、歸らつしやらない」と、彼女は、苦しい裡にも、大水が出たために壊れた堤の工事を想像しながら答へた。少年は、限りなく淋しく感じました。

彼女は、苦しい中にも起ち上つて、汽車の來るたびに外に出ました。踏切に柱を倒して、旗を持つて立つてゐるのが彼女には容易でなかつた。汽車は疾風のやうに彼女の前を過ぎて行つたけれど、熱のために體がほてつて、頭が痛くて、やゝもすると眼が眩んで昏倒しさうになつた彼女には、其の間が長い、長い時がかゝる如く思はれた。平常は、眼を上げて、客車の中から顏を出してゐる男や、女を見送つた。其等の中には美しく思はれたのもあれば、金が澤山あると見えて、贅澤に着飾つてゐた者もあつたが、今は、そんな者を氣にとめて見るといふ考へなどなかつた。やつと、汽車が過ぎてしまふと、彼女は、小舍の中へのめり込むやうに入つて倒れたのです。

醫者のM氏は、少年が迎ひに來たので、日暮方前に、踏切番の小舍へ出かけて行つた。而して、彼女を診察した。檢溫器を拔き取つて見た時、醫者はびつくりした。彼は、しばらく眉を顰めて考へてゐたが、

「頭に氷を附けて、ちつとして臥てゐなければならん」と、言ひ置いた歸つた。

夕日が松並木のつゞく街道に、其の赤銅色の光線を斜めに射した時分、少年は町の方から藥壜を握つて歸つて來ました。

其後、M氏が私に言つたことです。

――あの大熱であるにかゝはらず、踏切番の女房は、あの日、夜もやはり汽車の來るたびに外に立つて旗を持つてゐたといふが、よく我慢がし切れたものだ。これが職務だと考へるから出來たものの、普通の人間のされることぢやない――

少年は、晝間の疲れで、床に入るとすや〱と眠つてしまつて、夜、何があつたか知つてゐなかつた。けれど、ふと眼を醒ました時に母親の苦しさうなうなり聲が耳に入つて、今迄、安らかに樂しい夢を見てゐた、まだ其の夢が醒め切らずに、ぼんやりとしてゐる頭の中に、あゝ母は病氣だつたのだと氣付かれた。

「お母――氣分はどうだい」と、少年は、暗いランプの點いてゐる方を向いて、其處に自分と並んで臥てゐる母親にた

づねた。

彼女は、默つて其れには答へなかつた。頭が痛んで、物を言ふのが厭はしかつたのであらう。少年は、しばらく眼を開けて天井張を見詰めながら、父親が早く歸つてくれゝばいゝがと思つた。もし、明日、トロツコが通つたなら、たとへ知らぬ人が乘つてゐても、父親に言傳を頼まうと考へてゐた。すると、いつしか彼は、自分の空想に安心してか、其れとも自然に襲つて來る眠氣のためにか、二たびすや〳〵と眠つてしまつた。

明る日、少年は學校を休んで、自分が平常母親や、父親がするのを見てゐたやうに、汽車の來るたびに外へ出て、踏切に柱を倒して、白い旗を持つて立つてゐました。

彼は、自分がかうして踏切を塞ぐと、彼方からつゞいて來た荷車や、馬や、人がみんな立止るのを見ました。また、汽罐車から顔を出してゐる見張人が、自分の差し出してゐる白い旗を見て安心して行くのを見ました。彼の小さな心に汽車に乘つてゐる、曾て見たことも、また知つたこともない男や、女や、子供等が何等か自分の生活に關係してゐるものゝやうに始めて思はれたのです。汽車の窓から頭を出してゐた、ちやうど自分と年頃の同じい少年が、物こそ言はなかつたが、なつかしげな眼付をして自分を眺めて去つた時には、彼は、何處の國の少年であるか、而して、永久に二たび見ないであらうのに、限りない親しさを心の中に感ぜずにはゐられなかつたのです。彼は、其等の人々の身の上に、自分がかうして立つてゐることに於て、ある安心を與へるのが何となく嬉しく思はれた。而して、汽車が過ぎ去つてしまつた後で、柱を上げると今迄、其處に靜かに止つて待つてゐた、人や、車や、馬がつゞいて踏切を通るのを見て、彼は、一種自分の心の思ひ通りに行つたのに對して罪のない誇りを感じたのであります。

どういふわけか、其日の午後になると、空の色が赤かつた。けれど、旱のつゞく時には、よくかうした現象が見られるものです。少年は、母親の枕許に坐つて、外の圃に繁る野菜の葉に、赤つぽい日の光りが流れてゐるのを見てゐました、たま〳〵トロツコが過ぎるのかと思つたが、さうでなくて、遠い國境の山の巓きの方に當つて、今日も雷が鳴つてゐるのでした。赤つぽい空には、虎斑形の雲が漂つてゐて、其の遙か下には箸のやうに電信柱が立つてゐた。而して、

其れにつながる、やはり赤つぽい光線を受けて輝いてゐる電線には、燕が不安げに頻りと啼いてゐました。

「汽車が來た！」と、不意に、少年は汽笛の音を聞き付けて立ち上つた。

急いで、旗を持つて、小舍の外に出ると、街道を走つて來る人力車を見ました。少年は、慌て柱を倒して踏切を塞がうとした。けれど、もう其の間がなかつた。なんで少年は、其時のことを忘れませう。

車上の人は、酒に醉つて、非常に怖しい權幕で手を振り上げて怒鳴つてゐました。而して、少年が柱を下す前に、一氣に車は其處を驅け切らうとした。凄まじい勢で汽車は人力車に衝突すると、車は粉碎して、乘つてゐる人は慘たらしく轢死してしまつた。不思議に獨り車夫だけは刎ね飛されたけれど、深い傷も受けなかつた。

其處で、問題となつたのは、汽車が通る前に、この踏切が塞がれてゐなかつたといふのです。少年は訊問された時に、「うつかりしてゐました、汽笛を聞いてびつくりして飛び出しました」と、正直に、其の當時の自分を自白したゝめにやはり踏切番の不注意といふことになつて、責任を免かれることが出來なかつた。

轢かれた男は、縣會議員の職を持つてゐた。前日、郡長の送別會に出席して、つゞいて一夜、何處かで飲み明して、この日男は家に歸る處であつた。

「少年に罪がない。誰にも罪がない。車の上から車夫を叱り付けてゐた男に罪があるのだ。これが縣會議員であるから、踏切を塞いでなかつたなどと責任のやり場を無理に、不幸な番人に押付けてしまふのであるが、もし、其れが何の名もない醉漢であつたり、一介の乞食であつたならば、彼等は、其等の生死についてあまり問題とはしないだらう。また平常は、踏切番の職務に對して、何の同情をも持たない人々が、たとへば病氣の中でも起きて、職務のために盡してゐたことや、すべて其等の生活を知らうとも欲しない人々が、間違ひのあつた時だけ、容捨なく弱い者を責るのは、何うして其の人々に限つてかゝる權利があるのか」

かう言つて、醫者のM氏が、其時、憤慨して私に向つて語つたのです。

其後、間もなく、踏切番の小舍には、其の一家の者が見られなくなつた。

私は思ふ。知つたら、其れを行ふことです。感じたらさういふやうに叫ぶことです。信じたら、其の信念のために戰はなければなりません。………事毎に、この社會の有樣を見るにつけ、また、聞くにつけて、私の決心は遂に固へなりました。

私が、この三年の間、生活をしてゐた町を去つたのは、ちやうど雪の霏々として降つてゐる、寒い冬のある日のことでした。其れにつけても、私は、老配達夫の言つたことが思ひ出されます。何といふ美しい人間性の現はれであるか？こゝで無産階級について語つたついでに、最後に、この男の言つたことを極く簡短に述べることにいたしませう。

――さうです、たゞはがき一枚のために、私は、毎日あの山を越えるのです。先になつて歩いて行く、其の村の者が「またあの家へ行きなさるのかね」と言ひます。其の村は、滅多に行く郵便もない寒村です。戸數も極めて少なく、郵便のからして毎日のやうに行く家はきまつてゐるのです。「あゝ、あの家だ」と、答へると、「一枚ばかしのはがきで行きなさらんでも、どうせ村へ歸るのだもの持つて行つてあげますぜの」と其の村の者が言つてくれます。私は、決して規則が怖しかつたり、臆病だつたりして、頼めないのではありません。もしや、このはがきが途中で間違ひがあつてなくなつてしまふとか、若しくは、忘れられるやうなことがあつたら、毎日、息子から來る便りを唯一の樂しみにして待つてゐるお婆さんに對してすまないと思つたからです。而して、私は、かうして人々に何等かをもたらし得ることが出來たなら、自分の職業に對して滿足をしなければならぬと考へるからです。何一つこの社會に對して、奉仕が出來ないのでは、地上に生れて來たかひがないやうに考へるからです。

――お婆さんは、もういゝ年をとつてゐました。七十の上になるでせう。而して、たゞ家には一人ぎりなんです。杖とも綱とも頼みとするのは、やはり他に兄弟とてなく、全く一人しかない息子だけでありました。其の息子は、都に出て働いてゐるさうです。親が子を思ふに劣らず親を思つてゐると見えて、新聞を送つて來るか、はがきを書いてよこすか殆んど毎日のやうに安否を知らして、其の年老つた親に安心をさせるのでした。

――私は、他の村へも配達に行きます。けれど、山を越えて行くのは、大抵この一軒のために行くのでした。それがた

めには、どんな吹雪の日も、あの海邊に近い山を越さなければなりません。甚しい吹雪の日は、野原にも路が付いてゐない。全然、村と村の間は、通行する人が絶えたために、互に隔離されてしまふのです。私は、かんじきを附けて、大抵見當で雪の下の路筋を探つて配達に出かけます。けれど、其の村へ行くのには、更に山を上らなければなりません。平地と違つて、誠に容易ではないのでした。雪の下にどんな藪があるか、また澤があるかすら、吹雪の烈しく、雪が積つてゐる時には分らなかつたのです。やつとの思ひで、山の頂きに達しますと、其處はまた怖しい暴風でした。松の枝は、折れさうに撓はんで鳴り響き、振返つて沖の方を見ると、怒濤が眞白な牙を露き出して陸に跳りかゝつて嚙んでゐます。灰色の空からは、小止みなしに、鉛粉のやうな雪が落ちて來て、眼口を開けてちつとしてこの光景を見詰てゐることも出來なかつたのです。ほんたうに、そんな時は、自分ながら泣きたくなるのでした。

――けれど、私は、直に哀れな老婆の姿を眼に描きました。其の頭髪は眞白であります。顔にも、手足にも皺が寄つてゐました。私が、其の家の戸口には入つて、

「郵便！」と、言ひますと、お婆さんは、其れは毎日のやうに見ることですが、あたふたと出て來て、少し急込んだやうな調子で、

「ご苦勞樣でございます。さあ、休んで行つておくんなさい」と、言つて、息子から來る手紙を、さながら息子の顔を見る時のやうに、微笑で、なつかしさうに受取つて、何といふこともなしに感謝の心持から、其を頂くのでした。お婆さんが、さう言つてくれてもなんで私は、其處に休んでゐられませう。まだ、他の村へも廻らなければなりません。このお婆さんの毎日かうして待つのとはちがうけれど、やはり他の村でも返事の來るのを待つてゐる人々があると思はれたからです。私は、お婆さんに會釋をして、二たび雪の降る外に出ました。

「有がたうございます」と、其のお婆さんは眞に心から感謝して言ふのでした。

――不幸にも、私には、この息子のやうに孝行をしたり、また思つたりする、母親が、もうこの世にはないのです。せめて私は、毎日かうして、郵便をとゞけることによつて、すべては地に行くであらう、年をとつたものに對して愛のあ

ることを自から感じたかつたのです。

――よく田舎の大盡の處へ行くと、今日は寒いから酒を飲んで行けとか、餅を食べて行けとか言ふことがあります。けれど、私に限つて曾て其れをしたことがない。迷惑とこそ思へ喜んだことは決してない。私は、彼等のために働いてゐるのではないからです。

――私は、またお婆さんの感謝をも受けたいと思ふものでありません。しかし、この眞情の籠つた言葉に接すると、いつも勞働の苦痛を忘れて、自からの職務に激勵されるのです。

これが老配達夫の言葉でありました。

この町を去る日に、私を停車場まで見送つてくれました者は、醫者のM氏の他に、二三の人々があつただけでした。

折から、降り頻る雪を見詰ながら、私は、心の中で、其等の人々に誓つたのです。

自分も、また犧牲者の一人になると。

――一九二〇、七作――

惡魔の敗北

宮地嘉六

一

新吉とお澤は二十年ぶりに東京でめぐりあつた。お澤は新吉の兄の娘であつた。二人は非常になつかしかつた。新吉がまだ獨身でゐることはお澤の心に一層なつかしさを高めた。然し新吉にとつてはお澤が二十年前の可憐な娘でないことが何よりも憾みだつた。彼女はもう二人の男の子の母だつたので。

新吉は久しぶりに國の方の話をお澤から聞いて、いろ／＼身内の人の消息を知つた。繼母のことも聞いて知つた。繼母に對する新吉の幼ない時分からの記憶は恐く不愉快なものであつた。其のことはお澤も察して知つてゐた。新吉の繼母はお澤にとつては眞實の叔母ではあつたが、彼女は新吉に心から同情を有つてゐた。彼が早くから國を飛び出したのも其の繼母の爲めであつたこともお澤はよく知つてゐた。『ほんとに自分の叔母を惡く云ふんではありませんけれど……。』お澤は新吉の繼母の人並の女でないことを恨めしさうに云つて、彼女は今もなほ眞實の叔母よりも叔母のまゝ子であつた新吉の肩を持つのだつた。父の死後、繼母は間もなく他家へ再婚した。それも新吉には大なる不快の一つだつた。少しばかりの財産分割につい

ても、繼母側は隨分勝手な要求を親族會議の席上で持ち出したが、其の要求を頑固に主張したのはお澤の父親だつた。で新吉は其の時のことを思ひ出すとお澤の父親に對しても好感を感じなかつたが、お澤に對しては唯なつかしかつた。彼は繼母と離散以來今日まで、繼母には無論のこと、彼女の里にも、お澤の父親にも誰れにも全く音信をしなかつた。彼の父がもう四五年生きてゐてくれて、さうしたごた〳〵がなかつたらお澤と新吉とは一緒に添はされ、同時に新吉と繼母の間も赤の他人でなくなるわけだつたのだ。新吉の父には密かにその積りもあつたらしい。

『わたしが幾つの時でしたらう、あなたが一度東京から歸つて來なすつたわねえ、あなたのお父さんがなくなつた時でしたわ、たしか……。』とお澤は昔の話をした。

『僕はあの時二十でした。あなたは十五だつたぢやないか、もうあの時分はあなたは姉さんぶつてゐたやうだ。』

『さうでせうか、わたしおぼろげに覺えてゐますわ、あなたが東京の話をわたしのお父さんにしてゐらしたのを、ほゝゝゝ。』

彼女は昔のことを話し出すとおぼろげに覺えてゐると云ふのが口癖だつた。彼女に於ても新吉自身の昔の記憶と同じやうに或る部分は克明に深かるべきであるのに、唯だおぼろげに覺えてゐると云はれるのは、新吉にはあまり嬉しいものではなかつた。おぼろげにと云ふ云ひわけらしい言葉を聞くと彼女は自分が思つてゐたほど自分を思つてはゐなかつたのか知ら、と疑はれたので。

『何だ、しらばくれてゐる。叔父の婚禮の晩など二人でお留守番をしたこともあるぢやないか。お互に顏を赤らめなければならぬやうな記憶が澤山ある筈だのに……。』と新吉は思つた。わざと何でもかでもおぼろげにと云つて逃げる彼女が憎くらしい氣がした。

『わたし小さい時分から隨分我まゝな子だつたやうですわ。今でも矢張り我がまゝですのよ。家の人からよくさう云はれるのよ。』彼女から家の人と云ふ言葉を聞く度に新吉は云ひやうのない敗北的の感じを女の良人に對して覺えた。お澤はもう其の良人と十何年もつれそふてゐるのであつた。

『可なり我がまゝなところはありましたよ。神崎のお祖父さんがなくなつた時だつた。四十九日の配り物をあなたと二人で配らされたつけなあ、その晩の法事がすんで、あなたのお母さんやお父さんと一緒にあなたの家へ二人はお重を持たされたことを今だに覺えてゐるが、その時だつてあなたは持ちたくないと云つてお母さんに甘へたよ。そしてとうとう僕はあなたの分まで持たされたことを今だに忘れはしませんよ。あの時つく〴〵我がまゝな子だなと思つたね僕は……。』

『あら、そんなことがあつたんですか知ら、私ちつとも覺えませんわ……。』と彼女は笑つた。

『覺えないかなあ、忘れつぽいなあ、あの時分もうあなたは十二ぐらゐだつたよ。僕は十七だつた、僕は幼い時分のことはそのまゝはつきり覺えてゐますよ。』

『記憶が好いのねえ、あなたは……。』

『ぢやお祖母さんのなくなつたのはまるで知るまい。』

『え、少しも知りませんの。大きくなつてからお祖母さんの話はよく母から聞かされたんですけれど。……』

『僕があの時分十二だつたから、あなたは七つぐらゐだ。知らないことはない筈だが……ぢやあなたの弟の五郎ちやんて云ふのが死んだ時は無論知るまい。』

『知るもんですか、話では聞いて知つてますわ、悧巧な子でしたつてねえ。』

『悧巧で、そして可愛い子でしたよ。僕とは大の仲よしだつた。僕はあの時のお葬式の有様を今でも思ひ出せますよ。』

お澤が訪ねて來る度にそんなやうな昔話をした。新吉もお澤の家を二度ほど訪ねた。二度とも亭主は會社へ出てゐて留守だつた。何となく亭主に逢ひたくなかつた。自分の幼ない時分の戀人をむざ〴〵と妻にして二人の男の子まで産ませてしまつた其の亭主に對してはどうも平氣で相對することが出來さうになかつた。それを抑へて對面することはかなりの自欺的努力を要することであつた。

『いつも留守の時にやつて來て……。』と新吉は行く度に妙に云いわけをした。

『好いわあなた、私達は兄妹同樣なんですもの。憚ることはありませんわ……』お澤は云つた。
『それはさうだが、主人にも一度逢つて置きたいと思ふが、いつが好いかしら。』
『日曜は大抵晝間家にゐますわ。夜ならいつでもゐるんですけれど。』
『會社から何時頃歸るんです。』
『大抵五時過ぎですの、どうかすると七時も八時もなつてから歸ることもありますけれど……』
『ぢや今日、もう少しお邪魔して逢つて歸らうか知ら。』と新吉は云つて見た。
『え、さうなすつても好いけれど、今日でなくとも好いぢやありませんか。いつか日曜にでもゆつくりいらつしやいよ。』とお澤は云つた。彼女も新吉の感じてゐるやうな意味で、新吉を自分の良人に逢はせるのを何となく躊躇してゐるやうでもあつた。良人に此の人を對面させるとなれば、良人の其の日の氣持をも測つた上でなければ、何となく氣がさすらしかつた。
お澤とさうしたいろ〳〵の話をしてゐる間に二人の子供は戸外から駈け込んで來た。
『おぢさんにおじぎをしなさい。』とお澤は母らしい調子で云つた。二人の腕白さうな男の子は、新吉を見てぞんざいにおぢぎをした。子供は何も知らないで、早く母親におやつをねだつて、戸外へ再び飛び出したい爲めに、ぞんざいなおぢぎをしたのであるが、此の場合の新吉は子供までが自分の戀人の掠奪者のやうにも、勝利者の子分と云つたやうな感じがした。
『そんなにおあしばかりねだつてどうするの。ぢやあげるから遊んでおいで。』と彼女は子供を追ひやるやうにした。矢張一刻でも新吉と二人きりで話してゐたいらしかつた。子供は直ぐ貰ふものを貰つて飛んで出て行つた。
『主人てのはいくつ。』
『もう四十ですのよ。それに頭が禿げかゝつてゐるんですのよ。』
と彼女は自分の良人をけなすやうに云つた。それが幾分新吉の氣持を輕くした。然し彼はさうでない風をした。

『何を自分よくよく思ふことがあるんだ。此のお澤よりはずつと若い女を自分は妻に持つことが出來るのだ。それに自分よりはお澤の良人が社會的にも生活上でも大した優越者ではない。高が會社の技手ではないか、生活だつてこのくらゐの家に住んでゐるのでは知れてゐる。』と新吉は心に思つたりした。
『芝居ぐらゐ時々つれて行つて貰ひますか。』
『いゝえ、めつたに行つたことはありませんわ。子供がゐると何處へも出られません。あなたがつれて行つて下されば行きますわ。ほゝゝゝゝ。』
『あなたさへよければいつでも。』と新吉は云つた。

二

お正月には是非來てくれとお澤はくれぐくも云つたけれど、新吉はとうく行かなかつた。すると二月の或る日お澤は新吉の宿を訪ねて來た。
『まあ、お正月には來て下さることゝ思つてお待ちしてゐたんですのよ……。家でもさう云つて心待ちにしてゐたやうですのに。何故いらつしして下さらなかつたの。』彼女ははでな棒縞のお召の羽織を着て若作りに着飾つてゐた。
『何だかお婿さんに逢ふのがね、妙にから變だもんだから。』
『そんなこと……。人は極く好いのよ。一度逢つて下さる方が好いわ。今逢はないとだんく却つて變ぢやありませんか。』
『それはさうだなあ。』
『では今度の月曜あたりにいらして下さらない……。その積りでお待ちしてゐますから……。』
『え、行かう。』新吉も今は思ひ切つて約束した。度々留守中に行つて、彼女の亭主に逢はないのもよくないと思つたので。

『わたし國の方にあなたのことを知らせてやつたの。すると妹の房枝さんから返事が來ましたの、こんな返事が……。』と彼女は新吉の妹からの手紙を出して見せた。それには、兄の消息が分つて何より嬉しい。どうぞなほくわしい樣子を知らせてくれと書いてあつた。

『あなたも手紙をおやんなさいよ。』

『え、やらうと思つてゐるんだが……。』腹は異つても唯一人の妹さんぢやありませんか。』

二人は逢ひさへすれば國の話やいろ〳〵の無駄話に時をすごすのだつた。それがまた何とも云へぬ樂しみだつた。

『ほんとにあなたは年よりも隨分若ぶつてゐますわ、わたしなんぞもう駄目、こんなにお婆さんになつてしまつて……。』

彼女は云つたりした。

『さうでもないぢやありませんか。あんたも若く見える方だ。』と新吉も云つた。

『早くほんとに奧さんを有つた方が好いわ、さうしてゐては不自由でせう、いつまでもそんなにしてゐらつしても仕樣がないぢやありませんか。わたしも其の積りで心がけて見ませう。でもあなたに向くやうな人はちよつとわたしの知つてゐる範圍にはないやうですわ。あなたどんな人が好きでせう。』

『別にさうむつかしい註文もないんです。』

『そんなら早くお定めなさいよ。でも隨分すゝめる人があるでせう。』

『ないこともない。去年から一つ二つあるにはあつたが、矢張いざとなると、いろ〳〵慾が出來るものでね。』

『どんな人でしたの、その人は、』

『女敎師とか云つたけれど、僕は却つてそんなのよりは普通の女で性質の好いのが好ましいんですよ。』

『でも女敎師なら性質だつてさう惡い人ぢやなかつたでせうけれど……。そしてその話はどうなすつて、』

『斷つた。まあそのうちにはどうにかなるでせう。』

『まあ――けれども奧さんでも持つてしまつたら、わたしだつてかうして貴男をうか〳〵訪ねては來られませんわねえ、

せい〳〵今のうちに訪ねませうよ。』とお澤は笑つた。

『何故……そんなことは構はんぢやありませんか、兄妹のやうにして育つたんだもの。』

『でもねえ……女は直ぐこれよ。』と彼女は指で角を造つて見せて笑つた。

『そんなことはないさ、僕が家内を持つたら、一層近しく來て下さいよ。家内だつて話合手になつて貰ひたいだらうさ。僕の身内の者つて東京にはあなたより他にないんだから。』

そんな話をしてゐるといつの間にか時計は四時を指してゐた。

『おう大へん。五時には歸るからおいとましませう。わたし子供に留守番をさせて內證で來たんですもの。』と彼女は忽にそは〳〵し出したが、それでも直ぐには立ち上らうとはしなかつた。

『そんなら早く歸つたが好いでせう。』

『大丈夫よ。三十分かゝれば電車で行けますから。』と彼女は强ひて落ちついて見せながら、

『では月曜にお待ちしてゐますから、屹度いらつして下さい、ねえ、ほんとよ。』

『え、用が出來ない限りは行きませう。萬一行かれない時は速達でゞも通知しませう。』

『え、でも大抵ならいらして下さい。』

新吉は停留場まで彼女を送つてやつた。

それから三日目は丁度其の週の月曜日だつた。新吉は午後二時頃宿を出た。途中で子供にやるおとぎ話の本や、ちよつとした手土産をとゝのへたりした。お澤の家へ着いたのはまだ三時頃だつた。

『來てくだすつたのねえ。』とお澤はにこやかに、さも待ちうけてゐた風で、髮をゆひかけてゐた鏡臺の前から立つて來て迎へた。

『少し早く押しかけて來て……』

『好いわ早くつても……。わたしちよつと髮を結つてしまひますからラクにしてゐらつしやい。』と彼女は云ひながら、

鏡臺に向いて、七分通り出來上つてゐる廂髪を再び結ひにかゝつた。新吉は其の間あぐらをかきながら煙草をくゆらせて、鏡に映る彼女と話の受け答へをしてゐた。そこへ九つになる長男が學校から歸つて來た。

『おぢさんが御本を持つて來て下すつたからお禮を云ふのよ。おぢさんに學校の成績表を見せてお上げ、』子供は母親にさう云はれると、新吉に對して、いつものやうにぞんざいなお辭儀をして、それから本の包みを持ち出して學校の成績表を見せた。

『おう、たいへん成績が好いねえ。』と新吉はおぢさんらしい態度でほめたりした。

『此の子は學校の方はよく出來るんですの、でも身體が弱いんですから、育つだらうかと心配してゐますのよ。』とお澤は云つた。子供は痩ぎすで、時々妙な咳をするので新吉は今更に氣づいた。

『氣管でも惡いの。』

『え、氣管が惡いんですの、だから海邊へでも當分つれて行かうかとも思ふんですけれど……。』

『それはその方が好いでせう、ほんとに好い子のやうだが……。』

『え、あんまり頭腦がよ過ぎるつて先生が云ふんですの、だから學校なんかしばらく休ませても決して他の生徒におくれるやうなことはないから、海邊へでもつれて行つたが好いでせうと先生も云つて下さるもんですから、さうしようと思つて、今、伊豆の下浦と云ふ所にゐる家の學校友達の方へ手紙で貸し家を捜して貰ふやうに頼んでやりましたの。家はいくらもあるさうですから、一度近いうちに行つて見て來ようかとも思つてゐますけれど……。』とお澤は云つた。

そんないろ〳〵の話をしながら、お澤は髮を結ひ終つた。そして、彼女はそこらを形づけて、總て臺所の方でこと〳〵云はせながら新吉の爲めに何かこしらへるらしかつた。御用聞きに何か云ひつけたりした。

『あまり何かと御馳走なんかしないが好いですよ。』

『何にも御馳走なんかしないのよ。』とお澤は云ひながら一通りはこしらへてゐた。

『あなたお酒はどれくらゐ……、お父さんのやうに矢張好きなの……。』と彼女は笑つた。

『いや、親父ほどはやりませんよ。まあせい〴〵二合だねえ、あなたのお婿さんはどれくらゐいけるんです。』

『矢張二合ぐらゐですわ。それも毎晩ですの。』

『ぢや丁度合子だ。』

軈て時計は五時を打つた。お澤の亭主はなか〳〵歸つて來なかつた。

『もう歸る筈ですのに、何處か廻つたのか知ら……。』と彼女は幾度もさう呟いた。新吉は何となく逢ひにくいやうな氣持がして、いつそ何處かに用でもあつて歸らなければ、それでも好いやうな氣もした。唯さへ他人との初對面を怖れる癖の新吉は、それが自分の昔の戀人の良人であるだけに一入いろ〳〵と氣がさして逢ひたくなかつた。そんないろ〳〵の御馳走などを自分の爲めにこしらへたりして好いのだらうかなどゝ考へたりした。妙に良人から氣を廻はされさうな氣がした二人は言葉を以てこそ現はさなかつたが、互に心では昔の戀人として慕ひ合つてゐることは或る瞬間には互にはつきり分つてゐた。然しお澤は無論良人の心をのみ込んでゐる風だつた。

『女と云ふものは割り合ひにさう云ふ場合には巧みなものかも知れぬ。』と新吉は心に思つた。

日がすつかり暮れてからお澤の亭主は會社から歸つて來た。

『お父さんお歸り。』と二人の子供は玄關に迎へ出た。新吉は主人の留守中に來てゐると云ふ心のひけ目から、袴の膝を正して、なるべく彼女の良人から正當な理解を得るやうにとひどくかしこまつた態度で自分に注意を拂つた。

『新吉さんが來てゐますの。此の間からあなたにお目にかゝりたいつて云つてゐらしたから今日は私からお止めしたんですの。』と彼女も玄關に迎へ出て、良人が靴の紐を解く間にさう告げた。

『あ、さうか。』と良人は喉太い低音で答へたが、襖越に新吉は何となく其の澁い調子に威壓を感じた。

『ようこそおいで下さいました。豫々愚妻からあなたのことを承つてをりましたので一度お目にかかりたく思つてゐたところでした。さあどうかおらくに。』と主人は洋服を和服に着替へて座敷へやつて來て新吉に挨拶した。四十だと聞いてゐたが、年よりずつと老けて見えた。なるほど頭がもう禿げかゝつてゐた。

『私こそ御留守中に度々あがつてはお邪魔をいたしまして、實はもつと早くお目にかゝつて御挨拶をしたいと存じながら……。』と新吉も言ひわけを兼ねた挨拶をした。かうした場合はさうした見えすいた月並な挨拶が却つて彼の複雜な心を安全にした。新吉は此の場合自分の態度が豫期以上に相手に快く受けられたと云ふ悦びを覺えた。

『此の調子なら安心だ。』と彼は思つた。

『あなた、これを新吉さんから頂きましたのよ。子供達も御本を……。』とお澤は良人に告げた。

『それはどうも。』と良人は貰ひ物を顧みた。

『いえ、まことにお粗末な。』

主人と新吉は程よい間隔をとつて對座の位置を定めた。お澤は本式に黑塗りの客膳に手料理を並べて出した。彼女は昔の戀人と現在の良人とを、かうして相對座させて、自分の手料理で酒を飮ませるのが如何にも內心兩者に對して得意さうであつた。

『さあ、どうぞ新吉さん何にもありませんのよ。ほんのお體裁だけ、こんなものを並べて見たんですのほゝゝゝ』と彼女は良人と新吉とを見並べて笑顏で云つた。

『さあどうぞおらくに。』と主人も云つた。お澤は子供に少し早目に寢床を敷いてやつて三疊の方へねかした。

新吉はなるべく相手の意を迎へるやうにして話の聞手になつた。主人は自分よりは年下である新吉に對して、自分の經歷や專門の知識を聞いて貰へるのが得意らしかつた。お澤の良人は水產技師で、日本蠣養殖株式會社とやらに務めてゐるのであつた。彼はだん〳〵話を蠣の養殖事業に就て進めた。國產事業として最も有望であることを說いた。斯業の王たるローヤル會社のこと、多くは亞米利加へ輸出すると云ふこと、外國輸出の蠣は、殼のまゝ皿に置いて据りのよいのでなければ需要がないと云ふこと、そして其の蠣の殼を据りよくするには養殖湖をこしらへて、湖底をセメントで平坦にし、人工的に其の中で養成せしむることなどを語つて聞かせた。

『それにあまり大きいのは輸出品としては不向きです。ですから養產地の北海道でとれるのは、あまり大き過ぎますか

ら、それは乾し蠣にすることにしてゐます。從來蠣の養殖事業は其の殼の所置が困難な爲め充分の發達を見ることは出來なかつたのです。利用の範圍が狹くてどん／＼埋め立て地などに捨てたものですが、しまひに捨て場がなくて、それに困つたのです。ところが今日では其の殼が化學的にいろ／＼利用法が講ぜられて、專ら塗料として防火の効があるので、其の方面に用ひられてゐるのです。』と主人は語つた。

『いや、話にみが入つてお酒の方が……失禮。』と主人は新吉に杯をさした。お澤はお酌をしてくれた。

『時にあなたは、まだおひとりださうですな。早く家庭をお持ちになつたが好いでせうに。はははは。』と主人は話題を轉じた。

『どうも、おはづかしい次第で繪畫などをやり出しました爲めに、遂に婚期を過ぎてしまひました。一つお心當りでもありましたら、御世話を願ひたうございます。』と新吉は微笑で卑下しながら云つた。彼はお澤が彼女の良人よりもより多く自分を慕つてゐると云ふ自信をほのかに感ずるだけ主人に對しては自分をみすぼらしい男に卑下して見たいのだつた。

『あなた、ほんとによさゝうな友人はないでせうか、あのおていさんはどうでせうね、新吉さんにお世話したら。』とお澤はお酌をしながら良人の顏を見ながら云つた。

『さうさなあ……なあに、もつと好いのがあるさ。いくらでも女はをりますよ。ははは。私のやうな年になつても、今私が一人身だつたらいくらでも嫁に來手はありさうですよ。はゝゝ。』と主人は笑つた。

『まあ、年甲斐もないあなたは……あるならいくらでもお持ちなされば好いぢやないの。あたしなんぞに構はないで。あたしだつてあなたに捨てられゝば、誰れかゞまた拾つてくれますわ。』とお澤は新吉をちらと見て笑ひながら云つた。

『いや子供さへなけれや、さうした方が双方の爲めだがなあ、わははは。』と主人は大聲で笑ふ。新吉は自分とお澤との心持を見ぬいてゐて、わざとそんな笑談を云つてゐるのではないかと思つたりした。

『ほんとにあなたはのんきですわねえ、外ではどんなことをなすつてゐらつしやるか分りやしませんわ。』とお澤は笑顏

で良人を輕く睨むやうに上目で見やつた。新吉は彼女の横顔や、くつきりと白い襟脚などをそれとなく盜み見て、良人に飽かれてゐる筈もなささうだと思つた。

『お澤さん。僕はお酒はもう澤山だからご飯を一ぜん頂戴しませう。』と新吉は時計を出して見て、いとまをほのめかした。時計は十時を少し過ぎてゐた。

『まあ好いでせう。』と主人は相手さへあれば飲める口らしく、さう云つたが、お澤は新吉の云ふなりに

『ぢやご飯を上げませう。』と云つてお給仕を始めた。すると主人も酒をきりあげてご飯にした。それから間もなく新吉は辭して出た。電車に乘つてからも何故か妙に自分に對して憐れと寂びしさを覺えた。そして自分が辭し去つた後で間もなく寢についたであらうお澤夫婦の會話が次のやうに想像に浮んだ。

『お前はあの新吉君と昔何かゞあつたんぢやないのか、どうもさうらしいぞ。あの男はお前を思つてゐるわい。お前も思つてゐるんだらう。』

『たんと馬鹿おつしやいな。あなたは……。』二人は少くもさうした意味の會話を交はして今宵に限つて夫婦の愛情を一層誇張的に表示し合ふさまが目に浮んだ。

三

新吉は其の後流行かぜに罹つて一月あまりも床に寢ついた。それとは知らずにお澤は近所まで來たついでに訪ねて來た。

『まあ、何故知らせて下さらないんですの。あなたも隨分ねえ。』とお澤はいたはしげな表情で云つて、新吉のやつれた寢顔を眺めた。ひとり身のみぢめさは部屋ぢゆうにみなぎつてゐた。

『でお醫者は何う云ふんですの。』

『もう大丈夫ですよ。もう熱もないから。』

と新吉はやつれながらも元氣さうに云つた。

『でも當分は起きれないでせう。御飯なんかはどうなすつて……下のおばさんが世話してくれますの。』

『いや、角のそばやからどんぶりをとつてゐるんです。』

『それぢや不自由だわ、ほんとにねえ、お互に近かければわたし何でもちやんとしてあげるんだけれど、でも硬いご飯がたべられて……。まあ、そんなことなら、ちよつと知らして下されば好いのに……。』とお澤はなほもさう云ひながら幾日か散らかつたまゝの新吉の枕元をそつと形づけたり、蒲團の工合をよくしてやつたりした。新吉はそれだけでも嬉しさうであつた。

『僕はね、もうこんな境遇は澤山通つて來て馴れてるから、人の思ふほど自分では辛いとは思はないんですよ。』と新吉は微笑しながら云つた。

『いつ頃から惡かつたんですの……。』

『あなたの家から歸つた晩から、そろ／＼寒氣がしてゐたんです――時にあの晩は御馳走さま。』と新吉は笑ひながら云つて『人の好いお婿さんだね、さつぱりしてゐて。』とお澤に對するお世辭の意味で彼女の亭主を新吉はほめたりした。

『いやよ、そんなに冷かしては、隨分お爺さんですから驚いたでせう。でも家ではあなたのことをほめてゐるのよ。新吉君は謙遜でさすが苦勞した男だけにいや味がないつて頻りにほめてゐるの。』

『さうかい。』と新吉もにこ／＼しながら、くすぐつたいやうな笑顔をした。かうしてお澤といろ／＼の話を交へてゐる間に新吉はすつかり病中の暗い寂びしい氣持からのがれてしんみりとなつかしい快感を覺えた。

『押し入れを開けさせて頂戴な、汚れ物があつたらわたし持つて行つて洗ひますわ。』と彼女は無遠慮に押し入れを開けた。そしてシヤツだの浴衣地の寢卷だのを引つ張り出した。

『そんなもの引つぱり出してはこまるなあ。』と云ひながら新吉も今は彼女のなすまゝにさせた。

お澤は新吉の枕元になほもすわり込んでまたしても例の昔話の糸口を向けたが、それも一通り話してしまふと軈て四

時になつたので歸つて行つた。

『また來るわ、大事にして寢てゐらつしやい。』とくれ〴〵も云ひ置いて歸つた。

それから二日目に小包と手紙とがお澤から來た。開いて見ると新らしい浴衣地の寢卷が二枚と敷布とが包んであつた。手紙には、

『持參する筈でしたけれど、電車がストライキの爲めに不通ですから小包でお送りいたしました。まことに粗末なお寢卷ですけれどお召し下さればうれしく存じます。他に御親切なお方もおありには相違ございませんけれど……。』など〵書いてあつた。また、『こんな失禮なことを申し上げて、御免遊ばせ。實は奧さんをお持ち遊ばすまでは、わたくし及ばずながらいろ〳〵とお世話申して、御不自由なきやうお盡しいたしたう存じますけれど良人や子供がございますのでちよい〳〵お訪ねいたしたくも意の如くまゐりませんのでお察し下さいまし。それにしても、一日も早く好い奧さんをお定め遊ばすやう希望いたしてをります。

わたくしこと、先日お話し申した通り今月末より二人の子供をつれて當分伊豆の下浦と申す所に轉地療養をいたすことになりました。良人は會社の方がございますのでこちらで婆やを雇つて暮させます。豫てお話し申し上げたやうに、どうも子供の呼吸器がよろしくございませんの、で幸ひ下浦にゐる良人の友人にて同じ水產技師をしてゐる方が遠からず他地に轉任されますについて、其の跡を借り受けることに手紙で交渉いたしました。多分今年いつぱいは其所でゆつくり子供等を療養いたさせたい積りでございますの。ですからあなた樣も病後の保養旁々、しばらくにてもおいでになつては如何でせう。くれ〳〵もおすゝめいたしますわ。良人はあなた樣をすつかり信じてをりますから、少しも其の點は御心配には及びませんのよ。子供等にも、あの方は母さんのお兄さんと同じだからと、あなたのことをようく云ひ聞かせましたので、たいへんあなたをお慕ひ申してゐるやうですわ。兎も角も、いよ〳〵、あちらへまゐります時は、あらためて御知らせいたします。どうぞ其のおつもりでゐらして下さいまし……。』と書いてあつた。新吉は此の手紙を讀んで、だん〳〵日頃の幻想が事實に近づいて來たやうな氣がした。またさう思ふことが自分一流の早のみ込みである

やうにも思へた。手紙にもあるやうに、良人はあなたを信じてゐるから、其の點は心配するなとあるのが、新吉にはいろ〳〵の意味にとれるのだつた。決してあなたに來て頂いて暗いことをするのではないから其の點は思ひ違ひをしてくれてはならぬ。と云ふ意味にもとれた。唯幼ない時分から兄のやうになつかしかつたあなたと、久しぶりにめぐりあつたので、私はこれから兄妹同樣に良人にも公然と親しくしたいのですから……と云ふ意味にとるのが此の場合最も安全で正しいやうに新吉には思へた。

『兎に角、行かう……。』と新吉は心に定めてしまつた。急に希望に滿ちた人間らしく樂しい氣持ちになつた。何か嬉しいことがあると、ひとり部屋の中で子供のやうにいろ〳〵とおかしい動作をやらかすのが彼の癖であつた。軍隊にゐた時分に得意であつた倒立や、徒手體操や、仰向きに寢ながら、くらりと見事にとんぼ返りをして、きちんといつの間に据つたり、いろ〳〵のことをやらかすのだ。それが少しも音がしないので階下の宿の婆さんから文句を云はれることは一度もなかつた。

今彼は彼女の手紙を讀み了つて頻りにそれをやらかした。彼の机の上には洋食に使ふナイフがのつてゐた。これは或る假綴の本の頁を切る爲めに二三日前から机上に置かれてゐたのだが、彼は今、其のナイフを握つて、ちよつと喉へ當てがつて突き刺す眞似をしたかと思ふと、そのまゝ後方にくらりとひつくり返つた。それが見ごとにうまく行つたので今度は胸をはだけて帶をくつと下つ腹の方へ、おへそが見えるまでさげて、それから件のナイフの尖を臍の上にあてがつたと思ふと口を曲め、見えを切つて割腹の眞似をやらかした。それから誰れか若しや見てゐる者はないかと梯子段の方を見た。それで彼自身は極めて眞面目であつた。萬一かうした動作を宿の婆さんが、何處かの隙間から覗いてゞもゐたなら、屹度驚いて聲を放つか、飛び込んで來て彼の手から其のナイフを奪ひ取つたであらう、まあ、あなたはと彼の手首を抑へて大騒ぎをするに違ひなかつた――ところが當人は嬉しい爲めの餘興でやつてゐるのであつた。

彼はその嬉しさのあまり早速お澤に返事を書いて出したいのであつたが、良人の手前あまりなことも出來ないと思つて躊躇した。

いてあつた。

二三日してまたお澤から手紙が來た。それには、いよ〳〵明後日お天氣がよければ伊豆の方へ立つことに定めたと書

『立つ前にちよつとお訪ねいたし、いろ〳〵打ち合せもしたいと存じましたが、支度や買物に煩はされてそれに子供がゐますのでとう〳〵お訪ね出來ませんでした。で甚だ恐れ入りますが明後日(廿八日)の午前八時前後の汽車で立ちますから、其の時分に東京驛までおいで下さいますまいか、然し是非とは申しませんのよ。ですが此の間の手紙で申し上げたやうに、伊豆の方には是非當分の間來て下さるでせうねえ、お待ち申してをりますわ。良人にも其のことは云つてありますから御心配御無用よ。いづれ伊豆へ着きましたらお手紙を上げますからあなたは何日頃おいで下さるかをお知らせ下さいまし。それから、おいでになる時は、矢張八時前の列車がよいと思ひますの。沼津までの列車は八時前後に三度も發車いたしますから、其のうちのどれでもお選びなさいまし。都合で私は沼津驛までお迎へにまゐるかも知れませんが、それは堅くはお誓ひ申しますまい。兎に角明朝東京驛までおいでを願へれば私大へん嬉しいんですの、さうなすつて下さいましな。先はとり急ぎ、御知らせまで』とあつた。明後日(廿八日)立つとあるけれども新吉が此の手紙を受け取つたのは廿七日の午後であつたので明朝のことであつた。

翌朝新吉はいつもより早く起きる積りであつたが思はず寢過ごして、目がさめたのは八時少し前であつた。彼は大急ぎで顔を洗つて東京驛へ出かけて行つた。もう電車停留場の時計は八時であつた。それに朝の電車はどれも滿員でなか〳〵乘れさうもないので、彼は廣小路から乘合自動車で驅けつけたのだ。然し東京驛の待合室には彼女の姿は見當らなかつた。時計を見ると八時三十分であつた。

『今度の沼津行きは何時でせう。』彼は驛員に訊ねた。

『今度は九時四十分です。』

『ちや、それまで待つて見よう。』と彼はひとり言を云ひながら一二等待合室に入つて、ふわ〳〵するソフアにどつかと腰をかけた。其所には輕快な旅裝をした外人夫婦の幾組が何か囀るやうに語り合つてゐた。彼等の間にもまたいろ〳〵

の秘密があるであらうと新吉は思つたりした。それらの美しい西洋婦人達は、外國の戀愛小說から脫け出したヒロインのやうな巧みな表情とスタイルを見せて、ステーションの待合室を舞踏場のやうに色どつた。なよらかな線がゆらいだ。何の秘密もなげにレデーは良人により添ひ、良人は彼女をいたはり愛してゐるのであつた。新吉はさうした幾多のレデーにもお澤に於ける自分のやうな、いともなつかしい昔の戀が秘められてゐさうに思つた。

そして、それは最初の戀を失つた男の惠まれたる特權のやうにも思はれた。同時に、最初の戀人に背いた彼女のつぐなひであるやうにも思はれた。さう思ふと單なる夫婦關係と云ふものに對する懷疑が心いつぱいに擴がつて彼のエゴイズムに反響した。いつかは來るべき自分の結婚に對しても暗い考へになつた。何人にも忘れがたい初戀が秘められてゐると云ふ意味でいかなる男子も妻に對して唯一の所有者ではあり得ないことを今は考へ到るのであつた。

お澤の姿はステーションの入口に現はれた。彼女はつやゝかな丸髷に結つて、奥さん仕立てゞ小豆色の縮緬の羽織を品よく着て、水兵服を着せた二人の男の子をつれてやつて來た。新吉は直ぐには彼女の方へ近づいて行かなかつた。日頃の彼女の手紙には新吉に對する彼女のすべては公然であるかの如く書いてはあつたが、新吉にはどうもそれが心から是認出來なかつた。彼女の良人は自分が彼女に親しく接近することを何等の疑ひなしに許すわけはないと思ふからであつた。で今ステーションの入口に現はれた彼女に對しても、若しや良人がついて來たのではないだらうかと大事をとつて、いよ〳〵さうでないことをよく見屆けようとした。そして纔て彼は安心して彼女に近づいた。

『よつぽど待つて下すつたの、』と彼女は云つた。

『いや二十分ばかり。前に來ました。もう八時の汽車で行つたのかと思つた。切符買つて上げませう。』

『えゝどうぞ……』と彼女は帶の間から紙入を取り出した。

『今度は九時四十分でせう』

『さうです。』

『八時のにと思つたつたんですが、なか〳〵さあとなると用が多くつて。』

『おぢさんも一緒に來るの、母あさん。』と子供は不審さうに新吉と母親とを見比べて云つた。敏感な小兒の目は新吉に注がれた。

『おぢさんは後からいらつしやるの……。』

とお澤は子供に云つた。

『お父さんも來るんでせう？　ねえ母あさん……。』と長男は追求するやうに訊ねた。

發車の時刻はもう迫つてゐた。

『では僕は此所で……。』新吉は一刻も子供の疑ひから逃げたかつた。

『ではさよなら、あなた幾日頃いらつして下さるの……。』

『四五日して仕事がすみ次第行きます……。』

『さう、では其の積りでゐますわ、……。』彼女は改札口を出た。そして一度だけ新吉を振り返つて石段を登つて行つた。子供も振り返つた。

軈て新吉はステーションを出た。

四

新吉は年長の友人の妻君に向いて話した。

『ねえ奥さん、聞いて下さい。私の少年時代の戀人が此の東京へかたづいて來てゐるんですよ。私は二十年ぶりに逢つたのです。聞けば東京へかたづいて來てからもう十二三年になると云ふんです、お互に十年以上も東京にゐながら少しもそれを知らずにゐたのです。ところがです。去年の秋の展覽會に出した私の繪を見て彼女は若しやと思つたさうですが最初は同姓同名だと思つたのださうですよ。私が繪など書く人間になつてゐると思はないのも無理はありません。ですが運命は皮肉なものです。子供は二人も產んで、そろ／＼彼女の顏に小皺のよるやうになつてしまつてから私とめぐり

あはせてくれたのです。けれどもまた考へるとあまり早くめぐりあはないで仕合せだつとも思ひますよ。もう二三年早く出逢つたら彼女は其頃の私のみぢめな、やつれきつてゐた姿に驚いたでせう。私は幸ひにそんな姿を見られずにすんだのは何よりだつたと云ふ氣もします——然し私は彼女に逢つたおかげで當分は寂びしさを忘れて暮されさうです。其の爲めに例の結婚問題などはどうでも好いやうな氣がしてゐますよ。』新吉は家で酒をよばれながら、いろ〳〵の話から其の友人夫婦に語つた。彼はさうした小說的な事實を離れかに語らずにはゐられなかつたのだ。私の今の氣持を察して見て下さいと云ひたげな甘い表情は彼の目鼻にぶら下がつてゐた。

『おや、それはお安くないですわねえ。……』と友人の妻君も目を細くして笑ひながら聞いてゐた。

『それがどうしたと云ふんだい。』と主人は追求しかけた。

『うん別段何でもないが、何しろ僕が今だに獨身でゐるもんだから、彼女は大に氣の毒がつて同情してゐるわけなんですよ。』と、新吉は妙に落ちついた調子で云つた。

『人妻ぢや仕樣がないぢやないか。どつちにしても早く結婚問題を解決した方が好いぢやないか、僕はまた、其の婦人が君と一緒になりたいとでも云ふのか知らんと思つたら……。さうでもないんだらう。』と主人はわざと新吉の心持を逆に迎へるやうに云ふのであつた。

『おいくつですの其のあなたの初戀とやらの人は。』と妻君。

『私より五つ下なんです。三十四です。もう婆さんになりかけてゐるんですよ。それでも慾目か何だか私にはそんなに年を取つてゐるやうな氣持がしないんです。妙ですなあ。彼女が十五の時別れたもんですから、其の時分の面影だけしか私の頭には殘つてゐないんです。それに過ぎ去つた二十年と云ふ年月は顧みると短い感じがして、どうも彼女が三十以上にもなつてゐるやうな氣が少しもしないんですよ。』と新吉は云つた。

『いくら初戀の女だつて仕樣がないぢやないか、人の妻君になつてゐるんぢや、どうにもなるまい。それとも女の方で一緒になりたいとでも云ふのなら少しは面白いが……』ともう一人の友人は云つた。

『そんな不倫なことは無論此方もしたくはないし、子供が二人もゐるからねえ。』と新吉は云つた。其の實彼は自分の云つてる言葉を呪つた。

『だから君は意氣地がないと云ふんだよ。ぢや若し女の方が今の亭主を捨てゝ君と一緒になりたいと云つたら君はどうする。』と主人は突き込んだ。

『それや僕だつて其の氣はないでもないです。女の方にも其の氣はあるらしくも思へますがね……。』と彼は言葉に釣られて云つた。

『それや、僕等も經驗があるよ。』と主人でない方の男は語り出した。『僕が昔ゐた素人下宿屋の娘で、其の頃僕が二十だつたが娘はまだ十四五だつたがね、それが僕の家を十年ぶりに突然訪ねて來たのだ――ひとり娘だつたので後で養子を迎へたらしいが、其の養子と面白くないので、僕を捜し出して何とかしたいと云ふやうな考へを起したものらしいのだ――いやこれは自惚れぢやないんだ。僕には兄さん／＼と云つてひどくなついてゐたものだよ。母親だつて信用してゐたものだ。ところで僕の家をやつと捜し出したまではよいが、僕は今の妻と結婚して三年もたつてゐるところだつたので、彼女は稍々失望したらしんだ。待ちたまへ。それは當人の告白だが『わたしはあなたが奥さんをお持ちになつてゐらつしやることは豫想してゐました。ですけれどお二階の物乾しに襁褓が乾してあるのを見てわたしがつかりしました。』と云つたが全くそれは眞實の告白らしいと僕は思つた。彼女は僕に家内だけで子供がなかつたら、一緒になれると自信して來たらしいんだ。『それでもあなたが一緒になつて下されば赤ちやんの一人ぐらゐはわたし屹度自分の産みの子同様に育てゝ見せますんわ。』て云ひ出されて弱つたよ。僕はそんなことが出來るもんかと思つて、いろ／＼なだめて、其の養子とうまくおやんなさいと云つて、社の方へ訪ねて來ても逢はないやうにしたが、それからだん／＼來なくなつたよ。そんな風だから新吉君のだつて、それや女の方では何を思つてるか分りやしないぜ。君が獨身でゐるから大丈夫と思つて女の方では一緒になりたく思つてゐるのかも知れない。』と友人は云つた。さう云はれると新吉もお澤の心持がはつきり分つて來るやうな氣がした。

『でも一概には云へませんわ、女だつていろ〳〵ですわ、一旦かたづいた身でそんなことの出來るのはよく〳〵の人ですわ……。』と主人の妻君は云つた。

『よくあることだ。女と云ふものも、結婚後幾年かたつと何となく人生に倦怠を感じて、つい昔なつかしい戀人などに逢ひでもすると、さうした氣持を味つて見たくなるらしいんですねえ、其のくせ僕の其の女などは貞操を許すほどの愛着があるかと思つて、其の方を匂はして見たのですが、それはなか〳〵さうではありませんでした。此方もうつかりしたことをして彼女を不幸な女にしたくないと云ふ氣持もあるもんですから、努めてそれを避けたのですか、唯もう當人は私に逢つて、それも家へ訪ねては家内に對して惡いので、社の方へ度々やつて來て、私をつれ出しては芝居や活動へ誘つたりして一緒に歩くのが樂しみらしいんでした。』と客は云つた。

『そこがまだ日本の女だねえ。然し女も油斷は出來ないもんだねえ』と主人は笑つて此の間も或る男の話しだが或る陸軍の少佐の妻君と云ふのが、矢張もとは素人下宿屋の娘で、其の少佐が少尉時代から、そこへ下宿してゐるうちに、まあ一緒になることになつたらしいのだ。ところで其の時分、もう一人同じ少尉が矢張下宿してゐて、彼女は其の少尉の方をより以上好いてゐたらしいが、どうしたわけか兩親から今の少佐と夫婦にさゝれてしまつたと云ふのだ。すると一方の少尉は其の後間もなく航空隊へ志願した。失戀の結果と云ふわけでもあるまいが、兎に角ふとした動機からそのやうな危險な部隊に志願したらしい。一方の少佐の妻君は、そのことを知つてからと云ふものはプロペラの音を聞くと其の日は終日、其の少尉のことが氣になつて、何ごとも手につかない――と云ふ話しだが、これは其の少佐夫人の眞實の告白をまた聞きして來た男の話だが、事實ありさうなことだねえ。今現に其の少尉は大尉になつて相變らず航空隊附きで長距離飛行などで好成績を見せて幸ひ何事もなく、ゐるさうだが、今だに獨身でゐるんださうだ。これなどもちよつと面白い小說的な話ぢやないか。』と主人は語つた。

『お安くないな――兎に角好いた同志が一緒になれないのが惡いんですなあ。』と新吉は云つた。

『ところが、さうもいかんて、どれがほんとの戀人だつたか當人でも分らないものだ。つまり空想だね。其の妻君だつ

た、少佐の方もまんざらではなかつたに相違ない。さて本當になつて見ると、飛行將校の方が案じられるわけだらう――ト」

そんな話に時を移して新吉ともう一人の客は總て其の家を辭して出た。二人は電車の停留場まで一緒に歩いた。

「僕は二日三日のうちに伊豆の方へちよつと行きます」などと新吉は話した。

「ほう、さうかね……」と相手は氣のない答へをしたが、新吉の目先にはお澤の丸髷姿が浮んでゐた。

五

新吉は旅行の支度をした。お澤のそばへ行く爲めに整頓した仕事も爲し終つた彼は戀と實生活とを少しの矛盾なしに兩立させ得た滿足を感じながら、旅行家らしい一種の興奮に自分を委ねることが出來た。

翌朝は晴れた好い天氣だつた。彼は銀座でいろ〱な買ひ物をしてお澤やその子供等を喜ばせる爲めの土産の包みを拵へた。それから行きつけのカフヱーに入つて葡萄酒と輕い晝飯をとつた。こんな時、彼にはめづらしい靈肉のバランスが彼を別人のやうなノーブルにした。

九時四十分の列車に間に逢ふやうに彼はステーションへ行つた。其所には彼よりももつと樂しい、そして贅澤な旅行を享樂する人々がすこしおいてゐた。然し彼は誰れにも劣らない幻影を持つてゐたのだ。

常に引つ込み思案のみして宿にばかり閉ぢ籠つてゐた自分の愚かさを今になつてつく〲知つた。彼は、皆が樂しんでゐる旅行と云ふものの味を此の日ほど味ひ得たことはなかつた。總て發車の時刻が來た。彼にとつて都會は一時全く用のない熱と埃との街として彼の後に殘つた。汽車は市街の上を瞬時に過ぎて、小驛を素通りして、彼の心持と同じ速度で疾走した。そして二三時間の後には全く大都會の煤煙を離れて、みどりのそろひ着をした丘陵や林やまては茅屋の田舍町や小川や田圃を青やかにしながら自分の疾走力と、いくら走つても弱らない精力とを誇るかのやうに汽車は馳つた。

彼は途すがら、お澤がどんな心で自分を待ちうけて呼び寄せるのであらうかと、いろ〱に考へて見た。其の前夜、友人の

家で聞いた某少佐夫人の話や、昔の下宿屋の娘がその養子にあきたらず初戀の男を慕ふて訪ねて來たと云ふ話など、彼はお澤の心を推し測る上に好い參考にした。

『彼女に、そんな考へがあるであらうか……。若し彼女がさうであつたら自分は……。然しもうあんな二人の子があつてはどうにもなるまい……。然し自分は好いが……。然し良人と別れることは出來ても子供と別れることは彼女には出來さうもない……。彼女は良人のものであると云ふよりもより多く子供のものである……。』と思つても見た。さうしたいろ〳〵の臆測が何處まで適確であるかは自分でも分らなかつた。

汽車は箱根にさしかゝるとさすがに喘ぎの音を高めてたど〳〵しい速力になつた。新吉はスケツチブツクを出して、其の方へ氣を取られて、しばらくは何事も考へなかつた。

『えさうでごわすとも。此のあたりは氣候が暖かで木の育ちは信州地より倍ほど早うごわすで、信州地で五十年かゝつてる四寸角ものゝ松が此の邊では二十年で立派に育ちあがりますでなあ。』と新吉の隣りにゐる横濱の材木屋は一人の商人に話してゐた。

『へえ、ぢや倍以上早うごわすな。』

『其の代り早う育つた木は目が荒うごわす。そこへ行くと信州產は目は密にごわすて……。』と材木屋は云つた。新吉はふとそんな話を聞いて興味を感じた。

『して見ると矢張早熟と云ふものはいけないものだなあ。俺のやうな晩成が好いかも知れぬ……。』などゝ彼はひとりそんなことを思つた。

材木屋は三島で下車した。

沼津へ着いたのは午後四時に近かつた。新吉はステーシヨンから車を雇つて汽船發着場へ行くと、間もなく出る下浦行きのモーターボートがあつた。彼はそれに乘つた。

河の兩岸には町家の裏二階が岸とすれ〳〵に並んでゐた。ボートは橋下の石垣を離れて、間ぬけなエキドスの音を響

かせながら魚市場の岸を過ぎ、漁船の幾艘をすれ違ひながら河口を出た。そこからは松林の續いた別莊地の濱邊の風景が遠く一目に見渡され、白壁のホテル、ヨツトボートは青い海原の上を白鳥のやうに走つた。

一時間の後にはお澤のゐる下浦にボートは着いた。波止場で訊ねると彼女の假住ひは直ぐ分つた。小ぢんまりとした二階家だつた。

『まあ、よく入らしたの。』と彼女は子供と一緒に新吉を迎へた。僅かの間にすつかり住み馴れてしまつてゐる樣子だつた。

『お父さんひとり來たの、坊のお父さんは來ないの母さん。』と、長男はつまらなさうに新吉をじろじろ見た。

新吉はバスケットから子供にいろいろの土産物を出してやつた。

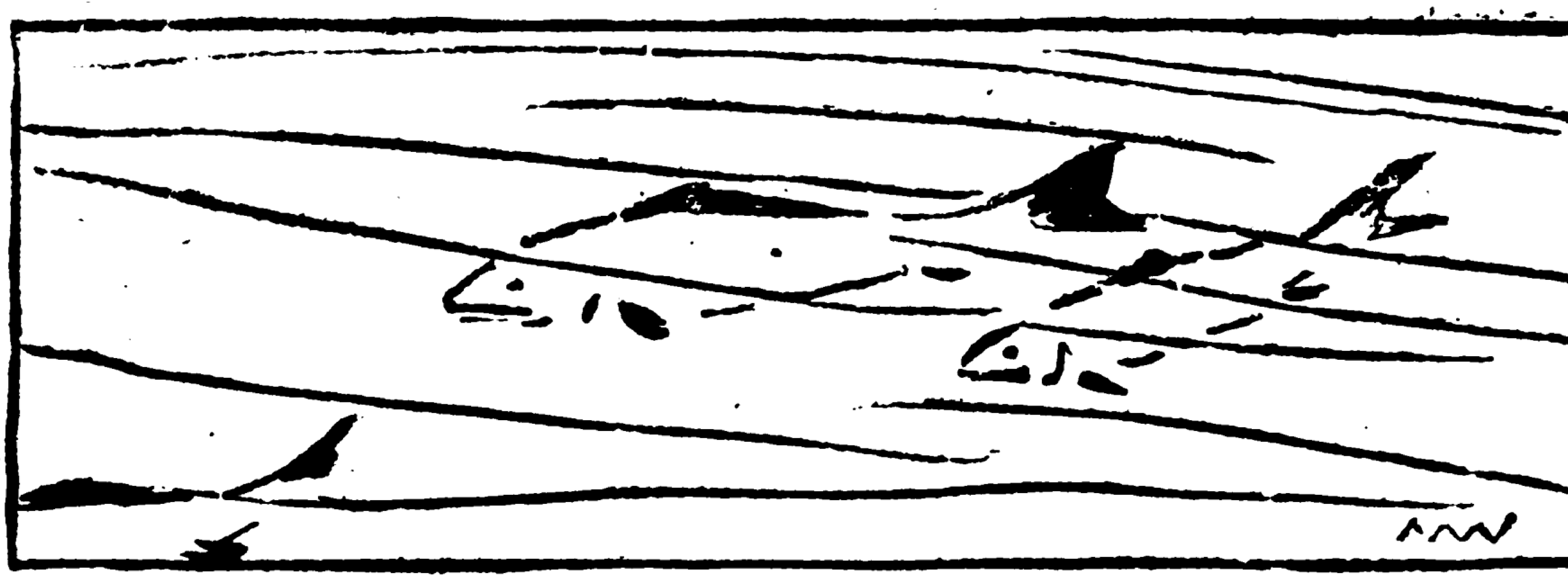
『僕ねえ、少し金を用意して來たから、いつそ宿屋へ行つても好いんだが……。』

『何故……好いぢやないの。そんなこと云はないで……。宿屋なんか馬鹿々々しいわ、宿賃だけかければわたしどんな御馳走でもして上げるわ。』とお澤は笑つて、

『わたし、實は話があつて、あなたに來て貰つたのよ。外でもないの。お嫁さんを見せて上げたいのよ。家の人の姪で福岡の女學校の先生をしてゐるおていさんて方があるのよ。わたしが此所へ來たことを知らせてやつたので其の人は土曜日の夕方から此所へ來て一晩泊るつて手紙で云つて來てゐるのよ。ですから丁度好いわ。まあ一度見てごらんなさいな。さう好いきれうぢやないけれど、人は極く好いの。『君よかつたら、』わたし家の人にさう云つてあなたにお世話してあげようと思つて……。だから、此所へ私と一緒に來たつて好いぢやないの、誰れも變に思ふもんですか。』とお澤はにこにこしながら云つた。

『さあ、さうか、そんなつもりだつたのか……。』と新吉も始めてお澤の心持が分つた。そして自分が今までお澤の氣をいろいろ推し測つてゐたことが、結極何でもなかつたと思ふと氣拔けがした。然し安心して當分お澤のそばにゐてもよいと云ふ氣になつた。そして其の夜は其の女教員のおていさんと云ふ女を夢に見ながら、ぐつすり翌朝まで寢た。

（完）



英靈

上司小劍

一

徳藏も到頭英靈になつたかなア……………と、古川先生は其の日の新聞を風呂敷のやうに擴げながら、第一番に考へた。新聞の上には、南京豆の皮がいツぱいに散らばつてゐる。古川先生は前齒でぽり〳〵南京豆を嚙みながら、新聞を見てゐるのである。嚙んだ南京豆が口から溢れて、ぼろ〳〵と新聞の上に落ちるのを拾つて、先生はまた嚙んでゐる。横から見ると、牛が反芻がんでゐるやうであらうと、先生自身にも思つてゐる。

『有史以來未曾有の大慘虐――七百の英靈を慰めよ』

こんなことが大きな字で、新聞の上には、南京豆の皮の隙間から見えてゐる。古川先生は、有史以來未曾有といふことが、近頃ちよい〳〵あるのに微笑しながら、先づ其の大慘虐の『慘』の字が、『殘』であらねばならぬといふ先生特有の時代おくれな文字癖から、南京豆の口をもぐ〳〵させつゝ、わざ〳〵鉛筆をもつて來て、『慘』を『殘』になほしたが、尖つた鉛筆の先きは新聞を突き破つて、古疊に通つた。『眼光紙背に徹す』といふやうなことを考へて、先生はまた微笑した。

先生は齒が痛いのである。四十幾つになつて、一本の齲齒もないのを自慢にして

ゐた先生は、どうしたことか此頃左の下の第二臼齒といふ一番大きいのが、しく／＼と痛んでたまらないのである。早速一里の道を町の齒醫者へ行つて診て貰つたが、齲齒でもなし、充血した模樣も見えないのだから、洗つて藥を注しておくよりほかはないと言はれた。さうして貰へば一時は痛みが止まるけれど、三十分とは經ても保たない。またしくしくと痛んで來る。先生は癇癪を起して、其の大きな齒を指に摘んで、ぐい／＼搖つてみると、少しは動くやうであるから、いつそのこと拔いて了つたら、どんなに樂になるであらうかと、翌日を待ち兼ねて、痛い齒を頬の上から押さへながら、一里の道をまた町の醫者の家へ辿り着くなり、

『先生ツ、拔いて吳れませんか。』と、叫ぶやうに言つた。平生村人から『先生』と呼ばれてゐるものが、他人を『先生』と言つたのであるから、自分の耳には變な工合に響いた。あんまり朝が早いので、まだ診察衣も着けないで、助手に何か言ひ付けてゐた齒醫者は、それでも手輕な人であつたから、診察の順番も待たないで、治療室へ闖入して來た先生を、快く迎へ入れて、

『どうですか、まだ痛みますか。』と、莞爾しながら問ふた。

『先生、拔いて下さい。拔いて了つたら、どんなに心持ちがいゝでせう。この大きな、憎らしい齒をぐいツと拔いて了つて、齒の根からだら／＼と赤黑い血が流れ出たら、痛みも直ぐとれて了ひませう。わたしは其の拔けた齒を、石の上へ載せて、金槌で擊ち碎き、わたしを苦めた復讐をしてやりたいと思ひます。』と、古川先生は、腮の下を探つて、痛い齒の根へ引いた筋を揉みながら言つたが、餘りに痛みが強いので、ヒイ／＼と口から風を吸ひ込んで、痛い齒の根を空氣で洗はうとしたりした。

『拔くのは造作がありません。しかし齒を拔くといふことは、もう齒醫者の仕事を沒却したものです。人間ならば死刑といふところで、死刑が刑罰であるかどうかゞ疑問であるより以上に、齒を拔くことが齒の療治でないことは確かです。齒醫者の仕事は飽くまでも齒を殘して、それを役立たせるところにあるので、それも一本の蝕ばんだ齒を拔いて他の齒の腐るのを助けるといふ場合なら、これも已むを得ませんが、あなたの齒のやうに、齲齒でも何んでもないのを

抜くことは出來ません。』と、齒醫者は白い診察衣を引つかけながら、至極平凡な理屈を長々と言つた。さうして古川先生を治療椅子に倚らして、手をも機械のやうに働かしつゝ、痛い齒を洗つて澁い藥を塗つて吳れた。このお禁厭(まじない)のやうなことで、痛みが暫らく止まるのを、先生は寧ろ不思議のやうに感じながら、

『どうしても拔いちやいけませんかね。』と、また齒醫者に突つかゝるやうに言つた。

『强ひてお望みなら、拔いて上げないこともないんですが、しかしそれを拔くと、またほかの齒が其の通りになりますよ。』と、齒醫者は冷かに言つた。

『僕は毎日〳〵この第二臼齒といふやつに苦められてるんで、今はこの齒が怡く〳〵てたまらないんです。こいつを拔いて、ひどい目に遭はしてやりたいんです。』と、古川先生は少し興奮した樣子で言つた。

『そんな氣ちがひのやうなことを言つてはいけません。自分の齒に復讐するなんて。』と、齒醫者はまた冷かに笑つた。

古川先生は歸りの途々考へた。齒醫者がどうしても痛い齒を拔いて吳れないならば、自分に拔くよりほかはない。洗つて、藥を附けた利き目は、精々齒醫者の家を出てから三四丁歩く間くらゐのもので、村へ歸る道に沿ふた山川に、獸(けもの)の皮が白く水に洒らされて漬けてあるのを見る頃には、もうヅキン〳〵と響くやうな痛みが、齒の根を襲ふてゐる。昔しの言葉で穢多村、今の言葉での特殊部落が、美しい山川の右岸の、枕屏風のやうな小松山の麓にあつて、一廓の屋根瓦にも脂ぎつた富の色艶を光らしてゐる。それは多く獸の皮の製造から得る色艶で、茶葉や大根ばかり作つてゐる附近の村々とは元氣が違ふ。傳へ聞くこの特殊部落の住民は昔しから齒が丈夫で、未だ曾つて齒を疾んだものがないさうである。古川先生は、自分が今齒の痛みに惱んでゐるので、平生滅多に思ひ出さないことを思ひ出して、羨ましさうに特殊部落のキラ〳〵光る屋根瓦を睨んでゐた。

齒の根の痛みが、左の肩の上まで筋を引いてゐるやうで、首を動かす度に、其の筋がピクリとして、言ひ知れぬ痛快な感じを伴うた。先生は試みに右の拳でトン〳〵と二つ三つ左の肩を叩いてみると、齒の根へまで響いて、痛いながら快よかつた。これだなアと先生は考へて、不圖按摩をやらせてみたならばと思ひ付いた。

急ぎ足に村まで歸つて來て、自分の家へ飛び込んだが、獨身者のことゝて、按摩を呼びにやる使もないので、表に唄をうたつてゐた子守り女の唄を止めて、二錢銅貨一つの使ひ賃に盲目按摩のお爲婆さんを呼んで來て呉れと賴んだ。

按摩の來る間を、古川先生は、其の日の新聞に見入つてゐたのであるが、煙草が嫌ひで間食の好きな先生は、袂にあつた南京豆の三角な袋を取り出しつゝ、痛い齒を避けて、前齒でぽり〳〵やつてゐたのである。

『有史以來未曾有の大慘虐――』といふ新聞記事にも見飽いたが、按摩はまだ來なかつた。赤いインキで縱に三四本の線が繪のやうに引いてある南京豆の袋も、矢張り新聞であつたが、それは三四年も前の古いもので、『生蕃百餘人に銃刑』といふ字が、そんなに大きくもなく見えてゐた。先生は同じ人殺しにも、大慘虐があつたり、小銃刑があつたりするのだなアと、些か嘆息する氣味で、南京豆の袋を丁寧に擴げて、破れたところを接ぎ合はせなぞした。さうして銃刑の記事を讀めるだけ讀んだが、其の記事は甚だ短いもので、終りまで皆一つの袋の中に籠つてゐた。しかし先生に取つては、新らしい大慘虐よりも、古い小銃刑の方に、多く心を惹かされた。按摩はまだ來ない。

二

お爲婆さんの杖の音が、コト〳〵と入口の方に聞えたのは、それから一時間も後であつた。古川先生は遠緣に當るこの村の村長を尋ねて來た放浪者で、古い文學士といふのが、中學校を碌に卒業したものゝない村人に尊敬される種になつて、幸ひ巡査の駐在所が新築されて、古い駐在所の不用になつたのを先生の家にと、村から貸して呉れたので、其處へ住み込んで食事は三度〳〵村長の家から運んで來る代りに、夜は村の若い衆を集めて、國語、漢文、英語を少しづゝ敎へてゐる。月謝は村長の手へ取り立てゝ、賄料を差し引いた殘りをば月々の小づかひに呉れてゐるが、お金の使ひやうもない村では、新聞を取つたり、雜誌や新刊の書籍を貰つたりするよりほかに嚢口を輕くする途もないのである。駐在所であつた時のまゝの硝子戸が、二三枚硝子の壞れたまゝで表にたてゝある。お爲婆さんの杖はコト〳〵と鼠のやうな音をさせて、其硝子戸を突ついてゐた。

『按摩さんか。』と言つて、先生は入口の方へかけ出して行つた。板敷きの土間みたいな一室は、卓子の脚の痕を四つ、四角に白く殘して、ざら〳〵と、跣足では歩けないところであつた。赤い鼻緒の上草履を引つかけた先生は、硝子戸を開けるなり、お爲婆さんを迎へ入れようとしたが、其の手を執つてやるのには少しためらふた。杖を突き〳〵前の往來を通る姿はよく見かけるが、かう近く寄つて來たお爲婆さんは、先生に取つて珍らしい見ものであつた。

『先生ツ、手を引いておくんなさいよう。』

お爲婆さんの言葉と、古川先生の言葉とは、この土地で珍らしい標準語の一對であつた。無智蒙昧の空氣に充ちてゐるこの村の人間をほんたうに導いて行くには、どうしても其の野卑な言葉から改めさせてかゝらなければならないと、先生は常に考へてゐた。しかしそれがなか〳〵容易な業ではなかつた。彼等は使ひ馴れない言葉を口にすることをば、喰べつけない食物を味はふよりも厭やだとしてゐるらしかつた。先生に教へられた上品な言葉をば、一寸口にしては顔を赧くして羞かんだ。全體顔を赧くするといふ柄ではなかつた。山猿からさう遠く血緣が離れてはゐさうにもない樣子をしてゐて、顔を赧くするなんぞは、片腹痛い次第であつた。

『お爲婆さんを見なさい。あの通りいゝ言葉で話すぢやないか。』と、さういふ時よく先生は言つた。

『お爲はん、盲目で年寄りの癖に江戸(えど)辯使(つこ)ふ。いかつうていかん。』と村人は笑つてゐた。しかし先生はお爲婆さんが標準語で話すのを、近くで聞いたのは、今日の『先生ツ、手を引いておくんなさいよう。』が初めてなのであつた。

先生は其の時急に、薄汚ないと思つてゐたお爲婆さんの手を執つてやる氣になつた。獨身の放浪生活を續けてはゐながらも、つひ四五年前この村へ流れて來るまでは、學校教師といふ品行と常識とを賣り物の職掌であつたから、若いのと老いたのとの區別なく、女の手を執るといふことは、先生に取つて甚だ尠い經驗であつた。或る女學校の教師をしてゐた時、教へ子のうちに好きな〳〵のがあつて、先方でも此方を憎からず思つてゐるやうであつたけれど、二人の關係は互ひに手を執り合ふといふこと以上に進まなかつた。それも僅かに二度であつたのを、先生は今でもあり〳〵と覺えてゐる。臆病な先生は、兎ても大事を成し遂げることが出來なかつたのである。

『あゝッ勿體ない。先生に手を引いて頂いて……』とお爲婆さんは、口だけで恐れ入つて、忠兵衛に手を執られた梅川のやうにしながら、探り足で入つて來た。もう五十を過ぎてゐようと思はれるのに、其の風つきの厭や味なこと、見えぬ目に色氣を見せようとするらしいのが、ぞッと身慄ひをするほど厭やであつた。けれども先生はしく／＼と痛む齒が、このお爲婆さんの手で肩を揉みほぐされた爲めに、忘れた如く癒るといふ希望をもつて、鼻持ちのならぬ盲女の厭味をばヂッと耐へて、奥の一間に導いた。

お爲婆さんは、早速洗ひ洒した紺飛白の單衣の肌を脫いで、薄い縮みの襦袢一つに肌を覆ひつゝ、療治に取りかゝらうとした。老いても皺の尠い皮膚は、すべ／＼と肌理が細かさうで、一面の白癜かと思はるゝほどに白かつた、すんなりとした肉つきは若い頃の色香を偲ばせて、二つの乳房はむつちりと處女のやうに盛り上つてゐた。

『先生は按摩は初めてゞすね。』

お爲婆さんは其の纖い手を、古川先生の肩にかけるかかけぬうちにさう言つた。

『さうだ、生れてからまだ按摩といふものはしたことがないんだ。だけどお婆さんにはよくそれが分るね。』と、先生は感心した樣子で言つた。

『先生ッ、お婆さんはよしとくんなさいなね。これでまだ四十九でさアね、四十九ぢやもの花ぢやもの……とは言はない、あれや三十九だが先生とは十歳そこ／＼の違ひでせう、ねえ先生ッ、先生はまア三十八九と睨んでますが、お手の筋でせう。ほゝゝゝ。』と、お爲婆さんは若々しい聲を出しながら、柔かに揉み始めた。

『さうか、それや失敬だつた。ぢや姐さんとでも言はうかね。』

『先生ッ、按摩に姐さんは可笑しいわよ。お爲と名を呼んどくなさいよ、ねいゝでせう。』

『よし／＼、ぢやお爲……さん、君は今僕の肩に手をかけるなり、直ぐ按摩は初めてゞすねと言つたらう、あれはどうして分るんだね。』

『それや分りまさアね。生意氣なことを言ふやうだが、多年の經驗でね、坐り工合を見たゞけで、これや初めてだとい

ふことが分りますよ。』
『見るツて、何で見るんだね。君は眼が見えないんぢやないか。』
『それや肉眼は見えないだつて、心眼はちやんと開いてるからね。ほかのことぢや見えないけど、いざ自分が手をかけて揉むお客となると、坐り工合から年恰好まで、かうやつて背後(うしろ)へ廻はつたゞけで ちやんと分りますよ。人の性分なんかそれや、下手な目明きよりよく知つてますよ。』
『さうかね、えらいもんだね。』

三

古川先生は、お爲婆さんに左の肩の上部ばかりを揉ませてゐた。少し背中の方へ揉み下げるか、右の肩を揉むかすると、先生はたまらないやうに身體を捩らせて、『擽つたい〳〵』と言つた。それをまたお爲婆さんは面白がつて、態と擽つたいところを、こそぐるやうに揉みなぞした。
　左の肩の上部から、頸へかけて、耳の下あたりまでを揉んでゐるお爲婆さんの呼吸はうまいものだと思はれた。其の間は齒の痛みをスツカリ忘れて、齒醫者の療治なんぞよりも、按摩の方に効力があると、先生は思ひかけてゐた。
『お爲……さんの按摩は、何流だね、矢ツ張り師匠に就いて稽古したんかね。』と、古川先生は感心の餘り問ふてみた。
『先生ツ、お爲ならお爲、お爲さんならお爲さんと、シツカリ言つとくなさいよ。お爲……さん……なんて、なしくづしは厭やですね。』とお爲婆さんは先生の左の頸筋を快く揉みながら言つた。
『あゝア、齒の痛いのがだいぶ癒つて來た。』と、先生は快い欠伸とともに言つた。
『先生ツ齒の痛いのは按摩で癒すのが一番です。齒醫者なんてものは、金齒でも入れて高いお金を取るよりほかに能のないものでさア。御覽なさい、百姓で金齒を入れたものに、碌なことはありませんから。』と、お爲婆さんは、どうやら筋の立たないことを言ひ出した。金齒を入れた百姓に碌なことのないのが、齒醫者の咎になつてはたまらないと先生は

思つた。

『金歯の德さんだつて、あんな遠いところへ行つて、氷や雪の中で殺されたつていふぢやありませんか。』と、お爲婆さんは到頭話を有史以來未曾有の大慘虐の方へ持つて來て了つた。あの北の寒い國の港の街へ遙々と入り込んで行つてたものは、この村で金歯の德藏のほかに一人もなかつた。德藏でゞもなければ、そんなところへ賴まれたつて行くものはなかつた。

村長の次男に生まれながら、持ち前の山師肌の男で、無事に田畑を分けて貰つて別家するといふことや、相當の家へ聟養子に行くといふやうなことでは、納りの付く德藏でなかつた。何んでも一つ村人の驚くやうなことをして退けようと思つて、礦山へ手を出したのが、スツカリ外れて、父に大きな迷惑をかけた後に、また思ひ立つたのは、米屋といふ商賣で、これは父も贊成して、少しばかり資本を出してやると、地道に糠をかぶつて働くことは出來ないで、相場をやつた果てが、空米といふ曲事で腰に劍を提げた人に捕へられ、暫くの間牢屋の中で臭い飯を食はせられた。それからはもう『德さん』と言へば村の人が毛蟲のやうに思つて、夏の夜の夕凉みに賑ふてゐる駄菓子屋の緣臺も、德さんの姿が見えると、ちり〳〵に人が散つて了う。途中で德さんに逢つても、物言ふものがなくなつた。德さんと言へば惡いもの、怖いものにして了つた。無論家へは昔風の勘當同樣で、寄せ付けもしないし、寄つて行かうともしなかつた。さうして何時の間にか轉げ込んで來たのは、駐在所の空き家で、古川先生の假寓であつた。

先生はこの珍客の闖入に困つて了つたが、自分が世話になつてゐる村長の次男といふので、追ひ出すこともならなかつたから、已むを得ず共に暮らしてみると、調子が好くて、萬事に輕過ぎるのが厭やであつたけれど、なか〳〵世間を知つてゐて、百姓の息子のやうにもなかつた。それにもう三十に手が屆きさうになつてゐて、まだ獨身でゐるといふことが、二十歲そこ〳〵で妻や子のある村人たちに比べて、人交りも出來ないやうなだけそれだけ、四十未だ家を成さぬ古川先生の放浪生活と、しツくり息の合ふところがあつた。しかし何分にも、金歯の德さん、毛蟲の德さんがごろ〳〵してゐては、夜學に來るものがなくなるので、其の邊のところは、德さんの方でちやんと心得てゐて、夕飯が濟むと何處へ

行くか、のこ〳〵と、雨が降つてゐようが風が吹いてゐようが、まるで勤めにでも出るやうにして、薄暗い出口でコト〳〵と判で捺したやうに履物を探つてから出て行つた。さうして夜學の濟んだ十一時半頃に、またコト〳〵と、百姓たちとは懸け離れた特別の足音を立てゝ、一寸聞いただけでもそれと分る氣色を、うと〳〵しかけてゐる先生の耳に送つて歸つて來る。

豆ランプの淡い光りに、キラ〳〵と金齒を映しながら、德藏は先生の寢床に並べて自分の蒲團を敷きつゝ、ニヤ〳〵と嬉しさうな顏をしてゐた。およそ不快氣な顏や心配さうな樣子は德藏が持つて生れて來なかつたもので、『齒が痛うてたまりまへん』と言つてゐる時でも、顏はニヤ〳〵と嬉しさを包んでゐるやうであつた。されば先生は自分が齒の痛い時、動もすると癇癪を起して、人の顏さへ見れば腹の立つといふやうな氣持ちになるのをば、今でも心窃かに德藏に對して恥ぢてゐるのである。

先生は暫らくさう言つたやうに德藏のことばかり考へてゐたので、其の間話し聲が途絕えて、お爲婆さんの手の働きがばさ〳〵と音を立ててゐた。

『先生ツ、德さんも生きてゐれや人が相手にしないし、死んだつてたゞの死にやうぢや、犬の糞にもならないんですが、何んだか遠い寒い國で、異人さんに殺されたんで、急に出世をして、今に神さまに祀られるつて言ふぢやありませんか。犬の糞と神さまぢや、大變な違ひですね、第一新聞に名が出たちうぢやありませんか、富山德藏つて、ちやんと書いてあつたさうですね。この村で新聞に名の出たのは、德さんが初めだつて言ひますぜ、村長さんだつて、名刺のほかに御自分の名が版になつたことはないさうですから、德さんは豪儀ですよ。』と、お爲婆さんは、さも〳〵感心したやうに言つた。古川先生は先刻見た新聞に『七百の英靈…………』とあつたのを思ひ出して、あの持てあましものの德藏が『英靈』になつたことを、またしみ〴〵と考へた。

四

日が經つに連れて、德藏の評判はいよ〱たいしたものになつた。——

古川先生がある縣の中學校の敎頭を罷めた時、四年級と五年級との有志生徒から記念品として貰つた兩蓋梨子地の懷中時計は、もう四五年前に先生の頭とゝもに、型が舊式になつたけれど、機械の正確なことは一晝夜に一分間以上の狂ひを生じないので、一週間經つても五分とは進んでゐなかつた。其の上に萬事やりつ放しの先生も、時計だけは每日氣にかけて、二日目に一回ぐらゐづゝ、一分ほど長針を後へ戾して置いたから、先づ〱先生の銀時計は正確と言つて差し支へのないものであつた。妻もなければ、もとより子のあらう筈のない先生の寓居で、自分の力で自分に音を立てゝ動くものは、先生をほかにして、この時計だけであつたから、先生は生物を可愛がるやうにして、この時計を可愛がつてゐた。この時計は先づ先生の妻とも友とも或は子とも見立てゝいゝほどのものであつた。先生は每朝この時計にキスをしてから、其のゼンマイを卷いてやつた。……さうだ先生に取つては、卷いてやるといふのが、如何にも時計に對する親しみが深いやうでよかつた。子供に帶を締めてやるといふ心持ちで、先生は時計のゼンマイを卷いてやつてゐた。さうして先生は、この正確な時計の紐を兵兒帶に卷き付けて、村役場から郵便局から、村長の家から、凡そ時計の備へ付けてあるほどのところは、片端しから廻はつて、いや此處の時計は進んでゐるとか、何處のは遲れてゐるとか言つて、一々時を指す針を正した。まことに御苦勞さまのことではあるが、先生はこれによつて多くの心の滿足を得てゐた。緣あつてこの土地に來た以上、追めて膝元の人間だけでも善く導いてやらねばならぬ、ヂッとしてゐても村人が自分を見習ふやうにしてやらねばならぬ、それが自分の義務であると、先生は始終考へて、早や四五年の歲月をこの村で流して了つた。さうして村中の時計の針を正して步くことも、先生の自ら背負ふた義務の一つに加へてゐた。ところが先生がこの村へ來てから二年目、德藏が先生の寓居に轉がり込んでから半年の後に、この先生秘藏の銀側兩蓋の時計は、先生の膝元から逃げて了つた。德藏と一所に逃げて了つた。丁度初夏のよく晴れた日であつた。德藏は先生が前面の山川へ魚を釣りに行つた留守中、先生の大きな辭書を枕にして、晝寢をしてゐたが、不圖眼を覺ますと、西向きの窓の硝子戶に明るい暑がきら〱と眩しく痛いほどに射し込んで、身體の節々が拔けるやうな倦怠を感じた。德藏がうつとりと

夢心地で居ると、丁度徳藏の頭を覗き込むやうにして、セルロイドのキユーピーが這はしてある先生の机の上で、徳藏の耳をくすぐるやうにして、タクチクと先生秘藏の懐中時計は、小さくとも確かな響を立てゝ働いてゐた。徳藏は耳を澄まして、ヂツと考へてゐたが、頭を擡げて机の上を見ると、白い光りを投げた銀時計が、蓋を開けたまゝに、蛤の如く、また美しい蟲か何かのやうに、愛らしく動いてゐた。徳藏は、擡げた頭をまた辭書の上へ安らかに載せて瞑目したが、どうしても其の小さな時計の響に何かを喚らるゝやうであつたから、ガバと跳ね起きると、汚れくさつた袷の襟をかき合はせ、三尺帶を締め直して、四邊をきよろ〳〵見廻はしてから、ついつと其の懐中時計に手をかけたが、忽ち強い電氣でも感じたやうに、ぶる〳〵と慄へて、農家生れらしくもない白い手を引つ込めた。

前の川で、この土地の方言の、ぎゝんたにすなくじにがぶろを各一尾づゝ釣つた古川先生は、最後に大きな鯰を引ツかけて、やんはりと黒い頭を水面まで持ち上げて來たけれど、竿が滿月の如くに撓むとゝもに、糸がぷつりと切れて、鈎を銜へた大鯰は、一跳ね跳ねて黒い尾を見せると其のまゝ、雨後の濁つた水に深く沈んで了つた。先生は逃がした獲物の大きさを更に大きく頭の中に描きつゝ、岸の笹の葉が水の増した流れに弄ばれてゐるのをぼんやり眺めてゐたが、漸くにして代りの鈎を求めに、寓居の前まで歸つて來て、表からは入らずに、裏の窓へ廻はつて、何んのつもりか、障子の小穴に眼を當てゝ内部を覗いた。先生にはかういふ癖があつて、自分の家でも先づ何かの隙から一寸覗いた後でなければ入らない。それを自分にも何んのつもりだか、ハツキリと考へたこともないのである。

先生が自分の居間の六疊を覗いた時は、丁度徳藏がむツくりと頭を擡げて、机の上の懐中時計に見惚れてゐる折りであつた。先生は息を殺して、徳藏がどうするかを窺はうとした。ごろりとまた古疊の上へ辭書を枕に寐そべつた徳藏は、兩手をピク〳〵させてゐたが、先生は蚯蚓で鯰を釣るよりも、時計で徳藏を釣る方が面白くなつて、徳藏がもう一度時計に食ひ付いて來るのを待たうとした。氣ながに待たうとして、窓の枠へ手をもたせつゝ、障子の小穴から眼を離さなかつた。

ガバと跳ね起きた徳藏の姿は、まるで大鯰が水面に跳ね上つたやうであつた。一旦手をかけた懐中時計を離した徳藏

は、またきよろ〳〵と四邊を見廻はしたが、室の內には机一脚に箒一本のほか何も見るものがなかつた。急に凄くなつたと思はるゝ德藏の眼は、更に銳く机の上の懷中時計に注いで、ついと差し伸べた白い手に、猫が雞の雛を銜へるやうにして、むづと懷中時計を攫んだ。パチンと音して開いたまゝの蓋が閉まつたのを先生は愛するものが手籠めに遭ふ折りの悲鳴のやうに聞いた。

『こらッ。』と聲をかけようとして、先生は躊躇した。折角成功しかけた德藏の仕事を九分九厘といふところで挫折させてやるのも氣の毒に思つたのである。咽喉まで出かゝつた『こらッ』といふ聲を唾液とともに呑み込んで了つた先生はまたヂッと眼を据えて障子の小穴から樣子を窺つてゐた。先生は一寸ユウゴオのミゼエラアブルに出る高僧のやうな氣持になつて、自分に今一個の銀時計があつたならば、それをも德藏に與へたいくらゐに思つたのである。

德藏は血走つたやうな眼をして、何んにもない室內をギロ〳〵見廻はしてから、時々入口の方を顧みて用心するさまであつたが、裏の窓の方へは一向に眼を配らなかつた。先生はこの家が曾つて、盜賊を縛る役目を帶びた人の巢であつたといふことゝ、眼前の德藏の働きとを考へ合はせて、何んだか擽つたいやうな氣になりかけてゐた。德藏はまた白い手を伸ばして、机の抽斗を開けると、先生の蟇口を發見して、それを左の袂に入れた。右の袂はもう懷中時計の重みを見せて、だらりと垂れ下がつてゐるのである。

其の蟇口には、先生の全財産が入つてゐた。先生は覺えずアッと叫びかけた口を押さへて、まるで自分が惡事でも働いてゐるやうに、恐る〳〵德藏の樣子を見てゐた。蟇口を袂へ入れた後の德藏の動作は、實に機敏であつた。長押を渡る鼠のやうにして、彼れは入口の方へ行つたが、表の硝子戸の開いたまゝになつてゐたのを幸ひ、板草履の足音も立てずに、何處ともなく遁走つて了つた。先生はほつと息を吐いで、漸く仕事が濟んだといふやうな顏をした。さうしてノソ〳〵と表へ廻はつて、德藏の働いた座敷へ上り込んだが、最愛の銀時計の姿の見えないのに、忽ち寂しさと哀しさとが込み上げて來た。もうどれくらゐ行つたであらうかと、愛兒の旅立ちを考へるやうな氣持ちで、先生は德藏の袂の中に揺られて行く銀時計の身の上を考へた。今朝の八時にゼンマイを卷いたのが、彼れの龍頭の摘み納めであつたかと思

ふと、先生の頬には潸々と涙が流れた。

『先生はおゐでになりますか。』と、濁聲で、口いッぱいに丁寧な物の言ひやうをして、入口の板の間へ、昔し駐在所であつた時物を訴へに來た人のやうにして立つたのは、山川に沿ふた縣道の二三丁下手に、奥の市ん人(いちど)を相手に煮賣屋を出してゐる源兵衛爺であつた。

『あゝ徳兵衛さん、お前んとこに借りがあつたッけね。ところが今蟇口を盗まれちまッてね、折角だがもう四五日待つて呉れないか。』と、先生は四五日前町へ行つた歸りに、源兵衛の店で、鹹い煮付けと燒豆腐の煮たのとで晝飯を喰べたので、源兵衛が其の勘定を取りに來たのだと思つたが、其の時も蟇口を忘れて、町で買ひたかつたものも買はずに歸つたのだから、晝飯の代も拂はずに來たのであるが、今また蟇口を盗まれたなぞといふと、よく蟇口に故障のある人だと源兵衛が思ふであらうと、先生はそれをきまりわるく感じながら言つたのだが、源兵衛は『滅相な、先生ッ』と、黒い大きな手を振つて、『徳さんが、店の錢箱を攫へて逃げるところを、運わるう滅多に來たことのない巡回に出くわして、移る瀬の岩の上へ逃げたのを、追ひかけられて捉まへられたんだす。其の時旦那の時計やおまへんか、饅頭時計を一つ袂から出して、淵の中へ拋下(ほか)しよつたんだす。旦那の時計やつたら早う鰻釣りの藤七つあんにでも頼んで、淵の底を探したらえゝと、こないに思ふて、聞きに參じましたのでござります、へえ。』と、源兵衛は教へられずとも持つて生れた親切で、此處までそれを言ひに來て呉れたのである。先生は源兵衛の親切と徳藏の運の盡きとを、ちやんぽんに考へて、急には言葉も出來なかつたが、漸く源兵衛の好意を謝して、早速鰻釣りの藤七に頼んで、徳藏が銀時計を投げた經ケ淵の底を探させたけれど、どうしたのか時計は遂に見當らなかつた。暇くなると毎日〳〵山川の水を潜つて、岩の穴に鰻の棲家を探つてゐる藤七は、澁紙色の背中を見せて、幾度も〳〵息の續く限り經ケ淵の底を探ぐつたけれど、昔し弘法大師が七卷の御經を石の筥に納めて沈めたといふ其の經卷を探すほどに、銀時計を探すのは難かしかつた。

『何んしよ、底は泥やさかいなア。』と、藤七は諦めたやうに言つて、岩の上に蹲んでゐた。これからは經ケ淵の名を時計ケ淵と改めたいものだと思ひながら、先生は恨めしさうに蒼い水を睨んだ。

それでも蟇口だけは、内部のものも失なれずに、先生の手へ戻つて來たが、やがて德藏は都會の裁判所で、半年ほどの懲役を申し渡されて、空米相場で經驗のある赤煉瓦の長い塀の中の家で、勞役に服したさうであつた。

それから彼れは何やらの人夫になつて北海道へ渡り、樺太からまた海を越えて異國の寒い土地へ働きに行つたのだが、其處で到頭我れも人も思ひがけなかつた『英靈』といふものになつて了つたのである。

五

あんな男のことだから、やみ〳〵と英靈になりそこねて、何處かでまた時計を盜んだり、錢箱を攫つたりしてゐるのではあるまいかと、頻りに危んでゐる村人もあつたが、其の時其の寒い港の街に居た此の國の人間は、一人殘らず殺されたのだと分つて見ると、德藏とて人間の形をしてゐる以上、遁れつこはなくて、詰まり英靈になつたに違ひないと、話はきまつた。

偶然にも德藏と同じ北の異國の氷雪に閉ぢられた港の街へ行つて、仕立屋の職人をしてゐた男の妻が、子供とともに漸く危ないところを遁れて歸つたのが、丁度先生の寓居のある村からまた四五里も奧の片山里の女で、それが町の停車場から人力車で故鄕をさして行くのを、先生は寓居の座敷で伸べ首をしながら見ることが出來た。

『喰はれ殘りの鴨が啼く』といふやうな憐はれな氣持ちで、子を抱いた車上の女を見てゐた先生は、其の平べツたい顏に悲哀と疲勞との色が物凄いほど浮き上つてゐるのを見て、これは戲談でないぞといふ氣がした。村の人々は前の往來へ群つて、がや〳〵と騷ぎながら鈍い車の軋るのを見てゐた。

『もつと別嬪さんやつたら、助からなんだやら知れんで。』

『英靈になりはぐツたなア。』

こんな愼みのない聲が、役場員の一群れの中から聞えたりした。夜學に來る若い者の前で、古川先生は每夜のやうに『英靈』といふ言葉を使つて、德藏の話をしたので、今は一つの文字さへ知らぬものまでが『英靈』といふ言葉を口にす

るやうになつてゐた。『英靈にしたるぞ』とか、『あいつも英靈になる』とかいふ言葉が止め度もなく村いつぱいに流行つて了つたのに、先生は自ら驚いてゐた。

何やら政黨の總裁が、北の方の異國の寒い港の街で惨死した人々の祀りに　前科者の德藏の靈をも加へて、『七百の英靈』云々といふ弔辭を讀んだといふので、德藏も到頭正眞正銘の英靈になつて了つたが、この村でもだん／＼に德藏の人氣が加はつて來て、いよ／＼盛んな祀りをするといふ段取りになつた。

『德さんが死んだのが國の爲めになる。德さんの生命と引きかへに、仰山の金山や材木が國のものになつたら、德さんの手柄もえらいもんや。』と、半可通の役場の吏員なんぞが野卑な鼻面を揃へて喋舌り立てるのを、先生は苦々しいことに思つて、『そんな譯のものでない。』と頻りに平和の道理と人道の掟とを說いたけれど、兎にも駄目であつた。

『そんなら何んで、德さんが英靈だんね。』と、半可通は口を尖らして先生に突つかゝつて來た。

『今日ばかりは、この眼が開いてくれるといゝと、しみ／＼思ひましたよ。』と、續けて先生の療治をしに來た按摩のお爲婆さんは言つて、德藏が英靈になつた北の異國の港から遁れて來た平ベツたい顏の女を見ることが出來なかつたのを口惜しがつた。

『先生ツ、村ぢや英靈といふことが素敵に流行つて來ましたね。この德利に英靈を一升お呉れなんて、やつてますよ、洟ツ垂れ小僧がね。』と微笑みながら言つて、お爲婆さんは先生の左の肩を揉み始めた。自分に言ひ出した英靈といふ言葉の無殘な流行り方に、自ら耳を掩ひたくなつた古川先生は、お爲婆さんの口に蓋をするやうな心持ちで、

『そんなことはどうでもいゝやね、それより今日は一つ、お爲さんが盲目になつた話でも聞かうぢやないか。』と、先生はお爲婆さんの揉む手の調子に合はして、平手で膝をぴしや／＼と叩きながら言つた。

『わたしの眼ですかね、先生。』とお爲婆さんは乘り氣になつて、揉む手に一際力を入れて言つた。お爲婆さんに驚啼かせた春のあつたこと、不圖した誘惑から惡疾を受けて、盲目になつたことは、先生も村人からの又聞きで知つてゐたが、お爲婆さんの口から直かに聽くのは、今日が初めてであつた。

『旦那ツ、女も二十二三が止まりですね。それまでに身を固めないと、飛んだことになりますよ。尤も特別にえらく生れ付いて來た人は別だが、わたしみたいなぼんくらが、生意氣なことを考へてると、ひどい目に遭ひますよ。……』と、お爲婆さんは、過ぎし昔しを振りかへる樣子で、痛まし氣に話し出した。

『わたしもこれでね、女醫になるのが、目的で、十五六の時から考へてたんですよ。今のやうに女醫の珍らしくない時分ぢやなかつたんですから、わたしの望みは隨分突飛に聞えたんですが、わたしがあんまり熱心なものですから、父母もそれを許して呉れましてね、二十四五まで一生懸命に勉强しましたよ。尤もね、わたしを大層贔屓にして下さる內科の博士がありましてね、其の人の世話で、學校へも入れて貰つて、二十六の年にはいよ／＼免狀が下がるといふ段にまで漕ぎ付けたんですよ。ところがお恥かしい話ですが、其の博士とわたしはいつのほどにかお安くない中になつちまつて、固い夫婦約束をしてたんです。……』と、言ひかけて、流石にお爲婆さんは口籠つた。後向きだから見えないけれど、老いても滑々したお爲婆さんの顏には、紅葉の色が散つてゐるらしく、鬢のおくれ毛が時々先生の頸筋を撫でるのも、婀娜(なまめ)かしかつた。

『ところがね、肝心の時になつて魔がさしたんですね。わたしもちやんと其の博士一人を守つてゐれや好かつたんですが、北海道の礦山師とかで、厭やに背の高い男が、ふいつとわたしの家へやつて來たんですよ。父の勸めてゐる會社に關係のある人とかで、父が連れて來たんですが、見たところ立派な男で、西洋人みたいに堂々としてるんですよ。後で考へてみると、誰れかにわたしの噂さを聞いて、物好き半分に野心をもつて押しかけて來たのでしたが、父母はもとより、わたしもそんなことゝは少しも氣が付かなかつたんです。わたしも初めはね、見たところ如何にも立派な男であるが、言ふことに法螺が混つてるやうだし、蟲が好かなかつたんですが、仕舞ひにはお經のやうなものを取り出して、哲學めいたことを話すんでせう、どうもそれが其の男の手なんですね、親子三人が到頭催眠術にかゝつちまつたやうになつた上、十分に醫學を研究するには洋行しなけれやならないから、其の費用はわしが出して上げるとか何んとか、いろ／＼のうまい口車に、善人で氣が勝つてゐるといふほかには、全く何も知らん馬鹿な母が先づ乘つちまつたんでせ

う。……尤も母はねわたしに師匠の博士と手を切らせようとしてゐたんですから、それを幸ひに、わたしを其の礦山師に押付けようとしたんでせう。勿論慾と二途かけてですがね。淺果敢にも其の翌る日其の礦山師にわたしを連れさせて何處へか行かせることを承知しちまつたんです。其の日礦山師は自動車に乘つて來ましたがね、こんな山の中へも時折りは自動車の音のする今と違つて、其の頃はまだ東京に二三臺しか自動車のない時でせう。それに乘つて來たゞけでもお金の慾のほかに眼のない淺果敢な母は、まゐつてしまつたんですね。……スルト其の翌る日も矢つ張り礦山師は自動車でわたしを迎へに來たんです。ほんとにあいつは惡魔でしたね。今でもわたしは自動車の音を聞くと、ビクリとしますよ。……其の自動車がわたしを地獄へ送る火の車だつたんですね。何んにも知らんわたしは、母の指圖で一生懸命に着飾つて、丁度袷の時分でしたからね、お召の竪縞に鱗つなぎの金糸銀糸の縫ひ模樣のある帶を締めて、其頃流行りかけた滅紫の薄い紗の肩掛をして、オペラバツクを提げて、其の背の高い礦山師と並んで自動車に乘つたんですよ。其の時の着物や帶の縞柄と模樣は、今でもハツキリと覺えてますよ、薄ツぺらな顏を嬉しさうにして見送つてゐた亡母の顏も矢つ張り眼の前に見えるやうです。……』と、此處まで言つて、お爲婆さんは無念氣に齒嚙みをした。

六

肩を揉んで了つたのに、お爲婆さんの話はまだ續いた。

『しかしね旦那ツ、母は初めツからさもしい考へをもつてたんでせうが、わたしは全くそんな氣はなかつたんですよ。だけど全く催眠術にかゝつたんでせうね。いつの間にか其の礦山師がたよりになる人のやうに思はれて來て、其の男の言ひなりになる氣持ちになつてましたからね。何んしろ、人に物を言ふ時は眼と眼を見合はさなければいけないと、其の男は言ふんでせう、そして其の男の眼を見てゐると、何んだか夢のやうな氣持ちになるんですもの。利益になる方だからね、と母が繰り返し〳〵言つた言葉が耳の中に活きて來るし、わたしはどうしても、一度は其の男に引き付けられなけれやならなかつたんでせう。……往來の人を皆振り返へらせた自動車の行方はステーションでしたが、其處から汽

車が横濱へ行つて、居留地に近いある白煉瓦の商館の應接室にわたしは運れ込まれたんです。……旦那まアここいらまでにしときませう。』と、お爲婆さんは寂しく笑つた。

『それでお爲さんは、其の博士を棄てゝ、𥡴山師を愛したんかね。』と、古川先生は膝を乘り出して問ふた。お爲婆さんは見えぬ眼をしばたゝいて、

『愛するなんて、そんな氣はちツともなかつたんです。其の惡人は博士より年を取つてましたしね、其の瞬間になつてもわたしは愛なんてことをまるで考へなかつたんです。全く催眠術にかゝつたといふんでせうね。それでわたしがハツと眼が覺めるやうに氣が付いた時は、もう遲かつたんです。わたしは其の惡人と椅子にかゝつて對ひ合つたまゝ、眞ツ蒼になつて了つたんです。飛んだことをして了つたと思つてね。床に敷いてある柔かい絨毯がね、大蛇の背中を蹈んでゐるやうに、氣味がわるくてたまりませんでしたよ。』と、お爲婆さんはまた見えぬ眼をくしや〳〵さした。

『それからどうしたの。』

『それツきりでさアね。其の男は歸りの汽車の中で、今日のことは家へ歸つて言はないで下さいと言ひましたが、わたしは俯向いてゐて、碌に返事をしなかつたんです。騙されたのが口惜しくツてね。それや其の男の調子ツつたら實にうまいんでしたからね。』

『それで盲目にはどうしてなつたんだね。』と、古川先生は思ひ出したやうにして問ふた。

『さう〳〵、それが肝心でしたわね。其の時わたしは其の男に操を破られたばかりでなく、重荷に小付けどころぢやない、惡い病氣を傳染されちまつたんぢやありませんか。其の毒が眼へ入つたのがもとで、こんな生れも付かぬ不具者になつちまツたんです。』と、お爲婆さんは到頭見えぬ眼から熱い涙を流して、俯伏して了つた。

『それで君の師匠の博士といふのはどうしたのかね。』

『それがね、わたしは先生に――先生と呼んでたんですよ――隱しとくつもりだつたんですが、そんな病氣になると、隱し切れやしませんやね。母は今更らしく怒りましたがね、其の惡い男は、それツきり何も言はないで、途中の汽車から

葉書を一枚出したまんま、北海道の方へ逃げて歸つたんですが、母は其の惡い男に懸け合つて、療治代を取らうと言ひましたが、そんなことをするとまた其の男と交渉が開けていけないから、犬に足を嚙まれたつもりで打ちやらかして置け、何か言つて來ても返事を出すな、療治代は僕が出してやると、博士は言ひましてね、病院へも入れて呉れましたが、矢ツ張り駄目でしたよ。』とお爲婆さんは啜り泣きをした。

『スルと其の博士といふ人は、自分の女房同樣の女が姦通して感染した病氣を、自分が金を出して療治したといふことになるんだね。』と、古川先生は他人のことながら、少し興奮した氣味で言つた。

『全く濟まなかつたんです。』と、お爲婆さんは泣き噦りをした。

『自分の太ツ腹を見せるつもりだつたらうが、隨分苦しかつたらうね、博士は、……』と、先生はしみ〴〵同情した。

『しかし、わたしはね、父や母に打ち明ける前に博士の前へ泣き伏して、丁度こんな風にして白狀したんですから、博士はわたしを許して呉れましたよ。時々厭や味は言ひましたがね。』と、お爲婆さんは、當年の情緒を再現させるつもりらしく、古川先生の膝に取り着いて見せた。先生は『あツ』と叫んで、膝を後へ引いた。卒塔婆小町の繪のやうになつて、お爲婆さんは前にのめつた。

『母は博士が嫌ひでしたけどね、わたしは博士さへ、もツと生きてゐて下すつたら、こんな姿にならなかつたのにと思つてますよ。それや厭やなところもありましたが、自分の身にかへてわたしを可愛がつて呉れてましたからね。……先生ツ、かう言つて、わたしは博士を呼んだんですよ、其の時のことを思ひ出しますから、先生ツ、どうぞ、あなたにも先生ツと呼ばして下さい。』と、お爲婆さんは、甘つたれた若々しい聲で言ふなり、古疊に額を擂り着けて、さめ〴〵と泣いた。

『けどもね。……』と、稍暫らく泣いてから、お爲婆さんは、涙だらけの顏を上げて、

『わたしがこの村へ流れて來てから、村の娘の身持ちが皆固くなつたさうですよ。男に騙されると、皆あんなに、なると言つてね。……わたしも生き恥を曝らしながら、飛んだ功德をしてますよ。』と、また寂しくニヤりと笑つた。

それから十日ほど後に、德藏の爲めに村の招魂祭が盛んに行はれた。古川先生は役場の吏員に賴まれて、大きな白木の位牌に『富山德藏之靈』と肉太に書いたが、『富山德藏之英靈』と書き直して呉れと言つて、老いた村長始め一同が先生に迫つた。

『あの惡い男が居たとこだと思ふと、わたしは寒い北の方へ行くのは厭やだツたが、いつそ其の寒い港へでも行つてたら、今度は殺されて、これでも英靈になつて、祀つて貰へたんですね。』と、其の時傍に居合はしたお爲婆さんは、見えぬ眼をくしや／＼さして言つた。

——一九二〇・七・六——



一宣傳者の手記より

加藤一夫

一月十二日　晴　寒し

妻の胎がもう、今にも破裂しさうになつた。しかし懐には一文の貯へもない。數日來急いで書いた原稿がやつと出來上つたので、不滿ではあるが、兎に角、それを金に換えんがためにH館にB雜誌のK君を訪ねに出かける。

先づH館の小賣部に立ち寄つて見る。客は居ない。たゞ一人、見覺えのある顏が店頭で雜誌を拾ひ讀みをして居る。よく見ると畫家のIだ、

「や、I君！」

と聲をかける。

自分の行つた事に氣附いたIは馬鹿におづ〳〵して「何方へ？」と訊いた、その調子には、甞つて自分に裏切つて、自分の友人に彼自身の利益のために自分を讒誣し、自分と他の友人との交情をさへ割かうとした元氣が少しもない。

「ちよつとH館の編輯部まで」自分は答へる。

「さう。僕も今行つて來たところです」

「さう、K君居ましたか」

「居ました」

「ぢやあ、失敬。僕ちよつと行つて來るから」

「行つてゐらつしやい、僕、こゝで待つて居ます」

別に待つて居なくてもいゝのだが、と思ひながら、自分は　ウンと答へて、その儘そこを出た。

Ｈ館の應接室で、もの〻五分間も待つて居ると、Ｋ君が出て來た。二人の間には、文藝と社會問題と云ふやうな事が話された。自分の新しく初めた「一隅より」と云ふ手紙代用のパンフレットの事も話題にのぼつた。

自分は原稿を渡した。そして出來るなら稿料を今頂き度いと云つた。原稿を商品のやうに取扱つたのは是が初めてゞ、火の出るやうな思ひがしたが、こゝ數日のうちにお產のある事を思ふと、そんな精神上の贅澤は云つて居られなかつた。

Ｋ君は快く承諾して與れた。五十圓足らずの金を懷にして、それでも隨分と心丈夫な思ひでＫ君に別れる。

小賣部にはＩが待つて居た。直ぐ樣、一緒につれ立つて出る。Ｉは直ぐ電車に乘らうとしたが、電車嫌ひな自分が「少し步かうぢやないか」とサッサと步き出したものだから、仕方なしに彼も從いて來た。

Ｉの顏が何となく蒼ざめて居る事や、手足がブル〱震えて居る事が眼につく。

Ｉは云つた。

「僕、近頃隨分苦しむで居るんです。今日もまだ朝からおまんまを食べて居ないんです」

もう午後の三時だ。顏の蒼い事も、手足の震へて居る事もそのためだなと氣づく。

「ぢや、何か食べやう。何がいゝね」

「何でもいゝんです」

飲食店を探したけれど目當らない。

「では、神田のＰまで行かうぢやないか。步るけない？」

自分は少し胃をわるくして居るし、晩にはＨ氏の精神主義學會で辨當をよばれる事になつて居るので、自分だけは平野水でも呑めるところに行き度いと思つたので斯う云つて見た。

「えゝ。さうしませう」

Iは同意した。道々、Iはその後の彼の生活についての物語りを初めた。そして云つた。

「自分はいゝけど、子供の事を思ふとたまらなくなる事があります。それは餘り慘めです」

また斯うも云つた。

「でもミレエの事を思ふと涙がこぼれます。實際、ミレエは貧乏畫家の力です、慰めです」

自分はIの半生をよく知つて居た。だからミレエを引き合ひに出されたりなんかすると少からぬ不快を感じた。自分自身がミレエに成り代つて腹が立つて仕樣がなかつた。何故彼は、自分で自分のパンを儲けるための仕事をしないのだらう。これでは、餘りに虫が善すぎる、とも思つた。だが、それと同時に、我々貧乏な藝術家の生活を脅かす社會の不合理をも痛感しないわけには行かなかつた。

Pに行つて自分はIのために二三の料理を注文してやつた。Iはそれをさも美味しさうに、飢えた犬か何んかのやうな口つきでもつて食べた。早くなくなつて了ふ事が惜しいと云つた風に、美味しさうなところを後へまはしてチビリチビリと食べた。

注文したのが無くなつた時、自分は云つた。

「ライスカレエでも取つたら何うだ。それとも何か注文がある？」

「いや、もういゝんです」

Iは答へた。が、やはりまだお腹の方が承知しなかつたと見えて、遠慮しい〳〵

「御飯もらつてもいゝ？」

と自分に訊いてから、ボーイを呼んで命じた。

「御飯をもつて來て呉れたまへ、成るべく澤山ね」

自分は日本の現代の畫家に對する不滿を語つた。繪を社會問題の道具に使つてはならないが、もつと複雑な内容、もつと實生活とクッついた内容のある繪が何故日本に出ないのかと非難した。

Ｉは自分の説には賛成しない様だつたが、少くとも本當のところを諒解して居ない様だつたが、たゞ默々としてそれを聽いた。その態度には如何にも自己を卑下した様なしほらしいところが見えた。

自分は何だか氣の毒な様な氣がして來た。はては、例の病の、人生に對する絶望的氣分が容易に自分の意識の表面に浮んで來るのを覺えた。

神田の靑年會館は今日の精神主義運動の會場であつた。Ｐを出てから自分達はそこへ行つた。講演會にはまだ間があつたが、その前に主催者古田氏が特に招待した數十名のものが、一つの暖爐を圍んで集つて居たそれ等の人々の間に、數名の知人を自分は見出した。猛烈な煽動社會主義運動者であつた東山氏、乞食僧桃水の崇拜者で、天下を漂浪者して居る寺島氏、社會黨主領英氏、帝大教授長島氏、その他可なり澤山の人が居る。

吾々は先づ今日の精神主義運動の主催者たる古田氏や、精神主義運動そのものに就いて語り始めた。そして、それから、談はたま〳〵天下の奇人變人の事に及んだ。

風變りの人の名が後から後からと繰り出された。そのうちで自分の一番深く興味を惹いたのは、巣鴨の土穴に住むで居るＳと云ふ仙人の事であつた。

「それは面白いんだ。棺桶を穴の入口のとこへ置いて、自分はその穴の中にすつ込んで居るんだ、そして、生活の事なんかには全く超然として居るんだ」と東山氏はＳの事について語り初めた「その思想に從へば、人生が不幸なのは、人間が皆くだらん欲望に支配されて居るからで、人間が一切の欲望を捨てゝ、たゞ自然に生きる時のみ、初めて幸福が人間の上に下つて來るつて云ふんだ」

「まるで昔のエッセネの徒の様なものですね。でも、今は昔と違つて食ふ事の心配が要る筈ですが、それは何うして居るんです」

Ｓの事に就いて初めて聽いた自分は、今の世にもそんな人間が居るのかなと思ひながら、かう訊ねた。

「何でもそこいらへ貰ひにまはる様だな。よく色んな人のところへ行く様だ」Ｓの事については東山氏も餘り詳しい

事は知らない様な風だつた。

「僕のとこなんかへもよく來ますよ。先達ても、手紙を書いて來て、これを出すんだけど切手がないので、切手を貼つて出して呉つて云つて來ましたよ」

古田氏の「精神主義」紙上に氣のきいた小品を書いて居る小村君が傍からから口を入れた。

「それに隨分色んな人があの穴を訪ねて來るんです。勿論、それは物好きで此の穴仙人を見に來るものも多いんですが、中には眞面目に道を尋ねてやつてるものもゐるんです。そうして、さうした人は來る度に幾らかづゝか賽錢をあげて行くのです」

漂浪者の寺島は、自分も時々彼を訪ねるので割合詳しく知つて居た。

「成る程な、こちらから捨身になつてかゝりや、さうなるのが自然だな。」と東山氏はやゝ暫し感嘆してゐたが、彼はまたかう附け加へた「一體世の中が凡て此麼人間ばかりになりや譯はないんだがなあ……」

「だが、世の中は到底そんな風にはなりツこありませんよ。第一人間の欲望をそんなに否定する必要はありませんよ。それは不自然です。宗教家が救を求むるの餘り、さうして人間を片輪者にするばかりです。ですから、さう云ふ生活はたゞ、さうした『穴』の中でのみ行はれる事で廣い人生には通用の出來ない事ですよ。從つて、それはたゞその人一人の生活方式であつて決して普遍的なものではありませんよ」

かうは云つたものの、自分は尙、かうした思ひきつた生活を斷行したSの勇氣を嘆賞しないわけには行かなかつた。何故なれば、自分もかつて、まさか穴にまでは這入らうとは思はなかつたが、自分の謂ゆる眞實を實現するために、人間の持つ一切の欲望を捨てゝ、謂ゆる「神」に生きようとして生きる事が出來なかつた事を知つて居たからである。

自分はこれ等の人々の話を通して、Sと云ふ男はどんな男かを想像した。そしてまだ彼と會はないうちに立派に彼のイメージを胸の中につくり上げた。

「一度會つて見たいな。何處ですかそれは？その穴は？」

自分はかう訊ねた。

「會つて御覽なさい。僕先達てあなたの『一隅より』をあげて置きましたから、先方ではもうよくあなたを知つて居ます」

と寺島は答へて、穴の在處を自分に詳しく敎へて吳れた。

講演會の始まる前に、古田氏が特に招待した人々の小さな集りがあつた。東山氏と自分と今一人の人が、古田氏の要求によつて簡單な感想を述べた。自分は、社會運動が精神方面を餘りに無視し過ぎる傾きがある時、古田氏の此の運動が起つたのは意義のある事だが、古田氏の思想には全然とは同意する事が出來ない事を述べた。

が、そのうち聽衆がもうだん〳〵と集つて來た。吾々は階上に行つて、古田氏の好意になる折詰のすしを手づまみで取つた。そしてそれが濟むと、直ちに講演會が開かれた。

古田氏は雄辯に彼の思想信仰を披瀝した。大體に於いて、自分は勿論氏の思想に同意した。けれどもまた同意する事の出來ないところも同樣にかなり多い事を自覺した。色々の人の講演があつたが、中途で失敬して、東山氏と一緒に、萬世橋で開かれて居る敎員組合の啓明會新年會に出かけて行つた。けれど、こゝにも別に面白い事がなかつた。

三月二十日　晴　暖

先達て思想家と勞働者團體の幹部との會合があつた時、岩崎君から、本鄕千駄木町敎會の青年會に來て話して吳れないかと頼まれたので、承諾して置いたが、今日はその日だ。何でも岩崎君の考へでは、此の日の會合の主題を「奉仕の生活」と云ふ事にきめて居るらしかつた。そして、自分にもさう云つた風の話しをして吳れと云ふ事だつた。

岩崎君の話しによると、此處の敎會の牧師は、かつて學生時代に自分の學資を無名で、今の救世軍司令官Y氏に貰いだ人で、彼自身は彼自身の勞働によつて、三度の食事は一度にしてまでY氏を扶けたのださうである。それならば自分もかつて、Y氏の說敎でその話をきいた事があつた、其の時自分は、Y氏の今日あるのは、此の人の愛の精神に感動した事に在ると云つても差支えがないと思つたのであつた。Y氏はこれを語る時は、必ず激情にむせび泣くのだつた。そ

してそれを聽くものゝ胸も亦必ず張り裂ける感動に慄へるのだつた。で、自分は、岩崎君の謂ゆる奉仕の生活と云ふ事には餘り深い同感はなかつたが、兎に角、さうした人の敎會だから何か變つたいゝものがある樣な氣がして遂に承諾してしまつたのだつた。

午後一時、自分は此の敎會の靑年會に出かけた。千駄木町の込み入つた裏通りで、此の敎會を見つけたのはもう二時を[illegible]樣過ぎて居た。

敎會と云つても、それは普通の人家で、山崎牧師の住宅をもつて敎會に充てゝ居るので、ほんの二三十名を收容する事の出來るのに過ぎなかつた。玄關の右側は牧師の子供達の勉强部屋らしく、小さな机や本箱が置かれてあり、玄關の奥は今日の集會の場所に充てゝある八疊と四疊半との二間であつた。

玄關の格子戸を開けると直ぐ、五十格好の、痩せた、背の高い、眼の落ち窪んだ人が表はれて自分を迎へた。――これが山崎と云ふ人だな、と自分は一眼で感じる事が出來た。中では岩崎君が既に何か滔々として話して居た。

岩崎君の話がすむと、自分が紹介された。敎會の敎壇に立つのは、自分にはもう七八年振りである。しかし、今はもう、以前のやうに、敎會の敎壇を特別に神聖なものだとも何とも思はないのだから、以前のやうな重壓を感ずる樣な事は少しもなかつた。自分は全く打ちくつろいで語る事が出來た。話しも別に組織だつた話でなしに、たゞ思想の糸のほぐれて來るまゝに述べたてた。自分の話した事の主旨は要するにかうである。

「人間の歴史から考へて見ても、人の一生から考へて見ても、人は色々の事を考へ語り生活するが、要するにそれは「自分」のうちに本具して居る性情を解放し表現しようとする努力に過ぎない。卽ち、人は皆「自己」に生きようとするのだ。それ故に、人生とは要するに自己を表現する事に外ならないのだ。

さう考へて見ると、神のためだとか、社會のためだとか考へて、そのために、自分自身の内容を制限され束縛されると云ふ事は間違つて居る。だから一番根本的な事は、人が皆「自分のため」に生きる事だ。

だが、玆に考へなければならぬ事は、自分のために生きるのだからとて、他人や他の一切の事に無頓着に自分の我儘

勝手を生きる時には、うまく行かない。そして結局自分の不利益になり滅亡に終らねばならない。自分は決して孤立せる生存でなくて、社會の全體と聯關して居るものだ。卽ち、自分のうちに社會全體が包含されて居るのだ。そこで、この大きな自分を生きるためには他人の事も考へなければならない。

さて、さう云ふ立場から今日の社會を眺めて見ると、今日の社會は、決して此の全社會をその內容として居る様な「自分」の組織でない。だから、此の社會は分裂して居る。一つの組織體であるべき社會が相敵對する階級に分たれて居る。卽ち、特殊の權力をもつて他を支配し他を自己の奴隷として居るものと、されて居る者との別があり、特殊の生產機關を所有して居るために他を雇傭し使役しそして自己の利益のために利用して居る階級と、されて居る階級との別があるのだ。

そして玆に社會的不幸が釀生し、不公平が行はれる。しかし生命は力强い噴火山だ。どんなに壓へつけられて居ても時が來れば爆發しないでは居られない。そして今や、これ等の被抑壓階級が自覺して、眞の「自分」に生きようとして居る。

かゝる場合に於ては、慈善なんて云ふものは一時的の誤魔化しに過ぎない。また自分だけ正しい生活をすればいゝと思つて、その正しい生活に進んで行つても、今の社會制度が在る限り、決してそれを實現する事が出來ない。そこで、何うしてもその根本的な療治をしなければならない。……

玆に自分の云ふ新しい奉仕の生活がある。卽ち、各人が銘々に自分の地位についてよく考へる事だ。そして、もし自分が他人を支配し抑壓し、また他人の勞働を掠奪して居る様な境遇に在るならば、それをやめる事だ。また、それ等の特權階級を扶けて居る者も、同時に、その仕事をやめる事だ。さうすると、これ等の人なしに特權階級の生活は立ち行かないのだから、自然と彼等は、その特權も寶の持ち腐りだと云ふ事がわかつて、遂には投げ出すに至るだらう。

これは中々困難な事だ。これは大なる犧牲だ、しかしこの犧牲こそ眞の奉仕の生活だ。

自分の話しがすむと、集つて來て居るもの丶五分演說が始まつた。自分の思想は、慈善的行爲をもつて奉仕の生活だ

とばかり心得さゝれて居る敎會員には餘程不思議な言說であつたに相違ない、しかしワカリのいゝ三四名の盲人達には自分の思想が容易に受け納れられたらしかつた。彼等は熱心に自分の思想に同意した。五六人のものが順々に話して行つた時に一人の爺むさい男の番になつた。

自分は最初からその異様な人物に眼を注いで居た。彼は小柄な、萎びた様な顏をした、髯の蓬々と生へた、そして着物と云へば、また寒い今日此頃の日に、破れた、而も垢じみた單衣を纏つた、何う見ても路傍に物を乞ふ乞食としか思はれない男だつた。

彼の番になると、彼は先づ何よりも先きに自分がSと云ふ、穴に住むで居る者である事を述べた。

——あゝツ、此の男だつたのか。と、自分は初めて此のSと云ふ男に會つた事の喜びに胸を躍らしながら、彼がどんな事を語るか、熱心に耳を傾けた。

Sは云つた。

「私は今日初めて苔野さんにお目にかゝるんですが、お名前は早くからきいて居ました。何時かも作右衛門さんが（寺嶋のこと）穴に私を訪ねて呉れました時も、苔野さんの話しが出て、苔野さんが一度私を訪ねて見たいと云つて居られたと云ふ事をきゝましたし、苔野さんのお出しになつて居られる『一隅より』と云ふ雜誌も見せてもらつて居ました。で、實は心待ちに苔野さんの來られるのを待つて居たんですが、到頭御見えにならなかつたので、今日までお會ひする事が出來ないで居たのでした。ですが、『一隅より』を通して私は心ひそかに苔野さんの思想や信仰のどんなものであるかを想像する事が出來て居ましたし、今日のお話を承りまして益々はつきりと苔野さんの人物を摑まへる事が出來た様に思ひますが、私の考へでは、苔野さんは成る程、時勢の波の上に乘つて居る人だとは思ひますが、まだ、その波の下に深く沈み込んで居る人だとは思はれません……』

Sは先づ斯う云つて、彼自身の生活からして、自分に對する批評をし始めた。そしてそれから、穴に住むで居る彼自身の生活が人生及び社會に對して何麼意義をもつて居るものであるかと云ふ事を、可なり混雜した言葉の言ひまはし方

で說明した。

——おや〳〵、これがあの何時かの晩にのぼつた穴仙人だらうか。と自分は、餘りにその自分の想像して居たのと違つて居た事に驚きながら自分の心の中で自分に云つた、自分の想像では、Sはたゞボンヤリとした、ちよつと見ると薄ノロのやうに見える男で、時々は乞食のやうに人の家に食を乞ひに行き、さうでない時には穴の中でぼんやりと考へ込んで居るか、集つて來る子供や女にタワイもない事を話してきかせて居るのだらうと思つて居たのだつた。ところが、今かうして見る彼は、餘りに俗氣がタツプリで、餘りに取りとめもない事をペラ〳〵としやべる彼であつた。自分は失望しないでは居られなかつた。しかしまた、彼の話しをよく聽いて居ると、たとひその言葉や思想が支離滅裂であらうとも、彼の言葉にはやはり、何處か熱があり、信念があり、豫言者の鋭さへあつた。そして自分は、彼を尊敬する氣にはなれなかつたけれど、何となく愛らしい男のやうな氣がして來た。

Sの話しが濟むと、尙七八名の青年や、山崎牧師の話しがあつた。だが要するに彼等はまだ、普通の敎會的信者の思想以上には一歩も出る事の出來ないものばかりであつた。彼等は神の惠みだとか攝理だとか云つた樣な因襲的な考から脫する事が出來なかつた。そして、資本家が富を所有して居るのも、權力者が權力を所有して居るのも、凡てみな神の賜だから、それを善用すればいゝのだ、と云つた樣な事を明白に云ひきるものすらあるのであつた。

一通り話しが濟むと、自分はSに話しかけた。

「S君は穴に何時頃から住み初めたんですか」

「昨年の九月頃からです」

「穴の中は何麼風にして居るんです。ジメ〳〵するでせう」

「疊を一疊敷いてあるんです。」

「何うです、多は寒くありませんでしたか」

「えゝ、隨分寒いです。先達て雪の降つた時などは、寒いのを通り越して身體がヅキ〳〵痛んで二日二晩と云ふものは

殆んど眠れなかつたです」
「ふとんでもありますか」
「いや、ふとんはありません。薼が一枚あるきりなんです」
「何處かで蒲團を貰つて來たら何うです」
「いや、それはいけないんです」
成る程、こんな處ろは仍りエッセネの徒だな、極端に禁欲生活をしようとするのだなと、思ひながら自分はまた訊うた。
「それは何うして？」
「さうすると罪を犯す事になるからです」
「と云ふと？」
「と云ふのは、私が留守になつた間に、誰かゞやつて來て、つひその蒲團をカッパラッて行く氣を起させるからです。
實際そんな事があつたんです」
「カッパラッて行けば行かせばいゝぢやありませんか、そしてまた貰つて與るといゝ」
「いゝや、さうすれば私の方はいゝとしても、カッパラッて行つた奴はそのために悩まねばなりませんから、いけないんです」
まだ、くだらんところにこだはつて居るな、と自分は思つた。けれど、兎に角、一切を捨てゝ穴に住むで居ると云ふ事だけは何うしても一概に卑下してしまふ事は出來ないと云ふ氣がしたので、何れまた、そのうちに、穴を訪問すると云ふ約束をした。

四月八日　晴　暖

昨夜から來泊して居るNと連れ立つて朝から外出。

Nは今、大坂で基督教世界と云ふ雜誌の主筆をして居るのだが、彼自身の思想や信仰から、何うしても何時までも斯うしては居られないとあつて、近いうち、同誌を辭して上京し、新生涯に入り度いと云ふ希望をもつて、その準備に來たのらしい。そこで、彼をつれて、將來の新生活のために必要だと思はれる人々のところを訪問してまはつた。

巣鴨に音無のところを訪問したのは午後の三時頃だつた。そして、ふとそこまで行つて、Sが此の近處の穴に住んで居るのだと云ふ事を思ひ出した。

「何うだね、面白い人間が此の近處に居るんだが行かないかね」

と自分は、音無のところで話して居る時に、Nに云つた。

「行かう、どんな人？」Nは答へた。

「Sと云つて、穴に住むで居るんだ」

「穴に？」とNは不審さうな眼をあげた。

自分は彼のためにSの事を話してきかせた。Nは好奇心にはやる眼で、早速それに贊成した。

音無のところを出てから、自分は大體この邊だなと思はれたところまでNをつれて行つた。そしてその邊の人に「何處か此處いらに穴がありますか」ときいた。Sはもう此の近邊では有名だつた。彼の住居である穴の所在は直きに判明した。

教えられたまゝに自分達はある小さな通りを右に這入つた、その小路は直きにちよつとした小高い丘にぶつつかつた。その丘に登ると、丘の向ふ側にかなり廣い廣つ場があつた。廣つ場の右手には小さな山があつて、その上には櫟や椎の小さな杜があり、左手の下には人家が立ち並んで居た。前方には坂道があつて、その坂道の彼方には山の手線の電車が走つて居た。

「此處だな」と自分はNを顧みながら、その廣つ場の中に飛び降りた。そして穴らしいところを見つけようと、周邊を見まはした。右の小丘の下の方に穴らしいものが見えた。

「あそこだよ君」と自分は今一度Nを誘つてその方に足を進めようとしたが、その途端、その穴の少しさきのところに二人の男が蓙を敷いて日向ぼつこをして居る樣な格好で座つて居るのを見た。

そのうちの一人は年の頃三十四五の、立派な服裝をした、肥えふとつた、堂々たる紳士體の男であつた。そしてその男の傍に、小さな男が、悠々として煙草をふかして居た。

その顏はSに似て居た。けれど彼は今日は、前に自分が初めて逢つた時のやうな身窄らしい風はして居なかつた。顏も奇麗に剃つて居るし、着物も木綿ではあるが破けたものではなかつた。で、ちよつと躊躇つてよく見定めねばわからぬ位であつた。

自分達はツカツカと二人の前に進み寄つて行つた。そして言葉をかけた。

「やあ。先達ては失禮。君の穴は何處だね」

「そこです」とSは、自分が今、此處だなと見當をつけたところを指示して見せた。

「一つ見せて呉れたまへ、その穴を」

Sは、今一人の男に、「ちよつと失敬します」と云ひ置いてそこを立つた。そして彼自身先づその穴の中に這入つた。

穴の入口は人の背丈よりは少し低い位の直徑の圓に堀られてあつた。そしてそこに、木の片れへ「靈活窟」と下手な字で書かれてあつた。しかし例の棺桶は置かれてなかつた。

入口をくゞると、直ぐそこは疊二疊敷位の廣さがあつて、雨に濡れてジビジビとしてゐた。そこには別に何も置かれて居なかつた、が、その奧にもまだ穴があるらしかつた。腰をかゞめねば這入る事の出來ない程の入口があつて、そこには破れた蓙がカアテンのやうに吊り下げられてあつた。Sは靜かにそのカアテンを捲き上げた。そして小さな棒杭でそれを下に落ちて來ない樣にとめた。

第二の穴は第一の穴よりは狹かつた。そして滅暗くてちよつと見わけがつかなかつた。Sは馴れた足もとでツカツカ

と中の方に這入つて行つて、マッチを擦つた。そしてそこに置いてある小さな蠟燭に灯をつけた。

暗い穴の中の樣子がパッと光に照らされて見えた。此の穴の入口もやはり水に濡れてジビ〳〵して居た。が、二三尺置いて直ぐその奥には縱に一疊の疊が敷かれてあつた。そしてその疊の兩脇の穴の壁と疊との間に出來て居る少しばかりの空席には藁を敷きつめて塞いで居た。蠟燭の弱い光は穴の奥の方までも照らさないのではつきりとはしないが、奥の方には今一つの小さな穴が横に折れてあるらしかつた。そして此の第二の穴の行きつまつたところには小さな机が置かれ、その机の向ふ側、壁に接して、二三尺の細長い旗が小さな棒に吊りさげられて居る樣子だつた。

「あれは何です？」

自分は先づSに訊ねた、

「あれは何でもありません、旗です」

「何か書いてある樣だな、何て書いてあるの？」

Sは多少きまりわるさうな顏をして蠟燭をあげてその方を照らした。「神境」と云ふ文字がぼんやりとその旗の上に表はれて見えた。

何だか子供らしい事をして居るんだな、と自分は思ひながらも、かうした人の心持ちは、自分もかつて狂熱的な宗教信者であつた經驗からよくわかつて居たので、別に輕蔑する樣な氣にもなれなかつた。

疊の上には一着の袴が投げられて居た。その前に半片の食麵麭がころがつて居た。Sはその麵麭を袴の下に隱した。洋服を着て居た自分とN君は靴をとるのが面倒であつたので、疊の上に腰をおろしたなりでSと話し初めた。

「棺桶は何うしたんです」

「あれですか、あれは、此の二三日雨がふつて寒かつたものですから焚いてやつたんです」

とSは答へて、自分達が今足を投げ出して居るジメ〳〵した土間の上に置かれた五德の上に載せられてある、眞黑になつた藥罐のところを指示して見せた。

こんなところは中々面白いなと、思ひながら自分はSに問答を初めた。

「一體君の信仰と云ふのは何麼ものなんです。君は神と云ふやうなものを信じるんですか」

「さあ、神と云つていゝのか何うか知らんが、兎に角、此の世の中の事は一切そのまゝにしていゝんだと云ふ事を信じて居ます」とSは自分の信念を語り初めた。「たとへば、此の穴の上の山に生へて居る木は木としてそのまゝにいゝので、吾々がこれを何うしようとする必要もなく、此處の藥罐は藥罐としてそのまゝにいゝし、此の穴は穴としてそのまゝによく、また、私が此處に住んで居ると云ふ事もこのまゝでいゝので、私はそれらのものゝお陰で生きて居るんです。だから、私は別に、あの木を自分のものだと云ふ必要もないし、此の藥罐を自分のものだと主張する必要もないんです。だから云ふ風な心持ちになると、くだらぬ慾に支配される必要もなく、またそのために私の心の平和を亂される恐れもないんです。それを、世間の人は、これは俺のものだ、これはお前のものだと區別をたてるものだから兎角此の世の中の事がうまく行かないんで、困つたものです。だから、私は別に誰でも此麼穴に住めとは云ひませんが、この根本精神を體得して呉れる様にと云ふ願ひから斯うして穴の生活をして居るんです……」

「一切はこのまゝでいゝんだ」と云ふ言葉のもつ内容を自分は容易に諒解する事が出來た。それは自分もかなり大きな苦悶を經て、一切を否定した後一切を肯定する事が出來た心境と同じだと云ふ事を知つて居たからである。

「本當に此の男がこれを體得して居るのなら」と自分は思つた。「此の男は兎に角或る者を掴んで居る。だが、それは果して此の男の體驗から出た言葉だか何うか？」

そこで自分は更に、彼が果してそれを體驗して居るのか何うかを試驗するつもりで、彼の身の上ばなしを聞いて見ようと決心した。

自分は云つた。

「一切はこのまゝでいゝんだと云ふ君の信仰はよくわかつた、しかし君は何うしてそんな信仰に到着したんですか。君の今日までの生涯がどんなものだつたんですか。それをきかしてもらひたいもんです」

「私の履歴ですか、それはもうお聽きになつたでせう」とSは暫し云ひにくさうにして居たが、自分が强つてと云ふので語り初めた。

Sの語るところによると、彼は先づ生れ出でないうちからして既に、呪はれた運命の所有者であつたらしい。彼の父は士族の家に生れ、村の先覺者として村の村長などにすら撰ばれた男であつたが、彼の父は若い時、一里ばかり隔てた或る村の豪家の娘に懸想したらしい。そして色々のいきさつを經てやつとその女を娶る事が出來て最後に生れた子がSであつた。ところが、彼の父はSを彼自身の子として承認する事が出來なかつた。そしてそこに彼の不幸な一生の門出があつた。

父はSを自分の子と承認する事が出來ないところからSを憎んだ。そしてその憎み樣は並大抵ではなかつた。そこで彼は年十二三才にして家を出なければならなかつた。彼は寺の小僧として彼の新しい生活を初めた。けれどもそこでも彼の生活の安定は保たれなかつた。彼は漂浪の旅に上つた。彼はその間に人生の有りと有らゆる不幸苦痛辛酸をなめた。彼はつくぐ\と人生の無常を感ぜざるを得なかつた。そして最後に全く行きつまつた時、彼の光明が彼の心靈を照らした。——所詮人生はこれ以上は何うにもならないものだ。人生はこのまゝでいゝのだ。かう云つた絕望のどん底から、一切をそのまゝに肯定する事の出來る悟りに彼は到達したのだつた。

Sの話しをきいて居て自分は、彼のセンチメントが彼の生涯の實際とは餘程違つたものとして自分の前に描かれて居るのを見遁すわけには行かなかつた。けれど、彼がそんなセンチメンタリストであればある丈け、彼の苦悶もどんなに大きかつたかと云ふ事も信じられた。そしてその絕望の底に堀りあてた肯定道の說明も彼の言葉を通しては少しも語られなかつたとは云へ、自分は自分自身の經驗からして容易にそれを諒解する事も出來、彼の經驗の眞實性をも信ずる事が出來た。

自分は云つた。

「君のその身の上ばなしを聽いて、君の信念の眞實さを僕は信じる。そして一切は此のまゝでいゝのだと云ふ信仰をも

是認する。しかし、僕から云ふと、君の信仰は今一歩すゝめる必要がある。何故と云ふと、一切はこのまゝでいゝのだと云ふ事は、それは絶體界の事だ。少くとも吾々の信念としてのみ是認される事だ。だが、吾々は人間だ。だから、人間のもつ感情や意志はこのまゝ肯定しなければならない。吾々の生活の途上に於て、吾々の人間としての生活を阻害する不合理を見つけ出した時、それを破壞しようとする心の起つて來る事もまた自然で、そしてそれも君の謂ゆる『一切はこのまゝでいゝんだ』と云ふ考への中に入れらるべきものだ。一切はこのまゝでいゝんだと信じながら、だから一切の欲望を捨てゝ、このまゝの人生を是認しようとする事は、反つて此の大肯定道を制限する事になる。で、僕も云ふ。一切はこのまゝでいゝんだ。だから、君等のやうな消極的な事を云はないで、これではいけないと思つたら、ドシドシそのいけないところを破壞すればいゝ。その結果が何うならうと、それは問ふところでないと」

「いや、私も別にそんな消極的な生活をしようとは云はないんです。もしさうだとすると、私は山の中にでもすつこんでしまひます」とSも輝く眼を瞬りながら自分に答へた「しかし私はそんな消極的な生活はし度くないんです。だから此處に居ても只凝乎として座つて居るんぢやないんです。ですから、その一つの仕事として、此頃は、毎日曜日に茲で說教をして居るんです」

「さうですか。それはいゝ事だ」說教位では駄目だとは思つたが、それでもそれはまあ面白い事だと思つたので自分は云つた。「大分集りますか」

「えゝ、澤山集ります、先週の日曜なんかは、私は知らなかつたが何でも七八百も集つた樣です」

「さうですか、それは面白い。それなら、僕も一つやつて來やうか」

丁度、自分もさうした事を——自分のは勿論說教ではないが、宗教的信念を根柢としたプロパガンダを——やり度いと思つて居たところなので、出來るなら彼と一緒にやつて見たいと思ふ心からかう云つた。

「えゝ、さうして下さい。大にやりませう」

Sも喜んで自分を迎へた。

「ではさうしよう。此次の日曜はちよつと差支えがあるがその次から……」
こんな風に自分達は約束した。自分はSに「これはお賽錢です」と云つて五十錢札を一枚殘して置いて穴を辭した。
四月十八日　晴　暖
Sとの約束の日だ。
妻や子供や、やつて來た青年をつれて巣鴨の穴に出かける。花見時なので人出が多い。どの電車もどの汽車も花見客で一ぱいだ。新宿停車場のプラットフォームには面を被つたり變裝をしたりして居る團體客が軍隊のやうにつめ込んで居る。――暖い、いゝ天氣だ。實際、誰でも浮かれ出さずには居られない氣候だ。
三時頃穴に着く。廣場ではもうSの說敎が始まつて居る。少し小高い櫻の木の下で、何時の間に出來たのか新しい棺桶を置いて演壇となし、Sは何か熱心に語つて居る。七八十名の聽衆が立つたり座つたりして聽いて居る。Sは、自分の姿を見るなり、直きにやめて自分を紹介した。
かくして自分は、永い間の懷疑の雲を突破して、新なる强き信念をもつて、自分の新宗敎の第一聲を放つ事となつた。
自分の說いた事は要するに人は皆「自分」に生きなければならぬ。人間が求むる宗敎的情操の根本は自分自身に在る。一切は自分自身の產んだ子だ。自分こそ眞の實在だ。ところが、今の世の中は、我々をして此の根本實在を生かしめない樣にして居る。それ故に、我等は此の眞の生活をなさんがために、それを妨げる一切の障碍を打破しなければならぬ。今日の社會の不合理を破壞しなければならぬ。それをしなくては決して自分自身を生きる事が出來ない。精神の持ち方即ち諦めでもつて心の自由を得ようとするのは在來の宗敎の誤魔化しだと云ふ事であつた。
語りながら自分は、我れながら一種の昂奮を覺えないでは居られなかつた。昔、ナザレのイエスが、會堂や寺院で彼の宗敎を傳へる事なしに、山上や野原で、彼自身の新宗敎を宣傳した光景が眼の前に浮ばないでは居られなかつた。イエスの說敎をきゝに來た者は學者でもなく貴族でもなく富豪でもなく、無智なもの、平民、貧乏人、罪人であつた樣に、

今自分に聽いて居るものも、近處の工場の職工や商店の丁稚や御用きゝや學生や勤め人である事も興味の多い事だつた。自分の話しがすむと、自分はつれて來た青年に自分の「一隅より」を配布させた。聽衆は熱心にそれを要求した。自分に次いで二人の青年が飛び入りに演說をした。Sが最後に自分の身の上ばなしをして會を解散した後も、聽衆は尚立ち去らうとはしなかつた。或者は穴を見に行き、或者は自分の周圍に集つて來て質問をした。

「いぬが來て居ます」と一人の青年が云つた。

「何時でも來るんです」とSが云つた。

棺桶が嘲る様な顏をして小高いところに座つて居る。十字架につけられた耶蘇が頭の中でカルヴリイの山の上に苦しんで居る。たゞでは死ねない自分の生活の第一歩が始まつたのだと云ふ嚴肅な心が自分の裏に湧く。

E女史の一家のものもやつて來て、お茶や煎餅を饗つて呉れる。そして彼等の家に自分達をつれて行つて、T君の繪を見せて呉れたり、おすしをとつて呉れたりする。

夜になつて家に歸ると、去る四月三日に神田の青年館で思想團體聯盟の講演會で自分もやつた時初めて會つたN――がまたやつて來て居る。彼は何うも「犬」でなからうかとみんなで話し合つて居たので、益々その様な氣がしていやで溜らない。疲れたからとていゝ加減に追つ拂ふ。

四月十九日　晴　暖

十二時頃N署の高等刑事が來る。また例の御高說かと思ふと、四月十五日に出した、自分の手紙代用のパンフレット「一隅より」の發賣禁止を傳へる。これは賣品でない、友人のところへ無代配布するものだと云ふ事、それ故殘本はない事を說明する。信じない様だつたが、兎に角歸る。

四月二十五日　曇　稍寒し

今日は日曜だ。また家内ぢゆうで穴へ出かける。今日は色々な人が來て居る。青年改造聯盟の一青年から、神官のやうな裝飾をした老人が二人まで飛び出して彼等の謂ゆる宗教を語る。自分達はお先きに失禮して、近處の友人を訪ね

る。

五月二日　曇、後晴　暖し

・今日は日本で最初のメエ・デイだ。上野の森では各勞働團體が多數の勞働者を糾合して氣勢をあげて居る。

自分は穴へ。昨日までひどい雨だつたのと、今日はメエ・デイでその方に行つたのか、今日は五六十名しか集つて居なかつた。けれど、自分の宣傳は有効だつた。

「大なる迷信」と題して自分は、あらゆる迷信を折伏した。

自分の話しがすむと、聽衆の約半數は自分を取り捲いた。そして自分に質問を浴びせかけた。

中にも、獨學で法律や經濟を勉强して居るのだと云ふ紙屋の番頭さんがひどく自分に喰つて來た、自分は大膽に自分の所信を語つた。

もつと極どい質問をしたものがあつた。自分はしかしその人には用心した。

「あの男は怪しいな」と自分達は後で話し合つた。

五月八日　曇、小雨　暖

W大學の講堂で、講演。

濟んでから「創造者同盟」の親睦會に出る。

今日は非常に氣持ちのいゝ日だ。自分の多年の持說を十分に話す事が出來、少からぬ贊成者を得たので。

夜おそく歸ると、N署から明日出頭しろとの御命令。だん／＼と空氣が險惡になつた事を思ふ。

しかしそれが何の爲めであるか自分にもわからない。

五月九日　曇、小雨　暖

午前十一時頃N署に行く。禁止の「一隅より」を巣鴨の穴の前で配布したとのお咎めだ。舊い分を配布したうちに禁止の分が這入つて居たのだらう、その理由を說明する。

五月二十七日　晴、夜雨　暑

明日は「FG會」の發會式だ。今日は朝から出かけて、ビラを貼りに行き、新聞社を訪問する。

（作者申す、以下十枚編輯者の要求により削除する）

五月三十一日　晴

N新聞社から寫眞を送れと云つて來る。

かつて大阪M新聞から云つて來た時には少し社會的に知られてゐる人全部に云つて來たらしく別に氣にもとめなかつたが、今度のは妙に氣になる。

二十八日の晩の事があつてから此方N新聞社は、急に、自分が何時死ぬ男かも知れんと思つて、死んだ時の用意にでも寫眞を送れと云つて來たのだなと云ふ樣に感じられて、自分の前途が何となく暗くなつたやうな氣がする。

坊やは自分にまつはりついて來て、うるさく附きまとふ。

「これツ、うるさいぢやないか。パヽはおべゞも脫げないよ」と自分は坊やの頭をさすりながら云ふ。

坊やはそれでも尙自分を離れない。そして云ふ。

「パヽ、チヨコレート買つて來た？」

「おゝ、すつかり忘れて來た」と自分は答へた。

自分はそれを耻ぢた。今朝出がけに、あまり坊やがうるさく附きまとつて、自分を外出さゝない樣に泣いて脅かすので、一時のがれに、歸りにはチヨコレートを買つて來てやると約束したのを、一つは彼の胃腸が少し痛められて居るのと、一つは少しでも冗費を省きたいのと――その實、自分の事にかけては隨分とむだな費ひ方をしながら――で、わざと忘れて來たのだつたからである。

「さう〳〵」と坊やは、自分に對する信賴と、自分の歸つて來た事の嬉しさとに、別に悲しさうな顏もせず、怒りもしなかつた。

着物を着かへて、食事を待ちながら食卓の傍に座ると、坊やは何も懐ツこく自分の膝にのつかつて來る。

「若し自分がMのやうに災難にかゝつて牢屋へ入れられるか、殺されるやうな事があつたら……」と自分は考へる。「此子とはもう永遠に別れねばならんのだ」

それを思ふとたまらない様な氣がした。まだ／＼此の世の中に、與へられた歡びを半分の半分も樂しまないで殘して行くと云ふ事は何と云ふ悲しみであらう。そんなにまでして、俺は俺の思想を傳へねばならないのだらうか。

だが、自分はまた直きに考へた「馬鹿だな、俺は別にそんな事をしては君ないぢやないか。何を考へるんだ、馬鹿が……」

食事を濟ませて、まだ食卓を離れないで居るところへWが久しぶりにやつて來る。やつぱり子供の時からの友達は何處となく違つて居る、彼と逢ふ事は何となく嬉しい。が、例の如く彼とは話しが合はない、二言三言話して居るうちに直ぐ彼の云ふ事に腹を立てる。彼は云ふのだ。

「君、用心しろよ。あまり輕卒な事をして、われとわが、死地に飛び込むやうな事をしちやいかんぞ。君自身はそれでいゝとしても家内があるんだぞ……」

「輕卒な事をして」と云つた言葉が妙に癪にさはつた。そこで自分はムッとした口調で云つた。「何時俺は輕卒な事をしたね。俺は別に君等に非難されなくてもいゝ筈だ」Wはしかし冷靜だつた。そして言葉をつゞけた。

「輕卒と云つちやいけないかしらんが、まあそんな事はやらない方がいゝよ。第一君のやうな遣り方では社會改造の實はあがらない。それでは、君が徒らに官憲から注意され、壓迫されるばかりだ。君が本當に社會のためを思ふなら、自分自身を表はさずして、徐ろに時を待つ事だ。まあ、それまでは默つて藝術の方面に精力を集注し給へよ」

「僕は效果などを考へて居ない」と自分は答へた。「そして僕が官憲に壓迫されると云ふ事は承知の上の事だ。成る程君なんかから見るとそれは馬鹿者のする事だらう。しかし、僕としてはこれより外にやり様がないんだ。」

「やり様はいくらもあるよ。蛇の如くさとく、鳩の如く溫和しくあれさ」

「そんなに心配しなくてもいゝよ。僕だつて子供ぢやない。そんな無茶な事はしない。僕だつて時を知つて居る。それ

までは何もしないよ……」

「君はしないつもりで居るが、して居るやうにされるからね」とWは更につゞけた「實は友人達が皆心配して居るんだよ。君は何でも眞劍になる男だから、尚更心配なんだよ」「有りがたう」と自分は答へた、しかし自分は尚、今の態度を改めようとは思はなかつた。自分が今宣傳しようとして居る思想は、自分が多年懷抱して居た思想でないか。そして彼等が自分にやめさせようとする事は、自分が採らうとする自分にとつてはかけがへのない一つの手段ではないか。自分はたゞ、自分の藝術を押しひろげて生活にあてはめようとしたに過ぎないでないか。」

Wは歸つて行つた。が、彼の云つた言葉は妙に自分の胸にこびりついて離れないのを自分は知つた。何となく身の毛がよだつ樣な氣がする、兎に角、此數日來、自分の考へが嚴肅になつたのは事實だ。生死の間に往來すると云つた昔の人の心持がよく味はれる樣な氣がする。

夜おそく、十時頃、誰か戸をたゝくものがある。

玄關まで出て行つて見ると、ほの暗い軒燈の光に照らされて身窄らしい洋服を着た一人の青年が立つて居る。

「私はあの穴の前で先生の演説をきいて居るものですが」とその青年は自分を見るなり云つた「今日ちよつと此近處の友達のところへ來たんですが、先生のお宅が眼に這入つたので、つひ飛び込んで來ました」

成る程さう云へば見覺えがあつた。それで自分は云つた。

「まあ上り給へ」

青年はもぢ〳〵して居る樣子だつた。しかし直き思ひきつたらしい態度で上つて來た。

青年は、年の頃二十二三才位に見えたが、顏の色は蒼黑く、眼はグッと落ち窪んで居た。如何にも神經質らしい、始終何か物を思ひ込んでゞも居る樣な格好の男だつた。

黑維紗の詰襟服はガブガブして居て、一見それが借物か、でなければ、古洋服を買つたものか、の何れでなければならぬと云ふ事がわかつた。

「此奴スパイでないかな」と、凡てに用心深くなつた自分は、疑ひ深くもかう考へた。そして、さうであるかないかを確める様な質問を試みて見た。

「私はあの近所の工場に勤めて居るものです……」と青年は彼自身の位地を説明した。

それをきいて成る程これなら大丈夫だと自分は思つた。そして打ちとけて彼と話した。

青年は云つた。

「私は先生の御話しを承つてすつかり感動してしまひました。けれど、まだ大分わからないところがあります。それで昨日もSさんのところへ行つて二三の人と色々と話して見ましたが、結局、Sさんが成る程苦野さんの説は尤もだが、我々の代はそれでいゝとしても、子供の時代になると、子供達は、そんな社會がいやになつて、また〳〵もと〳〵通りの社會をつくるだらう、つて云つたので、つひそれにしてしまつたんです、しかし私はやつぱり、その考へにも何處か誤つたところがある様に思へてならないのです、何うです、先生はそれを何う御考へになつて居るんですか」

「さうなるかも知れません」と自分は冷靜に答へた。「しかしその時はその時の事ぢやないか。僕の云ふのは、兎に角、現在、現代のやうな制度には堪えきれないと云ふだけの事なんだ」

青年の眞實の眼は輝いて見えた、自分は更にすゝめた。

「それに、僕は大丈夫そんな事にはならないと信じて居るんだ。丁度、今日どんなに時代錯誤の考へをもつて居て、今一度專制政治を行なふとしても、大勢がこれを許さないやうなものだ。大勢と云ふ奴は大きな働きをするもんだよ。それに制度がそんな逆行の出來ない様に造られて居るから……」

「わかりました」と青年は晴やかな顔をして、口に微笑をうかべさへして答へた。「實際今のまゝではやりきれません」

自分達は尚、色々の事を話し合つた、やがて青年は歸らうとして立ちかけたが、ふと思ひついたかのやうな調子で云つた。

「Sさんはあの穴を追放されましたね」

「S君が追つ拂はれた？　あの穴を？」と自分は驚いて訊いた。
「えゝ。まだ御存知ぢやないんですか」
「いゝや、知らない。何時？　そして何處へ行つたの？」
「まだ居ります。何でも今月ぢうは居つてもいゝが、來月は何處かへ立ち退いて呉れと云ふんださうです」
「誰がさう云ふんです？　地主ですか、警察の方ですか」
「地主がさう云ふんださうです」
警察が地主を脅迫したんだな、と自分は思つた。折角いゝ穴を見つけて喜んで居たのに、彼はこれから何うするのだらう、こんな事も突嗟の間に考へられた。
色々の感じがこんがらまつて自分の胸に湧き立つた。Sがそこを追はれるのは、自分がそこで演説をするからであるのは云ふまでもない。ところが、Sはまだ自分の思想には十分の共鳴をもつて居ない。さうすれば彼はたゞ自分のためにその居を失ふ事になるのだ、自分は、自分の正しいと思ふ事を宣傳するために、一人の、此の、社會的には全く無能な仙人を迫害させてもいゝものだらうか。——その責任は自分に在る、こんな風に自分は考へた、
青年は去つた。けれど自分の昂奮はまだ靜まらなかつた。反つて益々深いアビスに落ち込んで行くのを感じた。
六月六日　晴　暑
今日はH曜だ。S君が何うして居るか見がてら穴へ行く。
電車が穴の近處を通過する時、窓から首を出して何時ものところを見る。群集らしいものが見えない。空虛な廣つ場が、さながら戰場の跡のやうに寂しく擴がつて居る、
——やめられたな。と自分は思つた。落漠の感じが何處となく押しよせて來る。
巣鴨に電車を捨てゝ急ぎ廣つ場に行く。
やはり人が集つて居ない。平常（いつも）の小商いところには棺桶ばかりが寂しく立つて居る。その左の方、穴に近く數名のも

のが少しばかりの子供に取りまかれて集つて居る。
廣つ場の入口の、Sが何時もその日の演題を書いて貼つてある樫の木には「都合により本日講演中止」と書いてある。
自分は急ぎ小さな群れの方に足をすゝめた。そしてそこにSを見出す事が出來た。
思ひなしかSの顔には元氣がない。たゞ、髯を剃つて小さつぱりとして居るのが眼についた。Sは平常ほどでない微笑をもつて自分を迎へた。
「今日は說教がないんですか」
自分はいきなり訊ねた。
「えゝ、今日は中止です」
とSは同じ樣な靜かさで答へた。
「やあ、先生今日は」
と、Sの傍に居た盲人の靑年が自分に挨拶をした。自分は初めて氣がついた樣にやはり「今日は」と挨拶をかへした。
「私は何時かあの千駄木の敎會で先生の御話しを承つたNです」
と盲靑年は自分を紹介した。その紹介を待つまでもなく自分は彼を覺えて居た。が、自分にはまだ彼と話しをする餘裕はなかつた。自分は更にSに話しかけた。
「中止されたんですか。やつてはいけないつて云ふんですか」
「さうです。今日はやめて呉れつて云ふんです」
「永久にやつてはいけないつて云ふんですか」
「いや、何、その、さう云ふわけでもないんです」
Sの答へはこんな風に曖昧であつた。しかし、自分はもう此處へ來てやらうと云ふ氣がなかつたので、强つて追求す

る事はしなかつた。自分は話頭をかへた。

「君は此處を追放されたんださうだな」

「えゝ、何うして知つて居ますか」

Sは驚いた顔をして答へた。

「それはわかるさ、ちやあんと無線電信が來ましたから。」と自分はわざと青年の訪ねて來た事を云はずに「出ないつて云つて頑張つたら何うです。要するに僕が來て講演をしなけりやいゝんでせう」と訊いた。

「何、無理に出ろと云ふんでもないんですが」とSは又もや曖昧な返事をして「しかし僕は何うでもいゝんです」と云つた。

「だつて此處を出たら困るんぢやありませんか。さう何處にでも穴があるわけぢやあるまいし」

「車を拵らへやうかと思つてるんです」

Sは不意にかう答へて自分を驚かした。

「車を？」と自分は訊いた。

「えゝ、こんな風のものを」とSは何か描いてある小さな畫用紙を自分に見せて「これは或る畫家に設計さして描かしたもんでんが」と、その車の構造を自分に說明して聞かせた。

自分は自分の家の近處に在る火葬場に集つて來る乞食のうちに、車を家として居るものを二人ばかり見て知つてゐた。それを思ひ出して「成る程これはうまい事を考へ出したものだ」と感心しながら、彼の說明する車の構造をきゝとつた。が、その車の構造は自分の知つて居る乞食の車のそれに比べて見ると段違ひに立派なものであつた。それには立派な屋根があつた。內部には、優に一人の大の男が脚をのばして寢る事の出來る丈けの寢臺がついて居た。屋根は自由に取りはづしが出來る樣になつて居り、冬は風を防ぎ、夏は風を入れる事の出來るやうに大きな窓がついて居り、寢臺の下の方に自炊道具その他少しばかりの所屬品を入れる事の出來る樣にも設備されてあつた。一見それは斯う云ふところに

も自分の凝つた趣向を創造して見て喜ぶ畫家の趣向になつたもので、從つて、寧ろ一個の藝術として見た方が適當なもので、土穴に住んで居た仙人の住むのに適はしいものだとは思はれないやうな種類のものだと云ふ事が看取された。

Sはしかしそんな事には少しも氣づかない樣に、たゞ斯うした新しい生活樣式を創造する喜びに溶け込んでしまつて居る樣だつた。

自分は彼に云つた。

「これは面白いが、しかしこれを造るのには大分金がかゝるだらう」

「えゝ、まあ二百圓はかゝるでせう」

Sはかう答へて平氣な顏をして居た。しかし自分は驚かざるを得なかつた。自分は彼の言葉が信じられないと云つた風にまた訊ねた。

「二百圓？」

「えゝ、それ位は何うしてもかゝるでせう」

Sはやはり平氣な顏をして居た。

彼はその金を何處から得て來ようとするのだらうか。時々封筒や切手を貰らひに出かけるやうに、やはりその金をも貧乏な文士や宗教家や思想家のところへ貰ひに行くつもりだらうか。彼はそれを當然な事と考へて居るのだらうか。それよりも自分で勞働して自分のそのきりつめた生活をたてようとする考へが少しも起つて來ないのだらうか。こんな事を思つて自分は、彼が餘り蟲がよすぎる樣な氣がして來た。で、自分は彼に云つた。

「君が此の穴を追はれた事については、僕は大いに責任を感じて居るんだ。しかし君の住むところ位は何うにでもなるから、まあ安心して居たまへ。そのうち僕等も俱樂部か事務所見たやうなものを置き度いとも思つてるんだから、その時には君に一室位は提供出來るよ」

Sはしかし、自分のその提案には喜びの色を見せなかつた。と云ふよりは却つて迷惑さうな樣子をした。そして

「何、私の居どころ位は何うでもいゝんです。成る樣に成りますよ」

と云つた。

自分に容易に彼の心の中を推察する事が出來た。自分が彼に負うて居る責任を盡すべき提供が彼を喜ばさない事、そしてそれを何うする事も出來ない事、また、彼自身の生活は彼自身がこれを處理すべきもので、自分なんかゞ傍からそれに干渉すべきでないと云ふ事をはつきりと悟る事が出來た。

話しがちよつととぎれると、傍に居た盲青年が自分に話しかけた。

「私、先達ての先生のお話しを承りまして、また、先生の「一隅より」を人に讀んでもらひまして、非常に共鳴を覺えて居るもので御座いますが、近頃、さうです、つひ此の一週間ばかりの間に、私の思想がすつかり變つてしまひまして、今は何だか力がなえてしまつて困つて居るので御座います、それで、一度先生をお訪ねして色々お話を承り度いと思ふのですが、よろしう御座いますか」

「えゝ、來給へ」と自分は答へた。

「何時がよろしう御座いますか」と青年はつゞけた。

「さうですね、明日の晩にでも來給へ」と自分は、明日の晩は他にも一人來たいと云ふものがあつた事を思ひ出して、成るべく時間の節約が出來る樣にと、答へた。

「私、つひ此頃まで神を信じて居たんです」と盲青年はまた話しをもとに戻して云つた。「私はバハイの教えに從つて、この宇宙には一つの合理的な法則がある、そしてその法則を綜合したところに即ち神があると信じて居たんです。しかし私は先生の御書きになつたものを拜見しまして、その信仰がすつかり壞されてしまつたんです。そしてそんな神はない、神は自分のうちに在る、だから一番本當な事は自分に生きる事だと知つたんです。ですけれども、その自分に生きるのには、自分があまり弱い事を感じるんです。で、私は今すつかり無力になつた樣な氣がするんです」

無力になつたつて仕方がないぢやないか」。と自分はそれに、冷靜に答へた一兎に角、一切の概念や信仰は、要するに自分に生んがための人間の創作だから、自分のつくつたものに支配されてはならんと云ふ事を悟りさへすればいゝんです。卽ち、何よりも先きに自分だ、と云ふ事を辨へればいゝんです。」

「えゝ、それは私もさう思つて居るんですが、それでは何となく不安な氣がするんです」

「それは餘りに理想的なそして平和な生活を望み過ぎるからです。しかし人間と云ふ奴は一體、みんな弱い奴で、よくないものです。僕なんかも君と同じ樣な事を考へて色々とやつて見たが、結局自分にも人生にも絕望しきつてしまはにやならなかつたんです。そしてその時初めて、――これでいゝんだ――と云つた樣な一つの大きな道を發見したんです。そして僕は強くなつた……」

此の時、向ふの方から一人の靑年がやつて來た、先週の日曜にやつて來た創造者同盟のHである。彼は、背の高い、溫和な、上品な、しかし何處となくまた野趣と血氣とを帶びた顏に、微笑をうかべながら近づいて來て、

「今日はないんですか」

と訊いた。

「今日はないんです」と自分達は答へた。「中止されたんです」

「さうですか。怪しからんですねえ」とHは憤慨して、自分達の前の草原の上に腰をおろした、そして一みんなはまだ來ませんか」と訊いた。

「來ません、來るつて云つてたんですか」

「えゝ、此間、非常に面白かつたつて云つて、今日は澤山やつて來る筈になつて居たんですが……上野の方へ行つたんです、その歸りに寄る事になつて居たんです」

「さうですか、ぢや今に來るでせう」

「えゝ。弱つたなあ、今日はみんなで大に氣勢をあげる筈で、僕こゝに寫眞器械まで持つて來たんだが……」

右の肩から左の脇下に吊つてあつた小さな器械を手でいぢりながらHは云つた。
彼はそれから、官憲が近頃、如何に神經過敏になつて居るか、如何に陋劣な手段でもつて脅迫して來るかと云つた樣な事を自分の前で話し出した。
「そッりやひどいんです」とHは眉をつりあげて話しに語勢を强めながら語り出した「此頃は毎日のやうに創造者同盟の本部へやつて來て、色々な脅かしを云つたり中傷や離間の策を講じるんです。それで、中にはあまり甚く脅かされるもんだから、つひ氣が變になつて行くものもあるし、あまり恐くなつたために何處かへ逃亡したものさへあるんです……」
「さうかねえ」と自分が半信半疑で答へると、彼は更にそれを證據立てるやうに彼自身の身の上にふりかゝつて來た事を話し出した。
「先達ても僕の下宿屋へ一人の「犬」がやつて來て、僕の事を色々と訊ねた末、こんな事をそこの主婦さんに云つて置いて行つたんです。――僕の母は、僕が社會運動なんかするもんだから、それを非常に氣に病んで自殺しかけた、つて事なんです。それなら何とか云つて來さうなものだと、實は僕も不思議には思つたけれど、兎に角、そんな事を聞いては何だか變な氣持ちにもなるし、家もさう遠いところぢやないんで、兎に角、うちへ歸つて見たんです。ところが何うです、そんな事は氣もないんです。そして又一つ驚かされた事は、僕が今こんな事をして居るんで、何時どんな目に逢はされるかも知れん、いや、今にもそんな事が起りさうな風の事を、僕の親達に云つてきかせて居るんです……」
「成る程、それはひどいねえ」と、自分は驚きもし腹も立て云つた。
「えゝ〳〵、こんな事はざらに在るんです」とHは受けて、更にまた續けた「それでですねえ、先達ては僕の親爺も、到頭たまりかねてやつて來たんです。」
「君の事を心配して?」
自分は口を挿んだ。
「えゝ、それもさうですけど、何しろ警察の方から、お前とこの子をあんなものにしてはいけない、早く行つて何と

して來いつて責めたてるもんだから、その方で到頭やりきれくなつたんです」

「そして何うなつたんです」

「そこで僕は親爺に現代の時代思潮がどんなものであるか、そして何が故に社會運動をしなければならんかを說明したんです。するとですね、何と云つても田舍の人は正直です、とてもわかりさうもないと思はれる事がすつかり理解されるんです。そして到頭、兎に角、それぢやその方面の事の研究だけはしてもよからう、と云ふ事になつたんです」

「それぢやまあ、君は暫く無事だと云ふわけですね」

「えゝ、ところがですね、親爺が歸ると、直きにまた、警察署長がやつて來たんださうです。そこで、親爺がその事を話すと、署長は、それは駄目だ、そんな事をさしては大變だつて脅かしつけて居るらしいんです。そんな事で、僕は今ゴタ／＼して、頭の中がまるで渦卷きのやうにコングらがつてゐるんです……」

「實にひどいんですねえ、あきれ返つて物も云へませんねえ」

と青年は、死んだ眼を白ツ黒させながら昂奮して云つた。

「えゝ、今にこれは恐ろしいホワイト、テラーが來ますよ、しかしいゝですよ。そしたら今、外國の本を我れさきと紹介して虛名を競つて居る樣なブルジョア的な謂ゆる學者達は皆すつ込んでしまひますよ。反つて飾はれていゝですよ」

自分達の後ろの小高いところに二三人の人が居た。そのうちには官憲のスパイが窮屈さうな顏をして默つて自分達の話をきいて居た。自分達の傍にもやはり、二三の者が踞りながら、これも無言のまゝで自分達の話をきいて居た。自分はこれ等二人の青年が何を云ひ出すか知れないと心配した、くだらない事を云つて、警官の罠にかゝつては氣の毒だから、彼等にスパイが居る事を知らさうとして、わざとSに

「今日は君、スパイは來て居ないかね」

と訊いた。

「此の上に居る」とSは顎で自分達の上をさした。

自分達の眼は一齊にその方に向けられた。鯰髯をピンとはやした痩せ型の一人の男が、きまりわるさうに自分達から眼を避けてれ隱しに色のあせた中折帽を前の方にグイと引いてから、小山の向ふ側の方に降りて行つた。

自分達は皆、一緒に「フン」と嘲笑の眼を見あはさないわけには行かなかつた。

そこへ一人の立派な男がやつて來た。四十代の顏に、濃い髯を巻き、聰明な眼を輝しながら、ステツキを振り〱威勢よく自分達の方に進んで來る、その服裝は奇抜で輕々して居た。麻のシヤツにヅボン下の上へ、陣羽織のやうな、法被のやうなものを格好よく着けて居るのだつた。

「やあツ、今日はもうおすみでしたか」

とその男は云つた。それは此の前の日曜に、昌んな非戰論を唱へた在鄕軍人だつた。

「今日はやらして吳れないんです」

「さうですか、」とその在鄕軍人は少しも昂奮の色を見せずに答へた「上野の方へ行つて見ましたよ」

「さうですか、面白かつたですか」

「いや、何うして。屁のやうなものです」と軍人は極めて無頓着な態度で答へながら、振りながらやつて來たステツキを彼の眞正面に立てゝ、それに倚りかゝり、立ちとゞまつた。自分は彼のうちに、燃ゆる樣な情熱と、明晰な理智とを認むる事が出來た。而も彼は決してそれを表面には表はしきらない用心深さをも持つて居た。

「先達のお話しでは旅順の戰ひにお出での樣でしたね」

とHは訊ね出した。

「えゝさうです。旅順の戰ひに參加しました」

から答へた彼の顏には隱しきれぬ昂奮があつた。

「旅順では隨分無茶な事をした樣ですね」と自分が訊いた。

「無茶も無茶も、全くお話しになりませんな、まるで昔しの一騎打ちの時のやうな戰術しか、こちらは知らなかつたん

ですからな。」

「鐵條網でやられた丈けでも大したものらしいですな」

「第一日本の方ぢや鐵條網はどんなものだかカラツキシ知らなかつたんですからな。しかし、そんなに能く知られて居ない事にでも隨分と滑稽な事がありますよ」

「はあッ！」

在鄕軍人は段々と昂奮して來た。彼は云つた。

「何でも敵の陣營を燒くんだつて云ひましてね、兵隊に命じて盛んにあのコーリヤンと云ふ黍殻をとつて來さして、夜おそく敵の寢靜まつた頃を見計らつて陣營に近い濠の中へ投げ込ましたものです。何、カラ〱に枯れてガサ〱するんだから敵の斥候は勿論誰だつてそれを知らんわけはなかつたんですが、敵はそれを默つて見て居るんでさあ、それをこちらの方では、一ぱい投げ込んでから大砲を發射して、火災を起さうとするんです。しかしそんな馬鹿氣た事の成功しないのは、當り前でさ、何の事はない、敵に燃料を供給してやつた樣なものでさあ」

「ウーン」とみんなは笑つた。

自分のうちに居る女の子がやつて來た。そしてつか〱と自分の側にやつて來て、

「小父さん、電報」と小さな紙片を渡した。

軍人は話しをやめ、みんなは自分を瞶めた。中をあけて見ると、

「チウヲウ一二〇エン、テンノウジ　三五エン　ドチラニスルカ　ヘン」とあつた。

FG會の講演を大坂でするために先發隊として行つたYからの電報であつた。

自分は直ぐそれに返事をしなければならなかつた。その上、友人の著書を祝する會の開かれる時間がもうせまつて居た。もつと此の軍人の話しをきゝたかつたけれど、さうしては居られないと、急ぎ自分は立ち上つて、みんなに別れを告げた。

——（七月五日）——



あたま

長谷川如是閑

妙な藝當もあつたものだと、プロフエツサーは思つた。

舞臺に寢てゐる男の頭を、他の一人が足を擧げてウンと踏みつけると、寢てゐた男は、丁度横になつてゐる棒杭の一端を強く踏むとその棒杭がポンとおつ立つやうに、頭を根にして、硬直した身體をポンと倒立ちに立たせる。

頭で倒立をしてゐる男のその頭を、相手の男がポンと蹴ると、矢張り危ぶなかしく地に立てられた棒杭の根のところを蹴つた場合と同じやうに、倒立ちの男は、頭を二三尺横に飛ばして、棒のやうに打ち倒れる。

相手は、その男の髮の毛を摑んでグイと引き立てる。と男は石地藏を起したやうに棒立ちに突つ立つ。立つた男の頭を後からポカと毆ると、男は地藏の倒れるやうに俯伏しに倒れる。倒れた奴の兩手を摑んで、倒さにおつ立てゝ、そのまゝ、地ならしでもするやうに、ヅシン〳〵と頭で舞臺を舂いて廻る。

倒れる毎に、バタン〳〵と板でも倒したやうな音のするさへ痛た相なのに、人間を倒さにして、ヅシン〳〵と頭で胴突きをするに至つては全く呆れ返らざるを得ない。それを又、大哄笑、大喝采で喜んでゐる見物人の無神經にも驚かされる。とプロフエツサーは腹立たしく感じた、さうして鼻柱の直ぐ上のところに、海老の襟元のやうな皺を寄せて——それはプロフエツサーの癖で、特に威嚴を示す必要を感ずるときにさう

するので、必要の度合に應じて、その皺に深淺がある――險どい眼つきをして、隣近所の、エヘラ〳〵笑つて居る見物人ともを睨め廻した。

舞臺の道化役者二人は、自分達が豪らひ人を怒らしたとは知る由もないから、愈得意になつて奇妙な藝當を發展させて行く。

胴突きにされてゐる男は、ヅシン〳〵と頭で舞臺を舂き廻はされてゐるうちに、漸く正氣づいたといふ風に、倒さに吊るされた身體を急に柔らくして、兩足を抱へてゐる相手の腕先に、鞠のやうに身體を丸め込んだと思ふと、忽ちその男の兩肩に踏み跨がつて、二三度地たんだを踏めば、相手の男は兩手をひろげたまゝ、提灯を潰ぶしたやうにひしやげてしまう。そ奴の頭を掴んでグイと引立てると、今度は、その男が十字架のやうに兩手をひろげて硬直狀態となる。

その硬直した相手を、前の男がいろ〳〵に取扱はうとするのであるが、何う取扱つても、必らず十字架のやうに突張つた相手の兩方の掌が、ピチヤリ〳〵と男の頭や顏をヒツぱたくやうになる。慌てれば慌てるほど、一層烈しい勢で、ピチヤリ〳〵とやられる。何う見ても、硬直した相手の作爲が少しも加はらずに、純物理的の運動方向に從つて、相手の掌がピチヤリ〳〵と男の頭に當たるとしか見えないやうに工夫されたその仕草の巧妙さには、流石のプロフエツサーも、機嫌を直して破顏一笑させざるを得なかつた。

それでも、頭といはず、顏といはずピチヤリ〳〵と好い音を立てゝ叩かれることが餘りに烈しいので、プロフエツサーは矢張り不快になつて來た。不快ではあつたが、こんな馬鹿〳〵しい仕草が、極めて細微な科學的の構成を持つてゐるうへに、男が硬直した人間を取扱ふに當つて用ゆる思惟の過程が、比較心理學上の材料に基いてゐることに對しては一種の敬意を抱くことを禁じ得なかつた。

けれどもプロフエツサーは、そんなことは皆道化役者の熟練が産んだ偶然の結果であつて、彼等の科學的智識の所産でないことは知れた咄であると思つた。

プロフエツサーは、兎に角、この男の頭の硬度には驚かされない譯に行かなかつた。この道化の一場だけでも、男の

頭が毆ぐられたり、胴突きにあつたり、ハタかれたりする度數は、幾百回だかわからない。晝夜二回の興行を十日も續けた日には、頭が果してその原型を安全に保つてゐることが出來るだらうかと疑はれた。可なりデリケートな神經中樞機關を藏してゐる頭を、こんな風に取扱つても、その人間の神經作用にさして狂ひを生じないとすると、頭といふものを馬鹿丁寧に取扱ふ因襲は全く誤つてゐるやうにも思はれた。

がプロフエッサーは、矢張り、この男の頭だけが特別なのだと思はない譯に行かなかつた。こんな頭の扱ひ方を見て居るばかりでも、痛くなつて來る自分の頭の方がやつぱり普通の頭なのだと思つた。さうしてこの男が、持つて產れた不具の頭を資本にして、辛うじて生活して行かなければならないのを憫れにも思つた。けれども畢竟さういふ頭を持つて產れたことが、彼れをそのやうなに運命づけたのであつて見れば、それは、プロフエッサーの持つて產れた立派な頭が、プロフエッサー自身を世界的大學者と運命づけたのに變りはなかつた。いろ〳〵の頭を持つた人間が、さういふ風にいろろに運命づけられて行くことを、プロフエッサー自身の哲學は疑つて居なかつた。

プロフエッサーは、毎年梅雨期に入ると、頭が重くなつて、仕事が懶くなつて、讀書も講義もすつかり氣が乘らなくなるのであつた。で學校の試驗が始まるのを待ち兼ねるやうにして、何處かへ遊びに出掛けることにしてゐた。それで今年も、このS――溫泉に來たのであるが、プロフエッサーはそれを神經衰弱の保養などと言はれることをひどく恐れてゐた。それは自分の神經について強い自信を持つてゐたからである。

プロフエッサーは自から精力家を以て任じてゐた。衰弱などゝいふことは、神經に限らず、自分の何處にも來べきものでないと信じた。古今東西に亘る山のやうな文獻を片端から涉獵して、その上、日々起る世界の出來事といふ出來事を一つも洩らさず研究しなければ、自分の專門の學問は成り立たないものと信じてゐたプロフエッサーは、神經に衰弱などされた日には、車夫が脚氣になつたと同じ悲慘な破目に陷らなければならないと思つたのであつた。

斷つて置かなければならないのは、プロフエッサーの專門は倫理學であつたが、その倫理學なるものは、哲學、宗教

歴史、文藝、法學、經濟は云はずもあれ——『云はずもあれ』といふのが、プロフエツサーの教室での口癖であつた。醫學、天文、地文、博物、物理、化學、電氣工學、土木工學、建築學、橋梁學、造船、機械、航空、潜水……何から何までに亘る廣汎な一大學問であつて、倫理學者は、同時に、これらの諸學科の精通者でなければならないといふことであつた。そのうちの一つだけに精通するにも、得て衰弱を起し勝ちの神經などでは、到底これらのあらゆる學問 精通することは思ひもよらない。從つて倫理學者には到底なれないのであつて、日本は愚か、世界に於ても、此の意味に於ける眞正の倫理學者は、自分一人位なものであらうと、プロフエツサーは自宅に來る學生達に云つて聽かしてゐるのであつた。

さう聽かされた學生は、一人だつてそれを駄法螺と思ふものはなかつた。實際プロフエツサーの講義は、何時でもこれらのいろ／＼の學問に亘らないことはなかつた。さうして、字引にも經典にもないやうな六かしい術語がプロフエツサーの口をついて出るのを、學生達は、眞言祕密の呪文のやうに尊く聽いてゐた。實際かういふメソツドを大成したのはプロフエツサーを以て嚆矢とするので、出來合ひの術語は一つも間に合ふ筈がなかつた。從つてプロフエツサーは自身で澤山の新しい術語を作つた。その新術語の語原は、希臘、羅甸、伯希來、巴利、亞刺比亞、韃靼、エスキモー、ホツテントツト……等なので、學生等は、先生の學識を『古今東西南北に渉る』と稱して嘆美してゐる。

謹嚴で精勵なプロフエツサーは、實際眞劍になつて、古今東西南北を渉獵したのであつた。講義をする時に、大抵の先生は、胃の腑が空になつてゐるのに、咽喉に指を差し込んで無理に吐き出すやうな工合に、學問を口に出すのであつたが、プロフエツサーのは、學識が咽喉元で混み合つて、花時の改札口のやうに、先きを爭つて口から出て來るといふ鹽梅であつた。頭腦が少しでも衰弱なんかしてゐたら、とてもさういふ風に、吸い込んだ學識を、上等の海綿が水を含んでゐるやうに、腦細胞に含ませて置くことが出來る筈はなかつた。自分の神經が衰弱してゐるなんてことを、プロフエツサーは到底承認することは出來なかつた。

だからプロフエツサーは、現にこのS—溫泉に來ることを、自分の神經に關係した問題とはしてゐないのである。

プロフエッサ・の泊つてゐるR—といふ宿には、廣ろい會場があつて、そこの舞臺では、いつも田舍廻りの旅人の演藝があつたり、逗留客の素人藝があつたりするのであるが、今日は、この近邊を打ち廻つてゐるサーカスの一行中の道化役者の狂言が催されたのであつた。

西洋のパントマイムを下手に直譯した狂言を、苦々しい顏で見て居たプロフエッサーは、終ひにこの猛烈な頭の虐待を見せられて、腹立たしく、又慘ごたらしく思ひながらも、大變奇妙な、面白ろいものを見たとも感じたのであつた。

プロフエッサーは、自分の座敷に歸つ來て、出窓に腰をかけて、直ぐ下を流れてゐる早瀬の水を眺めながら、何を考へるともなしに、その堂々と響く水音を聽いてゐた。

プロフエッサーは、全く何も考へてゐないつもりだつた。たゞ茫乎してゐるのだと思つてゐた。ところが、腰をかけてゐた上半身が、フラ〱と外の方へ傾きかけたので、びつくりして兩手で窓緣を抑へると同時に、我れに返へつて見ると、自分は、さつきから、今見た頭の藝當について頻りに考へてゐたのだといふことを發見した。すると、その藝當を見てゐた際に感じたイヤな心持が、新らしく自分の胸を塞いだ。

眼を座敷に移すと、その眞中で、例の男が倒さに吊られて、頭でヅシン〱と胴突きをされてゐるのが見えるやうでさうしてアハアハ笑つてゐる見物人の聲が聽えるやうな氣がして、たまらなく不快になつた。彼れは鼻の上に海老をこしらへて、誰も居ない座敷を睨め廻した。

プロフエッサーは、そんなことは甚だ平凡な人間の職業の一つで、特に問題にする出來事でも何でもないと思つて見た。彼れは、始めて日本に渡つて、人力車夫を見た西洋人が感ずるやうな不快——それはたゞ見慣れないものに對して起る感情で、西洋人自身はより以上に人間を虐待してゐながら、たゞこんな風な虐待の仕方をしてゐないといふところから感ずる道德的感情に過ぎない——を今更らに感ずるのは、我れながら不覺千萬だと思つた。

こんな藝當は、人間や頭やを日本人よりも遙かに尊敬してゐる西洋の方が元祖なのだとプロフエッサーは思つた。さうして、彼地で觀た似よつた藝當の記憶を喚び覺まして見た。

ロンドンで見た、乞食の扮裝をしてゐるヨボ〳〵した男が、頭で倒立ちをしながら階段をドン〳〵と降りるのを思ひ出した。同じ男が、木煉瓦を高く積み上げた上に、頭で倒立をして、その煉瓦がくづれて、頭がドシンと舞臺を突くことなどもあつた。さうすると書割のところへヨチ〳〵歩み寄つて、風で波を打つてゐる書割の湖水の水を兩手で掬つて頭を冷やす仕草などを思ひ出した。それと同時に、プロフエッサーの感服したのは、その男の仕草に伴ふオーケストラの音樂の可笑し味であつた。男がヨチ〳〵と歩くときには、力のないメロディーが、ヨチ〳〵と運ばれて行く。ペタリとへたばつてギユウて目に遭ふ時には『ギユー』てやうな音が出る。身悸ひして恐ろしがると、『ぶるッ』つてやうな調子である。それを忌々しがつて、男は時々オーケストラの上のところへやつて來て『シヤタツプ』と怒鳴ると、『ヘー』とでもいふやうな調子で音樂が默る。

『アッハッハッハ。』プロフエッサーは、そんなことを思ひ出して、獨りで大口を開いて笑つた。さうして直ぐと又鼻の上に海老を作つた。外の頭を思ひ出したのであつた。

それはローマの寄席で見た凄じい頭であつた。洋服を着た一人の男と機關銃とを載せた臺を宙に吊るすと、その臺の下に棒が出てゐて、一人の燕尾服を着た男が、その棒を額の上に受けて、臺を吊るした綱を臺から離してしまうのである。男は太神樂の親方が太鼓の撥を額の上に載せたやうな風に、一人の男と機關銃とを載た臺を額にうけて舞臺の眞中に突つ立つ。すると臺の上では、兵士がその機關銃をボン〳〵と連發させるのである。

この男の頭蓋骨の堅牢なのと、頸の骨の强いのとは、プロフエッサーを驚かした。けれども、兵士と機關銃と、それを載せた砲車のやうな臺と、機關銃の烈しい反動と、これだけの重量を額にうけて、流石に顏を眞赤にして力んでゐる男を見て、プロフエッサーは、一體彼れは何の爲めに、こんな苦しい眞似をするのだらうかといふことを考へて見た。それはつまり、村の青年等が、何十貫目かの石を持ち上げて得意がるのと同じ、人間固有の遊戲的本能に基づく自己發揮に過ぎないと思つた。さうしてそれ程憫むべきことではなく、寧ろ嘆稱すべきことであると思つた。今日見た頭の胴突きだつて、その點から云へば、青年達の力持ちと同じ、立派な力の誇示であつた。

力持ちといへば、プロフエツサーは、ふと自分の子供時代の田舍の町の私立の小學の老先生のことを思ひ出した。それは七十歳近かい、頭の禿げた老人で、生徒等に大先生と呼ばれてゐた。その先生は、封建時代の武士の教養を受けたことを、十歳にも足らない自分達子供等に云つて聽かせて、殊に身體の鍛錬について、武張つた口調で講釋をするのが例であつた。云はれたことを疑へない子供等は、太い長い紫檀の杖を突いて、少し屈んだ腰を伸ばさうともせずに、私立小學のことで各級を入れた、隔てのない教場の板の間を、コトン〳〵杖の音にさせて歩るいてゐる大先生が、何十年か前には、大小を差した強い武士であつたことを話し合つて、そのコトン〳〵といふ音が聽えると、外目をしてゐる生徒等も、慌て、本に眼を注いだものであつた。

或る時、此の學校の創立何十年かの祝の催される前の日に、出身者の豪農の家から、進物として米俵が三俵届いたことがあつた。それを車に積んで持ち込んだ村の若い者二人は、車から俵を下ろす時に、それを兩手で差し上げるやうとして、中々持ち上がらないで、そのまゝ抱へるやうにして、地面に落してしまつた。それを見てゐた大先生は、紫檀の杖を大事相に車に倚せかけて置いて、徐かに羽織を脫いで、再び俵を持ち上げやうとした若い者を押しのけて、彼れの落した俵の端に兩手をかけて、一つ二つ揉むやうな眞似をしたかと思ふと、俵は、吸げ上げられたやうに大先生の胸のところに抱かれた。と思ふ間もなく、大先生は、その後ろに突き出た曲つた腰をグイと延ばして、妙にひねつてゐるうち大先生の骨ばかりのやうな黒い腕が二本、によつきとおつ立つて、大きい俵は、その上に横になつてゐた。萎びた大先生の、ウンと口を結んで俵を指し上げてゐる顏色は、今だにプロフエツサーの記憶から消え切らない幻像であつた。

『それは實際見事なものであつた。』とプロフエツサーは考へた。さうして『あの老人に於ては腕力、此の我輩に於ては腦力。』

そんなことをプロフエツサーは考へた。しかも、今しがた、その腦力で何事か考へて、上半身がフラ〳〵と窓から外へ傾きかけて、慌てゝ窓緣にしがみついたことを忘れてゐた。

プロフエツサーはなほ、その見事な大先生のことを思ひつゞけた。

コトン／＼と紫檀の杖の音が聽えるやうな氣がした。大先生が、前屈みの、けれども如何にも武士の年の取つたのらしいキチンとした姿勢で、この座敷を歩いてゐるかのやうに、プロフェッサーは、部屋の眞中をうつとりと眺めながら、その頃の子供が大先生の姿を見た時に感じたやうな緊張を感じた。

或る日、そのコトン／＼といふ音をつひ聽きそこなつて、夢中で隣の生徒に話しかけてゐた子供のプロフェッサーは、突然、ゴキンと後頭部に、大穴でも開けられたやうに感ずる打撃をうけた。驚きを感ずる遑もなく、反射的に振り返へつた鼻の先きに、太い紫檀の杖がグイと差し出されて居たのを見て、プロフェッサーは、俄かに恐怖と痛みとを感じて、大聲を上げて泣き出した。

プロフェッサーは覺えず手をあげて後頭部を撫でた。さうして三十年前の、ヅキン／＼といふ後頭部の痛みを、今も感じてゐるかのやうに、顏をしかめて、そこを撫でた。

『又頭か。』何時のまにか考が頭のことになつて居たのを知つて、プロフェッサーは、鼻の上に海老を作つた。

次ぎの間の長火鉢の火を直してゐる若い女中の後姿がプロフェッサーの目に入つた。それはプロフェッサーの氣に入りの女中であつた。結ひたてらしい銀杏返しの、艶々とした鬢の邊が、輕く身體を動かすにつれて搖れてゐるのを見て、プロフェッサーは、何かに唆そられるやうな、胸の鼓動を感じた。それを紛らかさうとでもしたやうに、プロフェッサーは女に聲をかけた。

『茶をくれないか。』

『ハイ。』妙に濁つた聲で女は返事をした。

茶吞茶碗を、恭々しく掌に乘せて運んで來る女中の顏を、プロフェッサーは無關心のやうな顏をして凝と視た。鼻の馬鹿に大きい、頬骨の張つた、口を一文字に結んだ、黑目勝ちといふよりも、白目のないやうな、眞黑な大きい眼をした、色の思ひ切つて白い――それらのすべてに、強い肉の感じを持つた顏付きの女であつた。

女は凝と自分を見てゐるプロフェッサーの無關心のやうな顏を、競爭するやうに凝と見ながら近づいて來て、窓の傍

の机の上に茶碗を置かうとして中腰になる途端に、自分の帶でも見るやうな恰好で下を向いて、クスと笑つた。

『何んだ。』プロフェッサーは、その茶碗の方へ手をさしのべながらさういつた。

『エ、。……よ。』 女は顔をあげて、そんな符丁のやうなことを云つて、一文字の大きい口の右の端だけを笑はせた。と女は急に眞面目になつた顏の半面を、ピク／＼と動かして、頭をビリ、と震動せた。プロフェッサーは女の顳顬に鴇桃色の四角な布片の貼つてあるのを發見した。

『頭痛がするか。』

『エ、。』 さう云つて、女は赤坊の手のやうな肉づきをした眞白ろい腕を、二の腕まで出して、頭の上に高く差し出したと思ふと、握り拳で、自分の額を上の方から眞似事のやうに叩いて見せた。

プロフェッサーは、女が額を叩くのを見ると同時に、先刻の頭の鬱當が、グイと込み上げて來るやうに、胸に浮んで來たので、少しドギマギした。

『又頭だ。』

さう思つて、プロフェッサーは、浮んで來たその考を、下へ押し流さうとでもするやうにグイと茶を飲んだ。プロフェッサーは茶が飲みたかつたのでも何んでもなかつた。で一口飲むと、茶碗を机の上に返した、さうして床の方を向いて、そこに取亂されてゐる化粧鞄や、西洋雜誌などを取片づけてゐる女の飽滿した肉體に眼を注いだ。それは飽滿してゐるけれど整調を失つては居なかつた。肉の貧弱さによつて僅かに骨格の整型を失はずにゐる日本の美人のそれと違つて、これは豐富な肉が、整つた形で、强烈な女性の力を具象せしめて居るのであつた。プロフェッサーは、女の身體の、穩かな運動につれて、薄い單衣がぴつたりと肌についてゐる彼女の腰の邊の筋肉の微動するのを見た。

『……なさるの？』さう云つて、女は西洋婦人の胸のやうに、兩の乳房が二つの小山を併列させてゐる强よ相な胸を突き出して此方を向いた。

主要の點を口の中で云つて、助動詞ばかりを判然といふ女の言葉も、プロフェッサーには能く解かると見えて――

れでも一寸、避けられた謎を解かうとするやうな顔をして――上眼を使ふと同時に顔をしやくつて、

『かまわんさ。』　と決心でも言ひ現はすやうに嚴格に云つて、更めてクヽヽと擽つたいやうに笑つた。

『ホヽ。』繊細い女の咽喉から出るやうな聲で笑つて、飽滿した肉體を比較的手際よく運動させながら、女は部屋のそこかしこに散らばつてゐる座敷帚や團扇や、ぬぎ捨てたシャツなどお始末してゐる。

『お園さアん。』　何處かで肝高な聲が呼んだ。女は座敷の眞中に中腰になつて、片手の指先を疊について中心を取りながら、

『もう晩の御註文を伺ひにまゐりまして?』と急に他人になつたやうに、型の通りの女中言葉で云つた。

『いゝえ未だ來やせん。散歩に出るから、然るべくやつて置いてくれたまへ。』

『お歸になつてからでも、よろしう御座いますわ。』　と輕くお辭儀をして、女はスイと廊下の外に出て行つた。

プロフエッサーは、くるりと向き直つて、外の方を眺めた。河を越した向ふは、溫泉宿の棟が、盛りこぼれたやうに亂雜に折り重つて、こゝからでさへ仰いで見るくらゐの高い青い山が、それを包むやうに蔽ひかぶさつてゐる。山頂の、高いところにある遊園の松の間に、小さい赤い旗が一つ、孵つた鷄の羽ばたきのやうに烈しくヒラ〳〵してゐた。

眼を落すと、直ぐ近くの川中にある浴場の、透かしの板圍ひの、隙間といふ隙間が、赤い白い人間の肉の色で埋つてゐて、そこから岸へ架けてある棧橋の上を、男や女の不恰好な半裸體が行つたり來たりしてゐる。タオルを腰に卷いたばかりで、小走りに走つて棧橋を渡る裸體の頭を見ると、髷が戴つてゐた。プロフエッサーは、侮辱されたにやうに感じて、覺えず鼻の上に海老を作つた。尤もプロフエッサーは、その時、關西の或る海岸で、もつと裸かの西洋婦人が、同じく全裸體の漁師にからかつてゐるのを見たことがあるのを忘れてゐた譯ではなかつた。寧ろまざ〳〵と浮び出たその記憶が、プロフエッサーに侮辱の感じを與へたのであつた。あの時は、プロフエッサーは、銅色に光つてゐる節くれ立つた漁師の裸體と、石像のやうな外國婦人のそれとの對照に於て、敗け勝ちを感じなかつたのであるが、今のタオルに於ては、明らかに敗北を感じたのであつた。プロフエッサーは、何よりも一番敗けることが嫌ひであつた。毎年此地に

來て、毎日それを見てゐながら、プロフェッサーは、見るたびに、事新しくそれに屈辱を感じない譯に行かなかつた。馴れるといふことによつて、惡いものを善いと判斷するやうな非論理的の頭を、自分は持つてゐないのだと、プロフェッサーは考へた。

『矢張り頭に來た』プロフェッサーは忌々し相に顏をしかめた。善い頭でも惡い頭でも、それが頭である以上は今日は同じやうに、プロフェッサーの鼻の上に可なり深い海老を作らせるのであつた。

『おゐでかな。』武張つた聲でさういつて入つて來たのは、骨ばつた顏に、白い頰髯を少しばかり、尊とさうに蓄へてゐる、眼のクリ〳〵した、高い鼻の尖端が、溶けかけたやうに下垂してゐる、呆けたやうな、威嚴のあるやうな、その何方でもないやうな老人であつた。骨だけになつてゐるやうな肩を怒らして、兩手を垂直に腰の邊まで突張らせて、手首だけを、それと直角に曲げて、疊に突いた手を、そのまゝ持ち上げたやうな恰好をさせてゐる。

『いやこれは。』プロフェッサーは、ズル〳〵と窓から腰を下して、そのまゝそこに座つて、手を差しのべて、座布團をその老人にすゝめたが、老人が應揚な、然し可なり恭しい態度で、その布團の上に座ると、プロフェッサーは立ち上つて。

『今散歩に出かけやうとして居たんですが。』とそのまゝ座りもせずにゐる。

一定の時間に、正確に散歩に出る習慣のプロフェッサーは、その時間に客の來訪をうけるのを、心から迷惑に感じるのであつた。で一應はその迷惑を表はす爲めに、そんな態度をするのであるが、軈て、餘り落付の好くない場所に、布團も敷かずに座るのであつた。

尤も此の老人に對しては、プロフェッサーも、さう我儘を利かさうとは思つてゐなかつた。この老人は、プロフェッサーにとつては、苟くも先生なのである。『苟くも』といふ條件付のこの老先生は、プロフェッサーが、中學時代から、高等學校にかけての時代の監督者だつたのである。先生は、元は中學の英語教師をして、家には學生を寄宿させてその監督をしてゐたのであるが、今では、息子が工學士になつて、田舍の電燈會社の技師長をしてゐるので、自分は樂隱居

の身分なので、教師は罷めたが、矢張り昔の通り學生の監督だけは續けてゐる。歲はかれこれ七十歲である。

先生が、さういふ生活を續けて行く唯一の動機は――昔はいろ〳〵の動機があつたらうが、今では――自分の監督した學生のうちから、立派な博士や、官吏や、實業家の澤山出るのを見ると、此仕事が如何にも愉快で、一生罷められないといふのである。從つてプロフエツサーは、實に、此先生をして、一生涯『慢性保證人』――大學其他で、この老人を保證人としてゐる學生の數は夥しいものだが、此先生は、被保證人に對して比較的寛大なので、學生達はさう呼んでゐる。今一人似た仕事をしてゐる或る會社の重役があるが、これは又馬鹿に八かましいので『急性保證人』と呼ばれてゐる。――たるべく運命づけた有力な一人なのである。

實をいふと、先生の塾から、立派な博士や官吏や實業家が、先生自身の考へてゐるほど、澤山は出てはゐないので、此のプロフエツサーの如きは、その餘り多くない『澤山』のうちの貴重な一人なのである。從つて先生がプロフエツサーを愛することは非常なものであるが、その愛が、今では崇拜に進化してしまつてゐるのである。けれども、先生として、門弟を崇拜するといふ條理はないから、そこは先生も、餘程苦心の存するところで、時とすると、その苦心が餘り露骨に見えすぎて、先生にもプロフエツサーにも氣の毒な思ひを、他の人がする場合も少なくないのである。

『散歩に出るかね。では一緒に出かけやうではないか。』老先生は、さう云つて、折角今敷いたばかりの座布團を、自分の尻の下から引ぬいて、プロフエツサーの顏を見てゐる。

『でも先生は、こゝまでおいでゞお疲れでしたらう。』そんなことを云ふプロフエツサーの腰は、あんまり安定を保てゐるやうにも見えかつた。

『いんた私は年こそとれ、今でも一里や二里の道は疲れるなんてことは知らん。今日も、こゝへ來るのは、これで二度目ぢや。今朝もこゝへ來てゐたのぢや。實は此處の主人が、親戚の學生を私に頼みたいといふて、昨日か私の留守へ訪ねて見へたのでな、午前に一寸やつて來たのぢやが、こゝの主人公は、まるで、から質屋の番頭といふやうな風で、風采は餘り感服せんが、一寸話せる男ぢやね。何うしても質屋の番頭だ。尤も私は質屋の番頭なるものを餘り能くは知らんがね、

要するにあんな態度風采なんかやらう、アッハハ。いや中々話せる。學問こてないぢやらうが、餘程辛慘を嘗めて來た男と見えて、言ふことが中つて居る、凡でない、教育などについても一見識持つて居るわい。』

散歩は何處へか行つてしまつて、老先生は、一旦尻から引出した布團の上に、再び尻を持つて行つて半分ほど飮せた。

『あれで何ぢやらうか、あの男は……』さう云つて、先生はプロフエツサーの顏を見たが、プロフエツサーは、別段宿の主人の非凡な見識について興味を持つてゐるやうな顏をして居なかつた。

『さあ、出かけては何うかね。』先生は、宿の主人から散歩に逆轉じて腰を浮かせたが、プロフエツサーは、折角訪ねて來た先生を又連れ出すのは聊か敬意を失するやうで有り、老體に對して氣の毒でもあると思つたので、

『まあ茶でも飮んでからにしませう。』さう云つてベルを押した。

『さうかね。』先生は滿足したやうな恐縮したやうな顏で、腰を落ちつけた。

『でも先生は御丈夫ですな。矢張り鍛えが違うんだね我々とは。』プロフエツサーはさういつて、現はれたお園さんに冷めたいピールを命じた。

『いやもう構つて下さるな。』先生は如何にも多愛のない、嬉れし相な眼つきをして、『何に、私共の時代は、君方と違つて、學問が骨が折れたとは云ひ條、極めて簡單ぢやつたからね。今ではさうは行かん。そこへ行くと、矢張西洋人は豪い。老年まで活動もし、學者だとて生命が長い。尤も日本にも伊藤圭介翁の如きもあつたものぢやがね。此頃のやうに複雜になつて來ては、何うも日本人は敗ける。頭の力が續かん。これは困つた問題ぢや。も少し生活を規律的にして、緊張させぬといかん。今も君の散歩を妨げて濟まんと思ふのぢやが、君は平生頗る規律的の生活をして居るで、かういふ所へ來ても矢張さうぢやらうね。君の精力絕倫については、能く博士達から聽かされるが、蓋しさういふ生活の賜物なのぢやらう。それでなくてはいかん。學問をする人間に限つて、必ず不規律不節制の生活をする。あれが宜しくない。それぢやで、やれ神經衰弱ぢや、肺結核ぢや、やれ何ぢやといひよる。學問もいかさま昔とは大變エラくなつて居

らう、が然し、立派にそのエラい學問を成し遂げて、君のやうに、ビクともせんものも居るぢやないか。當方の學生は、君等の時代から見るとお話にならんな。君等の時代でさへ、その前から見ると、いや早や始末に終へないなど丶、能く君等に小言を云つたものぢやがね。それでも今日から見ると、まだ〱生命があつたのぢや。今の學生のザマといふたら何うぢやらうか。困つたものぢやのう。』

元來先生は、自分の家塾出身の大學者、大實業家などに向ふと、甚だ恭謙で、何處までも、其の人達の現在の地位と、自分の現在のそれとの社會的差別を尊重して、たゞ言葉だけは、舊師弟間の親しみを保つために、昔の通りの口の利き方をするのであるか、時とすると、堂々たる當今第一流の名士を、自分の子供のやうに扱ふことの出來るのに、無上の滿足を感じて、勅任教授、然かも倫理學の世界的大家に對して、こんな風の、昔云つて聽かせた通りの訓戒を垂れることもあるのである。

さういふ心理に對して十分諒解のあるプロフエツサーは、先生がそんな風なことを言ひ出すと、特に敬服したやうな態度で、それを謹聽することに定めて居るのである。時によると、決して上の空といふ譯ではないが、つひ先生が何をいつたのか聽き洩した時でも、敬服の態度だけは間違なく保持させてゐるである。で今も、プロフエツサーは、めつきりと白髮の殖えた頭を頻りと諾かせて、先生の訓戒を、子供に返つた氣で承つてゐるのである。

お園さんは、チエリーと冷やし麥酒とを運んで二人の前に置きながら。

『先生は、櫻んぼがお好きださうですから、氣を利かして持つてたりましたオホ丶丶。』と力のある顔に愛嬌を作つて見せた。

『あ丶さうかね。それは大出來だ。』プロフエツサーは不審らしく、お園さんと先生の顏を見比べた。

『いや中々君は呑み込みが早いの。』と先生はお園さんに云つて、『なアにな、今朝こ丶でこれを澤山に呼ばれた譯でな。アツハツヽ、中々末頼もしい婦人ぢやのう、アツハツヽ。』

『末頼もしいですつて？ 何うも恐れ入ります。澤山召し上つて下さいまし、いくらでも持つて來りますからオホ丶丶

、。』

『餘り喫べて腹でも惡くしては何うもならんわい。いかに婦人の志が忝けないといつてものう。アツハツハ。』先生はお機嫌の態でビールを仰いだ。何うやら、もう少し喫こしめして來られたやうでもあつた。

『ところでぢや。』お園さんの立ち去るのを見送つてから、先生は急に眞面目になつて、『實はな、昨日私は、その、いかにも不愉快な目に遭はされたのぢや。』

先生は昂奮した顔付で、圓い眼を一層圓くして、痩せた双の肩をY字形に突き上げて、肱を張つてさういふのであつた。プロフエツサーも先生のこの樣子には、好奇心を起さない譯に行かなつた。何かの原因から、時々、慢性保證人が急性保證人に早變りすることのあるのをプロフエツサーは知つて居た。その時には先生は、屹度、今して見せてゐるやうな昂奮した顔付をするのが例であつた。でプロフエツサーは聽いて見た。

『何うしたんですか。』

『何うしたつて君、君は先刻宿でやつた曲馬師の道化芝居を見たぢやらう。』

『曲馬師?』プロフエツサーは一寸解しかねたが、それは先刻宿でやつたサーカスの道化を指すのであると知つて、

『えゝ見ましたが、あれが何うかしたのですか。』

『いやあの連中のうちに、それ倒立ちになつて頭で歩いたり刎ねたりする男があるぢやらう。あれが……』

『あれが?』プロフエツサーは、我れ知らず鸚鵡返しにさういつたが、自分ではそれを云つたことさへ意識しなかつた。

『あれが君、驚くぢやないか、私のところに居つた學生なんぢや。』

『あの男が?』プロフエツサーは、先生の言葉が能く耳に入りながら、何を聽いたのか少しも解らない氣がした。

『あの男がさ。』先生は昂奮しながら、悄げたやうな聲で『あれが君私のところの學生なんぢやよ。君が出てから間もなく來たと覺えてゐるが、うちに會などあると、能く混ぜ返しをやつた男ぢやから、君も知つて居る筈ぢや。F——とい

ふのぢや。』

『あゝF――ですか、あれが?知つて居ますとも、盛に僕等に喰つてかゝつた男ですよ。』

變な混亂した感じがプロフエッサーの頭をムヅ痒くした。又々頭の問題が、提起されたことが忌々しかつた。それにF――といふ人間が、その問題の中心に出て來たのも不快だつた。そのF――が、あの變梃な頭の持主であることはプロフエッサーには、堪らない程焦ら立たしいことであつた。

F――といふのは、可なり汚たない風をした、我儘な、不作法な、人を人とも思はないやうな學生だつた。塾生が、先生に對して、何か故意の惡戯を試みたりする時には、何時もF――が發頭人だつたといふことを聞いてゐた。『慢性保證人瞞着法』などゝいふ戯文を書いて回覽させたりしたこともあつた。それには『白紙に捺印せしめる法』『支拂命令を親元に向つて發せしめる法』『塾の所藏品質入法』『催眠術によつて感服せしめる法』『先生奥樣離間法』などゝいふ題で猛烈なことが書いてあつた。

或る年の同窓會に、大學生であつたプロフエッサーが演說をした時に、飲水の中に恐しく苦がい藥を入れたのを飲ませて、演說を滅茶〳〵にさせた上に、嘔吐までさせて、後で『何某辯士名論を吐く。惡臭紛々、時節柄虎列拉の疑あり目下檢鏡中』などゝ書いた紙を、號外と稱して會場に撒き散らしたのもその人間であつた。

そんな男が、あの頭の持主であるといふことは、飛んだものが、飛んだものと結合したやうに、プロフエッサーには思はれた。

先生は、自分の不愉快な話を、プロフエッサーが、一層不愉快な顏で聽いてゐることを察して、寧ろ慰めるやうな調子で云つた。

『いやもう怪しからん奴ぢやが、我々が汚辱を感じるといふよりも、寧ろ本人が憐れむべきものなのぢや。』先生は感慨に堪えないやうに『あの男は、中々好い頭を持つた學生ぢやつた。少しも勉强といふものをせんのぢやが、それでゐて學校の成績は中々好かつたのだ。何しろ剛情我慢の男で、私のいふ事なんぞは、此方の耳から此方の耳へ筒ぬけにして

隨分と暴ばれたものぢや。あれが居らなくなつて、私も家内もホツと息を吐いた。アツハツハ。」

『何うして學校を已めたのですか。』

先生は、F――のことについてプロフエツサーに話し出した。

それによると、F――の家は、可なりな商人であつたが、何かの事情から、F――の母はFの子供のうちに離縁となつて、F――は繼母の手に育てられたが、後にはF――は母の方に引取られた。F――の母は貧乏暮しの間に、F――を高等學校まで入れたのであるが、次第にそれも六かしくなつて、困窮を極めてゐるうちに、母は病氣で喪くなり、父の家も、日露戰爭後の不景氣で破綻して、何時の間にか、居所もわからぬやうに沒落してしまつた。

先生はF――の才氣に見込のあることを認めて、何うかして大學だけは出させたいと心配して、多くの學生を養つてゐるといふさる實業家に學費を出させることにしたが、軈がてその人の厚意にも反いて、それも斷られてしまつた。先生は、その事情を話した。

「いや早や愚にもつかん奴ぢやて。その實業家なる人は、中々特志家で、小田原に立派な洋館の別莊を構えてゐたのぢやが、所謂衆と共に樂しむで、夏になると、自分の養つてゐる學生を、代る〳〵その別莊に呼んで一緒に遊ばせて居つたのぢやね。F――もそこへ呼ばれて行つたのは好いのぢやが、或る晩に、女中一人とF――だけに留守を命じて一同が海岸に月見に出かけて、遲くなつて歸つて來て見ると、F――の姿が見えないのぢや。殘つてゐた女中に聽いても知らんといふのぢや。何れ散歩にでも出かけたものぢやらうと、皆寢ることになつて、主人公も妻君と一緒に寢間に入らうとすると、扉が開かんのぢや。中から鍵をかけたものに違ひない。鍵穴が塞がつてゐる。窓は電燈の灯で明かるくなつてゐるではないか。これは盜賊が中で仕事をしてゐるに違いないと、女子供はふるへ上つて逃げ隱れるといふ騷ぎだ。で主人公は、短銃を持つて扉の所に構え込んで、男どもには窓を警戒させて、すぐと警察へ電話をかけたのぢや。警官が來たが、まだ中の盜賊は仕事をしまはんと見えて一向出て來る模樣がない。警官は、扉を外から叩いて、「泥棒出ろ」と怒鳴るのぢやが音沙汰もない。てつきり、中では外の警戒を悟つて、兇器でも用意して、入つて來たら一擊と息を殺して

ゐるに違ひないなど〻評議區々だが、何時まで待つても埒が明かんので、警官が窓から飛び込むことになつて、先づ掉で窓を押し上げやうとすると、そこは用心堅固でガタともしない。百計盡きて、窓硝子を打ち破つて進入するより外はないといふことになつて、何でも上の方を破らんといかんといふので、梯子をかけて、一人の警官が上つて行つて窓の上部の硝子を打ち割つてカーテンを破つて、用心してそこから室内を見下すと、誰れも居る氣はひがない。で屹度ベッドの下に隱れてゐるに違ひないと、上の警官に室内を見張らせて居いて、他の警官が下の窓を破つて進入することになつて、マア矢鱈にガチヤン〳〵硝子を壞して、決死隊の量見で中に入つて、ベットの下を覗いても誰れも居らんぢやないか。』

老先生は、かういふ話になると、何時も塾生を喜ばせた講談口調で中々うまいものである。プロフエツサーは、その頃先生のこんな話を聽かされた時のやうな緊張した氣分になつて、今々聽いてゐるのである。先生は話を續けた。

『ところが、突然ムク〳〵とベッドの上に起き上つて、大笑ひに笑ふ奴がある。警官は仰天して、能く見ると、顏を知つてゐるその別莊の書生なのぢや。卽ちF――だつたのぢや。流石の主人公もこれには呆れて、散々小言を云つたが、警官の方では、これを惡戲ではないと見たのぢや。主人の留守に、此の部屋に入つて仕事をしやうとしてゐるうち皆に騷がれたので、惡戲にしてごまかさうとしたものと見て、警察へ引致して、嚴しく詮議をしたのぢやね。何であんな眞似をしたといふことを訊問されて、F――は、何といふかと思ふと、元來己れの主人は怪しからん、あんな立派な部屋に自分だけ寢て、己れ達には覗かせても見せない。留守を幸ひに、あの立派なベッドに寢込んで、寢心地を試驗して見たのだ。實に好い心地ぢやつた。そこをガチヤン〳〵音をさせて眼を醒まされたので腹が立つた。何故あんな眞似をしたのだ。翌朝まで寢かして置けば何のこともなかつたぢやないかなどと答へるのだ。食客の癖に、無斷で主人の寢間に寢る奴があるかといふと、無斷では寢ない、ちやんと座敷の机の上に願書を載せて置いた。君等は警察の癖に、何を調べて來たのだ、確りしろ、など〻氣焰を吐くのぢや。別莊に電話をかけて見ると、成る程その願書がある。持つて來させて見ると、『小生儀男子と生れ候からは一生に一度は當家の寢室の如き立派な寢間に寢て見たいと存候故當夜一晩だけ寢

間借用の儀御許可下され度』などゝ書いてあるのぢや。主人は矢張り冗談と思つたが、警察では何うしても怪しいと睨んで三日ほど留めて調べて見たが、證據がないので放免してしまつた。主人も、冗談は冗談だらうが、餘り質が善くないといふので、とう〳〵私のところへ斷りを云ふて來た。私も、始末に終へぬ男ぢやが、折角それまで世話をしたものぢやで、何うかして人間にしてやりたいと思つて、色々心配して見たが、何にしてもそんな事が評判になつてゐるので、誰も世話をしやうといふものがない。とう〳〵私のところにも居づらくなつて出て行つた。それから後に牛乳配達をして學校に通つてゐるといふ話をきいたが、間もなく行方不明になつてしまつたのぢや。』

こゝまで話して來て、先生は、今更らがつかりしたやうに、

『それが君あの道化役者なのぢや。とう〳〵行くところまで行つたのぢやらうが、相當な教育を受けながら、あゝまで墮落せずとも、何うにか出來さうなものぢやがね。實は二三日前に、A――へ遊びに行つた時に、あの曲藝を見たのぢや。顏をあんな風に塗つてゐるので解らなんだが、昨日私の宿に、あの一座のものが泊り込んで、皆が浴衣がけで廊下を歩いてゐるうち、私は偶然F――に逢つたのぢや。久しぶりぢや、といふので、私の部屋に連れ込んで話して見ると、あの一座のうちの、頭を叩かれる藝當をするのが自分だといふぢやないか。私は呆れて暫時は口が聽けなんだ。それも好いが、それをさも得意のやうに、倒立は何うしてやるの、頭を固めるには何うするのと云ひ出すのぢや。そんなこと私は聽きともない。元來お前は、人間の頭を何と心得てゐるのぢや。私はいふてやつたのぢや。同じ頭でもW――博士（プロフェッサーの名）の頭を見なさい。――私は何時も君を例に引いて、後輩を激勵してゐるのぢやが――あの頭からは、世界の學界を驚かす大學說、大卓見が湧いて來るではないか。お前の頭は何うしたんぢや。ひつぱたかれたり踏まれたりして、それで僅の給料を貰つて生活しよる。何といふ情けないことぢや。死んだ母親にあれを見せたら何といつて嘆くか、考へて見るが好い。如何に生活の業とはいへ、親から貰つた大切の頭を人の足を踏ませて、得意になつてゐるとは何事ぢや。親の顏を人に踏ませて金を取つてゐるも同然ぢやないか。不孝者めが。お前の母親は、女の痩腕で師匠をしたり内職をしたりしてゐる間にも、お前を何うかして一人前に育てやうとして、他人の世話などをうけて、

お前の爲めに死ぬよりもつらい思をしたのではないか。……』

こゝまで云つた來て、老先生は、眼をしばだいて、一寸默つてしまつた。さうして調子をかへて、

『實はこれだけはF――の爲めに、母親との約束もあるから、決して人には話さぬとにしてあつたのぢやが、母親も死に、F――もあんなものになつてしまへば、それも要のない配慮ぢや。……F――の母は、離縁になつてから、手内職などして一人だけの口すぎをしてゐたが、中學生のF――が母親を慕つて家出をして、母と一緒になつてから、何うかしてその子を人間にしたいといふ親心と、先の夫に對する反感とから、何處か地方の商人の世話を受けて――まあ外妾になつたのぢやね、氣の毒千萬ぢや――學資だけを出して貰うことになつて、私のところに依賴して來た譯ぢや。その時も、母親は、涙を流して自分の恥を述べて、命にかけても、あの子だけは立派なものにしたいといふ念願故、何うぞ頼む、といふて手を合せるのぢや。私の家内などは、それから當分の間は、F――の顏を見さへすれば、涙が出てしかたがないといふて居たものぢや。F――が私の家を出る時にも、家内はそのことをいふて、飯炊きをしても我慢して、家で辛棒してくれつて賴むやうに云つたのぢやが、何うしても聽かんで出て行つてしまひよつた。昨日も私はそれをいふて、母親の苦心を水泡に歸せしめたのみか、人間としてあるまじき侮辱を公衆の面前で受けて、恬然として生きてゐる奴があるかと、此方も昂奮して、面罵してやりました。實は、私は叱りたいことは少しもないのぢや。叱るどころか、母親のことを考へると、彼奴をフン縛つても、家へ連れて行つてやりたいのぢやが、何せあゝ墮落し切つては箸にも棒にもかゝらん。私が泣いていろ〳〵のことを云ふても、解つたのやら解らんのやら、さつぱり何うもならん。たゞ默り臭つて、俯向いてグウともスウとも云はん。昔は可なり多辯の男で、何か此方から云ふと、盛に抗辯しよつたものぢやが、今ではその元氣もなうなつたか、不悧な男ぢや……』

老先生の眼から涙がポロ〳〵と流れた。先生は齒をくひしばりながら、手巾で眼を叩いた。

『何うも私も年を取つて、意氣地がなくなつて、直きに涙が出てならん。……私のとこから、あゝいふ人間を出したと思ふと、一生の努力を煙にされたやうな氣がして殘念で堪らん。』

プロフェッサーは慰める術を知らなかつた。實をいふと、プロフェッサーは、先生ほど此の問題に興味を持つて居ないのである。それは直接に母親の告白を聽かされなかつた故もあらうが、元來プロフェッサーは、劣等な人間は、劣等な生活に落ちるといふ平凡な眞理を知つて居た。優等な頭から、世界を驚かす大學說の産れることは先生のいふ通りであるが、劣等の頭が人の足に踏まれるのを、先生ほど殘念がる理由を持たなかつた。頭だつて劣等なのは、上等の下駄ほどの値打も持つて居ないのであるから、人の足に踏まれることにも不平は云はれないのである。とにかく、すべての人間の頭に平等の價値を與へてゐる先生の考が、學理上の根據を缺いてゐることを、プロフェッサーは疑はなかつた。プロフェッサーの學說によれば、すべての頭が一樣に身體の最上位に置かれてゐることさへ不合理だつた。上等の頭は今の通りの地位で好いが、劣等の頭は、尻の下にでもブラ下つてゐるのが眞個であると云はなければならない。

頭を蹴飛ばしたり、頭で胴突をやつたりするのを見せられた時には、人間の頭にもそんな下等なのがあるかと不快に思つたが、結局下等な頭は、そんな風に扱はれることによつて、存在の價値を見出し、從つて代價を生ずるものであると觀じて、別に不平を感じなかつた。無論、プロフェッサーの倫理哲學が、さういふ結論を生ずるか何うかは尚ほ研究の餘地はあるが、それが別な結論を生じさうであつたら、プロフェッサーは、かういふ結論を生ずるやうにその哲學を立て直すに不自由はなかつた。

でプロフェッサーは、老先生の頭の議論には、それほど同感は出來なかつたが、先生の涙に現はれた善良な心持には鮮からず同情して、何とかいつて慰めたいと思つた。

『實に憐むべき男ですな。母親や先生に對する人情からいつても、少しは發憤する氣になれさうなものですがな。要するに、何か遺傳的の缺陷でもあるのではないでせうか。』

プロフェッサーは、母親の離緣について多少問題があるとも考へた。その母親が再婚をせずに、妾奉公のやうなことをしたのも、何かそれと連絡のあるやうにも思はれた。母親のところへ逃げて來たF——を父親が取り戻さうとしないことも、疑へば、母親に不利な解釋を生じさうである。いろ〳〵に考ると、問題は甚だ複雜になつて來て、それらの

各に、道德的審判を與へることは容易でないことになる。けれどもプロフエッサーは、そんなに苦心してこの問題を考へる必要を感じても居ず、興味も持つて居なかつた。

『いや別にさういふ缺陷があるとは思へないのぢやが、つまり、意志が薄弱で、努力が足らないのぢやね。』先生は何處までも單純であつた。さうして話をつゞけた。

『でまあ、私はいふのぢや。八かましいことをいふやうなものの、久しぶりでお前に逢ふと、別れてゐた子供にでも會つたやうな氣がする。今夜はゆつくり話をしやうといつてな、酒を飲みながら、私は詢々と云つて聽かせましたわい。何うかすると殊勝氣に涙をこぼしたりしてゐるやうでもあるが、何しろ一向に口を利かん。あれからのことなど尋ねても要領を得ない。永く旅に出てゐた樣子ぢやが、何をして歩いてゐたのか分らん。女の藝人か何かと夫婦のやうにして歩いたやうだが、その女も何うしてしまつたか、今は全く獨りぢやといふ。學生の時分に、機械體操や柔道が得意ぢやつたので、旅をしてゐるうちに、今の連中の仲間に入つたらしい。あの狂言なども自分が作つたものぢやといふてゐたが、あれだとて中々工夫の要ることぢやらうに、同じ苦心するならモ少し仕事もありさうなものぢやといふてやつたら、大學のプロフエッサーなどゝ同じ仕事ぢや、西洋のものを好い加減に燒直して、大勢を瞞着してゐるのぢやからなどゝいひよる。その倨傲がよくない、下らぬ敗け惜しみを云ふものではないぞと、私はひどく叱つてやりました。プロフエッサーと同じだとは何事だ。自分が下等な仕事をして居るなら、愈人の高尙な事業に對して敬意を拂ふべきぢやないか。己れを省ずして人を侮るやうな心懸ぢやから向上せんのぢやといふと、プロフエッサーだつて、隨分己れる省みずして人を侮つて居りますが、それでも向上しますぜなどゝ吐かす。酒を飲むと、矢張り元のやうに、人を怒らせることをちよい／＼言ひよりますわい。面憎くはあるが、何うやら昔のF——を見るやうな氣がして、可愛うなつて、とうとう一時過ぎまで講釋を聽かせてやりました。濟まんけれど、大分君を引合に出して、戒めてやりましたが、十日の晩で張合ひのないことぢや。明日はR旅館でやるさうぢや、定めしW——博士も見られることぢやう。顏を作つてゐるから知れないにしても、先輩の前で頭を蹴られる芝居などをやる勇氣があるかといふと、なあにあの男は何でも感服する男だか

ら、大にやつて感服させてやるなどと洒々したものぢや。糞土の墻は塗るべからずとはお前のことぢや。人間も耻を知らなくなると安樂なものぢやのうといふたら、お互様です、と吐かしよる。私で仕合せだつたが、君方が聽いて居つたら毆りつけたぢやらう。』

お園さんが入つて來た。二人の前のビールもチエリーも、そのまゝになつてゐるのを見て、

『まあ何うなすつたの、お二人ともちつとも召し上がらないで。』

『これは〳〵、話に身が入つて、折角の御馳走を閑却した。此の主人公は又少しも强いんのでなあ。』先生は口が渴いたと見えて、貪ぼるやうに麥酒を飮んで、チエリーを摘みながら『今朝此家で晝を御馳走になつたんぢやが、例の藝當が始まるといふので、這々の體で逃げ出して宿へ歸つた。やがて又戻つて來さうぢやつたから、今度は此處へ逃げて來た。』

『何うして先生は、あの藝人達が、お嫌ひなんですの。』

とお園さんは先生に尋ねた。

『いや譯もなく好かんのぢや。もう戻つたかね。』

『いんえ、あすこでは酒を飮んで居ますのよ。』

『何まだ居るか、アハツハツ、それは敵地に乘り込んだ譯ぢやな。』

『うちの主人は、旅の藝人を大變可愛いがるんですよ。此の近邊に廻つて來る藝人は大抵呼んでやらせてね、うちの格式があるから、連中を泊めることは出來ないけれど、何時でも酒ぐらゐは飮ませるからやつて來いなんていふものですから、好いことにして、いろ〳〵のものが押しかけて來ますのよ。今も主人が一緒になつて飮んでゐるのですよ。物好きなんですね。』とお園さんは、お酌をしながら云つた。

『例の、頭で畸形をした男も居るかね。』とプロフエツサーは聽いた。

『えゝ居ますのよ。あの人が一番はしやいで、それは面白いこと、倒になつてお酒を飮んだりしますわ。隨分飮んで

ゐるのに能くあんなことが出來ますのね。』

『洒々たるものですな。』と先生はプロフエッサーを顧みて『昨夜もW——博士にお目にかゝる勇氣があるかといふと、なあに、勇氣なんか要るものですか、何時でもお目にかゝりますと、かうぢや。一つこゝへ呼びつけて訓戒でもしてやつて下さらんか。』

『もう訓戒でもありますまい。』プロフエッサーは苦笑した。

プロフエッサーは、別にF——に逢ひたいとも思はないし、逢ふのも迷惑なやうな氣もするが、昔は何かにつけて、自分を嘲弄したり侮蔑したりした彼れが、憐むべき境遇に落ちた今日、何んな顏をして自分の面前に現はれるか、もし少しでも劣等な復讎心が自分に働いたら、こゝへ呼んで見る氣になるに違ひないと、プロフエッサーは思つた。

『お呼び申しませうか。』と譯を知らないお園さんは、たゞプロフエッサーの顏色によつて、そんなことを云つた。

『まあよからう。』プロフエッサーは櫻の實を喰べながら曖昧に云つた。

『お待ち遊ばせ。』とお園さんは獨りで合點して立つて行つた。

『不愉快ぢやらうが、先輩として逢つてやつて呉れると私も嬉しい。何うせもう腸が腐つて居るで、碌なこともいふまいが、腹を立てんでな。憐むべきものとして、同情してやつて貰へれば結構ぢや。』

老先生がそんなことをいつてゐると、廊下の方で荒々しい足音が聽えて、

『何處だ〱、やあ此處か。』と快濶な學生らしい聲を先きにして、現はれた男があつた。お園さんも後からついて來た。

プロフエッサーは一寸見て、それがF——であることを知つた。濃い一の字眉毛の、鼻の高い、口元に險のある、學生時代の俤は少しも變つて居なかつた。酔つてゐる故か、青い顏をして、瞳をよせて居たが、足元などは確かなものであつた。

『やあこれは先生、昨晩は失禮いたしました。』とピタリと座つてお辭儀をして、更らにプロフエッサーを見上げたが

解せないやうな顔をして『君がW——君かね。』

『さうだ。忘れたのかい。』とプロフエッサーは機嫌よく云つて『久しく會はなかつたが 君は少しも變らんね。』

『君は大さう變つちやつたね。ひどく年を取つたぢやないか。もつと若い筈だがなア。そんなにお爺さんだつたかね。僕は何うだい。』

『君は若い。昔のまゝだ。』

『それは有りがたい。まあ一杯貰うか。』

F——は、プロフエッサーの前のコップを取つて、お園さんに差出した。お園さんは、この旅藝人と、プロフエッサーとが、こんな風な口を利いてゐるので、呆れたやうな顔をしてポカンとしてゐる。

『オイ姐さん、何をぼんやりしてゐるのだ。何うかお酌を願ひます。』

先生は、苦り切つて、不作法なF——の擧動を睨みつけてゐた。プロフエッサーは、飽くまで平氣な顔で、手早く麥酒の罎を持つて注いでやつた。

『何うも濟みません。』とお園さんは顔を赤くして、テレ隱しに、先生の前のコップにビールを注いだ。

『昨夜はW——君と僕の比較研究で、先生にこつぴどくやられちやつた。同じ頭でも、W——君の頭は、世界的大發見を産み出す頭で、貴樣の頭は、人に踏まれてギユウ〳〵云つてゐる頭だつてのア眞個だね。これでもちつとは金のかゝつた頭なんだが、全く元來堅い頭だから物になりつこなしさ。尤も堅いお蔭で、今では、人に叩かれたり蹴られたりして給金を貰つて生きてる譯だ。何が仕合せになるか解つたものぢやない。此の頭が柔らくでもあつたら、今ごろは野倒れ死にでもしてゐるだらうよ。』

プロフエッサーは唯微笑して聞いてゐた。けれどもその微笑は、やゝもすれば、油のきれた燈明のやうに消えかゝつた。

『W——君は此の頃はたいしたものださうだね。勅任教授ださうぢやないか。あいつは惡くないね。給料はいくら位に

なるい。僕等のよりもちつとは好からうね、仕事は樂でも。我々のは叶はんよ。何しろ君等のは、十分頭に養ひをやつて置いてやんわり使うのだから好いが、僕等のは、物も喰はせないで、叩いたり蹴とばしたりするんだから、頭だつて頗る穩かでないに定まつて居らア。』

『おいF――。』先生は、プロフエツサーの顏の微笑が段々消えて行つて、變な皺が鼻の上や口の廻りに刻まれて行くの見て、さういつてF――の言葉を遏つた。『お前はそんな熱を吐きに此處に來たのかな。W――君はお前の先輩で、殊に今日では、お前は一介の旅藝人で、此方は堂々たる勅任教授ではないか。少しは双方の社會上の懸隔も考へて口を利くが好い。私はお前が可愛い相でならんから、今もW――君に、已でもあらうが逢つてやつて下さいとお願いしてゐたところなのぢや。それも、お前がW――君にでも逢つたら、少しは自分を省みて、耻を知る氣にもなるかと思つたからぢや。それを何ぢや、その傲慢不遜のザマは。お前にそんなことを喋べらせやうと思つて、私はW――君に、お前に逢つてやつて下さいと頼のんだのぢやないぞ。』

先生は顏を赤くして、叱咤したが、荒々しい言葉のうちには、F――の無禮を、F――に代つてプロフエツサーに詫びる心持を示してゐた。

『まあ好いでせう。』とプロフエツサーは寛大にさういつて、『その元氣も昔の通りだね。羨ましいことだ。』

『羨ましいだつて？　何も二十年ぶりで逢つた友達に嘘をつくるにも當るまい。僕の、頭を蹴られる塲當を見た人で、羨ましいつて言た人は嘗つて無かつたね。君が始めてだよ。』

F――は笑つたが、その顏の色は一層靑かつた。

先生は、焦せつたやうに、プロフエツサーの顏とF――顏を忙しく見比べながら

『これF――。お前は昨夜私のあれほどに云つたことを何と聞いた居つたのぢや。頭を蹴られるのを得意でゞもあるやうに、何かといふと、それを云ひ出す、何といふ耻知らずなのぢや。W――君の同窓から君のやうなものを出したことは、云はゞW――君の汚辱なのだ。それを寛恕して、快よくお前に會つて下すつたことをお前は感謝しなければならん

ぢやないか。然るに動もすれば昔のやうに愚弄しやうとする。如何にお前なんぞが傲漫に振舞つても、W――君には何の損害もなくて、益々お前の下劣を現はすに止まつて居る。豕を抱いで臭きを知らずとはお前の事ぢや。好い加減にしなさい。』

『何ぅも、永年の間、こんな口ばかり利きつけて居たので、先生の講釋を一晩伺つたばかりぢや癒りませんや。W――君のやうに、倫理の講釋ばかりしてゐた口とは違ひますからね。さあそれぢや昨晩は先生の講釋で、今晩は、W――君の講釋、前講の續きと致しまして、お有りがたいところを一つ伺はふか。』

『まあそんな六かしいことは何うでも好からう。もつとやり給へ。』プロフエツサーは、お園さんは眼くばせしてビールを注がせた。

『ヘエーエ、倫理の先生てえものは、もつと七六つかしいものと思つたら、こいつは又いやに捌けてゐるね。鹽辛の鹽の利かねえの見たいで、少しプンと來るね。』

『こらF――。あちらへ行つて、お前等の連中と飮んでゐる方が好い。』と先生は自分の責任を感じたらしく、眞個に困り切つたやうに、『姐さん、この男をあつちへ連れて行つて下さらんか。』

お園さんは躊躇してプロフエツサーの顏を見た。

『まあいゝでせう。』と先生を宥めるプロフエツサーの顏を、お園さんは合點して、F――に近よつて、

『あなた、ではあちらへ行つて、又面白いことをやつて見せて下さいな。皆大喝釆でしたわ。』

『へイへ、御祝儀さへ澤山頂戴すれば、何でもやります……でも此處の御主人は苦勞性だね、お前だつて五十六十になつたら、頭を蹴られる商賣も出來めへ、頭の割れねへうち足を洗へ――ぢやねへ、頭を洗ひなせえだつて云つてら。羨ましいなんて云はなかつたぜ。』

『何も君の頭を蹴られるのが羨しいと云つたのぢやないのだ。そののんきな所が羨しいといつたのだ。』と漱石のプロフエツサーも、少し氣色ばんで、聲を尖らした。

『あゝさうか。所謂耻を知らねえところが羨ましいんだね。』さう云つてF――は、ゲーイと大きく噯氣を一つした。

勝手にしろと云はぬばかりに、プロフェッサーは、默つてゐた。とう〳〵深い海老が鼻の上に刻まれた。プロフェッサーは、先刻から我慢の出來るだけ我慢してゐた。さうすることが自分の尊嚴を保つ道だと思つて居たのだ。然し、近年餘りさういふ我慢をする必要に遭遇しなかつたので、俄か仕込みの我慢が中々苦痛だつた。が折角こゝまで堪えて來て、千仞の功を一簣に缺くのも馬鹿〳〵しいと、汗をかき〳〵堪へた。

『ははは怒つた〳〵。そんな顏をすると、昔の顏に似て來る。漸く君の顏らしくなつた。今までのはこしらへ物だつたんだね。』

『行けと云つたら行けよ。』と先生ハラ〳〵してゐるやうに促した。

『ハイ參ります參ります。』とF――は立ち上つて『とう〳〵耻を知り損こなつちやつた。博士も腹を立てると顏と同じで、默りくさつて膨れてるばかりだ。つまらねえな。では先生大きに御心配をかけました。やれどつこいしよ。』

『腸まで腐つて居る。』立ちさらうとするF――の背姿を見送つて、先生はさういつて、詫びるやうにプロフェッサーを見た。

『絶望です。』とプロフェッサーは小聲で云つた。

『何、絶望だと。』部屋から出かけたF――は、戻つて來てプロフェッサーの座にゐる前に突立つた。眼を寄せてプロフェッサーを睨んだ。

『絶望だ。腸も頭も腐つてゐる。』プロフェッサーはとう〳〵俄作りの堪忍袋の底をぬいてしまつた。

『何んだそれは、秋刀魚の話か。』F――は寧ろ好機嫌でさういつたので、一旦中腰になつた先生は又腰を落ちつけた。

『貴樣の話だ。』今度はプロフェッサーが青くなつた。

『さうか、腐つた頭と博士の頭と何方が堅いか……』

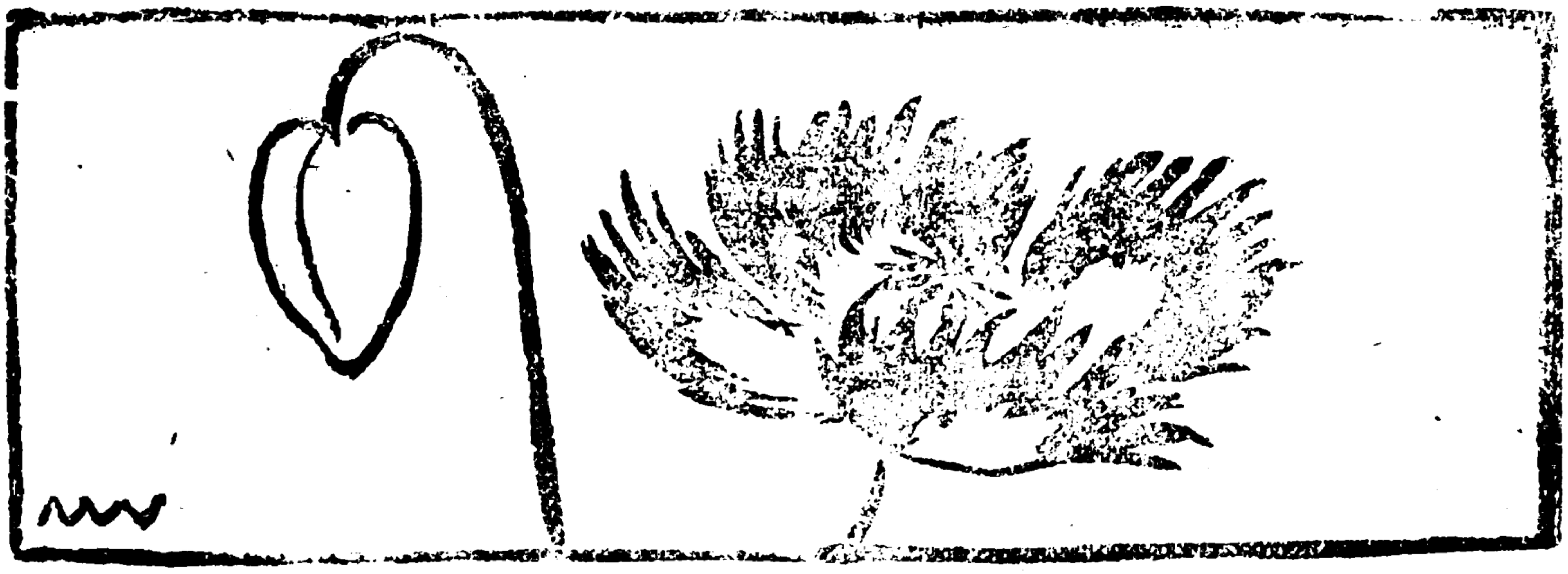
云ふかと思ふと、F――のいが栗頭は、砲彈のやうに、プロフェッサーの[illegible]ぶけて落下した。

プロフエッサーは座つたまゝ後ろに倒れて、兩足がバネ仕かけのやうに高く伸びた。飛びかゝつた先生の身體を交はして、F――は廊下に飛出した。先生は座敷の眞中にのめずつた。

『ザマア見やがれ。』といふ聲を殘して、F――は姿を消した。

茫としてゐたお園さんは、我れに返つて、驅けよつてプロフエッサーを抱き起した。上眼を使つて齒を喰ひしばつてゐるプロフエッサーの眞靑な顏の下半部は鼻血に塗れて、頤から流れ落ちる血が、見る間に白い浴衣の胸を赤く染めた。

（をはり）



一本の芽

室生犀星

××廳の玄關からすぐ秋らしく白く乾いた道路へ出た鈴木は、日比谷から又上野の展覽會場まで電車に乘つた。

青いお濠のゆるやかな、毛立つてゆく絶え間もない美しいさざ波が、目に沁みて眺められると、やつと少しばかり落ちつくことができた。高等主事が妥協的に鈴木のこんどの出品を取下げてくれるやうに言つたが、最後まで命令の出るまで理由なく取り下げるといふことを拒んだ。それがただ單に輕微な意味ではなく、たとへ描かれた肖像がこの國のソシアリストであるといふことによつて、取下げることが全然不愉快であつたからである。

鈴木はこんどの製作には、ひろい意味で、思想に惱んだものから表情づけらたものを描きたいと思つてゐた。さういふ苦しんだ容貌のなかに疼いてゐる美がかれを惹きつけたのだ。その完成は一個人の生活や主義を除いても一つの藝術として世に發表したいのであつた。それを取下げるなぞといふことは、鈴木自身の誰にもゆるしがたい藝術地へ足を踏み込まれたやうな氣がして不愉快でならなかつた。

電車はいつの間にか黑門町の通りへ來かかつてゐたが、そのとき殆んど電車とす

れすれに迅つてゐる二臺の自働車があつた。その胴は赤色であつた。何心なくふいと中を覗き込むと、いま會つてきたばかりの警視や主事が乘り合つてゐた。ふたりは何か話しあひながら塗のよいきらきらした内部に、黑い品のよい山高をかむつてゐた。

鈴木はそれを電車の窓から見たとき、つみのない微笑みの頰にうかんでくることを感じた。それと同時にむづかしい表情にもなつた。……自働車は通り過ぎた。

上野で降りると、黃がかつた例の展覽會道路の櫻がそろそろ落ちはじめるのを眺めながら、織るやうな人なみのなかを急いだ。今朝の新聞にこんどのことが出てから、どつと多くなつた客脚がまだ開場されないのに晴れつづいた道路を埃ぽくした。會場の前にはれいの赤色の自働車が橫づけにされてあつた。私服や正服の巡査が入口や櫻の並木の間を、秋らしく輝く劍をぶらつかせながら立つてゐた。

鈴木はそれらの物々しい光景を目にいれると、一種の暗い淋しい氣持ちにとらはれた。たつた自分一人の製作のために、これだけ嚴重な警戒が要るのだらうか。そのために往來の人人の心をくらく沈ませたり、あるひは變な好奇心を湧き立たせたりするのが、みな自分に責任があるやうな氣がした。それと反對にこれほどまでにしても自分の製作を發表しなければならないかといふことや、また、最後まで戰つてあの繪を下ろすまいとも考へた。

入口へ近づくと、待ち構へた新聞記者團がばらばらと礫のやうに鈴木を取り捲いた。あちこちで寫眞屋がレンズを向けた。

「どう極つたんです。最後まで君は戰ふでせうな。吾々がついてゐるから飽迄やりたまへ。そして孰つちに決つたんです。」

新聞記者等はうるさく口々に後援するとか、藝術家はあくまで頑固に戰はなければならないとか言つて、なかにはいきなり鈴木に握手を求めるものさへ居た。

「僕は最初の意志どほりに命令の出るまで下ろさないつもりです。この決心は昨日とすこしも變らないんです。

鈴木は落ちついて言つて、記者等をひと廻りながめると、淋しい微笑みをうかべた。種にさへなればいいのだ。そのために握手をしたり、ぺちやくちや喋つたりするのだ。やはり仕事をしてゐるのだ。さう考へて會場へはいると、れいの肖像畫と他に六枚の裸體畫のある特別室へ行つた。そして肖像畫を持つて指定された開いてゐるところへ自分で取付けをした。ふしぎな昂奮が額端の釣糸を結ぶ手をまで襲ふた。

記者團は踏臺に登つて額を吊り終へた鈴木を殆んど胴上げするやうに取圍んだ。そして口々に

「それでこそ君の立場がしつかりしたわけだ。君は一種の戰士だ。」さう言ふかと思ふと「特別に君の深刻な感想をきかしてくれたまへ。僕だけにね」

殆んど囁くやうに言ふ記者もゐたし、寫眞機の取付けをしてから

「濟みませんが、鳥渡と微笑つていただけませんか。ほんの、そのちよつと……。」

妙に細長い白ぽい服をきた奴が、狐つきのやうな顔をして、自分でにつと微笑つてみせた。

鈴木は苦り切つて、寫眞屋にひと目くれると

「微笑へるものか。ばかめ。」

低い鋭で聲でさう言ひすてたとき、寫眞屋は急に慌てて

「いやどうも失禮を——そのままぢつとして下さい。」

へり下つて撮つてしまつた。記者團は鈴木に近寄ると

「今後の態度はどうなんです。あくまで强硬にやりますか。」

鋭い尖がつた鼻や、變に日燒けした顔や、狡るさうな光をもつた目が、ちらちらと映つた。鈴木はそのうちの誰を見るとなく、つかれたやうな併し底ぢからある聲で言つた。

「態度も何もないんです。僕は僕のしたいだけを仕ただけです。命令なれば勿論わけなく下ろしてしまうんです。けれども半解決的な、あやふやな妥協はこれからも絶對にしないつもりなんです。」

そのとき記者の一人が待ち構へたやうに讃め出した。

「いや君はたしかに戰つたのだ。そして君は君をいつはらなかつたのだ。」

鈴木はその人の顏を見ないで、微笑しながら煩さい連中から離れた。そして人氣のない室の空いた倚子にぼんやり座つて、明日からこの會場の開けることや、いろいろな階級の人人が押し合ひへし合ひ集まること、そして毎年のやうに美しい婦人を見かけることを考へた。

「おれの繪の前で誰一人と足を止めないかも知れない。じみで淋しいおれの繪は人の目なぞにふれないのだ。おれがこんなところに出品することさへ耐らなく淋しい氣がするのだ。」

そして單にうるさい口碑や下馬評で自分の肖像畫も、表面にあらはれただけの人物に興味を喚びさますにすぎないことをも考へ、その友人にすまないやうな氣がした。しかも自分がある好奇心や問題を惹起すために、あの肖像畫を描いたやうに思はれてゐる二三の人々をそとにしても、自分にさういふ不純な考へをもつてゐる人々をも目にうかべた。本統に自分の内部に燃えてゐる炎のやうな人間や、他の動物にない感情の惱みつくした美を解つてくれる人のすくないのを感じた。

かれは其處にならべられた青い臺の上に、もうすつかり飾りつけを終つた幽靈のやうに白い、どれもこれも倦怠と手工とに固められた繪畫をながめた。繼ぎ繼ぎで、きれぎれな感情を縫ひあはしたやうな、熱情のない繪畫が、ただ彩色と金縁の額との空しい連續をつづけてゐるのを見た。

鈴木はあつちへ往つたり此方へ行つたりしてあるいた。突然、かれは必然に取下げの命令が下りることを豫感した。それはどうしても下ろさなければならないものの運命が、かれにははつきりと考へられた。

「命令が出たら下ろさう。おれはおれの出來るだけのちからをためした。おれはもうこれ以上耐らない交渉や新聞種になりたくない。ただ、おれはおれの藝術のために戰つてみたのだ。おれ自身のやみがたい心を働かしたのだ。」

かれはそのとき黒門町の通りで、かれの乘つた電車とすれすれに馳つて行つた赤色の自働車が、白みがかつた秋の日

のなかに輝きながら目にうかんできた。そしてかれは微笑した。

　そのとき會場がかりの給仕女が、赤い緒の草履をひきずりながら捜してゐたが、大きな植木臺のかげに踞んでゐるかれを見いだすと、處女らしく斑點のない微笑をうかべて言つた。

「ここにいらつしつたんですの。ちよいとおいで下さいつて――。」

「誰が呼んでゐるんだ。」

　さう言ふと「幹部の方なんですの。」と言つて、またさきに立つてあるいて行つた。紫の袴のかげから白い丸つこい踵がひたひたと草履の上で可愛らしくおどつてゐた。

　鈴木はむつかしい顏をしながら、幹部連のゐるところへ行くと

「裸體畫の六枚の分は出してもいいんだが、君の肖像畫だけをもう一度穩便に妥協的に下ろしてくれと言ふんだが……
……」

と言ふ腹のそこでは、一人の鈴木を犧牲にしても六枚の裸體畫を出したい望みがあるらしく思はれて不愉快であつた。

「裸體畫はみんな通つたんですね。ただ僕の繪が下ろしてほしいんだと言ふんですね。妥協的にね。」

　鈴木はかう口眞似のやうに言つて、冷たく微笑つたが

「妥協はだめです。絕對に。さうお返事して下さい。」

――と言つたきり、かれはわざと又、あちこちを歩き出した。「何んだか刻々に迫つてくるらしい。早く來い。」さう呟いた。幹部のものが、わざとらしく

「念のために伺つたのです。あなたの意見は正當ですよ。」

　追從らしく言つて去つたあとで鈴木は忌々しく眉をしがめた。ひとり柱にもたれて、肖像畫をながめた。間もなく下ろしてしまはなければならないのだと、かれは何んだか後十分と經たないうちに何者かが來さうな重苦しい豫感におそはれた。

間もなく命令書が來た。かれは目の前につきつけられた書狀を見ると、默つてその警部の顏をながめた。記者團がうようよ集まつてゐた。

かれは默つて踏臺に乘ると、三十分前に取り付けをした肖像畫の吊糸をといて、そつと手にとると、それを裏かへしに壁のところに置いた。落ちついた底光りのする澄んだ昂奮が襲ふた。

「取下げをしました。」と言つてかれは冷たく微笑したが、その蒼みひびれたやうな色は一切に震えてみえた。

「いや御苦勞でした。」と拍手をしながら警部が去つてしまふとかれは又一人になつた。記者團がまた感想をききにあつまつたが、かれは落ちついて

「もう何んにも話すことはない。」さう言つて、幹部のものにも合はずに會場をふらりと出た。

「どうしても下ろさなければならなかつたのだ。」鈴木は四五日來疲れきつたあたまを抱へるやうにして、ぼんやりと一人で道路を廣小路の方へあるいて行つた。夕方ちかい廣小路は一杯の雜沓で、動くもの馳るもの鳴るものが目まぐるしく、織り込んだもののやうに眺められた。

廣小路のカツフエへ這入ると、なるべく隅の方の倚子に座つて冷たい飮みもので喉をしめした。

「おれは無意味な努力をしたのではない。おれはもう自身にたいしての努力を終へたのだ。戰へるだけのものをつくしたのだ。」

さう考へながらも絕えまなく縮んだやうな淋しさをかんじた。かれの前に今勘定をしてしまつて去らうとする一人の職人體の男がゐた。それが剩錢のうちから一枚の紙幣を拔いて給仕女にわざと何か戲談をいひながら與へた。と、そこのテエブルへ通りがけの女給が何かいひながら目禮をしてゆくと、それを呼び止めて又五十錢の紙幣をやつた。が、また彼れはもう一枚の分を正面の鏡に髮の手入をしながら、白い肘をちらちらさせてゐる女にやるやうに言つた。その間、その職人は苦しげな、多少いらいらしくなつてゐるのをわざと戲談にゴマ化して、さて、飛び上るやうにして、

「さよなら。」

と言ひ棄てながら出て行つた。さうしたことによつて慌てたのか、二三本ばかり這入つてゐるらしいがさがさした朝日の袋が忘れられてあつた。女はそれを手にとると、鏡の方へみんな集まつて行つた。

「何かおあがりになりますの。」

女がききにきたとき、鈴木はその太いがつしりした喉すぢと、小さい手帳をもつてゐる柔らかさうな多少よごれた手首を目にいれたまま、

「いや何もいらない。」

さう言つたが又追つかけて「コオヒをもう一つ持つてきてくれ。」と言つて、またぼんやりとあたりを眺めてゐた。さきの職人のへんに頬骨の出た顔と、さびしさうに慌てて出て行つた背後姿が目にうかんだ。……どのテエブルもみな職工とか勞働者とかが一様に學生めいた着物をきてゐるのも、このごろになつて著しく目立つてきたことであつた。注意深く眺めてゐると、かれらはどういふ汚れた恰好をしてゐる人物でも、みな一様に一枚づつの紙幣を給仕女にくれて去ることであつた。さういふとき彼等はみないくらか慌てたやうな人の善いところをあらはしてゐた。

女らはさきの男の紙卷をくべてゐた。

「何といふ不快な、それでゐて變に昂奮が内心に凝り固まつてゐる日であらう。おれもしよつちうこれまで監視されてゐて、かういふ風に鬱々と氣持ちが暗くなつてしまつたのだらう。」

鈴木は最近になつて看視を解かれることを考へたが、これまでいろいろな意味で誤解され監視されたことを考へた。電車のなかまでれいの影のやうな人物がかれに付き添ふて、かれが切符をかへば、車掌にすぐ行くさきを影のやうな人物が問ひ糺した。さういふとき乘客はみな鈴木の無骨な、扮裝など關はない汚ない姿を、揶揄か何かのやうに眺めた。そのたびに鈴木はつひ赤くなつて、しづかに俯向いて視線をさけたりすることがあつた。ときには旅行して、寢臺車のなかにすやすや眠つてゐると、夜中に青いカーテンを覗いて行つたり、旅館でも急にとりなしを改めるやうなことがあつた。そのたびに暗い影がつきまとふてゐた。

街へ出れば、辻々の角や、群衆のなかや商店の軒などにそれが居た。

「おれの心持ちがだんだんに凝り出したのも、あのうすくらい影のやうな人物がつき添つてゐたからだ。烏賊の墨のやうなものがおれの心にこびりついてゐるのだ。」

灯がはいるまで鈴木はぐつたりした疲れたからだを倚子でやすませてゐたが、次第に客が立てこんだ。かれはそれらをぼんやり眺めてゐたが、間もなく牛込へかへるので、電車に乗つた。

向つて左から乗つたとき、運轉臺の方かられいの影のやうな尾行者があらはれた。さつきカツフエの外側に立つてゐたのがいつの間に電車に乗つたのだ。

かれはその尾行者は顔馴染みで、同じ牛込のもので、家には妻も子もあるらしい可成苦勞したやうな日燒けした色の黑い男であつた。鈴木はちらと目にいれると、すぐ不快な吐出したいやうな氣がしたが、同時にいつも味ふ妙な憐憫と憎惡とをどちらかと云へば憐憫の勝つた心になつたのである。それほど、普通の尾行者に有り勝な奈何なる狡い人間でもこれ以上狡くなれまいと思はれるところがその男にはなかつた。おどおどと鈴木の落ちついた冷たい視線を遁れやうとしたり、なるべく鈴木の方を見ないやうにしてゐたりする努力が窺はれることができた。が、鈴木の切符の行先きを知つておかないといふことが、かれの職務が怠慢になるといふことを鈴木は知つてゐた。

たいがい鈴木はいつも默つて切符を握つてしまふのであるが、その日はわざと街路の方を向いて右の手の切符をなるべく端の方に抓んで、かれがすぐ讀みわけられるやうにして居た。

「おれはこの男のおどおどした正直さうな目を憎むことができない。どういふことを考へてゐても、いまは憎めない。」

鈴木がさう思ひながらゐると、ふしぎな影のやうな人物がそつと切符の行先をよんでしまつたあとのやうな氣がして、もういい時分だと元のとほりに車中の人と顔を合せると、影のやうなものが五六歩さきの方へ行つたあとであつた。ふと思はず知らず目をあはすと、かれは一種の感謝するやうな目いろをした。

家へかへると母がすぐ出てきて

「繪は下ろしてしまつたのかね。新聞社の方が澤山にお前をたづねていらしつたよ。會場へ行つて下さいと、さう言つておいた――。」

鈴木は不機嫌に母の顏をみると

「繪は下ろしてしまひました。」と言つて奧へはいると、茶の間から出てくる妹に出會した。

鈴木は微笑しながら妹のかほをじつと見つめてゐたが、いきなり兩手で顏をかかへて、そして柔らかい毛桃のやうな頰をちよいと抓んでみた。

「どうかなすつて……。」

さう言つて鈴木の陰氣な目を覗き込んだ。

「いや……何んでもない……。」

かれはさう答へると、寂しさうにもう一度ふりかへつて、破れたやうな蒼白い微み笑をうかべた。

義民甚兵衛

菊池寛

一

義民甚兵衛は、南海道讃岐國香川ノ郡弦打村の產であつた。父は、甚七と云つて、二町餘の田地を持つた小農だつた。母はひさと云つて、同村の百姓何某の娘であつた。

甚兵衛は、跛者であつた。生れながらの跛者であるとも云ひ、幼少の折、母が誤つて高所から、取り落した爲だとも傳へられる。

が、孰れにせよ。甚兵衛の半生は不幸であつた。跛者であることが、最大の原因だつた。が、そればかりではなかつた。三歳の時、彼は母を失つたのである。

父は、第二の母を入れた。それは質朴な農婦ではなくして、城下高松の茶屋女であつた。性質强慾にして邪慳だつた。無論、先妻の遺兒たる甚兵衛を、愛する筈はなかつた。邪慳の笞(しもと)は、屢々幼い甚兵衛の皮膚を毀つた。

繼母に男子が生れるに及んで、甚兵衛に對する虐待の手は、益々苛酷になつた。

父は如法の好人物であつた。心弱かに、不具の甚兵衞を愛して居たけれども、悍邪なる妻の非道の仕打を、差し抑ふる力はなかつた。

幼い跛者は、薪を刈らされ、水を汲まされ、家事の苦役一として、そのかよはい肩に、かゝらぬものはなかつた。

甚兵衞を、もつと不幸にするやうに、繼母には、次ぎ〳〵に男の子が、生れた。どの子もどの子も、長ずるに從つて、その兄を蔑すむことを、母から敎へられた。幼い弟どもは、徒黨して不具な兄を苛めた。

甚兵衞が、二十四歲になつたとき、弟達は二十、十八、十七になつて居た。

「甚兵衞！　あれをせい！　これをせい！」

弟達は、兄を僕のやうに使ひ廻した。否、實際繼母の手に依つて、何時の間にか、僕のやうな待遇を受けて居た。牛小屋の片隅に、床を張つた狹い場所が、彼の起臥に當られて居た。彼は、其處に蠅や蚊に苦しめられながら、日中の苦役に疲れた身體を、横へるのであつた。牛の糞汁から起る惡臭が、何時の間にか、彼の身體にも浸み渡つて居た。食事は一家の者が、終つた後、質も量も劣つたものが、犬か猫かに與へられるやうに、臺所の片隅に彼のために、用意せらるゝのに過ぎなかつた。

「一人前の身體でもねえ癖に、何云ふか！」

繼母は、二言目には、さう云つて甚兵衞を叱した。その癖、一人前も二人前もの勞働を、この不具者に強いて居た。彼は、朝早くから叩き起され、夜遲くまで夜業を強いられた。もし、彼が少しでも不平を洩すと、弟達は忽ち此の憐れな兄を罵倒し打擲した。

形は人であるけれども、境遇は牛馬よりも劣つて居た。牛馬より苦しまされて居た。繼母や弟に對する無念は、肝に銘じ骨に徹して居たけれども、何うともする事も出來なかつた。

近隣の人々は、甚兵衞の身を、深く憐れんだ。が、兇惡な繼母の恨みを買ふのを怖れて、何人も口出しする者はなかつた。

二十五の時に、甚兵衞は父を失つた。父が生きて居る間は、彼の境遇はまだよかつた。父は陰ひ向になり、それとなく甚兵衞を、劬つて居た。臨終の床でも、不具な長男のことが、一番氣懸りになつたのだらう。「甚兵衞を、ようしてやれ！　ようしてやれ！」と幾度も繰り返した。

が、さうした遺言で、母や弟の心が、少しでも改まる筈はなかつた。否、父の死は、一層甚兵衞を不幸にした。もう全く何の遠慮もなくなつた繼母と弟達は、甚兵衞を酷使し虐待した。長男が、當然受け繼ぐべき家督は、弟に奪はれた。そればかりでなく、文字通に牛馬の如く、虐げられ賤しまれるのであつた。

それでも、甚兵衞はよく隱忍した。二十前には、弟等が餘りに非道な振舞をすると、思はずカツとなつて、立ち向つて行くことなどもあつたが、二十を越すと、何時の間にか、何うにか諦めたものとなつて、罵られても、叩かれても、たゞ默々として、動いて居る丈だつた。

二

甚兵衞が二十七歳になつた時だつた。文政十一子年八月九日子日子ノ刻より、四國九州一帶に、北東の大悪風吹き出し、次第に嚴しく吹き荒れ、雨は霰の如く、天は一面に電光火の降る如く、地は世界を覆す如く震つた。大海より津波湧き出で、諸川大洪水となつた。大風二日吹き止まず、倒れ家死人の數、諸國を通じて、何萬何千と云ふ數を知らなかつた。

讃岐は、大風の中心を離れて居た爲に、人畜の死傷、倒れ家、屋根捲などは、少かつたが、作物の被害は、見るも無慘であつた。刈入れに間もない田は、見る影もなく吹き荒されてしまつた。早稲はやゝ取入れた所もあつたが、中稲は僅かに二三分の作、晩稲に至つては一分の收穫さへも疑はれた。

恐ろしい恐慌が、百姓達の心を襲つた。天明の大飢饉が、再び來たやうな慘狀だつた。わづか五十匁內外の米相場が忽ち百二三十匁を呼ぶに至つた。僅かに殘つて居る古米、麥などを唯一の食糧として、來る年の秋まで、生き延びる外はなかつたのである。

甚兵衞の家も、その例に洩れなかつた。放埒な主婦を戴く、その家にさしたる貯へが、ある筈はなかつた。

一家は、出來るだけ、食を節することを、餘儀なくされた。その中で、最も慘めなのは甚兵衞だつた。

「穀潰し奴!」と云ふ罵倒が、前よりも頻々と、彼に向つて投げられた。罵しる者にも、、罵しられる者にも、此の言葉の意味が痛切に、響いた。それ丈、甚兵衞は堪らなかつた。

九月十月になつて、此年の收穫が、平年の二分にも達しないことが分ると、一家は三食を二食に、減らさなければならなかつた。さうなると、甚兵衞の受くる分配は、更に僅少になつた。彼は終日、空腹に苦しんだ。餘りの苦しさに堪へかねて、餘分の食を求めると、弟達は彼を折檻し打擲した。十一月になつてから、甚兵衞は終日、たゞ一椀の粟を與へられるのに過ぎなかつた。彼は、獸のやうに野山をうろついて食を求めた。が、饑えて居る者は、甚兵衞丈ではなかつた。到る處の野山は、食に飢うる人々に依つて、漁り盡くされて居た。

十二月に入ると、一家はもつと窮迫した。繼母や弟達は、不具な甚兵衞に與へる、一椀の粟をさへ惜しみ始めた。

長い間、母や弟の非道に屈して居た甚兵衞も、生きながら餓死せしめらるゝのには、堪へなかつたのだらう。彼は、母や弟の眼を忍んで、窃かに食を盜んだ。この事が、發覺すると、弟達は忽ち彼を捕へた。激しい打擲を與へた後で、彼を土藏の中に、檻禁したのだつた。たゞ水丈が、與へられる丈で、二三日が過ぎた。母や弟は、心窃かに甚兵衞の餓死を待つて居た。尤も、餓死と云つても、さう珍らしいことではなかつた。飢饉のため、讃岐一國到る處に、餓莩が道に橫はつて居たからである。

が、丁度餓死せんとする甚兵衞の危急を救ふやうに、高松領一圓に前代未聞の百姓一揆が蜂起したのである。

三

讃岐十八萬石の中、高松領十二萬石は、松平讃岐守の所領だつた。元來讃岐は、地味豐に、表高以上の藏入があり、讃岐侯は諸侯の中にても、裕福な家であつたが、近年藩主を初、老臣達奢に長じ、種々新法を立て、誅求を事とした爲、君民の間、兎角和合を缺ぐに至つた。

然るところ、此年は天明以來大凶作であるため、領內一統の百姓共擧つて御年貢御免を願ひ出でた。道理至極な嘆願であつた。が、奢侈のために、藩政の窮乏を致して居る家老達は、頑として聽き入れなかつた。

最初に、宇多郡二十三ケ村の百姓達が立つた。近き村々遠き村々、響の物に應ずる如く立つた。野にも山にも、竹槍蓆旗が充ち充ちた。寺々の鐘を打ち鳴らし、社々の太皷を打つた。總人數二萬餘人、高松の城下を指して、潮の如く押し寄せて來た。彼等は道々、大百姓の家二百軒ほど打ち碎き、家財道具殘らず打ち毀した。酒屋にては酒を出させ、相應の構の家にては、飯を焚かせ、之を速にせざる者は、悉く打ち潰した。百姓家一軒に付き、一人宛の方人を、強いた。應ぜざる者は、卽座に打ち殺すと脅した。一揆の數は、刻々增した。城下の入口なる弦打村に達した時總人數五萬人、加擔の村々百八十九ケ村に及んだ。

甚兵衞の家は、高松の城下に入る道筋に當つて居た。覆面をした一揆の首領が、甚兵衞の家へも、ぬつとは入つて來た。竹槍を、突き付けて加擔を迫つた。弟達は、みんな憶病だつた。彼等は、後難を怖れて、二の足を踏んだ。母は、奸計を廻らした。彼等は、不具な甚兵衞を強いて、一揆に加らしめたのである。甚兵衞は、不自由な足に、竹槍を杖つきながら、一揆の列中に加つたのである。

城下の入口に、香東川が流れて居る。高松に入る唯一の要所だつた。家中の人々は、此の要害で、一揆を沮まうとした。老臣藤野主馬を初、家中の武士五百餘人、半弓を携へ鐵砲を持ち、警戒をさ〱怠らなかつた。が、死を決した百

姓の勢は、潮のやうであつた。苛政の下に餓死するよりも、戰つて死ぬことを欲して居た。五萬に餘る人數は、手に〳〵河原の石を摑んで殺倒した。五十挺の鐵砲百挺の半弓も、多數の前には、何の力もなかつた。家中の面々は、素破と云ふまに、一町も追ひ崩されてしまつた。

丁度此時だつた。郡奉行の松野八太夫は、たゞ一人駒を躍らして、一揆の中に突き進んだ。郡奉行の責任として、彼は一命を賭しても一揆を喰ひ止めようと欲したのである。

「靜まれ！　靜まれ！　何事によらず、願の筋は、お聞き屆けあるやう、取計ひ遣はすぞ、一旦引き退き、おとなしく願ひ出でよ。かく大勢にて、城下へ相詰め、騷動に及ばゞ殿は申すに及ばず、公儀に對しても、恐れ多いぞ」

彼は、聲を乾して、叱咤した。が、熱狂した群衆には、何の效果もなかつた。大きな礫が、風を切つて、彼の眉間に當つた。アツと云ふ間に、彼は馬上から、轉落した。一揆は凱歌を上げながら、その上を踏み躪つて通つた。

家中の人々が、崩れる後を慕ふて、一揆は城下に入つた。

城下に入つた一揆は、町々家々を思ひ存分に打ち碎いた。家老目付など、駒を飛ばして、一揆に近づき懇々利害を說いて退散を迫つたけれども、何の效もなかつた。

「日頃邪なる政道にて、下を苦しめ、此の期に及んで何を云ふぞ。それ奴に物云はすな」と、口々に叫けんで、殺到する勢であつた。かくては、一藩の大事にも及ばんかと、人々安き心もなかつた時だつた。大野求女と云ふ、七十に近き老人、たゞ一人駒を進めた。彼は、當時退隱の身であつたが、藩主の妾腹の兄として、多年藩政の衝に當つて、重望を擔つた人だつた。適に、一揆達も、求女の前には從順だつた。彼は、白髮の頭を振り立てながら「願の趣き、身に換へて聞き屆けて遣はすぞ。早々退散せよ、退散せよ！」と、渾身の力をこめて叫けんだ。

一揆も此の篤實な老人を信じた。彼等は言質を得た後、揚々として村々へ、潮の引く如く退散した。

四

一揆は、事なく收まつた。高松領一帶年貢御免の御觸が、百姓達を欣ばした。が、さうした恩惠を施すと共に、一揆の發頭人の詮議が嚴しかつた。殊に香東川の畔で、倒れた郡奉行松野八太夫の下手人の詮議は嚴重を極めた。藩では、上の權威を示すために、理が非でも下手人を求めた。かうした下手人を、不問に附しては、一藩の威信に係ることだと揚言した。

が、下手人が容易に、見付かる譯はなかつた。萬人が投げた礫のどの一つが、致命の傷を與へたかは、投げた當人にも分らなかつた。容易に、下手人が出ぬと見ると、藩では非常手段を講じた。松野八太夫が倒れた場所が、弦打村の地域であるのを、口實として弦打村全體に、加害の責任を負はしたのである。それは、暴斷であつた。が、かうした暴斷は、その時代に有り觸れた事だつた。

庄屋及び名主は、下手人の判明する迄、手錠を打たれた。村の老人達は、鳩つて議を凝らした。が、彼等に何の名案もなかつた。到頭誰かゞ、一案を考へ出した。

それは、一揆に加入した人々で、籤を引くことだつた。そして、それに當つたものが、諸人の爲だと諦めて、名乘つて出ると云ふのだつた。

皆がそれを名案だと贊成した。が、實行に移つる段になると、皆が二の足を踏んだ。籤に當つたと云ふ丈で、恐ろしい罪を、引き受けることが、餘りに馬鹿々々しかつた。

評議が、何の解決も付かずに、四五日も續いた。上役人の督促は嚴しかつた。若し、下手人が出ない場合には、庄屋名主一同屹度曲事たるべしと脅かされた。

猶豫の日限が切れると云ふ夜であつた。村の人々は、最後の評議を開いた。是が非でも下手人を作らうと云ふのであ

つた。

「石一つ投げた人はないか。松野樣に石一つ投げた人はないか。もしあれば、その石が當つたと勘辨して、名乘つて出て呉れるのぢや。村一統、いゝや百八十九ケ村の人々の身代りになる事ぢや。名乘つて出たからと云つて、見殺しにはせぬぞ。村一統で愁訴して、命丈は助けるぞ。」

手錠を掛けられた大庄屋は、かう云つて一座を見廻した。が、一座はしんとしてしまつた。咳拂ひ一つするものがなかつた。

「ないか。ないか。誰もないか。村一統の難儀を救ふものは誰もないか。」

大庄屋の聲は、悲痛を極めた。その時だつた。大廣間の緣側をコソ〳〵と這ひ上るものがあつた。

「誰もないか。誰もないか」と、大庄屋が最後の聲を出した時だつた。

緣側を、コソ〳〵と這ひ上つた男は、急に立ち上つた。

「あるだ。あるだ。俺が、出るぞ。俺が出るぞ。俺や石を投げたぞ」と、叫けんだ。

會衆は、恐ろしい沈默から放たれたやうに一齊に、歡喜とも悲鳴とも、付かないやうな聲を上げた。たゞ、その聲の中に、「何云ふだ。馬鹿を云ふぢやない！」と、絕叫して居る聲が、聞えた。それは、甚兵衞の弟の甚五の聲だつた。

五

甚兵衞に對する命乞ひの愁訴などは、何の效もなかつた。藩では、兎に角下手人が出たのを、もつけの幸ひとして、甚兵衞を香東川原に磔にかけた。が、罪は一族にも及んだ。彼の繼母及び三人の弟は、同時に首を刎られた。

重刑の者を、後にするのが、かゝる場合の定法であつた。磔の柱に上つて居る、甚兵衞に見せしめの爲に、彼の目前で、母や弟達の首を刎ねた。さうして、重罪の咎人を更に苦しめようとした。

が、母や弟達が、甚兵衛の捲添を喰つて、不精無精に、首の座に直るのを見ると、甚兵衛は磔の柱にかゝりながら、からからと止め度なく、笑ひ始めた。彼が、一生の裡に、一度も出したことのないやうな愉快な笑ひ聲だつた。

その笑ひの名殘りは、彼が磔柱の上に、息が絶えた後までも殘つて居た。

「甚兵衛様は、笑つて死になさつた」さう云つて、蒐まつた數萬の群衆は、百八十九ケ村の人々に代つて死んだ甚兵衛の最後を賞めたゝへた。

× × × ×

義民甚兵衛の碑は、今でも香東川畔に立つて居る。



化物

宇野浩二

——君、可笑しな話があるんだよ、斯う前置して、或時小說家の島木島吉が私のとこへ來て話したことである。

その前に、小說家の島木島吉の經歷に就いて、私から一寸述べておくと、今から十年餘り前に、私が或私立大學の文科の一年生だつた時、同じ組の學生として私は始めて彼に會つたのである、變な事を言ふやうだが、彼と私とは顏立から姿まで似てゐた上に、附合つて見ると愛想のいゝ話好きな癖に、それでゐてお互に知らない人と口をきく迄は仲々の一仕事で、例へば學校の教室などでも毎日顏を合はしてる譯だから、顏を合はす度に口をきかないでゐる方がずつと氣苦勞でバツが惡いのを、自分でもさうと知りながら、氣輕にそれが出來ないので困る、と言つたやうな氣質からその外例を擧げたならまだ幾らでもあるが、實際彼と私とが體裁と言ひ內容と言ひ、一つの物の半分づゝ程によく似てゐたことは、外の人たちもさう言つたことだし、私たち自身もそれを認めてゐたことだ、もつともそれは或る種の文科の學生に共通した氣質だと言つてしまへばそれ迄であるが、ところで、さう言ふ私たちがどうし

て組中の外の者を置いて、二人が一番の仲よしになつたか？　どんなきつかけからか？　それは眞言秘密としておかう。

無論、彼と私とは同い年の、當時十九か二十歳だつたが、それで組中の一番仲よしとは言ひながら、二人はせい〲月のうちに一度か二度ぐらゐしか往來しなかつた、その外には彼も私も滅多に學校には顏を出さない方だつたから、たまに何方かゞ出て行つても、決してそこで會ふことはなかつた。

彼は、貧民窟の長屋をそのまゝ何處かから引張つて來て、それを二重に二階建に積み上げたのかと思はれるやうな、その止宿人は皆自炊してゐるところの、汚い下宿屋の一間に、彼自身も亦自炊して暮してゐた。彼の部屋の、北向きの窓の破れた障子を開けると、これも亦彼の下宿のやうに汚い、こだ〲と不規則に起きたり轉んだりして、墓石や卒塔婆の板が並んでゐる、それらのすき間には雜草が思ひのまゝに跋扈してゐるところの、荒れ寺の境内が見下ろされたのに、私は始めて彼を訪問した時、ひどく驚いたことを覺えてゐる、といふのは、私たちが始めて學校の教室の中で、お互に始めて言葉を交はす級友として友達になつた時、そして二人でさつさと教室を見捨てゝ、學校の直裏手の何とか神社だか何とか寺だかの後の高い丘の上に上つて、二人で文學やその外いろ〱の雜談をした時、私は彼をどんなに、多分地方の豪家の息子なのだらう、身分のいゝ者に違ひない、と私は私自身の貧乏な學生生活に比べて、羨ましい氣がしたものであるから。見たところ、彼は私立大學の學生の服裝とはどうしても受取れないやうな、事實私たちの組には一人として彼ほどの立派な服裝をしてゐたものはなかつた、藝人でも着るやうな、澁い唐棧お召か何かの着物に、但しその着物にはひどく不吊合ひな、可成り着古した銘仙だつたかの羽織を着てゐたが、それでも、その折れさうに見える瘠せた身體にそれをだらしなくすらりと着流したところが、隨分意氣に見えたものである、もつとも學校の門をくゞるためには、彼はこれ亦着物にひどく不似合ひな小倉の袴を穿いてゐたもので、學校の門を出ると、一寸失敬、と言つて、いきなり門の前のミルク・ホールに走り込んで行つたかと思ふと、それを脱いで出て來たものである。先きにも言つたやうに、彼の容貌を説明することは、つまり私のを說くやうな事になるから、それは止めたいが、簡單に言ふと、今も言

つた通り、身體がぎくしやくする程瘠せてゐた上に、顔も大體細くて長い方で、それが如何にも斯う憔悴したやうな、生氣のない表情をしてゐて、それが又お召の着物を着流した瘠せた身體に相當して、何といふのか、やつぱり何だか意氣に見えたものである。

さて、町を見下ろすその丘の上で、二人ともまだ年も若かつたものだから、文學の話の外は、それにうつかり幼稚な文學の話などをして笑はれてはならぬと言ふやうな氣遣ひから、大方甘い戀愛の話をしたものだ、すると、若い島木島吉は煙草の煙をぷかり〳〵と吹きながら言ふのである。

「僕は斯ういふ高いところから見下ろすのが好きでね、殊に僕は高い山から山や雲や野原を見下ろすといふよりは　斯ういふ丘の上から町や人間や車やを見下ろすのが好きでね。」

かと思ふと、彼は又こんなことも言ふのである。

「君は戀をしたことがありますか？　いや、無論あるだらう、僕も今戀をしてゐるんだ、が、僕は今苦い失戀を經驗してゐるんだよ、」そして彼が失戀したといふ、その相手の女の身分とか、顔とか、つまりそれは藝者で、彼より五歳とか上だが、隨分別嬪であるといふ、色々詳しい話を聞かせたものである、話の仲々うまい男なのである。

けれども、或時私が彼をその荒ら家の下宿に訪問すると、それでなくても、その汚い油染みた蒲團が押入にも入れずに、狹い部屋の片隅に押し込んであつたり、直その傍に缺けた七輪が並んでゐて、白い大きな灰の塊が四方に散亂してゐたり、何の事はない、場末などによくある紙屑屋の姉さん見たいな、古道具屋の店が大掃除でもしてゐる時のやうに、汚い、散らばつた部屋の中に、唐棧お召を着て坐つてゐる主人公の島木島吉の存在が、いつもそこを訪問する私に不調和なやうな、かと言つて何處か調和したやうな、變挺な感じを抱かせたものであるが、今言ふその時には、さういふ洒れた主人公の外に、これ又主人公と何れか？　と思はせたやうな、瘠せつぽちの、だが如何にもすらりとした、當節の女には珍しく撫で肩の、意氣な女が彼と對して坐つてゐたことである。一見して彼女は藝者に違ひないと思はれたが、着物こそどうやら地味好みらしかつたが、何色だつたか流石にパツと目の醒めるやうな、黒繻子と羽二重の晝夜帶

を締めてゐたが、それが何とも印象的に見えたことである。

島木島吉は別にその女を私に紹介はしなかつたが、明らかに彼女が彼に對する物言ひから、仕草から、私の推察したところに依ると、彼等は隨分深い戀仲らしかつた、ところが、はつきりと私が彼女の顏を見た時、驚いたことには、無論始めて見た時からはツと氣が付かないでもなかつたことだが、その女が、いつか學校の裏手の丘の上で、彼が私に沈んだ調子で失戀してゐると言つた、その相手の顏に『目尻の少し吊り上つた、僕は子供の時分から、初戀の女がさうだつたからかも知れないが、目尻の少し上つた女が好きでね、鼻柱の細くて、高い、眉毛の濃い、さういうと何ですけど、どつちかと言ふと凄いやうな美人なんだよ。君、顏がいくら少しばかり綺麗でも、姿が鷺見たいなとか、ちんちくりんだとか、猪見たいなとか言ふ女は、これは三ツ口とか、啞とか目暗などに匹敵する片輪だと僕は思ふよ、君はさうは思はないか？　ところが、その女は姿のいゝことツたら、それは實際素敵なんだよ、だが、斯う僕が言つたからとて、一寸も厭味ぢやないだらう、ね、君？　僕はその女に失戀してゐるんだもの、僕はその女から一度手紙を貰つたことがあるのと、二度物を言ひかけられたことがある切りなんだもの、いくら僕が彼女を賞めたつて、ね、一寸も厭味にはならないだらう？」と私に說明したのと、そつくりなことであつた、實際、顏の好みまで、彼は私と似てゐたものだから、その時彼から聞いた彼の失戀した女の顏の說明を、私は一句も洩らさずに覺えてゐた譯であるが、今彼と相對して仲よささうに、べつたりと疊の上にくつ附いたやうに坐つて話してゐる女の顏が、寸分違はずその通りなのである。

その女は、私が行くと、何から何まで如何にも彼の女房らしく振舞つて、甲斐々々しくその哀れな七輪に炭をついで、茶を沸かす土瓶を掛けたり、一走り何處かへ出て行つたかと思ふと、私たちの爲に菓子を買つて來たり、それから又彼のために夕方の飯の仕度をしたりして、そして「さよなら、」と彼に、「どうぞ御ゆつくり、」と私に、如何にも每日そこにゐる自分の家見たいな輕い挨拶を殘して歸つて行くのを、主人公の島木島吉も亦、唯簡單に「さよなら、」と答へた切りで、玄關まで送つても行かないで別れたものである。が、彼女が歸つて行つてからも、私たちの間には彼女に就いての話は、何か斯う差支へあるものゝやうな氣がして、一向どちらからも出さなかつたことであるが、それから一二時間して

私たちは彼の下宿から程遠くない、例の學校の裏手の丘の上にぶら〳〵と散歩に出た時、二人の話が暫く途切れて、何かの一寸した拍子に、私が

「さつきの女の人は、あれは君のいつか話してた、あの人なのかね、綺麗な人だね、」と聞いた。

「あゝ、」と彼は極めて氣の乘らぬ返事をして、暫く無言でゐたが、やがて又言ふのに、「あんな女は仕樣がないが、僕は今まで君に隱してゐたが、實は相愛の戀人があるんだよ、惚氣見たいで恐縮だが……」と言つて、彼の言ふところを聞くと、相手は彼の親類の成金の家の夫人で、夫人は今年三十歳で、元、京都の華族の娘なのださうである、華族だが、貧乏なためにその成金の家に嫁いで來たのださうであるが、決して幸福でない月日を送つてゐて、自然、文學などにも親んでゐると言ふやうな譯から、そこに出入りする、彼女の夫の從兄弟に當る島木島吉とも懇意になつたのださうである、が、無論、彼と彼女との間には立入つた交際がある譯ではない、しかし二人とも心から愛し合つてゐるのであるといふことを彼は丘の上から足下の町の景色を、見てゐるのか、見てゐないのか分らないやうな表情で私に話したことである、その日は又夢のやうな色をつけて、彼はゆるり〳〵と巧みな調子で私の耳を魅したものである。……

それつ切り、私は彼と三年以上も會はなかつたのである、彼はいつとなく學校を止めて、その後、唯一度長野縣から私に葉書を寄越して、僕は今幸福である、僕は毎日山を見て暮してゐる、山、山、山、僕はこの世の中で山と女とを最も愛する、なんて譯の分らぬことを言つて來たまゝ、それつ切りなのである、私は例に依つて學校にはちつとも顏を出さなかつたが、授業料だけ拂つて、唯籍があるといふ名前だけで、ぶら〳〵と日を暮したことであつた。

ところで、或年の夏のことであつたが、その七月に、私は漸く大學を出る筈だつたのだが、卒業論文が間に合はなかつたものだから、追試驗を受けることにして、鄉里の大阪にそれを書きに歸つてゐたのであつた、だが、暑さと、神經衰弱と、變な戀愛とのために、到頭九月に入つたが一枚も書けなくて、そのうちに追試驗の日も過ぎてしまつた、が、私は何食はぬ顏をして上京するために家を出て停車場に向つたのであるが、その途中で一寸したことに引掛つて、ついうか〳〵と二三日の日を暮して東京に歸る金さへなくしてしまつたものだから、今更家へ引返す譯にも行かず、そ

こで或小さなカフエーの二階に居候見たいな身分で十日程送つたことがあつた。(だが又、どうして、どういふ事から私がさういふ、たとへ十日程の間とは言ひながら、カフエーの居候見たいな境遇に陥ちたか、無論それには尋常でない、面白い話があるのだが、こゝでは、餘り話の枝に枝が出るやうなことになるから、割愛しておかう。)そのカフエーは終夜營業といふ譯だつたが、それでも十二時が過ぎると、流石にぱつたりと客足がなくなるのが常であつた。するとその家の二人の女給仕は、廣間の一番隅つこの卓子に向ひ合つて腰かけて、その日一日使ひ汚したナイフやフオークを、ごしごしと齒磨のやうな粉で磨き始めるのである、それを、いつも一人で退屈してゐる私は、傍に寄つて行つて、「これや奇麗になるもんだな、」「面白いな、僕も助けてやらう、」などと言つて、彼女等に手傳つてやるのであるが、それも一時が鳴る時分には大方終つてしまつて、私が何と哀れな乞ふやうな目付をしても、一日の勞働に疲れ切つてゐる彼女等は「お休みなさい、又明日、」と言葉を殘して、さつさと奥の間に入つて行くのである、ところが、二時頃になると定つていつも二三組の客が入つて來るので、又少しの間私の目を樂ませる譯であるが、やがてそれも過ぎると、大抵しんかんとしてしまつて、プーンと急に蚊などが飛んで來るのだ、けれども、當時不眠症に罹つてゐた私は、そこの宿直を兼ねた料理人と一緒に、さういふ毎晩を徹夜して暮したものであつた。料理人は二時が打つと、明日のためにカステーラを燒くのである、燒けたカステーラを、カステーラは切れ端がうまいんですよ、と言つて、彼はまん中を切り抜いた殘りの切れ端を、「お上りなさい、一緒に食べませう、」と言つて私に出してくれるのである、「まつたく、カステーラは切れ端がうまいですね、」と言つて、私は丁度ボール紙の切り屑見たいな恰好のカステーラの切れ端を、むしやり／＼と食ひながら、私と同じ位の年の癖に豪さうにカイゼル髭なんか生やした料理人と一緒に、竈の前で汗をかきながら、四方山の話を語り明かしたことである。

さあ、もうぼつ／＼夜が明けたでせう、いや／＼、そらあんなに、と言つてカステーラの切端を持つた手で、料理場の天窓の硝子越しに見える空を差して、あんなにもう星の影が薄くなりましたよ、一寸外へ出て見て來ませう、と言つて、私は廣間を抜けて、ギギイと蝶番の鳴る入口の扉を開けて表の方をのぞいて見ると、町はまだ全く夜の眞暗さだが、ふと

仰ぐと東の空がぽーつと青白い明るい色に溶け始めて見えるのだ、すると、遠くの町を牛乳屋の車の走る音も聞えて來るのだ「あゝ、夜が明けたな、」と思つて、私は養生家見たいにすーッと力を込めて朝の空氣を吸つたものである。

さういふ或晩のことであつたが、私がいつもの通り料理人と二人で、もう間もなく狐色にこんがりと燒けたカステーラが出來上る、竈の前に坐つて、その時、料理人は何でもこんな稼業を覺えたのが後悔である、せめて中學校ぐらゐの學問をしておきたかつたと言ひ、私は又それに對して、學問なんて感じの鈍い奴のすることですよ、あんなものは鬼に食はれてしまへですよ、君なんかのやうに、腕に職のある人は、せめてそれで食ふ事にだけは困らずに生きて行けるだけ仕合せぢやありませんか、その腕一本で日本國中を遠慮なしに死なずに歩いて行けるんですからね、そこへ行くと僕なぞは金なしには東海道だつて歩けやしませんからね、なぞと言つてゐた時であつた、突然、ギギイと例の入口の扉の開く音がして、一人の客が入つて來た樣子で、先にも言つたやうに、そこは小さなカフエーで、晝間だつて二人しか給仕女がゐなかつたのだから、一時を過ぎると、そのカイゼル髭の料理人自身が客の用を聞くのである、で、彼が廣間に出て行つた時に、私は何の氣なしに、カステーラの竈の横の窓から、どんな客だらう？　と思つてのぞいて見て、驚いたことには！　それが島木島吉だつたのである、私は早速飛び出した。

「おゝ、島木島吉、珍しい所で珍しい時に會つたものだね、」と私は喜んで叫んだ、「君はいつから此地へ來てゐたんだ、今は何處にゐるんだ、時々此處へ來るのか？」

が、斯ういふ色々な私の問に彼は一切答へないで、彼は恰も私とそんなに久し振りで顔を合はしたといふやうな態度は少しもなくて、「君大阪は實際いゝ所だね、夜、泊るところがなくたつて、例へば斯ういふ便利なカフエーがあるし、それに君、電車だつて終夜運轉だらう、少し物の分つた車掌に賴んであれに乘つて暮したつて一晩過せるんだもの、ねえ、さうぢやないか？……あゝ、ボーイ君」と、彼はそこで料理人に向つて、「珈琲を一杯、」と言つたのである。

そして私たちは、その晩三年振りで會つたのであるが、どんな話を交したか、今は殆ど覺えてゐないが、何でも一二度、君は今何處にゐるのだ、と私が尋ねたにも拘らず、彼はその度每にそれには答へないで、あわてたやうに話頭を

變へたものである。見たところ、何處か彼の生活が、昔ながらに餘り晴々したものでないのみならず、何とも言へぬ痛々しいやうな感じをその時私は受けたことをはつきり覺えてゐる、が、それでゐて、今も言つたやうに、どういふ話をしたかはすつかり忘れてしまつたが、彼の話は表面は極めて愉快でそして面白かつたことを覺えてゐる。私も無論この不思議な舊友に會つて、久しぶりで機嫌よく、君、珍しい御馳走をしよう、などと言つて、料理人にいつもの、出來立ての温いカステーラの切れ端を貰つて、すると料理人なんてものは器用なものだ、いつもながらのボール紙の切れ端には違ひないのだが、それを巧く渦卷のやうな形にして、二人前の皿に盛り分けて出してくれたのを、私は彼と卓子を挾んで食べ合つたものである。そして、いつものやうに、町はまだ眞暗な夜の景色の中に、東の空だけが青白く明けて來るのを、彼と一緒に、ひいやりとした氣持のいゝ夏の朝の空氣を吸ひながら、私はカフエーの扉を開けて眺めたことであつた。

「夜明けといふものはいゝものだね、」

「あゝ、さうだね、」

「さあ、元氣を附けに、もう一杯づゝ珈琲を飲まうか、」

さう言ひ合つて、段々朝らしく賑かになつて行く外の景色を、ガラス越しに眺めながら私たちは珈琲を飲んだ、そして、「ぢや、失敬、」と彼、「さう、ぢや、御機嫌よう、」と私は言つて別れたのである。

それから今日の日まで又、私は島木島吉と六七年もつとも會はなかつたのである。

そして去年、私があの「私の生立ちの記」を發表して、どうやら斯うやら日本文學壇の仲間入をしたのと前後して、丁度島木島吉が又突然あの風變りな處女作「鵜」を書いて、急に有名になつた迄、私たちは互に互の消息を知らなかつたばかりでなく、死んだか生きてゐるかさへも知らずに、そのカフエーの一夜以來互に思出すことさへ怠り勝であつたのである。私はこの物語の始に、その話手なる私の友、島木島吉の簡單な經歴を一寸述べておかう、などと言つて置きながら、斯ういふ要領を得ない話をしてしまつたことを、もつとも斯ういふ私自身の身の上さへ碌に明かしてゐない位で

あるから、こゝに幾重にも讀者諸君の寛恕を乞ふ次第であるが、元、この小說の本筋はそれ等とは直接の關係がないことなので、實はこれから始まるやうな譯なのである、さて、

――君、可笑しな話があるんだよ、斯う前置して、或時小說家の島木島吉が私のとこへ來て話したことである。

「僕がね、君、大阪にゐた時分のことなんだ、さうさう、君といつだつたかカフェーで會つたね、あの時分のことだよ、あの時僕は君に何にも話さなかつたが、隨分困つてたんだよ。晝はね、それでも中の島の公園とか、天王寺の公園とかの、木の蔭のベンチに坐てゝも寢てゐても、どうにか時間が消せるのだが、一番困るのは夜の時間だよ、まさか幾ら何でも木賃宿には泊れないしね。それに僕は大阪には殆ど友達と言つては持たないし、仕様がないので、毎晩五錢で終夜運轉の電車に乘り廻すか、さうでなければ終夜營業のカフェーで珈琲一杯で夜通し坐つてゐたものだ。――

「ところで、僕がさうして時々行く或カフェーがあつたんだ、やつぱり終夜營業の一つだつたがね、不思議なもので、大阪は電車も終夜運轉だし、カフェーだつて終夜營業のとこは澤山あるんだから、いつ迄ゐたつて平氣なものに違ひないと思へるのに、人の氣持なんて可笑しなものだね、十二時が過ぎると、大抵それ迄は他所目には、あゝしていつ迄愉快に話しつゞけ飲みつゞけて居るんだらう、夜の明ける迄もか、と思はれるやうな最も賑かな一組でさへ、いつとなしに消えるやうに歸つて行つてしまふものだよ。」……

そして、いつも後にぽつんと消え殘つた蠟燭見たいに、島木島吉はそれ等の賑かな人々の後に取殘されるのが常であつた、この世は實に面白可笑しく、住むに値する處に違ひない、と島木島吉はもう冷たくなつて、底の方に滓見たいになつて殘つてゐる珈琲の杯をすゝりながら、思ふのである、だが、それは彼を除いた外の人間たちの世界のことに違ひないのである、人々が皆瓢箪の如く浮きに浮いてゐるのを見るにつけて、善哉、善哉！ と彼は彼等のために團扇を上げるのではあるが、彼自身は一向に浮きに浮かないものだから、毎晩さうして一杯五錢の珈琲を、ちびり〱と酒でも飲むやうに舐めながら、なるべく隅の方の卓子に坐つてゐるのである。すると、彼は或晩から氣が付いたのであるが、十

二時が鳴つて、各々の客たちが歸つて行つても、やつぱり歸らない一人の客に氣が附いたことである、それがしかも仲々美人の部類に入る婦人なのである、年の頃は、見た所は二十歳そこ〳〵にしか見えないが、本當は大方三十歳に近いだらうと思はれるのだが、その顏が破格に切の長い目の、目尻が心持吊つてゐて、鼻柱が細くて高くて、全體は面長で、おまけに背はすらりと男見たいに高いのである。

「ぢやあ、」と私はそこで島木島吉の話に口を挾んだものである「いつか學生時代に君の下宿で會つた、あの女の人にそつくりだね、」

「仲々、」と島木島吉は一寸顏を曇らして言ふのである、「あんな女の比ぢやないんだ。」

その女が、始めて彼がその女の存在を知つた時には、彼がいつも占領することに定めてゐる、向つて左の隅の卓子のところからはずつと離れた席にゐたものだが、その翌日は一列だけ、彼の方に近い卓子に來て、その翌日は更に一層彼の方に近くに坐つたのである。あゝ、世にはやつぱり男を殺すやうな美人があるものだな、と思つて、しかし隨分臆病な男のことであるから、ほんの時々ちら〳〵と彼が彼女の方に目をやると、その度に必ず彼の方を、これは又不良少年のやうに大膽に着目してゐる彼女の目とぴつたりと行き合ふので、すると島木島吉は顏を眞赤にして、たとへそれが空になつてゐても、てれ隱しのやうに、珈琲の杯を口の傍に持つて行き行きしたものである。不思議なことに、それ程の女がいつの時でも決して連れがなくて一人で來て、それが又定つて十一時頃にやつて來て、二皿か三皿の洋食と一杯のヰスキイとを注文して、ゆつくり〳〵と誰かを待つてでもゐるやうな態度で飲食することである、そしてそれが終ると、珈琲を命じて、それを又ゆつくりと啜つて、さて愈よ立上るのは必ず二時を少し過ぎることである。島木島吉は、始めのうちは彼女が屹度十一時から二時ぐらゐ迄の間を約束して、誰かを待合はしてゐるのだらう、と思つてゐたのだが、ついぞ彼女が外の人と挨拶をしてゐるのを見たことがなかつた、そのうちに、到頭或晩、彼女は彼の直隣の卓子に坐つて、實はその晩は臆病な彼の方からも、思ひ切つていつもの隅から一列だけ、まん中の方に進んで出たのであつたが、その晩彼女は到頭彼に話しかけたのである。

「よく始終お目にかゝりますのね、」といふやうな言葉で彼女は始めたのである。

そして、その晩は彼女はいつもより少し遲く、三時頃までゐて彼と色々な話をしたものであるが、一體どういふ女なのか、何をしてゐる女なのか、隨分長い間話し合つたのであるが、どうにも彼には正體が分らないまゝに別れてしまつたことである。何でも彼女は阿米利加から歐羅巴の國々までも行つて來たものらしく、それは色々な話振りから察して、人から聞いたものなぞではなくて、本當に行つて來た樣子であつた、そして夫にはその外國からの歸りの船中で死なれたものらしいのであるが、さて夫がどういふ人であつたのか、彼女がどういふ人であるのか、聞くと、別にこれといふ程の事をしてゐる者ではありません、とか、まあ見物に行つたやうなものです、とか、言を左右に托して、オホホホホと忽ち一笑に附してしまつては、又快活な別の話題に戻るのである。そのうちに、何かの話のついでにだつたか、

「あなたは失禮ですが、」と彼女は聞くのである、「美術家でいらつしやるやうにお見受けしますが……」

「えゝ、まあそれに近いものです、」と島木島吉ははにかんで答へた。

「今はどちらにお住居です？」と彼女は、先に彼の方から住所を聞いた時には、この土地の者ぢやございませんので、などと言つて、言葉を濁して後を言はなかつた癖に、彼に向つては洒々として斯う聞くのである。

「僕は宿なしです、」と島木島吉はそれを思ひ出して、大きに昂然として答へた。

「ホヽヽヽ」と、すると彼女も亦極めて流暢な笑ひ方をして、「藝術家にはさういふ方が多いやうでございますね、」と言つて、更に、「して、御職業は？……いゝえ、藝術の方でなく、お暮しの爲の御職業は？」などと際どい質問を放つのである。

「いや、別に何にも持つてゐません、」と彼もそれには少し閉口して、頭を掻きながら答へた。

「だけど、」と彼女は更に相手を追求して聞くには、「それでは、經濟上、例へば畫具をお求めになるとか、寫生旅行にお出かけになるのに、お困りでせう？」

「困つてゐるのです、」と島木島吉は、いつの間にか畫家扱ひにされたのを別に辯解もしないで、次第に大膽になつて答

へたのである。

それから、又少しあつた後、

「私が今居りますホテルにね、」と彼女が言ふのである、「見復(みかへる)仙助といふ、さあ何でせうかね、やつぱり興行師といふんでせうね、方(かた)が入らつしやるんですよ。その方とは妙なんですよ、私たちが丁度十年前に、阿米利加に立ちます船の中で始めてお目に掛りましたんですがね、それから半年目に紐育でお目に掛りまして、それから又二年目とか、三年目とかに、巴里でも、羅馬でも、その外何でも三四度ひよい〳〵と忘れた時分に屹度お目に掛りましたの、すると、今度は馬耳塞からずつと船で又一緒になりましてね、私の連合が、もう彼方(あちら)から身體が惡くなつたものですから、歸つて來ることになつたのですが、それが船の中で死ぬやうなことになりましたもんですから、色々その見復さんにお世話になりましてね、しかし、神戸で色々お禮を申して別れたんでございますよ、ところがどうでせう、今度又こちらのホテルで御一緒になつたんです。……」

「その見復さんといふ方がどうかしたんですか、」と島木島吉は彼女が何故その男のことをそんなに色々と言ふのか、惚氣なのかな、などと思ひながら斯う聞いて見たのである。

「いゝえ、私、」と彼女は大仰に眉をひそめて、「私、氣味が惡いんでございますよ、島木さん、そんな變な事があるもんでせうか、その見復仙助といふ方が、私の亡くなりました夫に、さあ、その姿から、顏は申すに及ばず、聲までそつくりなのでございますよ。夫はそれを厭がりましてね、その方(かた)が傍に入らしやると、見震ひする程厭だと申し申して居りましたが、今も申しました通り、不思議と又、あの廣い歐羅巴を旅して居ますうちに、三度も四度もお目に掛つたんでせう、それればかりか、到頭亡くなります看病までして戴くやうなことになつたのですが、その方が又反對に私の夫を兄さん見たいな氣がする、と仰いましてね、それは〳〵深切にして下さるんですが、變な事があるものですね。私にしましても、丁度夫の亡くなりました時分には、本當に氣味が惡いと思つたことがございますよ、死んだ夫の枕元に、夫とそつくりの人がしよんぼりと坐つて居られるのを見ますと、それを十分に承知して居りながらぞつとしましたものです。……」

「それで、今でも奥さんは、」と島木島吉は段々馴れて來たので、遠慮なく斯う冗談を言つたものである、「奥さんはその方がお連合ひ見たいな氣がするんですか？」

「ホホホホホ、」と彼女は、しかし、例の一笑に附する笑ひ方をして、「その方は私の夫とは氣質は正反對でございましても、それや大變快活な、陽氣な方でございますの。……おや、私としましたことが、飛んだ別のお話をしてしまひましたが、その見復仙助さんが遊んでいらつしやる青年の方に、大した禮は出來ないが、來て、何でもない仕事なんださうですが、助けて欲しい、と言つて居られるんです、で、私も女として出來る仕事をさして貰ふことになつて、まあ早い話が雇つて戴くことになつて居るのですが、それで私は斯うして町に出て、氣を附けて、さういふ方を探してゐるのでございます。不躾ですが、島木さん、あなたのお知合の方にでも、來て戴けるやうな方がございませんでせうか、そしたらお世話願ひたいのですが。……」

と、言ふのは、無論、あなた如何です？　といふことの、別の言葉で、島木島吉を勸誘したのである、で、彼は元より寢るところを探してゐた位であるから、遺憾なく彼女の勸誘に乘つて、

「ですが、それは僕自身でもお願したいことですが、一體どんな事をするのですか？」と聞いた。

「その事ですがね、」と彼女は言ふのである、「どういふ事をするのですか、いや、何でもない、受合つて誰にも出來ることなんですよ、アハハハハ、と言つて、それは無頓着な方でございますからね、見復さんは唯笑つていらつしやるばかりなんですよ。決して心配するには及ばない。重い物を持たせる譯でもなし、遠い道を歩かせる譯でもなし、いや、赤ン坊にでも出來ることなんですよ、その代り手當、お禮としては、一週間に、一週間なんて外國流ですわね、二十圓で、食べたり寢たりすることは、その人の希望で雇主の方で支給してもいゝんださうです、勿論手當の外にださうですよ。私、失禮ですけど、見復さんから是非もう一人だけ人が欲しい、なるべく早く探してくれ、もう一人でいゝんだから、と矢のやうに催促されましたので、もう斯うなつたら、どなたにでも打突かつて見ようと思ひましてね、實は心の中であなたにお願して見ようと決心しまして、それには見復さんの方にも前以て間違のないように確めておかうと思つた

ものですから、昨日さう言つて見たんですよ、斯う斯ういふ方で、美術家らしい方なんですが、その方にお願しようと思ひますがどうでせう、と聞きますと、結構ですとも、是非一日も早くお願して下さい、といふ譯なんです、ホホホホホ、」と彼女は一流の笑ひ方をして、一寸彼の方に頭を下げて、「失禮の程はどうぞお許し下さい、」と斯ういふのである。

それで、その翌々日、もうその翌日の晩はあの變な女はカフエーに來なかつたが、島木島吉は川口の××ホテルに見復仙助を尋ねたのである。見復仙助は、よく昔の洋服屋の飾窓の中に、大禮服を着せて飾つてある人形のやうな、立派な美男子であつた、長い間外國にゐたせゐか、日本語が馴れない爲に一寸使ひにくいと言つた風で、舌もつれするやうな發音で話すには、「今度は妻が色々御無禮を申しまして、早速聞入れて下すつて有難う。で、あなたの御希望は、やつぱりその、私の方で寢起する方がよろしいでせうか、」と聞くので、「えゝ、その方が……」と島木島吉は俯向いたまゝで答へた。

「それでは、」と見復仙助が言ふには、「明日から、私たちの仕事をして貰つてゐる人たちの寄宿してゐる宿屋に案内しませう、今日はこの部屋で一日、寢てゐるとも、坐つてゐるとも、讀んでゐるとも、好きなようにして下さい。が、今からお願しておきますが、明日から始めますから、それに明日は始の日ですから七時前に劇場の方へ行つていたゞきたいのです、お願します、」と言つて、すぐ部屋を出て行きさうにするので、島木島吉は驚いて相手の燕尾服の端をつかまへて、

「劇場と申しますと、」と聞いたのである、「一體私はどういふ仕事をするんです、その場になつて勤まらないといふやうな事になつて、御迷惑をかけても恐れ入りますから……?」

「いえ、」と見復仙助はその端麗な顔に微笑を浮べて、「いえ、どなたにも出來ないといふ筈のない仕事なんです、決してそんな難かしい仕事ぢやあないんです。それにまだ實はよく定つてゐないんです、定り次第お話しします、ではお願します、どうぞ御ゆつくり、食事は窮窟でせうから、此方へ運ばせませう、さよなら、」と言ひ捨てゝ見復仙助はさつさと

部屋を出て行つたのである。

島木島吉は生れてこんな怪體な思をしたことがなかつた、一昨日の晩までカフエーで會つてゐたあの婦人が、彼女自身の口から夫の友達だと言つてゐた、彼女にはまるで他人である筈の見復仙助が、今彼の口から聞くと、彼女は彼の妻らしいし、そしてその男に雇はれた迄はいゝが、明日から始めるといふ仕事が今日になつても定つてゐない、といふ話だし、さて劇場といふのは何處のことだか、見復といふ人物、又彼の友人だか妻だかの婦人の身分、何も彼も分らないことだらけなのだ、隨分呑氣な島木島吉ではあるが、色々と考へると誠に不安になつて來るのである。まさか、俺のやうな、何の役に廻しても、どんな點から見ても、大した値打のありさうに見えない人間を、うまく欺して外國へ誘拐するなどといふこともあるまい、如何に物好きな外國人だつて、金を出して俺のやうな人間を買はうといふものはあるまい、と言つて無論盜坊の手下にしようと言ふんぢやあるまいし、などと思つてゐるうちに、臆病者の癖で、次第に變挺な獎廢胸のやうな塊（かたまり）が腹の中に湧き出したところへ、連夜の睡眠不足が、例のやうに晝間と共に出て來たので、いつとなく長椅子に腰掛けたまゝ眠り掛つた。島木島吉はすると汽車に乘つて、何處かへ旅に出る夢を見たのである、それが夜汽車の二等車のことで、幸ひ人が餘り込んでゐないので、始め腰掛けて居睡りをしてゐたのが、どつこいしよ、と横になつて、腕枕の姿勢で寢入つてしまつた、それが汽車の中だけが本當のことではなくて、ホテルの一室の長椅子の上に、いつの間にか横になつて寢てしまつたのである。

それから、愈よ本當に見復仙助と一緒に洋行の途に上つたり、いつの間にか例の謎の美女と自分とが夫婦の生活をしてゐたり、何の故とも分らず一躍して大金持になつたり、さういふ取止めのない無數の夢と夢との間に、ポッポーッと多分ホテルに出入りする自働車からだらう、笛の音や、ゴーゴトゴトといふ機械の音が耳に入つたり、白い洋服を着たボーイが變な顏をして立つてゐる姿や、そつと部屋の入口の扉が開いて又靜かにそれが閉まつたりしたのをぼんやりした目で見たり、そしてやつと本當に目を醒ましたのは、いつもの時間の通り、夜の七時を過ぎてゐた。しと／＼言ふ音が窓の外にして、長椅子の上から起上つた島木島吉は少し膚寒さと、それから心細さを感じながら、機械のやうに窓際

に首を出すと、外には雨が降つて居る模様なのである。その時部屋の扉が開いて、待ち兼ねてゐたやうに、白服の今し方夢の中で、但し目を開いて見たところの、ボーイが無言で部屋の中央の卓子の上に食事の仕度を始めた、それを島木島吉は又無言で食ひ終ると、ボーイは又無言で卓子の上を片附けて、そして扉を閉めて出て行つてしまつたのである。心細さは一通りではないのである。

　けれども、今更臆病らしく兒復佃助を呼んでもらつて、歸してくれ、といふ譯には行かず、と島木島吉は途方に暮れたのである、一週間に二十圓といふ甘言に吊られて、いくら毎日の寢る所に困つてゐた境涯とは言ひながら、これは飛んでもない罠に掛つてしまつたんぢやないか、だが、一體どんな罠なのか知ら？　いつそのこと、思ひ切つて、そつとボーイを呼んで、雨の中でも何でもかまはない、俗に言ふ命あつての物種といふものだ、逃げ出さうか知ら？　とも思ふのである。だん／＼夜が更けて行つて、遠くの方でバタンと戸の開く音がしたり、カツタカツタと人の歩く靴の音がしたり、つい隣の邊の部屋の戸の錠のカチカチと鳴る音がしたり、男女のひそ／＼と囁くのではないかと疑はれるやうな聲が聞えたり、事毎に島木島吉の金玉は上つたり下つたりするのである。

　すると又、運命といふものは不可抗力なものだ、突然雷が落ちて來て死んでしまつたり、流行性寒冒の蟲に食ひ殺されたり、すべて我々の命は神樣か、兎に角神樣見たいなものに貰つて、そして神樣見たいなものに取上げられるのだ、いくらぢたばたしても、地獄の閻魔樣の帳面に附けられてある各々の死亡の日附は、孫の悟空の外には取消させる法はあるまい、やれ／＼、と思つて、島木島吉は又もやごろりと長椅子の前に横になつた、仲々幅が廣くて、ふわ／＼したものなので、大きに寢心地がよいのである。もう大分夜も更けたと見えて、物音なぞも時々しか聞えないのである。しと／＼と降りつゞいてゐた雨が、どうしたのか急にざあ／＼土砂降りになつて來たのである、島木島吉は又心細くなつて來て、仲々寢ようと思つても寢られないので、立ち上つて部屋の中を彼方此方と歩き出したものだ。

　その雨は時に強くなつたり時に弱くなつたりして、夜が明け放れてからも止まずに降りつゞいてゐた。すると、明けて間もなく、遠くの方の部屋で、多分料理場あたりで、人の足音や話聲が聞え出した外に、まだどの部屋でも靜まり返つ

てゐた時分に、廊下を彼方から近づいて來る足音がして來たので、島木島吉は、何といふ事なしに、そら來た、と自分を殺しにでも來たやうに胸をどきどきさせながら、ひらりと長椅子から身を起して、堅くなつて椅子の上に坐り直ると、その途端、コツ／＼と彼の部屋を叩く音が聞えたのである、そして見復仙助が「お早う、」といふ聲と一緒に大きなトランクを持つて入つて來たのである。

「お早う、」と見復仙助はもう一度言つて、そしてその外に少しの無駄な言葉なしに、「おや、早速、今日から一つお骨折を願ひませう、お願する役目が定りましたんですがね、」と言ひながら、少し感じが悪い程、きびきびと事務家的に、カチ／＼と錠前でトランクを開けて、中から見事な熊の毛皮を取出したのである、よく見ると、驚いたことには、その毛皮は、顔から、目玉から、足から、爪に至る迄、それを取出して、兩手に抱えた時には、どうかすると、本當の生きた熊が見復仙助の手に抱えられて居るやうに見えたことである、彼は言葉をつゞけて言ふのである、「あなたには、熊になつていたゞきたいのです。つまりこの毛皮を、」と言ひながら、「あなた、襯衣一枚になつて下さい、」と、その言ひ方が動かすべからざる權威を持つてゐるので、島木島吉は不可抗力のやうにする／＼と着物を脱いだことである。

「さあ、頭の方を先に突込んで、さう、それから右手を先に入れて、」と見復仙助は生れた時からの家來にでも言ふやうに、きぱりきぱりと鉋で物を削るやうに言ふのである、島木島吉はあやつり人形のやうに動くのである。「別に苦心することはないですよ、普通に四足になつたつもりで、丁度子供が遊び事にやるやうな鹽梅に、唯のらくらと這つて歩いたらいゝんですよ、」さう言つて、普通に、人に着物を着せるやうに、その位の手數と迅速さとで、彼は島木島吉を熊に裝はしてしまつたのである、そして、「どうです、目の方もちやんと見えるでせう？　一寸這つてこゝ迄來て御覽なさい、」と見復仙助は熊になつた男の首を輕く持つて、部屋の一隅の鏡の前に連れて行つた、「どうです、見えるでせう、どうです？、」と言ふのである。

熊になつた島木島吉は鏡の前に連れて行かれて驚いた、それが決して日本の歌舞伎芝居に出て來る馬なんかのやうな不體裁なものではないのである、彼は思はずその鏡の前で、のそ／＼と一廻り廻つて見たものである　これは　これ見

復仙助といふ男は魔術師で、自分はいつの間にかこの男の魔術にかゝつて、本當に熊になつてしまつたのではないか、と疑つた程であつた。

「口の中に笛があるでせう、」と毛皮の外で見復仙助の聲が聞えるのである。「その笛を時々吹いて下さい、すると熊の聲が出ますから、いや、今吹いちやいけませんよ、」と言つて、見復は戸の傍に進んで行つて、扉を開けて、外に向つて「おーい、」と聲をかけた。すると、廊下にゴロ／＼と大きな箱を引きずるやうな音が近づいて來て、それが到着したのを見ると、二人の男が動物を入れる檻を運んで來たのである。「おや、この中に、シーツ！」と見復は最早や熊を立派に動物扱ひにして、檻の蓋を開けたのである、熊はのそ／＼と、全く人間に馭せられる動物のやうに、檻の中に入つたのである。すると、檻の入口の、鐵の格子の前には手早く布切の幕が下ろされて、檻は再びゴロ／＼と引きずられる音と共に、ホテルの玄關に運ばれて行つたのである。

外には依然として雨がざん／＼降つてゐたものである、檻の中で熊の島木島吉は、これから昨日言つてた、劇場とかへ送られるんだな、無論、自動車だらうな、と思つたことであるが、それが案外にも荷車に載せられて、檻の上には菰を掛けられて、雨の中をゴロ／＼と無限に揺すられて行くのである。同じ荷車の上には熊の島木島吉の入れられてゐる檻の外に、まだ二つ三つ外の檻が載せられてあるらしいのであるが、その中で、ブーブーといふ聲、のそ／＼と歩く足音から察して、これは本當の動物が入れられてゐるらしいのだ。劇場といふのは一體どこにあるのだらう？　車は一體どの町を通つて、どつちの方角へ行くのだらう？　などと檻の中で熊の島木島吉は頻りに無駄に頭をひねつて見るのだが、いくら考へても、實は大阪の町に殆んど通じてゐない彼には、一向見當さへつかないのである、車は一時間ばかりガラ／＼と雨の町の中を歩いて、雨が菰に浸み通つて、檻の中までじみ／＼と水がしみ出した時分に、やつと行先に付いたらしいのであるが、島木島吉には何處に着いたのか、どういふ劇場なのか、ちつとも分らないのである。

だが、少し境遇に馴れると、根は臆病者の癖に直に圖々しくなる性質の島木島吉は、いつとなく車から下ろされて、靜な安定を得た檻の中で寢てしまつたのである。すると、大凡二時間程經つた時分に、彼は毛皮の上を何か杖のやうな

ものでしきりに突つつかれて、いや〳〵目を醒ましたところが、「シーツ、シーツ！」と今度は完全に動物扱ひにされて、檻のまゝで、見も知らない二人の絆纏着の男に擔がれて、別の大きな捉え付けの檻の前に置かれたのである、そして、入口と入口とを合はして、兩方の入口の扉を開いて、再び「シーツ！」と云ふ聲と、杖とで、大きな檻の方に追ひ込まれた、後にパタンといふ音と共に、入口の扉の閉まる音がしたのである。驚いたことには、もう正面には四五人の見物人が來てゐたことである、驚いたなア、と思ひながら、しかし、もういくらぢたばたしても駄目だと思つたので、なるべく悪びれないように、なるべく立派な熊に見えるやうに、と思つて彼はのそりのそりと檻の中程に出たところで、更に驚いたことには！　左側は厚い板張りになつてゐたが、右側は正面と同じ鐵の格子一重で隣の檻と隔てられてゐるのはいゝが、そこには見たところ滿六歳位の、見るからに逞ましい、本物の虎が長々と寢そべつてゐるのである、島木島吉の熊は思はず震へ上つたことである。

危險、危險！　だが、あの鐵の格子があるのだから、あの方にさへ近寄らなければいゝのだ、俺も人間の癖に、熊の皮を被つて、本物の虎と雄姿を並べられたのは、どんなにか光榮なことだ、と思ふと、直に又島木島吉は今先の恐怖心をさらりと西の海に流した心地になつて、さて一先づ手足を延ばして休まうと思つたのである、就いては、斯うして本物と並んでゐるのだから、馬脚を現はしてはならぬと氣が付いて、なる程、見復仙助は、いくら新米の熊だからと言つて斯ういふ公開の場で一々動作を注告する譯には行かないから、隣に本物の虎を置いて、手本を見せたつもりだな、流石に用意周到な奴だわい、と思つたものだから、彼は時々虎の方を見ては、自分の姿勢を直すように、と一切のことを忘れて心がけたものである、だん〴〵眠くなつて來るのである。

けれども又、別の心細さはホテルで別れた以來、見復仙助の顏を一度も見たことがないことである、斯うなると、見復さへ並々ならず懷しいのである、まして例の不思議な女とは、いつかのカフエーの夜以來會はないのである、あの女など何處へ姿をひそめたのだらう？　そして今は丸に「見」と書いた印絆纏の數人の男が時々箒などを持つて現はれるだけで、この分で行くと、いつの間にか本物同樣の熊に扱はれて、生の肉の塊や、ぼうふらの湧いてゐるやうな水を[illegible]

れて、このまゝ一生熊として生きて、熊として死ぬんぢやないかな、一週間二十圓は何と思つても一ぱい食はされたわい、と後悔するのである。檻の前の見物人は次第に數を增して來るのである。そのうちに、熊の島木島吉はいつかうと〳〵と投げ出して兩手の中に顏を埋めて寢てしまつたである。

到頭、島木島吉は熊になつて、丁度犬見たいに首輪を嵌められて、綱で引つ張られて、見復仙助夫妻、見復夫人といふのは例の女で、二人に連れられて洋行したと見えて、佛蘭西だか英吉利だかの町を歩いてゐると、三々五々と同じ町を歩いてゐる西洋人が、やつぱり皆、日本の犬見たいに、虎や唐獅子を、首に綱をつけて引張つて歩いてゐるのである、とさういふ夢を見てゐると、突然卒のビョ〳〵する鞭で叩き起されたものである。「シッ、シッ！ドウ、ドウ！」といふ聲と共に、ビョ〳〵と鞭が鳴るのであるが、それは例の印袢纏を着た人足が、裏手の入口の鐵格子の間から、さうしてゐるらしいのだ。が、それに尻を十度近く打たれて、島木島吉ははつきりと眠りから醒めると、ふと毛皮を被つてゐる口の中に、笛のやうな管が突き出てゐるのに氣がつくと、どんな音がするか知ら、と思つて、思ひ切り力を込めてフーと吹いて見ると、先づ彼自身が第一番に驚いた程、

「ウヲ――」といふ凄まじい熊の聲が出た、聲と一緒に自分の被つてゐる熊の口がぐつと開いたらしいのである。

「あゝ、熊が起きた、熊が起きた！」と、いつの間にか、黑山のやうに集まつて來た檻の前の群集の中から、二三人の斯ういふ聲が聞えたので、ハッと思つてその方を見ると、丁度その時、見物人たちの欄干と檻との間の三尺ほどの幅の細い通路を、熊の島木島吉の方から見て左手から、見復仙助が眞赤な洋服を着て、手に革の鞭を持つて現はれたのである。

「おゝ、見復さん、」と島木島吉は呼び掛けたかつたが、即座に熊の自分であることを反省して、默つて彼の方を見てゐると、赤服の見復仙助は冷淡な目付で熊の方をちらと見た切りで、見物の方に向つて、變な手振りをして、西洋の藝人らしい挨拶をしながら、悠然とした恰好で歩いてゐるのである、そして彼は島木島吉の熊の檻と、その隣の本物の虎の入つてゐる檻との、丁度まん中の邊にぴたりと立止まつて、動物の方に背を向けて、驚くべき演說を始めたのであ

る。

こゝで、その演説をそのまゝ記述することは煩はしいから省くとして、その梗概を述べると、見復仙助は元からの興行師ではないといふこと、始めは彼は歐米各國は言ふに及ばず、熱帶國寒帶國などを遍く旅行してゐるうちに、動物に興味を持ち出して、現にこゝゐる熊は、と島木島吉の熊を指さして、北米のロッキイ山の產である、とか、こゝにゐる虎は印度のガン河上流地方の產であるとか、そして「我輩の苦心は」と見復仙助はそこでひどく勿體をつけて、この寒帶の動物と熱帶の動物とを、同じ溫度の檻の中に健全に飼育したことである、共に當年五歲であるが、「そこで、」と見復仙助は更にぐつと大見得を切つて、聲を張り上げたのである、「愈よ本日當館の大呼物である虎と熊との決鬪！」と言つて赤服の見復仙助はぐツと左右の群集を見廻して、「虎と熊との決鬪、虎と熊との決鬪！」と二三度くり返して、「虎と熊との決鬪をこれからお目に掛けます。」

その聲と共に、遙か彼方の方で、忽ちチヤヂヤヂヤヂヤン――ン、ドンドンドー――ン、と幾つもの鉦と太鼓を打ち出す音と共に、「さあ、さあ〳〵〳〵、これから愈よ虎と熊との合戰、虎と熊との合戰！」と大勢の人の叫ぶ聲が聞えた、つまり木戶口で、表を通る人々を呼び掛ける聲なのである、

熊の島木島吉の驚き方は一通りではないのである、彼は毛皮の中で眞靑になつて、目が廻りさうになつて、口の中で知つてゐる限りの、ありとあらゆる神樣と佛樣の名を、如何なる人道主義者のそれよりも一千倍もの眞面目さで、息のつまるやうな思でくり返したことである、彼は半分立ちかけてゐたのを、ばつたりと倒れるやうに、兩手と兩足を前後に延して平太ばつてしまつたのである。そして、そつと尻目で隣の檻の虎の方を見ると、獸の虎は何にも知らないものだから、相變らず悠然として、のみならず頻りに「ウヲー、ウヲー！」と虎一流の凄い聲で嘯いてゐるのである。熊の島木島吉の頭の中は、變な女、見復仙助、運命、民、一週間二十圓、虎、嚙殺される、南無三寶、と有象無象の思が走馬燈のやうにぐる〳〵と廻轉するのである。

「おい〳〵、どうだい、あの虎の聲は！」と見物の中から聞えるのである。

「ヤーイ、熊が縮み上つてやがらア！」とこれは子供の叫び聲である。

「これや熊が負けさうですな、」

「いや、案外、これでいざとなつたら分りませんよ。」

すると、その時突然、ガラ〱〱ガラ〱と、恐怖に震へ上つてゐる熊の島木島吉の右手に當つて、そら、虎が飛び掛つて來た！と仰天して、思はず彼を立ち上らせたところの、丁度波止場の起重機の卷上げる鎖のやうな音がしたので、見ると、隣の檻との間の境界の鐵の格子が、まん中から切れて左右に一度に開いたのである。

ワーツ！といふ見物の喜び、叫び、息する聲の中に、方々で小さい子供等の泣き出す聲が起つたが、もう熊の島木島吉には何にも聞えなかつた、彼はその場に立ち縮んだまゝ、ぢつとしてゐた、多分彼は目を閉つたのである。ウヲ——ウヲ——、と虎の吠える聲が彼に向つて叫ばれた、一分間、虎は彼をねらふやうに、兩足をそろへて、さうして吠えたのである。熊の島木島吉は慌てゝ、あらん限りの息をこめて、例の口の中の笛を吹いた、すると、虎のそれを壓するやうな、ウヲー、ウヲー、といふ熊の嘯き聲が響き渡つた。一寸、その時、この聲で虎を壓することが出來るかなと思つたが、忽ちそれが無駄であることが分つた、といふのは虎は十分自信のある歩き方で、のツそ、のツそと彼の方に向つて動いて來るのである。熊の島木島吉は再び息の窒まるやうな思で、ありとあらゆる神佛の名を口で呼びながら、その切れ目に、助けてくれ！と心の中で、胸が張り裂ける程の力を込めて叫んだ、彼はいつその事、立ち上つて、今まで大勢の見物を欺いて居たことを白狀して、自分が熊の皮を着た人間であることを述べて、救を求めようか、と思つた、が、どういふ仕掛の毛皮になつてゐるのか、四つ足のやうに這ふことゝ、腹をつけて寢そべることとしか動けないのである。虎がもう目の前に來て、後足をぺつちやんこにして、前足を立てゝ、ウーウーと牙をむいてゐるのである。猫見たいだな、と島木島吉は一寸思つた、これが猫ならいゝんだがな、と思つたが、忽ち、今更、何と言つても、本物の虎であることを思ふと、彼はつゞけ様に、口の中の熊の鳴き聲の笛を吹いたのである。

すると、虎は又その飛び掛る姿勢を改めて、ちやんと四つの足を立てて、彼も亦それに對抗するやうに吠え出した、

そして又のツそのツそと一層熊の島木島吉の方に近づいて來るのである、島木島吉は無意識に少しづゝ、少しづゝ後に退り出した、が、虎は一歩一歩と、より近くなつて來るのである。無論潮のやうな唸りを立てゝ、見物は叫んでゐるのであるが、島木島吉の耳には全然聞えないのである、そして到頭島木島吉は、後の厚板塀にどしんと尻が打つ突かつたのを覺えてゐる、もう駄目だ、と島木島吉は思つた。

すると、四邊が急にシーンとしたやうな氣がした、ふと彼は、おや、もう死んでしまつて、別の世界に來たんぢやないかな、と思つた程である、その時、

「おい〳〵、兄弟、」といふ微かな聲が何處からともなく聞えて來た、島木島吉ははツとして、耳を立てたが、何の事だか、何だか、どこから聞えるのだか、分らないのである、

「おい〳〵、兄弟、」と聲がつゞくのである、「大丈夫だよ、安心しろよ、」と聞えるのである。

はツと島木島吉は思つた、

「俺も人間だよ」と正に相手の虎が言ふのである。

すると、熊の島木島吉は、その瞬間ぼーッと氣が遠くなつて、熊の體のまゝ卒倒してしまつたのである。

「どうだい、可笑しな話だらう?」と小説家の島木島吉は言つたのである。

「その見復仙助の劇場といふのは、千日前の小屋のことだらう? 僕は知つてるよ、その時の虎は、」と私は言つたのである、「僕だよ、君。」

「や、」と島木島吉、「どーう理で……。アハハハ。」

だが、讀者諸君、その時の虎が僕だ、なんて、それは無論私の出鱈目なのである。

だが、又、讀者諸君、どうも私はこの島木島吉の話をどこかで、何か外國の本か何かで、確に讀んだやうな氣がする

ある。無論、この話の始に一寸書いておいたやうな、島木島吉といふ人物が人物であるから、彼の話が全然當にならないのである。

その後、私が芥川龍之介に會つた時、この話をして、君、こんな話を聞いたんだが、どうも僕、何か西洋の小說で讀んだやうに思ふのだが、君、覺えはないかい？ と聞くと、いや、知らん、それや、面白いね、との答なのである。隨分物識りの龍之介さへ知らないのだから、と私は大きに安心して、こゝに島木島吉の人物の一端と共に、書いて見たのである。

鎖夏の絶好伴侶として左の諸名著を薦む

武者小路實篤氏著

小さき世界

著者の小說及脚本の傑作選集也。最も名高き二つの心、或日の一休、わしも知らない、二十八歲の耶蘇等の名篇、悉く此中に在り。

壹圓七拾錢　送料貳拾錢

江馬修氏著

長篇 受難者

清純にして熱烈華麗なる戀愛小說。凡そ天下青春の子女を動かせる斯くの如きは眞に稀に看る所也。八百枚を超ゆる長篇小說。

定價貳圓　送料拾貳錢

島田清二郎氏著

長篇小說 地上

第一部地に潜むもの（1）壹圓参拾錢
第二部地に叛くもの（2）壹圓六拾錢
送料各拾貳錢宛
第三部（近刊）

北原白秋氏著

雀の生活

長篇の散文詩とも云ふべく、文壇始めて見るの新體也。縹渺の姿、玲瓏の響き、此小動物の世界の到る處に神のこゝろを見ん。

壹圓六拾錢　送料拾貳錢

吉田紘二郎氏著

大地の涯

キリストの生涯を描ける大作「大地の涯」を始め作者が近業中の傑作を收む。精到なる人間苦の描寫と、高調なる人間愛の謳歌と。

壹圓七拾錢　送料拾貳錢

久米正雄氏著

學生時代

受驗生、艶書、鐵拳制裁等の十數項に分ちて高等學校時代の學生生活を精寫せる創作集也。興味多き讀物として學生間に持囃さる。

壹圓四拾錢　送料拾貳錢

石川啄木遺著

啄木全集

與謝野寛、土岐善麿、金田一京助編

第一編小說集　第二編詩歌集　第三編書簡感想集
以上三卷全部完了

一冊貳圓宛　送料拾貳錢

十六人集

本書は、加能作二郎、加藤一夫、吉田紘二郎、谷崎精二、中村星湖、久米正雄、正宗白鳥、藤森成吉、江口渙、秋田雨雀、有島生馬、芥川龍之介、佐藤春夫、菊池寛、宮地嘉六、廣津和郎の現代創作壇花形十六家の傑作選集也。

壹圓八拾錢　送料拾貳錢

岩野泡鳴遺著

泡鳴五部作叢書

第一放浪　第二斷橋　第三憑き物　第四發展（以上既刊）　第五毒藥女（近刊）

壹圓廿錢宛　送料八錢宛

一出版目錄出來す。望み方は往復端書にて

一東京牛込區矢來町　振替東京一七四二

一電話番町（八〇九　八九九）

新潮社

中央公論大賣捌所

同　神田區表神保町	東京堂
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市　富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數／國別	内國	外國
六册	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二册	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

◉本號に限り特價金壹圓廿錢

郵税金四錢

一誌代郵税　は一切前金とす　前金切の場合に發送を止むべし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取り纒め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正九年七月十四日印刷納本
大正九年七月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（長）小石川一四四一
小石川三四二〇
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,70; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◉本號に限り特價金壹圓廿錢

郵稅金四錢

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す